

福 富 I 遺 跡
屋 形 1 号 墳

一般国道9号(松江道路西地区)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

— 本 文 編 —

1997年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会



福富 I 遺跡玉作工房跡出土碧玉製管玉未成品（上から工程順）



福富Ⅰ遺跡玉作工房跡出土水晶製未成品（上から工程順，左一丸玉，中一管玉，右一勾玉）

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受け昭和50年度（1975年）から一般国道9号松江道路の建設予定地内にある埋蔵文化財の調査を行ってきております。

最初の調査から22年が経過し、この間多くの貴重な遺構や遺物が発見され、出雲の古代史の解明に大きく貢献できたと考えております。

今回は、平成6年度から7年度の2年間にわたり松江市乃白町と乃木福富町にまたがる福富Ⅰ遺跡と屋形1号墳の調査を実施しました。福富Ⅰ遺跡では、古墳時代の土壙墓や弥生時代の竪穴住居跡、古墳時代から中世にかけての掘立柱建物跡など多くの遺構を検出しました。また、屋形1号墳では、西日本では珍しい横穴式木室の構造をした方墳であることが解明できました。出土遺物では、碧玉を加工した管玉・勾玉の未製品を多数確認でき、玉作工房跡があったことやその製作過程も明らかになりました。このほか、硯や墨書土器も出土しており、役所を推測させる遺構があったこともうかがい知ることができました。

本書が古代出雲文化の解明の手がかりとなり、また広く埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに役立てば幸いです。

なお、調査および本書の刊行にあたりましてご協力いただきました、建設省松江国道工事事務所をはじめ、多くの関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

島根県教育委員会

教育長 清原茂治

序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行なっています。

当松江道路においても道路予定地内にある埋蔵文化財について鳥根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに昭和50年度から発掘調査を行なっています。

本報告書は、平成6・7年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が、郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力頂いた鳥根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成9年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所 長 大 石 龍 太 郎

例 言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成6年度、平成7年度に実施した、一般国道9号（松江西道路）建設予定地内の「福富Ⅰ遺跡」、「屋形1号墳」の発掘調査報告書である。
2. 平成7年度の発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、(社)中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から(社)中国建設弘済会へ委託して実施した。
社団法人 中国建設弘済会島根支部
布村幹夫（現場事務所長）、勝部達也（技術員）、岩崎あき子（事務員）
3. 調査組織については、第1章「調査に至る経緯と経過」で記した。
4. 本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。
P…ピット SI…竪穴住居跡 SB…掘立柱建物跡 SK…土壙 SD…溝 SA…柵
SX…その他
5. 挿図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位を示し、レベル高は海拔高を示す。
6. 挿図の縮尺は、図中に明示した。
7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院の地形図を使用した。
8. 本書の作成については、足立克己（埋蔵文化財調査センター調査第4係長）、間野大丞（同主事）の協力を得て、主に柳浦俊一（同調査第3係文化財保護主事）、日高淳（同兼務文化財保護主事）が行い、以下の者が携わった。
板垣見知子、佐々木京子、佐々木孝子、津森真弓、錦織美千恵、藤原須美子、三上恭子、山根るみ子、若佐裕子、渡部恵子、米田克彦、細木啓義、石倉敬子、伊藤智、伊藤善太郎、梅木政志、梅木茂雄、原喜久子、松近正巳、中濃郁、野津旭、舟木聡
（実測）板垣、伊藤智、伊藤善太郎、梅木茂雄、梅木政志、佐々木孝子、津森、中濃、錦織、野津、原、藤原、舟木、細木、松近、米田、若佐、柳浦
（浄写）石倉、板垣、伊藤善太郎、佐々木孝子、津森、錦織、藤原、米田
9. 本書に掲載した写真のうち図版1は、(株)ジェクトが所有する。
10. 本書に掲載した遺物の写真撮影は、牛嶋茂、楠本真紀子氏の指導を得て柳浦が行った。
11. 本書の編集執筆は、柳浦が行った。
12. 本書中、第11章は島根大学総合理工学部高須晃先生、第12章は安来市立和鋼博物館佐藤豊先生に執筆いただいた。また、第6章4節は調査第1係平石充主事の寄稿である。記して感謝します。
13. 本遺跡出土資料及び実測図・写真等の資料は、島根県埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	6
福富 I 遺跡	
第3章 1区	11
1、調査の概要	13
2、旧地形と土層の堆積状況	13
3、検出遺構	15
4、出土遺物	16
第4章 2区	27
1、概要	29
2、検出遺構	30
3、小結	47
第5章 3区	49
1、概要	51
2、3A区	53
3、3B区	78
4、3C区	96
5、小結	107
第6章 4区	111
1、概要	115
2、検出遺構	115
3、小結	175
4、福富 I 遺跡出土のヘラ書き土器について (平石 充)	176
第7章 5区	181
1、概要	184
2、検出遺構	185
3、小結	226
第8章 6区	229
1、概要	231
2、検出遺構	233

3、小結	253
第9章 7・8区	261
1、7区	263
2、8区	268
第10章 玉作関係遺構と遺物	277
1、玉作工房跡・関係遺物の概要	279
2、玉作工房跡	281
3、その他の遺構	324
4、4区の玉作関係遺物	335
5、6区の玉作関係遺物	345
6、小結	358
第11章 島根県松江市福富Ⅰ遺跡より出土した玉砥石の岩質と原産地（高須 晃）	365
第12章 松江市福富Ⅰ遺跡出土炉壁および鉄滓の調査（佐藤 豊）	377

屋形1号墳

第13章 屋形1号墳	393
1、屋形1号墳の立地と概要	395
2、墳丘	398
3、主体部と玄室内の土層堆積状況	398
4、墳丘盛土の堆積状況	400
5、小結	402

挿 図 目 次

福富 I 遺跡		第26図	2区 SX 02実測図 ……………44
第1図	福富 I 遺跡・屋形1号墳と 周辺の地形 ……………3	第27図	2区 SX 02集石状況 ……………45
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡 ……………8	第28図	2区 SX 02出土遺物 ……………46
第3図	福富 I 遺跡、屋形1号墳 調査区配置図 ……………9・10	第29図	2区土壌実測図 ……………47
第4図	1区南壁土層図 ……………13	第30図	3区遺構配置図 …………… 51
第5図	1区遺構配置図 ……………14	第31図	3 A 区遺構配置図……………52
第6図	1区 SD 01土層図 ……………15	第32図	3 A 区 SI 01実測図 ……………53
第7図	1区 SD 01出土土器 (1) ……20	第33図	3 A 区 SI 01出土土器 ……………53
第8図	1区 SD 01出土土器 (2) ……21	第34図	3 A 区 SB 01-1実測図 ……54
第9図	1区 SD 01出土土器 (3) ……22	第35図	3 A 区 SB 01-2実測図 ……55
第10図	1区 SD 01出土土器 (4) ・石器 ……………23	第36図	3 A 区 SB 01-3実測図 ……56
第11図	1区 SD 01出土木器 (1) ……24	第37図	3 A 区 SB 02-1・2実測図 ……58
第12図	1区 SD 01出土木器 (2) ……25	第38図	3 A 区 SB 02-3実測図 ……59
第13図	2区遺構配置図 ……………29	第39図	3 A 区 SB 02-4実測図 ……60
第14図	2区 SI 01実測図 ……………30	第40図	3 A 区 SB 01・02・03・道遺構 出土遺物 ……………62
第15図	2区 SI 01出土土器 ……………30	第41図	3 A 区 SB 02ピット出土古銭 63
第16図	2区 SI 01焼土、炭化物検出状況 ……………31	第42図	3 A 区 SB 03実測図 ……………65
第17図	2区 SB 01実測図 ……………32	第43図	3 A 区 SB 03断面図 ……………66
第18図	2区 SB 02土層図 …………… 33	第44図	3 A 区 SB 04実測図 ……69・70
第19図	2区 SB 02実測図 …………… 34	第45図	3 A 区道遺構土層図……………71
第20図	2区 SB 02-1実測図……………35	第46図	3 A 区土壌実測図 (1) ……73
第21図	2区 SB 02-2・3・4実測図…………36	第47図	3 A 区土壌実測図 (2) …… 74
第22図	2区 SB 02断面図 ……………37	第48図	3 A 区土壌実測図 (3) ……75
第23図	2区 SB 02出土遺物 ……………38	第49図	3 A 区土壌実測図 (4) ……76
第24図	2区 SX 03実測図 ……………42	第50図	3 A 区土壌出土遺物……………77
第25図	2区 SX 01実測図 …………… 43	第51図	3 A 区 SK 01出土古銭 ……78
		第52図	3 A 区出土遺物……………78
		第53図	3 B 区遺構配置図……………80
		第54図	3 B 区 SB 05実測図 ……81

第55図	3 B 区 SB 06実測図	82	第83図	4 A 区 SB 04実測図	122
第56図	3 B 区 SB 06出土土器	83	第84図	4 A 区 SB 04出土土器	123
第57図	3 B 区 SB 07実測図	84	第85図	4 A 区 SB 05実測図	124
第58図	3 B 区 SB 07出土土器	85	第86図	4 A 区 SB 05出土遺物 (1)	125
第59図	3 B 区 SB 08実測図	86	第87図	4 A 区 SB 05出土遺物 (2)	126
第60図	3 B 区 SB 09実測図	87	第88図	4 A 区 SB 06・07実測図	129
第61図	3 B 区 SB 10実測図	88	第89図	4 A 区 SB 06・07出土土器	132
第62図	3 B 区 SB 11実測図	89	第90図	4 A 区 SB 07出土遺物 (1)	133
第63図	3 B 区 SB 10出土白磁 及び遺構に伴わない遺物	90	第91図	4 A 区 SB 07出土遺物 (2)	134
第64図	3 B 区 SX 01・SX 02実測図	92	第92図	4 A 区 SK 01実測図	135
第65図	3 B 区 SX 01・02出土遺物	93	第93図	4 B 区東西土層図	135
第66図	3 C 区遺構配置図	95	第94図	4 B 区遺構配置図	136
第67図	3 C 区 SB 12実測図	96	第95図	4 B 区 SB 09-1実測図	137
第68図	3 C 区 SB 13-1・2実測図	98	第96図	4 B 区 SB 09-2実測図	139
第69図	3 C 区 SB 13-3・4実測図	99	第97図	4 B 区 SB 09-3・4実測図	141
第70図	3 C 区 SB 14・15実測図	101	第98図	4 B 区 SB 09出土土器	143
第71図	3 C 区 SB 16実測図	103・104	第99図	4 B 区 SB 09出土遺物 (1)	144
第72図	3 C 区 SB 16出土遺物	107	第100図	4 B 区 SB 09出土遺物 (2)	145
第73図	明治初期の乃木地域地図－福富村 (『乃木郷土誌』から)	109	第101図	4 B 区 SB 09出土鉄器	145
第74図	4区遺構配置図	113	第102図	4 B 区 SB 09-3・4出土遺物 (1)	146
第75図	4 A 区遺構配置図	114	第103図	4 B 区 SB 09-3・4出土遺物 (2)	147
第76図	4 A 区 SB 01実測図	116	第104図	4 B 区溝3出土遺物	148
第77図	4 A 区 SB 02実測図	117	第105図	4 B 区 SB 10-1・2実測図	152
第78図	4 A 区 SB 02出土遺物	118	第106図	4 B 区 SB 11実測図	154
第79図	4 A 区 SB 03鉄鍋・古銭 出土状況	119	第107図	4 B 区 SB 12-1実測図	155
第80図	4 A 区 SB 03出土鉄鍋・古銭	119	第108図	4 B 区 SB 12-1断面図	156
第81図	4 A 区 SB 03ピット内出土古銭	120	第109図	4 B 区 SB 12-2実測図	157
第82図	4 A 区 SB 03-1・2実測図	121	第110図	4 B 区 SB 12-3実測図	158
			第111図	4 B 区 SB 12出土遺物 (1)	159

第112図	4 B 区 SB 12出土遺物 (2) ……………160	第137図	5区 SI 04出土土器……………194
第113図	4 B 区 SB 12-1・2出土遺物 (1) ……………162	第138図	5区 SI 04出土遺物……………195
第114図	4 B 区 SB 12-1・2出土遺物 (2) ……………163	第139図	5区 SI 05実測図……………196
第115図	4 B 区 SB 12-1・2出土遺物 (3) ……………164	第140図	5区 SI 05出土土器……………197
第116図	4 B 区 SB 12-1・2出土遺物 (4) ……………165	第141図	5区 SI 06実測図……………198
第117図	4 B 区 SB 12-1・2出土遺物 (5) ……………166	第142図	5区 SI 06出土土器……………199
第118図	4 B 区 SB 12-1・2出土遺物 (6) ……………167	第143図	5区 SI 07・08・09実測図 ……200
第119図	4 B 区 SB 13実測図 ……172	第144図	5区 SI 07・08・09出土遺物 201
第120図	4 B 区 SB 14・15出土遺物 ……173	第145図	5区 SI 07出土石器……………202
第121図	4 B 区 SB 14・15実測図 ……174	第146図	5区石棺墓実測図 ……203
第122図	4 B 区土壌実測図 ……174	第147図	5区石棺墓出土土器 ……203
第123図	ヘラ書き土器実測図 ……176	第148図	5区土壌墓 (1) ……205
第124図	ヘラ書き土器拓影 ……177	第149図	5区土壌墓 (2) ……206
第125図	ヘラ書き実測図 ……177	第150図	5区土壌墓 (3) ……207
第126図	5区遺構配置図 ……183	第151図	5区土壌墓 (4) ……208
第127図	5区 SI 01実測図……………184	第152図	5区土壌墓出土土器 ……209
第128図	5区 SI 01出土土器……………185	第153図	5区 SK 22出土古銭 ……209
第129図	5区 SI 02実測図……………186	第154図	5区落とし穴状土壌 (1) ……211
第130図	5区 SI 02中央ピット 土器出土状況 ……187	第155図	5区落とし穴状土壌 (2) ……212
第131図	5区 SI 02出土遺物……………188	第156図	5区落とし穴状土壌 (3)・土壌 ……………213
第132図	5区 SI 03実測図……………189	第157図	5区土壌 (1) ……214
第133図	5区 SI 03断面図……………190	第158図	5区土壌 (2) ……215
第134図	5区 SI 03出土土器……………192	第159図	5区土壌出土遺物 ……216
第135図	5区 SI 03出土石器……………193	第160図	5区 SD 01実測図 ……217
第136図	5区 SI 04実測図……………193	第161図	5区遺構に伴わない遺物 (1) 222
		第162図	5区遺構に伴わない遺物 (2) 223
		第163図	5区遺構に伴わない遺物 (3) 224
		第164図	5区遺構に伴わない遺物 (4) 225
		第165図	5区遺構に伴わない遺物 (5) 226
		第166図	6区遺構配置図 ……231
		第167図	6区南壁土層図 ……232
		第168図	6区 SB 01実測図 ……233

第169図	6区 SB 01出土土器	234	第202図	8区 SK 01実測図	274
第170図	6区 SB 02実測図	235	第203図	8区土壌実測図	274
第171図	6区 SB 02焼土検出状況	236	第204図	8区 SK 01出土土器	274
第172図	6区 SB 02出土土器	237	第205図	玉作工房跡遺構配置図	280
第173図	6区 SB 03実測図	239	第206図	玉作工房跡土層図	281
第174図	6区 SB 03出土土器 (1)	240	第207図	玉作工房跡出土土器 (1)	283
第175図	6区 SB 03出土土器 (2)	241	第208図	玉作工房跡出土土器 (2)	284
第176図	6区 SB 03出土土器 (3)	242	第209図	碧玉集積状況	286
第177図	6区 SB 04・05実測図	244	第210図	碧玉分布状況	287
第178図	6区 SB 04・05出土土器	245	第211図	めのう分布状況	288
第179図	6区 SB 06実測図	247	第212図	水晶分布状況	289
第180図	6区包含層出土遺物 (1)	250	第213図	滑石分布状況	290
第181図	6区包含層出土遺物 (2)	251	第214図	滑石原石出土状況	291
第182図	6区包含層出土遺物 (3)	252	第215図	玉作工房跡出土碧玉製 管玉未成品 (1)	296
第183図	6区出土鉄器	253	第216図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (2)	297
第184図	6区最下層黒曜石分布状況	254	第217図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (3)	298
第185図	6区最下層出土石器 (1)	255	第218図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (4)	299
第186図	6区最下層出土石器 (2)	256	第219図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (5)	300
第187図	7区 SK 01実測図	263	第220図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (6)	301
第188図	7区遺構配置図	263	第221図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (7)	302
第189図	7区 SK 01出土土器	264	第222図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (8)	303
第190図	7区 SB 01実測図	265	第223図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (9)	304
第191図	7区 SI 01実測図	265	第224図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (10)	305
第192図	7区 SB 02実測図	266			
第193図	7区 SB 03実測図	266			
第194図	7区 SI 01・SK 02他出土遺物	267			
第195図	7区土壌実測図	267			
第196図	8区遺構配置図	269			
第197図	8区 SI 01実測図	270			
第198図	8区 SI 01出土土器	271			
第199図	8区 SI 03実測図	271			
第200図	8区 SI 02実測図	272			
第201図	8区 SI 02出土遺物	273			

第225図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (11) ……………306	碧玉製未成品 (2) ……………327
第226図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (12) ……………307	第243図 玉作 SB 01出土 碧玉製未成品 (3) ……………328
第227図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (13) ……………308	第244図 玉作 SB 01出土めのう・ 水晶・滑石製未成品 ……………329
第228図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (14) ……………309	第245図 玉作 SB 01出土砥石 ……………330
第229図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (15) ……………310	第246図 玉作 SB 02実測図 ……………330
第230図	玉作工房跡出土碧玉製 未成品 (16) ……………311	第247図 玉作 SB 02出土玉未成品 ……331
第231図	玉作工房跡出土めのう製 未成品 (1) ……………313	第248図 玉作工房跡 SB 02出土土器 ……332
第232図	玉作工房跡出土めのう製 未成品 (2) ……………315	第249図 玉作工房跡 SB 03実測図 ……332
第233図	玉作工房跡出土めのう製 原石・ハンマー ……………316	第250図 玉作工房跡 SB 04実測図 ……333
第234図	玉作工房跡出土水晶製 未成品 (1) ……………317	第251図 玉作工房跡 SB 05実測図 ……334
第235図	玉作工房跡出土水晶製 未成品 (2) ……………318	第252図 4区出土碧玉製未成品 (1) ……336
第236図	玉作工房跡出土水晶製 未成品 (3) ……………319	第253図 4区出土碧玉製未成品 (2) ……337
第237図	玉作工房跡滑石製未成品・ 川原石 ……………321	第254図 4区出土碧玉製未成品 (3) ……338
第238図	玉作工房跡 出土砥石 ……………323	第255図 4区出土めのう製未成品 (1) 340
第239図	玉作 SB 01実測図 ……………325	第256図 4区出土めのう製未成品 (2) 341
第240図	玉作 SB 01出土土器 ……………325	第257図 4区出土めのう製石核・ハンマー ……………342
第241図	玉作 SB 01 出土碧玉製未成品 (1) ……326	第258図 4区出土水晶製未成品 ……………344
第242図	玉作 SB 01出土	第259図 4区出土砥石 ……………345
		第260図 6区出土碧玉製未成品 (1) ……347
		第261図 6区出土碧玉製未成品 (2) ……348
		第262図 6区出土碧玉製石核・ハンマー ……………349
		第263図 6区出土めのう製未成品 ……350
		第264図 6区めのう製石核・水晶製未成品 同三輪玉 ……………351
		第265図 6区出土砥石 ……………352
		第266図 碧玉製管玉の製作工程 ……………360
		第267図 水晶製品の製作工程 ……………363
		参考資料 出雲国庁跡出土ヘラ書土器 ……373

屋形1号墳

- 第1図 屋形古墳群分布図 ……………395
- 第2図 調査前地形測量図 ……………396
- 第3図 屋形1号墳調査終了後測量図 ……397
- 第4図 屋形1号墳墳丘土層図 ……………399
- 第5図 屋形1号墳主体部 ……………401

第1章 調査に至る経緯と経過

一般国道9号松江道路は、松江市街地の交通渋滞の解消を目的に昭和47年（1972）に都市計画決定され、八束郡東出雲町から八束郡玉湯町に至る10.7 km において建設工事が進められている。埋蔵文化財調査は、平成3年度までに八束郡東出雲町から松江市東津田町間の調査が完了し、東出雲町から松江市乃木福富町に至る9.1 km 区間については平成3年（1991）に供用が開始されている。

残りの松江市乃木福富町から八束郡玉湯町布志名に至る1.6 km 区間（便宜上「松江道路西地区」と呼ぶ）については、平成2年（1991）に建設省松江国道建設事務所から予定地内の遺跡について照会があった。

これを受けて島根県教育委員会は同年、建設予定ルート^のの分布調査を実施したところここに9の遺跡が存在することを確認した。

この部分については平成5年度（1993）から発掘調査を開始した。各年度の調査遺跡は次のとおりである。

調査年度	遺跡名	所在地	調査面積	遺跡の種類
平成5年度	松本古墳群	松江市乃白町 ^{のしら}	1,300 m ²	横穴墓
平成6年度	屋形1号墳	松江市乃木福富町	200 m ²	古墳
	福富Ⅰ遺跡	松江市乃木福富町 (1、3、5区、玉作工房跡)	13,400m ²	集落跡 玉作跡
平成7年度	福富Ⅰ遺跡	松江市乃木福富町 (2、4、6、7、8区)	5,600 m ²	集落跡
	松本古墳群	松江市乃白町	8,700 m ²	横穴墓 古代道
	すべりざこ横穴墓群	松江市乃白町	3,250 m ²	横穴墓
	大角山古墳群	八束郡玉湯町布志名 ^{ふじな}	3,250 m ²	古墳
	才の神遺跡	八束郡玉湯町布志名	400 m ²	信仰遺跡
	大谷Ⅰ遺跡	八束郡玉湯町布志名	4,250 m ²	古墳群
	大谷Ⅱ遺跡	八束郡玉湯町布志名	1,350 m ²	古墳群

予定地内の遺跡のうち松本古墳群は、移転に伴う代替団地造成との関連で平成5年に一部を調査し、報告書も刊行されている（注1）。

なお、福富Ⅰ遺跡は『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅳ 玉作関係遺跡』（注2）では「松本遺跡」、『島根県遺跡地図』（注3）では本調査区の一部が「松本遺跡」、一部が「福富Ⅰ遺跡」として登録してある。手違いで同一遺跡でありながら違った遺跡名となってしまう、あたかも別の遺跡を調査したような誤解を招くこととなっている。今回の調査では委託者側に「福富Ⅰ遺跡」として報告してあったため、一貫して「福富Ⅰ遺跡」の名称を使用した。まぎらわしいことをここでおわびする。

本道部分については平成6年度から調査を開始した。調査は工事工程上急がれる部分から着手した。すなわち、福富丘陵西端に位置する屋形1号墳と、東端の県道松江木次線に面した1区から行った。福富Ⅰ遺跡と屋形1号墳がある福富丘陵は、標高30 m から40 m のなだらかな

丘陵である。発掘前の表面観察では集落を営むには最適な立地と思われ、多くの遺構、遺物の検出が予想された（第1図 図版1）。

1区については原状は水田を埋め立てた果樹園で、分布調査時には遺跡として確認することはできなかったが、平成5年度にトレンチをいれたところ遺物が出土したことから遺跡がここまで広がっていることがわかった。これをうけて平成6年度に本格的な発掘調査を行うこととなった。

一方、屋形1号墳の周辺ではブッシュがひどく分布調査では地形の観察ができる状況ではなかった。調査直前に伐採され改めて地形の観察を行ったところ、なだらかな地形で遺構が予想されたためここでもトレンチ調査が必要と感じられた。調査の結果、弥生土器片が出土しここも遺跡であることが判明した。この結果をうけて建設省松江国道工事事務所と協議を行い、全面的に発掘調査を実施することとなった。

この調査と平行して、まず調査区の各所にトレンチ調査を行い遺跡の内容を把握することとした。この調査では各所で遺物、遺構が確認されたが、丘陵東端部と南斜面ではなんら検出することができなかった。これは、東端部では本来ここが島根県立松江農林高等学校の演習農場で大規模な開墾が行われたために、南部では団地の一角として宅地造成が行われたために、遺構が消失したものと思われた。そのため、これらの部分は全面調査の対象から除外した。

福富I遺跡では調査区全域を5区に分け、東から1区、2区……5区とした。調査は前述のとおり1区と5区から開始した。1区では地山が平野の方向に向かって傾斜しており、調査区東側では泥炭層が厚く堆積していた。これはこの付近の平野が昔は湿地であったためと考えられ、『出雲国風土記』記載の「津間抜池」を想起させた。遺構は溝状遺構が東に向かって1条検出できただけであったが、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が比較的多く出土した。

5区では予想どおり、弥生時代の竪穴住居跡が検出された。このほか検出された遺構は落とし穴状土壇や土壇、古墳時代、平安時代の土壇墓、石棺墓などであった。南側斜面では遺構に伴わないが、多くの弥生土器が出土した。この中には器台や装飾的な壺があり、集落跡からはあまり出土しないものも多いので、丘陵上にあった弥生墳丘墓が開墾などによって壊された可能性が窺えた。この年の夏は昭和14年（1939）以来の大干害の夏となり、連日36度を超す猛暑のため、地面が乾燥し遺構の検出に大きな支障があった。道路建設予定地として買収済みであった屋形池の水を散水してかろうじて遺構検出をするという状況で、非常に効率の悪い調査となった。

5区と平行して調査していた屋形1号墳では、石室状の石組みが検出された。当初横穴式石室の半壊と考えて調査を進めたところ、玄室内に大量の炭化物が層をなしていること、玄室の各コーナーに柱穴があることから、かまど塚のような古墳ではないかと考えるに至った。折り良く島根県古代文化センター主催の会議に出席の明治大学教授大塚初重、島根大学教授渡辺貞幸両氏などが視察に来られ、この古墳が横穴式木室と呼ばれる主体部をもついわゆるかまど塚である可能性が強いとの指摘を受けた。ただし、木の板を支えるのに石組みを使用する古墳は初めてであるという。

福富I遺跡では5区の東端に達すると碧玉製の剥片やチップが出土し、ここが玉作工房跡であることが判明した。工房跡は地山を加工段状に掘削した掘立柱建物で、何回も建て替えているため構造を理解するのに難渋した。未成品や剥片、チップは、取り上げたものだけでも5,000点を越え、ここでの製作が大規模であったことが窺えた。未成品は碧玉製の管玉、勾玉、めのう製勾玉、水晶製管玉、勾玉、丸玉、滑石製白玉などがあるが、圧倒的に管玉未成品が多い。



第1図 福富Ⅰ遺跡，屋形1号墳 周辺の地形（1：2,500）

玉作工房跡は調査時には5区として扱ったが、本書では他地区から出土した玉作関係遺物を含めて「玉作関係遺構と遺物」として1章を設けることにした。

3区はなだらかな丘陵の鞍部にあたり、竪穴住居跡などの集落が予想された。しかし、竪穴住居跡はわずかに1棟が検出されたのみで、大部分は掘立柱建物跡であった。古代のものほかに中世、近世のものもある。ここでは当初の予想がはずれ、遺構の空白部分がみられた。予想以上に畑耕作に伴う地山面の改変が著しかったが、遺構の空白部分がこれによるものか、それともこれが本来の姿なのか判断がつかかねる。調査区の面積が広いので、本書ではこの空白部を利用して東北端を3A区、南西部分を3B区、北西部分を3C区と呼ぶ。3A区は加工段を伴う掘立柱建物が4カ所で検出された。これらは広い面積をもち、何回か建て替えられているようであった。遺物が少なく明確な時期を決定できないが、東端に近世の建物があるほかは中世ころのものと思われた。中世と思われる建物のうち1棟は2×2間で3面に庇状の張り出しをもつ特殊な建物である。また、調査区中央をS字状に道遺構が走っており、あたかもこの建物に向かっているように感じられた。

3B区でも掘立柱建物跡が検出された。遺構は調査区の端に集中し、全景を窺えるものは少ない。おそらく本来遺構は南側斜面に立地し団地造成にともなって消滅したものと思われる。ここでは一辺70cmを超える大型の柱穴を持つ官衙的な掘立柱建物跡が注目された。

3C区では古代の掘立柱建物跡が検出された。ピット内からの土器からおおむね平安時代前半と思われた。ただしピットが複雑に錯綜しており、現地で建物を組むのは困難であった。柱穴の並びの検討は室内での作業として残された。

3区の調査は、玉作工房跡の調査が長引いたこともあり、平成8年2月までずれ込んだ。この冬はこれまでの暖冬が一転、前年夏の猛暑が信じられないほど降雪が多い冬であった。しかし、工事が迫って来ており、天候を選べる状況ではなく、悪条件にもかかわらず調査を強行した。そのため雪に埋もれたものの一部は凶化を忘れた遺構もある。航空写真で写っているながら実測図中で点線になっているものがあるのはそのためである。調査の杜撰さを指摘されれば一言もないが、悪条件下で調査をせざるを得ない事情を察し、ご寛容を望むところである。

平成7年度は調査体制を強化し、この区間の残りすべての調査をおこなった。福富I遺跡は2区から始め、4区、6区と調査を進めていった。2区と4区では加工段を伴う掘立柱建物跡が縦横に複雑に重複しており、各遺構を理解するのにかなりの時間を要した。また柱穴の数も多く、現地で建物を組むのは困難でまたもや室内作業に持ち越された。建物跡の時期はおおむね2区が12世紀ころ、4A区が古墳時代後期から奈良時代、4B区が古墳時代後期から奈良時代と12～13世紀ころのものであった。このうち12～13世紀の建物の床面と考えられる層からは焼土が検出され、鍛錬鍛冶が行われていた可能性が指摘された。なお、遺構には伴わないが「社部(こそべ)」とへら書きされた須恵器が2点、判読不明のへら書き土器1点、円面硯1点が4A区で出土し注目された。

6区は試掘の結果遺物が大量に出土し、また隣接する島根県立松江農林高校の演習園から唐三彩が採集されていることから、官衙関係の遺構が期待された。しかしそれらしい遺構は2×3間の総柱建物跡が1棟検出されただけで、他は古墳時代中期から後期の住居跡であった。遺物には円面硯、土馬、緑釉陶器などが出土しているので、現在でも一般の集落跡とは違う性格の遺構が必ず近隣に存在すると考えている。これらの遺構が掘り込まれているのは赤褐色土で、当初はこれが地山と考えられた。しかし調査中にこの層のなかに黒曜石が含まれることが明らかになり、縄文時代以前の包含層が予想された。そのため前述の遺構の調査が終了した後、さ

らにこの層を掘り下げたところ、ナイフ形石器、尖頭器や二次加工のある黒曜石剥片がまとまって出土した。土器は出土しなかったが、尖頭器や石鏃などから、この層は縄文時代草創期から早期の堆積と思われる。

ところで、4区と5区の間を通る市道が本線によって分断されることになり、この代替として福富集落の西側に新市道を通す計画であった。ここは当初発掘を予定していなかったが、平成6年度の調査で遺跡の範囲が広がる可能性が高くなったため、建設省松江国道工事事務所と協議した結果、平成7年度に調査を行うことになった。本道より南側を7区、北側を8区として調査を行ったところ、ここでは弥生時代の竪穴住居跡や古墳時代後期の土墳墓などが検出されたが遺構は少なかった。

福富Ⅰ遺跡では4区の遺構が複雑であったこともあって、調査期間が翌年2月まで伸びた。この年も前年に続き雪が多く、雪かきを繰り返しながらの調査であった。とくに冬季の調査となった7区と8区については十分な精査や写真撮影ができたとは言い難い。6区についても湧水が凍結したり、積雪によって遺物が原位置を保てなかったりした。そのため記録が不十分なものとなり、この年の調査も反省すべき点が多い。

以上の福富Ⅰ遺跡での調査区配置および調査結果の概略は第3図に示す(第3図)。

平成7年度には福富Ⅰ遺跡と平行して松本古墳群、大角山古墳群、すべりざこ横穴墓群、大谷Ⅰ遺跡、大谷Ⅱ遺跡、才の神遺跡の調査を行った。これらについては別途報告の予定である。

平成8年度は、以上の遺跡の報告書作成作業を行った。報告書は調査員の合議に基づき、柳浦、日高が作成を担当した。遺構、遺物とも量が多く、とくに遺物の実測図作成は調査員個人では時間的に不可能であった。そのため作業員も実測作業に参加し、それを柳浦が修正する方法をとった。実測図に不備な点があるとすれば、その責はすべて柳浦にある。

出土遺物はコンテナで約250箱と調査面積の割りには少なかったが、玉作工房跡などから大量の玉未成品が出土したために分類作業に手間取った。玉関係については、「出雲玉作」が全国的に有名にもかかわらず、十分整理されていないことが問題であった。さらに、2区、3区、4区の遺構の集中度、複雑さも整理作業を困難にした。遺構が複雑に重複しているため遺物との関係がつかみにくく、時間的な制約もありその分析はやはり不十分といわざるをえない。各住居跡の出土遺物のうちどれがその住居跡の時期を示すのか、最後まで明確な判断はできなかった。

なお、福富Ⅰ遺跡出土玉作関係遺物のうち、結晶片岩の分析は島根大学総合理工学部教授高須晃氏にお願いした。また、各区出土の鉄滓については安来市和鋼博物館副館長佐藤豊氏に分析結果をまとめていただいた。これらの結果も本書に掲載している。

以上が屋形1号墳と福富Ⅰ遺跡の調査の経過と概要である。最後になったが各年度の調査組織を記す。

◎平成6年度(1994年)

事務局 文化課 広沢卓嗣(文化課長) 野村純一(同課長補佐) 川原和人(同主幹)
埋蔵文化財調査センター 勝部昭(センター長) 佐伯善治(同補佐) 工藤直樹(同主事)
調査員 足立克己(調査5係長) 柳浦俊一(同主事) 日高淳(同兼務主事) 長澤和幸
(同臨時職員) 伊藤善太郎(同) 伊藤智(同)
調査指導 小野正敏(国立歴史民俗博物館教授) 山本清(島根県文化財保護審議会会長)
池田満雄(同委員) 渡辺貞幸(島根大学教授) 勝部衛(玉湯町教育委員会)
調査協力 梅木政志 米田克彦(四国学院大学学生) 余村裕一(島根町教育委員会)

◎平成7年度

事務局 文化財課 勝部昭（文化財課長） 森山洋光（同課長補佐） 川原和人（同主幹）

埋蔵文化財調査センター 宍道正年（センター長） 佐伯善治（同補佐） 澁谷昌宏（同主事）

調査員 足立克己（調査5係長） 柳浦俊一（同文化財保護主事） 間野大丞（同主事）

日高 淳（同兼務文化財保護主事） 山岡清志（同兼務文化財保護主事）

伊藤 智（同臨時職員） 梅木政志（同） 横山純子（同） 和田郁子（同）

調査指導 山本清（鳥根県文化財保護審議会会長） 池田満雄（同委員）

渡辺貞幸（鳥根大学法文学部教授） 吉田恵二（国学院大学教授）

河瀬正利（広島大学文学部助教授）

調査協力 米田克彦（四国学院大学学生）

◎平成8年度

事務局 文化財課 勝部昭（文化財課長） 森山洋光（同課長補佐）

埋蔵文化財調査センター 宍道正年（センター長） 古崎蔵治（同補佐） 澁谷昌宏（同主事）

調査員 柳浦俊一（調査3係文化財保護主事） 日高 淳（同兼務文化財保護主事）

調査協力 米田克彦（四国学院大学学生）

〔注1〕 鳥根県教育委員会『松本古墳群 一般国道9号松江道路（西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』1994

〔注2〕 鳥根県教育委員会『鳥根県生産遺跡分布調査報告書Ⅳ 玉作関係遺跡』1987

〔注3〕 鳥根県教育委員会『鳥根県遺跡地図（出雲・隠岐編）』1993

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

福富Ⅰ遺跡、尾形1号墳は松江市乃木福富町大字松本に所在する。ここは宍道湖の南東岸に位置し、八束郡玉湯町との市境にあたる。遺跡はめのうの産地として古くから有名な花仙山から派生する標高約40 mの丘陵上にあり、北を望めば宍道湖とその北岸が一望できるほどの眺望である。

この周辺は丘陵上を中心に開発に伴う組織的な発掘調査がふえつつあるものの、今まで旧石器、縄文時代の遺跡は発見されていない。ただ、松本古墳群の東側を流れる乃白川流域では蓮花遺跡、福富Ⅰ・Ⅱ遺跡、乃白遺跡などで石斧が採集されていることから、将来この川の流域で縄文時代の遺跡が発見されることも十分ありうる。また、この地区で尖頭器が採集されていることから、縄文時代草創期の遺跡が発見される可能性もある。

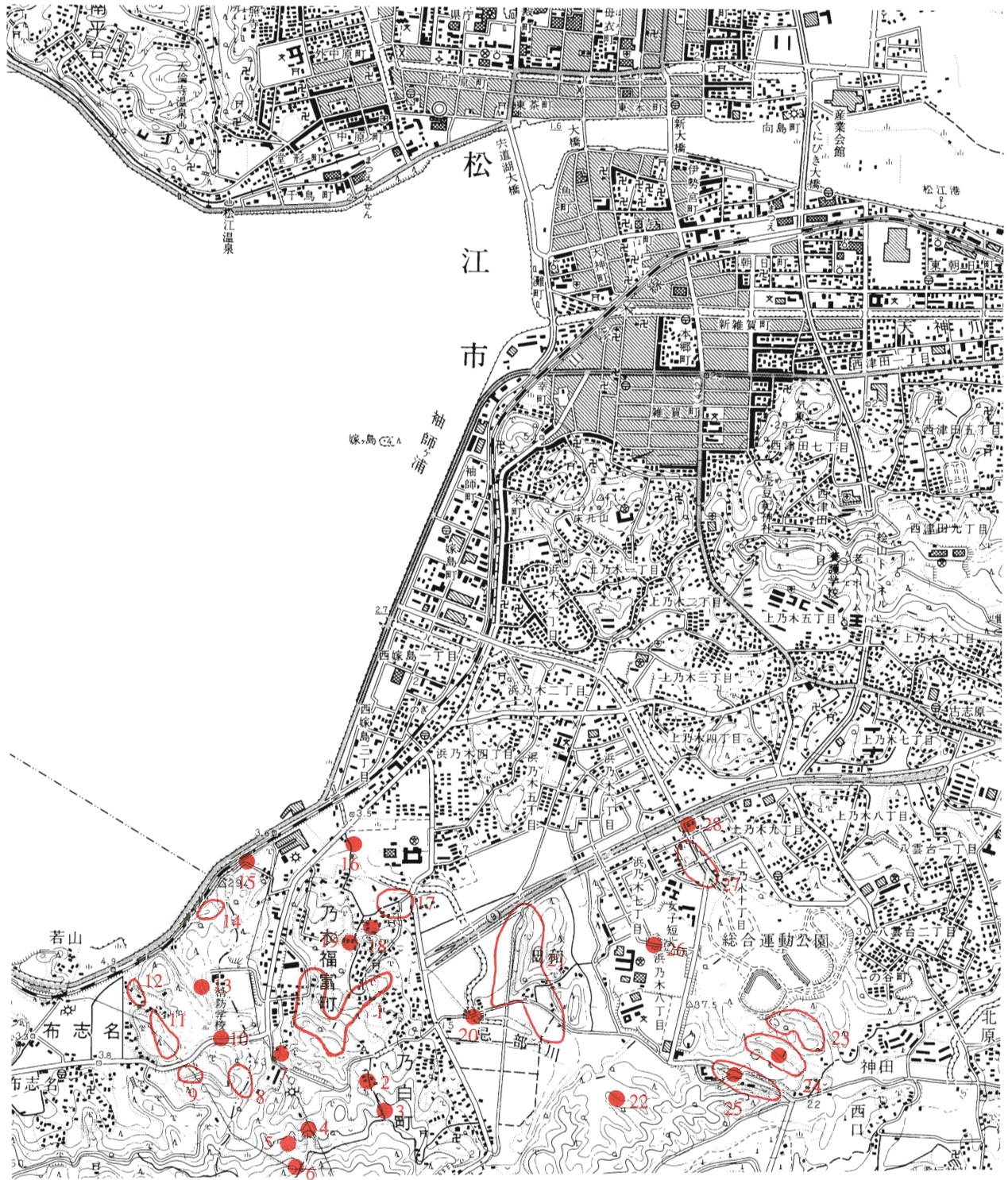
弥生時代の遺跡としては、やはり乃白川流域にある欠田遺跡が前期から後期にわたる遺跡として知られている。中期から後期にかけては乃白川の東の丘陵に友田遺跡で墳丘墓が築造されている。友田遺跡では墳丘墓6基と土壙墓26基が検出されたが、墳丘墓は弥生墳丘墓としては

県内でも最古の部類に入るものである。集落跡としては廻田遺跡で後期の竪穴住居跡が1棟検出されている。

古墳時代にはこの周辺にも多くの古墳が築かれるようになる。今のところ前期古墳は発見されていないが、大角山1号墳（全長61.5 m）、乃木二子塚古墳（全長36 m）などの前方後円墳が築かれたことが注目される。また小規模ながら後期の前方後円墳である田和山1号墳（全長20 m）も築かれており、中期以降この周辺に前方後円墳が連続して築かれたことは、この地の重要性、または優位性を示しているのかもしれない。このほか、10 m 前後の小規模古墳や横穴墓も多く作られている。とくに、この地域の横穴墓は弥陀原横穴墓群、松本横穴墓群など本遺跡周辺に集中しているのが注意される。

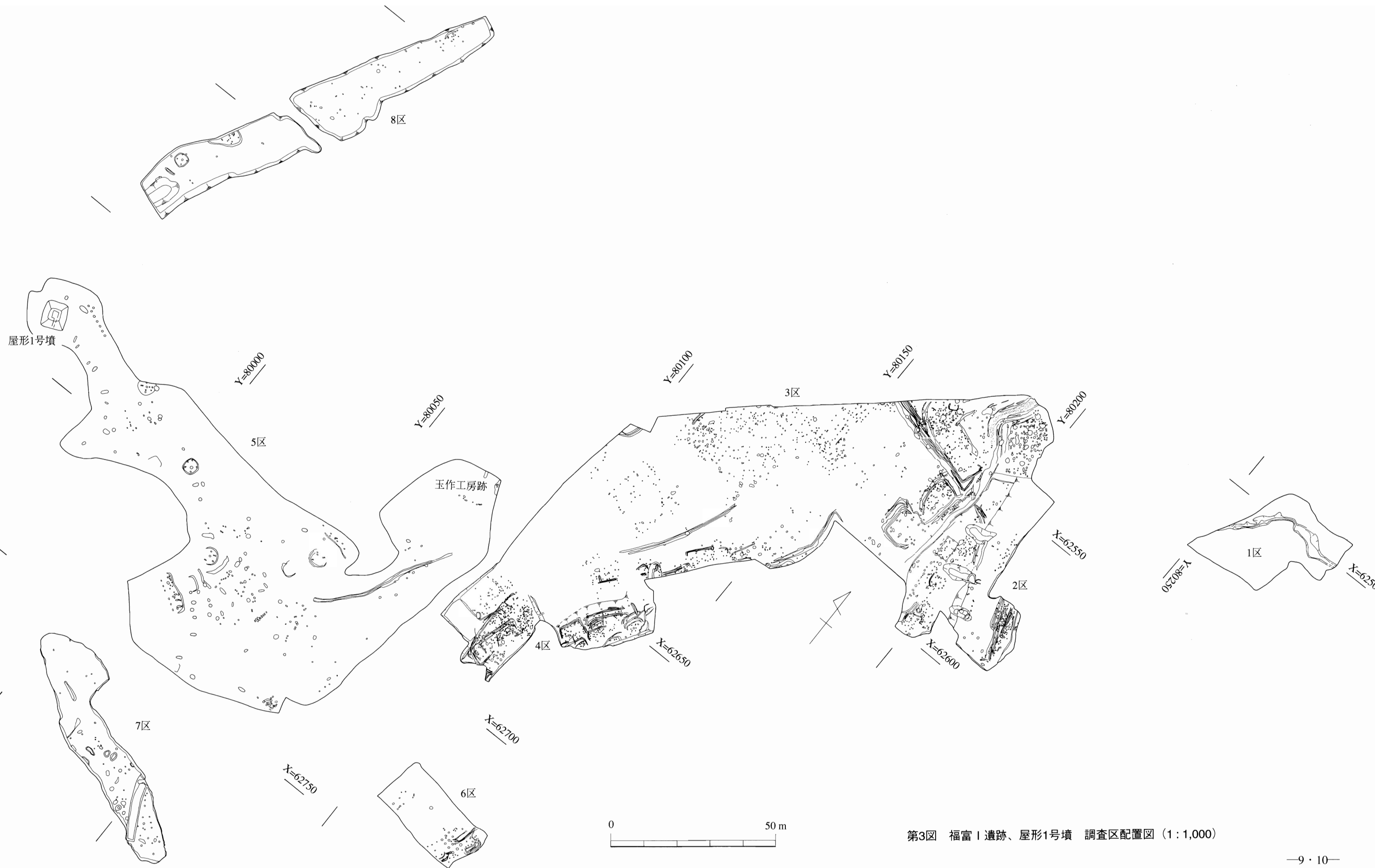
古墳以外では、大角山遺跡、乃白玉作跡、乃白権現遺跡などの玉作遺跡がこの地域に集中している。これはめのうの原産地である玉湯町の花仙山を背景としたものであろう。大角山遺跡では発掘調査が行われ、5、6世紀の玉作生産の実態が明らかにされている。

奈良時代の地誌『出雲国風土記』によれば、この付近に当時の官道である「通道」が通っていると記されている。この古代道は平成7年度に松江道路建設に伴う調査で推定地が発掘調査されている。『出雲国風土記』に記載はないが、これに関連した施設がこの周辺に存在した可能性は十分考えられる。



- | | | |
|----------------|------------|-----------------|
| 1. 福富Ⅰ遺跡 屋形1号墳 | 11. 大谷Ⅰ遺跡 | 21. 田和山古墳群 |
| 2. 天場遺跡 | 12. 大谷Ⅱ遺跡 | 22. 大久保古墳群 |
| 3. 乃白権現遺跡 | 13. 大角山遺跡 | 23. 神田遺跡 |
| 4. 弥陀原横穴群 | 14. 二名留古墳群 | 24. 勝負谷遺跡 勝負谷古墳 |
| 5. 松本横穴群 | 15. 福富湖岸遺跡 | 25. 渋谷遺跡 渋谷古墳群 |
| 6. 岩屋口古墳 | 16. 神立遺跡 | 26. 奥山遺跡 |
| 7. 松本古墳群 | 17. 欠田遺跡 | 27. 長砂古墳群 |
| 8. すべりごこ横穴墓群 | 18. 蓮花垣遺跡 | 28. 乃木二子塚古墳 |
| 9. 足立窯跡 | 19. 屋形遺跡 | |
| 10. 大角山古墳群 | 20. 葉師前遺跡 | |

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 1:25,000 (福富Ⅰ遺跡・屋形1号墳は1)



第3図 福富I遺跡、屋形1号墳 調査区配置図 (1:1,000)

第 3 章 1 区

1. 調査の概要

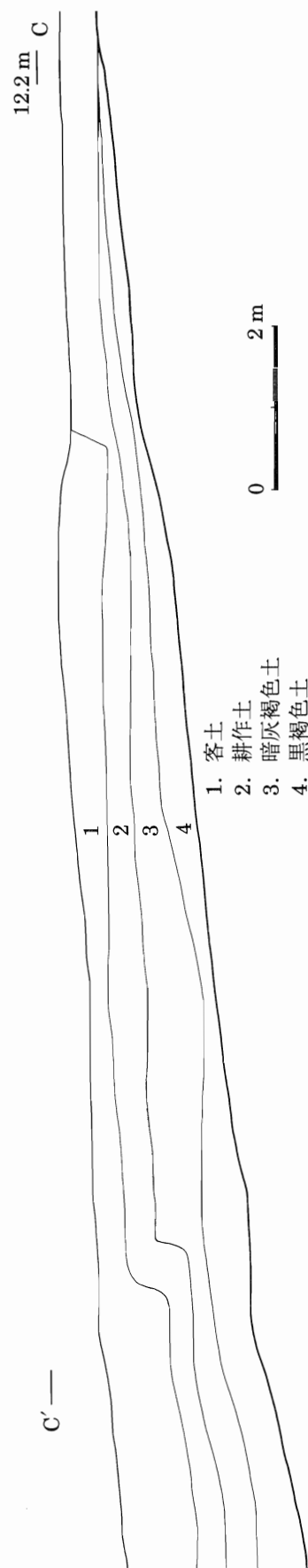
1区は県道松江木次線沿いにあり、福富Ⅰ遺跡のもっとも東に位置する。発掘前は果樹園となっていたが、以前は水田であったという。地表面では遺物などは採集されなかったが、ここが隣接する丘陵（2～5区）の裾に当たり遺跡が広がることが予想されたため、平成5年7月に試掘調査を行った。その結果、弥生土器、土師器、石器などが出土し、ここが福富Ⅰ遺跡の東端に当たることが判明した。これを受けて、平成6年5月から本調査を開始し、溝状遺構を1条検出した。

溝状遺構内からは弥生土器、土師器、須恵器、石器、木製品などがまとまって出土したが、原位置を保つものはなく、状態が悪く小片や摩滅の著しいものが多かった。またこれ以外にも弥生土器などが出土したが、遺構に伴うものではなく、やはり小片、摩滅した遺物が多い。

2. 旧地形と土層の堆積状況

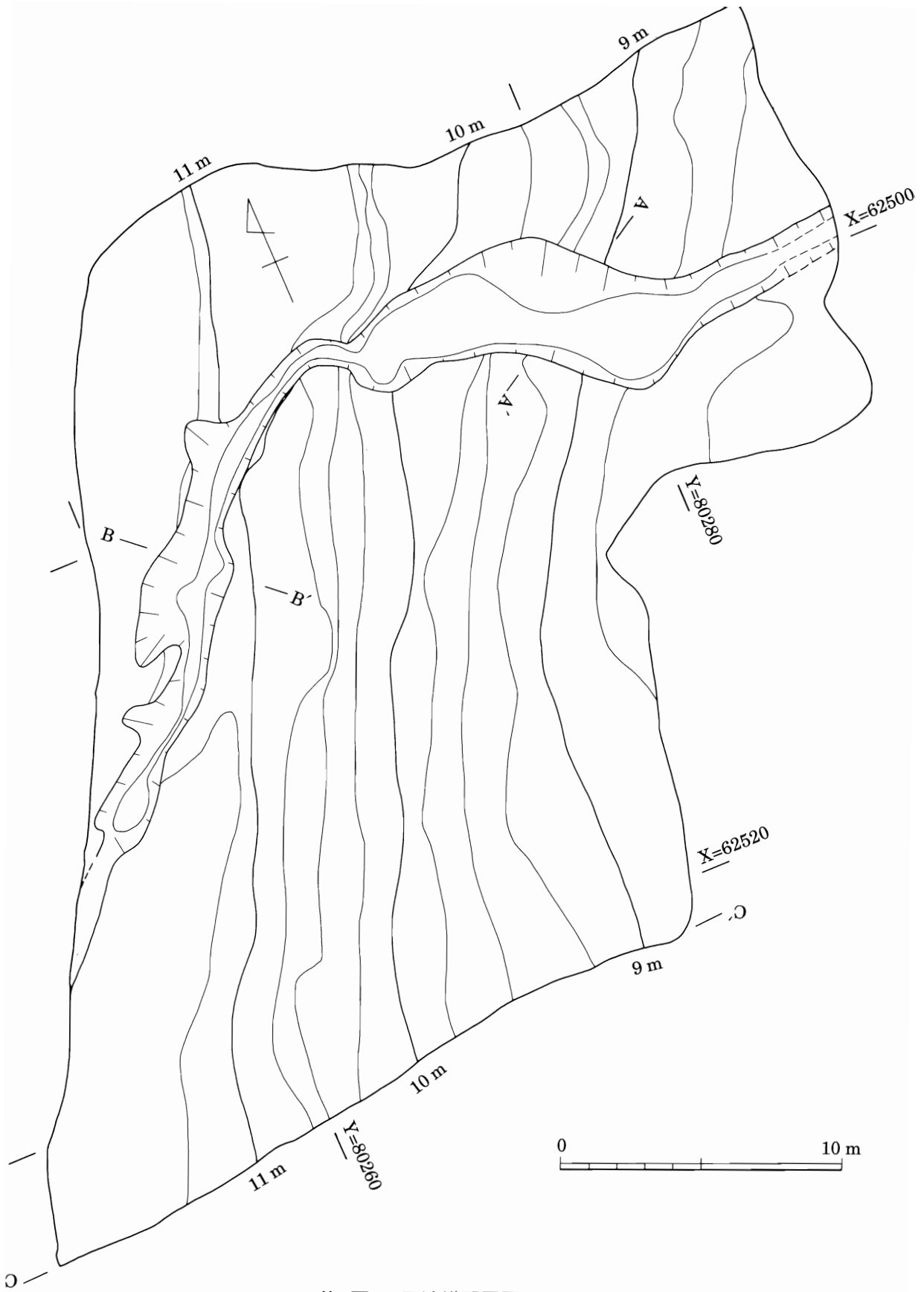
ここは本来水田であったのを埋めて果樹園にしたとのことで、最上層は客土であった。ただし、丘陵に近い西側では水田をそのまま利用したと思われ、客土はみられなかった。土層をみると、ここは本来は3段に水田が作られており、西から東に向かって次第に低くなっていたようである。西側の水田面と東側の水田面との比高差は約1mである。

旧耕作土の下層は灰褐色（第3層）と黒褐色（第4層）の泥炭層が堆積していた（第4図）。もっとも丘陵に近い側では水田造成のためか地山が水平に掘削されており、北側ではさらに2段の地山の水平面が造成されていた。段差はそれぞれ25cmから50cmほどである。これから東に向かうに従って黒褐色の泥炭層が厚くなり、東端では地山を検出するに至っていない。第4層上面での地形は西から東に向かって傾斜し、西端と東端の比高差は約2.5mである。第3層からは弥生土器、土師器、石器などが出土しているが、細片が多く原位置を保っているとは考えにくい。近隣から流されてきてここ



第4図 1区南壁土層図

1:80



第5図 1区遺構配置図 1:200

に堆積したものであろう。

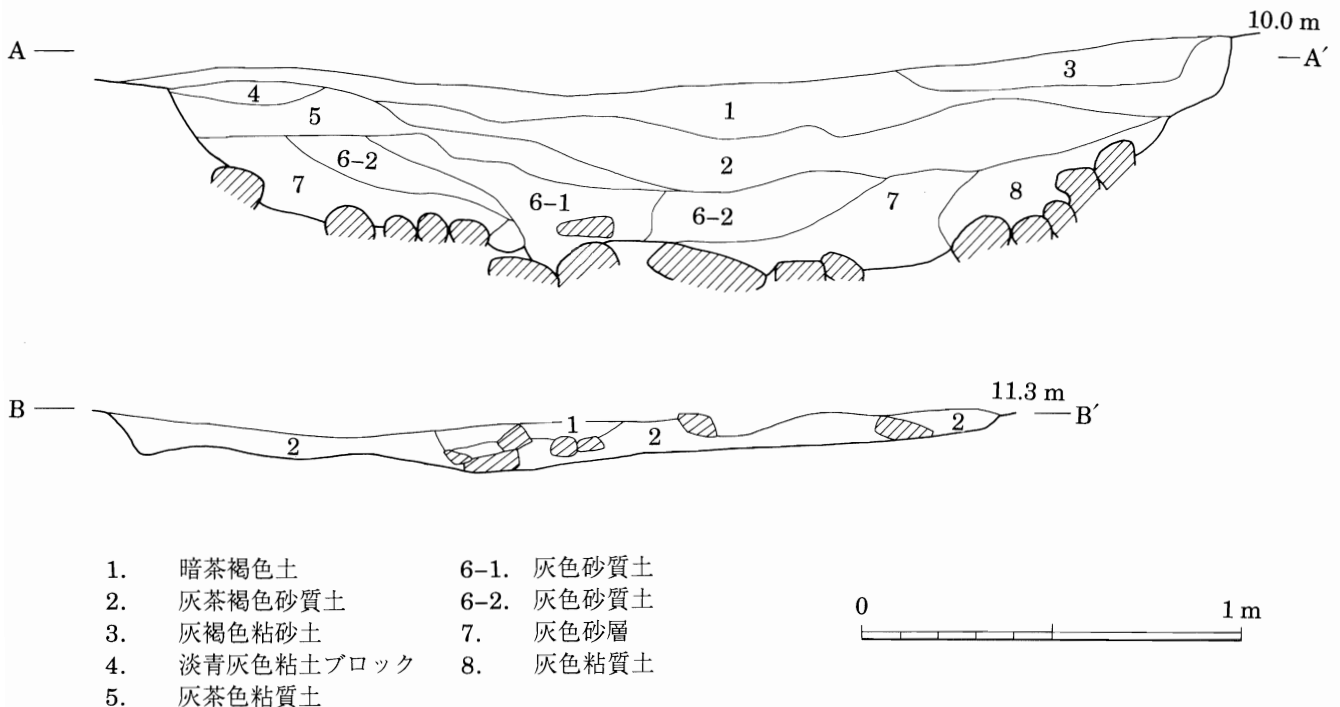
土層の堆積状況から考えると、ここは福富丘陵の縁辺部に当たり、現在水田となっている低地は当時は沼などの湿地帯であったように思われる。『出雲国風土記』（注1）や『雲陽誌』（注2）にはこの近辺に「津間抜池」があったことが記されており、奈良時代以前のこの地が湿地帯であった可能性は十分考えられる。

（注1）加藤義成「修訂出雲国風土記参究」改訂三版 1981 今井書店

（注2）「大日本地誌体系 雲陽誌」 1971 雄山閣

3. 検出遺構

1区で検出された遺構は溝状遺構が1つだけであった（第5図）。この溝は西半部では地山上面から掘り込まれているのが確認されたが、東半部では第4層上面で確認された。平面形は西南部から東北方に向かって延び、2段目の造成面辺りで東に向きを変えている。溝底は西部ではほぼ水平であるが屈曲部から東では地形なりに傾斜が急になる。幅はもっとも広い部分で約5.5 m、狭い部分で約30cmを測り、上面形は不整形である。深さは深い部分で約50cmであるが、大部分は10cm程度と非常に浅い。これは造成などによって上部が削られたためと思われる。溝底には大小の石が多く見られたが、人為的に敷かれたものではないと思われた（図版4）。



第6図 1区 SD 01土層図 1:20

4. 出土遺物

溝内からは突帯文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、木製品などが出土した(第7～12図、図版6～12)。木製品は西部に集中していたが、摩滅が著しく原位置を保つものではないと思われた。土器なども同様である。

弥生土器は後期の土器が主に出土し、突帯文土器はわずかに1点(第7図1)、前期の土器は2点(同図2、3)が出土しているにすぎない。また、中期初頭から中葉の土器は全く見られず、後葉の土器がわずかに見られるだけである(同図4、9、11、12)。後期の土器は比較的多く出土しているが、後期初頭(同図5～7)、および中葉(同図8)はやはり少なく、多くは後葉の土器である。後葉の土器は、壺、甕、高坏、器台などがあり、15、17、34のように特殊な壺もみられる。

古墳時代前半期の土師器は複合口縁の壺、甕(第8図38～41)、単純口縁の壺、甕(第9図42～46、53)のほか高坏(同図52)、器台(同図47)が出土している。

古墳時代後期の土器は、単純口縁の土師器甕(同図48～50)のほか須恵器出雲1期、同3～5期の各種が出土している。このうち第10図61の罍は頸部に施される波状文が通常みられる櫛状工具ではなく、ヘラ状工具を用いて1条ずつ引かれているのが特徴である。また、小片ではあるが65のように脚の付く特異な器種もある。

石器は打製石斧、磨石、石包丁、砥石などが出土している。打製石斧はいずれも中央に礫面を残す。66、68は比較的厚みがあるが、67、69は厚さの薄いいわゆる石鋏である。石包丁も打製である。72は21×14.6cmの大型の石包丁である。

木製品は竪杵(第11図74)、又鋏(同78)、栓状木製品(同76)、歯車状木製品(同75)、足駄形田下駄(同77)、方形杵付田下駄(同80～82、第12図84～88)などが出土している。方形杵付田下駄のうち80～82、84は杵の縦木、86～88は足板と考えられる。また85は横木であろうか。杵の縦木は穴に横木の一部が残っているものが多い。88は残片で本来の面が少ないが、全体に反っていることなどから、田舟の可能性も考えられる。

(注) 遺物の年代または復元は以下による。

正岡陸雄 松本岩雄『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』1992 木耳社

鹿島町教育委員会『南講武草田遺跡』1992

奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代編』1985

大谷晃二 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994

1区 SD 01出土土器・石器一覧表

挿図 番号	図版 ページ	法 量 (cm)	形態の特徴	文 様	手 法	備 考
第7図 —1	図版6		突帯口縁に接する	突帯文（刻目なし）	不明（ナデか？）	
—2	同上		口縁短く外反	口唇ヘラによる刻目	不明	甕（弥生前期）
—3	同上			ヘラ描き沈線1	不明	甕（弥生前）
—4	同上		口縁短く屈曲	擬凹線3、刻目突帯	内外面ヨコナデ	甕（弥生Ⅳ—2様式）
—5	同上		同上	（擬？）凹線4	外—ヨコナデ、ハケ目 内—頸以下ケズリ	甕（同Ⅴ—1様式）
—6	同上		同上	擬凹線3	ヨコナデ 内面頸以下ケズリ	甕（同上）
—7			口縁端肥厚	擬凹線5	同上	壺（同上）
—8	図版6		口縁外傾	凹線2	同上	甕（同上）
—9	同上		口縁端肥厚	擬凹線4	ヨコナデ、外面ハケ目	壺（同上）
—10	図版7		肩部に稜	擬凹線3	不明	高坏（同Ⅴ—2様式）
—11	同上			凹線6	ナデ？筒部内面ケズリ	高坏（同Ⅴ—1様式）
—12		底径6.8	脚端肥厚	擬凹線2	筒部外面ミガキ	高坏 筒部中空でない （同Ⅴ—2様式）
—13	図版7	筒径3.6			外面ミガキ	高坏
—14		底径15.6			外—ハケ目+ヨコナデ 内—ケズリ	脚（同Ⅴ—2様式）
—15	図版7	底径11.8	胴部張る	2枚貝による有軸 羽状文（軸線はクシ描沈線）	ヨコナデ	壺（同上？）
—16		底径8.8			外—指による押圧、ナデ 内—ケズリ	支脚
—17	図版7	胴部最大 径15.0	たまねぎ状の胴部	直線文、突帯文、羽状文（肋 条のない二枚貝？）	内面ケズリ	壺（同Ⅴ—3様式）
—18	同上	口径16.4	口縁長く外反	クシ描沈線13 （7条1単位か？）	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ、ミガキ、ケズリ	壺（同上）
—19	同上	口径22.0	口縁長く外傾	クシ描沈線15以上 （8条1単位か？）	外面ヨコナデ 内面ミガキ	甕（Ⅴ—2様式）
—20		口径16.0	口縁強く外反	クシ描沈線（条数不 明）	不明	甕（同Ⅴ—3様式）
—21	図版7	口径20.4	口縁強く外反	クシ描沈線8	外面ヨコナデ 内面ケズリ	甕（同Ⅴ—3様式）
第8図 —22	同上	口径15.0	口縁外反	クシ描沈線 同波状文（5条）	ヨコナデ 内面ケズリ	甕（同上）
—23	同上	口径14.2	口縁外反。やや 短い	クシ描沈線4条以上	ヨコナデ内面ケズリ	甕（同上）
—24	同上	口径15.6	口縁外反。端部 やや肥厚	クシ描沈線17	ヨコナデ、内面ケズリ	甕（同上）
—25		口径13.8	口縁外反。端部 平担	クシ描沈線8以上	ヨコナデ	器台（同上）
—26	図版7	口径15.8	口縁外反	クシ描沈線5条以上	ヨコナデ	器台（同上）
—27				クシ描沈線8条以上	内面ミガキ 外面ヨコナデ	器台 内外面に赤色顔料付着 （同上）
—28			口縁外反	クシ描沈線9条以上	内面ミガキまたはヨ コナデ	器台（同上）
—29	図版7		口縁外反	クシ描沈線20条以上	外面ヨコナデ 内面ハケ目+ナデ？	器台（同上）
—30		径3.2 長8.6			ミガキ	注口

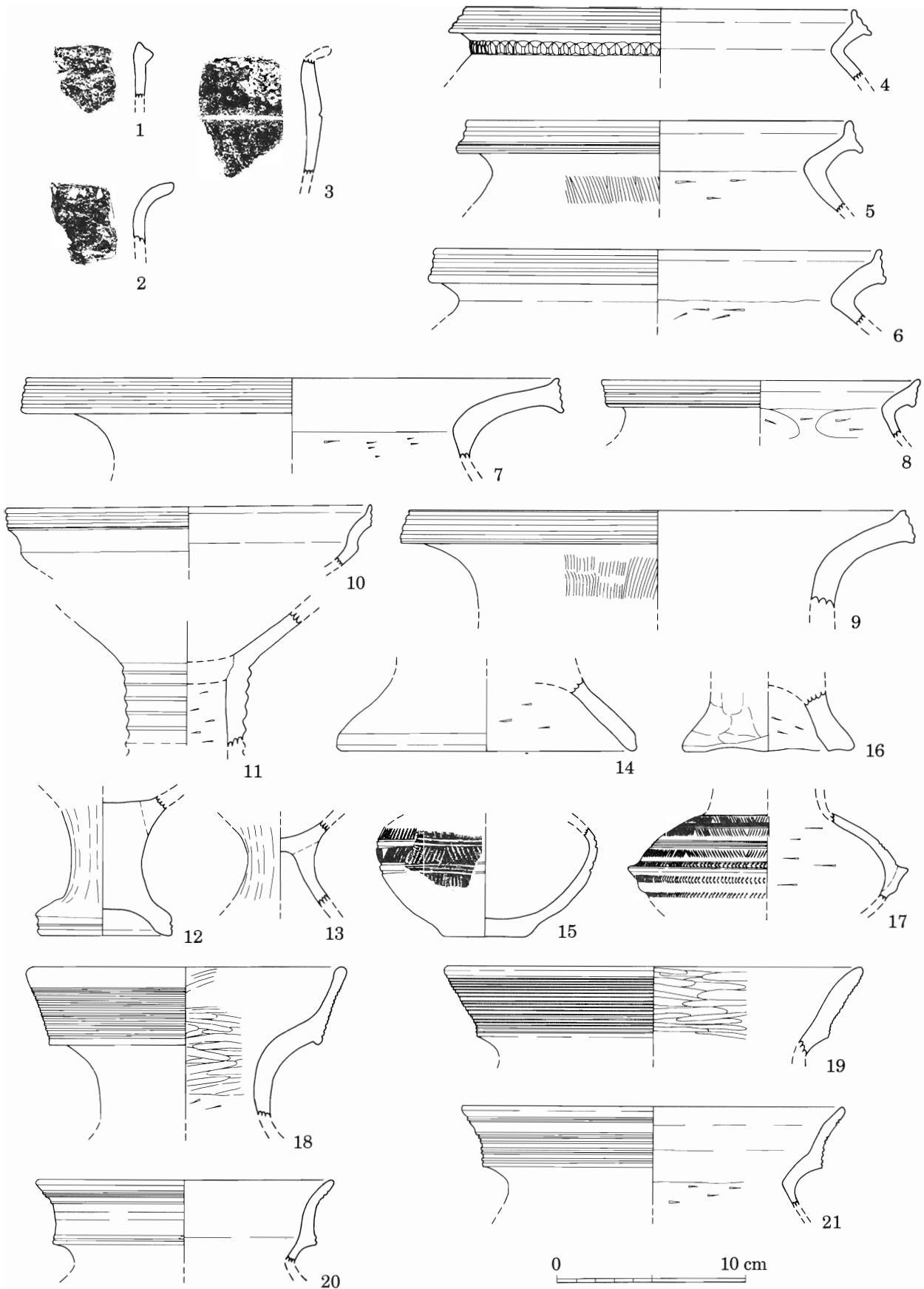
挿図 番号	図版 ページ	法 量 (cm)	形態の特徴	文 様	手 法	備 考
第8図 —31		底径11	凹み底		外面ハケ目、指押圧 内面、底面ナデ	底部
—32		底径3.8	平底		外面ミガキ 内面ケズリ	底部
—33		底径4.5	平底		外面 ミガキ？ 内面 ケズリ？ 底面 ケズリ？	底部
—34	図版7		頸部 強く屈折	クシ沈線間に爪形文 (肋条のない二枚貝?)	内面 ケズリ	壺?
—35	同上		胴部 強く張る	有軸羽状文 (2枚貝)	ナデ?	壺?
—36	同上		胴部 強く張る	クシ描沈線 二枚貝による刺突文		壺?
—37	同上		胴部 強く張る	クシ描沈線文4 刺突文(肋条のない二枚貝?)	内面ケズリ	壺?
—38	図版8	口径18.2	口縁やや内傾 端部面取	クシによる羽状文	ヨコナデ	壺
—39		口径17.4	口縁外反 端部面取		ヨコナデ 内面ケズリ	甕(古墳前)
—40	図版8	口径21.8	口縁外傾 端部面取	クシによる斜線文	ヨコナデ 内面に指押圧痕	壺(同上)
—41		口径13	口縁内湾気味に 直立		ヨコナデ 内面ケズリ	甕(同上)
第9図 —42	図版8	口径15.6	口縁外傾 端部面取		外面ヨコナデ、ハケ目 内面 ハケ目+ヨコナデ、ケズリ	甕(同上)
—43	同上	口径15.8	口縁わずかに内湾 端部面取		外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 ヨコナデ、ケズリ	甕(同上)
—44		口径10.3	口縁直口		ヨコナデ 内面ケズリ	直口壺(同上)
—45	図版9	口径8.2	口縁外反		外面ヨコナデ、ナデ 内面 ハケ目、ケズリ、指押圧	直口壺(同上)
—46		胴部径8	やや扁平な器形		ナデ、ヨコナデ	壺?(同上)
—47	図版9	筒部径7.2	筒部短い		外面ヨコナデ 内面 受部ナデまたはミガキ 台部 ケズリ	器台(同上)
—48	図版8	口径20.3	口縁短く外反		外面ヨコナデ、ナデ 内面ヨコナデ、ケズリ	甕(古墳後)
—49	図版9	口径20.8	口縁外反		ヨコナデ 内面ケズリ	甕(同上)
—50	図版8	口径18.6	口縁短く外反		外面ヨコナデ、ハケ目 内面ヨコナデ、ケズリ	甕(同上)
—51	図版9	口径16.2	口縁端わずかに 外反		外面ヨコナデ、ハケ目 内面ヨコナデ	高坏?(古墳中期)
—52		口径16	「く」の字口縁 肩部張る		外面 ヨコナデ 内面 ケズリ	鉢(古墳前期?)
—53		口径20	口縁短く外傾		外面 ヨコナデ、ケ ズリ	甕(古墳後期)
—54	図版9	口径11.6	口縁直立気味。 端部凹面		回転ナデ	須恵器(出雲1期) 蓋
—55	図版11	口径13.4 高4.1	口縁「ハ」の字 形に開く。 稜鈍い。		天井部全面回転ケズリ 回転ナデ ロクロ左回転	須恵器(出雲4期) 蓋
—56	同上	口径11.4 高5.8	深身で丸底 口縁端に段 たちあがり長くやや内傾		回転ケズリ+ナデ	須恵器(出雲1期) 坏
—57	図版9	口径10.6 高3.9	たちあがり短く 内傾		ヘラ切り後軽くナデ	須恵器(出雲6期) 坏
—58	図版9	口径15.6	稜なし		回転ケズリ 回転ナデ、ナデ ロクロ右回転	須恵器(出雲4期) 蓋
—59		口径12	たちあがり短く 内傾		回転ケズリ	須恵器(出雲6期) 坏
—60		口径11.6	たちあがり短く 内傾		回転ナデ ケズリなし?	須恵器(出雲6期) 坏
第10図 —61	図版8	高19.7+ α	頸部下端ややた い	ヘラ描き波状文 沈線	回転ナデ、回転ケズリ ロクロ右回転	須恵器(出雲3期) 碌

挿図 番号	図版 ページ	法 量 (cm)	形態の特徴	文 様	手 法	備 考
第10図 —62		口径14	口縁外反	鈍い突線	回転ナデ	須恵器 (出雲4~5期) 高坏
—63		底径10.8	脚大きく開く	三角形二方透孔	回転ナデ	須恵器 (出雲4期) 高坏
—64					回転ナデ 内面に接合痕	須恵器 長頸壺
—65			体部丸い。 脚大きく開く?	方形透孔	回転ケズリ+回転ナデ ロクロ左回転	須恵器 高坏?
—66	図版10	長12.4+ α 幅7.4 厚3	短冊形の基部		左側縁つぶれ状の剥離 中央に礫面	打製 石斧
—67	同上	長13.6 幅7.3 厚2.1	撥形		側縁つぶれ状の剥離 中央に礫面	打製 石斧
—68	同上	長11.9+ α 幅6.3 厚2.5	短冊形		上端部礫面	打製 石斧
—69	同上	長9.8+ α 幅9.6 厚1.8	撥形		縁辺のみ剥離 中央に礫面	打製 石斧
—70	同上	長12.9 幅9.7 厚4.5			側縁中央に打痕。 平面は平担 (使用による)	叩石
—71	同上	長10+ α 幅3 厚0.6+ α			4面に擦痕顕著	砥石
—72	図版9	長21 幅14.6 厚3	大型		背部は大きな剥離 刃部は細かな剥離	打製 石包丁
—73		長6.2+ α 幅3.9 厚0.9			中央に大きな剥離面	打製 石包丁

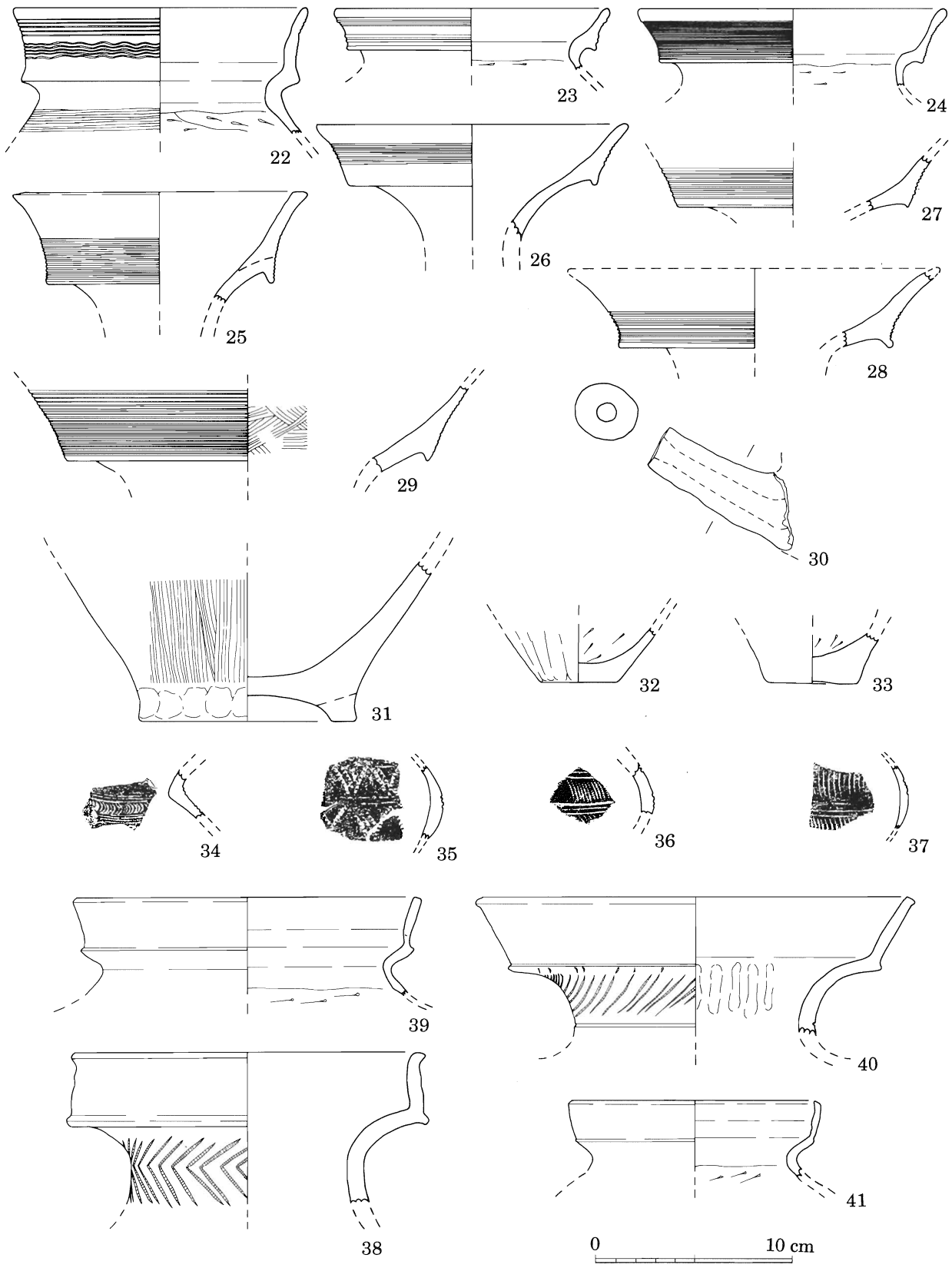
1区 木製品 一覧表

同74	図版 12	長75.1 径8			芯持	竪杵
同75	図版 11	径8.3	歯8本以上		板目	歯車状木製品
同76	同上	長4.7 径4.3			板目	栓状木製品
同77	図版 11	長29 幅12.2 厚3			板目	足駄形田下駄
同78	図版 12	長19.8 幅10.2 厚1.3	歯6本			又鋏
同79		長16.6 幅5.8 厚2.4			板目	把手
同80		長34.4+ α 幅3.7 厚3.2	柎穴4以上			方形柎付 田下駄
同81	図版 12	長31.9 幅5 厚3.3+ α	柎穴1			方形柎付 田下駄
同82		長45.4+ α 幅3.6 厚2.6	柎穴7以上			方形柎付 田下駄
同83	図版 12	長38.1 幅6.1 厚1.6			板目	不明木製品
同84		長35.5+ α 幅3.7 厚3.2	柎穴4以上			方形柎付 田下駄
同85		長44.5 径2				方形柎付 田下駄?
同86		長40.1 幅10.7 厚1.8	柎穴5			方形柎付 田下駄
同87		長33 幅12.6 厚1.6	柎穴4			方形柎付 田下駄?
同88	図版 12	長50.9 幅14.5 厚2.7	柎穴2		板目	方形柎付 田下駄?
同89		長42.4+ α 幅5.2+ α 厚2.4				田舟?

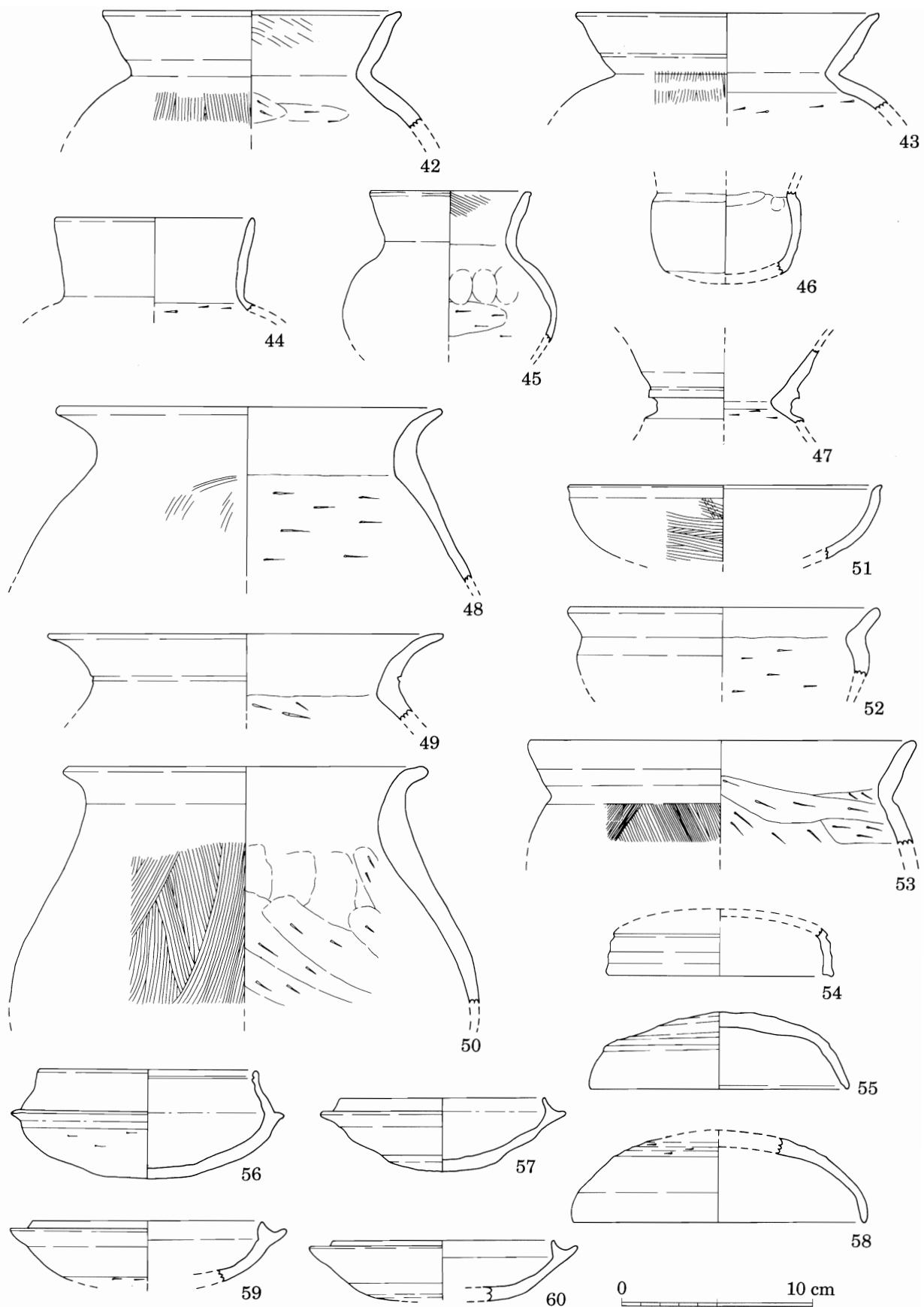
以上は、弥生土器については正岡睦夫・松本岩雄 1992・ 須恵器については大谷晃二 1994によった。



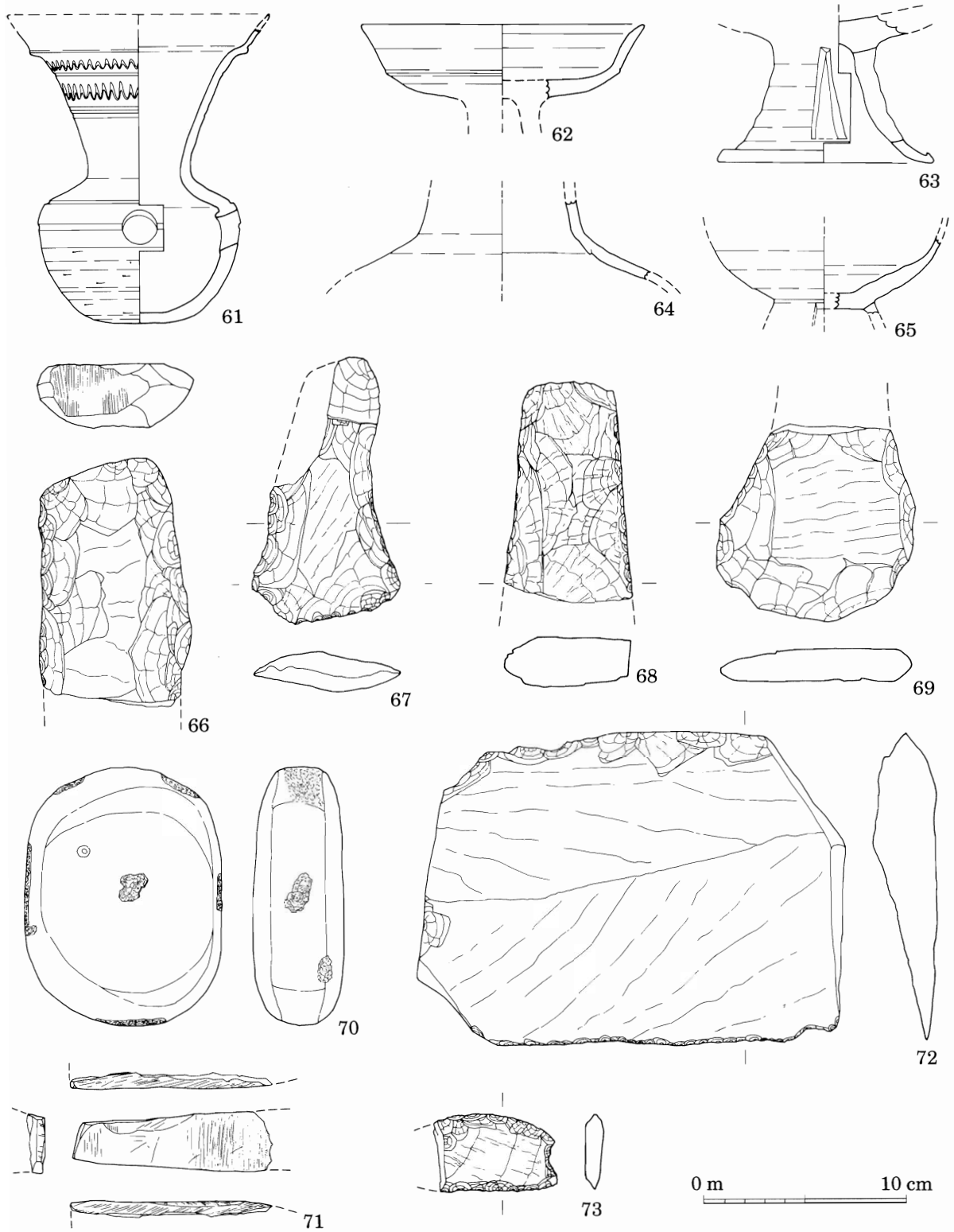
第7图 1区 SD 01出土土器 (1) 1:3



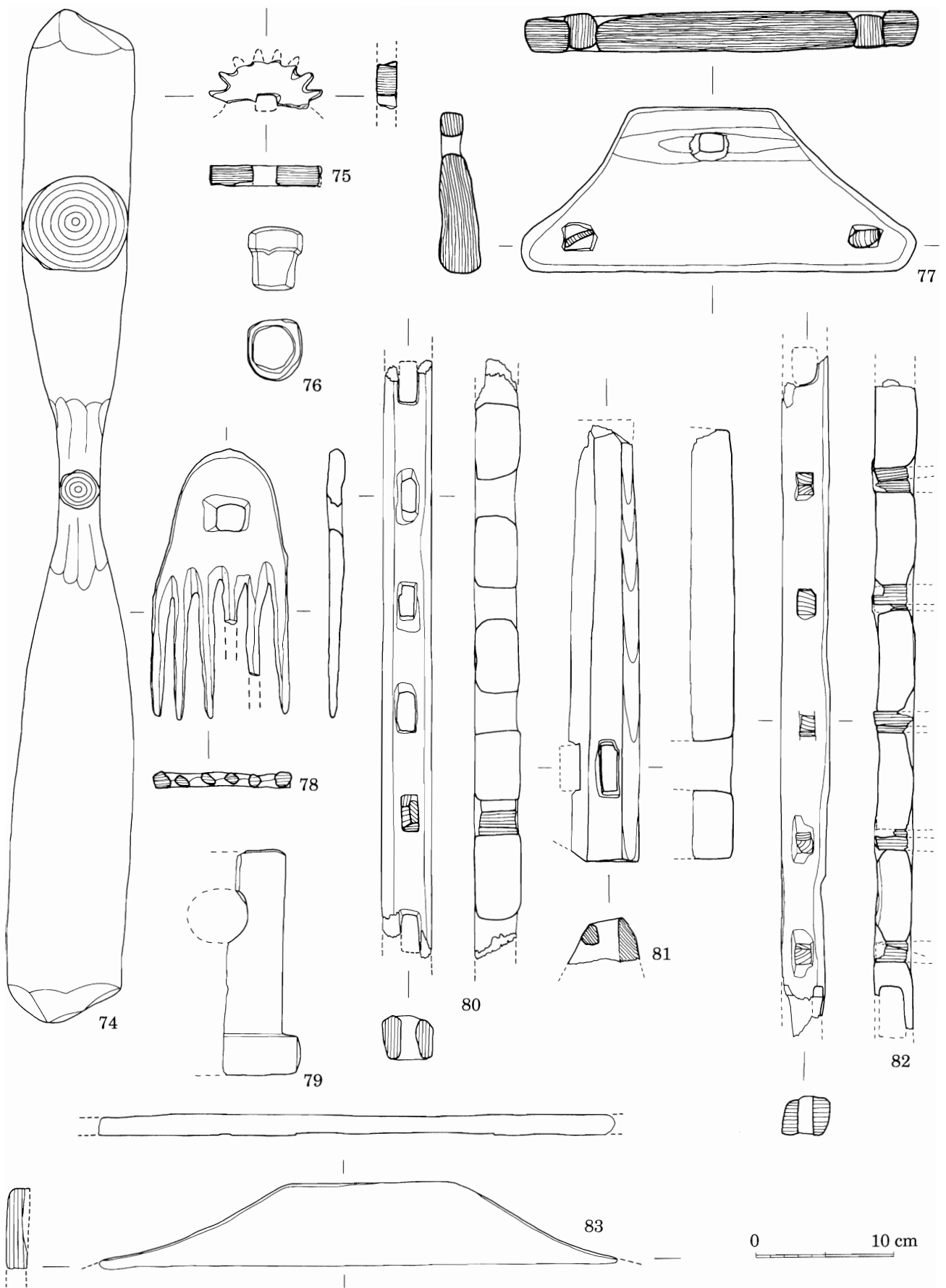
第8图 1区 SD 01出土土器 (2) 1:3



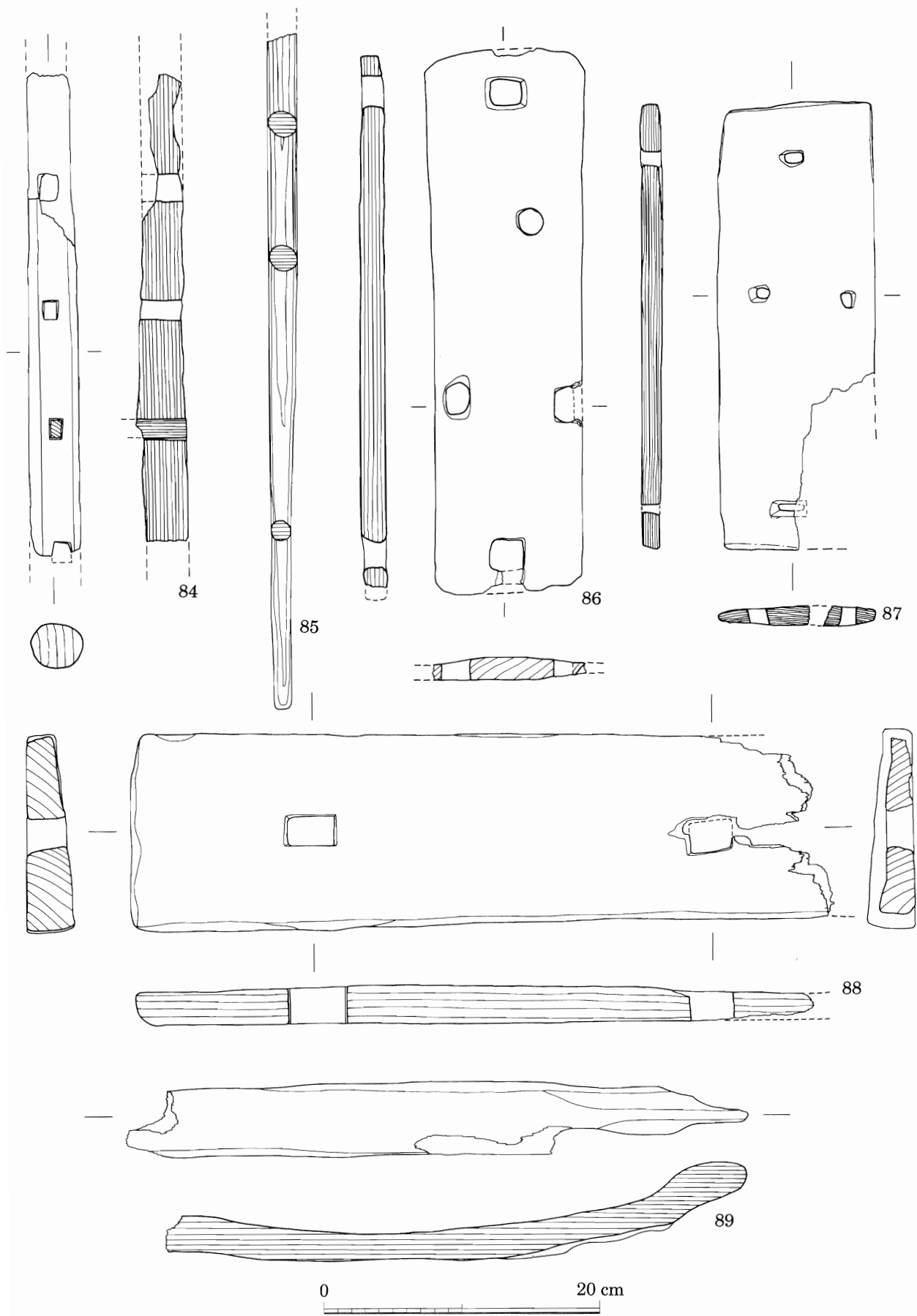
第9图 1区 SD 01出土土器 (3) 1:3



第10图 1区 SD 01出土土器. 石器 (4) 1:3



第11图 1区 SD 01出土木器 (1) 1:4



第12图 1区 SD 01出土木器 (2) 1:4

5、小 結

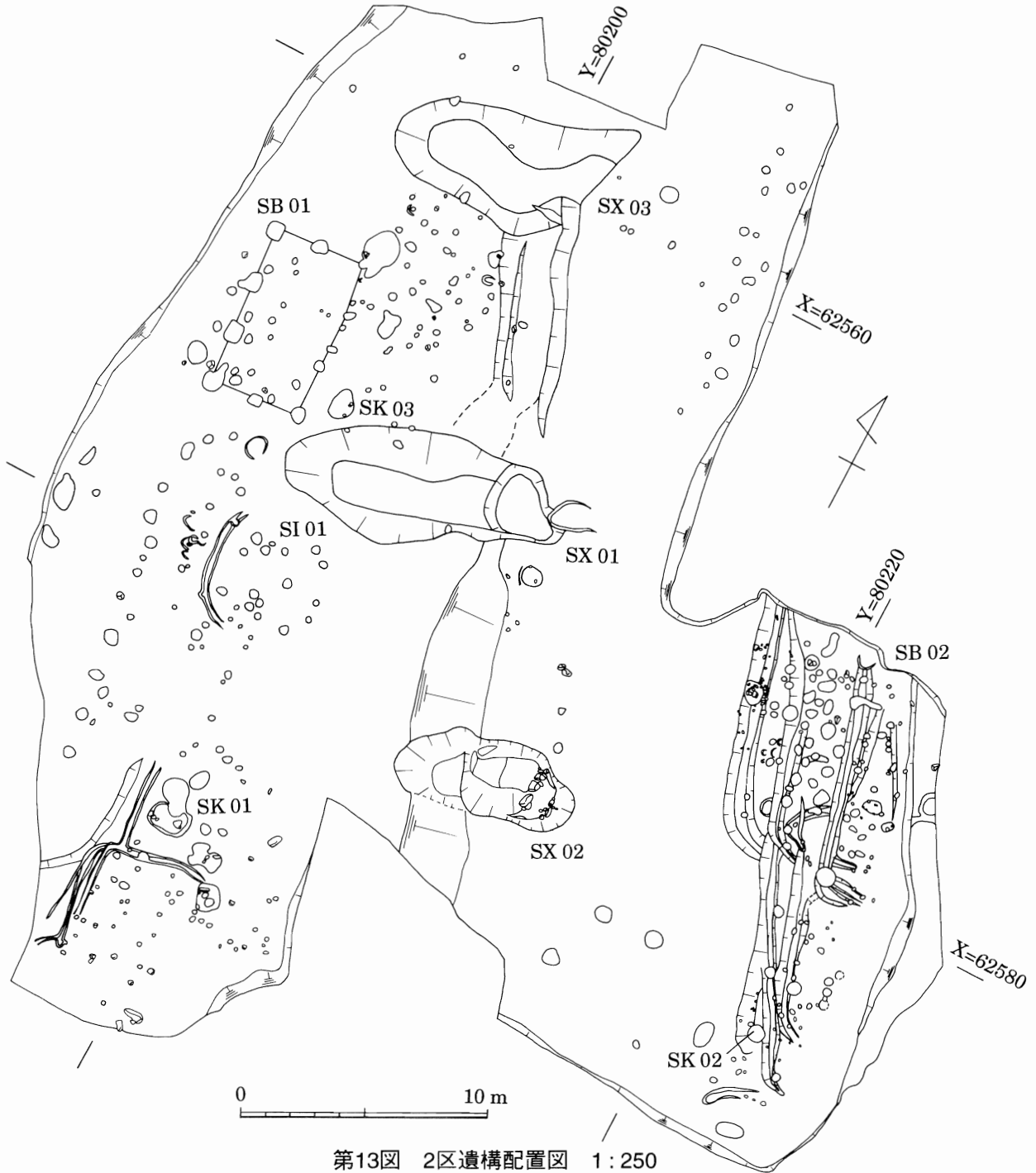
以上のように、1区では溝状遺構1条を検出するにとどまった。出土土器からみると、須恵器のうちもっとも新しいものが7世紀前半に位置づけられることから、この遺構もこのころに作られたものと考えたい。このことは方形柵付田下駄などが7世紀前半以降の遺物であることから矛盾はないと思われる。

この遺構は西半部は等高線に平行しており、東半部は逆に等高線に直交するように穿たれている。先にここより東側が湿地であった可能性を指摘したが、これを合わせて考えるとこの遺構は溝の出水口部分にあたるように思われる。調査区が限定されているため、これが農業用なのか生活用なのかは不明であるが、出土した木製品が農耕具が多いことから農業用の用排水の可能性も否定できない。なお現在でも調査区の西には幅約2 m の農業用水が設けられており、豊富な水が流れている。

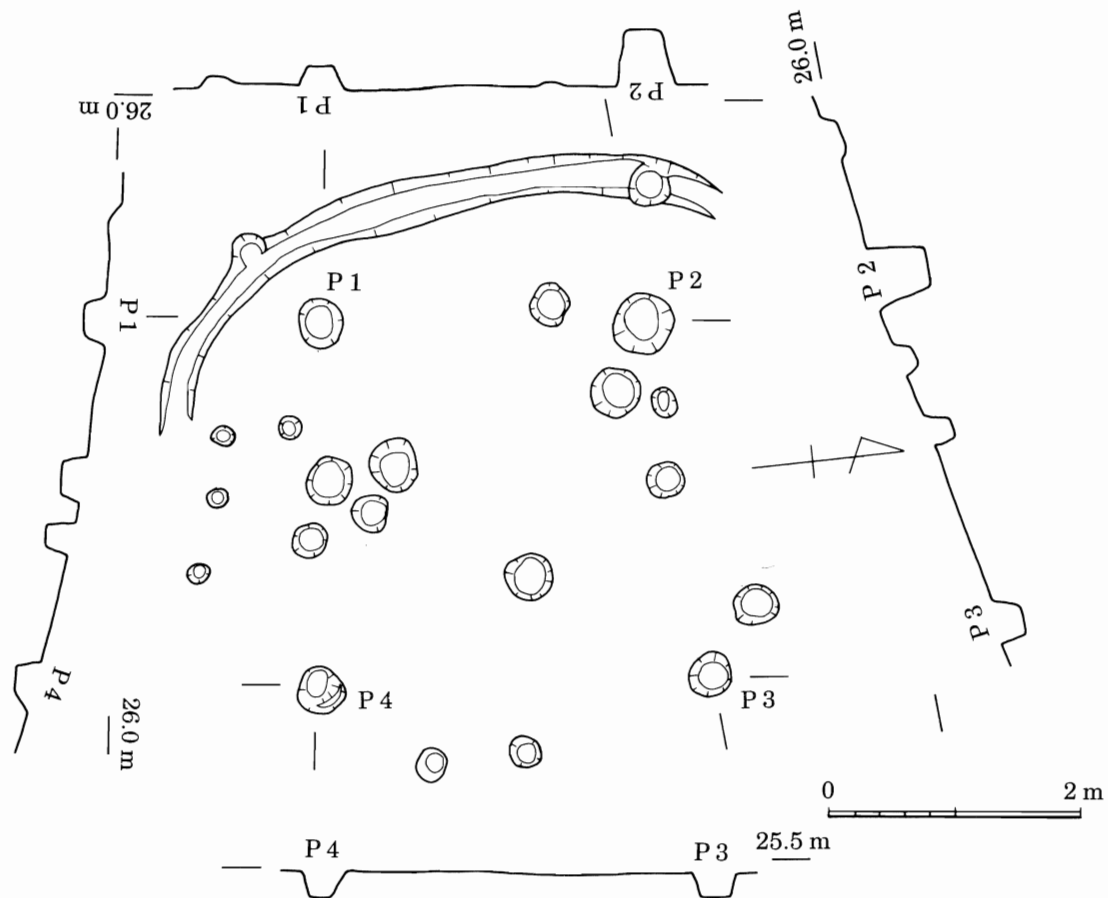
第 4 章 2 区

1、概 要

福富丘陵の東端に位置する。3区の東南に当たり3区と連続する地域であるが、調査の都合上別の調査区として扱った。ここは現状では、3区から続く舌状の丘陵が急斜面となる地形で、頂部の標高は約26 m、最下段の標高は約19 mである。斜面の途中で2段のテラスがみられ、発掘前の状況は頂部が竹林、中段・下段のテラスが畑であった。土層の堆積は厚くなく、耕作



第13図 2区遺構配置図 1:250



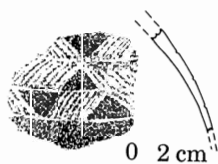
第14図 2区 SI 01実測図 1:60

土または表土が20~30cm堆積していただけであった。

検出された遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、加工段のある掘立柱跡、土壇などがあるが、このほかに性格不明遺構がある。また、調査区の西南部では柱穴と思われるピットや住居区画の溝と思われる遺構が検出されたが、建物を組むには至らなかった。また、SX 01~03の東部に接して道遺構が検出され、3 A 区 SB 01の方向に伸びていた。(第13図、図版13)

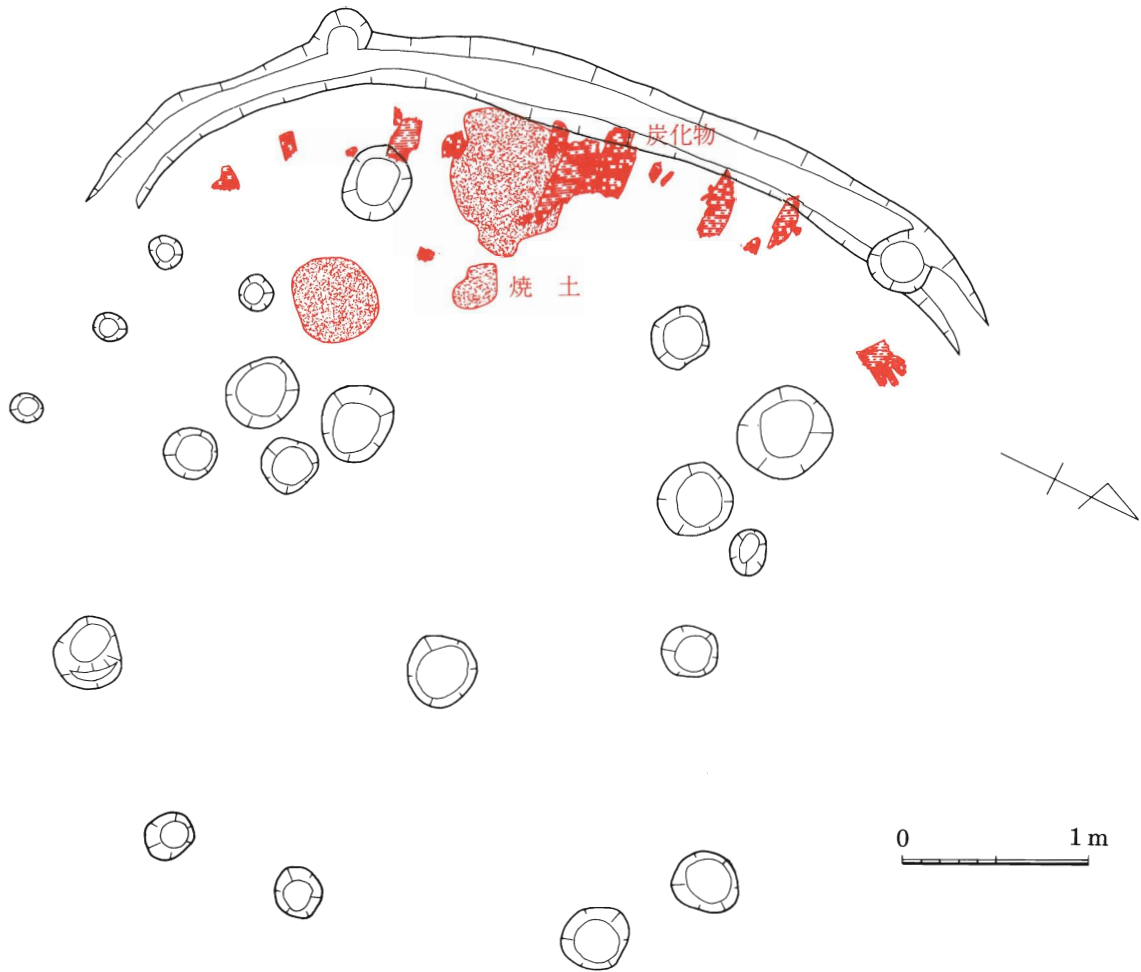
2、検出遺構

SI 01 (第14~16図、図版14.15) 周溝の一部と柱穴のみが検出された。壁は全く残っていないかった。



第15図 SI 01出土土器

周溝は弧状に残っており、両端を結んだ線は4.8 m ほどである。残存状態が非常に悪いため、本来の平面形ははっきりしないが、壁帯溝が緩やかな弧状に残っていることから、隅丸方形か多角形プランを呈していた可能性がある。床面は周溝際が約90cmほどの幅で平坦になっているだけで、そのほ



第16図 2区 SI 01焼土炭化物検出状況 1:40

かは東に向かって傾斜していた。耕作その他で大部分は壊されたものと思われる。ここではピットが多く検出され、この住居跡の支柱穴は判然としない。一応、配置から P1~P4を支柱穴と考えた。

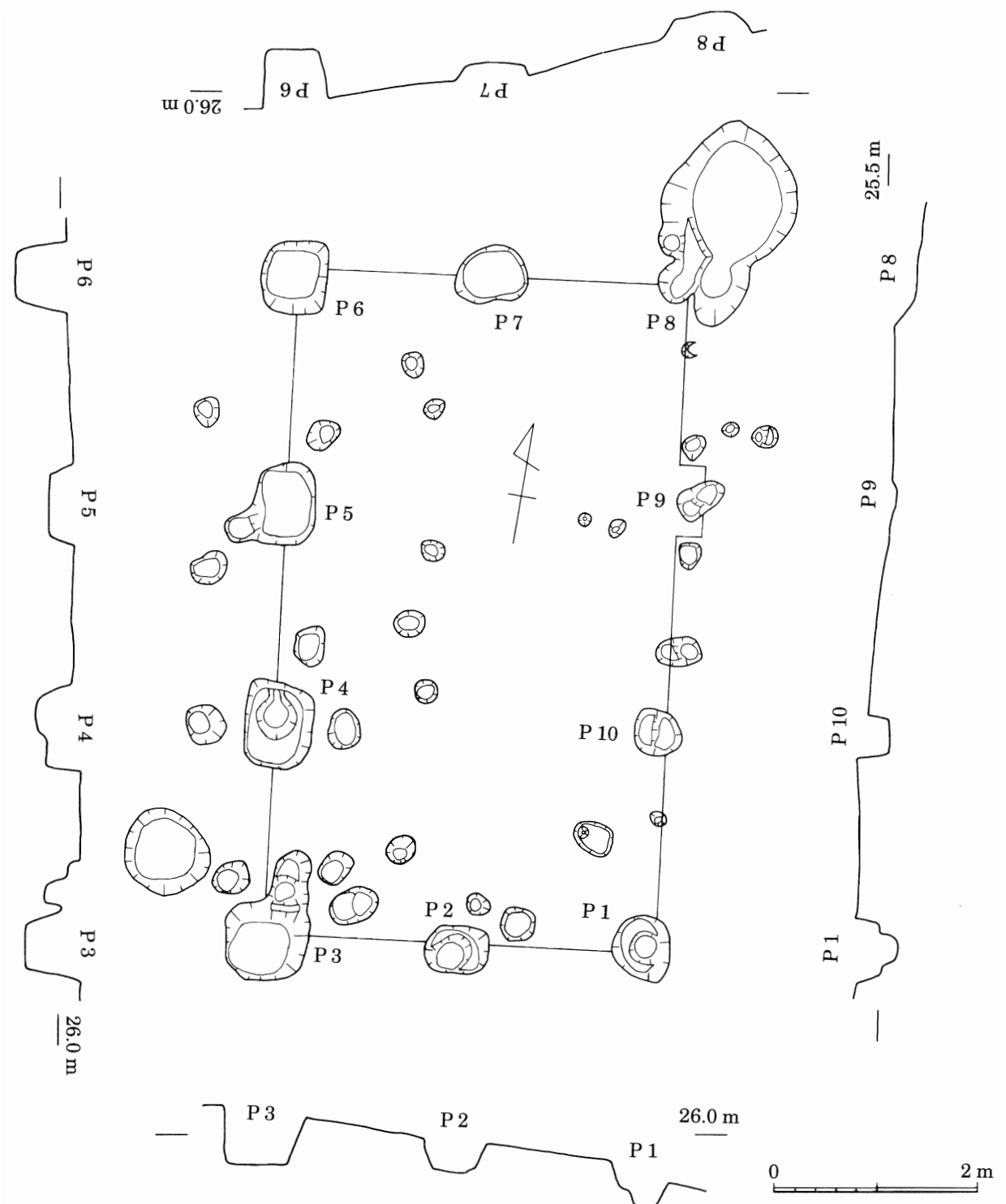
出土遺物はわずかに細片が数片出土したにすぎなかった。図示できたものは小片1だけであった(第15図)。表面には有軸羽状文が施文され、内面にはケズリ調整が施される。弥生時代後期、第V-3または4様式の土器と思われ、この竪穴住居跡の時期の一端を示すと考えられる。

この竪穴住居跡からは多くの炭化物が出土した(第16図 図版15)。これらは周溝に沿って出土し、周溝側から中心に向けて(住居の外から内に向けて)並んでいた。炭化物の形状は板状を呈したものが多く、住居跡の壁材が焼け落ちたもののように思われた。

これらの炭化物は C¹⁴年代測定では、AD 160年ころの年代が得られている(注)。

(注) C¹⁴年代測定は(株)地球科学研究所に依頼した。C¹⁴年代測定値は1870±60年 BP、 δC^{13} (C¹⁴/C¹²比を補正するための C¹³/C¹²比)は-26.5、それによる補正 C¹⁴年代は1850±60年 BP。既に年代が明らかになっている樹木年輪の C¹⁴測定値によって作成された補正曲線で算出された暦年代は AD 160年であるという。

SB 01 (第17図、図版16) 主軸をほぼ真北に向けた、2×3間の掘立柱建物跡である。梁行き約3.6 m、桁行き約6.3 mを測り、桁7尺、梁6尺の建物が想定できる。東側の柱穴列は流れているため不整形であるが、残存状態のよい東側の柱穴列(P2~7)は掘り形の平面形が方形である。このことから、これは特殊な性格の建物であることが想像される。P1、2、4の底には柱痕と思われるくぼみがあり、これから柱は径25cm前後あったと考えられる。

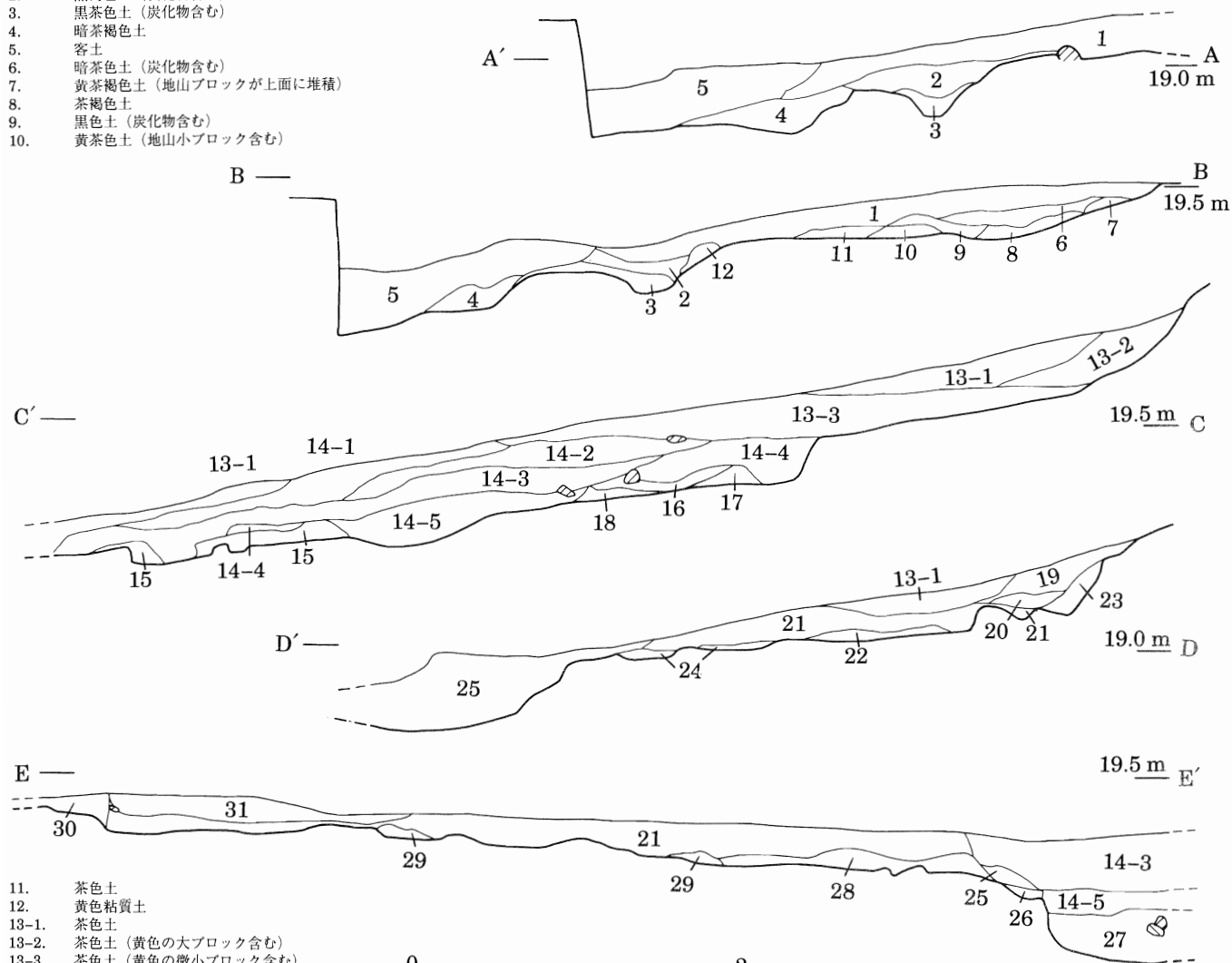


第17図 2区 SB 01 1:60

2区 SB01計測表

規 模	梁行き			桁行き			
	2間 (3.7 m)			3間 (6.3 m)			
主 軸	N-8° - E						
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	55×63	60×41	77×78	65×84	57×78	65×71
	深 さ	41	33	57	41	29	57
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	69×56	52×(66+α)	42×32	44×43		
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.9	1.8	2.1	2.1	2.1	1.8
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-1	P 11-12	P 12-1
		1.9	2.1	2.1	2.1		

1. 暗黄茶色土
2. 黒褐色土 (炭化物含む)
3. 黒茶色土 (炭化物含む)
4. 暗茶褐色土
5. 客土
6. 暗茶色土 (炭化物含む)
7. 黄茶褐色土 (地山ブロックが上面に堆積)
8. 茶褐色土
9. 黒色土 (炭化物含む)
10. 黄茶色土 (地山小ブロック含む)

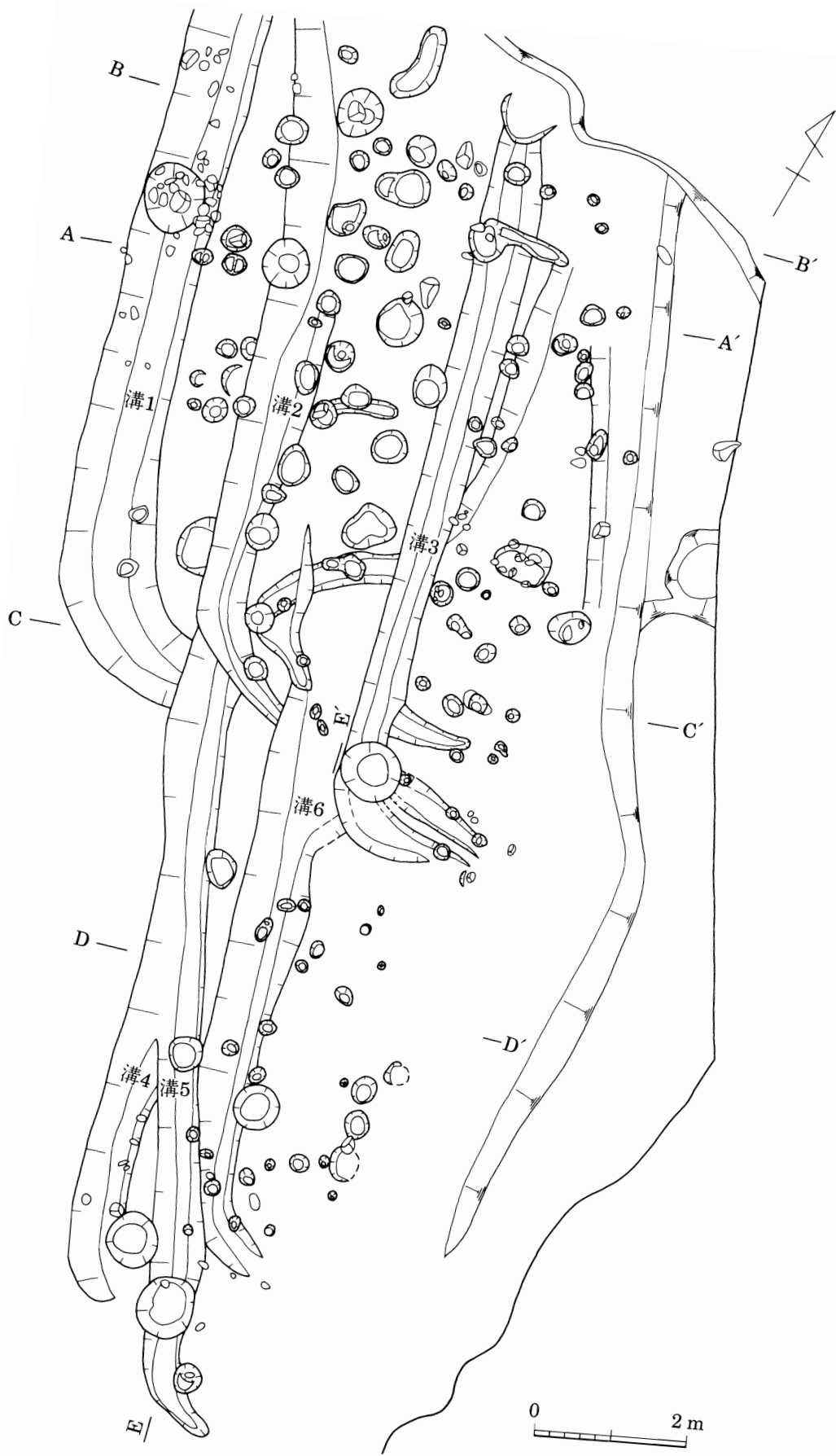


11. 茶色土
12. 黄色粘質土
- 13-1. 茶色土
- 13-2. 茶色土 (黄色の大ブロック含む)
- 13-3. 茶色土 (黄色の微小ブロック含む)
- 14-1. 黒褐色土 (炭化物を少量含む)
- 14-2. 黒褐色土
- 14-3. 黒褐色土 (炭化物を比較的多く含む)
- 14-4. 黒褐色土 (小炭化物を多く含む)
- 14-5. 黒褐色土 (灰茶色土小ブロック含む)
15. 暗黄茶色土 (茶色土ブロック、黄色土ブロックの混合層)
16. 黒色土 (炭化物、焼土多く含む)
17. 暗灰茶色土
18. 灰茶色土

第18図 2区 SB02土層図

1 : 40

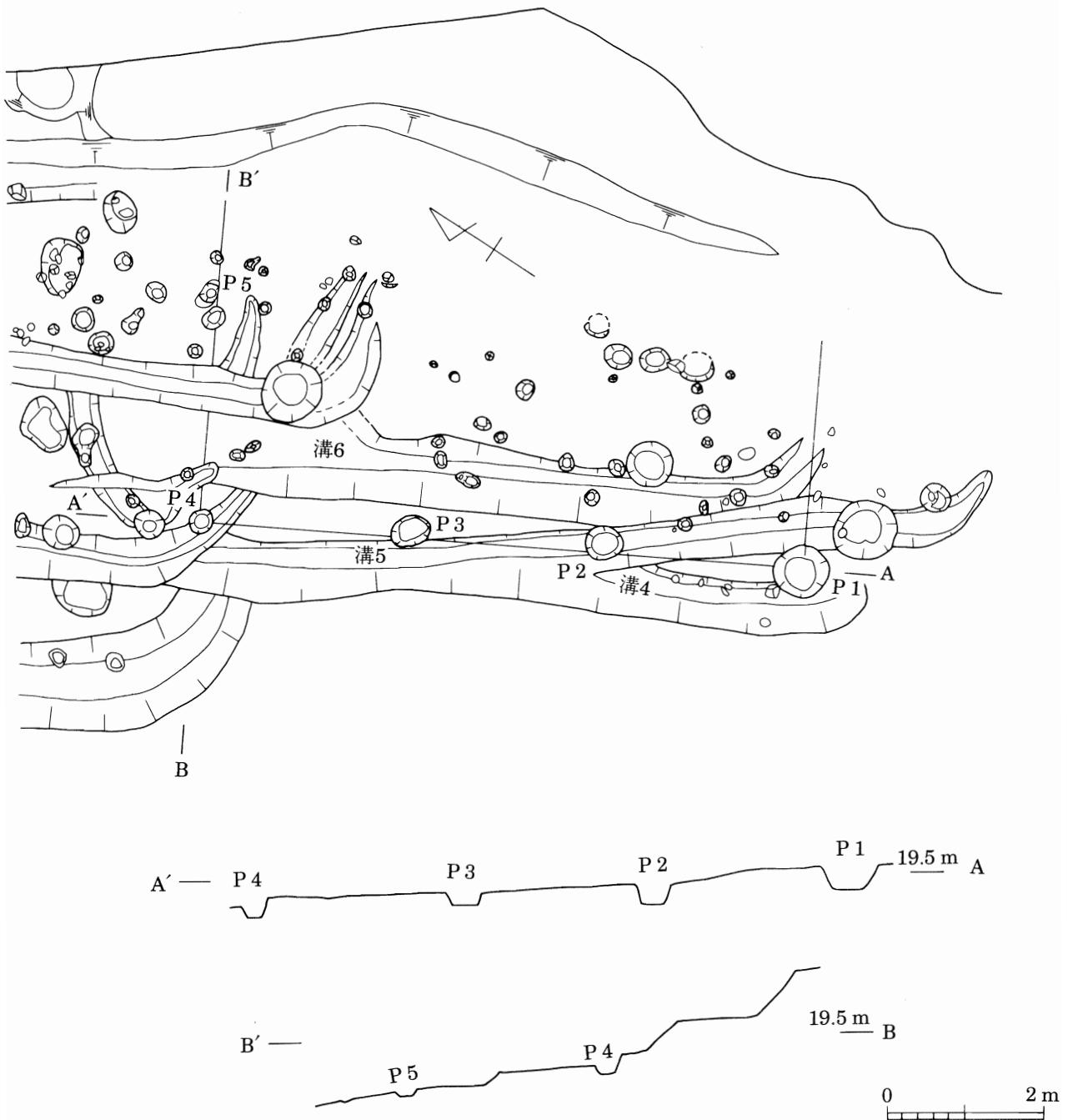
19. 暗茶色土
20. 暗茶褐色土
21. 黒茶色土
22. 茶褐色土 (茶褐色土ブロックと21層との混合)
23. 暗灰茶色土
24. 黒褐色土
25. 暗茶色土
26. 暗黄茶色土 (地山小ブロック含む)
27. 暗茶褐色土 (土壌、堆積土、地山ブロック含む)
28. 茶色土
29. 暗黄褐色土
30. 茶褐色土
31. 淡黄茶色土 (住居跡貼床か?)



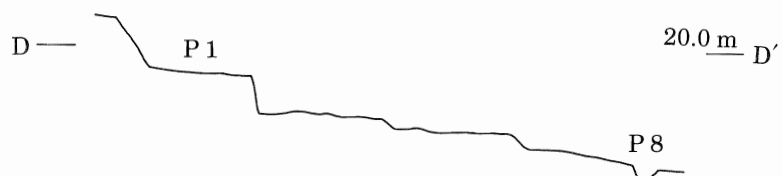
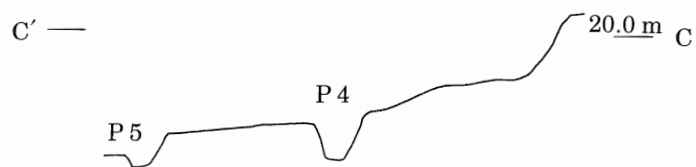
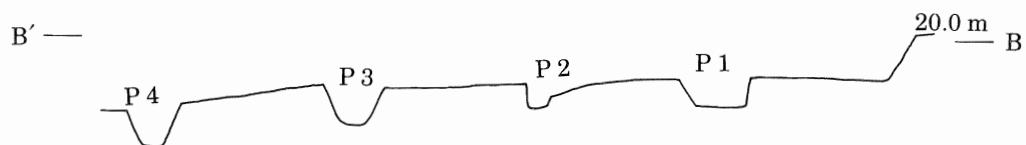
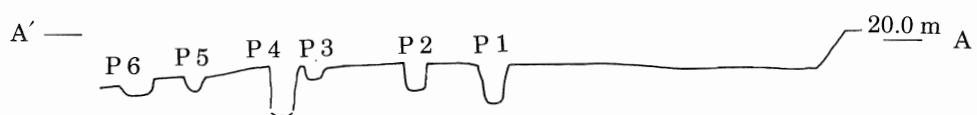
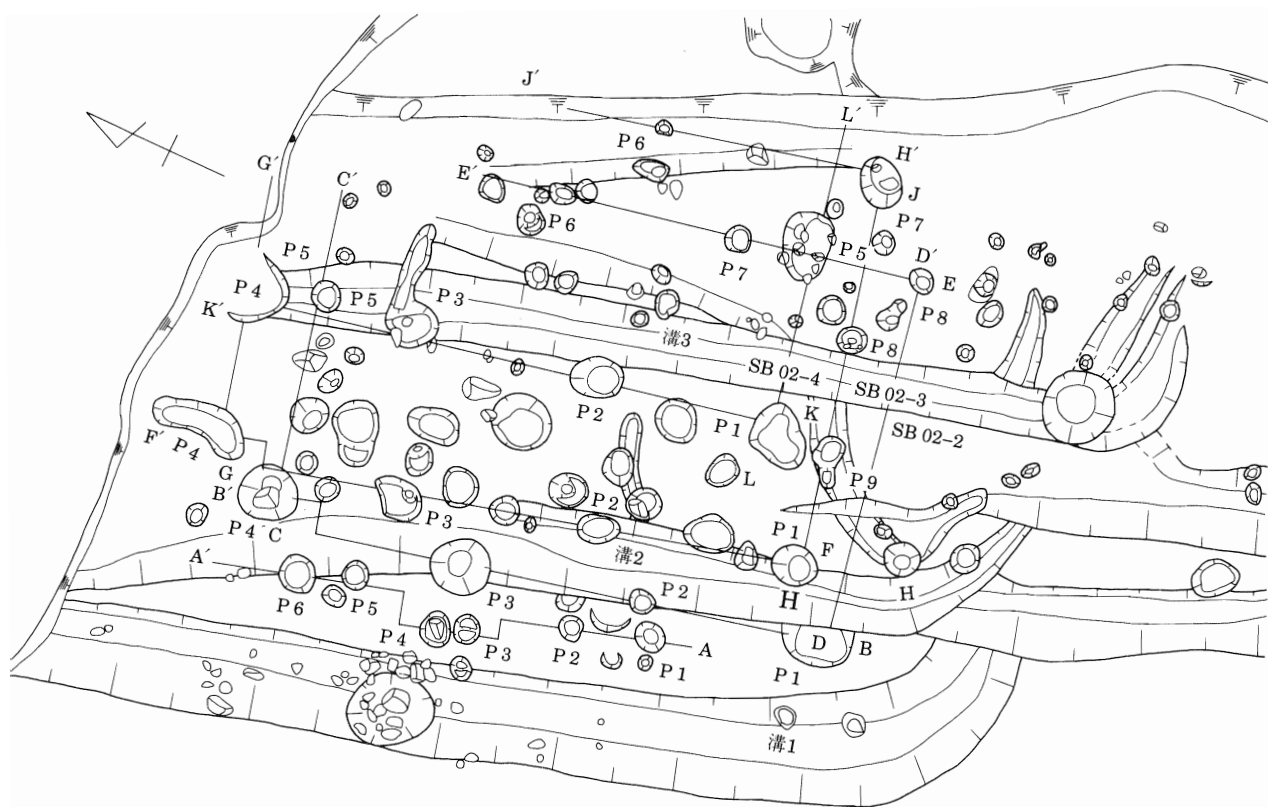
第19图 2区 SB 02 1:80

SB 02(第18~22図、図版17) 調査区の東端に位置する。地山を段状に削平した住居跡で、加工段上に掘立柱建物を建てたものである。いずれも壁際には壁帯溝が掘られている。複雑に建て替えが行われており、柱穴が錯綜していること、立地が斜面で東側の床面が流失していることなどから、建物跡の正確な規模を復元することは困難であった。

検出された壁帯溝から考えると、ここでは少なくとも6回の建て替えが行われたようである。これらは大きく北部と南部に分けられ、それぞれに重複している。溝1~3は約2mの間



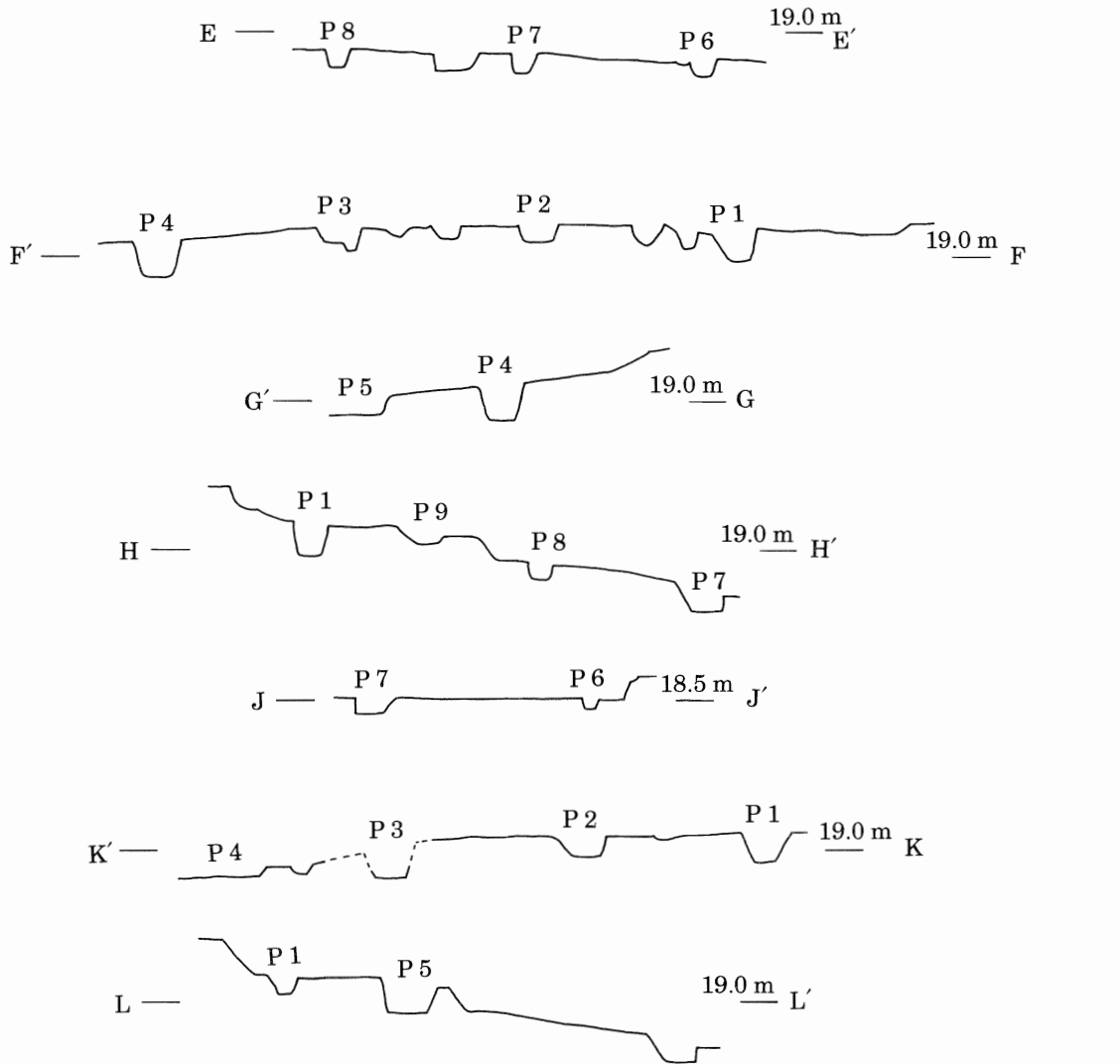
第20図 2区 SB 02-1実測図 1:80



第21图 2区 SB 02-2·3·4实测图 1:80

隔を置いてほぼ平行に作られており、検出できた規模は溝1、2が長さ7.5 m、幅75cm、溝3が長さ7.5 m、幅55cmほどである。土層の観察では、溝2と溝3との関係は不明であるが、溝2と溝1では溝2が先に作られていることがわかった。南部では溝4～6が互いに接して検出された。検出できた規模は溝1が長さ2.7 m、幅50cm、溝2が長さ8 m、幅60cm、溝3が長さ7.5 m、幅60 cmである。土層の観察ではこれらの前後関係を確認することができなかった。また、北部の溝2～3と南部の溝4～6の前後関係も不明であるが、溝2はいずれの溝より新しいことは明らかであった。

いずれの溝も互いに平行して作られていることから、これらの溝に区画された加工段が無秩序に作られたとは考えにくい。その配置からみると、これらは連続した建て替えであったと考えたい。それぞれの前後関係ははっきりしないが、前述したように土層からは溝1がもっとも新しく作られたことが確認されている。一方平面配置をみると、溝1～3はあたかも東西方向



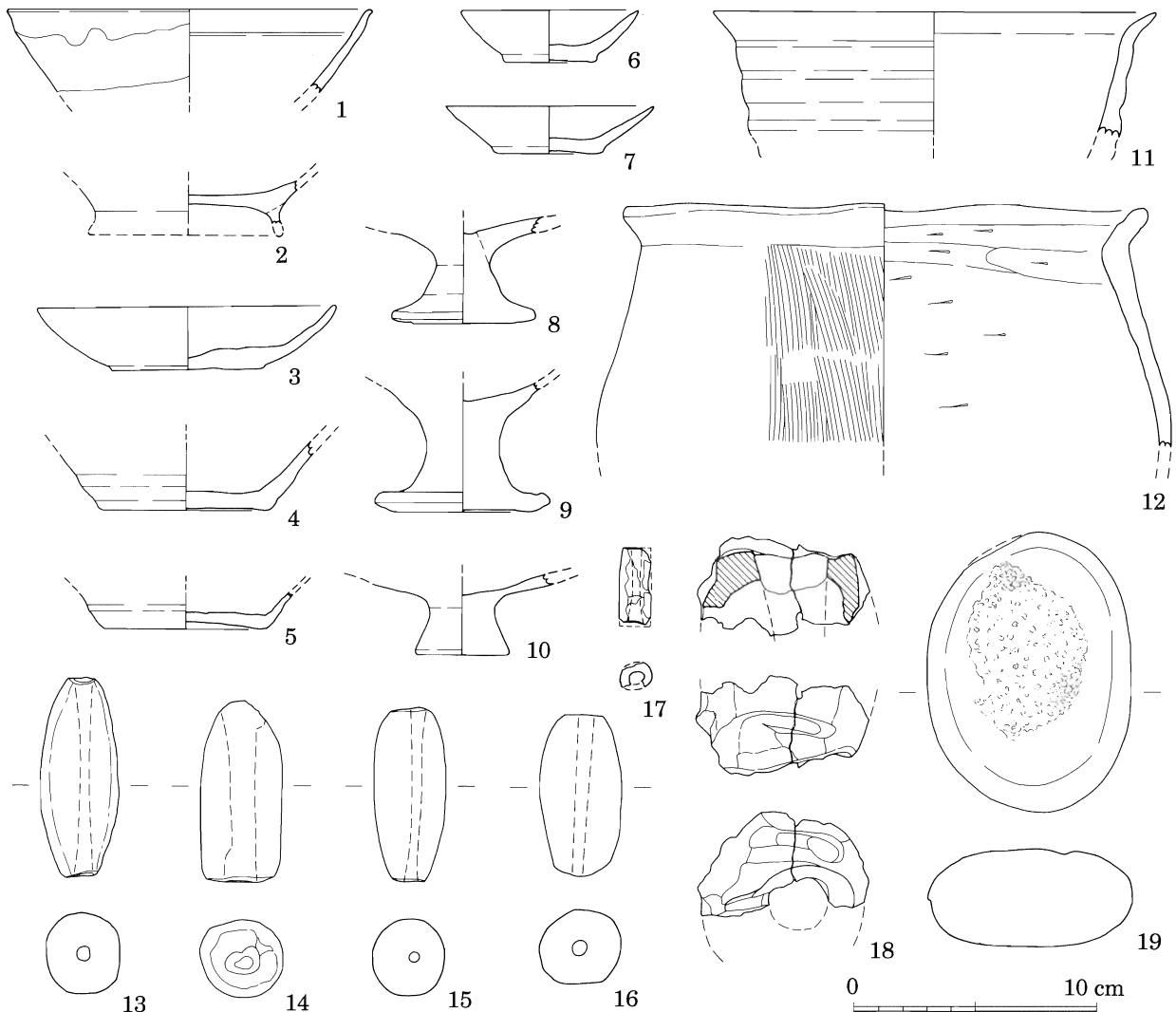
第22図 2区 SB 02断面図 1:80

に平行移動したように見え、南部の溝4～6に比べより近似しているといえる。このことと土層観察の結果とを併せて考えると、形態上似ている溝1～3は溝3→溝2→溝1と連続して作られたことが想像される。

溝1～3が連続して作られたことが正しいとすれば、溝1がどの溝よりも新しいことから、南部の溝4～6は溝1～3より前に作られたことになる。また、溝4～6が溝1～3同様に低い位置から高い方に向かって建て替えているとすれば、溝6→溝5→溝4の順で作られた蓋然性がある。

出土遺物（第23図 図版21・22） SB 02からは土師器、須恵器、白磁、土錘、轆羽口、鉄器、鉄滓、磨石などが出土している。いずれも細片で、図示できるのはわずかである。遺物は住居跡内全面から出土したが、出土状態にはまともはみられず原位置を保つものはなかった。

遺物には古墳時代や奈良時代の須恵器、土師器もあるが、これらは混入品と思われ、SB 02



第23図 2区 SB 02出土遺物 1:3

は第23図1、2の白磁や同図2～12の土師器の時期と考えられる。1は白磁碗V類、2は高台付きの土師器坏、4～7は無高台の土師器坏、8～10は土師器台付皿、12は土師器甕、11は土師器鉢である。これらは時期的には12世紀ごろと思われる。

13～16は土錘である。出土量は多くないが、『出雲国風土記』に記載のある「津間抜池」か、乃白川での漁労に関係するものであろうか。

18は鞆羽口である。溶解してガラス質になった部分が比較的多くみられる。鍛冶遺構は検出できなかったが、鞆羽口と鉄滓の出土は、ここで鍛錬鍛冶が行われていた可能性を示すものである。鉄滓等は図版22に示した。

SB 02-1 (第20図) 梁行き1間(約2.6 m)、桁行き3間(約7.8 m)のみ確認できた。これより東側は流失したものである。柱間はいずれも2.6 m 前後で配置されている。全体の位置から、これは溝4に伴う掘立柱建物跡と考えられる。なお、溝5、6に伴う建物は組むことができなかった。

SB 02-2・3・4 (第21図) SB 02-2は梁行き2間(約4 m)×桁行き3間(約6 m)、SB 02-3は梁行き3間(約4.4 m)×桁行き3間(約6.2 m)、SB 02-4は梁行き1間(約2 m)以上×桁行き3間(約6.2 m)の掘立柱建物として復元した。いずれも主軸は同様な方向を示しており、溝1～3の方向とも一致している。平面的な配置からすると、SB 02-2が溝1に、SB 02-3、4が溝2に伴うと思われる。溝3に伴う掘立柱建物は組むことができなかった。

SX 01・02・03 (第24～27図、図版18～20) 丘陵頂部から斜面に地形が変換する地点に3基が並んでいた。いずれも平面形は細長く不整形な長だ円形で、底面は舟底形を呈している。検出当初は竪穴住居跡か天井が陥没した横穴墓を予想したが、平面形が不整形のままであることやSX 02から五輪塔の火輪が出土したことから中世の遺構であることが判明した。

これらの規模はSX 01が全長約11.1 m、幅約4.5 m、深さ約1.3 m、SX 02が全長約11.1 m、幅約4.8 m、深さ約1.3 m、SX 03が全長約7.8 m、幅約4.8 m、深さ約1.2 mである。いずれも内部の土は全体にレンズ状に堆積しており、上部に黒色系または茶色系の土、下部に灰色系ま

2区 SB 02-1計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (2.6 m)			3間 (7.6 m)		
主 軸		N-28° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	69×66	46×47	48×42	29×31	27×24	
	深 さ	30	25	16	25	5	
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径						
	深 さ						
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.5	2.5	2.6	2.6		
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1

2区 SB 02-2計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (4.0 m)			3間 (6.0 m)		
主 軸		N-11° - E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	76×(44+α)	26×28	64×62	64×60	26×34	28×21
	深 さ	38	12	31	52	11	20
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	27×29	28×26	/	/	/	/
	深 さ	19	13	/	/	/	/
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.0	2.0	2.0	2.1		2.0
		P 7-8	P 8-1	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		2.0	4.0	/	/	/	/

2区 SB 02-3計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		3間 (4.2 m)			3間 (6.2 m)		
主 軸		N-14° - E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	48×42	44×30	50×31	96×52	72×(52+α)	18×16
	深 さ	35	18	16	39	19	12
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	46×53	32×28	32×54	/	/	/
	深 さ	30	23	19	/	/	/
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.1	2.2	1.9	1.8		2.3
		P 7-8	P 8-9	P 9-1	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		1.8	1.2	1.2	/	/	/

2区 SB 02-4計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		2間以上 (2.0 m)			3間 (5.8 m)		
主 軸		N-12° - E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	54×70	56×44	57×48	72×(52+α)	52×74	/
	深 さ	56	23	14	19	20	/
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	/	/	/	/	/	/
	深 さ	/	/	/	/	/	/
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-1	P 6-7
		2.0	2.0	1.8	/	2.0	/
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		/	/	/	/	/	/

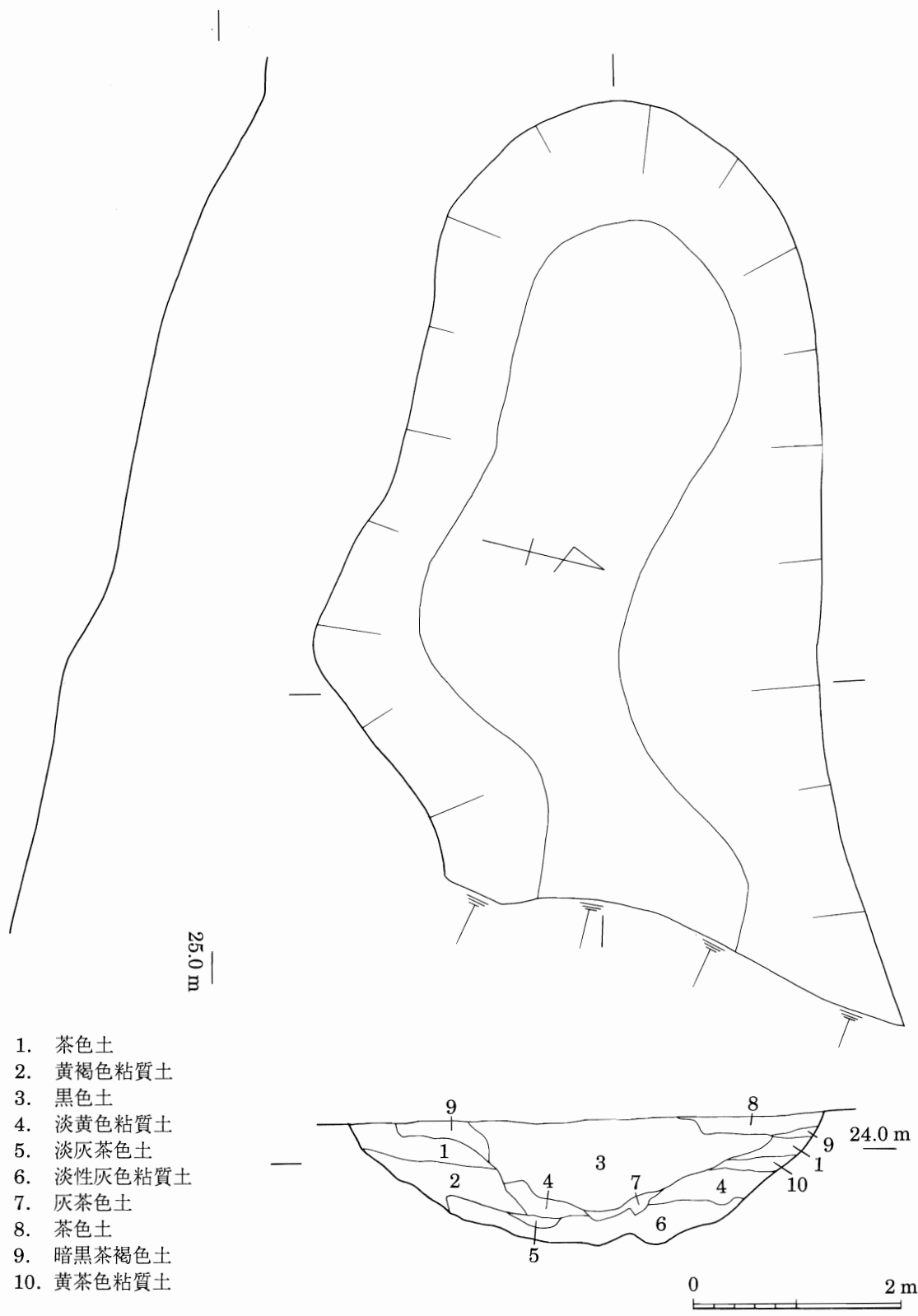
2区 SB 02出土土器一覧表

挿図 番号	図版 ページ	器種	法量 (cm)	形 態	文 様	調 整 其 他	時 期	備 考
第23図 -1	図版21	白磁碗	口径15.2	内面に段		下部無釉	白磁碗 V類?	
-2	図版22	土師器 坏	底径7.8 + α	底部に高台		不明		
-3	同上	土師器 坏	口径12.4 底径6.4 高2.7	口縁内湾		糸切?		
-4	同上	土師器 坏	底径6.8	平底。口縁直線的 外傾		回転糸切		内面黒色
-5	同上	土師器 坏	底径6.8	平径。口縁大きく外 反?		回転糸切		
-6		土師器 坏	口径7.4 底径3.8 高2.2	口縁わずかに内湾		回転糸切?		
-7		土師器 坏	口径8.7 底径4.6 高2	平底。口縁大きく外 傾		回転糸切		
-8	図版22	土師器 台付皿	底径6 脚高3.5			回転糸切。皿内面に 接合痕		
-9	同上	土師器 台付皿	底径7.2 脚高4			不明		
-10	同上	土師器 台付皿	底径4 脚高2	皿部大きく開く。脚部 低い。		回転糸切?		
-11	図版21	土師器 鉢	口径18.6	口縁短く外傾		胴部凹線様に凸凹著 しい		
-12	同上	土師器 甕	口径21.8	口縁短く外傾。胴部 下半張る。		胴部外面ハケ目。 内面口縁下半以下ケズリ		
-13	同上	土錘	長8.35 中央径3.3 重84.49g	紡錘形		凸凹著しい		土師質
-14	同上	土錘	長7.6 中央径3.4 重86.97g	紡錘形		下部の孔、2~3重 複。		土師質
-15	同上	土錘	長7.3 中央径3 重68.56g	紡錘形		手捏ね、凸凹著しい		土師質
-16	同上	土錘	長6.7 中央径3.4 重69.83g	紡錘形		手捏ね、凸凹著しい		土師質
-17	同上	管玉	長3.2 径1.4 重	やや大形		両面穿孔		緑色凝灰岩? 淡緑色。軟質
-18	同上	鞆羽口	長3.4 径7 孔径2.5			内面、破面はガラス 質		
-19	同上	磨石	長11.7 幅8.6 重582.33g			全面非常に滑らか。 一面の中央に打痕		全面に火を受けた 痕跡

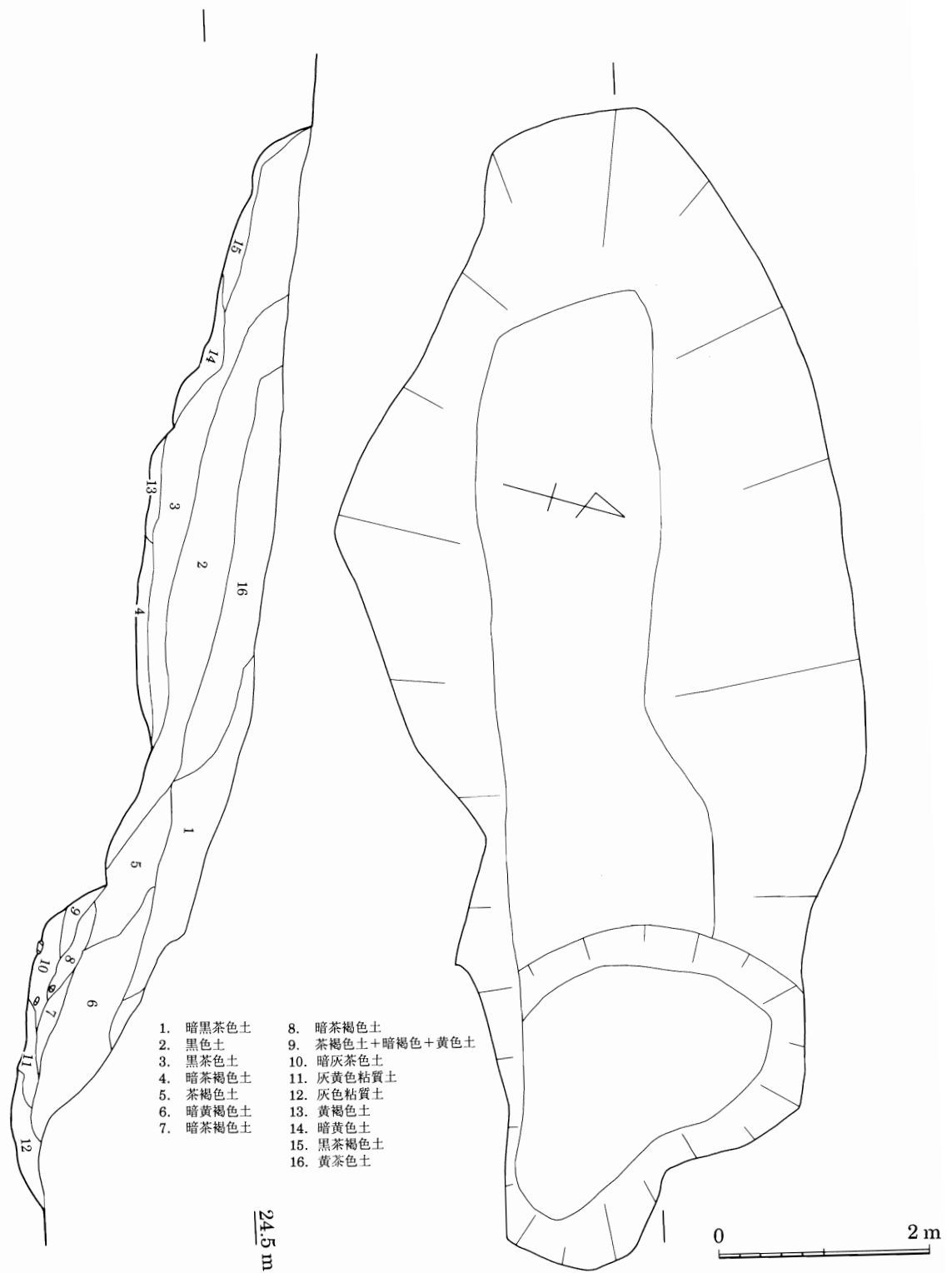
たは青灰色系のグライ化した土がみられた。

SX 01、03は素掘りであったが、SX 02の東部には大小の石が無作為に積まれた状態で検出された(図版18)。これらの石を除去すると約60cmの間隔を置いて、石列が2列組まれていた(第27図、図版19)。これらの石列は内側の石列が30cmから1mの大きな石を立て掛けているのに対し、外側は人頭大の石をならべているだけであった。石列の間は地山でわずかに凹面をなしていたが水平に近い。ここより内側は急に深くなっていた。なお、SX 01の東端部もせり上がっており、石列はないものの遺構中央部が東端部より深くなるという点ではSX 02と同じ構造である。

出土遺物はSX 02から石に混じって出土した。第28図1、2はカワラケで、1の口縁部にはススが付着していることから灯明皿と思われる。3は備前焼の摺鉢の底部で内面に播目がみられる。3、4は五輪塔の火輪である。ともに軒線は湾曲するが下面は水平になるようである。両者とも白色の非常に軟質の石を利用して作られている。これは通称白来待しろきまちと呼ばれる石で、



第24図 2区 SX 03実測図 1:60



第25图 2区 SX 01实测图 1:60

現在の八束郡宍道町から玉湯町にかけて産出する石であるという。以上の遺物は16世紀頃に位置づけられ（注）、SX 02の時期もこのころと考えられる。SX 01・03からは遺物が出土していないが、それぞれが規則的に並んでいることから、SX 02と相前後する時期と考えたい。

（注） 遺物の年代は伊藤晃 上西節雄『備前 日本陶磁全集10』19 中央公論社
 間野大丞「三隅町の中世石造物」『八雲立つ風土記の丘 No.140』1996 などによる。



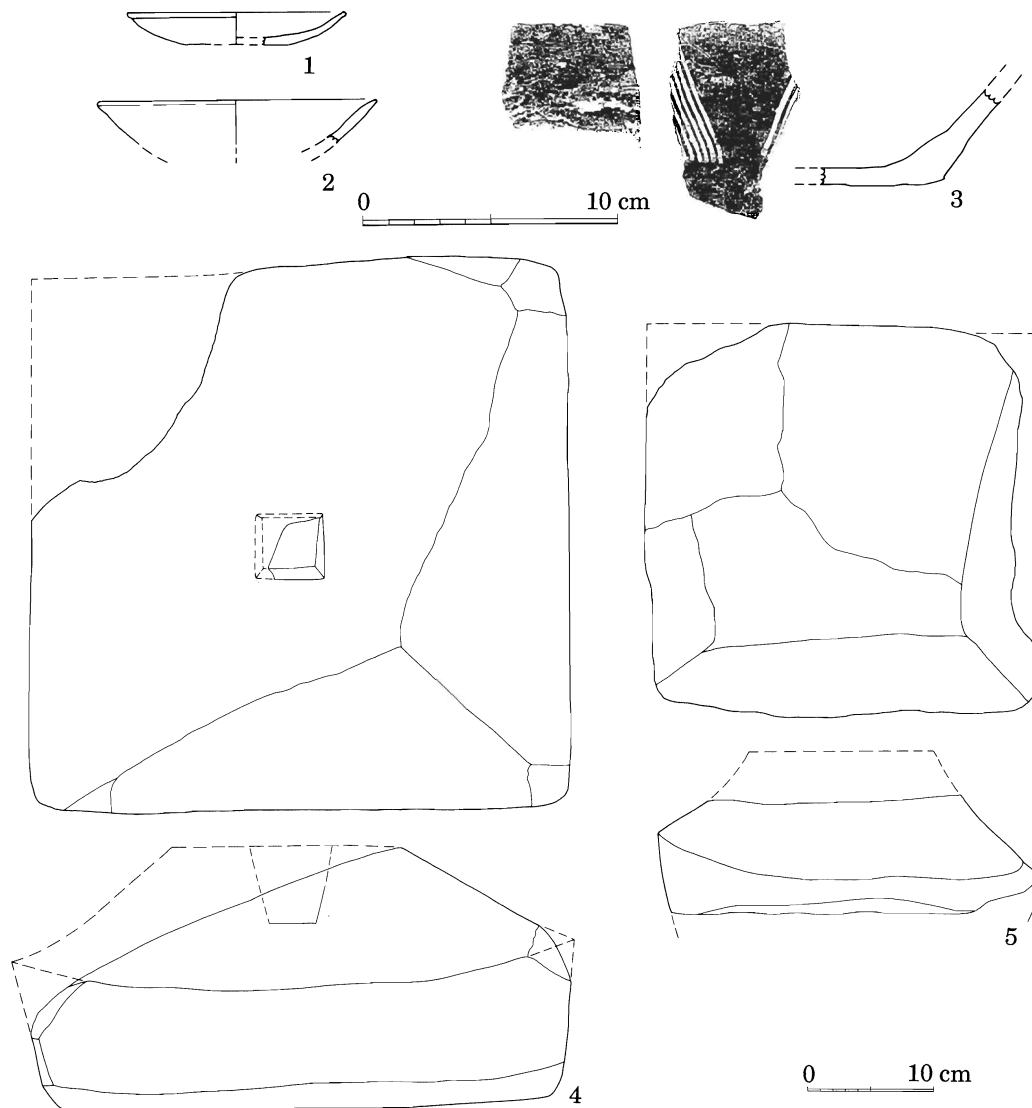
第26図 2区 SX 02実測図 1:60

2区 SX 02出土遺物一覧表

挿図 番号	図版 ページ	器 種	法 量 (cm)	形 態	文 様	調 整 其 他	時 期	備 考
第28図 -1	図 版 21	土師器 カワラケ	口径8.4 底径4 高1.3	浅い器形		回転糸切		口縁部にスス 灯明皿
-2	同上	土師器 カワラケ	口径11	口縁わずかに外反		回転ナデ?		
-3	同上	備前 摺鉢			内面にクシ目	ナデ	16世紀?	内面滑らか (使用痕)
-4		五輪塔 火輪	43.1× 44.6 厚20.9	軒反線と下面は非 平行		上 面 に5.2×4.5cm以 上の方形の穴	16世紀?	白来待石
-5		五輪塔 火輪	31.6×31.2 厚9cm以 上				16世紀?	白来待石 欠損著しい

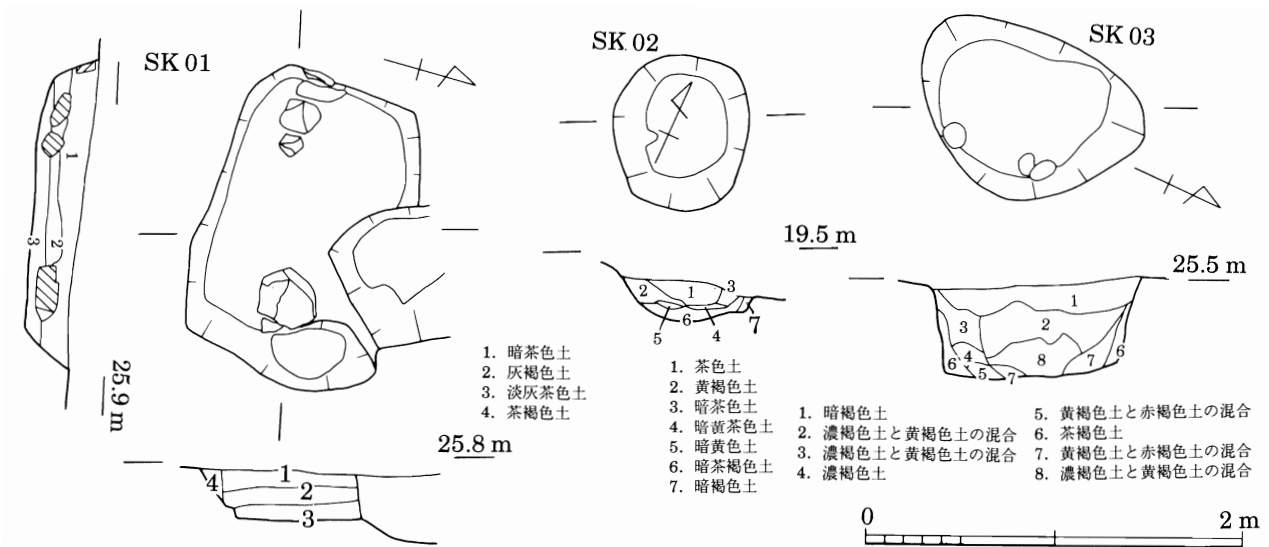


第27図 2区 SX 02集石状況 1:30



第28図 2区 SX 02出土遺物 (1~3は1:3, 4~5は1:6)

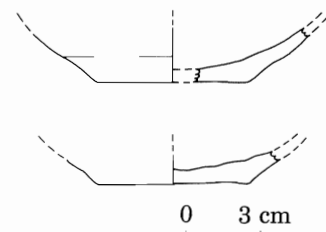
SK 01 (第29図 図版20) 長さ1.6 m、幅1~1.1 m、深さ25cmを測る、平面形長方形の土壙である。最近の土壌によって一部壊されているが、全体像は窺うことができる。主軸はほぼ東西方向で、東端部が幅1.1 m と、西端部の幅1 m よりやや広い。土壙内の土層は、2層がほぼ水平に堆積しており、第3層の上には東部に1個、西部に2個の人頭大の川原石が置かれていた。さらに西端部には石が1個立て掛けられていた。内部からはカワラケの小片が出土している。図示できたのはともに底径6cmの底部片である (第30図)。口縁部は内湾して大きく広がるようである。底部は糸切りと思われるが、残存状態が悪くはっきりしない。遺物から、SK 01は12~13世紀の土壙墓と思われる。



第29図 2区土壌実測図 1:40

SK 02 (第29図) 平面形は円形で底面が浅い摺鉢状を呈する。内部には小さな炭化物や焼土粒が詰まっていた。いわゆる小炭窯と呼ばれる遺構であろう。径0.7~0.8 m、深さ0.2 mの規模である。SB 02の溝5の堆積土を掘り込んでいることから、SB 02より新しい時期であるが、詳細は不明である。

SK 03 (第29図) 1.2 m×0.9 mの不整円形の土壌。深さは約50cmと比較的深い。河原石が3個出土している。時期、



第30図 2区 SK 01出土土器

3、小 結

2区では弥生時代の竪穴住居跡、古代・中世の掘立柱建物跡、中世の土壌墓などが検出された。このうち SB 01とした掘立柱建物跡は平面形が方形の柱穴をもち、通常の平地住居とは考えにくい。ここからは遺物が出土していないため時期を決定することはできないが柱穴のプランなどから古代の建物跡である可能性が高い。方形プランの柱穴は官衙など公的な建物に多くみられ、この建物の性格を示唆しているが、『出雲国風土記』などにはこの付近に公的な施設の記載はみられない。もしこれが公的な建物であるとすれば、『出雲国風土記』勧造以後のものとなろうか。ただし豪族の私的な施設の可能性もあるので、性格や時期を断定するには一層の検討が必要である。同様の建物跡は他の地区でも検出されているので、後章で併せて考えて行きたい。

SB 02は12～13世紀の加工段をもつ掘立柱建物跡であった。少なくとも6回の建て替えが行われているが、すべて重複しており、連続的に建て替えが行われたことが窺える。とすれば、一時期にここに何棟も建っていたのではなく、1棟だけが建っていた可能性が高い。これと同時期の遺構は3 A 区 SB 02、3 B 区 SB 09、4 B 区 SB 09などがあり、これらが有機的な関係をもって村落を形成していたと思われる。

また、SB 02からは鞆羽口や鉄滓が出土し、ここで鍛錬鍛冶が行われていたことが窺える。ただし鉄滓の出土量はコンテナに2分の1程度、4 A・B 区、7区で出土した鉄滓を合わせてもコンテナ2箱程度であるので、この丘陵で大々的に鍛錬鍛冶を操業していたとは考えにくい。おそらく村落の中で細々と行われたくらいであろう。これはあたかも「村の鍛冶屋さん」をイメージさせる。中世では村落のなかで小規模な鍛冶屋が一画を占める、といった風景が一般的ではなかったろうか。

SX 01～03は性格がはっきりしない遺構である。これらは平面的にも規格的ではなく、底面もいびつなままである。調査時の感覚では丘陵の斜面に大きな穴を掘っただけ、という印象が強い。これについては勝部昭から、水溜め遺構の可能性ないか、と指摘があったことを紹介しておきたい。そういえばこれらが検出された地点は水脈が走っているようで、降雨時には例外なく底から水が湧いてきた。類例を調べた訳ではないが、必ずしも排除すべき意見ではなからう。

これらは16世紀頃の遺構とした。近隣の時期が近似する遺構は3 A 区の SB 01である。2つの遺構群が同時期で、SX 01～03が水溜め遺構であると仮定するなら、3 A 区 SB 01の住人がここで水汲みをする風景がイメージできる。これはまったくの想像であって根拠がない。同様な遺構の類例の増加が望まれる。

第5章 3 区

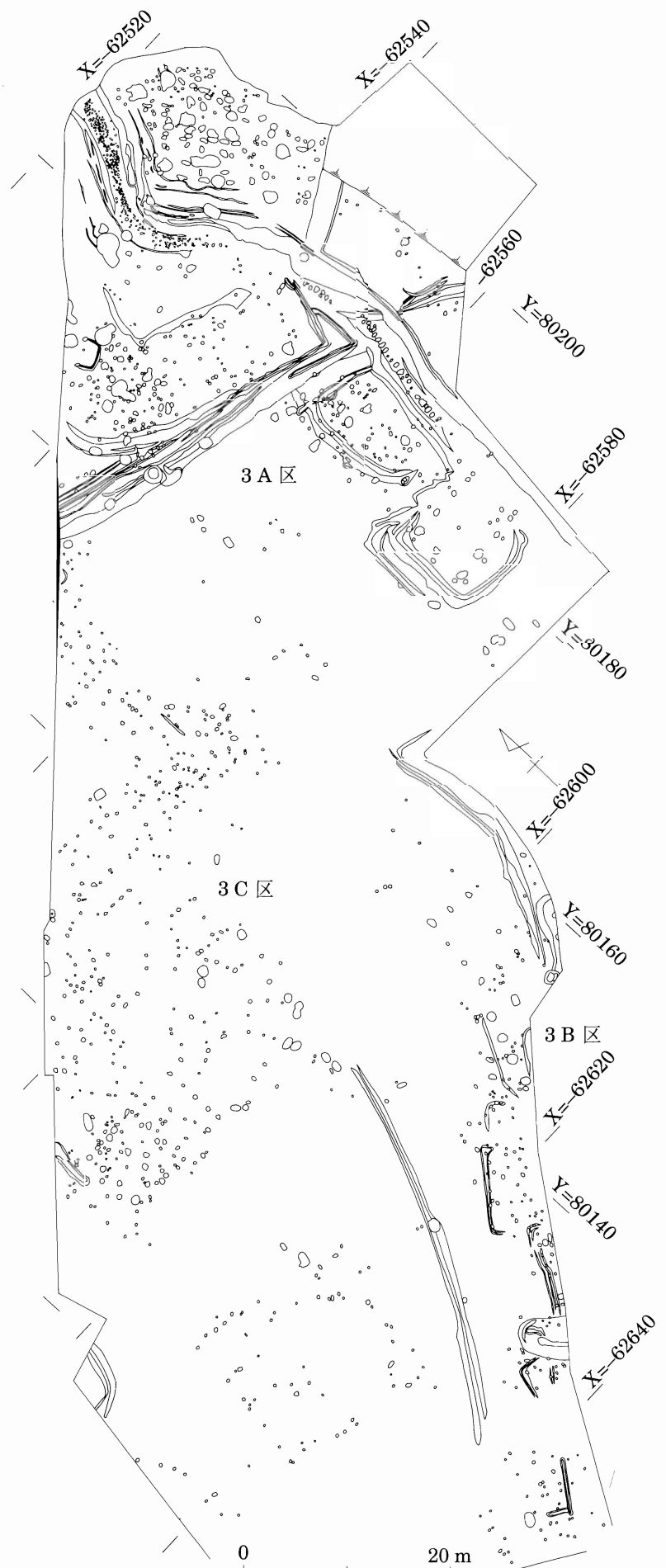
1、概 要

2区、4区と連続した地区であるが、2区に隣接した地点から、調査区を分断する市道までの間の丘陵頂部を便宜上3区とした。また西南は4区とも接するが、1994年度の調査区のみを3区とする。(図版23)

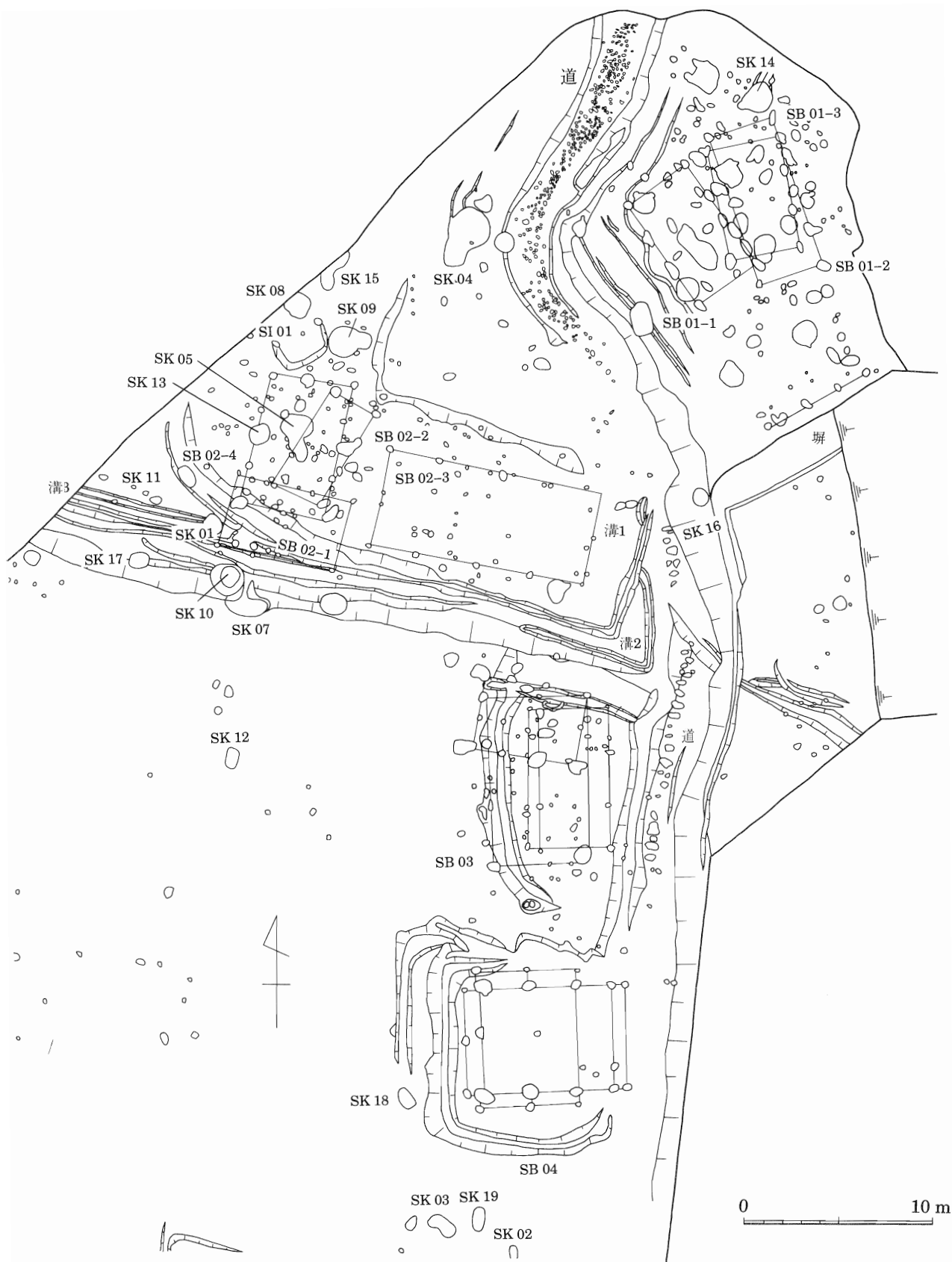
ここは調査前は畑となっており、傾斜のゆるやかな丘陵の鞍部であった。地形的に畑作を行うには絶好の場所であり、耕作によって地山がかなり掘り起こされている場所もあった。第30図で遺構配置を示したが、遺構の空白部分は畑耕作に伴う大規模な掘り起こしのため、本来はこの空白部分にも遺構が存在した可能性もある。

大部分は耕作土が約30cm堆積しているだけの土層で、耕作土の直下は地山であった。耕作によって掘り起こされた部分は上部に耕作土、下部に地山と同色の土が埋められていた。

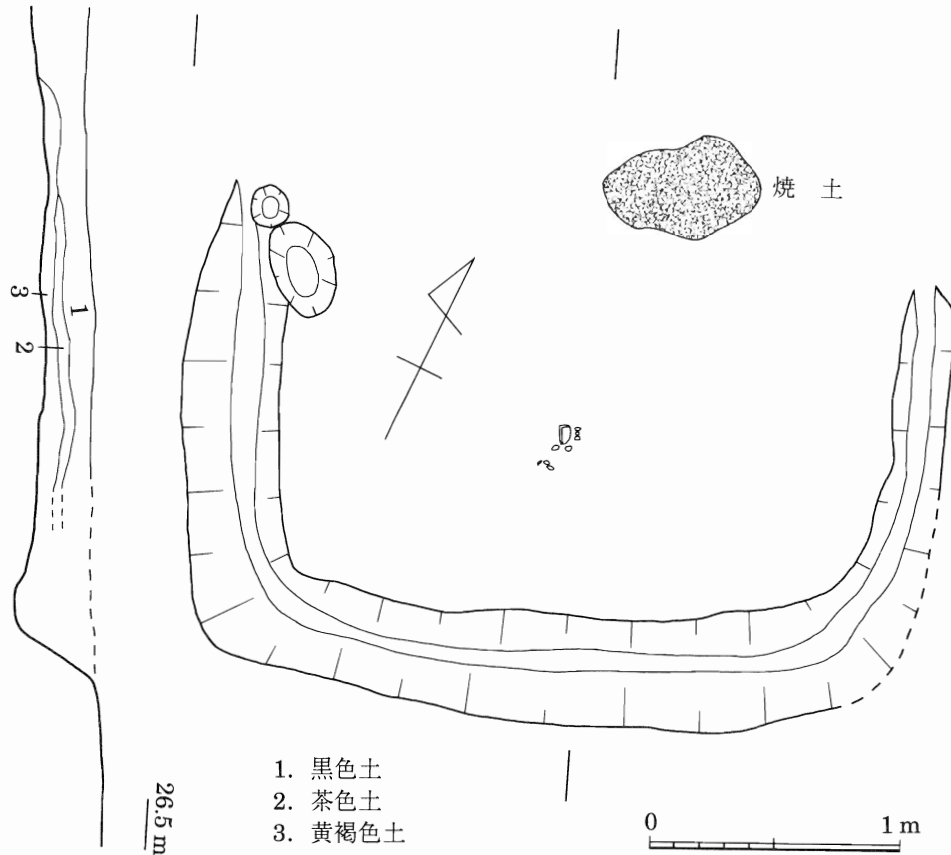
検出された遺構は、掘立柱建物跡やそれを区画する溝状遺構、土壇、道状遺構などである。柱穴と思われる径30cm程度のピットは多数検出されたが、建物として組めないものがかなりある。とくに調査区西南部寄りの中央のピット群は周囲の掘削が著しく、ここで建物を組むことはできなかった。



第30図 3区遺構配置図 1:600



第31図 3A区 遺構配置図 1:300

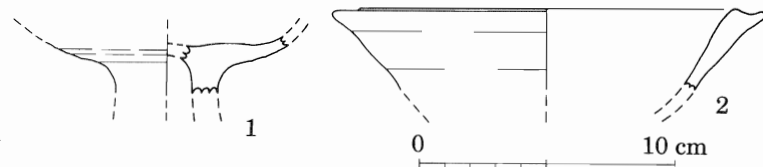


第32図 3A区 SI 01実測図 1:30

3区は便宜上遺構の分布状況により、東北部を3A区、西南部を3B区、西部を3C区とした。3C区の遺構のうち大部分は第6章で述べる4A区と連続した遺構群と考えられる。

2、3A区 (第31図 図版24) 竪穴住居跡、加工段をもつ掘立柱建物跡、土壇、道遺構などが検出された。

SI 01 (第32図 図版25) 平面形方形の竪穴住居跡で壁際には壁帯溝が巡る。南半部のみ検出されたが、これは地形が西北方向に傾斜しているため流失したものと思われる。残存部分をみると一辺約3mの規模と考えられる。北部には50×40cmほどの範囲で焼土があり、この住居跡に伴うものと考えられた。



第33図 3区 SI 01出土土器 1:3

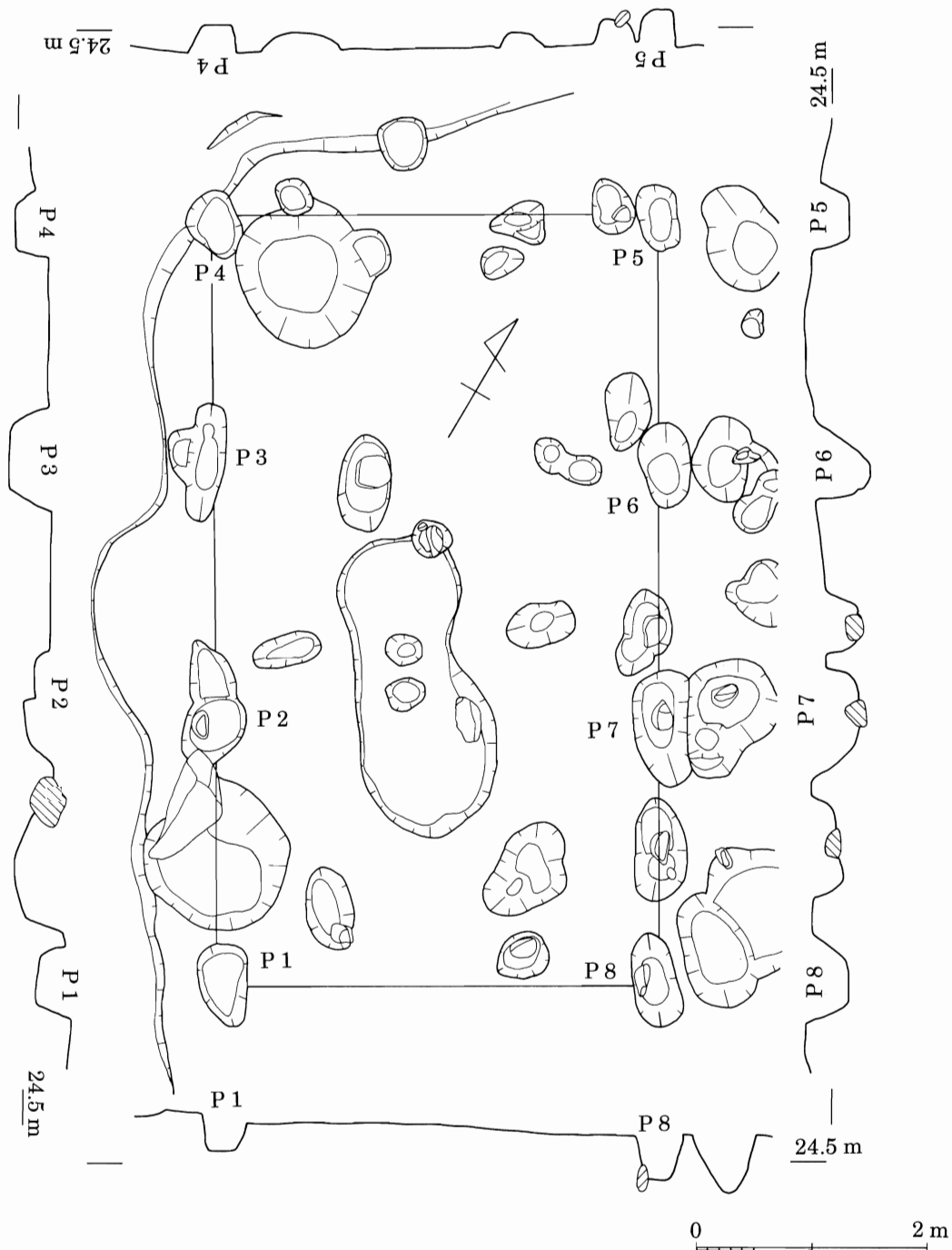
遺物はほとんど出土していない。図示できたのは2点のみであるが、第33図1の須恵器は混入と思われる。2は器種不明の土師器である。

形状から SI 01は古墳時代中期ころと思われる。

SB 01 (第34～36図 図版25～27) 調査区の東端部、標高約24.5mに位置する。地山を大きく造成して平坦面を作り、その上に掘立柱建物を建てている。造成面は南北東西とも約16.5mの約270m²の広さである。造成面には山(西)側から北側にかけて浅い溝を掘り込んでいる。

おそらく敷地の区画としての意味をもつと考えられる。この溝は「L」字状に配されるが、屈曲部は直角ではなく鈍角になっている。この形状は隣接する道遺構と同じなので、敷地造成に当たって道に規制されたように思われる。

ここでは3棟の掘立柱建物跡を組むことができた。確認できた3棟の建物跡はいずれも重複しており、1間×3間が2棟（SB 01-1・2）、1間×4間が1棟（SB 01-3）である。SB 01-2・3

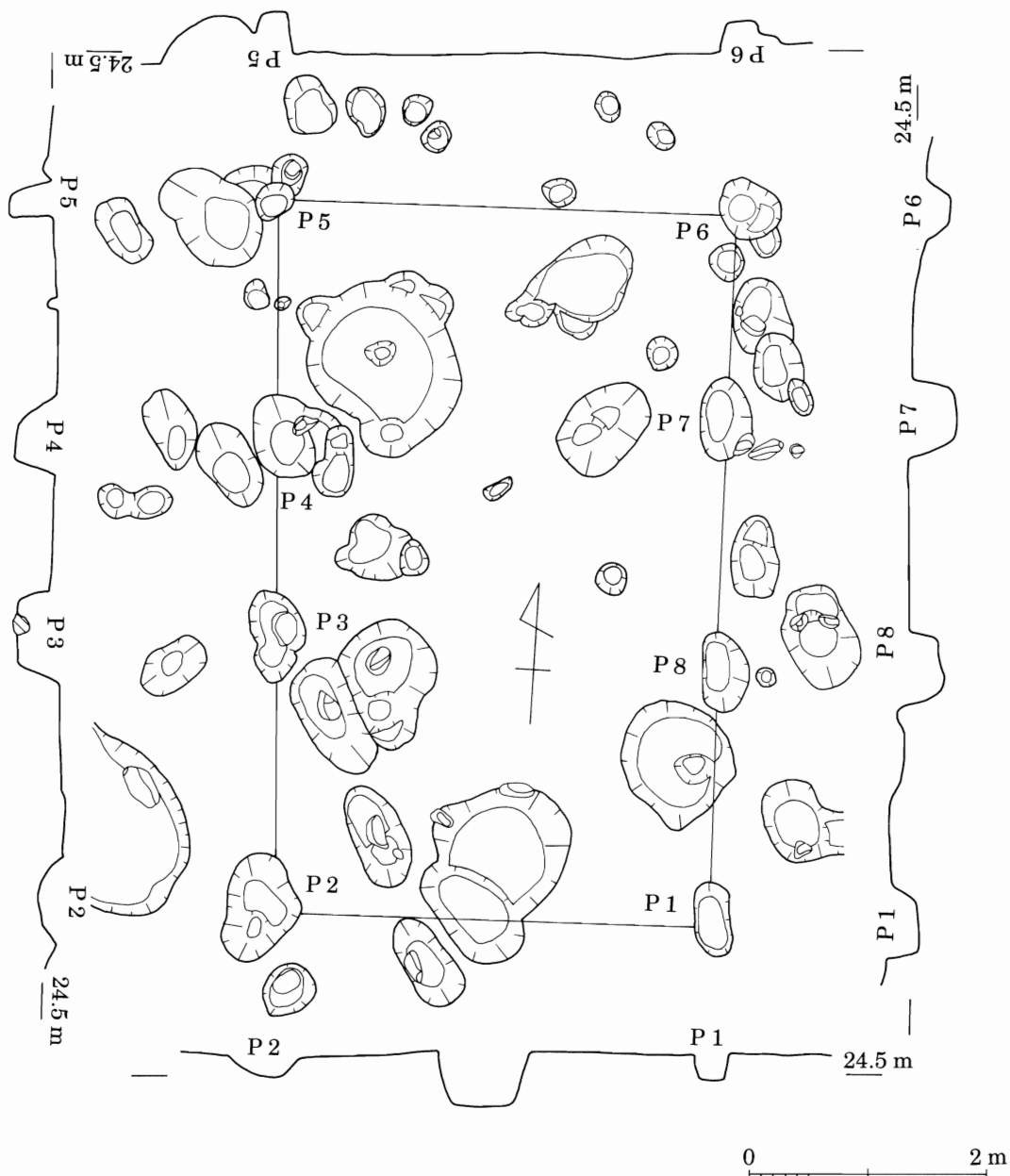


第34図 3A区 SB 01-1実測図 1:60

(第35・36図)は主軸の方向が比較的似ているが、SB 01-1(第34図)はこの2棟に比べ西向き
 の主軸である。SB 01-1は敷地を区画する溝と主軸がほぼ平行するので、造成当初の建物で
 ある可能性がある。

これらの建物跡は北部に偏在している。建物として組めなかったピットもやはり北に集中し
 ていることから、主要な建物は北にあったのかもしれない。

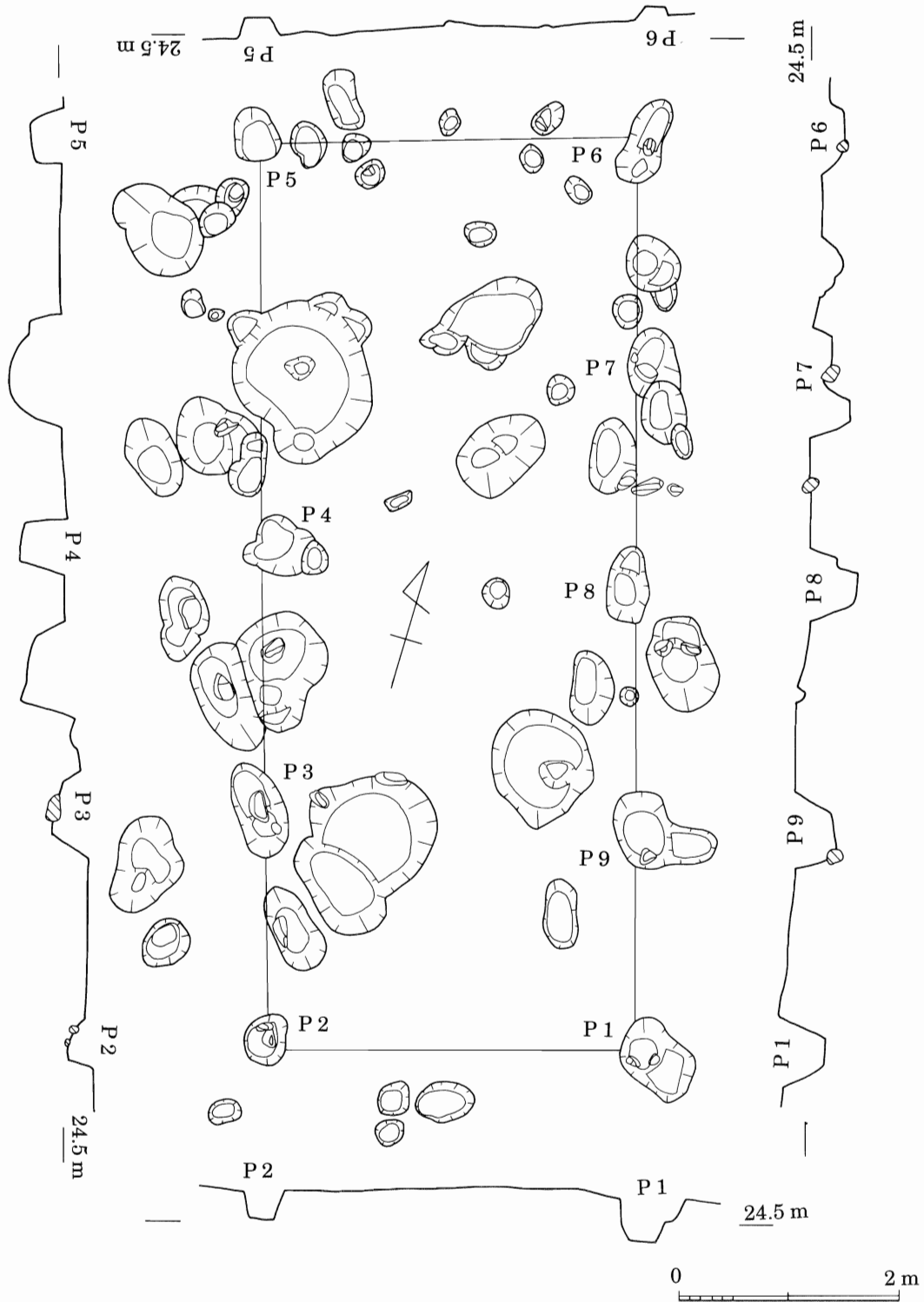
出土遺物は中国製青磁(第40図1 図版2・41)、中国製青花(同図2)、肥前系陶器(同図3~
 7 図版41)、備前焼き壺(同図8)、須恵器などが出土している。このうち中国製青磁、青花
 は上方のSB 02から、須恵器は古代の遺構からの混入と思われる。SB 01に伴うと思われるも



第35図 3A区 SB 01-2実測図 1:60

のは肥前系陶器で、17世紀頃と思われる。

SB 02 (第37~38図 図版25・26) SB 01の西南方、標高26.5 m に位置している。地山を大きく造成して平坦面を作り、その上に掘立柱建物を建てている。造成面は南北約9 m、東西約33 m の約300 m²の広さである。掘削はかなりの土量におよんだらしく、造成によってで



第36図 3A区 SB 01-3実測図 1:60

3 A 区 SB 01-1計測表

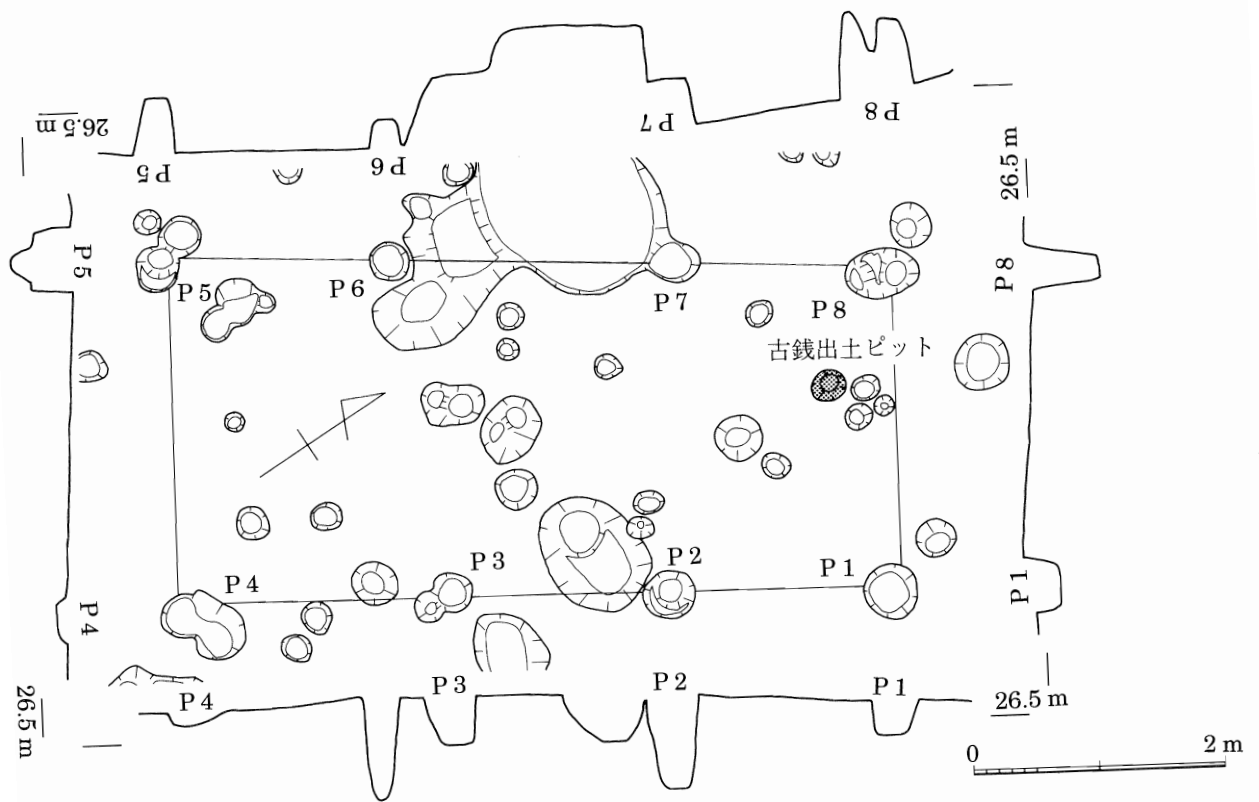
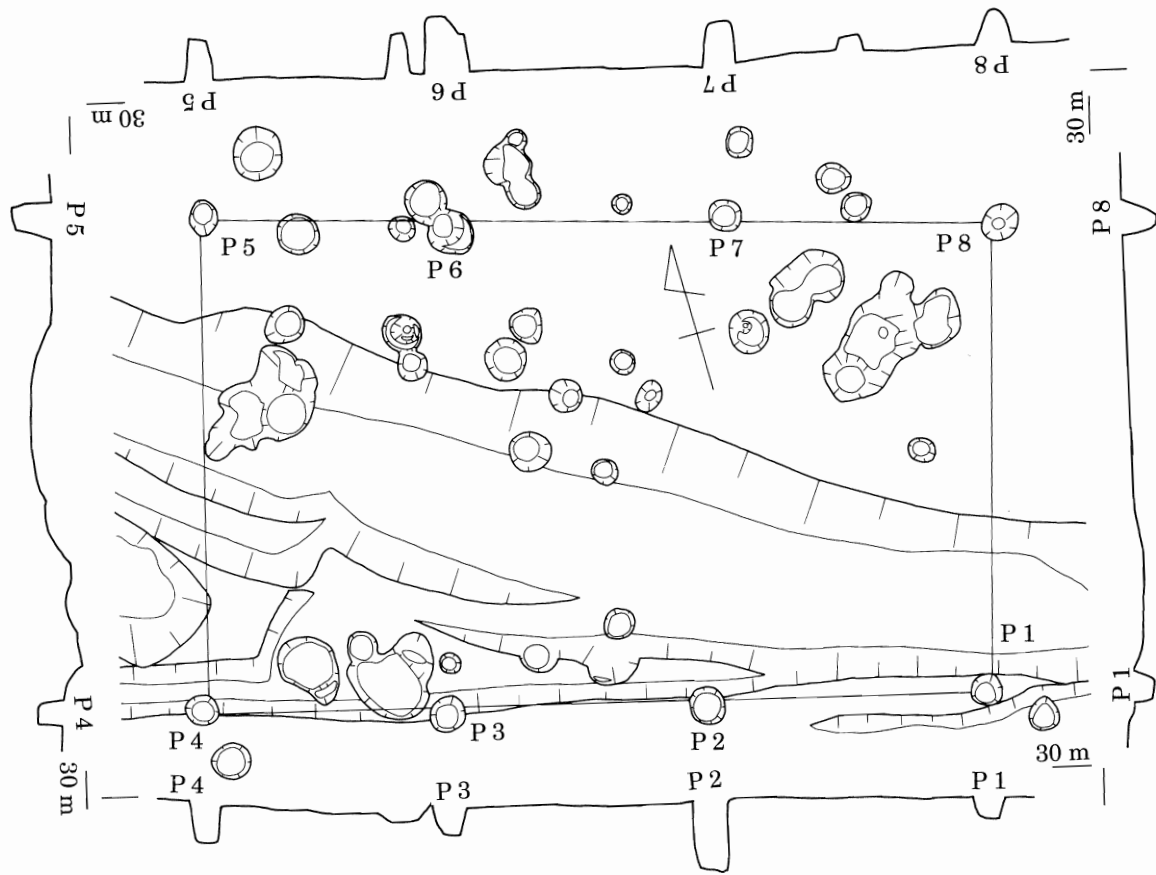
規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (3.9 m)			3間 (6.7 m)		
主 軸		N-40° - E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	74×44	108×55	102×51	60×49	59×39	75×47
	深 さ	29	24	37	28	32	48
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	104×53	83×45				
	深 さ	56	54				
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.3	2.2	2.2	3.9	2.2	2.2
		P 7-8	P 8-1	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		2.3	3.9				

3 A 区 SB 01-2計測表

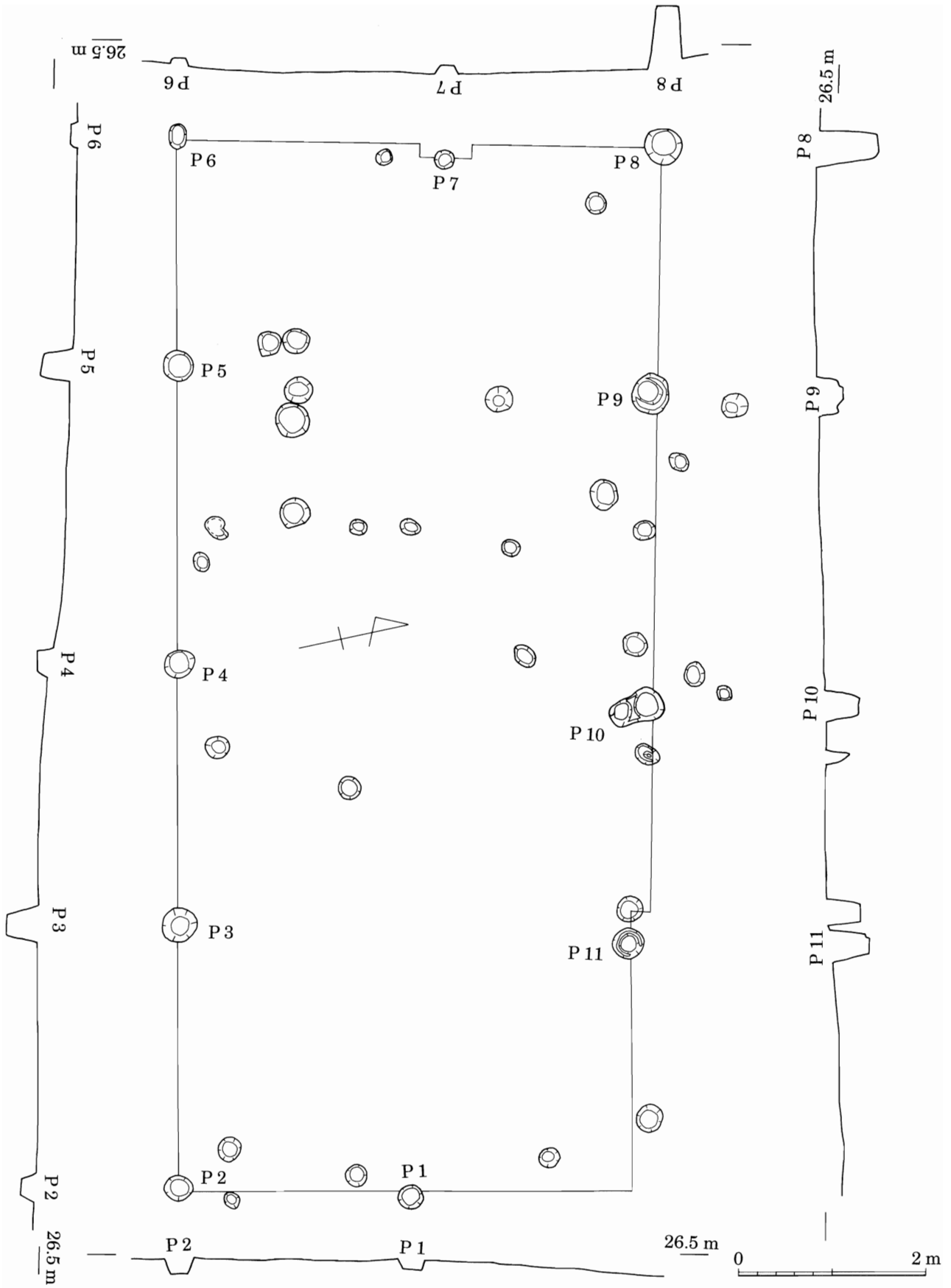
規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (3.5 m)			4間 (8.4 m)		
主 軸		N-17° - E'					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	69×80	41×46	54×87	66×56	43×49	81×40
	深 さ	40	26	34	43	30	19
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	49×63	39×69	48×69			
	深 さ	18	41	34			
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		3.5	2.1	2.2	3.8	3.6	2.1
		P 7-8	P 8-1	P 9-1	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		2.1	2.1	2.0			

3 A 区 SB 01-3計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (3.9 m)			3間 (6.0 m)		
主 軸		N-2° - E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	33×63	66×90	48×78	70×53	32×33	51×53
	深 さ	21	18	28	34	36	19
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	43×69	40×68				
	深 さ	40	41				
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		3.6	2.2	1.8	2.0	3.9	1.8
		P 7-8	P 8-1	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		2.0	2.2				



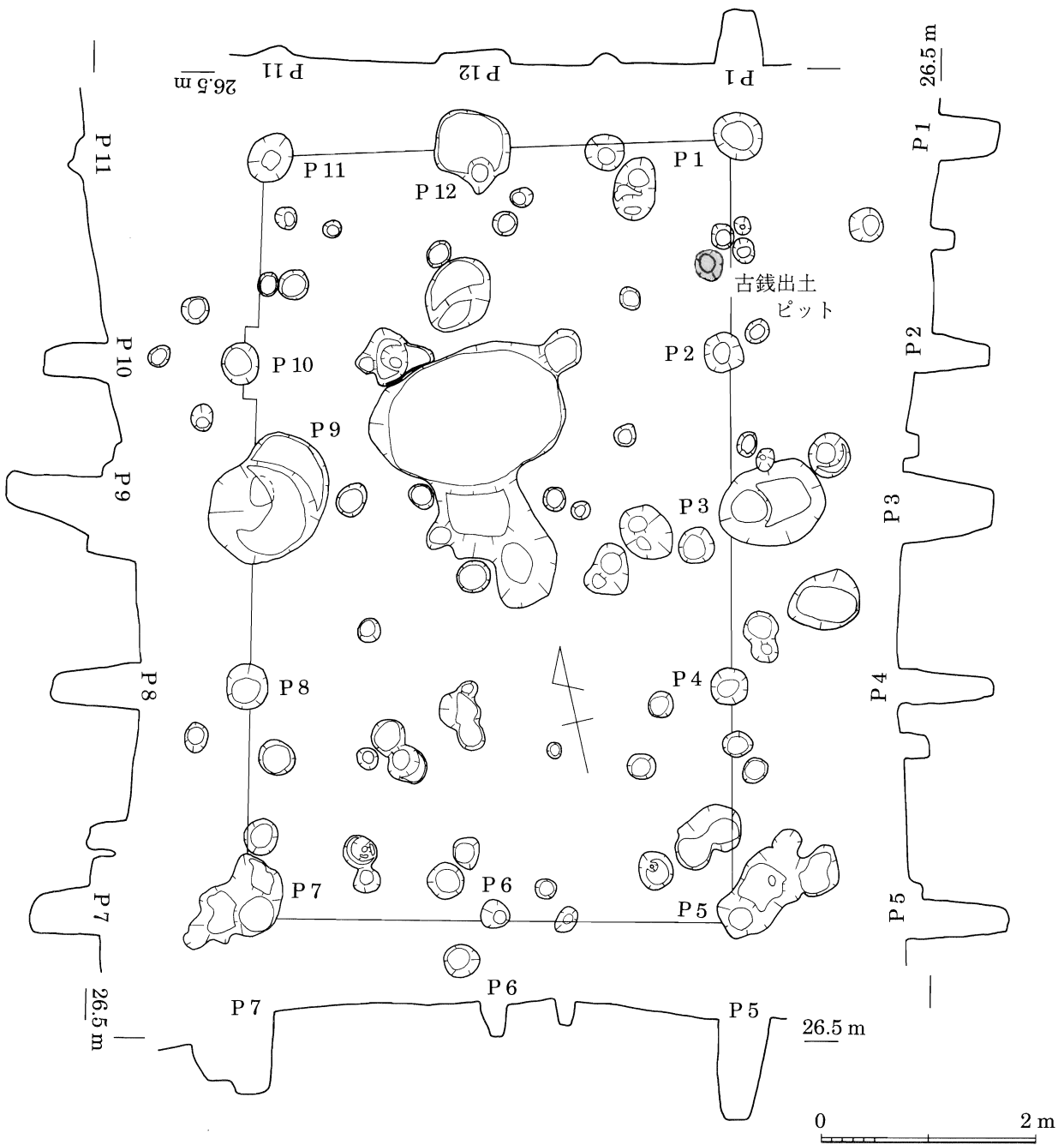
第37図 3A区 SB 02-1(上), SB 02-2(下)実測図 1:60



第38图 3A区 SB 02-3实测图 1:60

きた段差は最大で約75cmある。造成面には山（南）側と東側に溝を掘り込んで、敷地の区画としている。溝は4条以上確認されたが、このうち溝3は溝1または2の一部かもしれない。溝はほぼ東西方向に等高線に平行するように掘られ、東端で直角（溝1）ないしは鋭角（溝2）に屈曲し北に伸びる。溝4は西部でゆるく弧状を呈し他の溝と違う様相を示す。溝3は西端部が調査区外に伸びているようである。

ここで組むことができた掘立柱建物跡は計4棟である（第37～38図）。1間×3間が2棟（SB 02-1、2）、2間×4間が2棟（SB 02-3、4）で、このうち SB 02-1、2、3は重複している。建



第39図 3A区 SB 02-4実測図 1:60

物の方向は SB 02-1、3の主軸が溝1～3にはほぼ平行し、SB 02-3は直交して建てられている。それに対し SB 02-2は約45度東に傾いており、他の掘立柱建物跡と様相が違う。建物の規模は SB 02-3が梁行き2間（5.16 m）、桁行きが4間（11.4 m）と、他の建物に比べかなり大型であるのが特徴である。

これらの平面的な配置をみると、SB 02-2は他の建物跡と方向を異にしていることから、他の建物跡とは違った計画で建てられたようにみうけられる。このほかの3棟は主軸方向が一致しているので、計画的に建てられた可能性がある。SB 02-1、4は重複しているので同時併存はありえない。この2棟は建て替えが行われたと考えられ、両者が時期を異にして SB 02-3と併存していた蓋然性は高い。

SB 02-3の規模から考えて、これが主屋で、SB 02-1、4がそれに付属する建物、といった景観が想像できる。

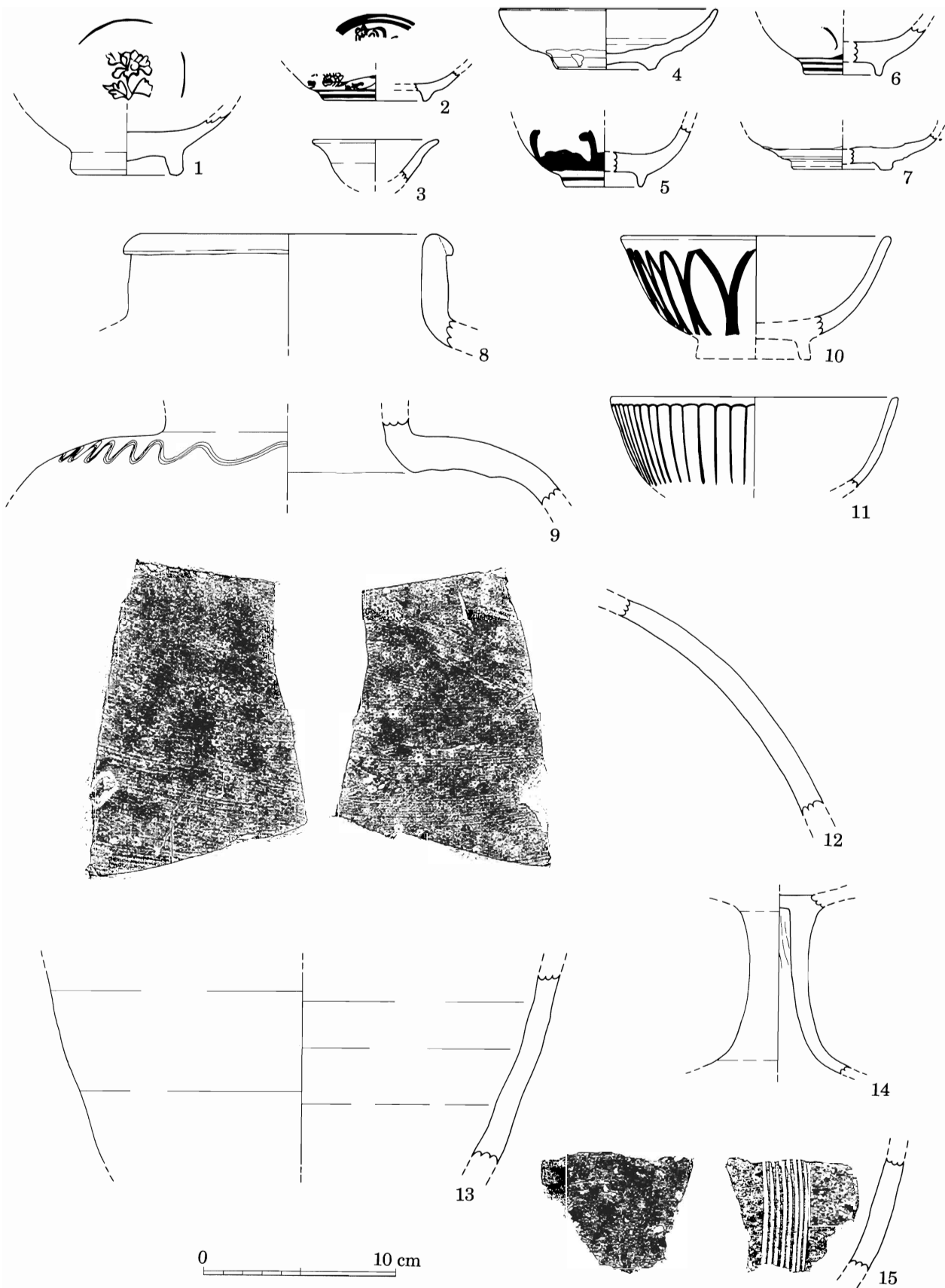
なお、SB 02の北に隣接して東西12 m、南北6.8 m ほどの加工段がある。この加工段にはピツ

3 A 区 SB 02-1計測表

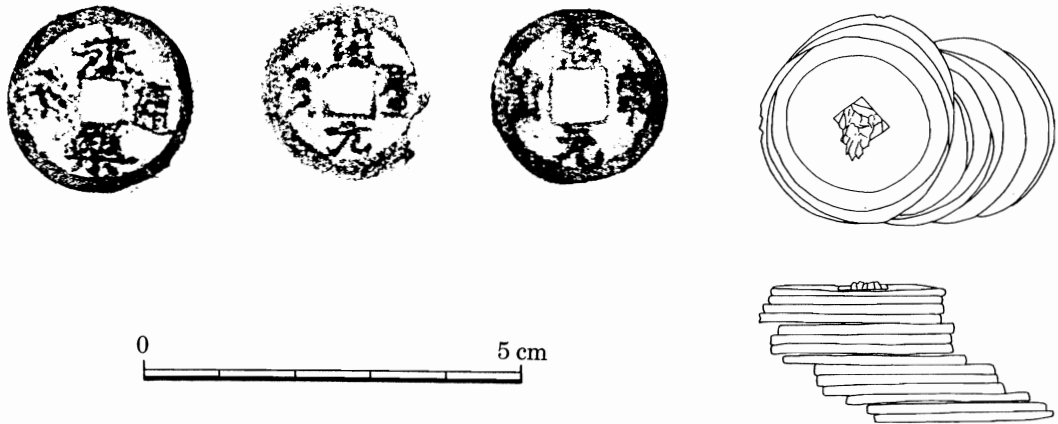
規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (3.9 m)			3間 (6.3 m)		
主 軸		N-75° - E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	24×25	26×25	25×25	27×24	23×28	37×33
	深 さ	18	56	29	34	34	45
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	27×24	30×29				
	深 さ	37	28				
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.2	2.1	2.0	3.9	2.0	2.2
		P 7-8	P 8-1	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		2.1	3.8				

3 A 区 SB 02-2計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (2.7 m)			3間 (5.7 m)		
主 軸		N-34° - W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	57×60	57×54	30×31	34×36	33×36	30×31
	深 さ	27	75	40	11	44	22
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	33×39	57×42				
	深 さ	36	52				
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.8	1.8	2.1	2.7	1.8	2.3
		P 7-8	P 8-1	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		1.8	2.5				



第40图 3A区SB 01, 02, 03, 道遺構出土遺物 1:3



第41図 3A区 SB02ピット出土古銭 1:1

3A区 SB02-3計測表

規 模		梁行き				桁行き	
		2間 (5.1 m)				4間 (11.4 m)	
主 軸		N-79° - E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	25×28	30×31	37×38	31×33	35×36	27×19
	深 さ	13	17	33	16	32	7
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	20×25	41×39	45×40	37×32	36×36	
	深 さ	5	65	30	37	42	
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.4	2.8	2.9	3.2	2.6	2.8
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		2.3	2.7	3.3	2.7		

3A区 SB02-4計測表

規 模		梁行き				桁行き	
		2間 (4.5 m)				4間 (7.2 m)	
主 軸		N-14° - W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	44×45	39×36	75×99	36×35	42×46	27×27
	深 さ	55	69	84	89	95	33
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	33×30	43×37	99×125	36×35	45×39	72×74
	深 さ	76	80	120	61	14	13
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.0	1.5	1.6	2.1	2.2	2.3
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		2.1	1.8	1.2	2.0	1.9	2.4

トがほとんどなく、建物跡は検出できなかったが、壁の方向が SB 02 とほとんど同じであることから、両者は無関係とは考えにくい。

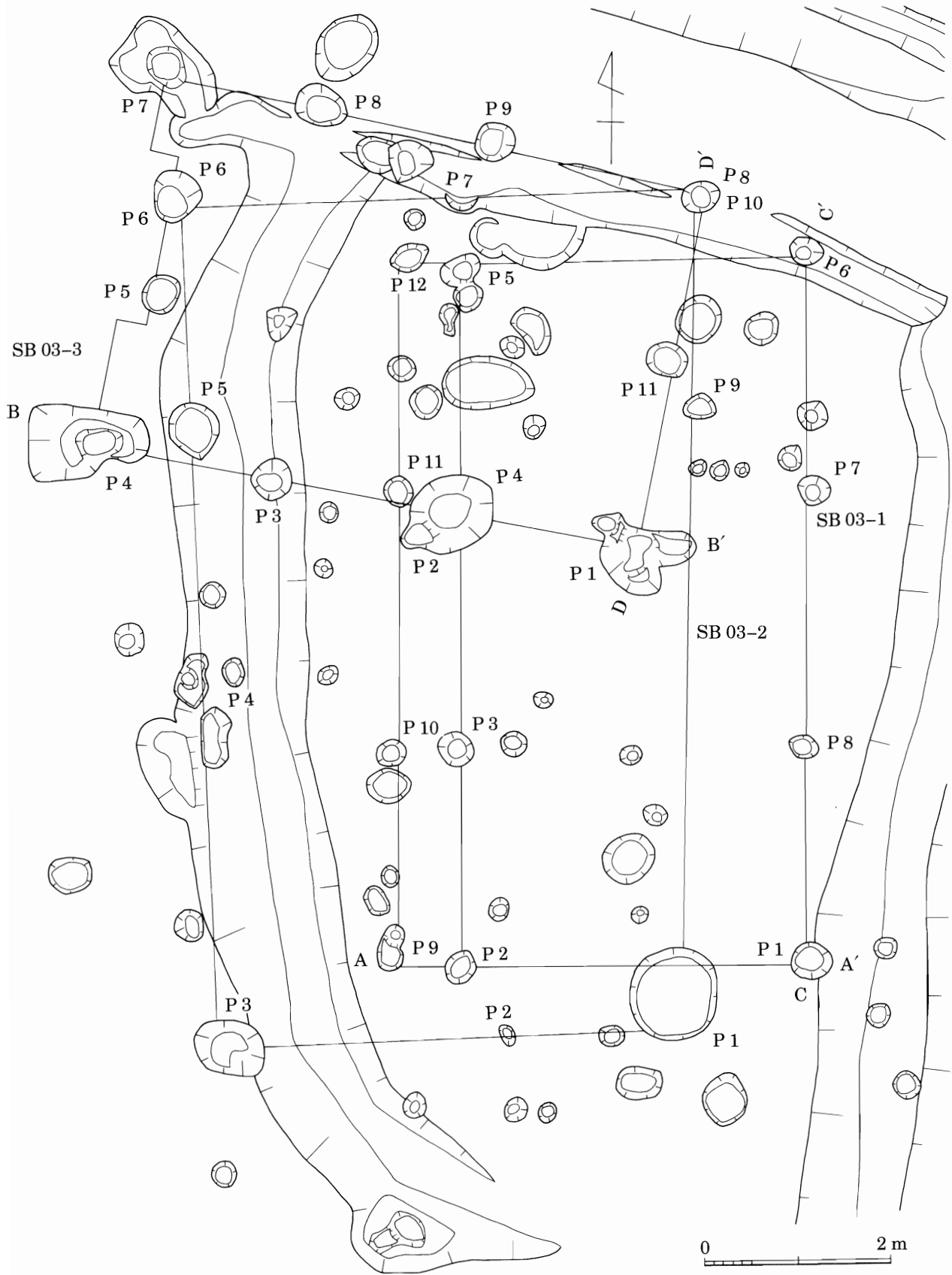
出土遺物は龍泉窯系青磁碗（第40図10、11 図版41）、備前焼壺（同図12）および摺鉢（同図15）、宋銭（第41図 図版42）などが出土している。いずれも14～15世紀頃と考えられる。宋銭は建物跡の柱穴ではないが SB 02-2、4の敷地内部の東北方に位置するピットから32枚がまとまって出土した（第42図 図版29）。このうち14枚は重なった状態で出土し、上下には紐らしい痕跡がみられることから、本来はすべて連結した緡銭状であった可能性が高い。判読できるものでは永楽通宝がもっとも新しい初鑄（1408年）である。陶磁器類はいずれも表土掘削時に出土しており SB 02に伴うという確証はないが、ここで比較的まとまってしたことや先の埋蔵銭の時期を考えると、これらの陶磁器と建物跡との関係をまったく否定することもできないように思われる。

SB 03（第42・43図 図版28） SB 02の南に接して作られている。ここでは3棟が重複していた。

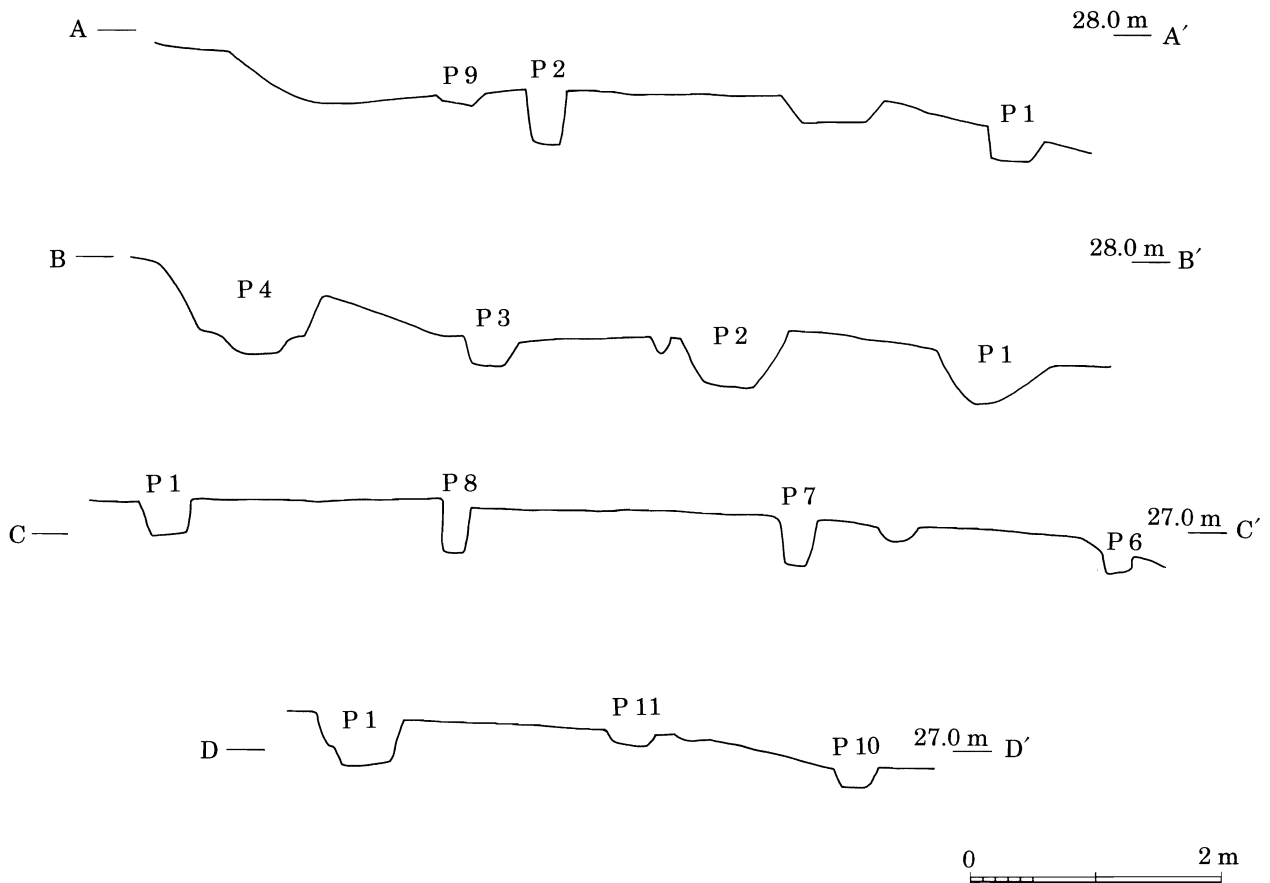
SB 03-1は南北11.7 m、東西7.5 m の規模で地山を掘削して加工段を作り、そこに掘立柱建物跡が作られている。加工段の面積は約90 m²で SB 03-1がちょうどこのなかに収まる広さで

3 A 区 SB 01、02、03 遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量 (cm)	形 態	文 様	調 整 そ の 他	時 期	備 考
第40図 -1	図 版 41	青磁碗	底径6	SB 01	内面に圈線、印花文	底部無釉、削出し高台	14 ~ 15 C'	龍泉窯系 D 類
-2	同上	青花	底径5.6	SB 01	内外面に青花文 低い高台	削出高台	15 ~ 16 C'	中国製皿 B 群
-3	同上	陶器 坏	口径6.6	SB 01	口縁大きく外反		17 ~ 18 C'	肥前系 灰白色
-4	同上	白磁 皿	口径10.6 底径5.2 高3.2	SB 01	口縁内湾	下半～底部無釉 削出し高台	17 ~ 18 C'	肥前系 灰色
-5	同上	染付 碗	底径4	SB 01 溝内	口縁内湾	削出高台	17 ~ 18 C'	肥前系
-6		染付 碗	底径4.2	SB 01 溝内		削台高台	17 ~ 18 C'	肥前系
-7	図 版 41	陶器 碗	底径5.2	SB 01 溝内	口径大きい?	外面下半～底部および 内面の一部無釉	17 ~ 18 C'	肥前系? 緑色の釉
-8	同上	陶器 壺	口径15.6	SB 01	口縁玉縁状		14 ~ 15 C'	備前 褐色
-9		陶器 壺	頸部径 13	SB 01?	肩強く張る クシ描波状文 (3条)	回転ナデ	14 ~ 15 C'	8と同一個体? 備前 褐色
-10	図 版 41	青磁 碗	口径14.2	SB 02	片切彫の蓮弁		14 ~ 15 C'	龍泉窯系 B-III類
-11	同上	青磁 碗	口径15.1	SB 02?	線描き蓮弁文		15 ~ 16 C'	龍泉窯系 B-IV類
-12	同上	陶器 壺		SB 02		ナデ	14 ~ 15 C'?	備前 褐色
-13	同上	陶器 壺?	最大径 17.2	SB 02		回転ナデ		瓦質 赤褐色
-14		須恵 高坏	脚上端 径4	SB 01	高い脚	内面絞目	奈良～ 平安	混入
-15		陶器 摺鉢		SB 02	8条のクシ目		14 ~ 15 C'	備前 褐色



第42图 3A区 SB 03实测图 1:60



第43図 3A区 SB03断面図 1:60

ある。山側には浅い溝を巡らし敷地の区画としており、平面形は「コ」の字形を呈している。掘立柱建物跡は梁行き1間（3.6 m）、桁行き3間（7.5 m）の規模である。西側には庇が付設され、これを含めた梁行きは4.2 m ほどである。主軸は南北方向で、東面した建物跡である。

SB 03-2は梁行き2間（4.8 m）、桁行き3間（9 m）の規模である。西側の P 3-P 6は加工段の肩にかかっていることから、この建物跡は加工段を伴わない建物と考えられる。ただし、主軸方向が SB 03-1と同様に南北方向であることから、両者は連続的に建て替えられたものではなかろうか。もし SB 03-1が先に建てられたとするなら、加工段の段差が著しく加工段廃棄後の建物建設は難しいと思われる。福富 I 遺跡では山側に建て替える場合には加工段を拡張している場合が多いことを考えると、加工段をもたない SB 03-2は SB 03-1に先行する建物と考えたい。

SB 03-3は梁行き3間（3.9 m）、桁行き3間（5.7 m）の掘立柱建物跡である。SB 03-2同様加工段をもたない。主軸方向が SB 03-1、2とかなり違うことから、これらとは時期を違えた別の計画で作られた可能性がある。

3 A 区 SB 03-1計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (3.6 m)			3間 (7.5 m)		
主 軸		N-0° - E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	44×42	33×36	39×37	81×111	46×31	38×30
	深 さ	33	49	79	47	56	19
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	36×33	33×26	30×49	33×29	30×34	42×32
	深 さ	39	47	13	57	19	6
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		3.6	2.4	2.4	2.5	3.6	2.5
		P 7-8	P 8-1	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 2-9
		2.7	2.3	2.3	2.7	2.5	0.7
		P 3-10	P 4-11	P 5-12			
0.7	0.7	0.7					

3 A 区 SB 03-2計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		2間 (4.8 m)			3間 (9.0 m)		
主 軸		N-4° - E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	93×97	15×21	79×63	33×64	54×61	51×57
	深 さ	28	15	42	29	30	35
	番 号	P 7	P 8	P 9			
	上面径	36×(15+α)	41×33	35×27			
	深 さ	13	16	39			
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.8	3.0	3.3	3.3	2.4	3.0
		P 7-8	P 8-9	P 9-1			
		2.4	2.4	6.6			

3 A 区 SB 03-3計測表

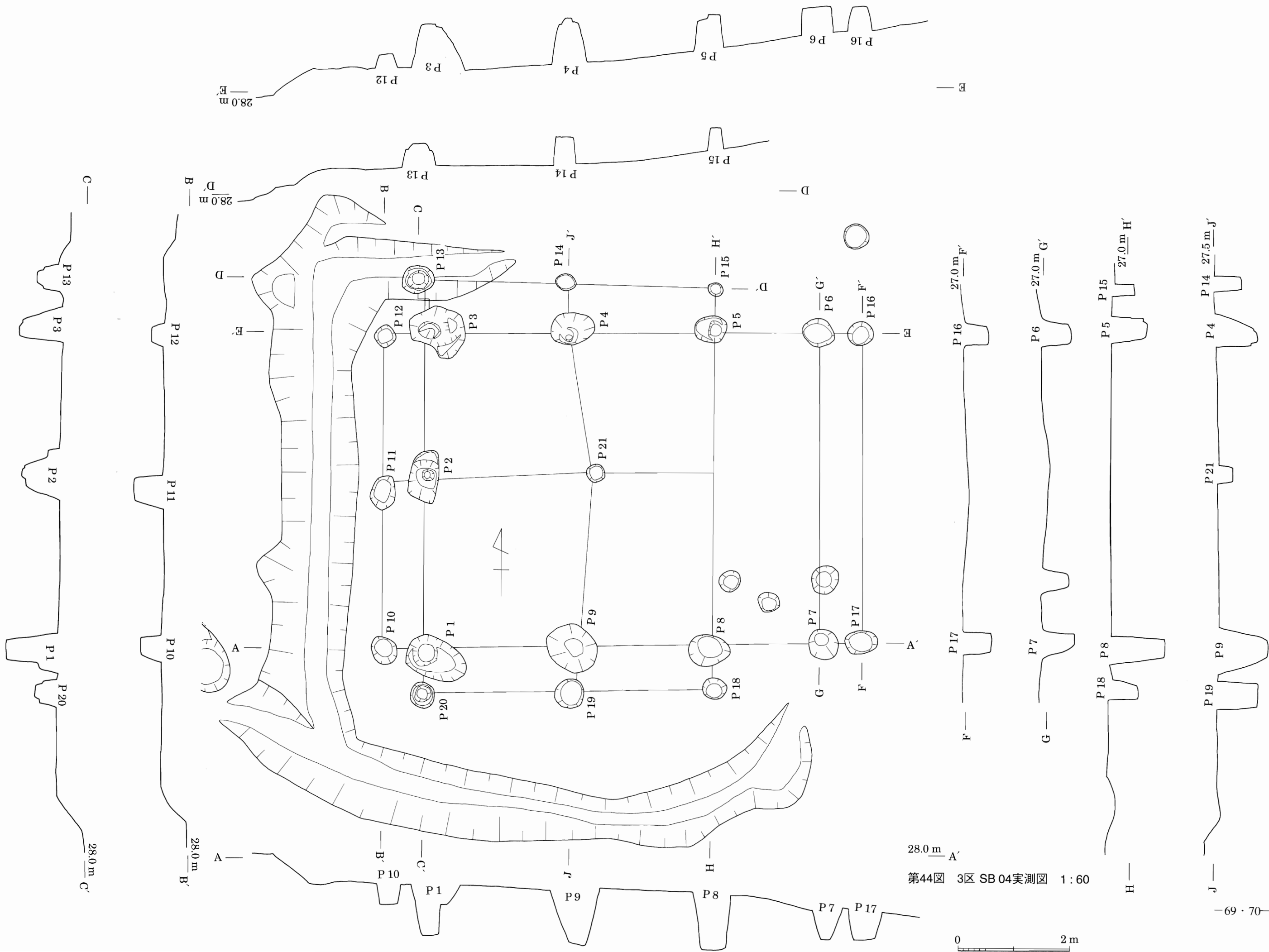
規 模		梁行き			桁行き		
		2間 (3.9 m)			3間 (5.7 m)		
主 軸		N-77° - E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	69×63	81×111	44×45	129×82	37×41	53×58
	深 さ	46	47	27	75	19	35
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	
	上面径	39×49	57×43	42×43	40×34	45×39	
	深 さ	29	18	14	16	15	
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.1	1.8	1.8	1.7	1.0	1.3
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-1	
		1.7	1.8	2.5	1.8	2.1	

SB 04 (第44図 図版27・29) **SB 03**の南に接している。地山を掘削して加工段を作り、そこに掘立柱建物が建てられている。加工段は南北10.2 m、東西10.2 m のほぼ正方形で3方の壁際には壁帯溝が掘られている。

加工段内では特殊な建物跡が検出された。これは1辺5.5 m を測る建物で、基本的には2間×2間の掘立柱建物跡である。主軸は東西方向で東面している。主柱穴は径90cm、深さ90cmの大型の柱穴 (P 1~5、8、9) で、周囲には小型の柱穴が配されている (P 10~20)。また中央には東柱と思われる浅く小さなピットがみられる (P 21)。周辺のピットの配置から北、西、南の3方には幅5.4 m の回廊状の張り出しが、東方には1間半分 (2.7 m) ほどの施設が付設されていることがわかる。また、P 8と P 5の間には柱穴はみられなかった。小野正敏 (国立歴史民俗博物館) によると、この部分を開放するために柱を設けず、東柱で補ったのではないかとの指摘もある。遺物はまったく出土していない。ただ、後述するように SB 02、03との関連が窺えるので、中世頃の建物と想像しておく。

3 A 区 SB 04計測表

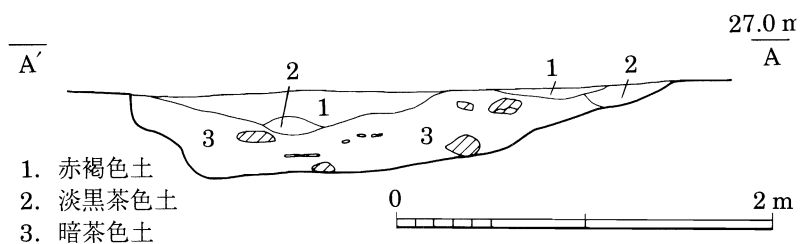
規 模		梁行き			桁行き		
		主屋2間 (5.1 m)			主屋 間 (5.7 m)		
張 り 出 し		2間 (1.8 m)			1間 (5.4 m)		
主 軸		N-90° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	108×69	90×51	96×90	78×57	56×47	58×50
	深 さ	93	68	82	83	65	52
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	53×51	73×56	93×77	48×44	60×43	40×39
	深 さ	57	103	98	37	52	34
	番 号	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18
	上面径	55×49	36×30	26×24	45×43	57×41	43×37
	深 さ	38	49	45	42	55	53
	番 号	P 19	P 20	P 21			
	上面径	52×52	45×42	33×32			
	深 さ	53	39	30			
柱 間 距 離 (m)	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7	
	3.0	2.7	2.5	2.6	1.8	5.4	
	P 7-8	P 8-9	P 9-1	P 5-8	P 9-21	P 21-4	
	1.80	2.6	2.5	5.4	3.0	2.4	
	P 2-21	P 1-10	P 2-11	P 3-12	P 10-11	P 11-12	
	3.0	0.8	0.8	0.8	2.8	2.7	
	P 3-13	P 4-14	P 5-15	P 13-14	P 14-15	P 6-16	
	0.9	0.9	0.8	2.7	2.6	0.8	
	P 7-17	P 16-17	P 8-18	P 9-19	P 1-20	P 18-19	
	0.8	5.4	0.8	0.8	0.8	2.5	
P 19-20							
2.6							



第44图 3区 SB 04实测图 1:60

この建物跡は回廊状の張り出し、柱穴の規模などからみても、一般住居用の掘立柱建物跡とは考えにくい。このような正方形プランで回廊が付く建物は、豪族の居館や官衙などがある。豪族の居館にしては柵や濠などの防御施設がないことから可能性は低いと思われる。また、単独であることから官衙とも考えにくい。むしろ、神社やお堂のような宗教的な建物を考える必要があるだろうか。中世のお堂なら瓦の出土が予想されるが、古代のお堂からは瓦は出土しないとされるので、いわゆる「集落内寺院」の可能性もあるかもしれない。遺物がまったく出土しなかったことは、ここでは神社やお堂のように通常の生活が営まれなかったためではなかろうか。

道遺構（第31・45図 図版24） 調査区の北端から南に向かって伸びる。調査区西側の小谷を伝って SB 01と02の間を横断した後、さらに東側の丘陵傾斜変換点に沿って南下して SB 03、04の正面（東側）に到達する。そのため、平面形は「S」字状にくねっている。SB 01付近で



第45図 3A区道遺構土層図 1:40

は3.8 m～1.8 mの幅で溝状にくぼむが、これより南は約1.2 mの幅で平坦面のままか段状を呈すだけである。溝状の部分では大小の石がほうり込まれるように詰まっており、南部では石の下から不整形で浅いだ円形のピット列が検出できた。

遺物は陶磁器などが出土した。図示したのは備前焼の摺鉢であるが、このほかにも近世、近代の陶磁器、瓦などが出土している。出土遺物で時期を決定するのは困難であるが、だ円形のピット列をもつ道は中世に多いと言われるので、近世以前に作られた道が近代まで使われた可能性がある。

この道は、発掘調査では SB 04の前まで検出でき、あたかも寺社への参道のように窺える。ただし、これがさらに南に伸びて3B区や4区に達するか、尾根を越えるルートであった可能性も否定できない。

土壌（第46～49図 図版29～32） 土壌は15を図示することができた。このうち SK 07、09、14は特異な形態の土壌である。

SK 07は SB 04の加工段斜面に穿たれている。平面形は「T」字形を呈し、底面は北部分がやや低く南部分がやや高くなっている。南部分の壁は上方に迫り出していることから、本来は天井部分があったと考えられる。それに対し北側の壁は上方が広がっており、北端が傾斜していることから、天井のない通路的な感じをうける。おそらく古墳時代の横穴墓のように斜面側から横穴状に掘り込まれ、何度も出入りするために作られた貯蔵穴のようなものではないかと思われる。遺物が出土していないために時期は不明であるが、SB 02と関係があるかもしれな

い。

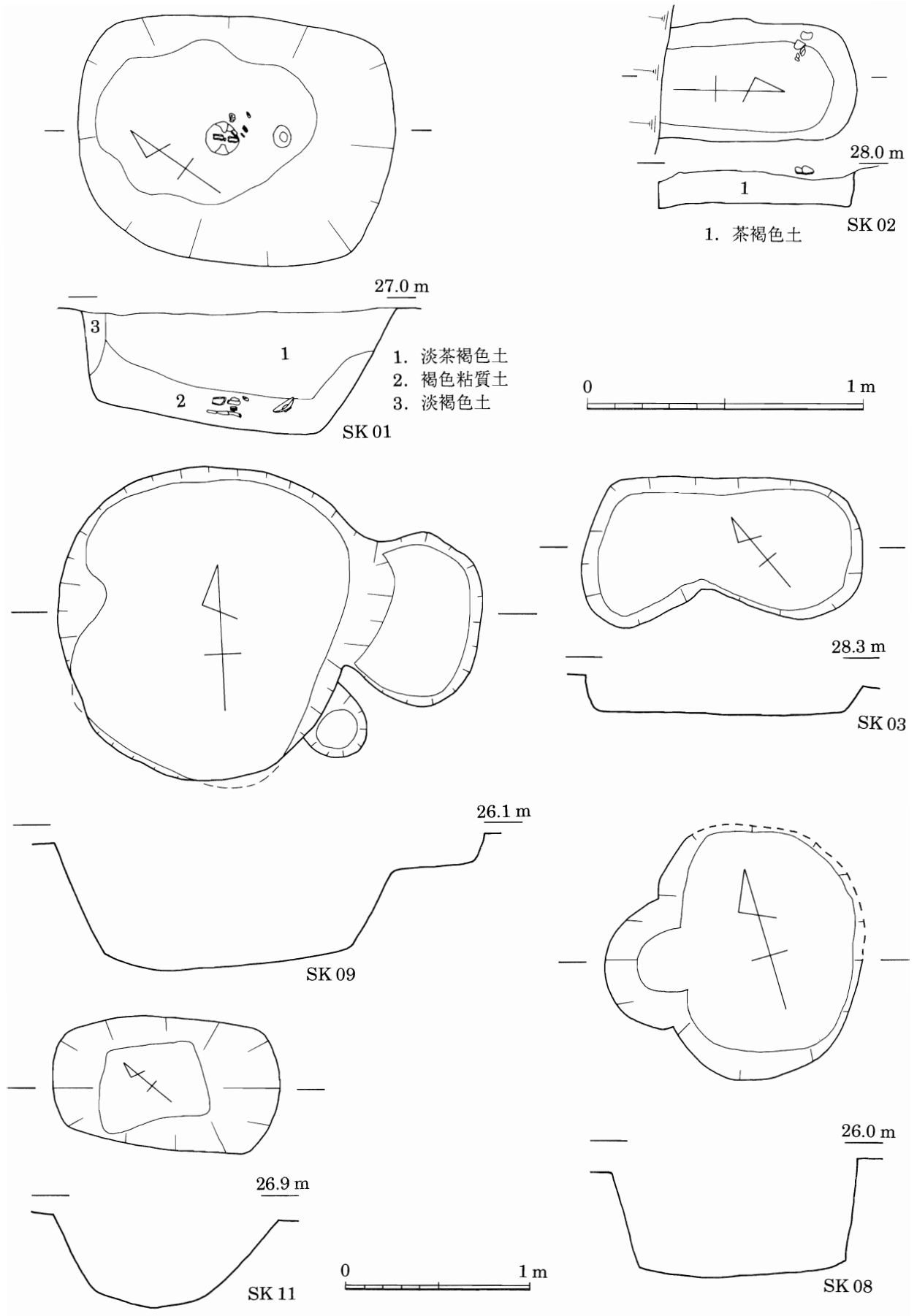
SK 01は、径約1 m の土壌である。やはり貯蔵穴のような機能であろうか。土壌内からは宋銭、土師質土器、水晶などが出土している（第50図8～10 図版43）。土師質土器はろくろが使用されていない。16世紀から17世紀頃と思われる。宋銭は4枚が出土している（第51図）。「天聖元寶」、「開元通寶」、「祥符通寶」などが判読でき、このなかでもっとも新しい初鑄は「天聖元寶」の1023年である。

SK 04・09は大型の土壌である。ともに一端に階段状のステップを付設している。半地下構造の貯蔵穴であろうか。SK 04の最下層にはグライ化した灰褐色の層が10～15cm堆積しており、その上面には木の葉がぎっしりと敷かれていた。遺物は龍泉窯系の青磁、土師質土器、須恵器（第50図12～15 図版43）が出土している。このうち須恵器は混入と思われる。このほかは14～15世紀頃と思われ、SB 02と関係があるかもしれない。SK 09からは7世紀から8世紀の須恵器が出土しているが（第50図1、2 図版42）、ともに最上層から出土している。土層の感触からするとそれほど古い遺構とは考えにくく、遺構の時期を決定する遺物にはならないと思われる。

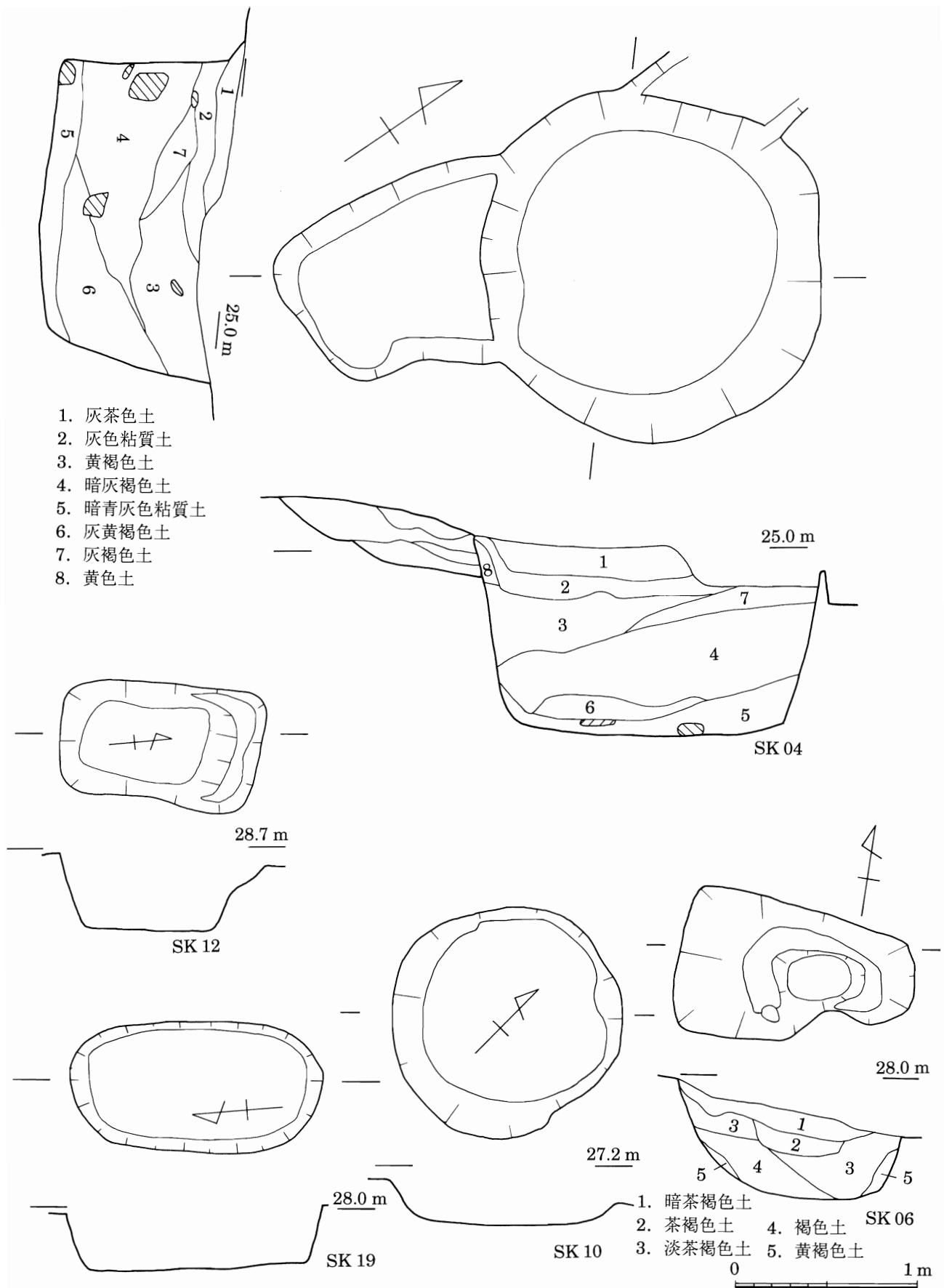
SK 14は3区 SB 01-3の北に隣接する。1×1.2 m の土壌の周囲に50cmから1 m の間隔でピットを配したものである。どのような機能を果たしていたかは不明であるが、土壌の上に覆屋のような施設があったと推定される。SB 01に関係した施設と思われる。

3 A 区土壌計測表

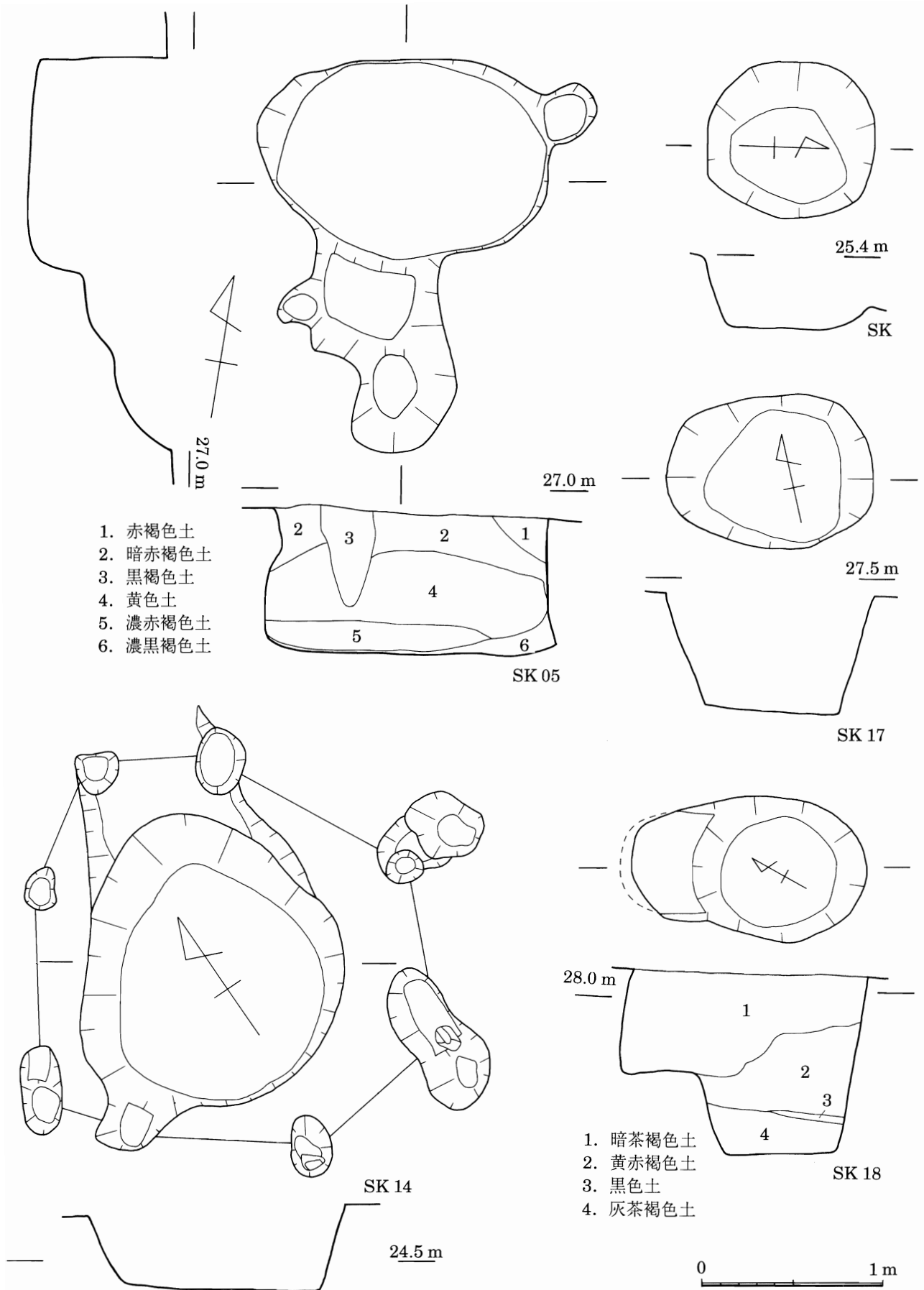
番号	平面形	平面規模	深さ (cm)	出土遺物	備考
SK 01	長方形	118×90	46	古銭・土師器・水晶・骨	
02	〃	(70+α)×45	12	土師器	
03	不整楕円形	150×77	22		
04	円形	186×193	108		
05	T字形	218×164	81		貯蔵穴?
06	不整長方形	128×74	63		
07	T字形	236×214	91		
08	双円形	(140+α)×140	65		2つの重なり?
09	〃	228×170	70		〃
10	円形	126×126	25		
11	長方形	123×72	52		
12	長方形	112×68	43		
13	双円形	124×101	109		
14	不整楕円形	163×156	62		周囲にピット8個
15	〃	148×(58+α)	86		
16	円形	93×88	37		
17	楕円形	114×88	67		
18	〃	130×81	102		
19	〃	139×72	38		



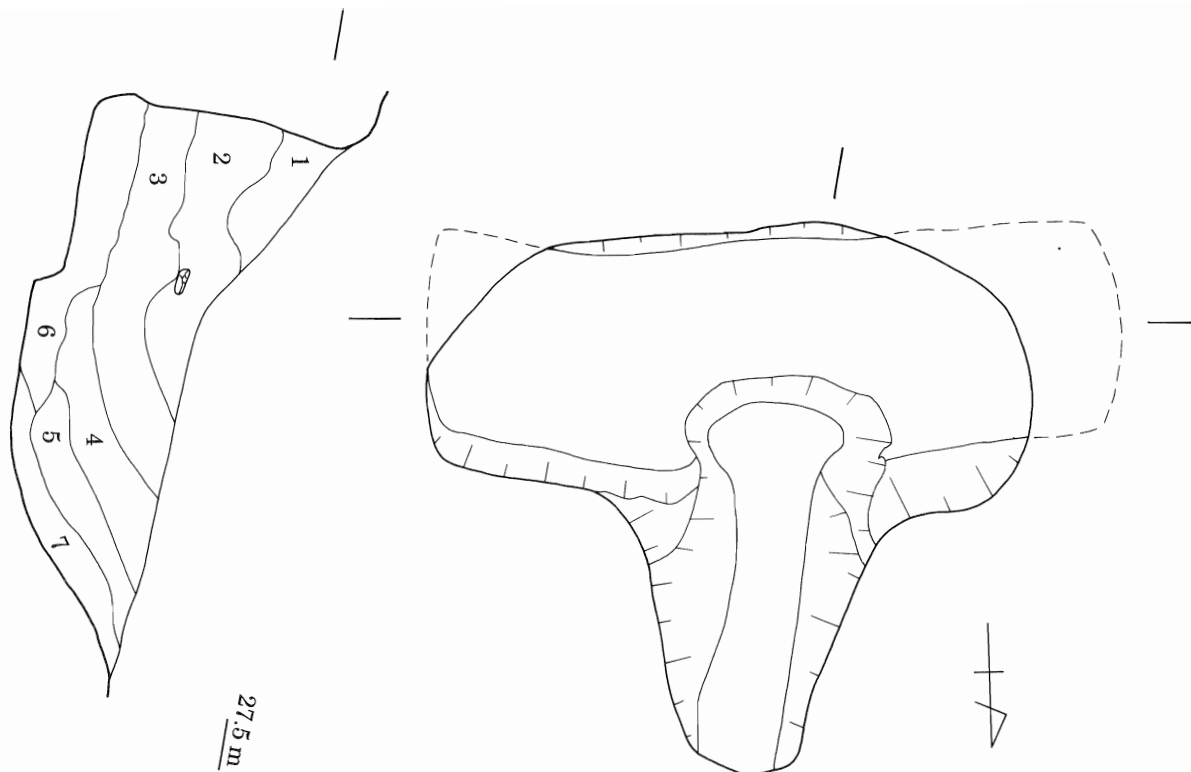
第46図 3A区土壤実測図(1) SK 01・02は1:20、他は1:30



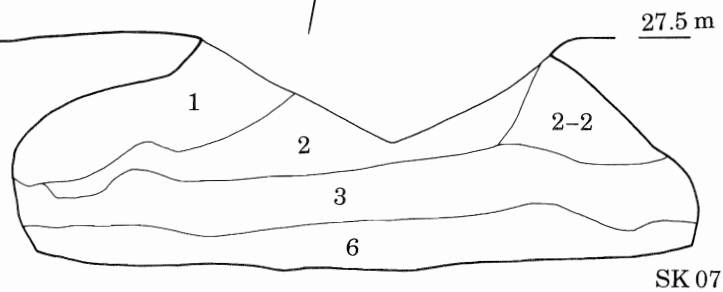
第47图 3A区土壤实测图(2) 1:30



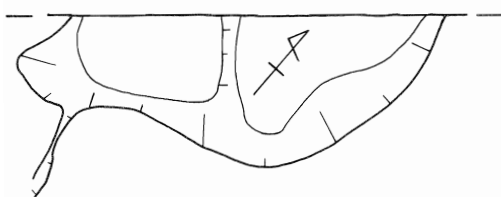
第48図 3A区土壤実測図(3) 1:30



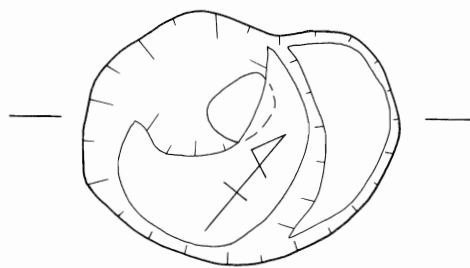
- 1. 暗茶褐色土
- 2. 暗灰褐色土
- 2-2. 暗灰茶褐色土
- 3. 白黄色粘質土
- 4. 淡褐色粘質土
- 5. 暗褐色粘質土
- 6. 褐色粘質土
- 7. 淡黑褐色土



SK 07

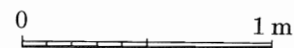


SK 15

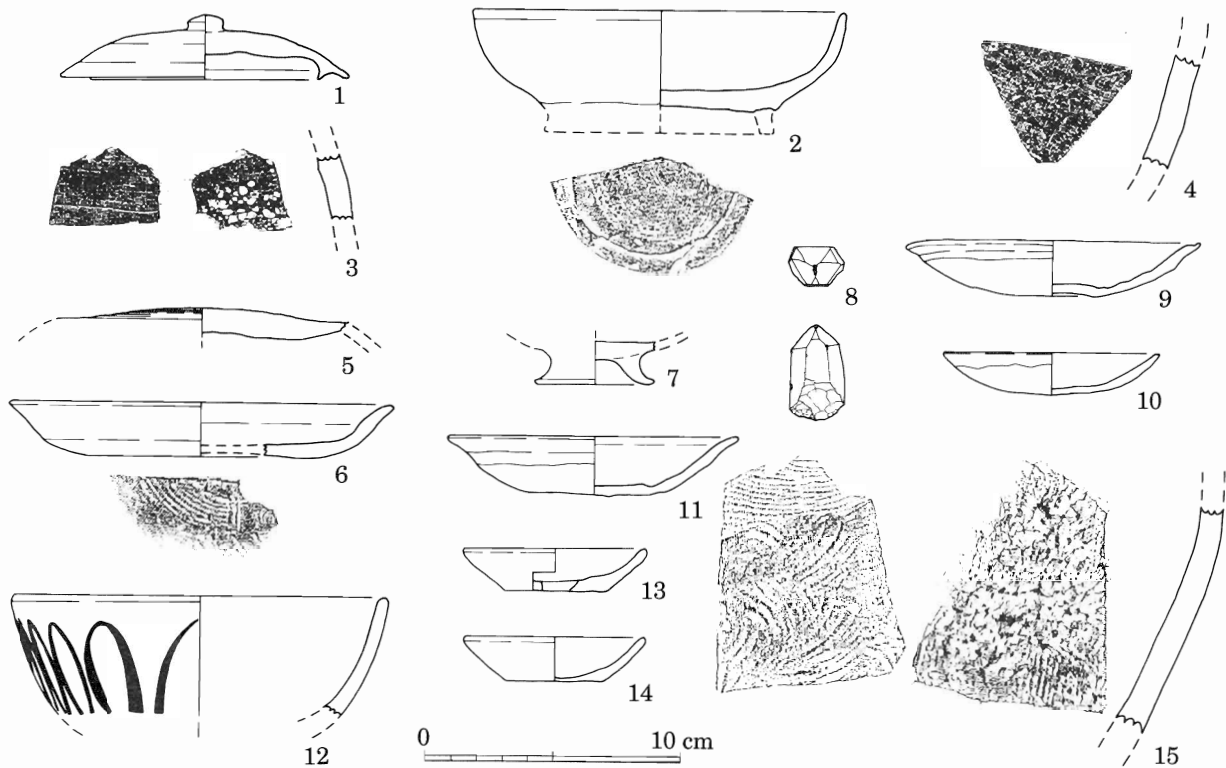


SK 13

26.9 m



第49图 3A区土壤实测图(4) 1:30



第50図 3A区土壌出土遺物 1:3

3A区 土壌出土遺物一覧表

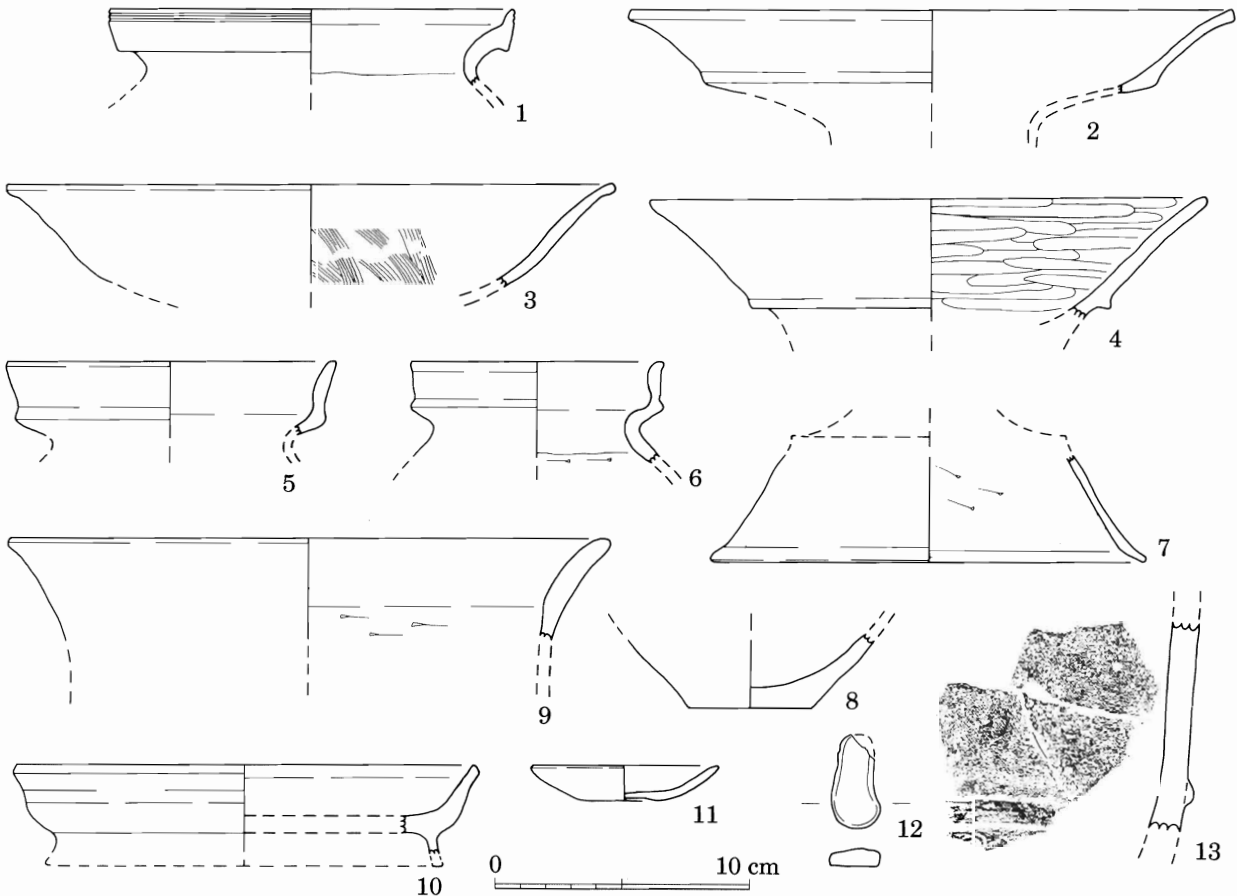
挿図 番号	図版 ページ	器種	法量 (cm)	形 態	文 様	調整その他	時期	備 考
第50図 -1	図版42	須恵器 蓋	口径9 高2.6	SK 09	擬宝珠つまみ かえり	ろくろ右回転	7 C 前半	混入?
-2	同上	須恵器 坏	口径14.8 高4+α	SK 09	口縁内湾	静止?糸切	8 C 前半?	混入?
-3	同上	陶器 壺		SK 09		回転ナデ 茶褐色のうすい釉	14 ~ 15 C?	備前?
-4	同上	陶器		SK 05		回転ナデ 茶褐色の釉?	14 ~ 15 C?	備前?
-5		須恵器 蓋		SK 08		平坦な天井部	回転ケズ リ(右回 転)	
-6	図版42	須恵器 皿	口径15.2 底径9 高2.2	SK 08	口縁外反	回転糸切	9 C 前半	
-7	図版43	土師坏	底径2.6	SK 08		ヨコナデ?		低脚坏?
-8		水晶	長3.7 幅2.2	SK 01		下端に剥離痕		
-9	図版43	土師皿	口径11.8 高2.2	SK 01	口縁内面に段	内面底部強いナデ 底部押圧による整形	16 ~ 17 C	非ロクロ
-10	同上	土師皿	口径8.6 高1.7	SK 01		外面底部凸凹著しい (押圧による整形か?)	16 ~ 17 C	非ロクロ
-11	同上	土師皿	口径11.3 高2.4	SK 02		同上 内面底部に強いナデ	16 ~ 17 C?	非ロクロ
-12	同上	青磁 碗	口径15	SK 04	片切彫の蓮弁		14 ~ 15 C	龍泉窯系 B-Ⅲ類
-13	同上	土師皿	口径7.2 底径4 高1.7	SK 04		底部穿孔 (焼成前?)	回 (?) 糸切	
-14	同上	土師皿	口径7.2 底径3.8 高1.8	SK 04			糸切?	
-15	図版42	須恵器		SK 04		外面 平行叩 内面 同心円当見痕(上半と 下半と工具違う)		混入



第51図 3A区 SK01出土古銭 1:1 1は後期でもやや古い様相をもつが、他はV-2様式の

土器である。5、6は古墳時代前期の甕である。9は古墳時代から奈良時代にかけての土師器甕、10は奈良時代から平安時代にかけての須恵器皿、11は中・近世の土師器坏である。13は器種不明の須恵器質の破片である。あまりカーブが強くないので大型の器種であろうか。一端に断面カマボコ形の突帯文が付され、その下に重弧文状のスタンプ文(?)が施されている。12は長さ3.7cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmの石製品である。緑色の片岩(?)の周縁、表裏が研磨され、ヒョウタン形に作られている。器種はやはり不明。

3.3B区 (第53図 図版33) 調査区の東南部の一群である。掘立柱建物跡7棟、性格不明遺構2などが検出された。いずれも調査区の端にあるため、すべてのピットが並ぶものは2棟



第52図 3A区出土遺物 1:3

3A区 出土遺物一覧表

挿図 番号	図版 ページ	器種	法量 (cm)	形 態	文 様	調 整 そ の 他	時 期	備 考
第52図 -1		甕	口径15.8		口縁部にクシ描沈線 条数不明	内面頸部以下 ケズリ	弥生 V-2	
-2	図版43	壺	口径24	口縁大きく外反		不明	弥生	
-3	同上	高坏	口径24	口縁大きく外反		内面部ハケ目、他は ヨコナデ	弥生	
-4	同上	器台?	口径21.2	直線的な口縁		内面ミガキ 外面ナデ		
-5	同上	甕	口径13.2	口縁短く外傾		ヨコナデ	古墳	
-6	同上	甕	口径10	口縁直立		ヨコナデ	古墳	
-7		器台	脚 端 径 17.2			外面ヨコナデ? 内面ケズリ	弥生	
-8	図版43	底部	底径4.8	平底		内面ケズリではない? 外面ナデ?	弥生	
-9	同上	甕	口径23.4	口縁短く外反		ヨコナデ	内面ケ ズリ	古墳後 ~奈良
-10		須恵器 皿	口径18	口縁端部面取		回転ナデ 高台貼付け	奈良~ 平安	
-11		土師皿	口径7.2 高1.4			ナデ	近世?	
-12	図版43	石器	長3.7 幅1.9	平面形瓢形		全面研磨	古代?	装飾品か?
-13	同上	須恵器	厚0.7		突帯1条 スタンプ文?	ナデ?		

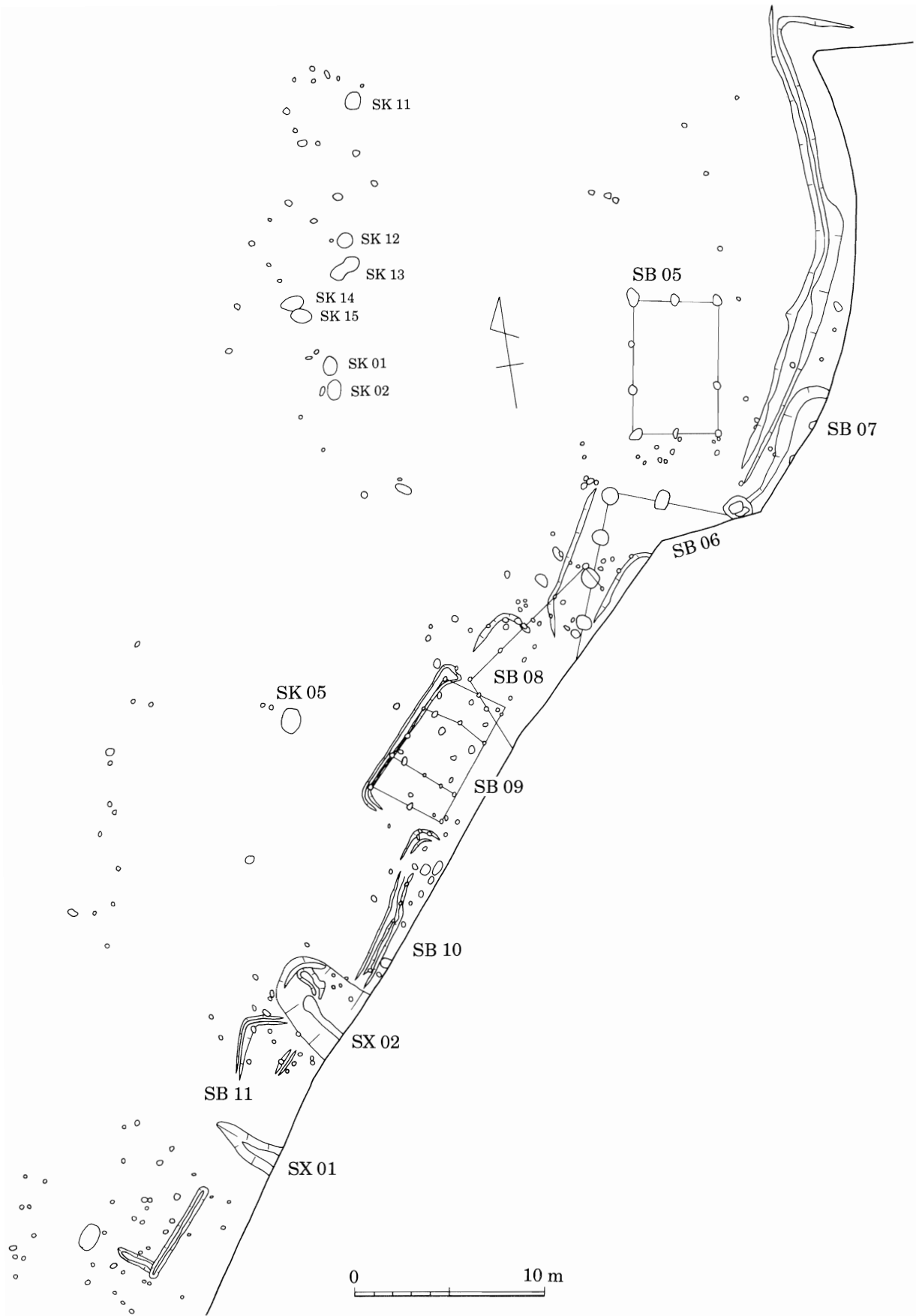
だけであった。この南は団地造成によって削平され遺構は残っていないと判断したため、調査の対象とはしなかった。本来は南側斜面がこの集落の中心部であったと思われる。

SB 05 (第54図 図版34) 2×3間の掘立柱建物跡で、桁行き7.1 m、梁行き4.3 m を測る。主軸はほぼ南北方向である。柱穴の残りは悪く、最も浅いもので5cm程度の深さしかないものもある。ここは地山の荒れが著しかったことから、耕作によって上部がかなり削平されていると思われた。

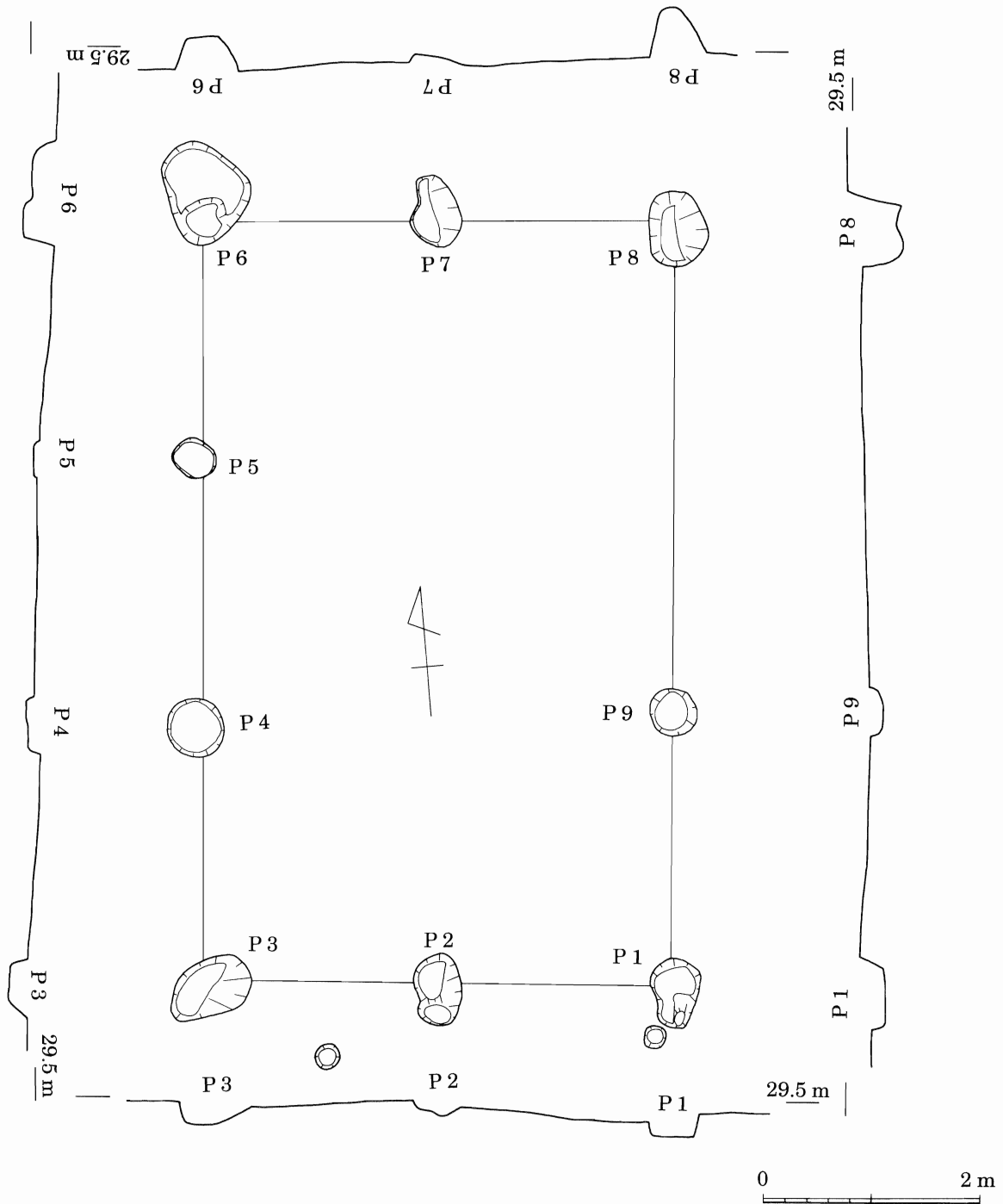
遺物が出土していないため時期は不明であるが、柱穴がやや大きいこと、柱間が比較的等間

3B区 SB 05計測表

規 模	梁行き			桁行き			
	2間 (4.3 m)			3間 (7.1 m)			
主 軸	N-8° -W						
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上 面 径	45×63	44×66	69×60	51×54	42×39	96×81
	深 さ	35	18	19	14	5	29
	番 号	P 7	P 8	P 9			
	上 面 径	66×49	71×54	42×44			
	深 さ	14	54	17			
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.1	2.2	2.4	2.4	2.3	2.1
		P 7-8	P 8-9	P 9-1			
		2.2	4.7	2.4			



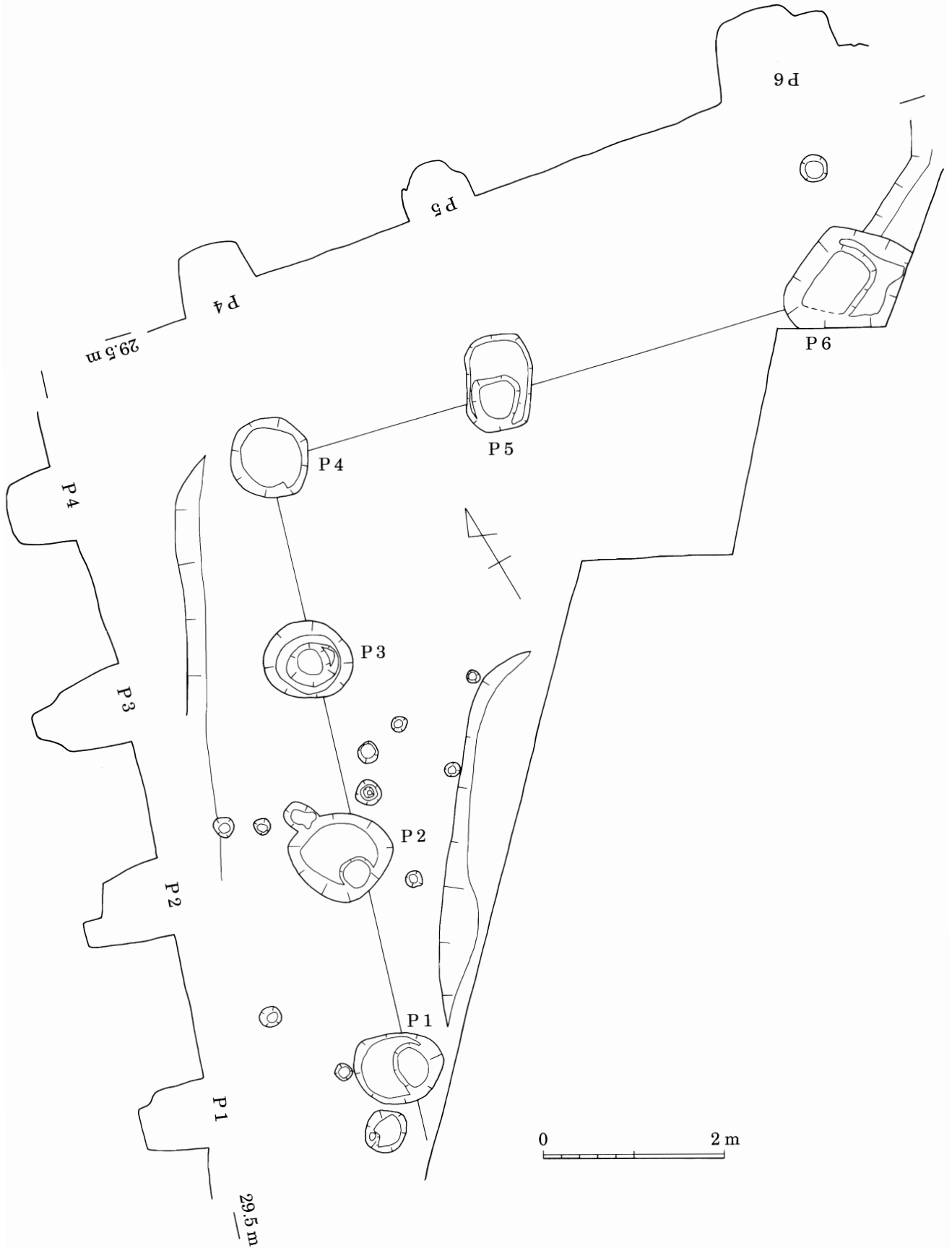
第53図 3B区遺構配置図 1:300



第54図 3B区 SB 05実測図 1:60

隔であることから、中世のものではない可能性がある。

SB 06 (第55図 図版34) 柱穴の掘り形が1mを超す、大型の掘立柱建物跡である。検出できたのは東西2間(4.4m)、南北3間(7.1m)であった。柱間はP4-5の間隔に比べ、P5-6の間隔が約90cmほど広いことから、東側にもう1間分伸びていた可能性がある。P1より南側も調査区外になるため、これより南に伸びるのかここで東に曲がるのかは確認できなかった。土層の観察ではP1とP6では柱痕が確認され、その大きさは直径約35cmである。P5の南で



第55图 3B区 SB 06实测图 1:60

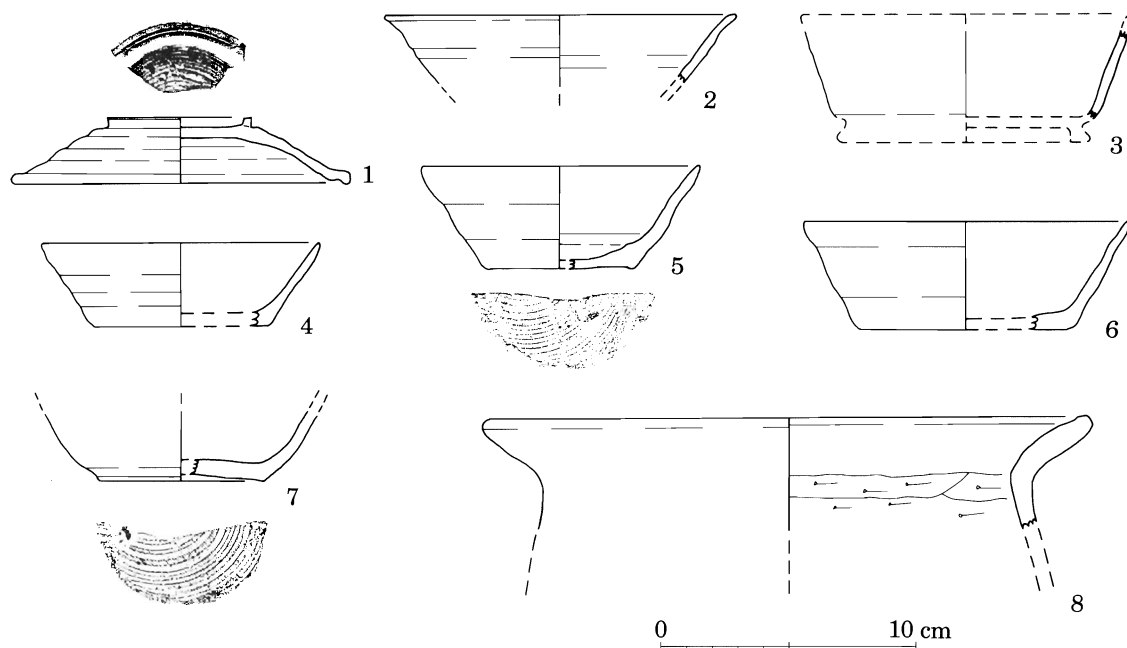
3 B 区 SB 06計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		2間 (6.6 m)			3間 (6.9 m)		
主 軸		N-18° -W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	99×78	114×101	96×87	87×90	75×108	(135+α) × (114+α)
	深 さ	81	95	105	69	57	90
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	深 さ						
柱 間 距 離 (.m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.2	2.4	2.3	2.8	3.8	
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1

は総柱を想定して柱穴の精査を行ったが、同規模のピットはほかには確認できなかった。ここでは柱穴があるなら残っている余地があるので、SB 06は総柱建物である可能性は低いと思われる。

P 1-P 4までの各柱間は P 5-P 6の柱間よりやや狭い。このことから P 1-P 4が庇である可能性もあるが、大部分が壊れている現状では断言することはできない。また、ここから東側は斜面となり傾斜が強くなるので、これより大規模な建物が建つ余地は少なく、これが庇付きの建物となる可能性は低い。

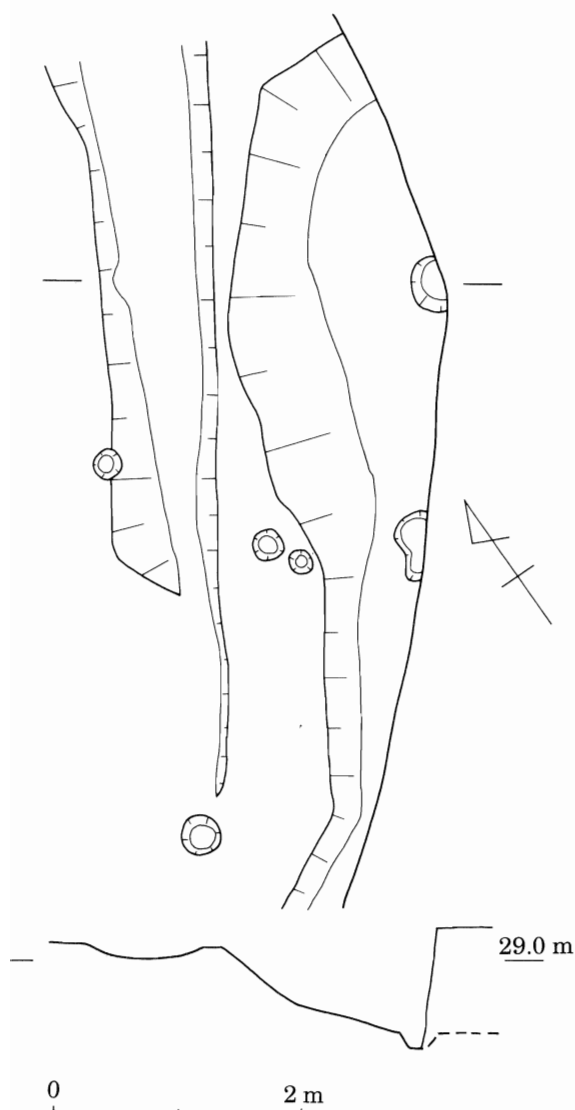
柱穴から比較的まとまって遺物が出土した(第56図 図版44)。1、3、7、8は奈良時代から平安時代初頭のやや古い要素をもつが、2、4、5、6は9世紀末から10世紀ころの須恵器である。いずれも柱穴の中から出土しており、2、4、5、6がこの建物跡と近い時期のものと考えられる。また、1は石見地方でよくみられる器形で口径に比してつまみ径の大きな輪状つまみをもつ蓋である。口縁端部は屈曲し、天井部には回転糸切り痕が残る。このような器形は出雲地方、



第56図 3 B 区 SB 06出土土器 1:3

3B区 SB06 出土土器一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量(cm)	形態	文様	調整その他	時期	備考
第56図-1	図版44	須恵器蓋	口径13.4 つまみ径5.6 高2.5	径の大きな輪状つまみ		回転糸切未調整	奈良?	P5出土
-2		須恵器坏	口径13.8	口縁大きく外反		回転ナデ	平安?	焼成不良 P3出土
-3		須恵器坏		口縁直線的に開く		回転ナデ	平安	P4出土
-4		須恵器坏	口径12.8 底径8.4 高4.3	口縁直線的に開く		回転ナデ 回転糸切?	平安?	焼成不良 P1
-5	図版44	須恵器坏	口径10.8 底径5.6 高4.1	口縁直線的に開く		回転ナデ 回転糸切	平安?	焼成不良 P1付近
-6	同上	須恵器坏	口径10.8 底径7 高3.3	口縁直線的に開く		回転糸切 回転ナデ	平安?	P2出土
-7	同上	須恵器坏	底径6.5	口縁内湾		回転糸切 回転ナデ	平安	P3出土
-8	同上	土師器甕	口径23.8			ヨコナデ、内面ケズリ	奈良~ 平安	P3出土



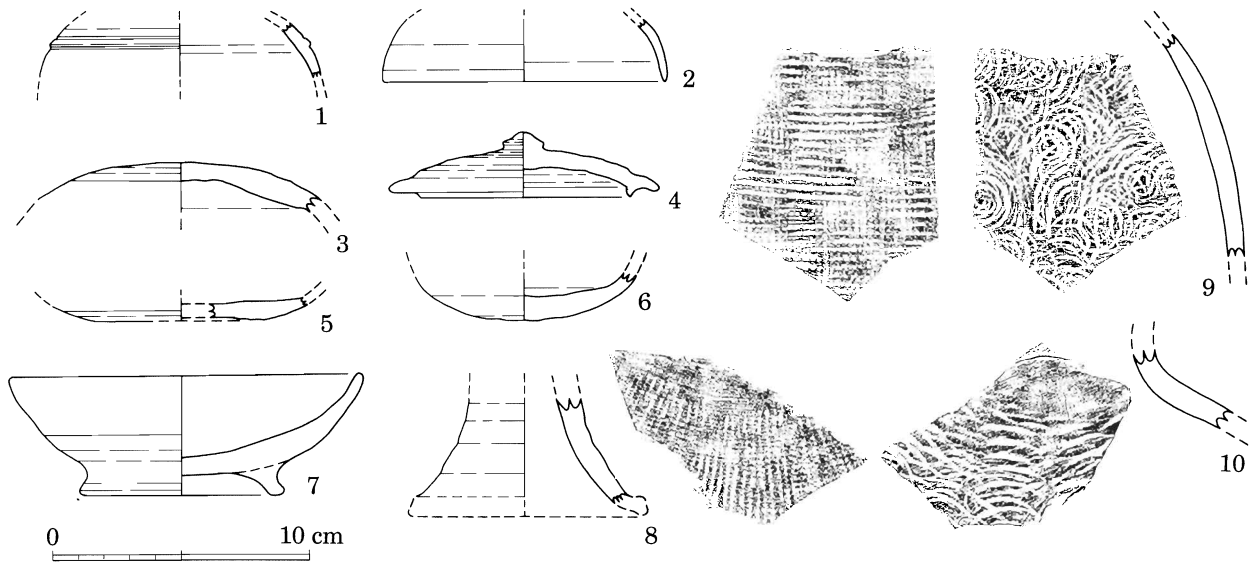
第57図 3B区 SB07実測図 1:60

とくに東部の平野部ではほとんどみられない蓋である。器形からみると石見地方など他地域からの搬入品の可能性が高い。

柱穴のプランは方形に近く、規模から見ても特殊な建物に感じられる。『出雲国風土記』ではここに官衙があったという記載はないが、これが一般の集落とも考えにくい。遺物が10世紀前後のものと考えられるので、『出雲国風土記』勧造以後に作られた公的な建物の可能性がある。

SB07 (第57図 図版35) 調査区端部で一部のみが検出された。全形を復元することは困難であるが、地山を段状に整地した掘立柱建物跡と考えられる。加工段の範囲は長さ約9m、床面の幅0.6mで、柱穴は2穴のみ検出された。この柱穴がこの加工段に伴う建物とすれば柱間は2.1mである。

この加工段からは古墳時代から奈良時代にかけての須恵器が出土した(第58図 図版44)。1~3、5は古墳時代の系譜を引く須恵器である。1、3、5は天井部または底部に回転ヘラケズリが施されるがそれは周辺部にとどまり、中央にヘラ切り痕を残す。また5には2条の沈線によって作出され

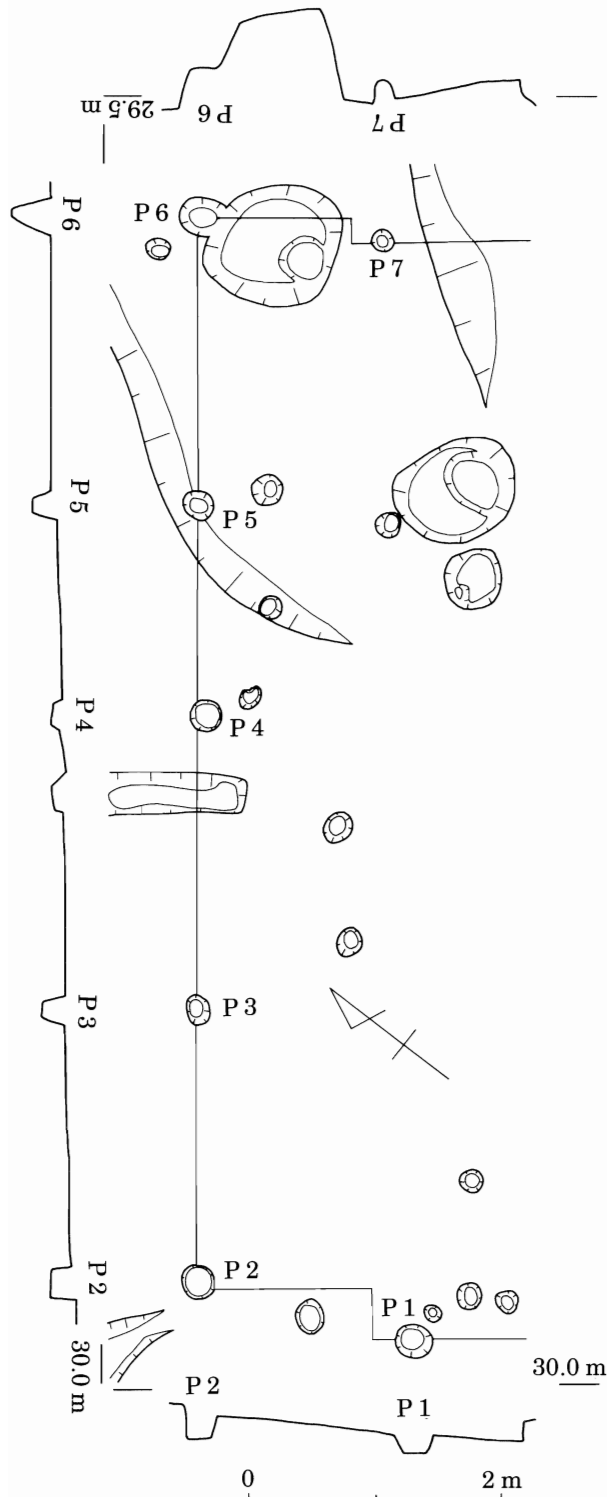


第58図 3B区 SB 07出土土器 1:3

3B区 SB 07 出土遺物一覧表

挿図 番号	図版 ページ	器種	法量 (cm)	形 態	文 様	調 整 其 他	時 期	備 考
第56図 -1	図版 44	須恵器 蓋			2条の沈線で作出した稜	回転ナデ	蓋 A 5 4期	
-2		須恵器 蓋	口径11.2			回転ナデ	蓋 A 7 5期	
-3		須恵器 蓋				天井部軽く回転ケズリ	蓋 A 6 4期	
-4	図版 44	須恵器 蓋	口径8.3 高2.6	扁平な擬宝珠つまみやや高いかえり		天井部回転ケズリ	蓋 C 2 6B期	
-5		須恵器 坏?				底部回転ケズリ 中央削り残し		蓋の可能性もあり
-6	図版 44	須恵器 坏		器壁厚い		ヘラ切り後雑にナデ	坏 C 2 6B期	蓋の可能性もあり
-7	図版 45	須恵器 坏	口径13.9 底径8 高4.8	口縁内湾 高い高台		ヘラ切後若干ナデ? 付高台 左回転	7 C 末 8 C 前葉	
-8	図版 44	須恵器 高坏				回転ナデ、器面起伏多い		透孔なし
-9	同上	須恵器 甕				外面平行叩き 内面同心円当具痕		
-10	同上	須恵器 甕				外面平行叩きカキ目 内面同心円当具痕		内面の当具痕の円径大きい

た稜が施されている。2、6はこれらよりやや新しいもので、蓋は稜が消失し内面の段もつかない。6の底部にはへらけずりは施されず、へら切り後軽くなでるだけである。8は擬宝珠つまみと内面にかえりをもつ小型の蓋、7は高い高台をもつ口縁部が内湾する坏である。ともに



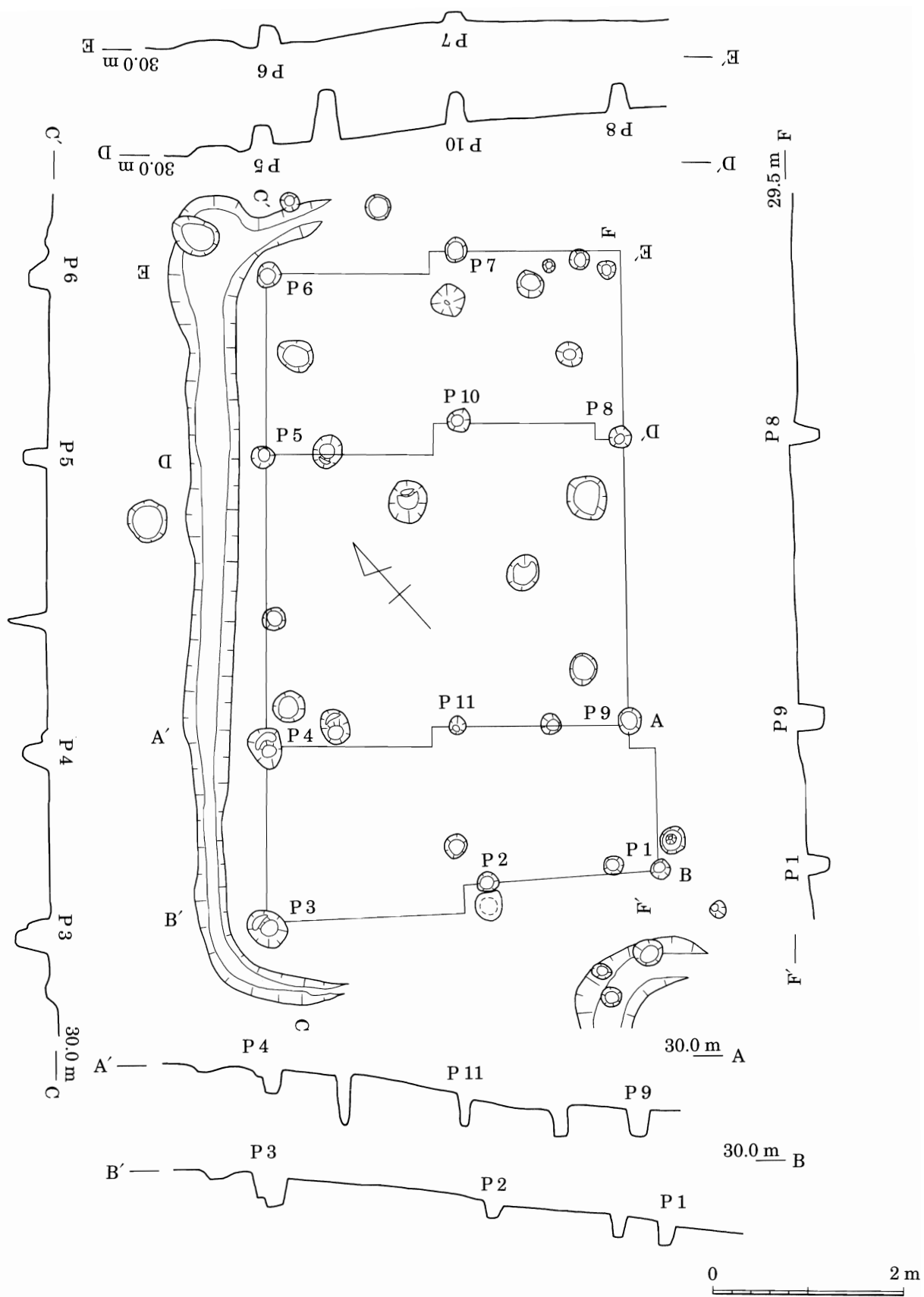
3 B 区 SB 08計測表

規 模	梁行き			桁行き			
	1間 (1.8 m)			4間 (8.4 m)			
主 軸	N-53° - W						
柱 穴 (cm)	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	28	27	24	26	25	30
	深さ	15	28	19	11	21	30
	番号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
柱間距離 (m)	上面径	19					
	深さ	19					
柱間距離 (m)		P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7
		1.8	2.2	2.3	1.7	2.2	1.5
		P7-8	P8-9	P9-10	P10-11	P11-12	P12-1

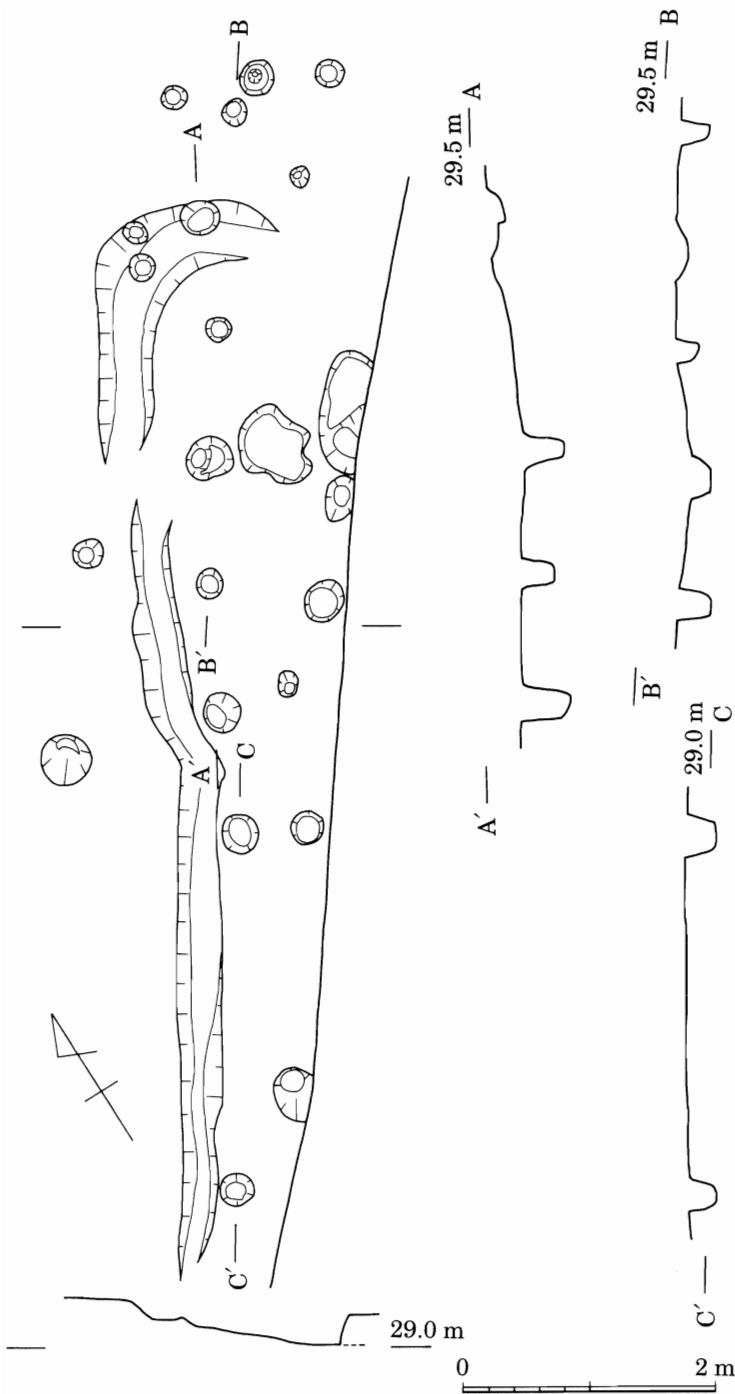
3 B 区 SB 09計測表

規 模	梁行き			桁行き			
	2間 (4.1 m)			3間 (6.9 m)			
主 軸	N-40° - W						
柱 穴 (cm)	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	20	21	43	43	24	24
	深さ	24	22	40	26	23	22
	番号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
柱間距離 (m)	上面径	27	24	27	25	20	
	深さ	13	31	30	35	35	
柱間距離 (m)		P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7
		1.8	2.3	1.9	3.1	1.9	2.0
		P7-8	P8-9	P9-1	P10-11	P11-12	P12-1
			3.0	1.5	3.2		

第59図 3 B 区 SB 08実測図 1:60



第60图 3B区 SB09实测图 1:60



第61図 3B区 SB 10実測図 1:60

中世ころと想像している。

SB 09 (第60図) 梁行き2間 (4.1 m)、桁行き3間 (6.8 m) の総柱の掘立柱建物跡である。P3からP6に沿って長さ8.4 m、幅50cmの壁帯溝が「コ」の字形に巡っている。本来は地山を掘削し段状に整地していたと思われる。検出時には床面は傾斜していたが、これは掘削土などで貼床していたのであろうか。柱間は桁は比較的そろっているが、梁は不均等である。また、P1-P9、P3-P4、およびP5-P6、P7-P8に間隔よりP4-P5、P8-P9間が広がっている。掘立柱建物跡は総柱であるが、P3からP6が全体に南西方向にずれており、建物の平面

天井部、底部はヘラ切りによって切り離されている。

これらは6世紀後半から7世紀末または8世紀前葉まで時間的に幅があるが、3B区の遺構の中では古い時期の建物跡である。最も新しい遺物を遺構の時期と考えると、7が7世紀末から8世紀前葉と考えられるので、これらからSB 07はおおむね7世紀末から8世紀前葉と考えられる。

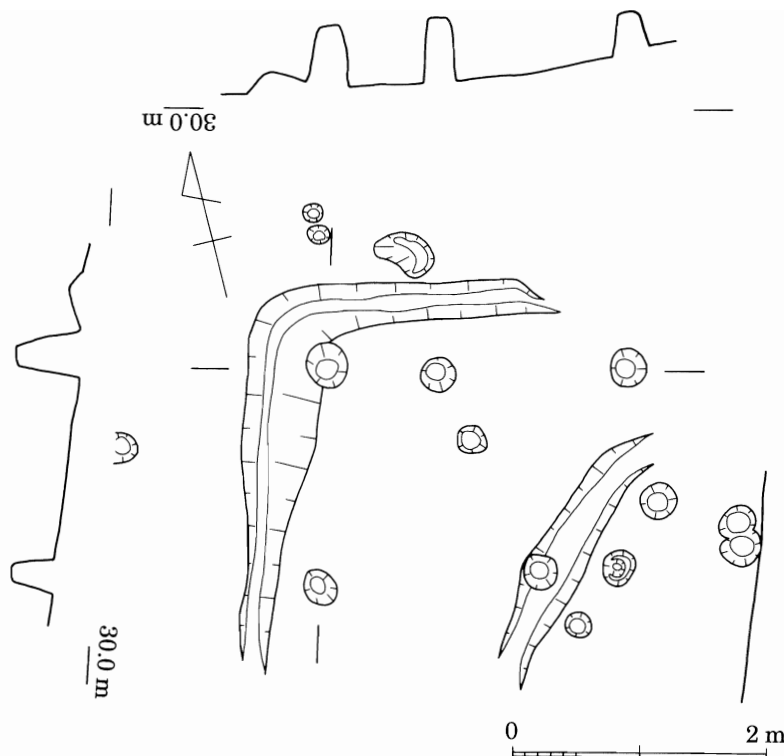
ところで、奈良時代初期の建物は3B区ではこれだけである。しかし4A区ではこの時期の建物はたくさん検出されているので、SB 07は4A区との関連で考えるべきであろう。この時期の集落の中心はここより南寄りで標高のやや低い斜面であったと思われる。

SB 08 (第59図) SB 06の南部と重複している。桁行き4間 (8.5 m) 梁行き1間 (2.6 m) 以上の掘立柱建物跡である。柱穴の並びはとくに梁側で不ぞろいで、柱間も均等ではない。遺物が出土していないため時期を決定することはできないが、

プランは歪んだ形となっている。

遺物が出土していないため時期を決定することはできないが、中世ころの建物跡ではないかと想像している。

SB 10 (第61図) 柱穴の並びは明確ではないが、等高線に平行するように壁帯溝が逆L字状に巡っている。壁帯溝の規模は長さ8.4 m、幅30cmで、地山を掘削して加工段としたものと考えられる。北寄りの部分で若干方向が変わっているので2棟が重複している可能性もあるが判然としない。柱穴は直線的な配置ではあるが、各柱穴の間隔はまちまちで掘立柱建物跡の規模を判断することはできない。



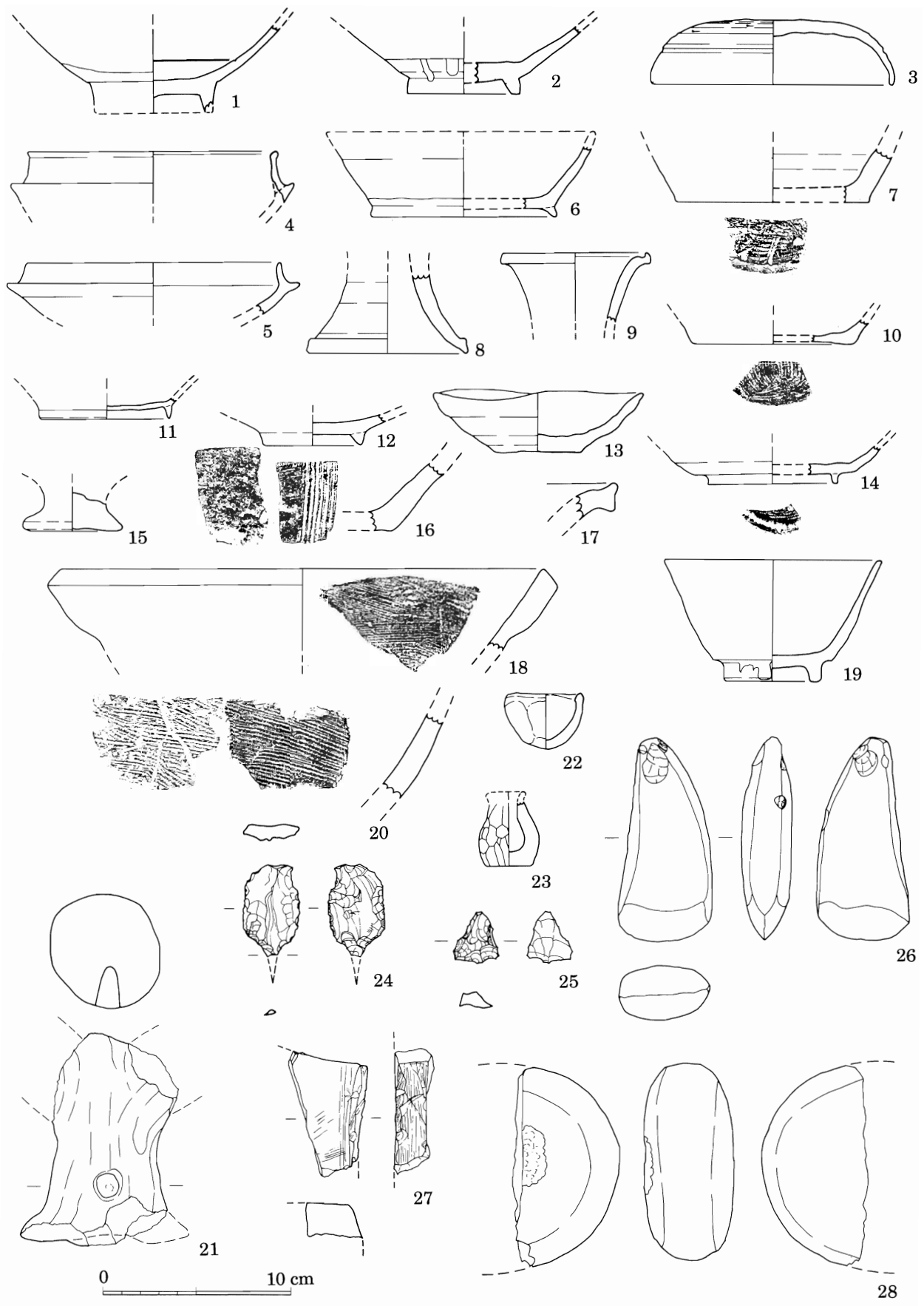
第62図 3B区 SB 11実測図 1:60

遺物は白磁2点が出土している(第63図1、2 図版45)。ともに高い高台をもち、口縁部が大きく広がる器形である。釉は高台のやや上から内面にかけてかかっており、灰白色を呈している。1の内面には沈線が1条めぐっている。これらは白磁V類に分類でき、おおむね12世紀ころに位置づけられる。このことから、SB 10はこのころの遺構と考えられる。

SB 11 (第62図) 東西約2.4 m、南北約3 m、幅30-60cmの壁帯溝とピットが一部検出できたに過ぎない。壁帯溝はほぼ直角に方向を変えている。これらは加工段を伴う掘立柱建物跡の東北コーナーと考えられ、おそらく南北方向の建物であったと考えられる。柱穴は梁、桁とも1間分しか検出できなかった。柱間は東西約2.4 m、南北約1.8 mで、南北の柱間が60cmほど狭い。

遺構に伴わない遺物 (第63図3-28 図版45・46) 3B区からは須恵器、陶磁器、土師器、石器などが出土した。須恵器、土師器は古墳時代のものもあるが、平安時代から中世のものが多く、当調査区の遺構群の主体的な年代を示していると思われる。また、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物もみられるが、これは近くに存在するこの時期の遺構を反映していると考えられる。

第63図3、4、5は古墳時代の須恵器蓋坏である。4は口縁部がやや長く伸びて直立しており、他より古いものである。第1期にさかのぼるかどうかが微妙なところであるが、4区を含めてもこの時期の遺構は検出されていない。耕作によって地山が削られた部分にこの時期の遺構があっ



第63図 3B区 SB 10出土白磁 (1・2) 及び遺構に伴わない遺物 1:3

たのであろうか。

6、11～13、15は土師器で、いずれも平安時代から中世にかけてのものと思われる。6は内面が黒色の土師器で、やや古い様相をもつ。11、15は底部周縁に断面三角形の低い高台をつけ、口縁部は大きく広がる器形である。13は無高台のものであるが、11、15より新しいと思われる。15は円柱形の脚をつける脚付き皿である。12～13世紀と考えられ、13などと近い時期であろう。

7、10、14、18は須恵器である。10、14は9世紀後半から10世紀にかけての時期と思われる。18は内外面ともに刷毛目調整が施され、10、14より新しいと思われる。15などと同一時期と思われる。

3B区 SB10 遺構に伴わない遺物一覧表

挿図 番号	図版 ページ	器種	法量 (cm)	形 態	文 様	調 整 其 他	時期	備 考
第63 -1	図版 45	白磁 碗	底径6.4	口縁大きく開く	内面に沈線	体部下半以無釉	12C	SB10出土 V類
-2	同上	白磁 碗	底径6	口縁大きく開く		体部下半以下無釉	12C	SB10出土 V類
-3	図版 46	須恵器 蓋	口径12.4 高3.5	1条の沈線による稜		天井部回転ケズリ 中央ケズリ残し		
-4	同上	須恵器 坏	口径13	口縁直立、やや短い 口縁端わずかに平坦		回転ナデ		
-5	同上	須恵器 坏	口径15.4	口縁短く内傾		回転ナデ		
-6		土師器 坏	底径10	口縁直線的に開く 低い高台		回転ナデ?	平安?	内面黒色
-7	図版 46	須恵器 壺?	底径10.3			回転糸切	平安?	
-8	同上	須恵器 高坏	底径8.4	端部に平坦面		回転ナデ		
-9	同上	須恵器 壺	口径7.8	端部つまみあげる		回転ナデ		
-10		須恵器 坏	底径8.6			回転糸切	平安	
-11		土師器 坏	底径6.8	低い高台		ヨコナデ?	平安～ 中世?	
-12		土師器 坏	底径5	低い高台			平安～ 中世?	
-13	図版 45	土師器 坏	口径11 底径4.6 高3.2	口縁内湾		回転糸切	中世?	
-14		須恵器 坏	底径7	低い高台 口縁大きく 開く器形		回転糸切	平安	
-15		土師器 脚付皿	底径4.8	脚高低い?			12～ 13C	
-16	図版 46	陶器 摺鉢			クシ目7条以上	ナデ		赤褐色 備前?
-17	同上	陶器 壺		端部平坦面				茶褐色の釉
-18	同上	須恵器 鉢	口径27.2	口縁端 平坦面		内面ハケ目 外面ナデ	中世	焼成不良 灰白色
-19	図版 45	陶器 碗	口径11.6 底径5			高台無釉		黒茶色の釉 肥前系の天目?
-20	図版 46	須恵器 鉢?	高6.5			内外面ハケ目	中世	
-21		土師器 支脚	筒部径5.9	筒部中央に径1.2cmの孔		全面ケズリ	古墳～ 奈良	
-22	図版 46	土師器 ミニチュア	口径3.8 高3	丸底		手づくね	古墳	
-23	同上	土師器 ミニチュア	底径2.8	壺形、平底		全面ミガキ	古墳	
-24	同上	石錐	長4.9 幅3			先端と周辺のみ剥離	縄文～ 弥生	玉随
-25	同上	剥片	長2.8 幅2.4			簡単な剥離	縄文～ 弥生	石英
-26		磨製 石斧	長11 幅4.9 厚2.9				縄文?	
-27	図版 46	砥石	長6.7 幅4.2 厚1.9			2面に研ぎ痕		
-28		叩石	長10.8 厚4.8			中央に打痕 他は全面磨痕		

16、17、19は陶器である。16は備前焼の摺鉢と思われる。くし目の状態からみて、14・5世紀以前であろう。19は肥前系と思われる天目茶碗である。17世紀ころのものであろうか。

22、23はミニチュア土器である。22は椀形、23は壺形である。22には指による整形痕が残るが、23は全面雑な磨き調整が施される。古墳時代から奈良時代のものと考えられる。

24～26、28は石器である。24は石錐、26は磨製石斧、28は叩き石である。24は玉髓製で、大きな剥離面を残し調整は簡単である。28は両面の中央に打痕がみられる。そのほかの面は全面擦られており、側面は平坦面をなす。これらの石器は縄文時代または弥生時代のものと思われる。周辺ではこの時期の遺構は検出されていないが、この丘陵に存在した縄文時代または弥生時代の遺構が耕作によって消滅した可能性を示唆する遺物である。

参考文献

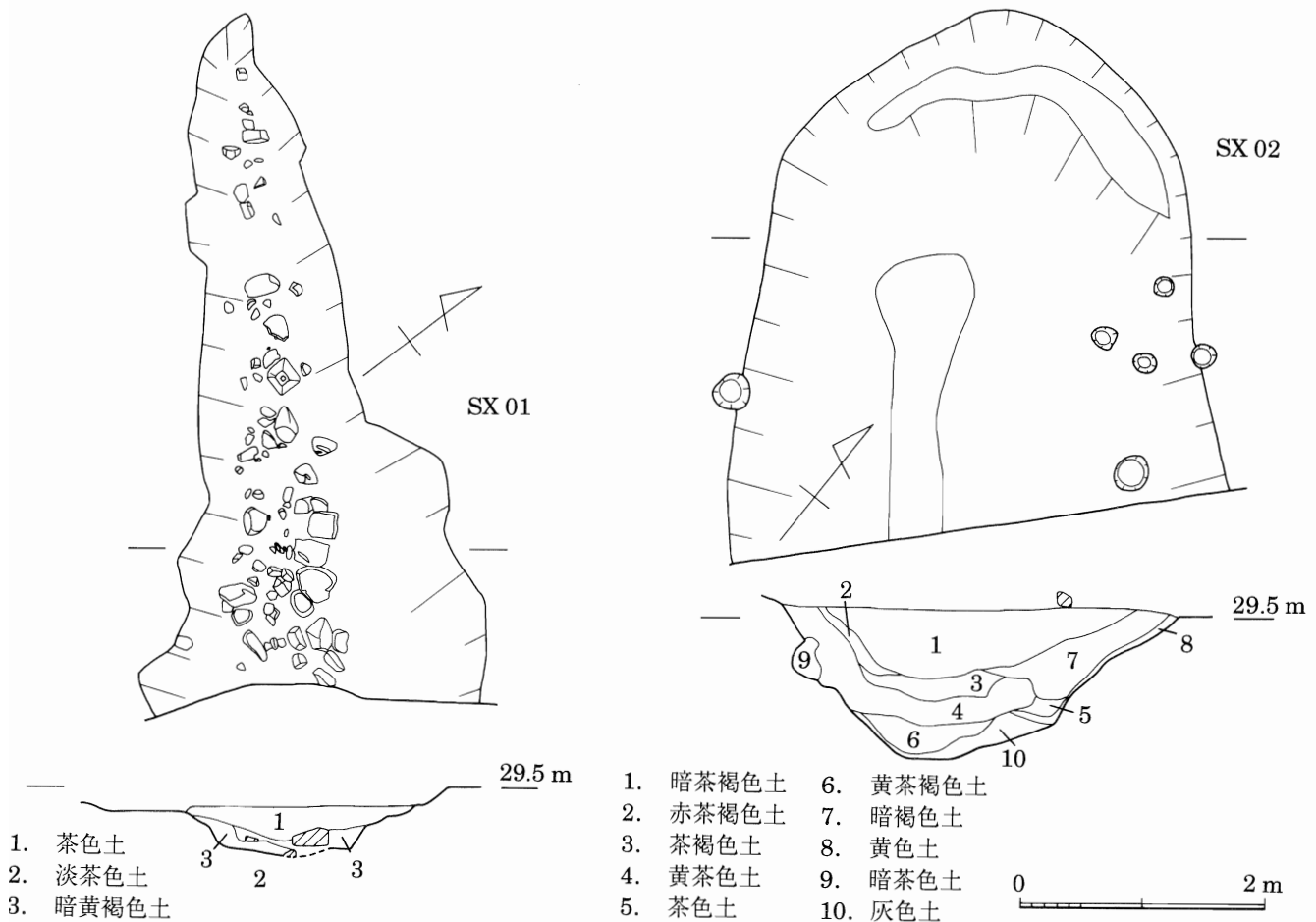
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994

島根県教育委員会「古曾志平迫廻田窯跡」『古曾志遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書』1989

島根県教育委員会『石台遺跡』1986

広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古』第8号 1992

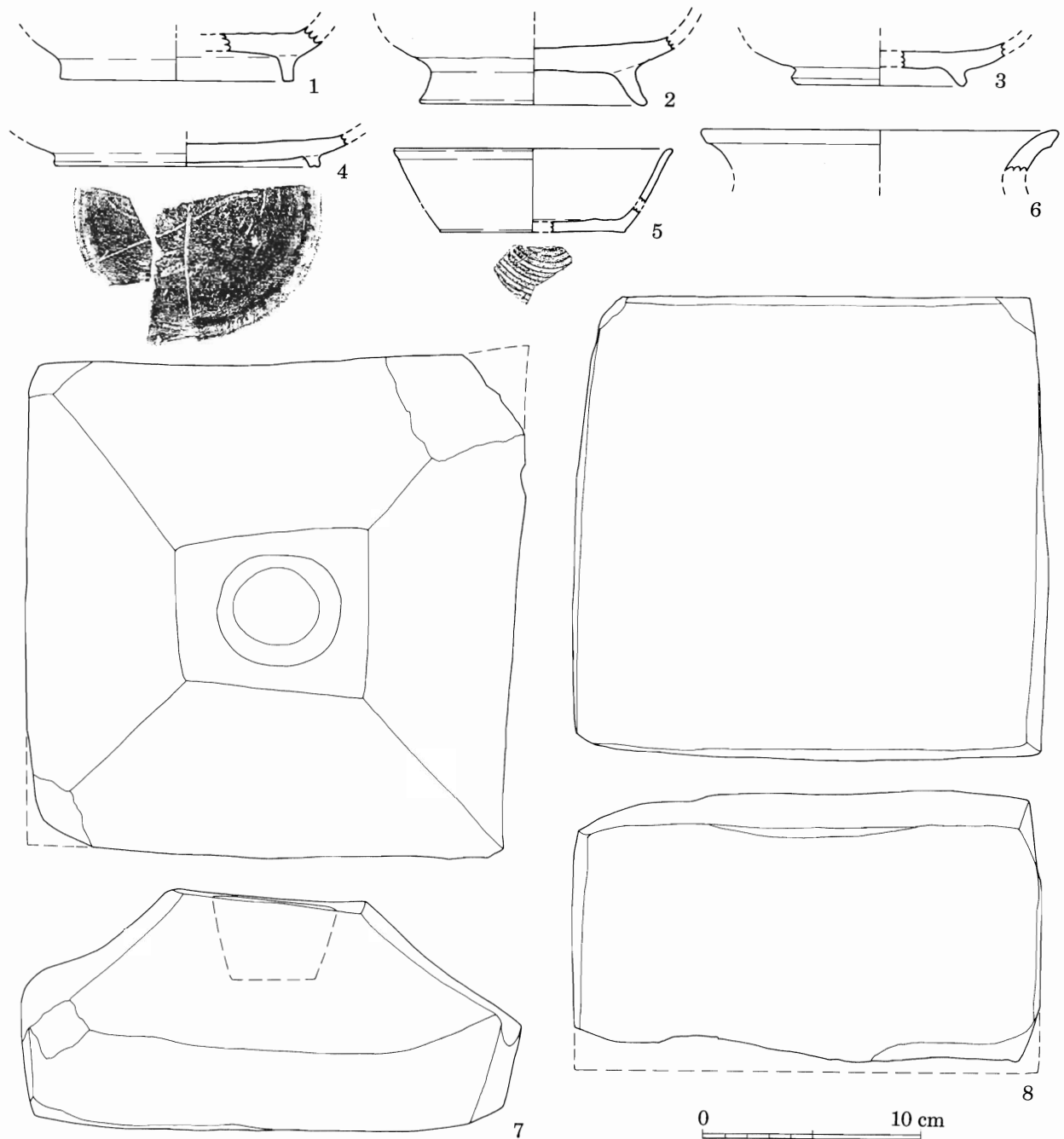
伊藤晃 上西節雄『日本陶磁全集10 備前』197 中央公論社



第64図 3B区 SX 01.02実測図 1:60

SX 01・02 (第64図 図版35) 溝状を呈す遺構である。SX 01は長さ5.1 m、幅東部端で3 m、SX 02は長さ4.2 m、幅東部端で3.9 m を測る。等高線に直交して掘り込まれ、標高が高い位置から低い位置に向かって次第に深くなっている。そのためともに東端部が最も深く、SX 01が1.6 m、SX 02が1.5 m である。溝底は凹凸が著しく、整えられていない。

SX 01では溝内に大小の石がほうり込まれたような状態で出土した。そのため道遺構とも考えられたが、石が底に密着したものが少ないことから道ではないと判断した。これらの石に混じって五輪塔の火輪と地輪が出土した(第65図7、8)。火輪は降棟、軒線ともゆるやかな弧を



第65図 3B区 SX 01.02出土遺物 1:3

描き、端部は外傾して切り落とされている。下面は軒が反っているためわずかに凸面状を呈し、わずかながら工具痕が残っている。また、上面の中央には直径5cm前後、深さ4cmの円孔が穿たれている。地輪は一面が欠損するが、各面とも平滑に仕上げられている。ともに来待石とよばれる凝灰岩である。14世紀ごろのものと思われる。これらは SX 01の廃棄の年代を示すと思われる。

SX 02からは須恵器が出土している（第65図1～6）。これらは奈良時代から平安時代前葉の土器であるが、これが SX 02の年代を示すとは考えにくい。SX 01と SX 02は平面形態などはやや違うものの、立地や掘り込みの状況などよく似ており、無関係に作られたとは考えにくい。積極的な根拠はないが、両者は近い時期に作られたものと考えたい。とすれば、SX 01から出土した五輪塔がこれらの遺構の時期に近いことになる。

ところで、SX 01、02と似た遺構としては、2区の SX 01～03がある。2区の SX 02からはやはり五輪塔が出土している。両者を比べると2区の火輪（第28図4）下面が平坦で、軒線と同じ曲線を描かないことから、3区の火輪（第65図7）よりやや新しいと思われる。

両者はやや時期を異にするが、立地、形状はよく似ており、また3区 SX 01、02も底面から湧水がみられ、この点も類似している。これらから両者は同様な性格の遺構の可能性はある。2区 SX 01～03は水溜め遺構と考えており、3区 SX 01、02もやはりこのような遺構ではなからうか。

参考文献

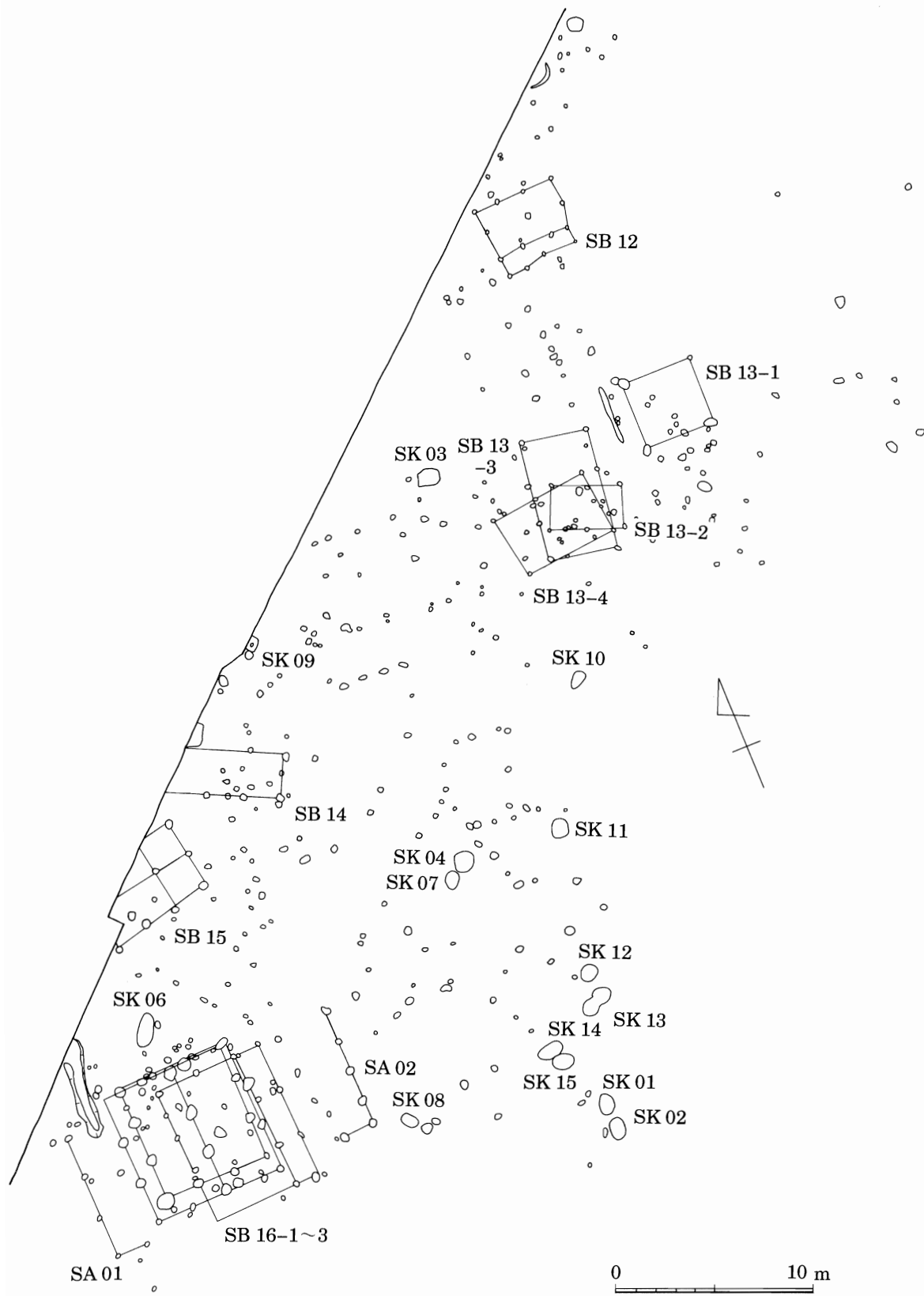
間野大丞「三隅町の中世石造物」『八雲立つ風土記の丘』140 1996

3B区 SX 02 土器一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量 (cm)	形 態	文 様	調 整 其 他	時 期	備 考
第64図-1		須恵器壺?	底径10.8	器壁厚い		回転糸切?		
-2		須恵器坏	底径10.4	高い高台		ヘラ切り後回転ナデ	7 C 末 8 C 前葉	外面にモミ痕
-3		須恵器坏	底径7.7	高台端部面取		ヘラ切り後回転ナデ	7 C 末 8 C 前葉	
-4		須恵器皿	底径12.3			回転糸切	7 C 末 8 C 前葉	「×」のヘラ記号
-5		須恵器坏	口径13.9 底径8.6			回転糸切	9 C 前葉?	
-6		須恵器甕	口径16.4	端部に段				

SX 01 石塔計測表 (単位 cm)

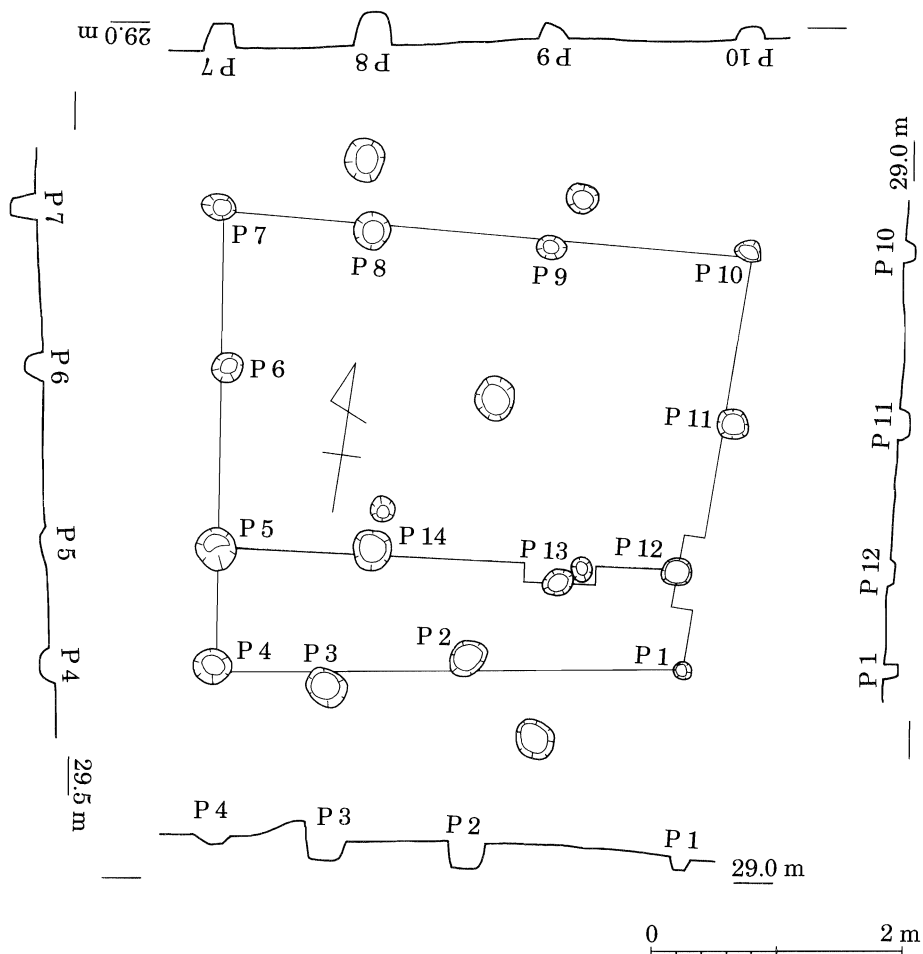
挿図番号	部 位	高 さ	上 面 辺	下 面 辺	軒の厚さ		孔 径	孔 の 深 さ
					中央	端部		
第64図-7	火 輪	11	7.3×8.8	22.5×22.1	3.4	5	5.1×5.6	4
-8	地 輪	12.5以上	21.5×22					



第66図 3C区遺構配置図 1:300

3C区（第66図 図版36） 調査区の北西部を**3C区**とした。ここはほぼ丘陵頂部にあたり、比較的広い面積の平坦面である。ここでは柱穴と思われるピットが多数検出されたが、掘立柱建物跡は10棟把握したにとどまった。確認できた掘立柱建物跡は**SB 16**（3棟重複）、**SB 14・15**、**SB 12～13**（このうち4棟が重複）の3群にまとまる。しかし明らかに柱穴と思われるピットがこれ以外にもたくさんあり、本来はさらに多くの建物跡があった可能性も考えられるので、これが当時の集落の実態を表しているとはかぎらない。また、東側（**3B区**との間）と南側ではピットはまばらであるが、これもかならずしも本来の遺構の在り方を示すものではないかもしれない。とくに南側は畑耕作による地山面の改変が著しく、遺構群の分布がみかけの分布である可能性もある。ただし、**3A区 SB 02**から**SB 04**の壁帯溝の外側（丘陵頂部側）ではあまり耕作の影響を受けた形跡がみうけられないにもかかわらずピットが検出できなかったことから、この部分についてはこれが本来の遺構の分布である可能性もあながち否定できない。

SB 12（第67図） 梁行き2.7 m、桁行き4.2 mを測る、2×3間の掘立柱建物跡で南側に庇をつける。北側の桁が南側に比べ約40 cmほど短く、平面形は台形を呈す。庇は他の柱間に比べ約1 mと狭く半間強の幅である。柱穴は全体にやや小型で、柱間は1.2～1.5 mと狭い。



第67図 3C区 SB 12実測図 1:60

3C区 SB 12計測表

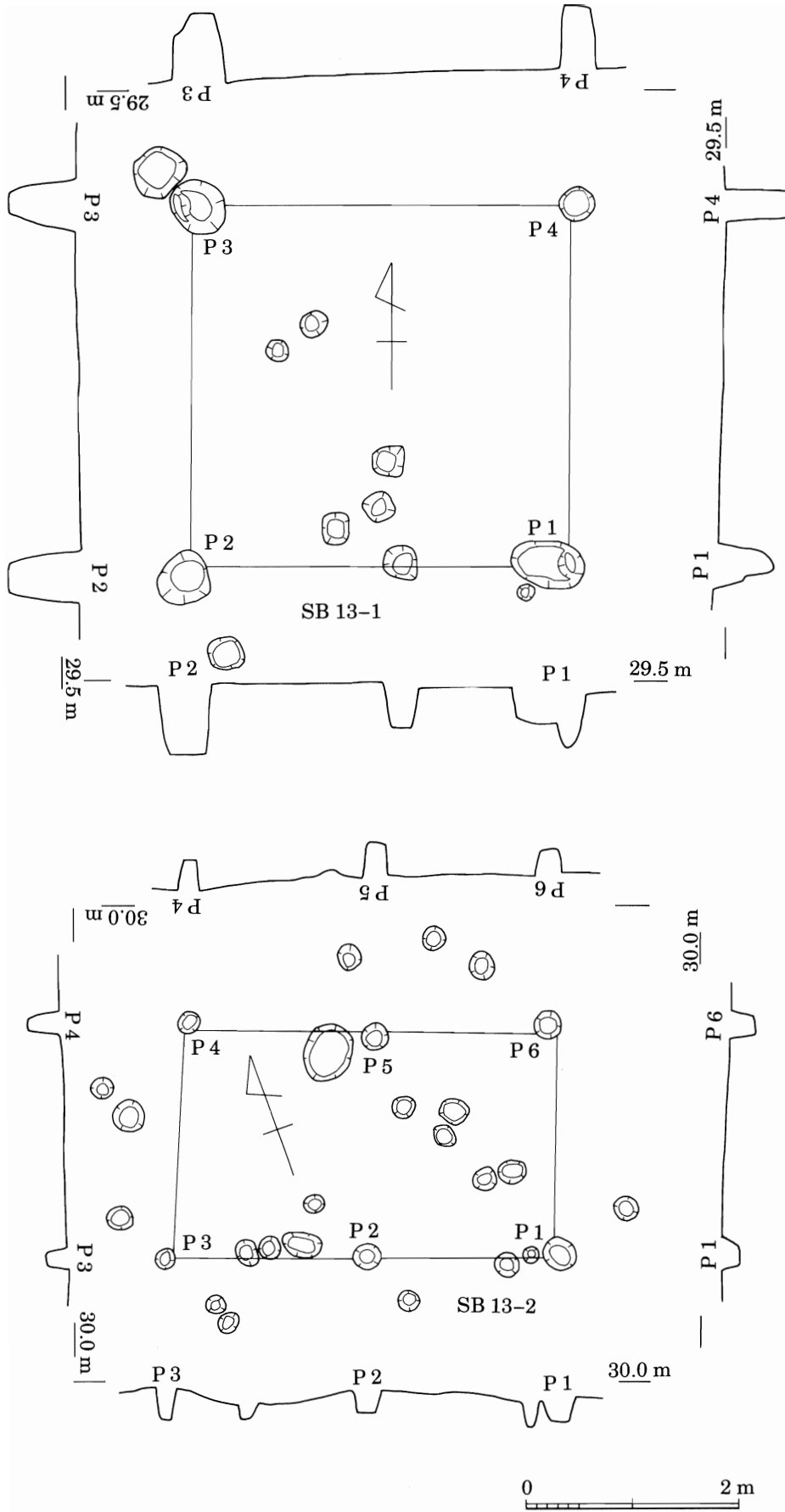
規 模		梁行き			桁行き		
		2間 (2.5 m)			3間 (3.6 m)		
主 軸		N-8° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	15×15	30×29	34×32	31×28	33×35	25×24
	深 さ	11	22	33	12	3	14
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	27×21	30×31	23×20	22×18	24×25	23×22
	深 さ	21	26	14	9	10	7
	番 号	P 13	P 14				
	上面径	27×22	33×30				
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.7	1.1	0.9	1.0	1.5	1.2
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		1.2	1.5	1.5	1.3	1.2	0.8
		P 5-14	P 13-14	P 12-13			
		1.2	1.5	0.9			

3C区 SB 13-1計測表

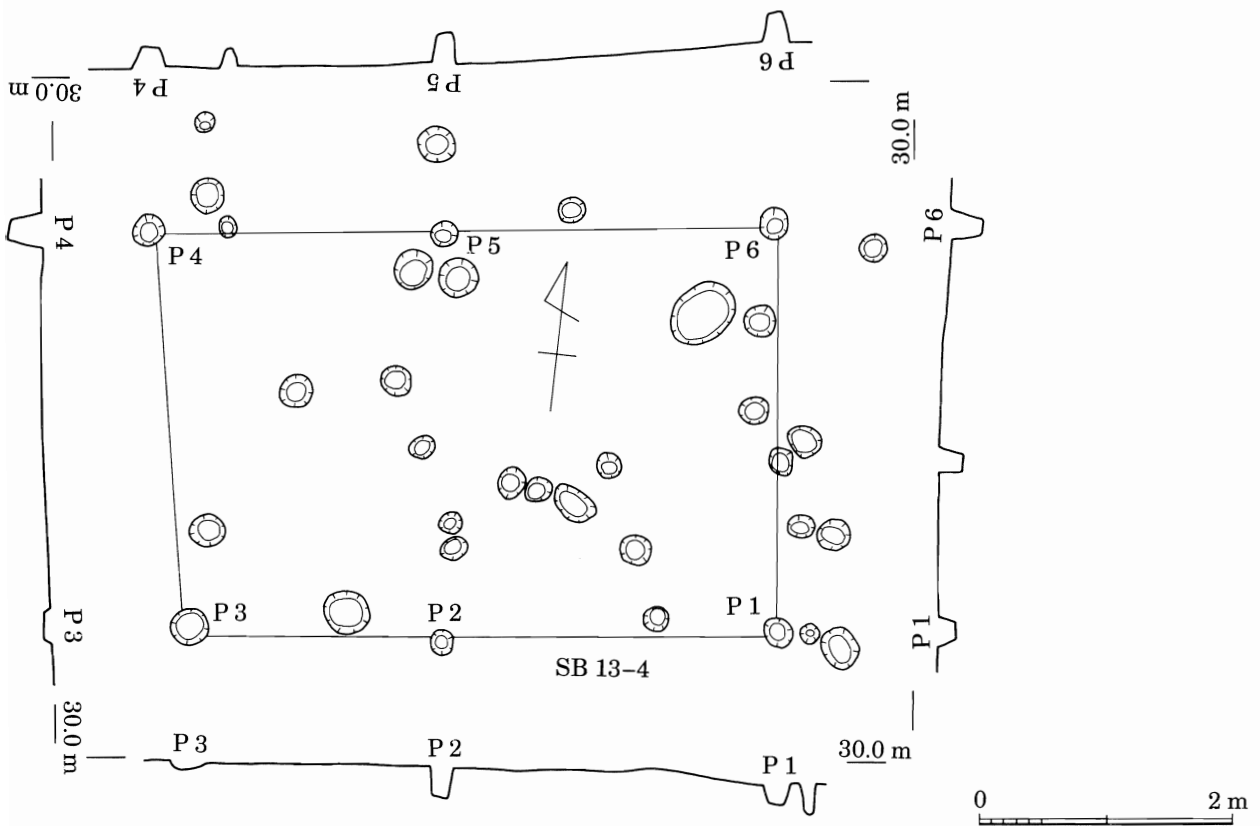
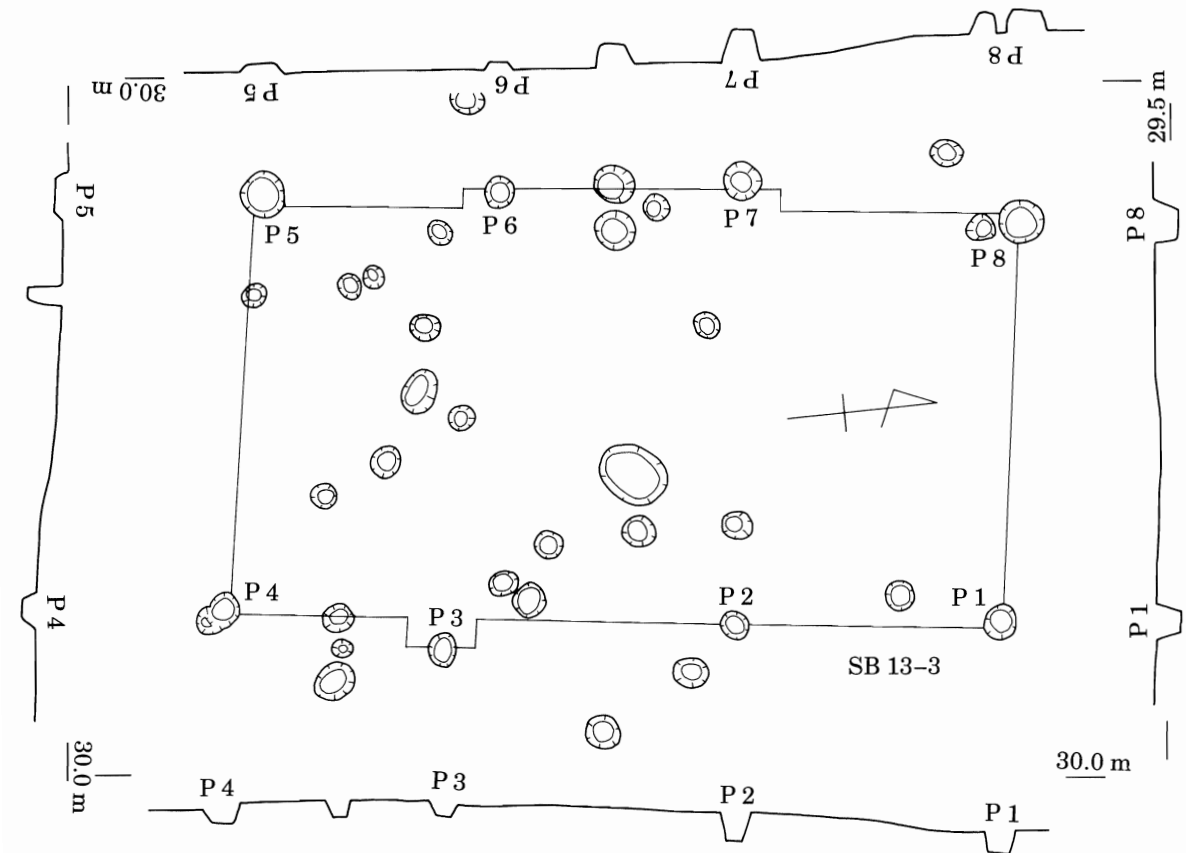
規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (3.5 m)			1間 (3.5 m)		
主 軸		N-0° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	68×46	51×51	54×55	34×33		
	深 さ	51	68	67	59		
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径						
	深 さ						
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-1	P 5-6	P 6-7
		3.5	3.5	3.5	3.5		
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1

3C区 SB 13-2計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (2.1 m)			2間 (3.4 m)		
主 軸		N-71° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	33×32	27×24	19×21	21×21	26×26	27×27
	深 さ	21	22	31	30	34	25
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径						
	深 さ						
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-1
		1.8	1.8	2.2	1.7	1.6	2.1
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1



第68図 3C区 SB 13-1.2実測図 1:60



第69图 3C区 SB 13-3.4实测图 1:60

3 C 区 SB 13-3計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (3.24 m)			3間 (6.09 m)		
主 軸		N-10° - W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	27×28	24×21	23×27	24×27	35×37	23×25
	深 さ	21	23	17	15	9	8
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	29×30	35×34				
	深 さ	27	19				
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.13	2.25	1.8	3.27	1.95	1.95
		P 7-8	P 8-1	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		2.16	3.24				

3 C 区 SB 13-4計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (3.2 m)			2間 (4.6 m)		
主 軸		N-83° - W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	23×24	19×21	30×28	26×26	22×21	23×24
	深 さ	16	30	7	26	26	25
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径						
	深 さ						
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-1
		2.6	2.0	3.0	2.3	2.5	3.2
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1

SB 13-1 (第68図) 1×1間の掘立柱建物跡である。一辺3.5 m を測る。

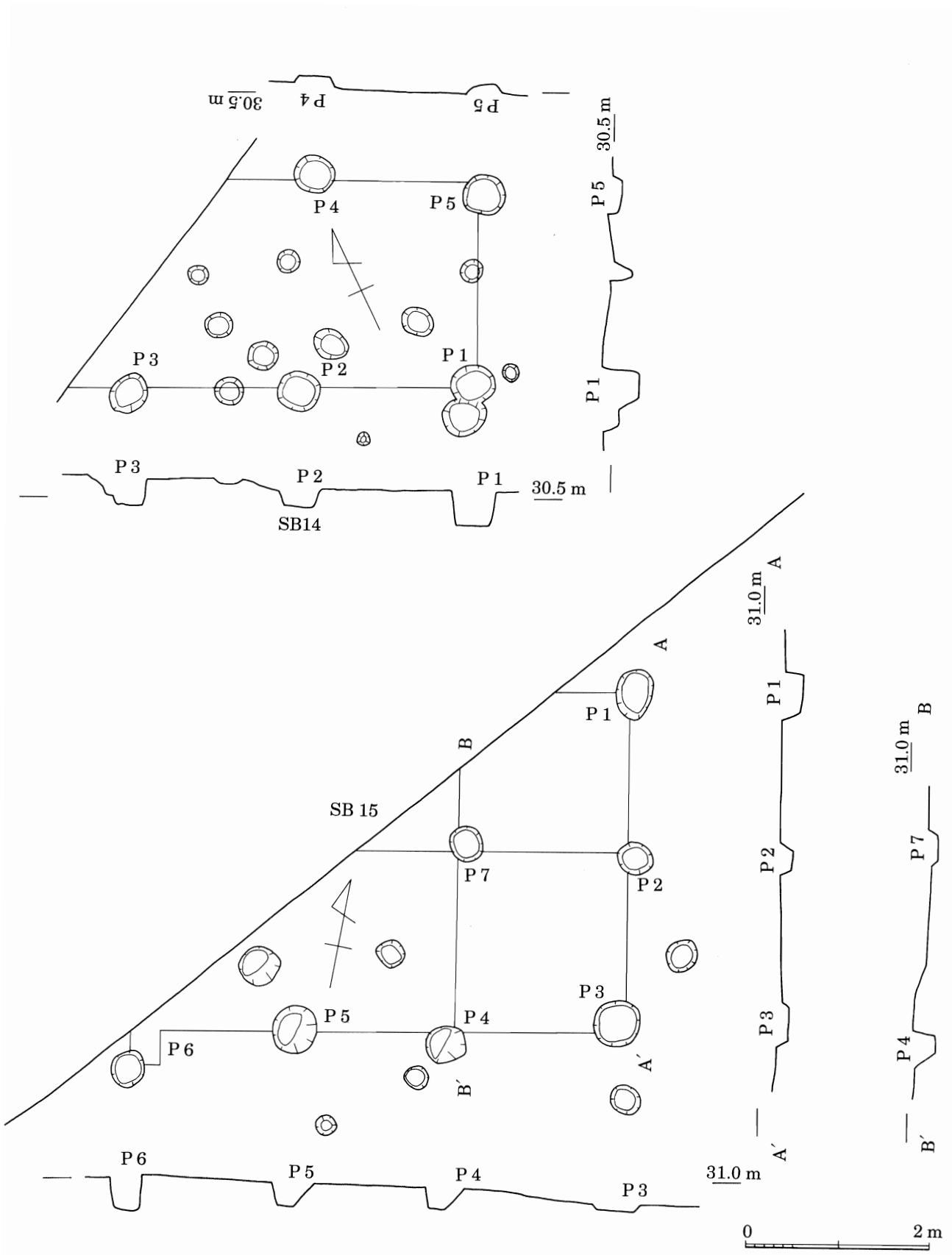
SB 13-2 (第68図) 1×2間の掘立柱建物跡である。梁行き3.2 m、桁行き4.6 m を測る。
柱間は P 1-P 2、P 5-P 6より P 2-3、P 4-5が40~50cmほど狭い。

SB 13-3 (第69図) 1×3間の掘立柱跡である。梁行き3.3 m、桁行き6.1 m を測る。

SB 13-4 (第69図) 1×2間の掘立柱建物跡である。梁行き2.1 m、桁行き3.6 m を測る柱間は P 5-P 6がやや広いが、ほぼ1.8 m の間隔で配されている。

SB 14 (第70図) 1×2間以上の掘立柱建物跡であるが、西端は調査区外に当たるため建物の全形を窺うことはできない。検出できた範囲は梁行き2.3 m、桁行き4.1 m であった。これがさらに西側に伸び3間以上となるのか、ここで終わり2間とどまるのかは不明である。柱穴は比較的大きく、深いものもある。

SB 15 (第70図) 2×3間以上の掘立柱建物跡である。これも西端が調査区外に当たるため、建物の全形を窺うことができない。確認できた規模は梁行き3.6 m、桁行き5.4 m である。P 4の北側に柱穴が1穴検出されているので、総柱の建物の可能性がある。柱間は約1.8 m でほぼ



第70图 3C区 SB14·15实测图 1:60

3C区 SB 14計測表

規 模		梁行き				桁行き	
		1間 (2.1 m)				2以上間 (3.6 m)	
主 軸		N-66° - E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	48×47	46×45	40×44	44×41	45×44	
	深 さ	39	20	29	12	12	
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-1	P 6-7
		1.8	1.8		1.8	2.1	
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1

3C区 SB 15計測表

規 模		梁行き				桁行き	
		2間 (3.6 m)				3間 (5.4 m)	
主 軸		N-79° - W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	55×39	36×39	49×49	41×40	52×46	40×34
	深 さ	21	13	14	25	26	39
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	39×36					
	深 さ	11					
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 4-7
		1.8	1.8	2.1	1.6	1.7	2.0
		P 2-7	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1

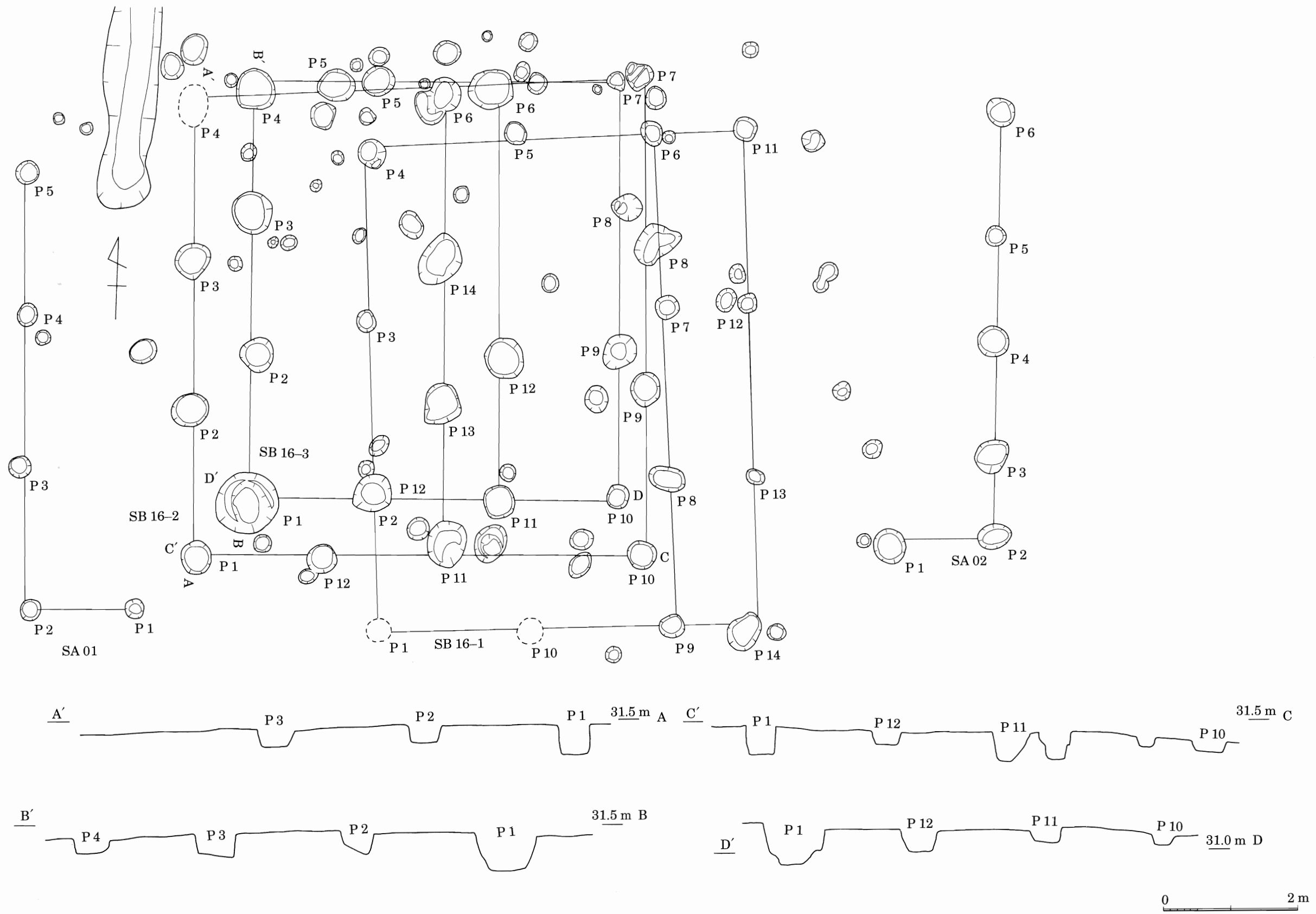
等間隔に並んでおり、柱穴は比較的大きく深い。

SB 16 (第71図) SB 15の南に位置する。掘立柱建物跡3棟が重複し、その外側には柵列がこれらを挟むように配されている。いずれの建物跡も柱穴は比較的大きく、各柱穴の間隔はほぼ均等である。

SB 16-1は2×3間の掘立柱建物跡で、東に庇をつける。梁行き4.2 m、桁行き5.6 m、庇1.2 mを測る。柱間は桁側では北の2間はほぼ等間隔であるが、南の1間は約50cm狭くなっている。梁側の柱間はほぼ等間隔で、庇はそのほぼ2分の1の間隔である。柱穴は比較的大きく深い、庇を構成する柱穴はやや径が小さい。

SB 16-2は2×3間の掘立柱建物跡で、東に庇をもつ。梁行き約3.6 m、桁行き6.9 m、庇幅3 mを測る。庇の幅が身舎の梁柱間の1.6倍とかなり広い特殊な構造で、あたかも2×3間の建物に1×3間の建物を付け足したような印象を与える。P 6-P 7間や P 10-P 11間では小さなピットが余っているが、これらは広い庇を支える東柱の可能性はある。

SB 16-3は一見3×3間にみえる掘立柱建物跡である。梁行きで全長5.4 m、桁行きで全長6.1 mを測る。この建物跡は3×3間にみえるが、P 6と P 11を結んだ線上に P 1-P 2、P 9-10と同間隔でピットがあることから、東側の1間分は庇の可能性はある。とすればこの建物跡は、や



第71图 3C区SB16实测图 1:60

はり2×3間の身舎の東に庇が付く建物と思われる。柱間は梁行きが1.8 m、桁行きが2.1 m で、梁、桁とも各柱穴はほぼ等間隔に配されている。庇部分も梁側の柱間が1.8 m と、身舎の柱間と等間隔である。

また、周囲には東西に柵が建てられている。平面形は、SA 01が「L」字形、SA 02が逆「L」字形で、建物を中心に対称的になるように配置されている。SA 01は南北が3間（6.3 m）で、各間とも2.1 m の柱間、東西が1間で1.5 m である。各建物跡との距離は、SB 16-1が5.1 m、SB 16-2が2.4 m、SB 16-2が3.3 m である。

3 C 区 SB 16-1計測表

規 模		梁行き				桁行き	
		2間 (3.6 m)				3間 (7.2 m)	
		庇					
		1間 (1.2 m)					
主 軸		N-5° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	/	56×57	33×29	45×43	34×33	36×32
	深 さ	/	37	10	17	33	25
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	37×36	36×51	34×37	/	36×35	30×29
	深 さ	35	13	26	/	8	12
	番 号	P 13	P 14	/	/	/	/
	上面径	24×26	57×51	/	/	/	/
	深 さ	7	20	/	/	/	/
柱 間 距 離 (m)	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7	
	2.1	2.5	2.6	2.0	1.7	2.5	
	P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-1	P 6-11	P 11-12	
	2.6	2.1	2.1	2.1	1.3	2.5	
	P 12-13	P 13-14	P 14-9	/	/	/	
	2.6	2.1	1.2	/	/	/	

SB 16-2計測表

規 模		梁行き				桁行き	
		2間 (3.6 m)				3間 (6.6 m)	
		庇					
		1間 (3 m)					
主 軸		N-4° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	48×45	50×54	55×51	/	47×57	59×66
	深 さ	43	24	26	/	21	20
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	57×43	62×70	51×45	41×45	39×33	68×58
	深 さ	21	28	20	17	14	42
	番 号	P 13	P 14	P 15	/	/	/
	上面径	44×45	61×54	77×64	/	/	/
	深 さ	21	19	46	/	/	/
柱 間 距 離 (m)	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7	
	2.1	2.4	2.1	2.1	2.1	3.0	
	P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1	
	2.4	2.2	2.3	3.0	1.8	1.8	
	P 11-13	P 13-14	P 14-6	/	/	/	
	2.2	2.1	2.4	/	/	/	

SA 02は南北4間（6.3 m）で、柱間は北からそれぞれ3 m、1.5 m、1.5 m、1.2 m、東西は1間で1.5 m である。各建物跡との距離は、SB 16-1が1.2 m、SB 16-2が1.7 m、SB 16-2が1.8 m である。

これらの建物跡では柱穴から遺物が出土している（第72図）。1は SB 16-1 P 4から出土した須恵器坏である。口径10.7cm、底径7.6cm、高さ3.3cmを測る。底部は平底で、口縁部は内湾しながら伸び、口縁端部はわずかに外反する。底部の切り離しは回転糸切りによっており、その後の調整は施されていない。

2は SB 16-3の P 5、3は同 P 3から出土している。ともに須恵器で、2が口縁部がくびれる坏、3が後円部が外反する無高台の皿である。3の底部は回転糸切り未調整である。

4は SB 16-2 P 3から出土した砥石である。全面非常によく使われており、表面は平滑で擦痕がみられる。法量は最大長7.2cm、最大幅6.4cm、厚さ4.5cmである。

これらの遺物はおおむね9世紀代前半のものと考えられる。この時期の須恵器の編年は十分

3 C 区 SB 16-3計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		3間 (5.4 m)			3間 (6.0 m)		
主 軸		N-2° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	90×91	53×50	62×60	59×57	44×50	59×66
	深 さ	59	31	36	22	31	19
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	28×28	39×46	51×49	33×34	50×46	56×57
	深 さ	19	6	37	17	21	37
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.1	2.1	2.1	1.8	1.8	1.8
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		1.8	2.2	2.0	1.8	1.8	1.8

3 C 区 SA 01計測表

柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	28×29	30×33	33×32	36×33	36×34	
	深 さ	33	29	24	15	20	
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.5	2.1	2.2	2.1		

3 C 区 SA 02計測表

柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	48×51	50×36	49×48	46×45	29×30	42×42
	深 さ	19	19	27	10	7	24
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.5	1.2	1.8	1.5	1.8	

ではなくそれぞれの土器の前後関係は不明だが、SB 16は3回の建て替えが行われているので、第74図1と同2、3とはわずかでも時間差があるはずである。根拠は全くないが、2、3が1よりも若干古いような感じを受ける。また、1は新しくても9世紀後半までは下らないように思われる。

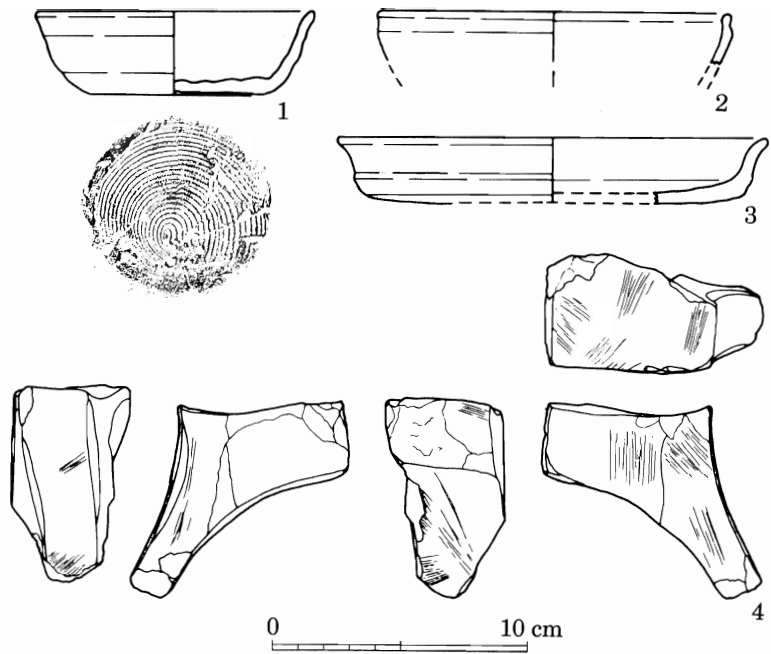
この年代観が正しいとすれば、SB 16-3が古く、SB 16-1が新しい時期の建物跡ということになる。また、これらの3棟はいずれ

も主軸をほぼ北にとっていることから、連続して建てられた可能性が高い。全体の配置はSB 16-1から2、3と少しずつ西にずれた位置にある。これは3棟が建て替えるたびに少しずつ移動したと考えたが適当とおもわれ、先の須恵器の年代観からするとSB 16-3が最初に建てられ、次にSB 16-2、最後にSB 16-1が建てられたことになる。そしてこの3回の建て替えは、半世紀前後の比較的短期間におこなわれたと考えられる。

これらの東西には、建物跡を中心に柵が対称的に設けられていた。どちらもほぼ同じ規模であるが、SA 01が南北3間であるのにたいしSA 02は南北4間であること、柱間の間隔がSA 01が均等であるのにたいしSA 02はややばらつきがあること、など若干ちがいがみられる。この違いが両者の建設時期の違いを表しているのか、同時期の単なる柱材の違いなのかは判断しがたい。しかし、全長が同じであることやその配置を考えると、2つの柵は同時に作られたように感じられる。

もし2つの柵が同時に作られたとするなら、3棟のうちどの建物跡が建てられた時に作られたのであろうか。2つの柵にちょうど納まるのはSB 16-3のみで、他の2棟は南側にはみ出すことになる。このことから、これらの柵がSB 16-3にもなって作られた蓋然性はあると思われる。

ただし、これらが他の建物跡に伴う可能性も否定できず、存続時期についても当初だけのものではなかったのか、建物の建て替えは3回でも柵は連続して存在していたのか、いろいろな可能性が残されている。これらの組み合わせはいろいろ考えられるが、判断材料に欠けているといわざるをえない。



第72図 3C区 SB 16出土遺物 1:3

5. 小 結

3区では竪穴住居跡1、掘立柱建物跡27のほか土壌などが検出された。掘立柱建物跡に比べ竪穴住居跡が1棟しか検出されなかったのは、畑耕作の影響だけとは考えられない。もともとこの丘陵上には竪穴住居が作られなかったと考えたがよいであろう。3A区のSI01は北西にゆるやかに下る谷の基部に立地しているので、ひょっとしたら竪穴住居跡群は調査区外であるこの谷の斜面に存在するかもしれない。

3区で検出された遺構はほとんどが掘立柱建物跡である。掘立柱建物跡は27棟が確認されたが、これ以外にも柱穴になりうるピットがたくさんあり、掘立柱建物跡の実数はさらに多いと思われる。これらは古代から近世にかけての建物跡と考えられるが、遺物が少なくすべての建物跡の年代を決定することはできない。

間違いなく古代の建物跡と考えられるのは、3B区のSB06と3C区のSB16である。出土遺物からSB16が9世紀前半、SB06が9世紀末から10世紀と考えられる。2つの建物跡は出土遺物は前者が後者に先行するが、時期的に併存していた可能性がある。SB16は重複した3棟すべてが庇付きの建物、SB06が大型方形プランの柱穴をもつ大型建物、と両者とも一般の住居建物とは考えにくい建物跡である。その性格については手掛かりとなる材料がないが、公的な建物、あるいは豪族の居館などの可能性が考えられる。また、3C区のSB15も古代的な様相をもつ掘立柱建物跡である。総柱の可能性が強いのでSB16に伴う倉庫であろうか。なお、調査の都合上2区に入れたが、2区SB01とした掘立柱建物跡も方形プランの柱穴をもち、古代の建物跡と考えられる。これも一般集落の建物とは思われず、SB06、16との関係が注目される。

前述のとおり、このような建物跡は官衙などの公的な建物か豪族居館に比定されることが多い。しかし当遺跡の以上の掘立柱建物跡は官衙や豪族居館の建物群としてはまとまりがなく、散在的な在り方をしているのが特徴である。官衙や豪族居館の中心部でなく縁辺に当たるとも考えられるが、これも積極的な根拠を見いだせない。

一方、3B区SB06を3A区SB04のように村落内の神社または寺院のような性格と考えたらどうか。この場合、3C区SB16が有力農民程度の住居が想定でき、神社または小寺院の背後に倉庫(SB15)を伴った有力農民の住居がある、といった風景が想像できる。これについても、SB06が一部しか検出されていないので想像の域をでない。また、2区SB01との関係も説明できない。

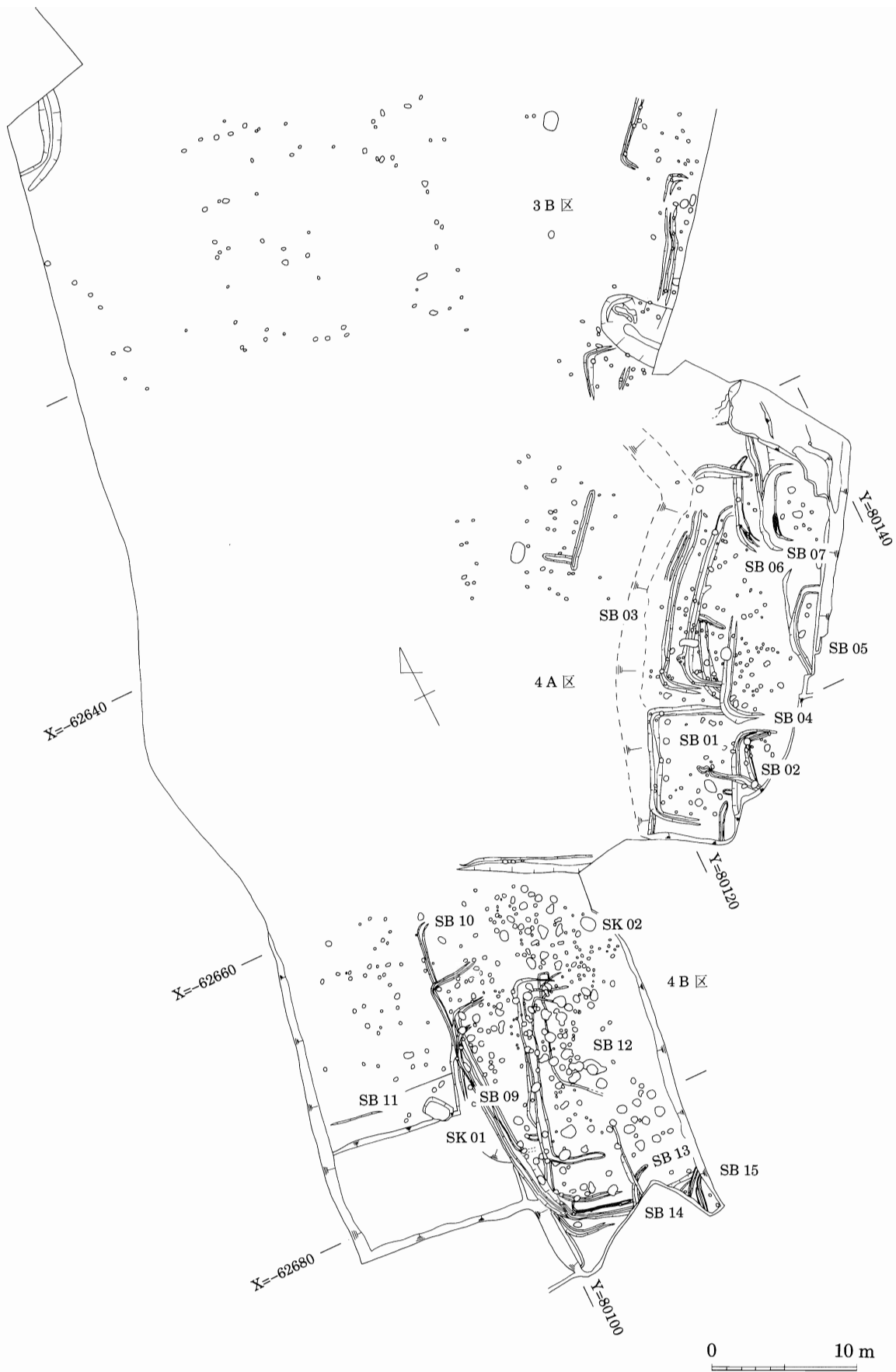
中世の建物跡としては3A区のSB02がある。これは面積が約300m²にもおよぶ加工段上に建てられた建物跡である。青磁などからほぼ14～15世紀ごろの時期と思われる。規模が大きく、このころの一般的な住居とは考えにくい。ここは古地図に「土居」の地名が残っている

かない。

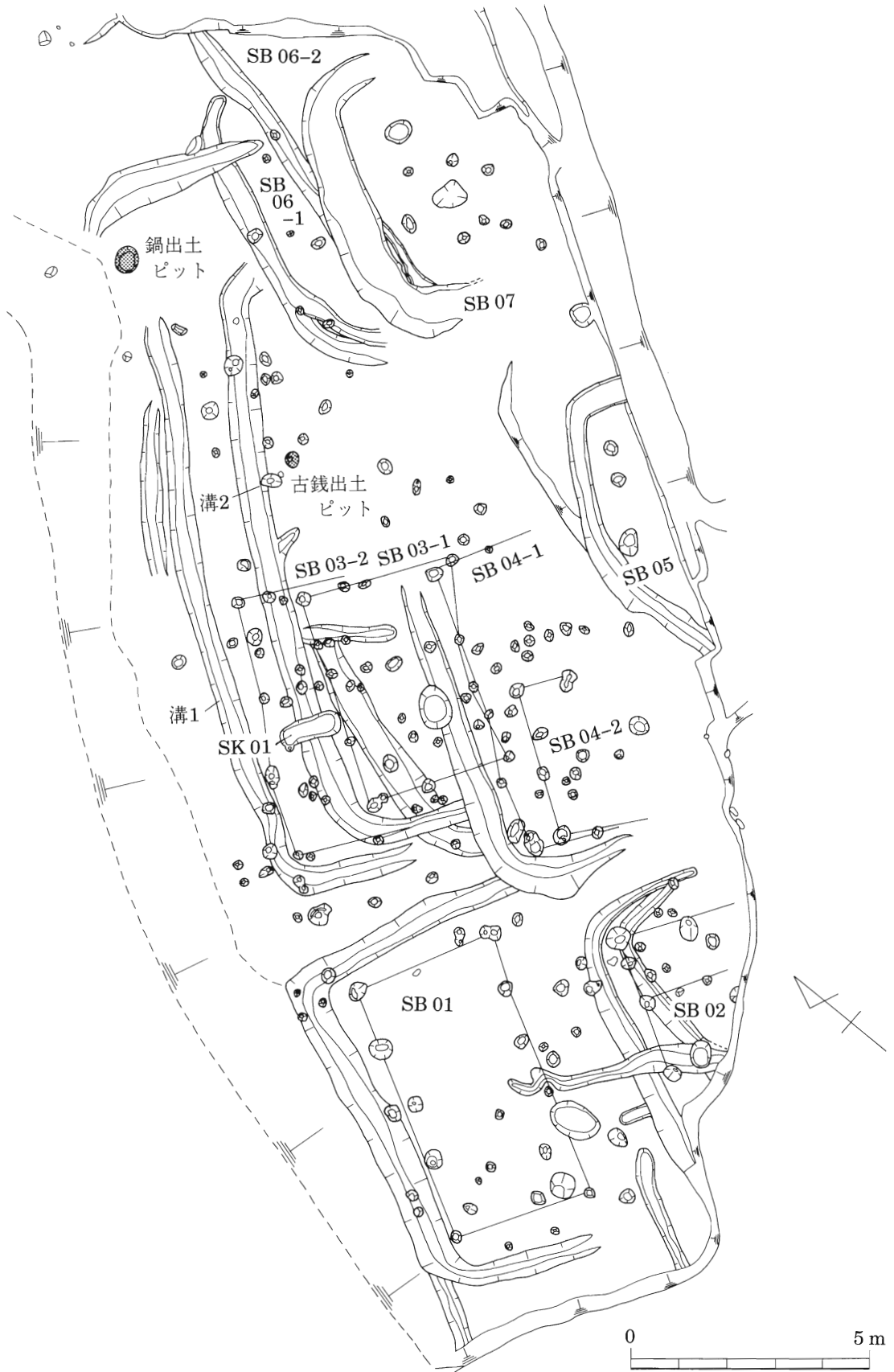
参考文献

乃木郷土誌編纂委員会『乃木郷土誌』1991

第 6 章 4 区



第74図 4区遺構配置図 1:400



第75図 4A区遺構配置図 1:125

1、概 要

東は3区、西は5区に連続した地区である。地形的にはこのあたりまで平坦な地形が続き、ここから西は急に高くなり5区との比高差は約14 mである。4 A と4 B 区の間には小道があり、便宜上ここで4 A・B 区の2小区に分けた。4 A 区の遺構群は3 B 区と4 B 区の東に伸びると思われるが、調査区の制約から調査は行っていない。4 B 区も南に連続している可能性が高いが、これも調査区の制約から調査を行っていない。

丘陵の頂部に当たる地点は耕作による掘削が著しく、遺構はほとんど検出されていない。しかし地山の改変を考えたにしても斜面での遺構の集中度は異常で、集落の大部分は斜面が中心であったと感じられる。

ともに遺構は南斜面に集中しており、頂部から少し下方に下がった部分でとくに多く検出された。4 A・B 区ともに加工段を伴う住居跡が複雑に重複しており、とくに4 B 区では掘立柱建物跡と壁帯溝とがかならずしもうまく対応しない。壁帯溝の数と掘立柱建物跡の数が合わないのはピット群から掘立柱建物跡が抽出しきれなかったこともあるが、1つの加工段で数回の建て替えが行われた結果と考えられる。

2、検出遺構

(1) 4 A 区 (第74図 図版47)

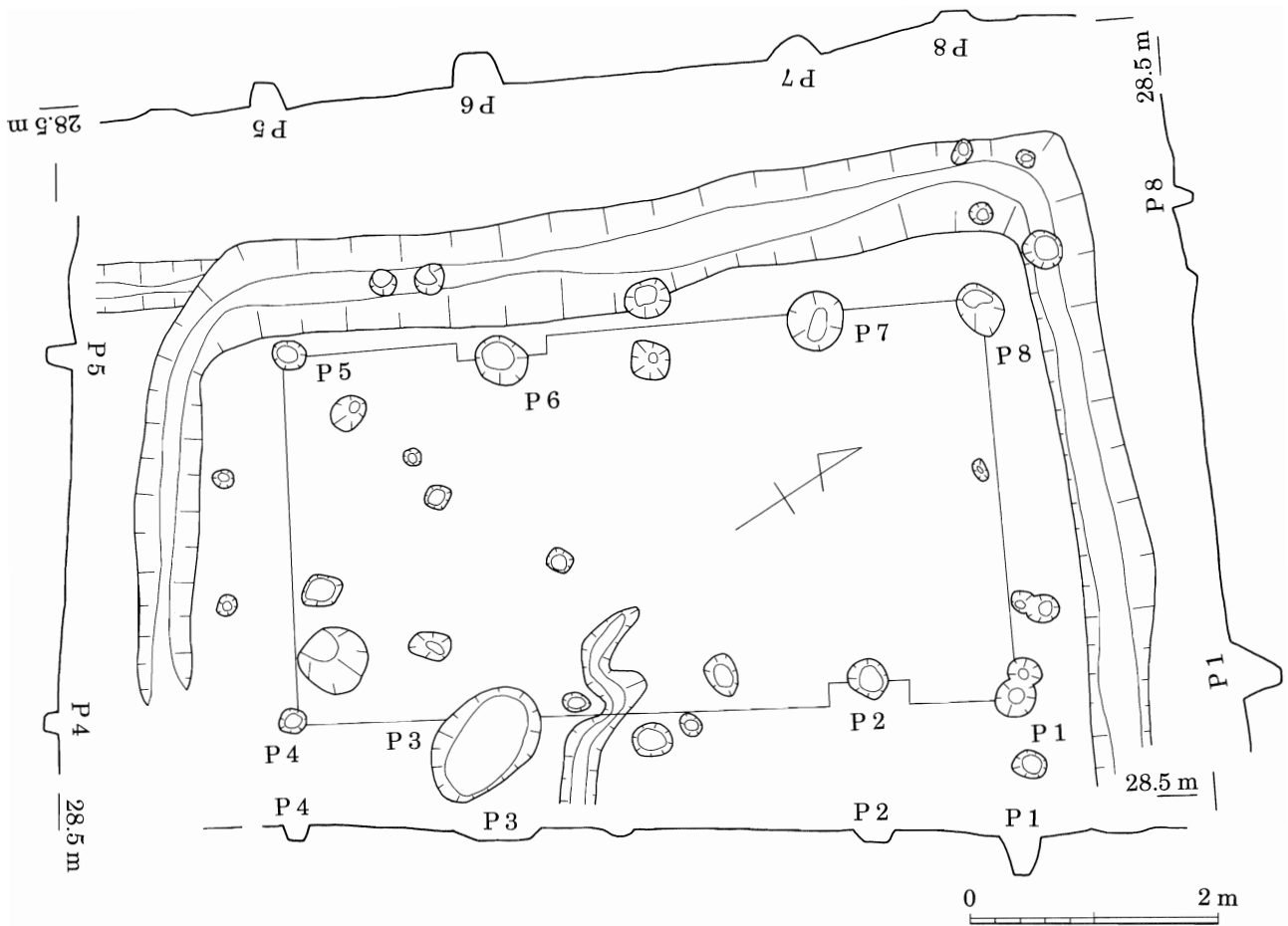
丘陵東斜面を掘削して加工段を作り、そこに掘立柱建物跡が建てられている。概して標高の高い位置にある建物は加工段が大型で、下方のものは規模が小さい。時期的には下方のものが古墳時代後期から奈良時代、上方のものが中世から近世にかけてと大きく分れる。これらの中間の時期の建物は検出されていないので、両者は連続した集落とはいえない。

SB 01 (第76図 図版47) 浅い壁帯溝によって区画された加工段に建てられた1×3間の掘立柱建物跡である。壁帯溝は南北7.8 m、東西5.4 m を測り、平面形は「コ」の字形を呈す。建物の規模は梁行き3.1 m、桁行き5.7 m である。桁行きの柱間は1.2 m から1.6 m とまちまちで、柱の並びも一直線にならない。

出土遺物はほとんどないが、わずかながら近世の陶器が出土していることから、SB 01は近世の掘立柱建物跡と思われる。

4 A 区 SB 01計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (3.1 m)			3間 (5.7 m)		
主 軸		N-28° -W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	32×31	31×33	107×72	21×21	27×23	41×40
	深 さ	31	12	11	14	24	25
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
柱 間 距 離 (m)	上面径	45×48	39×44				
	深 さ	19	9				
		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.2	3.0	1.5	3.0	1.6	2.6
		P 7-8	P 8-1	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		1.3	3.2				

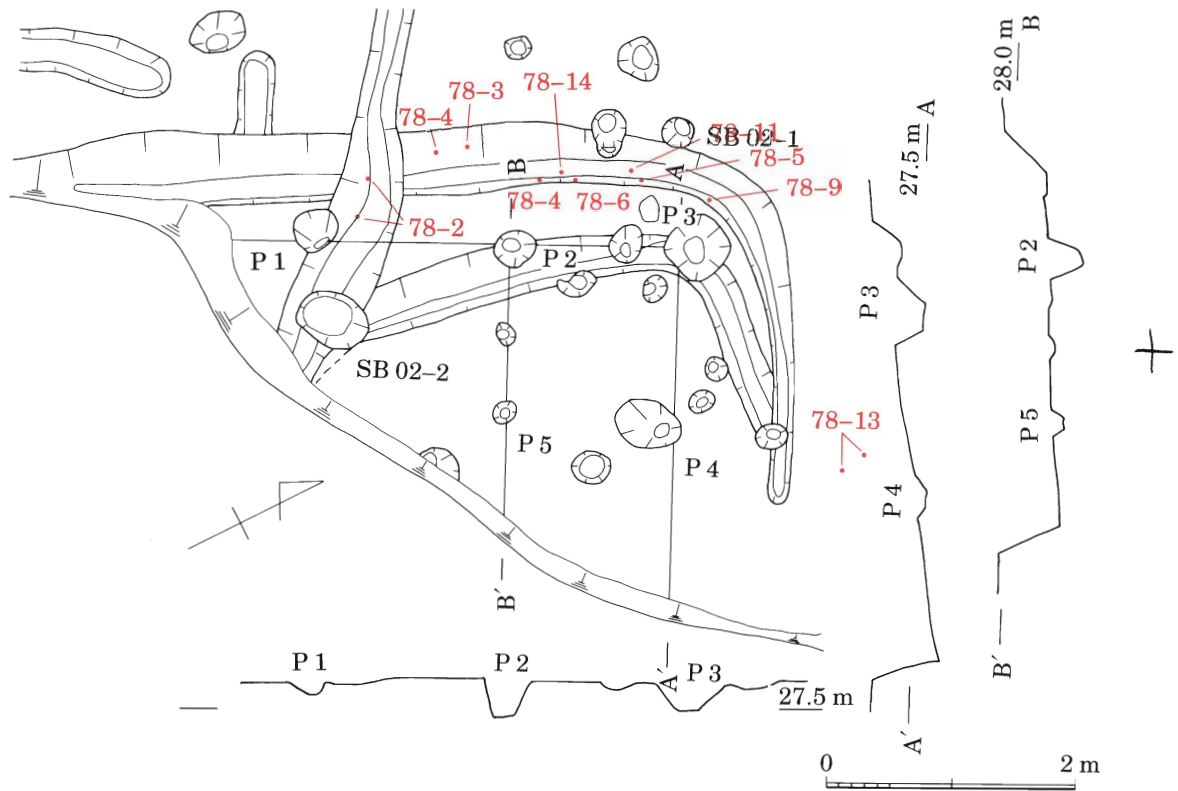


第76図 4A区 SB 01実測図 1:60

SB 02 (第77図 図版49) 調査区の東南隅に位置する。2棟が重複しており、それぞれ SB 02-1、SB 02-2とした。両者の前後関係は土層の観察によっても判断がつかなかった。しかし SB 02-1を完掘後、床面を清掃中に SB 02-2が検出できたことを考えると、SB 02-2が先行するかもしれない。

調査が一部にとどまったため、掘立柱建物跡の全形は把握できなかった。壁帯溝はともに逆「L」字形を呈し、確認できた規模は SB 02-1が全長約6.6 m、SB 02-2が約3.9 mである。両者はほぼ重複するが、SB 02-2が若干北寄りに主軸が振れている。SB 02-1に伴うと思われる掘立柱建物跡は2×2間以上で北側に庇がつくものである。庇を含めた規模は梁行き2.7 m以上、桁行き3.6 mである。柱間は P 1-P 2が1.5 m、P 2-P 5が1.3 m、P 2-P 3が1.5 m、P 3-P 4が1.5 mである。SB 02-2に伴う掘立柱建物跡は抽出できなかった。

出土遺物 (第78図 図版65・66) はほとんどの出土レベルが SB 02-1の床面により上から出土していることから、SB 02-1に伴うと考えられる。須恵器蓋(1~3)はいずれも沈線によって稜がつくられ、口縁端部には沈線(1、2)または段(3)がつく(図版65)。天井部の削りは1が中央部にまでおよんでいる(図版66)。坏は4、6、7、11が中央部にまで削りがおおよび、5、9は周囲が削り、中央部にはなで調整が施されている(図版66)。なお、6は全面削りの後



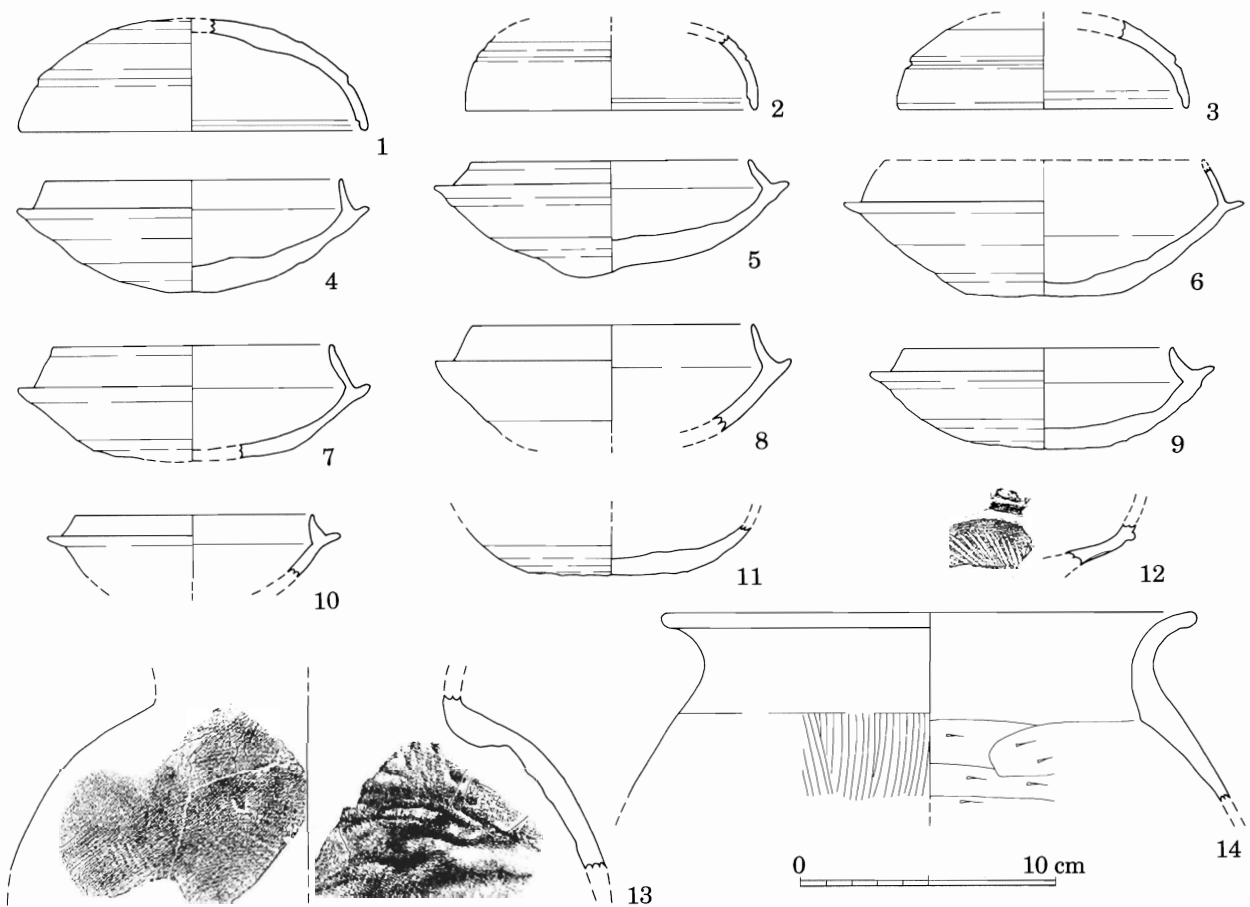
第77図 4B区 SB 02実測図 1:60

全面になで調整が施されている。12は口縁部の小片で、頸部に櫛状工具による刺突文が描かれている。

これらの蓋坏はA3型とA4型とが混在していることから、出雲4期と考えられる。ただ、全体的にA3型が多いことから4期でもやや古い様相を示しているといえる。

4A区 SB 02出土土器一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時分類	備考
第78図-1	65 66	須恵器蓋	口径13.8 器高4.5	稜は1条の沈線による。 口縁内面に沈線		天井部、回転ケズリ	蓋A4 4期	ろくろ右回転
-2	65	同	口径11.5	同上		同上	同上?	
-3	65 66	同	口径11.4	稜は1条の沈線による。 口縁内面わずかに段		同上	同上?	ろくろ右回転
-4	65 66	須恵器坏	口径13.9 器高4.45	たちあがり短く内傾		底部回転ケズリ	坏A4 4期	同上
-5		同	口径11.0 器高4.2	同上		同上	同上	ろくろ左回転
-6	66	同	口径13.1	たちあがりやや長い		底部回転ケズリ	坏A3 3~4期	ろくろ右回転
-7		同	口径11.0 器高4.5	同上		底部回転ケズリ	同上	同上
-8		同	口径11.0	同上		同上	同上	同上
-9	65 66	同	口径13.6 器高4	たちあがり短く内傾		底部周辺回転ケズリ 中央ヘラ切後ナデ	坏A5? 4期	同上
-10		同	口径9.4	たちあがり非常に短い			坏A7? 5期	歪み大きい
-11		同				底部回転ケズリ 中央ナデ	坏A5? 4期	ろくろ右回転
-12		須恵器高坏		屈曲部に突線		ヘラ状工具による刺突文	高坏A3? 3~4期	
-13		須恵器壺	頸径11.0			外面平行叩き、カキ目 内面半円形の当具痕		
-14	66	土師器甕	口径21.2	口縁外反		内面ケズリ 外面ハケ目		



第78図 4A区 SB 02出土遺物 1:3

SB 03 (第79～82図) 南北の長さ約12 m、東西約2.5 m を測る「L」字形の壁帯溝2条で区画された建物跡である。ここで抽出できた掘立柱建物跡は2棟にとどまった。壁帯溝で区画された面積は大きいので、検出はできなかつたがおそらく複数の建物が建っていたと思われる。2条の壁帯溝は東の方向にほぼ平行して配置しているので、連続的に建て替えられたものと考えられる。前後関係ははっきりしないが、福富Ⅰ遺跡では山側に建て替えることが多いので溝1に区画された加工段が新しいかもしれない。

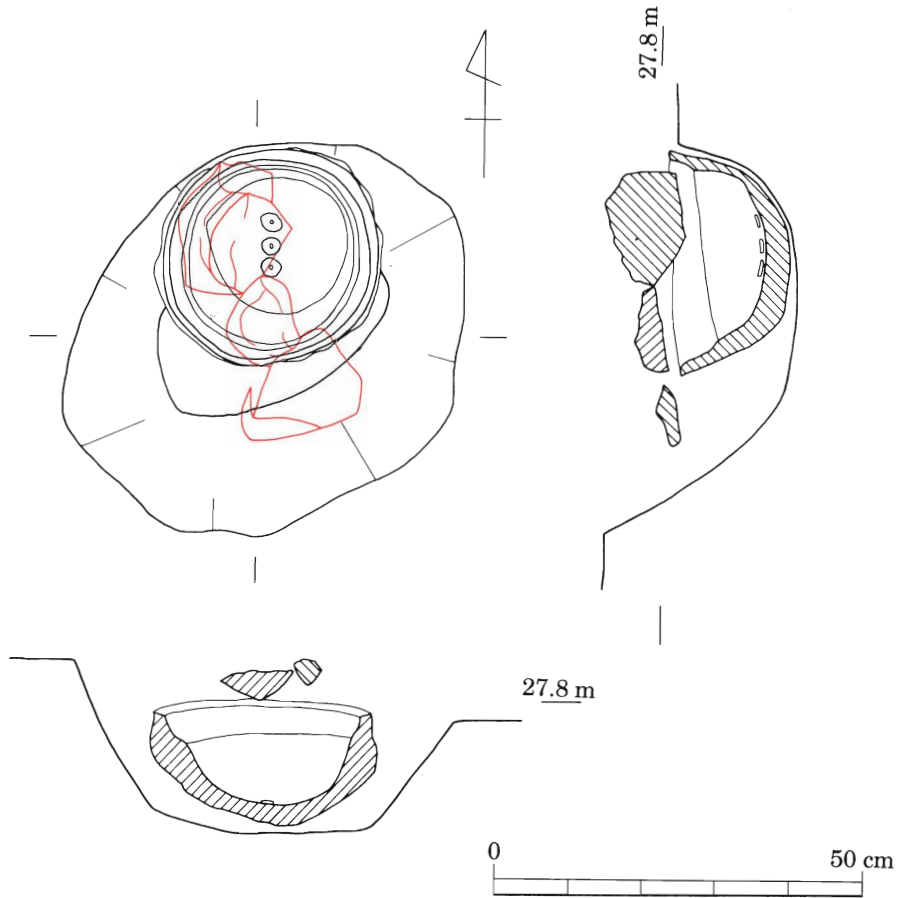
溝1の南約1.6 m から鉄鍋が埋納された状態で出土し(第79図 図版48)、溝1の地鎮に伴うものと考えられた。これは地山に60cm×50cm、深さ30cmの楕円形のピットを掘り込み、鉄鍋はピットの北側壁に密着させて埋納されていた。鉄鍋が北に寄って置かれているためピットの南側は空間ができています。ピット内にはこれ以外に余分な空間はないこと、鉄鍋が地山に密着していることから、このピットは鉄鍋を埋納するための埋納坑であると思われる。また、この上面には10cmから20cm大の自然石があった(図版48)が、これは偶然のものとは思えず、土を埋めた後に置かれたものであると判断した。鉄鍋の中央底には宋銭が3枚入れられていた。これも原位置の状態で出土し、当時の地鎮のようすが窺われる資料である。

鉄鍋は口径28cm、高さ12.5cmを測る。口縁部は屈曲して段がつき、釣り手などはつけられ

ていない。巣が多く、鋳物である（第80図図版64）。

鉄鍋内に入れられていた宋銭は「紹聖元寶（初鋳1094年）」「元祐通寶（初鋳1086年）」（元豊通寶（初鋳1078年）、元符通寶（初鋳1098年）の可能性もあり）、「熙寧元寶（初鋳1068年）」である。

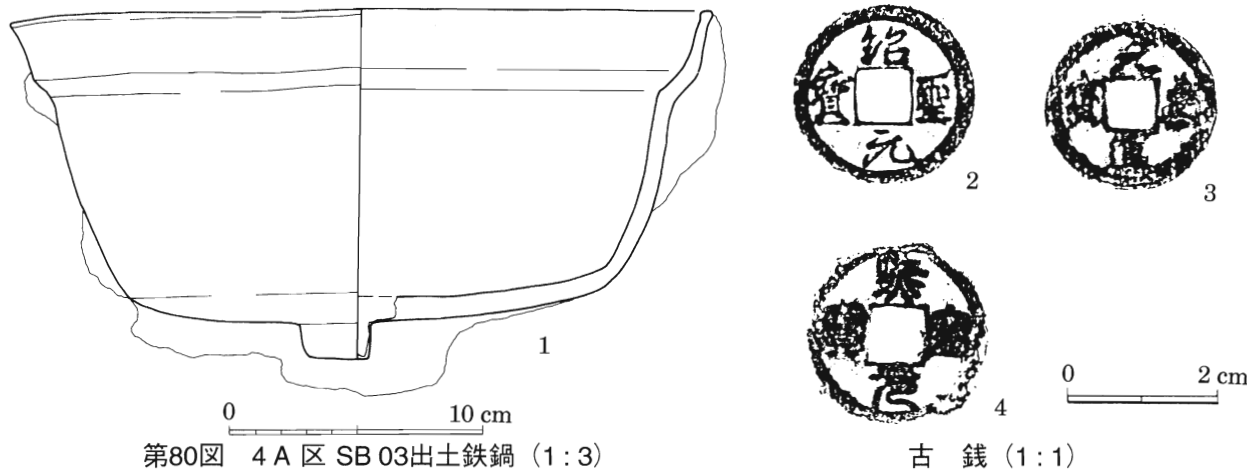
また溝2中ほどに位置するピットから宋銭が出土した（第75図）。これらは7枚が重なっており、緡銭の状態であった。これも祭り



第79図 4A区 SB 03鉄鍋、古銭出土状況 1:10

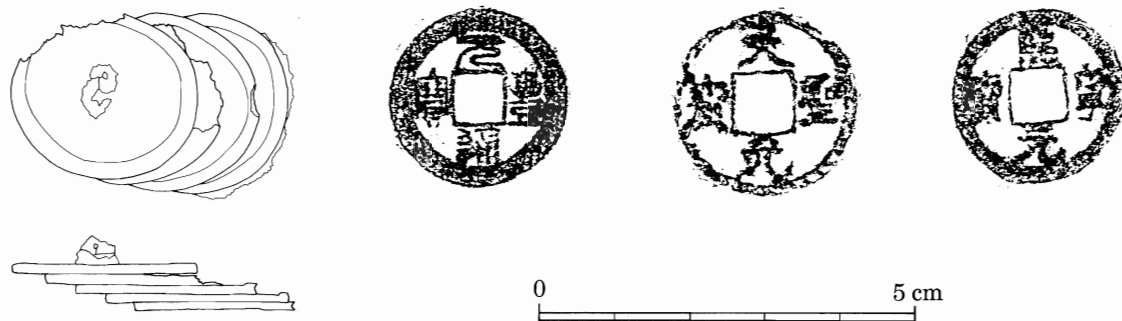
に関するものと思われる。このピットは周辺のピットと変わりはなく、地鎮用として特別に作られた遺構のように思われなかった。もしこのピットが柱穴として使われていたのなら、建物の廃棄に伴う祭祀ということになるだろうか。逆にこのピットが柱穴ではなく祭祀のための小ピットであるなら、これは地鎮の際に作られた遺構ということになる。

7枚のうち判読できるものは3枚であった（第81図）。判読できたのは「天聖元寶（初鋳1023年）」、「元豊通寶（初鋳1078年）」、「熙寧元寶（初鋳1068年）」である（第81図）。



第80図 4A区 SB 03出土鉄鍋 (1:3)

古銭 (1:1)



第81図 4A区 SB03ピット内出土古銭 1:1

これらの遺物から、溝1、溝2によって区画された加工段は中世の建物敷地と考えられる。詳細な時期は古銭では決めがたいため、不明といわざるをえない。

SB03-2 (第82図) 溝1の南端に位置する。2×3間の掘立柱建物と思われるが、東側の桁は柱穴が検出できなかった。検出できた建物の規模は梁行き約1.6 m 以上、桁行き5.4 m である。柱間はP4-5がやや広い(2.1 m)が、他の柱間は約1.6 m とほぼ等間隔である。

主軸が溝1にほぼ平行することから、この掘立柱建物跡は溝1に伴うと考えられる。ただ、溝1に区画された敷地面積はかなり大きいので、これ1棟だけが建っていたとは考えにくい。北側に別の掘立柱建物跡があり、数棟で構成されていたように思われる。

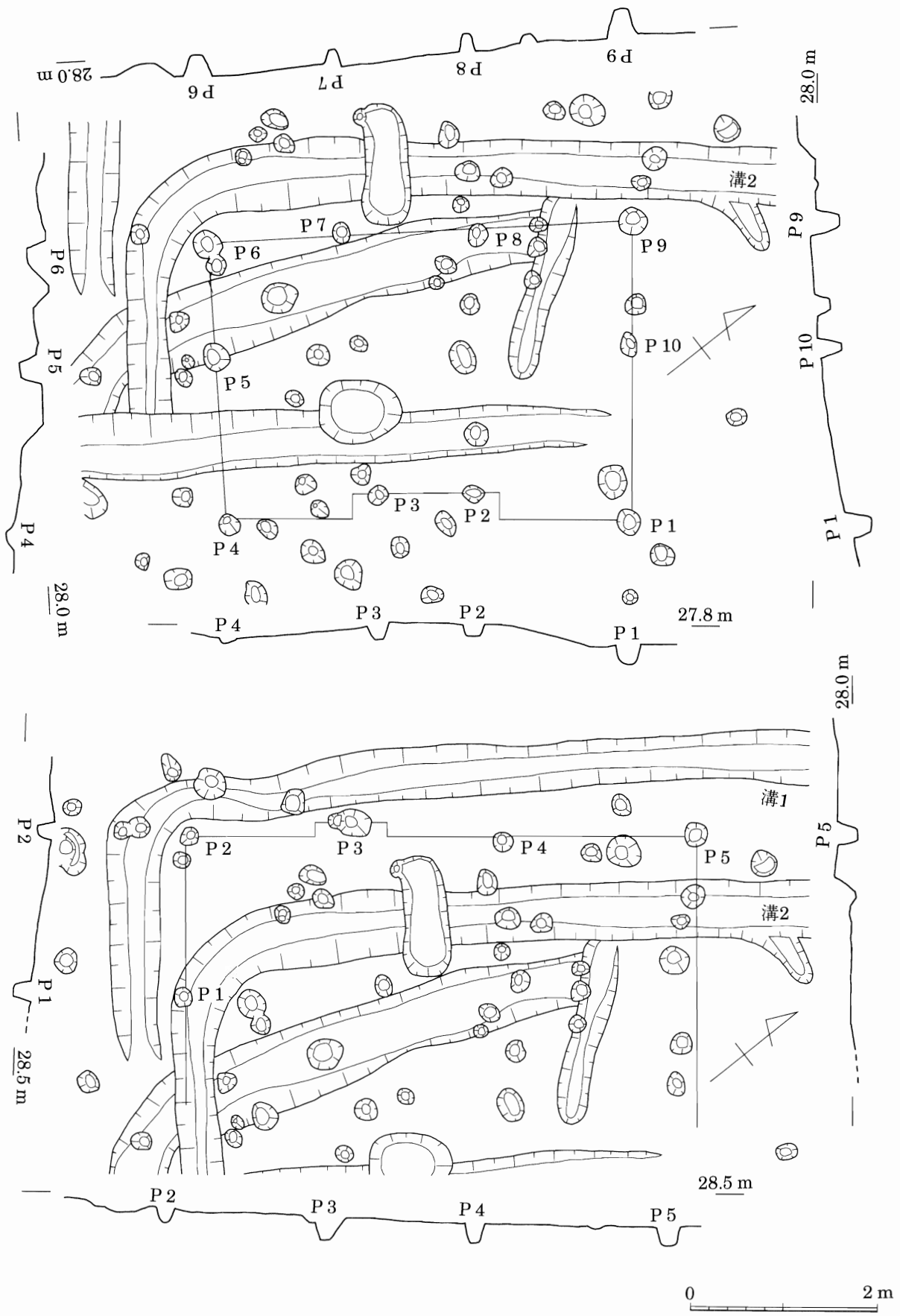
SB03-1 (第82図) 溝2の南端に位置する。2×3間の掘立柱建物跡である。規模は梁行き3.3 m、桁行き4.5 m である。柱間は1.3 m から1.9 m と不ぞろいであるが、1.6 m 前後が多いようである。

4A区 SB03-1計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		2間 (3.3 m)			3間 (4.5 m)		
主 軸		N-53° - W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	25×29	23×20	22×22	23×25	28×31	31×32
	深 さ	22	14	19	5	22	21
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	19×24	21×25	31×30	19×27		
	深 さ	18	20	30	26		
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.6	1.1	1.6	1.8	1.2	1.4
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-1	P 11-12	P 12-1
	1.5	1.6	1.3	2.0			

4A区 SB03-2計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		1間以上 (1.7 m)			3間 (5.4 m)		
主 軸		N-51° - W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	20×23	20×20	46×31	21×21	24×27	
	深 さ	19	18	24	21	21	
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.7	1.7	1.6	2.1		



第82図 4A区 SB03-1(下)・2(上)実測図 1:60

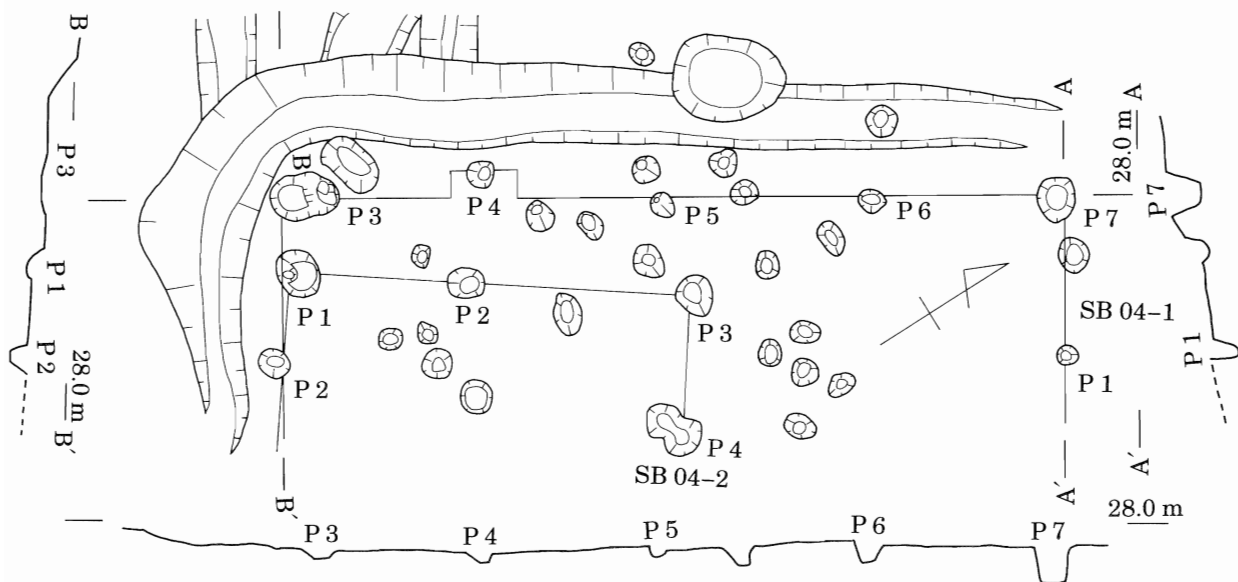
主軸が溝2にほぼ平行することから、この掘立柱建物跡は溝2に伴うと考えられる。ただ、溝2に区画された敷地面積はかなり大きいので、これ1棟だけが建っていたとは考えにくい。SB 03-2同様、北側に別の掘立柱建物跡があったように思われる。

SB 04 (第83図 図版49) 東西約7.2 m、南北約3 m の「L」字形の壁帯溝によって区画されている。壁帯溝は SB 01の壁帯溝や SB 04-2の壁帯溝 (溝2) と重複しているが、土層観察ではそれらの前後関係を把握することはできなかった。壁帯溝の北端は検出できなかったが、SB 04-1がここで終わっていることを考えると、壁帯溝もこのあたりで南に屈曲していたかもしれない。

SB 04-1は2間以上×4間の掘立柱建物跡で、規模は梁行き1.4 m 以上、桁行き6.2 m である。桁の柱間は1.4 m 間隔と1.7 m 間隔とが交互に配されている。この建物は主軸がほぼ壁帯溝と同じであることから、壁帯溝に伴うものと思われる。

SB 04-2は2×2間 (?) の掘立柱建物跡で、東西約3.2 m、南北約1 m の小型の建物跡である。桁の柱間はほぼ等間隔であるが、針の柱間は約1 m と狭い。この建物跡は主軸は壁帯溝とほぼ同じだが、規模が小規模で、これだけが壁帯溝に伴うとは思えない。この区画の中にあつた複数棟の建物のひとつか、壁帯溝とは関係のない、別の建物に付属する建物跡のように感じられる。

SB 04からは須恵器、土師器、土製支脚などが出土している (第84図 図版67・68)。須恵器蓋 (1・2) はともに天井部全面にていねいな削り調整が施されているが、坏底部はなで調整で3の口径は小さい。罌は頸部に線状の刺突文が施されている (6)。このうち1、2、6は床面下からの出土である。土師器高坏 (5、9) は古墳時代中期ごろの特徴をもつのである。遺



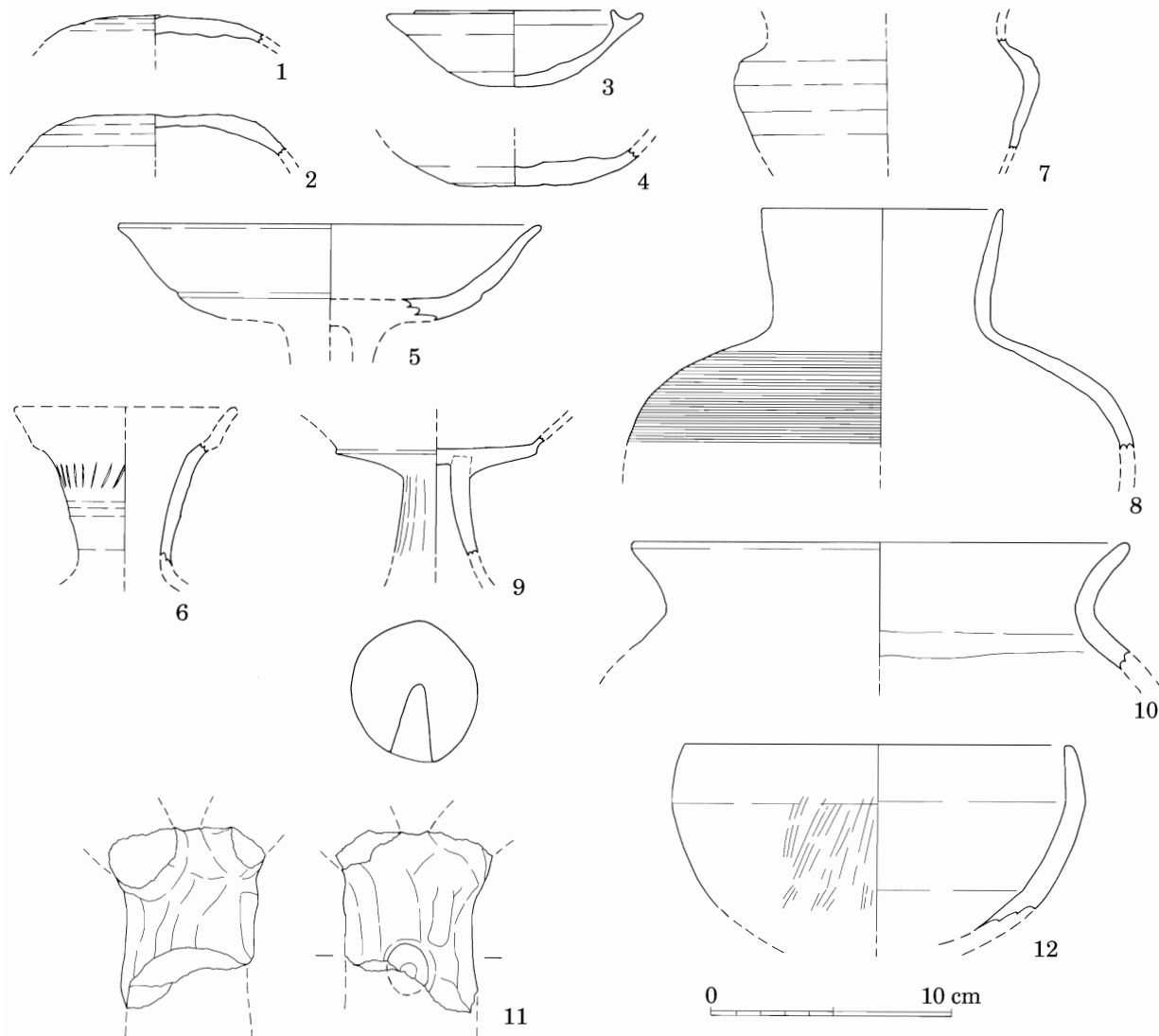
第83図 4A区 SB 04実測図 1:60

4 A 区 SB 04-1計測表

規 模		梁行き				桁行き		
		1間 (1.3 m)				4間 (6.0 m)		
主 軸		N-32° -W						
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
	上面径	16×15	26×23	55×39	22×21	20×19	23×20	30×36
	深 さ	20	13	11	5	9	17	28
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7	P 7-1
			1.3	1.5	1.4	1.6	1.5	1.3

4 A 区 SB 04-2計測表

規 模		梁行き				桁行き	
		1間 (1.1 m)				2間 (3.2 m)	
主 軸		N-34° -W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	36×37	30×24	29×31	48×35		
	深 さ	19	23	36	26		
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.4	1.8	1.1			



第84図 4 A 区 SB 04出土土器 1 : 3

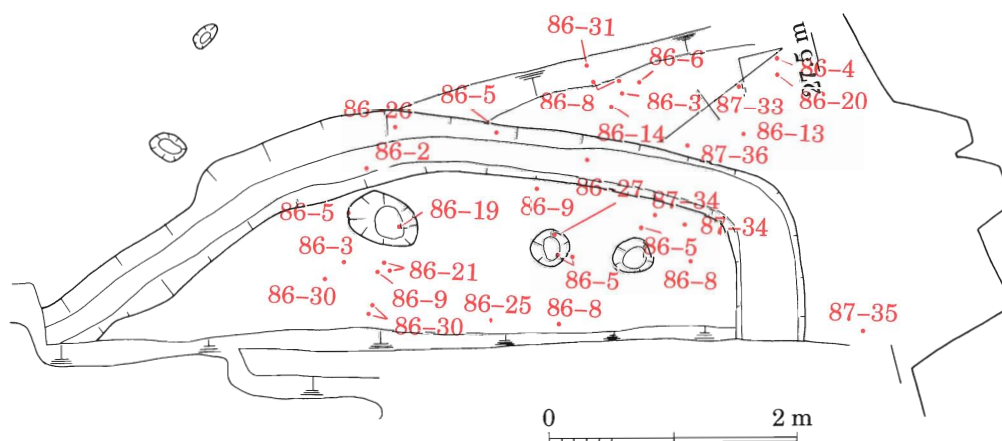
4 A 区 SB 04出土土器一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第84図-1	67	須恵器蓋				天井部、回転ケズリ	蓋A5? 4期	
-2	67	同上				同上	蓋A4? 4期	
-3		須恵器坏	口径8.3 器高3.2	たちあがり非常に短い		ヘラ切+ナア?	坏A8 6期	
-4	67	同上				同上	5期?	
-5	67	土師器高坏	口径9.8	屈曲部に段			古墳中期	全面赤色 塗彩
-6	67	須恵器瓦甕			頸部に刺突文		竇A 4~5 4期?	
-7		須恵器短頸壺	最大径12.8	肩部張る				
-8	68	須恵器壺	口径10.2	胴部張る		カキ目	5期?	
-9	67	土師器高坏		屈曲部に段		ミガキ	古墳中期	
-10		土師器甕	口径20.7	口縁短く外反		内面ケズリ		
-11	67	土師器支脚		中央に小孔		ナア		
-12	67	土師器碗	口径16.2	深身		ハケ目+ナア	古墳中期?	

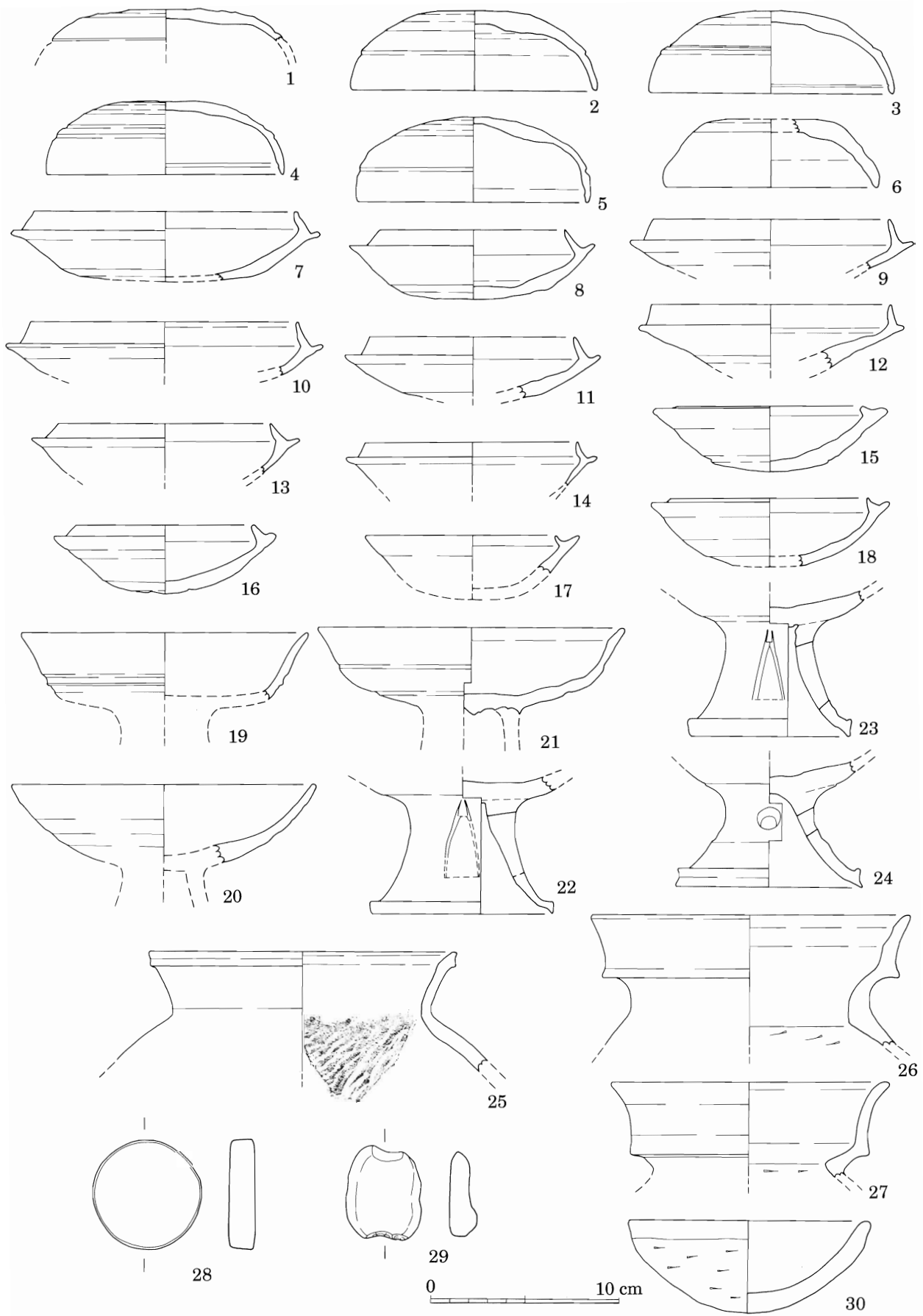
物からみると最も新しい3、4が出雲5・6期の特徴をもつので、SB 04はこのころの遺構と考えられる。

SB 05 (第85図 図版50) 壁帯溝と思われる溝を回しただけの加工段である。平面形は西壁がゆるい弧状を呈し、北端で急に向きを変える。調査区の端に当たるため全面を調査することができず、検出できた規模は南北約6m、東西約1.8mであった。ピットは3個検出できたが柱穴になりうるものはない。底面はやや傾斜しているが、平坦に近い。形状は不整形であるが、住居跡の可能性が強い。

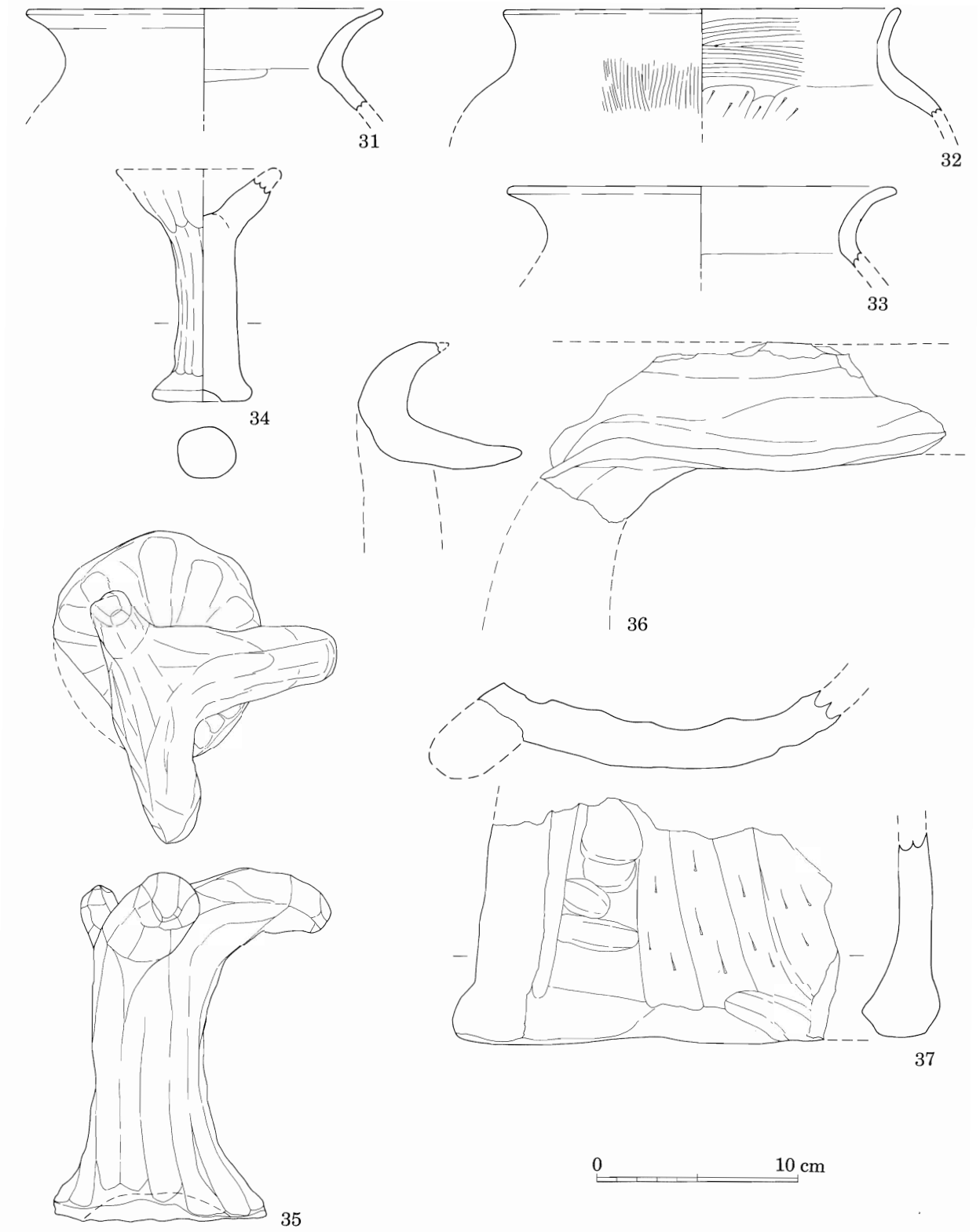
この住居跡はこの付近の土が黒色を呈していたことから、調査時には別の加工段を伴う住居跡と重複していると考えて調査を行った。遺物も上部から下部まで連綿と出土したこともあり(図版50)、SB 05の形が把握できたのは地山面まで達してからであった。そのため、結果的には遺物の取り上げはSB 05の範囲外のものも含めた形となり、遺物の所属は最後まで同定



第85図 4 A 区 SB 05実測図 1:60



第86图 4A区SB05出土遺物(1) 1:3



第87図 4A区 SB 05出土遺物(2) 1:3

できなかった。こうした調査であったので遺構に伴う遺物の抽出は室内作業とならざるをえなかった。

SB 05から出土した遺物は須恵器、土師器、石器などがある(第86・87図 図版68~72)。

SB 05内から出土したとほぼ認定できるのは、2、3、5、9、11、15、19、21、25、26、27、30、34である。そのほかは北に隣接する位置からの出土である。このうち26、27は弥生後期、30は古墳前期または中期と考えられ、混入と考えられる。

このうち須恵器蓋坏は15以外がA4型、15がA8型、高坏が長脚ならB2型、低脚ならA3型かA4型である。このなかでは15が抜きん出て新しいが（出雲6期）、その他はすべて出雲4期に納まる。このことから、SB 05は出雲4期と考えたい。

4 A 区 SB 05出土遺物一覧表

挿図番号	図版 ページ	器種	法量	形 態	文 様	調 整 そ の 他	時 期	備 考
第 86 図 -1	69	須恵器 蓋		稜は沈線1条による		天井部でいねいなケズリ	蓋 A 4? 4期	ろくろ右回転
-2	68・69 71	同上	口径13.0 器高4.3	同上		天井部回転ケズリ 中央削り残し	蓋 A 5 4期	同上
-3		同上	口径13.2 器高4.5	稜は沈線2条による 口縁内面に沈線		同上	蓋 A 5 4期	回転方向不明
-4	68・69 71	同上	口径12.6 器高3.95	同上		同上	同上	天井部に平行 沈線状の圧痕 ろくろ右回転
-5	68・69 71	同上	口径12.4 器高4.6	稜は沈線1条による 口縁内面に段?		同上	蓋 A 4 4期	ろくろ右回転
-6		同上	口径9.3 器高3.7	器壁厚くカーブ弱い		ヘラ切り未調整	蓋 A 8 6期	
-7		須恵器 坏	口径14.16 器高3.7	扁平な器形 たちあがり厚い		回転ケズリ	坏 A 4か5? 4期	ろくろ右回転
-8	68 70	同上	口径9.9 器高3.75	たちあがり内傾		ていねいな回転ケズリ	坏 A 5 4期	同上
-9		同上	口径15.2	同上			同上	
-10		同上	口径14.4	同上			同上	
-11		同上	口径13.6	同上		回転ケズリ	同上	ろくろ右回転
-12		同上	口径12.8	たちあがり短い		同上	同上	大きく変形 ろくろ右回転
-13		同上	口径14.4	たちあがり短く内傾			坏 A 5か6 4期	
-14		同上	口径11.4	器壁うすい			同上	
-15	70	同上	口径9.9 器高3.55	たちあがり非常に短く内傾 し厚い		ヘラ切り未調整	坏 A 8 6期	
-16	68 70	同上	口径9.5 器高3.7	同上		ヘラ切り未調整	同上	ろくろ右回転
-17		同上	口径9 器高2	同上			同上	
-18	68	同上	口径10.6 器高3.6	同上		ヘラ切り+ナデ	同上	
-19		須恵器 高坏	口径15.4	屈曲部に凹線2条による突 線			長脚無蓋 B 2? 4期	
-20		同上	口径16.4	皿形の坏部			低脚無蓋 A 5 5期?	
-21	70	同上	口径16.4		2条の浅い沈線		同 A 4? 4期?	
-22	69	同上	底径9.8	低脚 端部平坦面	三角形2方透し (一方は線状)		同 A 4 4期	
-23	69	同上	底径8.4	同上	三角形2方透し		同上	
-24	69	同上	底径10	低脚、脚中央にわずかに段? 端部平坦面	円形1方透し		同上?	
-25	71	須恵器 壺	口径16.5	口縁端部に面		弧状の当具痕		
-26		土師器 壺	口径17.2	厚手、口縁先細り			弥生 V-4	
-27		土師器 甕	口径14.8	同上			同上	
-28	72	石製紡錘 車未成品	径5.9 厚1.5	正円に近く、扁平		全面でいねいに研磨		凝灰岩? 白色
-29	72	石錘	長径5.1 短径4.1			自然礫の両端を打ち欠く		黒色の自然礫

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第86図-30	68	土師器 坏	口径12.8 器高5	口縁大きく開く。 丸底		外面口縁以下 ケズリ		全面赤色 塗彩
-31		土師器 甕	口径18	頸部強く屈曲		内面ケズリ		
-32		同上	口径20	口縁直立気味に外反		内面ハケ目、ケズリ		
-33		同上	口径19.6	頸部強く屈曲し、 口縁外反				
-34	71	土師器 支脚	底径5.1 高11.2	皿形の受部		手捏ね調整		
-35	72	同上	底径10.7 高17.3	三支による受部		ケズリ		
-36	72	土師器 甕		焚口の鏝部				
-37	72	同上	底径37	底部		内外ともケズリ		

このほか石錘（29）、紡錘車未成品（28）が出土している。これらはこの住居跡に伴うものではないと思われる。28は後述する攻玉のための穿孔具かもしれない。

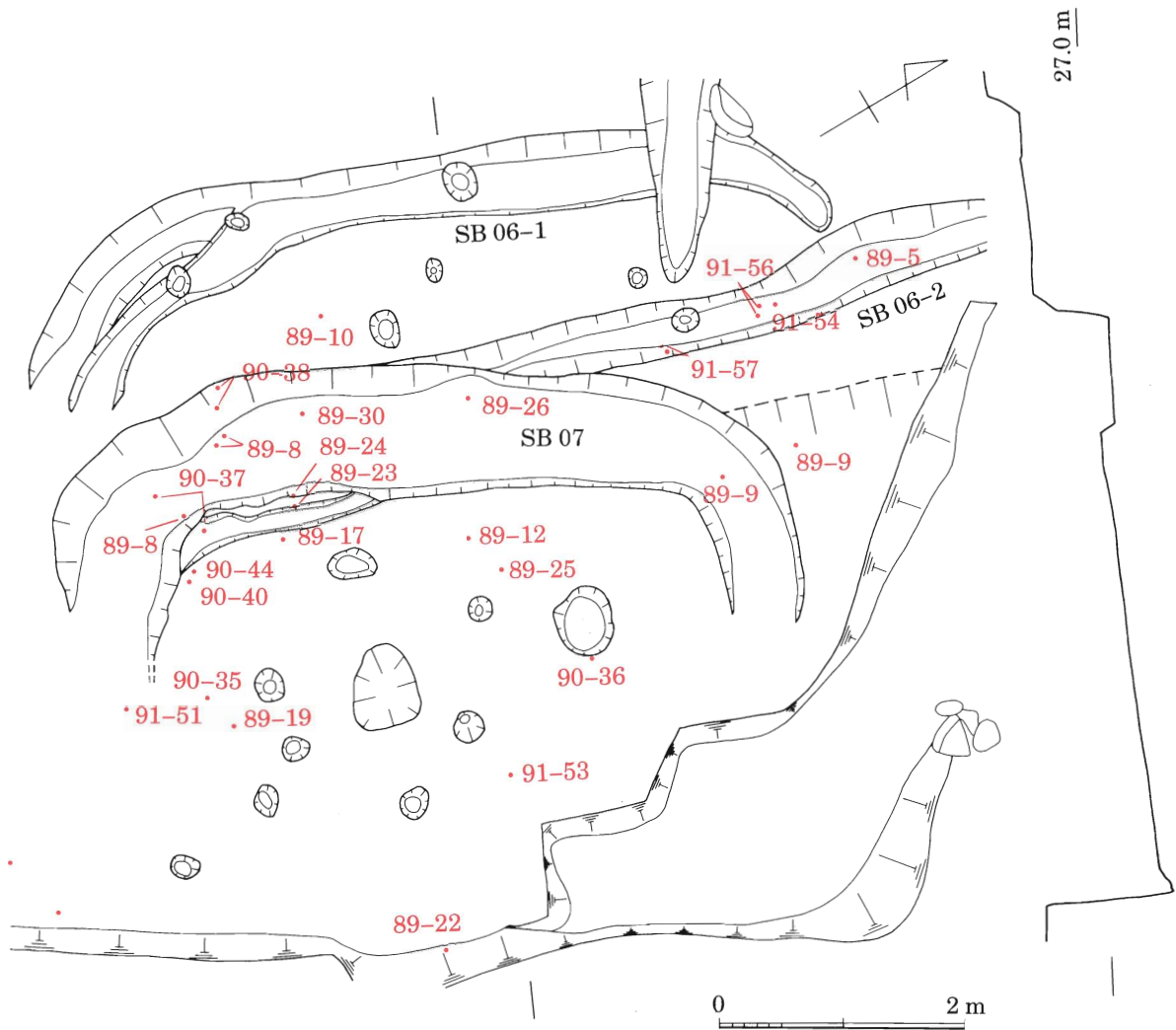
SB 06・07（第88図 図版51） 4 B 区のもっとも北に位置する。壁帯溝と思われる溝を回しただけの加工段である。壁帯溝は3条検出されたが、柱穴になりうるピットは検出できなかった。やはり住居跡と思われる。SB 06-2と SB 07は重複しているが土層の観察では前後関係は確認できなかった。

SB 06-1はわずかに弧状を呈し、検出できた規模は南北約6.6 mであった。底面は平坦に近い。溝内から第89図4、7が出土した。4が A 8型、7が C 2型であるので、この住居跡は出雲6 B 期と思われる。

SB 06-2はほぼ直線的に伸びる溝で、わずかながら東側に平坦面がみられることから壁帯溝と考えた。検出できた規模は約5.1 mである。遺物は土師器甕、甌、竈が出土している（第91図54～57）。これらの年代は明確ではないが、55が第90図43などより古いとされる（注）ことから、SB 06-1、SB 07より先行する住居と考えられる。

SB 07は壁帯溝が「コ」の字形にめぐる。その規模は南北約6 m、東西約1.8 mである。床面と思われる平坦面には径約60cmの焼土が検出されている。また、ピットが9個ほどあったが、不規則で柱穴と認められるものはなかった。ここからは須恵器、土師器などをはじめ遺物は大量に出土した（図版51）。第89～91図（図版73～76）で図示したもののうち、この住居跡から出土したのは1～3、5、6、8～31～52である。これらは新旧の時期が混じっているが、出土位置が確認できるものでは17、19が層位的に高い位置で出土し、また第89図14、第90図34が平面的にこの住居跡の位置からずれて出土しているので、これらは混入していると考えられる。これを除いた須恵器の組み合わせは出雲4期から出雲6 A 期であるが、主体となるのは出雲5期と思われる。

（注）島根県教育委員会「渋山池遺跡」『渋山地遺跡・原ノ前遺跡 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書（西地区Ⅶ）』1997



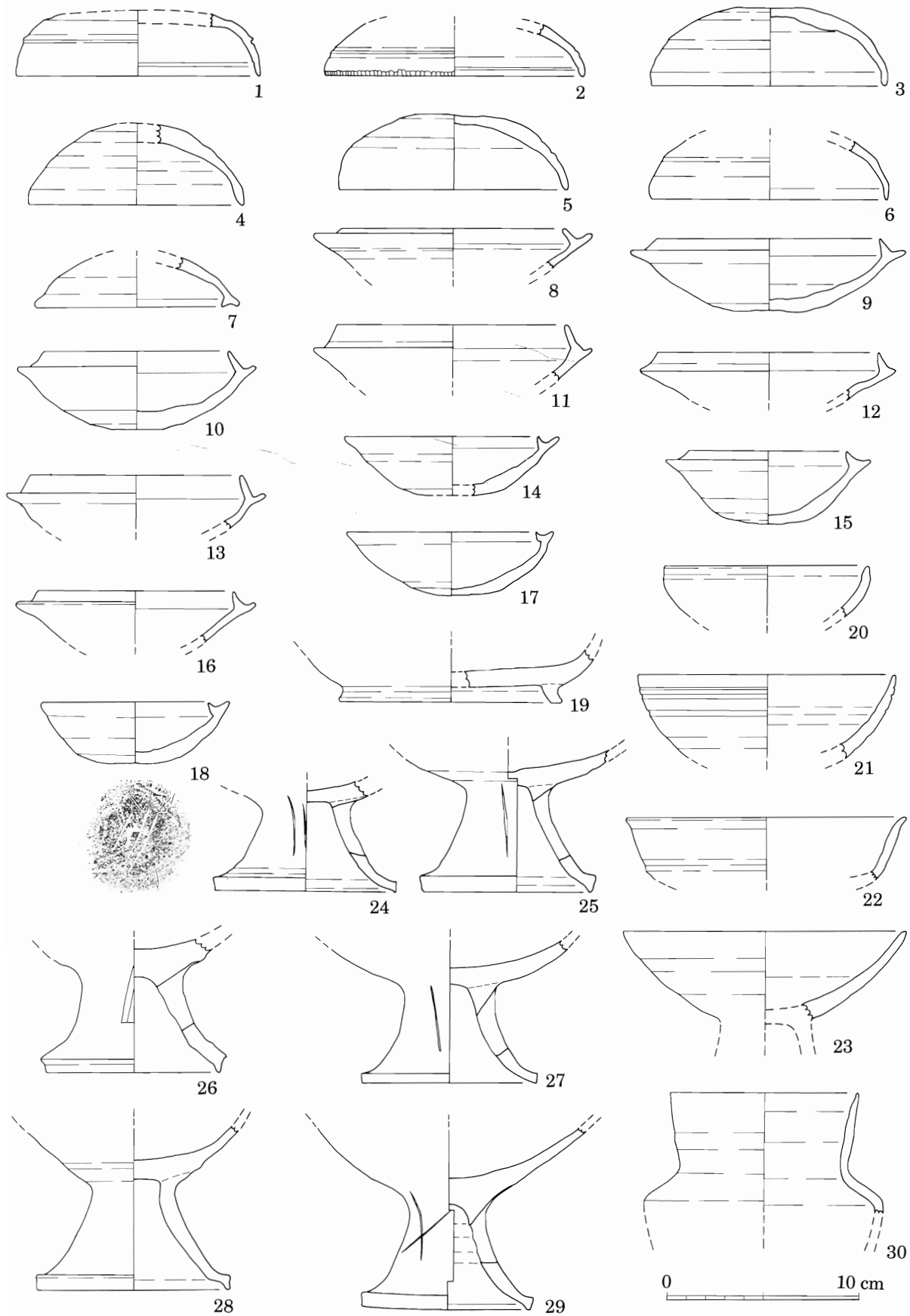
第88図 4 A 区 SB 06・07実測図 1:60

4 A 区 SB 06、07出土土器一覧表

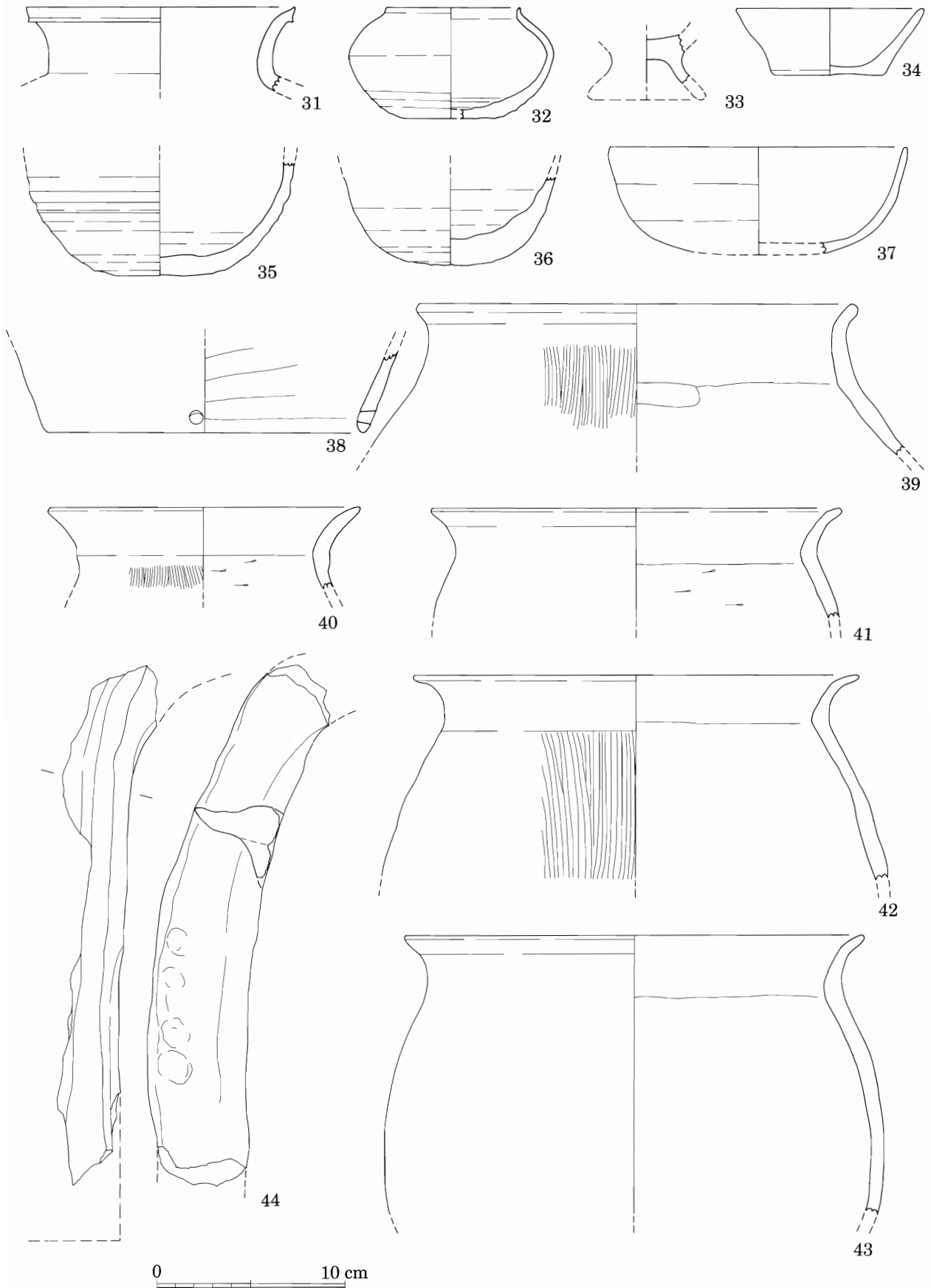
挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第89図-1	73	須恵器蓋	口径12.8	稜は沈線1条による。 口縁内面沈線		軽くケズリ?	蓋 A 5 4期	SB 07
-2	73	同上	口径11.3	稜は沈線2条による。 口縁内面に沈線		口縁端にヘラ先で押えたような痕跡	蓋 A 5 4期	SB 07
-3	73 74	同上	口径12.2 高4.2	口縁端内側に屈曲		天井部ケズリ 中央にヘラ切り痕	蓋 A 7? 5期?	SB 07 ろくろ右回転
-4		同上	口径11.4 高4.2	同上		ヘラ切り+ナデ	蓋 A 7 5期	SB 06-1
-5	73 74	同上	口径12 高4	同上		ヘラ切り+ナデ	蓋 A 7 5期	ろくろ右回転 SB 07
-6		同上	口径12.6 高3.6	同上			同上	SB 07

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第89図-7		須恵器蓋	口径10.8	内面にかえり。		天井部ケズリ?	蓋 C 6 B 期	SB 06-1
-8		須恵器坏	口径11.5	たちあがり短く内傾			坏 A7? 5期	SB 07
-9	73 74	同上	口径11.6 高3.8	同上		ヘラ切り+ナデ?	坏 A 7 5期	SB 07
-10		同上	口径9.6 高4.1	たちあがり内傾		回転ケズリ	坏 A5? 4期	ろくろ右回転 SB 07
-11		同上	口径12.1	同上			坏 A5-6 4期	SB 07
-12		同上	口径11.6	受部の突出顕著でない			坏 A7? 5期?	SB 07
-13		同上	口径11.1	たちあがり内傾			坏 A5-6 4期	SB 07
-14		同上	口径11.2 高3.1	たちあがり非常に短く内傾		ヘラ切り+ナデ	坏 A 8 6期	SB 07
-15	73 74	同上	口径8.2 高3.9	同上		ヘラ切り+ナデ	坏 A 8 6期	ろくろ右回転 SB 07
-16		同上	口径10.2	同上			同上	
-17	73 74	同上	口径9 高2.4	同上		ヘラ切り+ナデ?	同上	ろくろ右回転 SB 07
-18	73 74	同上	口径10 高3.2	同上		同上	同上	底部に「三」の 字状のヘラ記号 ろくろ右回転
-19		同上	底径11.6 高2.85	低い高台をつける		ヘラ切り?	7 C 末?	SB 07
-20		同上	口径10.6	口縁くびれる			6 B 期?	SB 07
-21	73	須恵器高坏	口径13.6	椀形の坏部	沈線2条		低脚無蓋 A 4? 4期?	SB 07
-22	73	同上	口径14.4	たちあがり急	屈曲部に鈍い突線		長脚無蓋 A 2? 4期?	SB 07
-23		同上	口径14.8	椀形の坏部			低脚無蓋 A 5 5期?	SB 07
-24	75	同上	底径9.4	低脚。端部に平坦面	2方向に線状の透し		同 A 6 6期	SB 07
-25	75	同上	底径8.6	同上	同上		同上	SB 07
-26		同上	底径9.2	同上	2方向に三角形透し		同 A 5 5期	SB 07
-27		同上	底径9.2	同上	1方向に線状透し		同 A 6 6期	SB 07
-28		同上	底径10	同上	透しの有無は不明		同上?	SB 07
-29		同上	底径8.8	同上	「×」および「米」状の線状透し		同上	SB 07
-30		須恵器短頸壺	口径9.9	肩部張る				SB 07
第90図-31	68	須恵器壺	口径14.3	口縁端部に平坦面				SB 07
-32	75	須恵器短頸壺	口径7.1 脚径11 底径4.9	口縁非常に短い		回転ケズリ		ろくろ右回転 SB 07

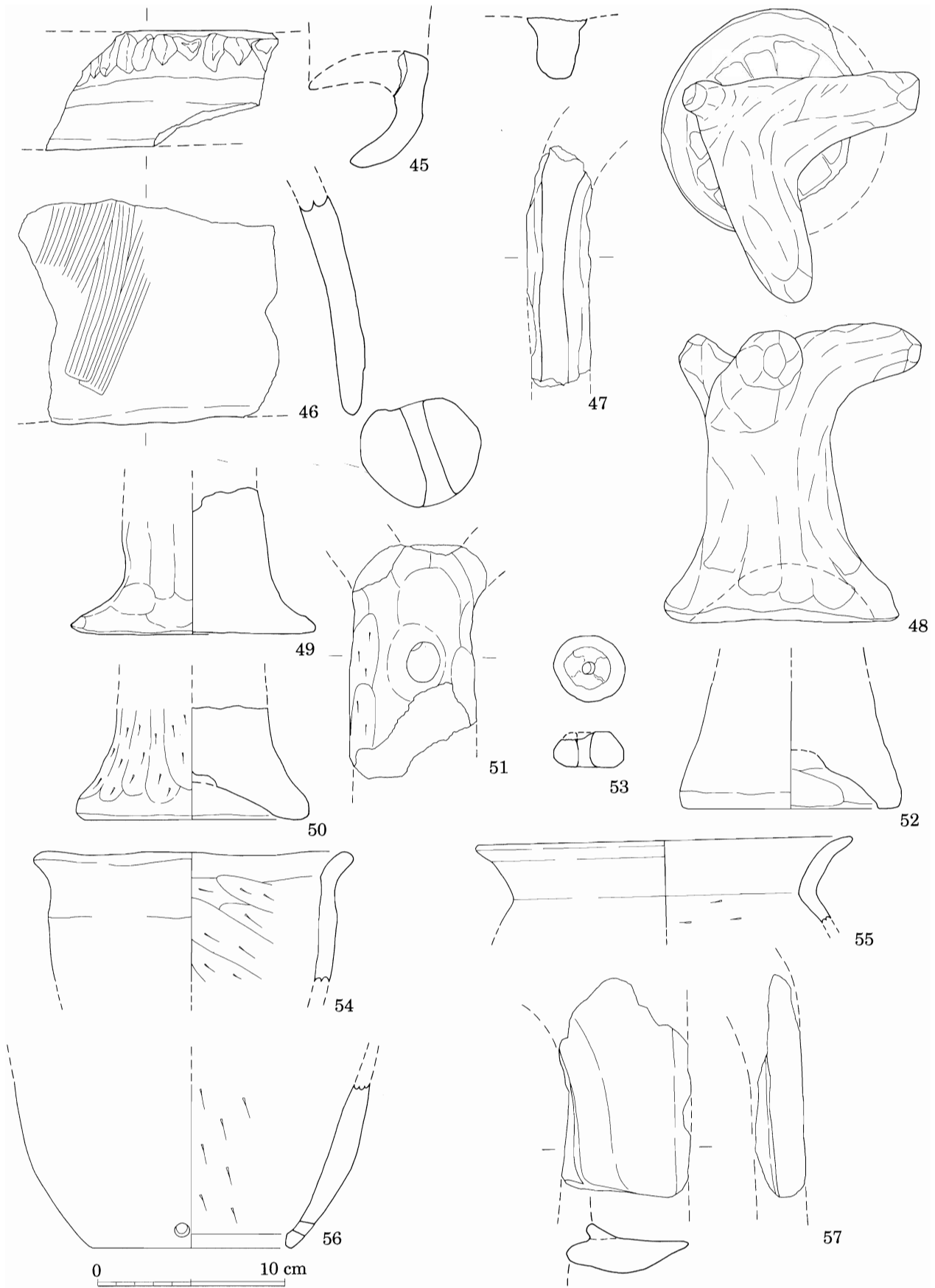
挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第90図 -33		須恵器 脚?	脚上端 径3.6					つまみの可能性も あり SB 07
-34	75	土師器 坏	口径10.2 底径6 高3.6	口縁直線的に開く		静止糸切	平安～ 中世	SB 07
-35		須恵器 壺	底径3.8	丸底		回転ケズリ		ろくろ右回転 SB 07
-36		同上	底径5.7	同上		回転ケズリ+ナデ		SB 07
-37		土師器 埴	口径16 高5.7	器壁うすい			古墳 後?	SB 07
-38		土師器 甌	底径17	小円孔あり		内面ケズリ		SB 07
-39		土師器 甕	口径23.2	口縁直立気味に外反 胴部強く張る		外面ハケ目 内面ケズリ		SB 07
-40		同上	口径16.6	口縁強く外反		同上		SB 07
-41		同上	口径22	同上 胴部強く張る		内面ケズリ		SB 07
-42	76	同上	口径23.8	同上		外面ハケ目 内面ケズリ		SB 07
-43		同上	口径24.6	同上		内面ケズリ		SB 07
-44	76	土師器 甕		焚口の鏝		ケズリ、指押圧痕		SB 07
-45	76	同上		同上		口縁接合面に刻目		SB 07
-46	76	同上		底部				SB 07
-47	76	同上		焚口の鏝				SB 07
-48	76	土師器 支脚	底径12.5 高16.7	三支の受部 底面凹み底		ケズリ		SB 07
-49		同上	底径13.5 高7.8	底面平甚		指による調整		SB 07
-50		同上	底径12.4 高6	底面凹み底		ケズリ		SB 07
-51		同上		中央に小孔貫通		ケズリ		SB 07
-52		同上	底径12 高6.8	底面凹み底		指による調整		SB 07
-53	72	石製 紡錘車	上面径2.2 底面径2.5 高1.9					凝灰岩? 白色軟質 SB 07
-54	75	土師器 鉢?	口径17.2	口縁短く外反 胴部張らない		内面ケズリ		SB 06-2
-55	75	土師器 甕	口径20.2	頸部強く屈曲		同上		SB 06-2
-56	75	土師器 甌	底径10.7	底部近くに小孔		同上		SB 06-2
-57	75	土師器 甕		焚口の鏝		ナデ		SB 06-2



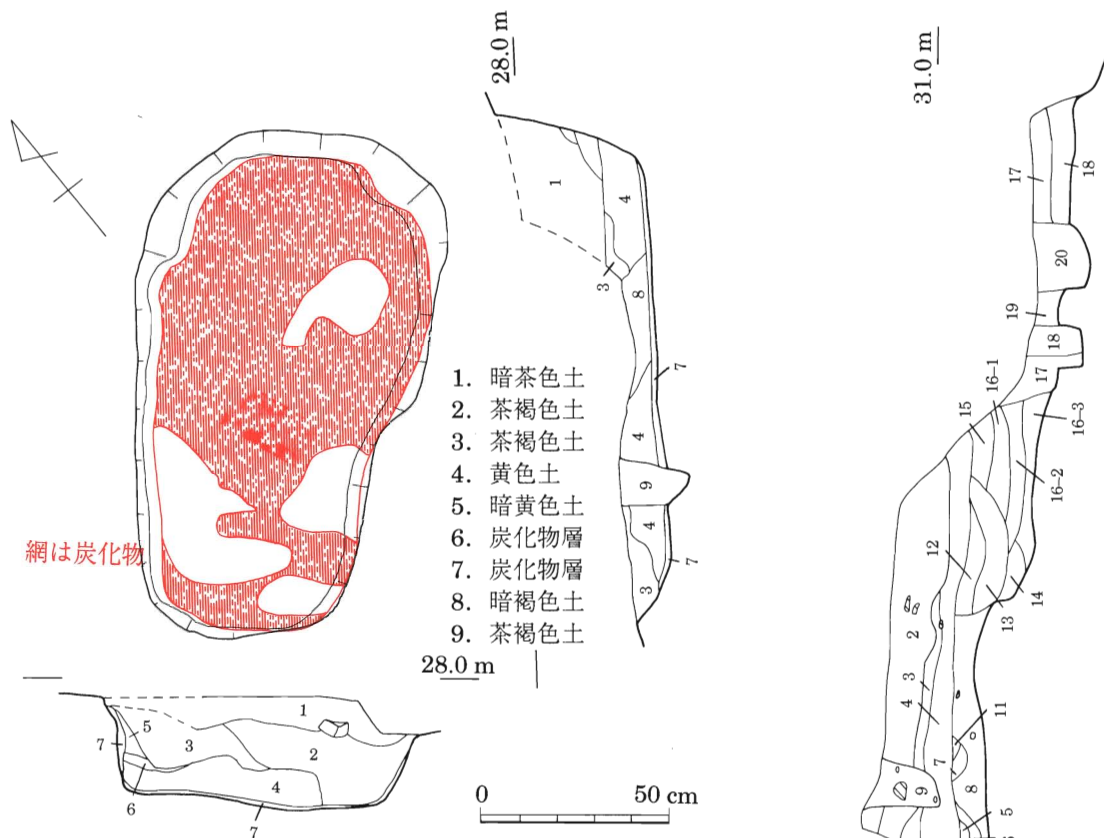
第89图 4A区SB 06.07出土土器 1:3



第90图 4A区SB07出土遺物(1) 1:3



第91图 4A区SB07出土遺物(2) 1:3



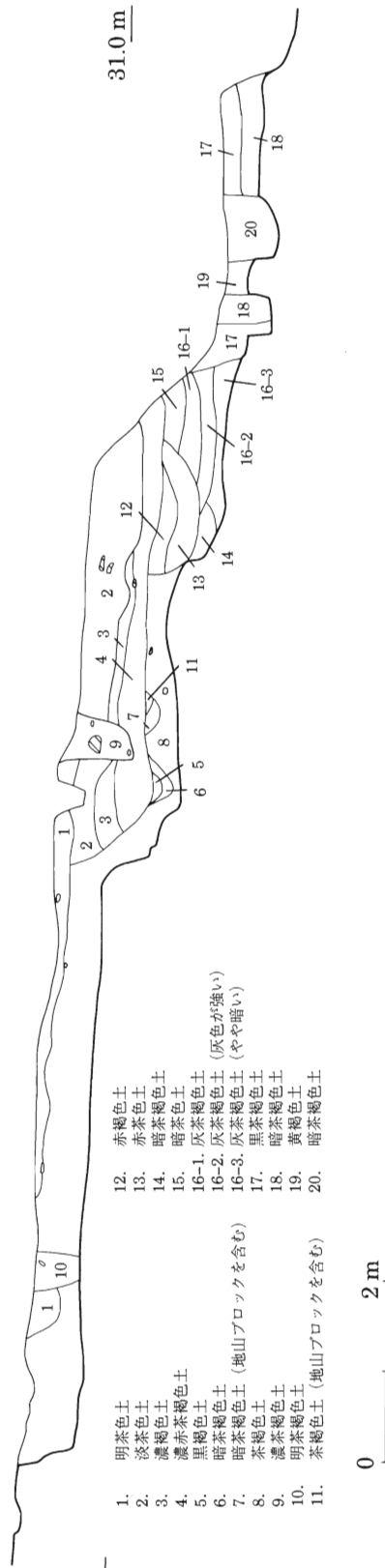
第92図 4A区 SK01実測図 1:20

SK01 (第92図 図版52) SB03溝2に直交している。長方形に近い平面形をしており、底面はほぼ水平である。規模は長軸方向で約1.4 m、短軸方向で0.8 mを測る。底面には2~3 cmの厚さで炭化物が敷き詰められていた。性格ははっきりしないが、形状から火葬墓の可能性が高い。

遺物が出土していないため時期は不明であるが、調査時にはSB03溝2より以前に作られたように思われた。

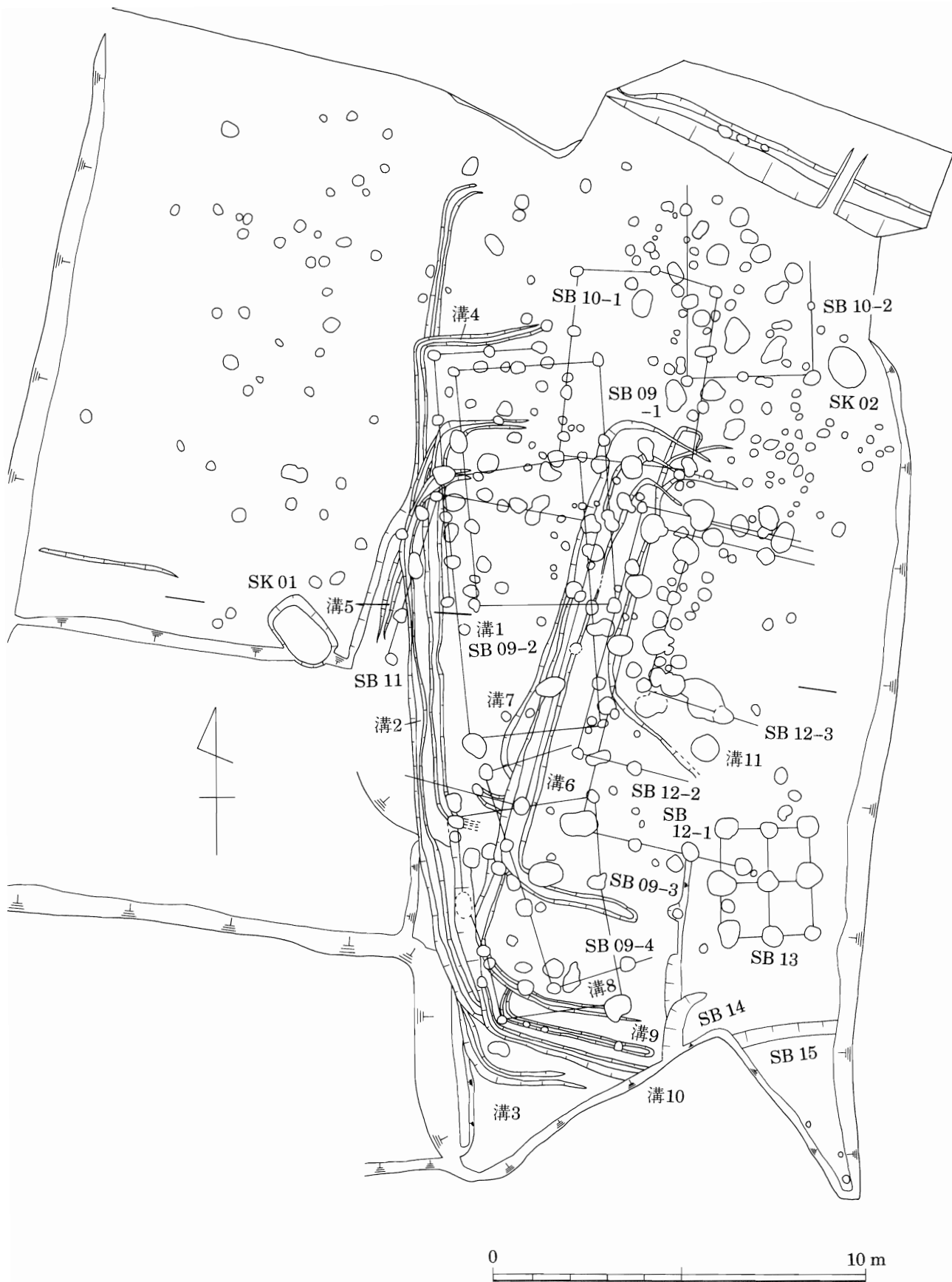
(2) 4B区 (第94図 図版53・54)

丘陵東斜面を掘削して加工段を作り、そこに掘立柱建物跡が建てられている。4A区のやや南で、標高はやや高い位置である。ここも建物跡が複雑に重複しており、壁帯溝は10条にのぼる。壁帯溝の方向から、ほぼ真北に軸をとる建物群とやや東に振れる建物群とに分かれる。土層の観察から主軸を真北にとる建物群 (溝1~4に区画された建物群-SB09) よりやや東に

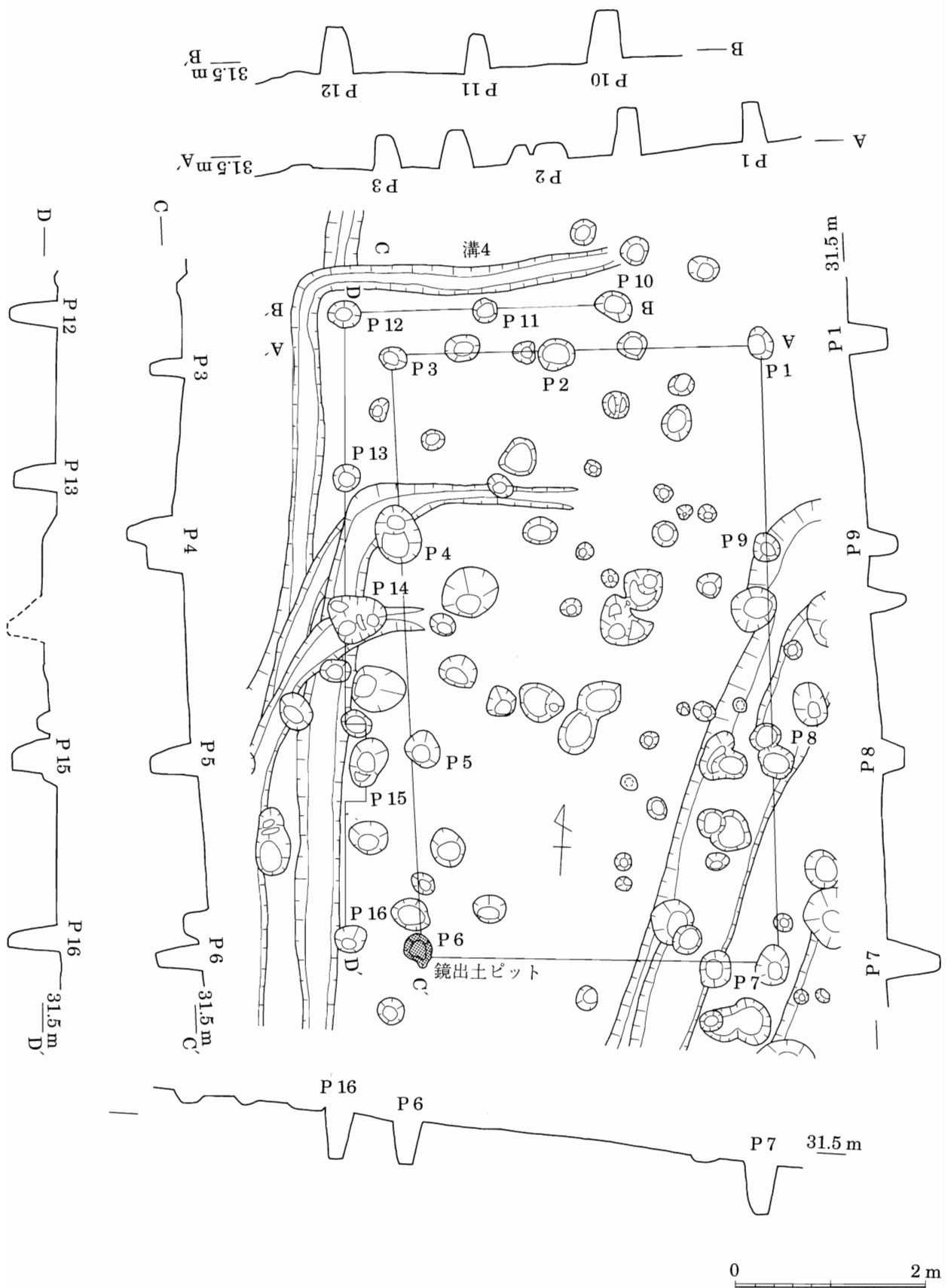


第93図 4B区東西土層図1:80

振れる建物群 (溝5、溝6~10に区画された建物-SB11、12) が古いことが確認された。さらに最下層のSB12-3がSB12-1、2に先行して建てられたことも判明した (第93図 図版



第94図 4B区遺構配置図 1:150



第95図 4B区 SB 09-1実測図 1:60

61)。時期は SB 09が12～13世紀ころ、他が古墳時代後期から奈良時代ころと考えられる。これらの建物跡はおおまかに標高の低いものから高いものへと順に作られていると考えられた。

SB 09 (第95～97図 図版55・59) 壁帯溝と考えられた溝1～4によって区画された建物跡、またはこれと方向を同じとする建物跡を SB 09とした。

壁帯溝は溝1を中心として複雑に重複しており、溝2～溝4と3回の建て替え、拡張が行われたと思われる。また、溝5とも重複している。土層の観察から溝5がもっとも古く、溝1、4が溝2より古いことがわかった。

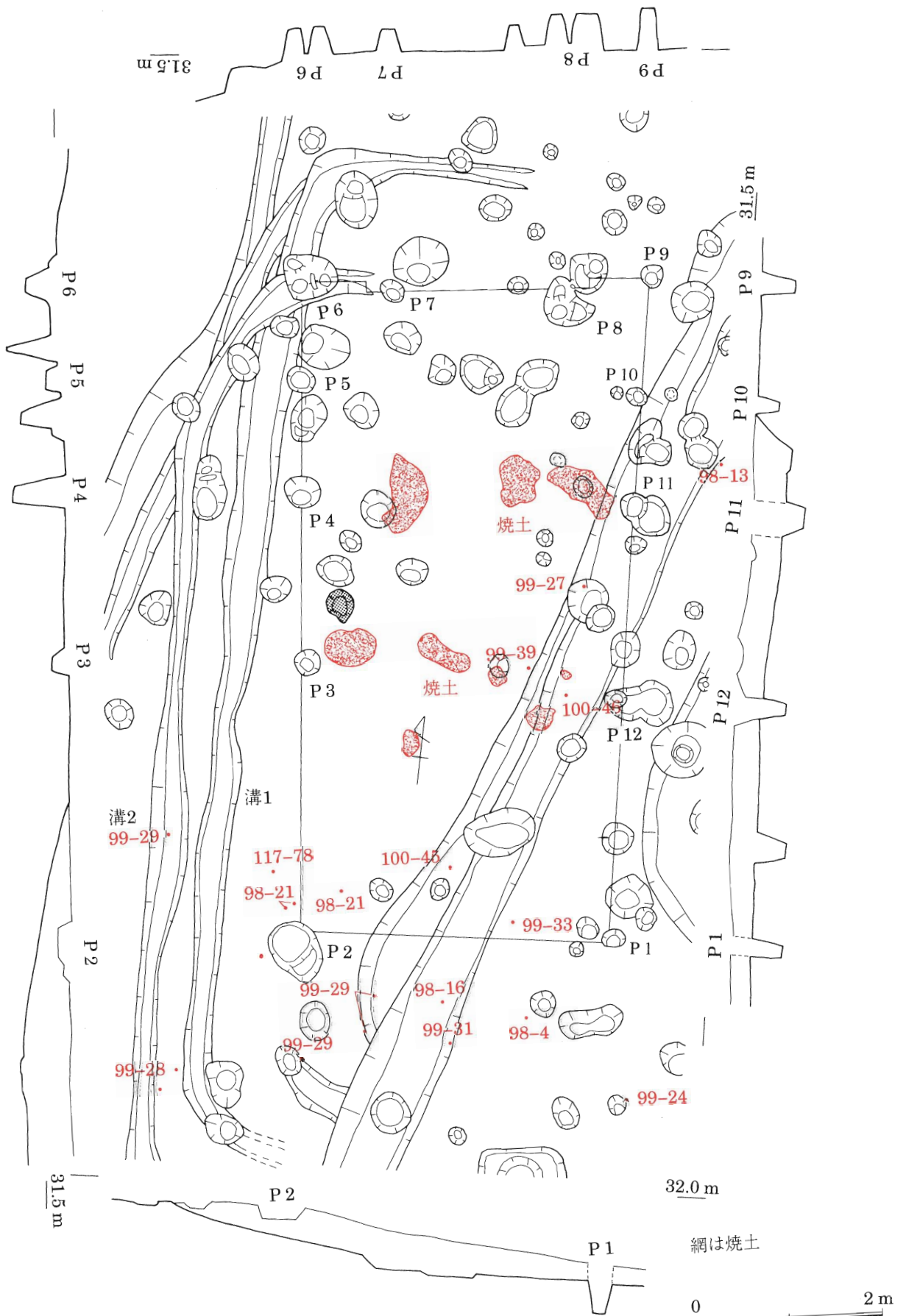
溝1は長さが南北11 m を測り、北端で直角に向きを変えて敷地を区画している。これに囲まれた部分は東西で6 m 以上の幅で平坦面をなす。ここに建てられた掘立柱建物跡は SB 09-2と思われる (第96図)。これは梁3間 (約3.6 m) ×桁3間 (7.2 m) で、南側1間分が他の柱間より広いのが特徴である。この掘立柱建物跡が溝1に伴うとすれば、敷地のやや北に寄っていることになり、南側に2 m ほどの余地ができる。

SB 09-1計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		2間 (3.9 m)			3間 (6.6 m)		
主 軸		N-2° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	27×34	38×34	30×24	46×62	38×39	29×36
	深 さ	40	17	37	48	49	48
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	37×43	37×38	27×30	38×33	26×27	35×28
	深 さ	54	23	30	57	42	51
	番 号	P 13	P 14	P 15	P 16	P	P
柱間距離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		2.1	1.8	1.8	2.4	2.1	3.8
		P 7-8	P 8-9	P 9-1	P 10-11	P 11-12	P 12-13
		2.3	2.2	2.1	1.4	1.5	1.8
		P 13-14	P 14-15	P 15-16	P-	P-	P-
		1.5	1.5	1.9			

4 B 区 SB 09-2計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		3間 (3.7 m)			4間 (7.2 m)		
主 軸		N-4° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	26×20	24×21	29×30	23×21	25×26	57×44
	深 さ	57	15	19	55	15	37
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	26×25	60×49	31×29	40×35	28×29	68×51
	深 さ	25	29	45	25	54	52
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		3.3	2.9	1.8	1.2	1.1	1.0
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		1.8	0.9	1.3	1.2	2.1	2.6



第96図 4B区 SB 09-2実測図 1:60

溝2は溝1の西に平行して作られているが、長さは15 m 以上と長大である。各角は直角にならず丸いようである。溝2の南には重複して溝3が作られている。溝3は南西の隅のみが検出され、これによって区画された敷地の全形は不明である。おそらく溝2を南方に約1.5 m ほど拡張したものと思われる。これらに伴う掘立柱建物跡は SB 09-3・4（第97図）と考えられる。SB 09-3が梁1間以上（約2.1 m 以上）×桁3間（6 m）、SB 09-4が梁2間（約3.6 m）×桁3間（5.4 m）とともにやや小型の掘立柱建物跡である。2棟は重複しており、SB 09-3が壁帯溝際に作られ主軸が北に近い。どちらの建物跡も溝2の規模に見合うほどの規模ではないことから、溝2・3によって区画された敷地には複数の建物が建てられていた可能性がある。これらと併存した建物跡は SB 09-1または2と考えられる。前後関係が不明であるので断定はできないが、壁帯溝に近い SB 09-2と SB 09-4が同時併存していたと考えられなくもない。

溝4は溝1・2の北に接して作られている。北西の角はほぼ直角に作られ、東に向かう。これは溝1または2の敷地を北に約2.4 m 拡張したものと考えられる。これに伴う建物跡は SB 09-1（第95図）である。これは梁2間（約3.9 m）×桁3間（6.3 m）の掘立柱建物跡で、壁帯溝際に梁側2間（3 m）、桁側3間（6.6 m）の柵列を伴うようである。P 6からは和鏡が出土し（図版57）、建物の年代を知る手掛かりとなった。

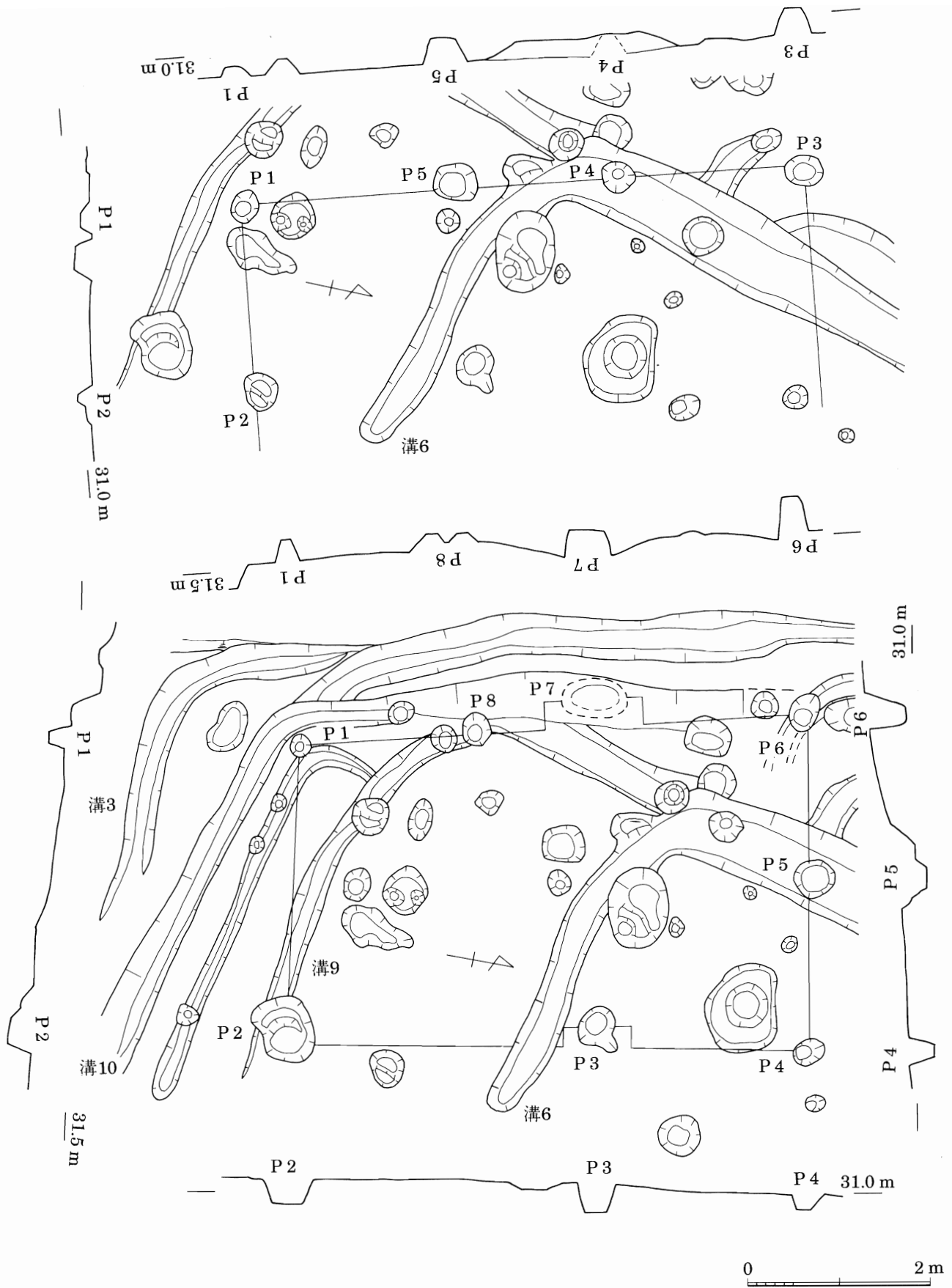
SB 09では北部で焼土が8カ所検出され（図版56）、東端では約50cm大の上面が平坦な石が出土した（図版56）。これらの焼土は鍛冶に伴うものと考えられ、石は金床石と思われた。ここ

4 B 区 SB 09-3計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		1間 (2.1 m) 以上			3間 (6.1 m)		
主 軸		N-18° —E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	31×36	37×42	42×33	37×36	46×42	
	深 さ	17	19	30	26	28	
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-1	P 6-7
		2.1		2.1	1.8	2.2	

4 B 区 SB 09-4計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		2間 (3.6 m)			3間 (5.6 m)		
主 軸		N-8° —E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	23×25	67×73	40×44	34×30	46×44	34×42
	深 さ	26	25	32	29	27	44
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	(70+α)×(45+α)	32×37				
	深 さ	α	12				
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		3.3	3.3	2.3	1.8	1.8	2.1
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
		1.4	1.9				



第97图 4B区 SB 09-3 (上)·4 (下) 实测图 1:60

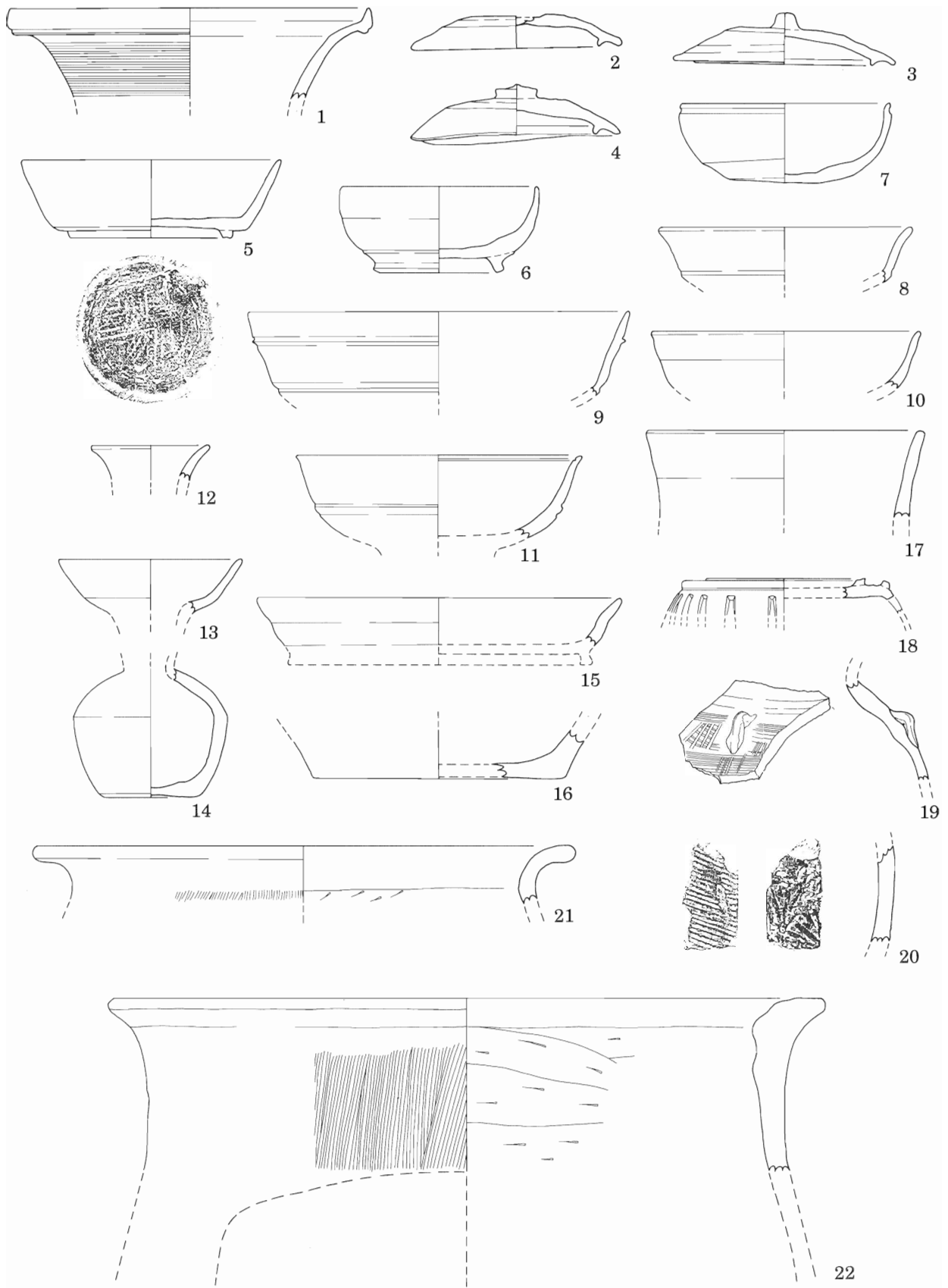
ではわずかながら鉄滓が出土したことからも、鍛冶が行われていた蓋然性は高い。これにより鍛冶を想定して床面の土を採取し洗浄したが、鍛造剥片らしいものは検出できなかった。出土した遺物の中で、鍛冶に関連すると予想される遺物は第101図1、2の鉄製品である。1は左右対称形で、中央に比べ両端が平たくなっている。どの面にも刃はつけられていない。2は平面形は刀子の形をするが下端に刃がついていない。これらは形状から刀子未成品の可能性が考えられる。これが刀子の未成品であることは現時点では断定できないが、1のような棒状の鉄塊を鍛え2の工程を経て刀子が作られることは、十分想像できることである。また、第100図44（図版82）は表面が平坦な焼土塊である。小片のため本来の姿が把握できないが、地面が焼けてできた焼土塊ではなく、なんらかの形を目的に作られた意識的なものに間違いはない。炉壁などの可能性はないであろうか。

SB 09からは須恵器、土師器、陶器などが大量に出土した（第98～104図 図版78～87）。しかし、SB 09が SB 11や SB 12と複雑に重複していることが遺物取り上げ後に判明したため、どの遺物がどの住居跡に伴うのか明確にできるものは少ない。須恵器や土師器などの古墳時代、古代の土器は大半が SB 11や SB 12に含まれていたと考えた方がよい。ただ、これについてもどちらの所属になるか分離することは難しい。また、第104図に示した土器は溝3から出土したが、前述の各住居跡の位置的な配置から溝3は古墳時代の住居跡とは思われず、混入と考えたい（第99図24～第100図48、第103図15～17 図版79～84）。

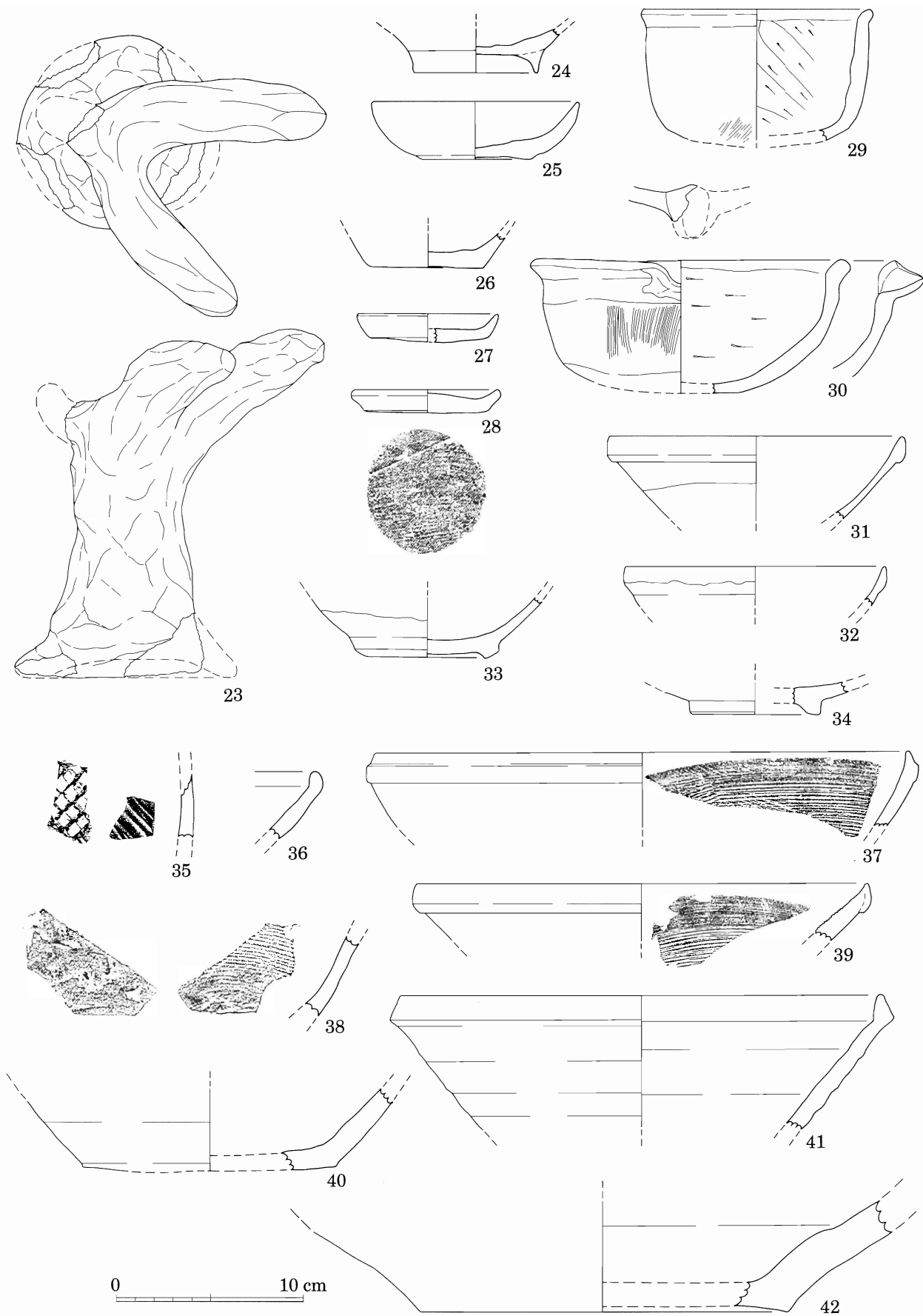
SB 09に伴う可能性が高いものとしては陶磁器、和鏡、土師質土器、須恵器などである。とくに和鏡（第100図48）は SB 09-1 P 6の中から出土しており、建物の年代を知ることでできる遺物として重要である。また第103図17は溝9を掘り込んで作られたピットから出土している（図版57）。これは詳細な年代は不明であるが、SB 09に伴う陶器である。

第99図31～34（図版2・81）は口縁部が玉縁状となる白磁で、IV類に分類される。24～26は土師器坏、27、28は土師器皿である。24は風化のため底部の状態が不明だが、その他は静止糸切りによって切り離されている。35は須恵器壺または甕胴部、36～41は須恵器鉢である。35～39は瓦質で焼成がやや悪く、40、41は堅く焼き締まっている。35は外面に大きな格子叩き、内面に粗い刷毛目が施され、37～39の内面には刷毛目が施される。42は壺底部、第103図16、17は壺口縁部から肩部で、同一個体と思われる。43は鉢で、ともに茶褐色の陶器だが、産地は不明。48は双雀鏡で、2羽の雀に向かい合わせて草花が描かれている。鑄上がりは悪く、文様は不鮮明である。

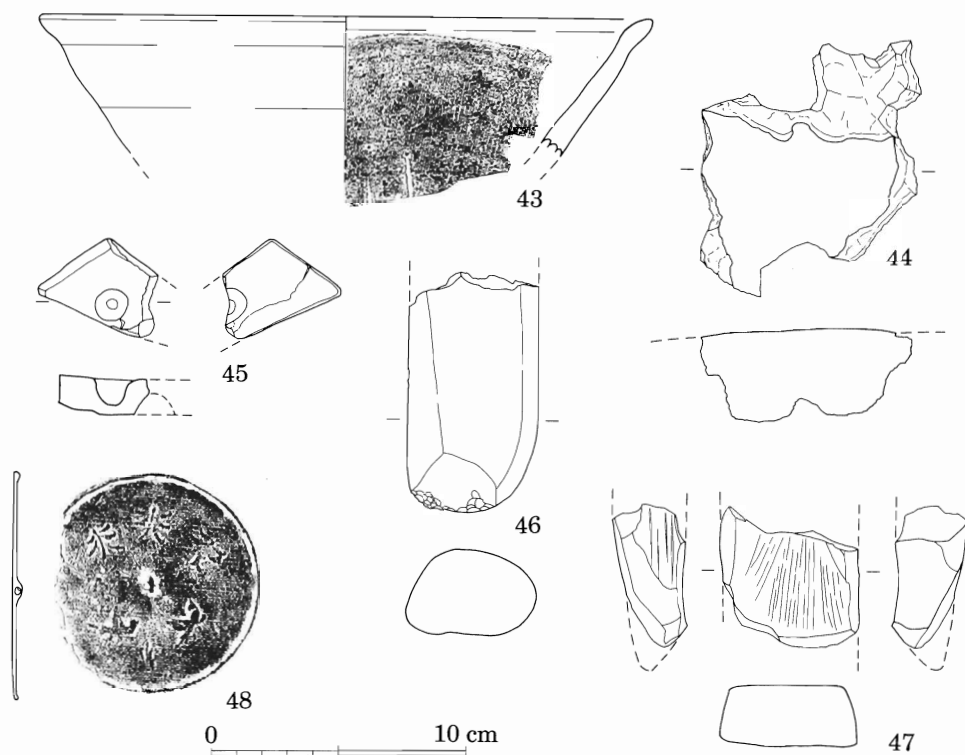
以上が SB 09に近い時期と考えられる遺物である。このほか29、30は土師器鍋（30は片口）で、詳細な時期は不明であるが白磁などと同時期の可能性も考えられる。これらは白磁IV類が12～13世紀、和鏡が12世紀ころと考えられることから、SB 09は12～13世紀の建物跡と思われる。



第98图 4B区SB09出土土器 1:3



第99图 4B区SB09出土遗物(1) 1:3

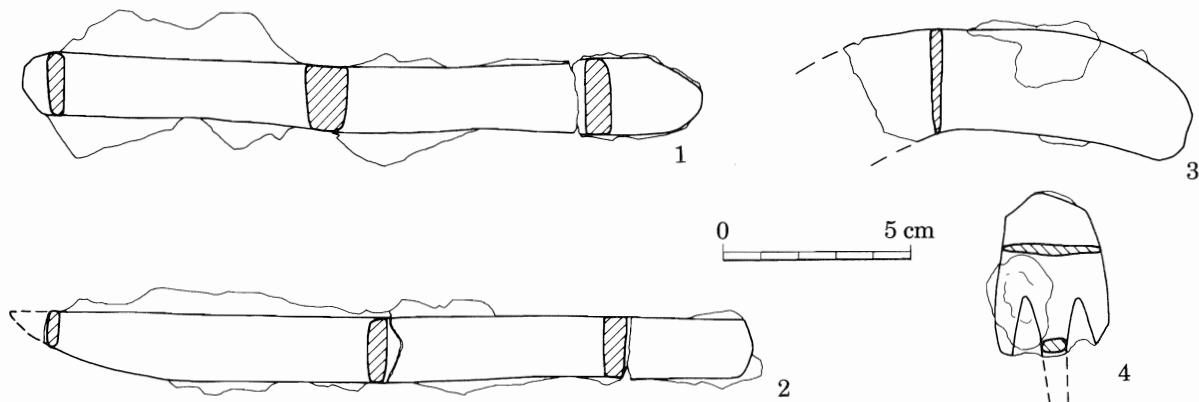


第100図 4B区 SB 09出土遺物(2) 1:3

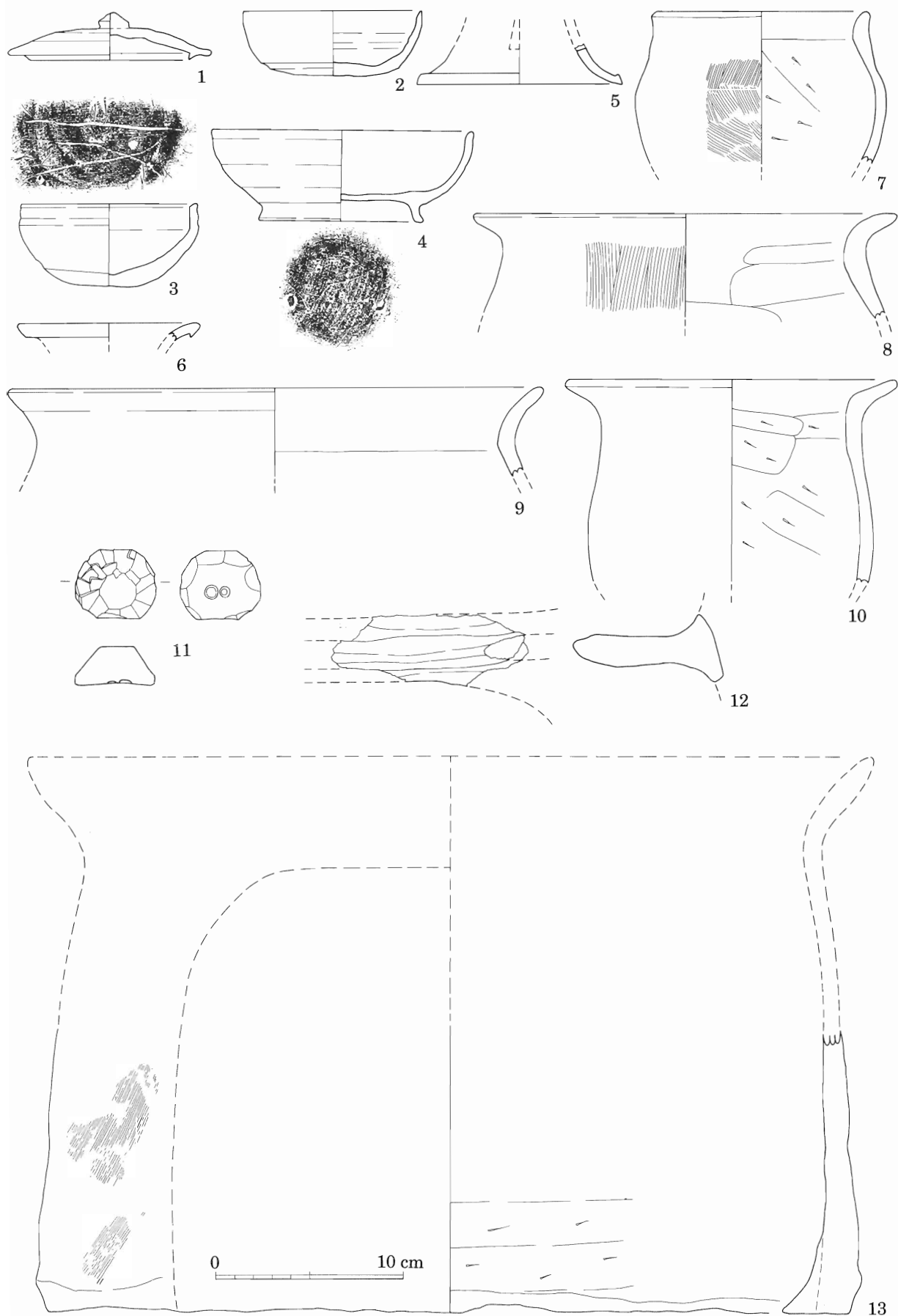
以上のほか、多くの古墳時代から奈良時代の土器や石器などが出土している。いずれも SB 11または12に伴うものが多いと思われるが、所属を明らかにすることはできない。このなかで注目されるものは第98図18(図版78)の円面硯である。8世紀ころここに識字層が居住していたことを示し、3B区や7区の官衙的な建物跡との関係が窺われる。

SB 10(第105図) SB 09-1の東に位置する。2棟の掘立柱建物跡が抽出できたが、壁帯溝をもたないので SB 09とは無関係かもしれない。

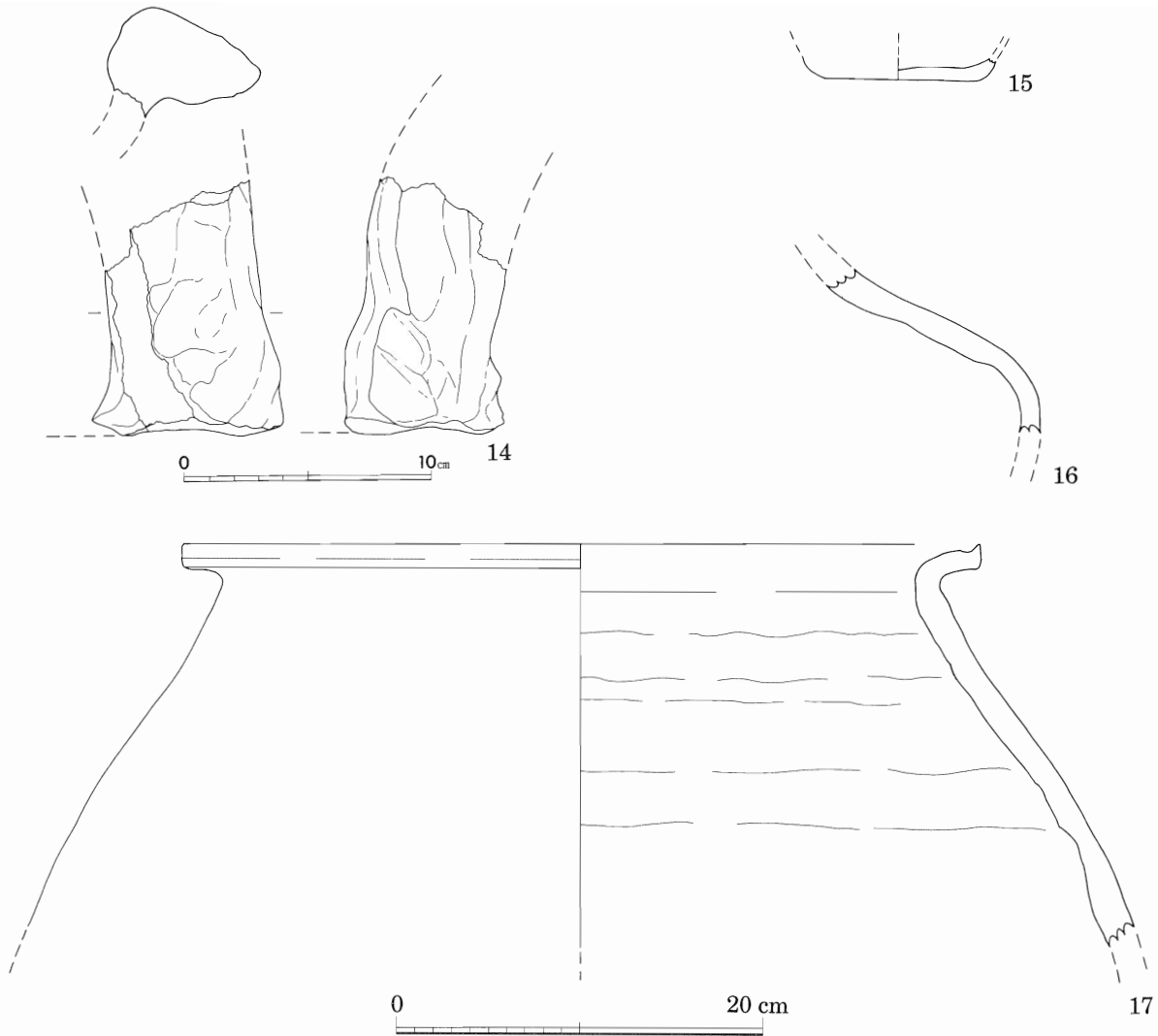
SB 10-1は2×3間(3.7×4.9 m)、SB 10-2は2×2間以上(3.3×4.6 m)の小型の掘立柱建物跡である。ともに柱穴の大きさはまちまちである。



第101図 4B区 SB 09出土鉄器(1:2)



第102图 4B区 SB 09-3·4 出土遺物(1) 1:3

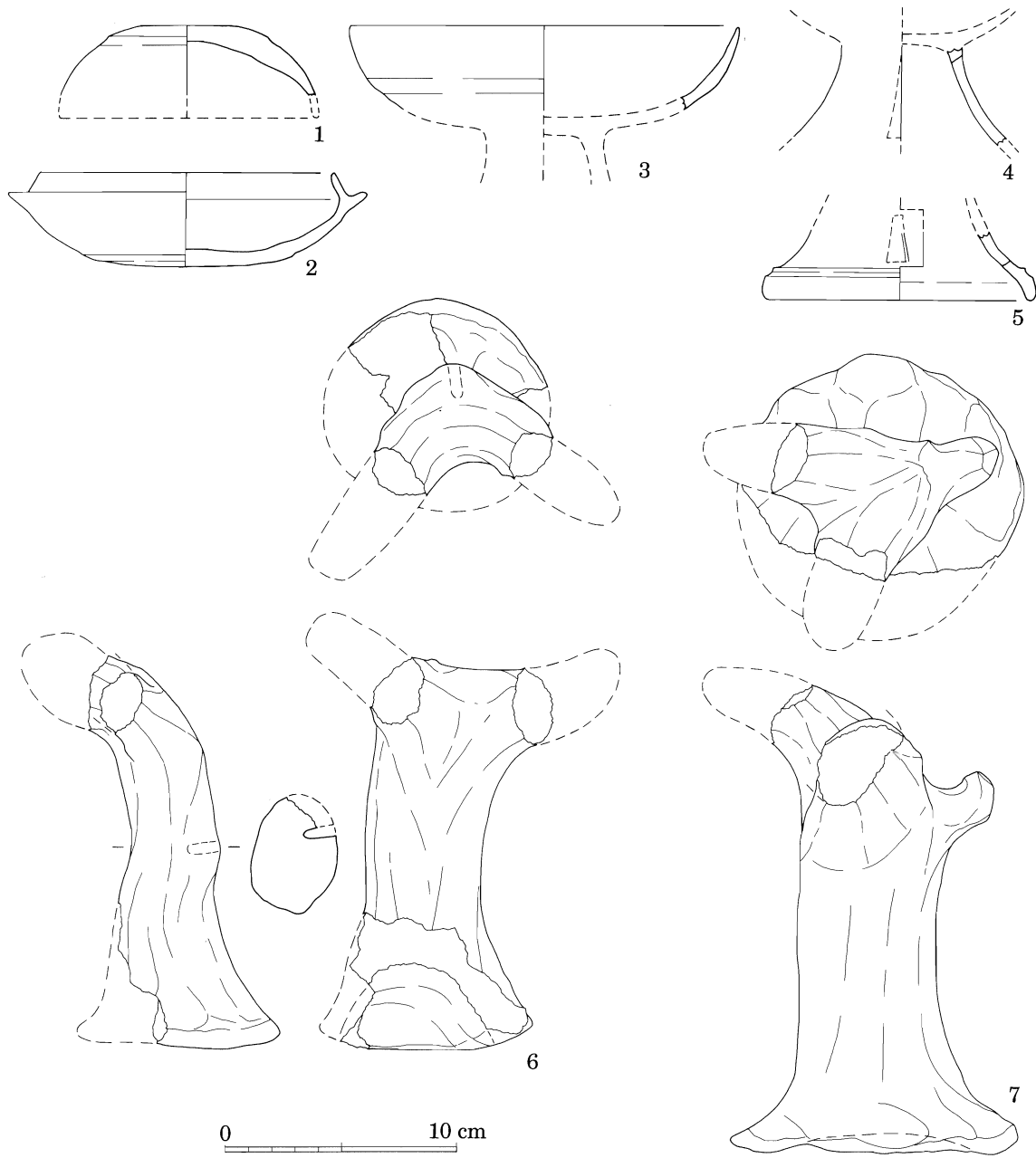


第103図 4B区 SB09-3・4 出土遺物(2) (14.15 1:3 16.17 1:4)

SB 11 (第106図) 2×3間(4.3×7.6 m)の掘立柱建物跡で、溝5の主軸と同じ方向である。柱穴の大きさ、並びは不ぞろいである。間違いなくこれに伴うといった遺物が特定できないため時期は不明であるが、壁帯溝(溝5)の方向がSB 12と同じであることから古墳時代後期から奈良時代の建物跡と考えられる。

SB 12 (第107～118図 図版59) SB 09の床面下から検出された、主軸が12～20度東に傾いた建物跡群である。抽出できた掘立柱建物跡群は3棟であるが、壁帯溝は6条確認されており、敷地の拡張が数度におよんだことがわかる。この拡張は溝6から溝10が連続しているように窺われるが、溝11はその他の壁帯溝と趣を異にしていることからここに画期があるのかもしれない。層位的には溝11に区画されたSB 12-3がもっとも古い。

南部の壁帯溝(溝8～10)ではこれに伴う掘立柱建物跡が抽出できなかった。壁帯溝の数が拡張の回数とすれば、南側は3回の敷地拡張が行われたことになる。溝6に伴うSB 12-1が建て替えられた形跡がないことから、SB 12-1はそのまま建て替えられず、敷地の拡張部分には



第104図 4B区溝3 出土遺物 1:3

4B区 SB 09出土遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第98図-1	78	須恵器甕	口径18.8	口縁端くり上がる	屈曲部に突線	カキ目	1期	
-2	77	須恵器蓋	口径11 高2.2	擬宝珠つまみ 内面にかえり		回転ケズリ	蓋 C 2 6B期	
-3	77	同上	口径11.7 高2.7	同上		回転ケズリ	同上	ろくろは右回転
-4	77	同上	口径11 高2.9	同上		同上	同上	同上
-5	77	須恵器坏	口径13.8 高4.1	口縁直線的に開く 低い高台		高台接合部に爪形の圧痕。 クシ状工具による搔痕。	8C'	

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第98図 -6	77	同上	口径10.4 高4.5	口縁内湾 高台		ヘラ切り?+ナデ	7期	
-7	77 78	同上	口径10.9 高4.15	口縁端くびれる		静止ケズリ	6B期	
-8		須恵器 高坏	口径13.2 高3	口縁外反。	中央に鈍い突線		長脚無蓋 A6? 5期?	
-9		同上	口径20 高4.4	同上	突線2条		同上	
-10		同上	口径14				長脚無蓋 A7? 5期?	
-11	78	同上	口径15 高4.3	口縁外反。	中央に突線 内面に沈線		同上?	
-12		須恵器 壺?	口径6.2	口縁うすく外反				
-13		須恵器 瓦泉	口径9.6	屈曲鈍い			縁 A8 6B~ 8期	
-14	77 78	同上	底径4.8	平底		底部ケズリカナデ	同上	
-15		須恵器 皿	口径19.1	口縁外反			8~9C'	
-16	78	須恵器 壺?	底径13	平底			9C'?	
-17		同上	口径14.4	直口				
-18	78	須恵器 円面硯	上部外径 10.2		方形透し		8~9 C'	
-19	78	須恵器 提瓶		2型の把手			4期?	
-20	78	須恵器 甕?				内面放射状の 当具痕		
-21		土師器 甕	口径28.4	口縁短く外反		外面ハケ目 内面ケズリ		
-22		土師器 竈	口径37	口縁短く外反		同上		
99 図 -23	79	土師器 支脚	高18.8	受部三支		ケズリ?		
-24	79	土師器 坏	底径6.5	断面形逆三角形の高台			平安~ 中世	
-25	79	同上	口径11.2 底径6 高3.1	口縁内湾		静止糸切	同上	
-26	79	同上	底径6.4	口縁外傾		同上	同上	
-27	79	土師器 皿	口径6.4 高1.5	口縁短い		回転?糸切	同上	
-28	79	同上	口径7.8 底径6.4 高1.25	同上		静止糸切	同上	
-29	79	土師器 鉢	口径12.4	口縁短く外反 胴部張らず		外面ハケ目 内面ケズリ	同上?	
-30	79	同上	口径17 高7.1	口縁短く外反 片口		同上	同上?	
-31	80	白磁 碗	口径15.7	口縁玉縁		内面~外面上半に 白釉	IV類 12C'	
-32	81	同上	口径14	同上(顕著でない)			同上	
-33	81	同上	底径7.8	低い高台		内面~外面上半に 白釉	同上	

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第99図-34	81	白磁碗	底径7	同上		内面に白釉	同上	
-35	80	須恵器甕				外面粗い格子叩き 内面ハケ目	12 ~ 13 C'	
-36	81	須恵器鉢		くり上げ状の口縁		内面ハケ目+ナデ	同上	やや瓦質
-37		同上	口径28.6	同上		内面ハケ目	同上	同上
-38	80	同上				同上	同上	同上
-39	80	同上	口径24.4	くり上げ状の口縁		内面ハケ目	同上	同上
-40	81	同上	底径13.6	平底		内面滑らか (使用痕?)	同上	硬質
-41	81	同上	口径25.8	くり上げ状の口縁		回転ナデ	同上	硬質
-42	81	陶器壺?	底径20	平底		ナデ	同上	茶色
100図-43	82	陶器摺鉢	口径24.4	口縁わずかに外反		内面にクシ目 回転ナデ	同上	茶色
-44	82	壁?		生きている面は平坦				炉壁?
-45	79	石製品		中央に孔 (貫通しない)				
-46	79	叩石				一端に打痕		黒色 玉作用ハンマーか?
-47	79	砥石				3面を使用 粗い擦痕		白色
-48	82	双雀鏡	鈕孔径0.2 直径9.2	縁低い	雀の間に草花1 上部に草花3	鑄上がり悪く、文様不鮮明	12 ~ 13 C'	

4 B 区 SB 09-1・2出土遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第102図-1	83	須恵器蓋	口径8.6 高2.6	天井部につまみ、 内面にかえり		回転ケズリ	蓋 C 2 6 B 期	ろくろ右回転
-2	83	須恵器坏	口径9.6 高3.5	内湾する単純口縁		ヘラ切り+ナデ	坏 C 2 6 B 期	同上?
-3	83	同上	口径9.5 高4.5	口縁端にくびれ (上端平坦面)		同上	6 B 期	内面にヘラ記号
-4	83	同上	口径14 底径8.9 高4.9	口縁内湾 高い高台		静止糸切	坏 B 3 8 期	
-5		須恵器高坏	底径11.1	脚端部に平坦面	三角形透し		高坏 A 6? 5 期	
-6		須恵器壺	口径10	口縁端に平坦面				
-7		土師器甕	口径11.9	口縁直立 胴部やや張る		内面ケズリ 外面ハケ目		
-8	84	同上	口径23	口縁短く外反		同上		
-9		同上	口径29	同上		内面ケズリ?		
-10		同上	口径17.8	同上 胴部張らない		内面ケズリ		
-11	83	石製紡錘車未成品	上面径1.8 底面径4.4 高1.95	断面形台形		側縁に加工痕 底面に小さな凹み		
-12	85	土師器甕		焚口の鑄		擬口縁明瞭		

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第102図-13	85	土師器甕	底径43.6	底部		外面細かなハケ目 内面ケズリ		
第103図-14	85	同上		底部(焚口の鏝)		指押圧?		
-15		土師器坏	底径6.8	平底		回転糸切		
-16		陶器甕		肩強く張る		暗茶色の釉	12 ~ 13 C?	
-17	84	同上	口径21.9 高21.1	口縁短く外反 口縁端に平坦面		同上 内面に粘土接合痕	12 ~ 13 C?	16と同一個体か

4 B 区 SB 09溝3出土土器一覧表

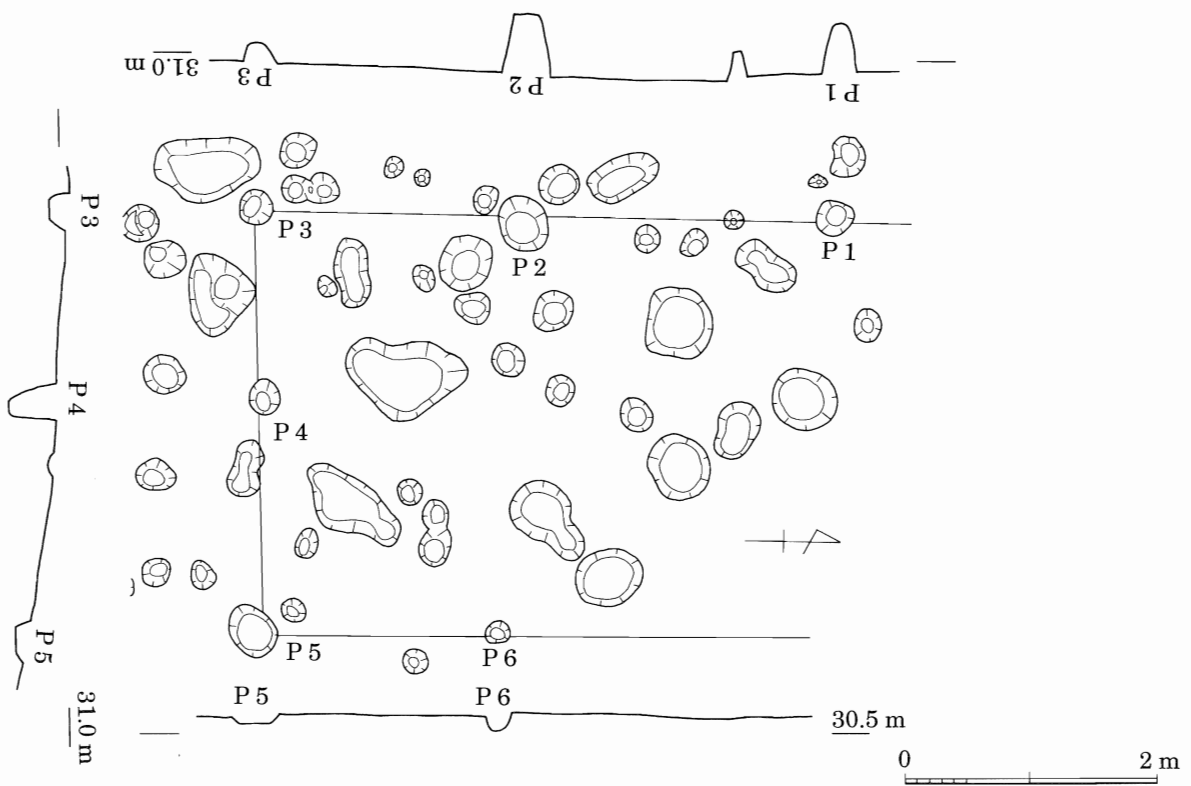
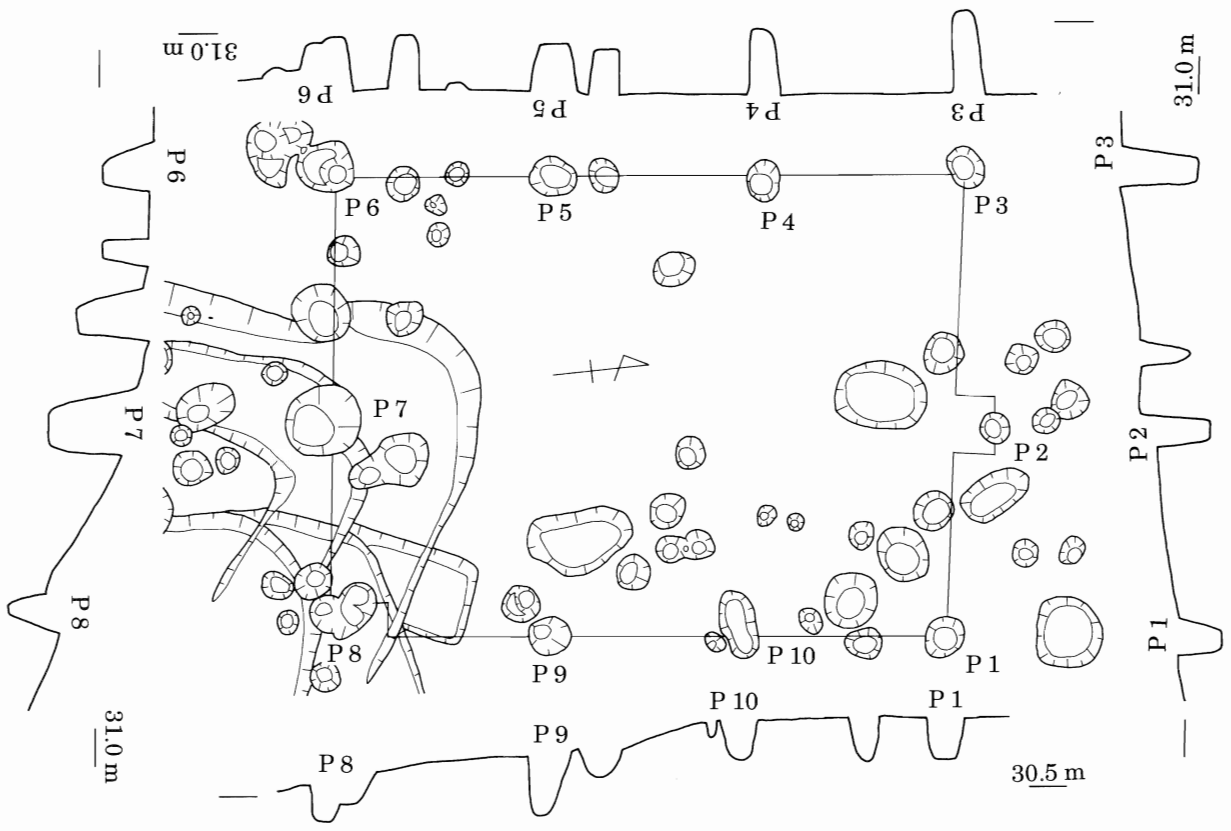
挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第104図-1	85	須恵器蓋		稜なし		ヘラ切り+ナデ	蓋 A 8 6期	
-2	85	須恵器坏	口径12.8 高4.05	たちあがり短く内傾		回転ケズリ	坏 A 6 4期	
-3		須恵器高坏	口径16.8	坏部内湾			低脚無蓋 A 5? 5期	
-4		同上			3方三角形透し		低脚無蓋 A 3 3~4期	
-5		同上	底径11.6	脚端部屈曲	脚端部に突線透し		低脚無蓋 A 1 1期	
-6	87	土師器支脚	底径9 高17.2	二支の受部 底面凹み底		ケズリ?		
-7	87	同上	底径12.5 高20.6	三支の受部 底面凹み底		ケズリ?		

4 B 区 SB 10-1計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		2間 (3.7 m)			3間 (4.9 m)		
主 軸		N-6° —W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	30×33	23×24	30×34	26×33	38×32	45×40
	深 さ	33	54	61	53	38	43
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	59×57	(24+α)×31	33×30	55×29		
柱 間 距 離 (m)	深 さ	70	39	51	31		
	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7	
		1.7	2.1	1.6	1.6	1.7	2.1
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1
1.5	1.7	1.6	1.6				

4 B 区 SB 10-2計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		2間 (3.3 m)			2間 (4.6 m)		
主 軸		N-0° —W					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	30×28	39×45	27×28	25×29	38×42	20×18
	深 さ	40	51	17	38	17	18
柱 間 距 離 (m)	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7	
	2.5	2.1	1.5	1.8	1.8		



第105图 4B区 SB 10-1 (上) · 2 (下) 实测图 1:60

付属屋があったか、余地となっていたと考えられる。余地であるならその機能は不明である。

SB 12-1 (第107図) は3×5間 (4.5×8.2 m) の大型の建物である。これに伴う壁帯溝は溝6と思われ、その規模は主軸方向 (南北) で約12 m、東西で約4.2 m である。柱穴は径約50cmから80cmと比較的大きな柱穴である。柱間はほぼ1.5 m で等間隔である。

SB 12-1からの出土が明らかな遺物は、第111図1、17、21である。1は須恵器蓋、17、21は同長脚無蓋高坏で、これらの組み合わせは出雲4期である。しかし層位的に下層である SB 12-3が出雲4期でも新しい様相をもつので、SB 12-1は出雲4期から5期ころと考えた方がよい。

SB 12-2 (第109図) は2間以上×4間 (3.4 m 以上×6.7 m) の掘立柱建物跡である。これに伴う壁帯溝は溝7と思われ、その規模は主軸方向 (南北) で約10.2 m、東西で約3 m である。これは SB 12-1と主軸方向がほぼ同じであることから、両者は近い時期に建て替えられたものと推定される。

4 B 区 SB 11計測表

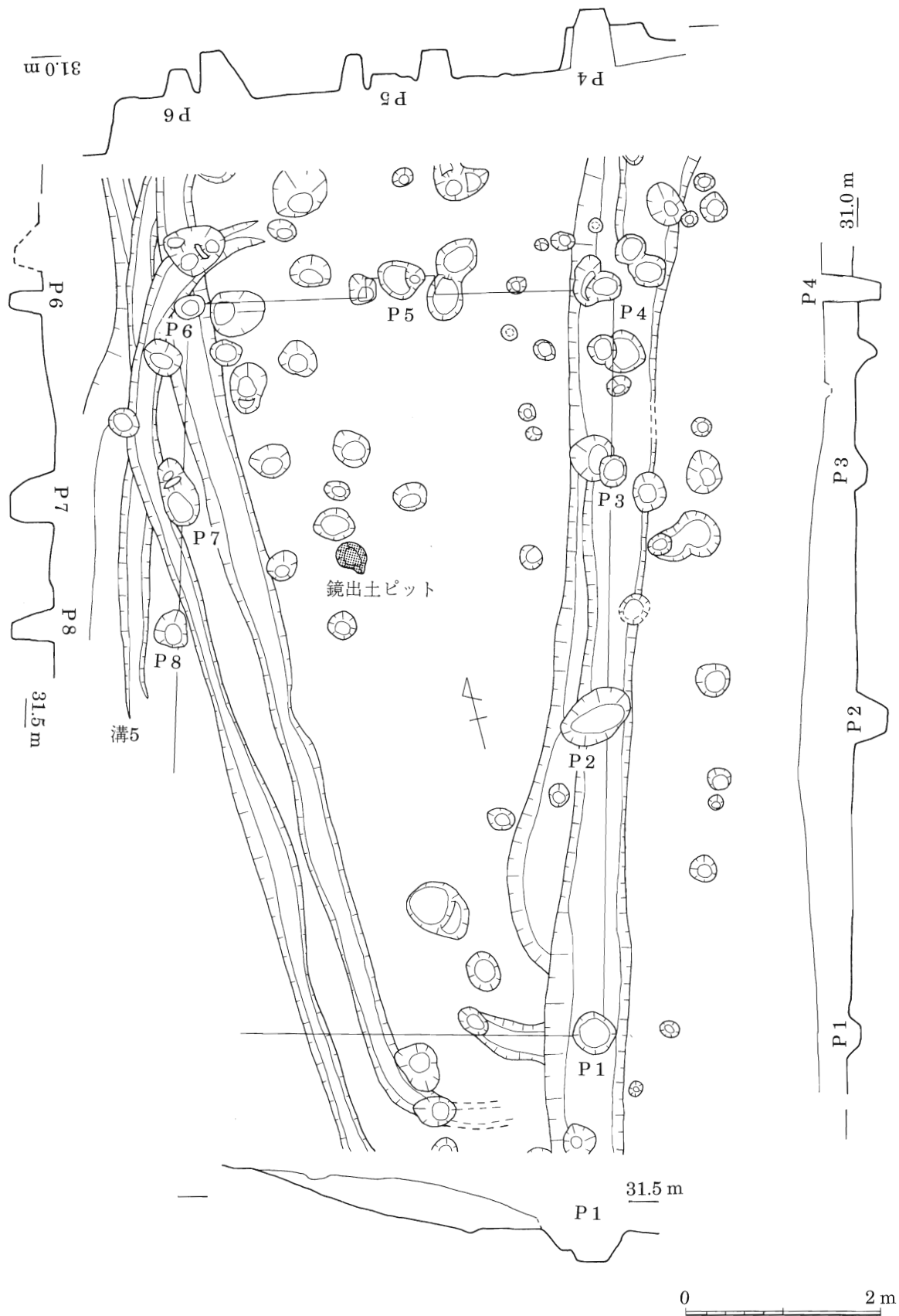
規 模		梁行き				桁行き			
		2間 (4.3 m)				3間 (7.6 m)			
主 軸		N-15° -W							
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
	上面径	44×44	72×61	28×32	36×30	49×41	31×24	71×37	35×38
	深 さ	17+α	33+α	17+α	75	15	34	45	43
柱間距離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7	P 7-8	
		3.1	2.7	1.8	1.9	2.4	2.1	1.3	

4 B 区 SB 12-1計測表

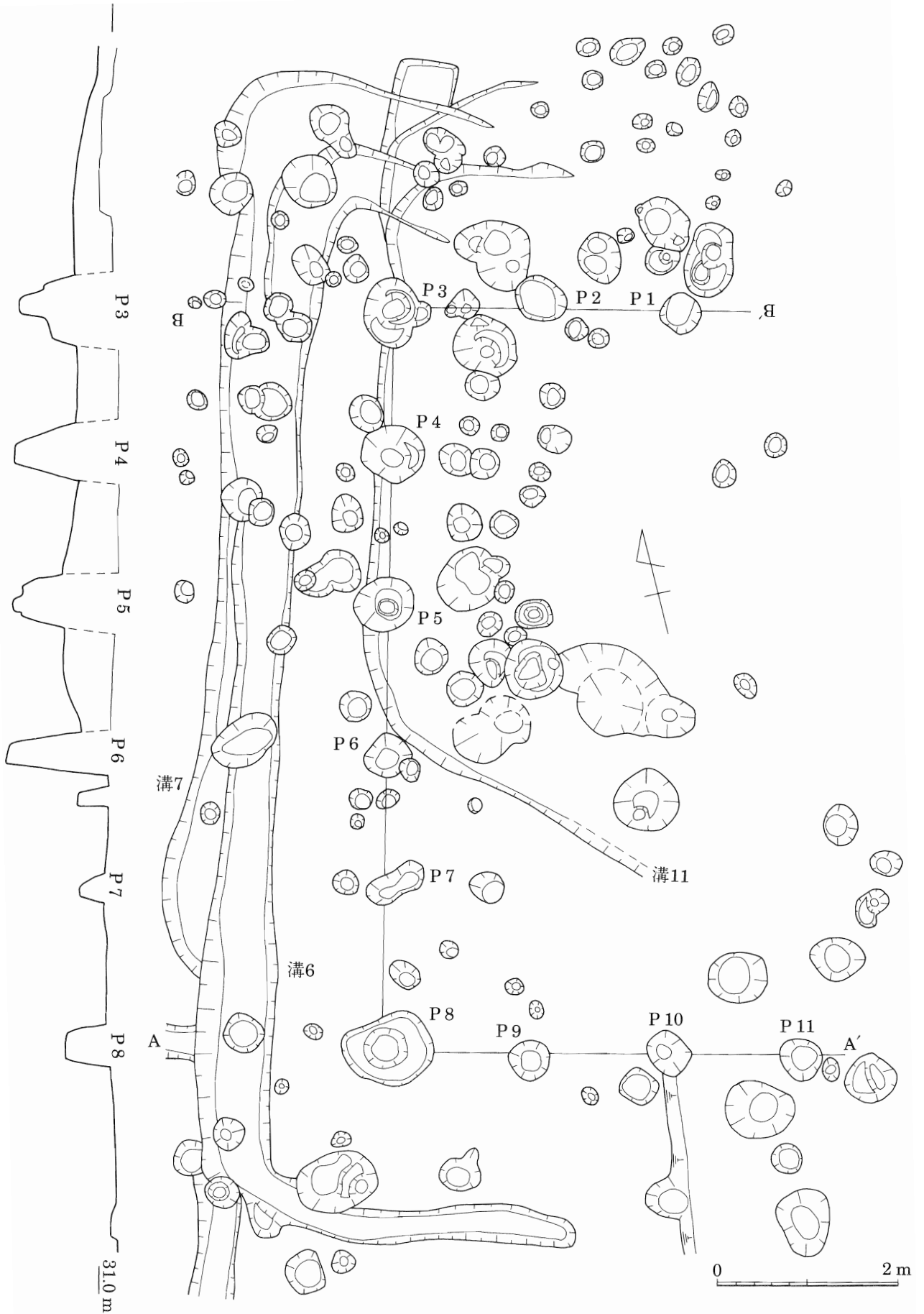
規 模		梁行き				桁行き		
		3間 (4.5 m)				5間 (8.2 m)		
主 軸		N-15° -W						
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	
	上面径	47×46	56×49	74×78	70×64	66×60	54×49	
	深 さ	34+α	72	104	114	117	116	
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	
	上面径	69×31	102×84	45×46	50×51	48×47		
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7	
		1.5	1.5	1.6	1.7	1.7	1.5	
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-11	P 11-12	P 12-1	
		1.7	1.5	1.5	1.5			

4 B 区 SB 12-2計測表

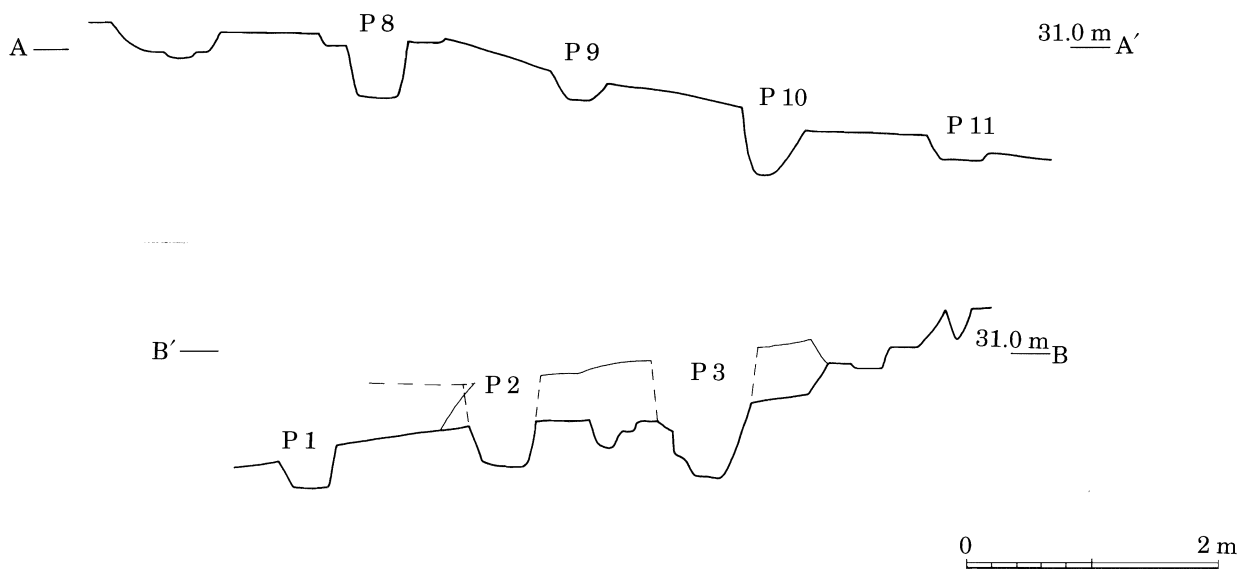
規 模		梁行き				桁行き			
		2間以上 (3.4 m 以上)				4間 (6.7 m)			
主 軸		N-12° -W							
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
	上面径	39×31	84×78	29×31	37×40	36×43	35×34	28×29	38×35
	深 さ	37	38	46	44	18	33	17	17
柱間距離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7	P 7-8	P 8-9
		1.7	1.7	1.5	1.3	2.0	1.9	1.6	



第106図 4B区 SB11実測図 1:60



第107图 4B区SB 12-1实测图 1:60



第108図 4B区 SB 12-1断面図 1:60

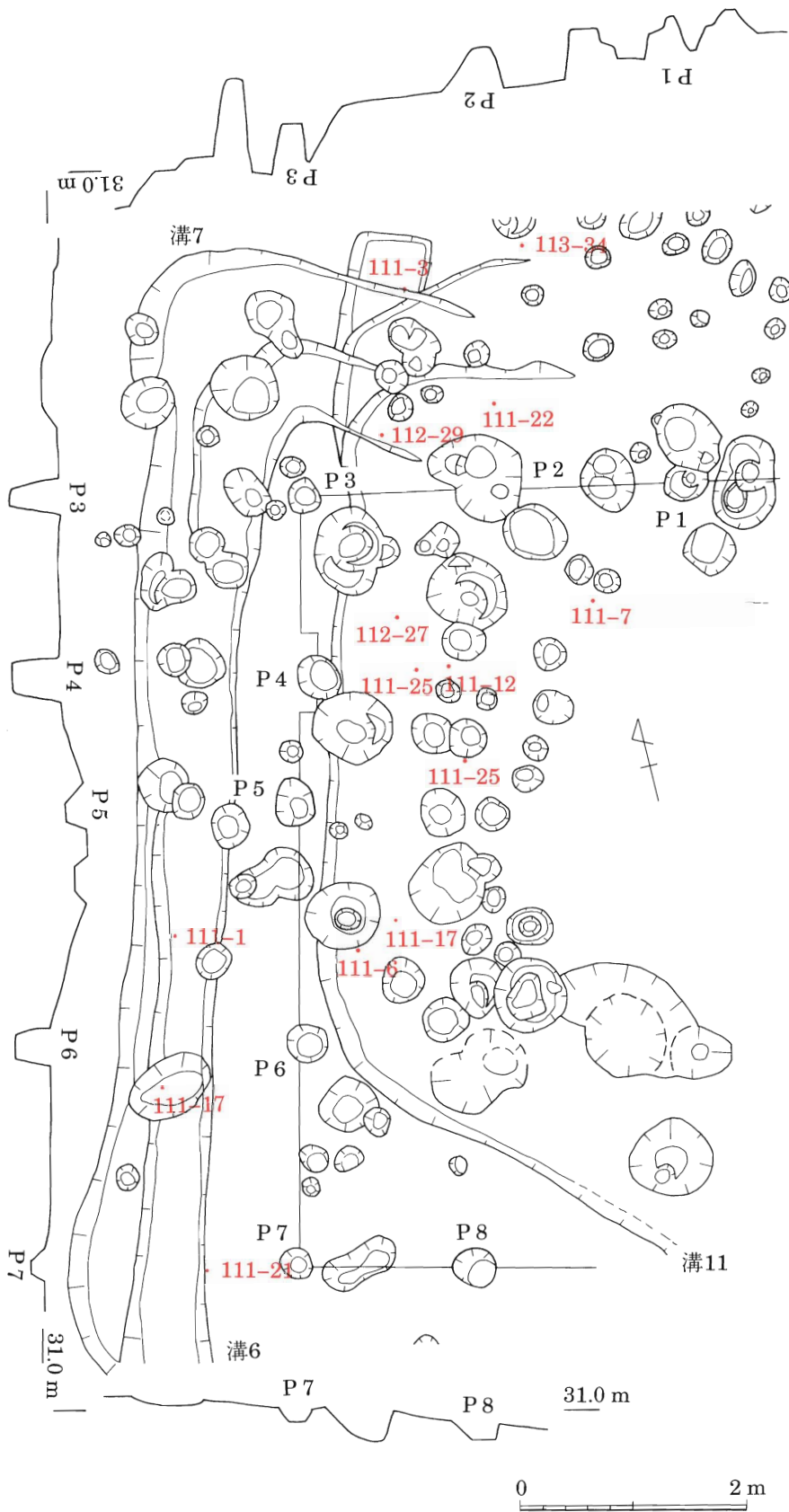
SB 12-3 (第110図) は1間以上×4間 (2.3 m 以上×4.9 m) の掘立柱建物跡である。これに伴う壁帯溝は溝11と思われ、その規模は主軸方向 (南北) で約7.5 m、東西で約3 m である。柱間は梁側が2.2 m、桁側が約1.2 m とほぼ等間隔である。溝11は便宜上「溝」と名付けたが、わずかな段差があるだけの加工段となっている。平面形も不整形で、各角は他の壁帯溝のように直角にならず外開きになっている。

明らかに SB 12-3から出土したものは、第111図3、4、6、7、11、12、16、19、22、25である。これらの組み合わせは出雲4期でも新しい段階である。これにより SB 12-3は出雲4期の新しいころと考えられる。

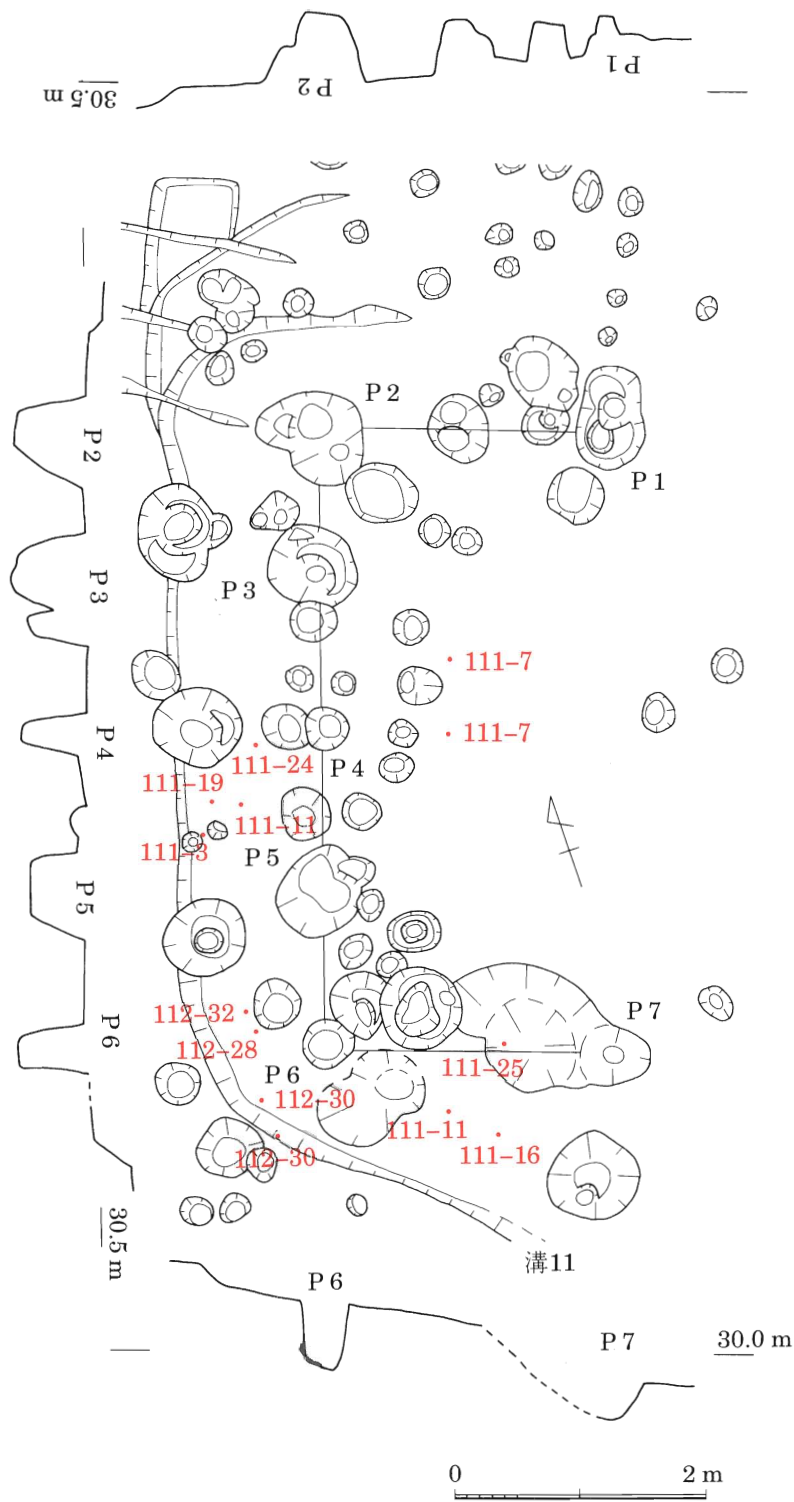
SB 12では遺物を取り上げた後に住居跡のプランが確認されたため、個々の遺物がどの住居跡に所属するのか、明確にできなかった。おおまかにいえば、第111、112図は SB 12-2、3 付近または溝11に囲まれた範囲で出土している。また、第113～117図に示した土器は、だいたい溝11南端から溝6南端に囲まれた範囲で、第118図は溝6南端から溝10に囲まれた範囲で出土している。これら出土地点別に並べてみると、南側で出土したものほど新しい時期のものが多くなる傾向が窺える。すなわち、溝11南端から溝6南端に囲まれた範囲 (SB 12-1?) では

4B区 SA 12-3計測表

規 模	梁行き				桁行き			
	1間以上 (2.3 m 以上)				4間 (4.9 m)			
主 軸	N-20° -W							
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
	上 面 径	21×26	67×81	72×62	34×33	69×74	42×40	(54+α)×48
	深 さ	15	57	62	52	42	55	28
柱間距離 (m)	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7		
	2.2	1.2	1.2	1.2	1.3	2.2		



第109图 4B区 SB 12-2实测图 1:60

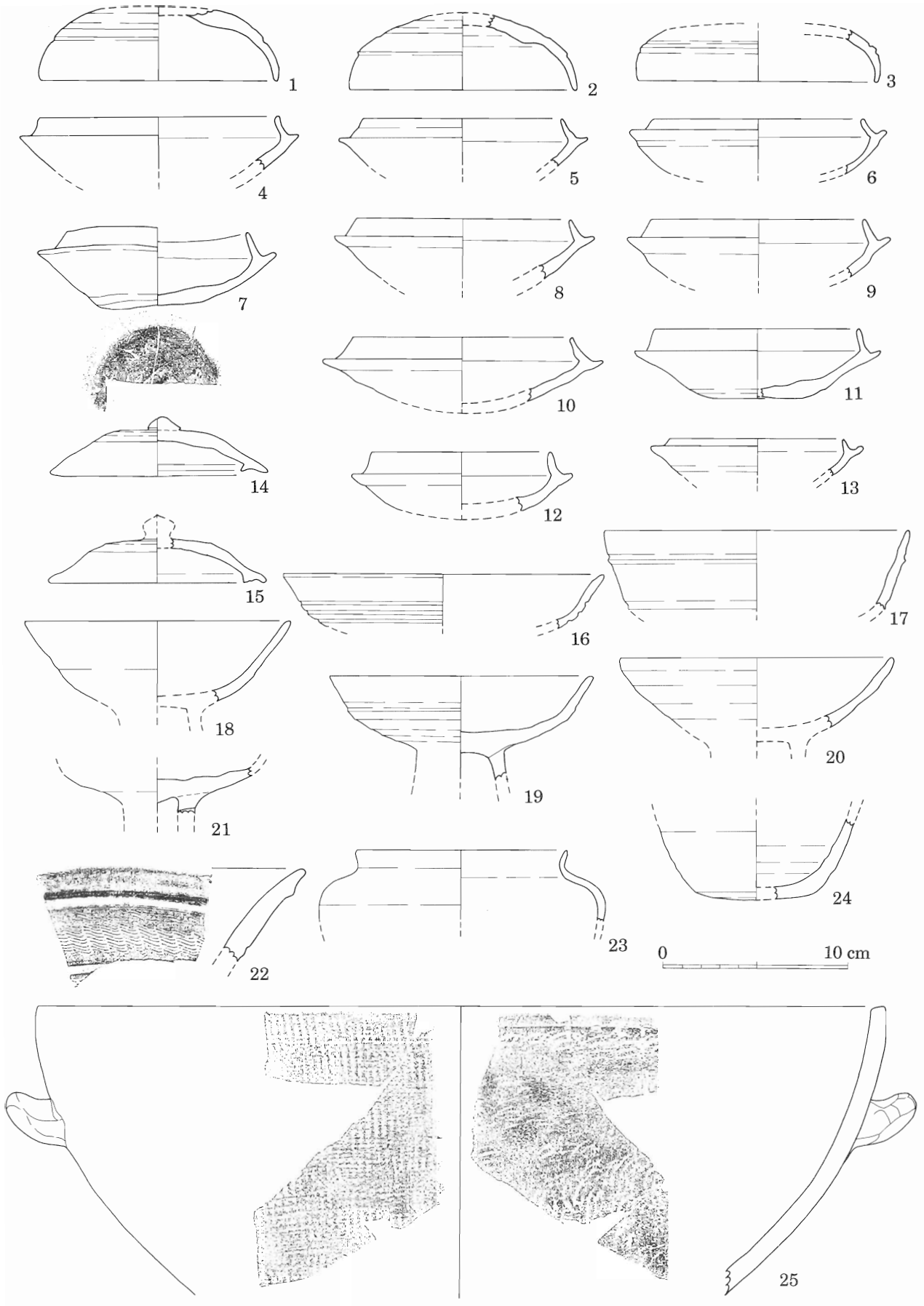


第110図 4B区 SB 12-3実測図 1:60

出雲6B期が主体、溝6南端から溝10に囲まれた範囲（SB 12-1を拡張した部分）では出雲7期が主体となっている。

以上のことから、SB 12ではまず出雲4期（新）にSB 12-3が作られ、次にSB 12-2、さらにSB 12-1、溝8、9、10と、南に向かって展開したと考えられる。

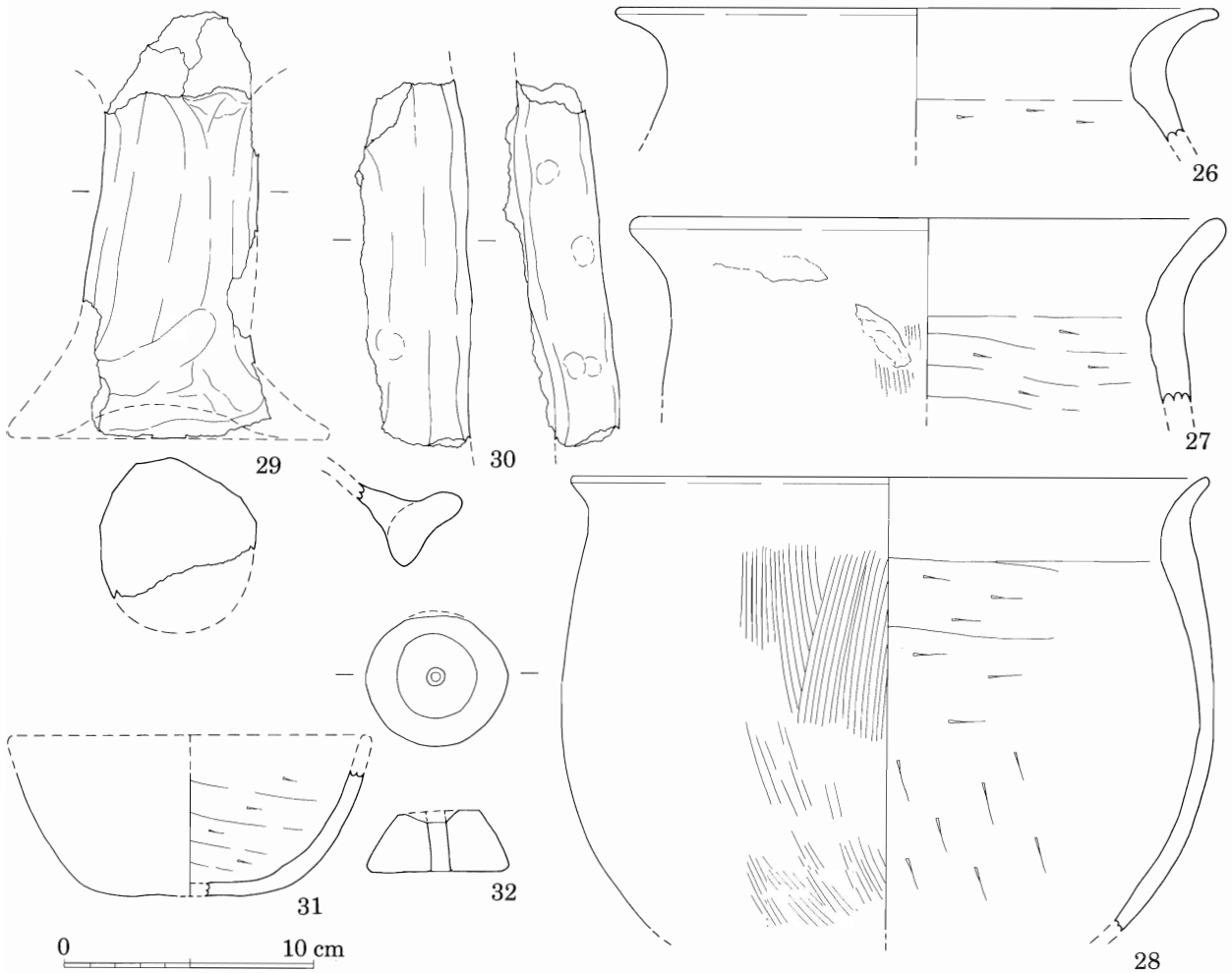
なお、溝8～10では床面が地山でなく、黄色土で貼床していた。これを除去すると不整形な



第111图 4B区SB12出土遗物 1:3

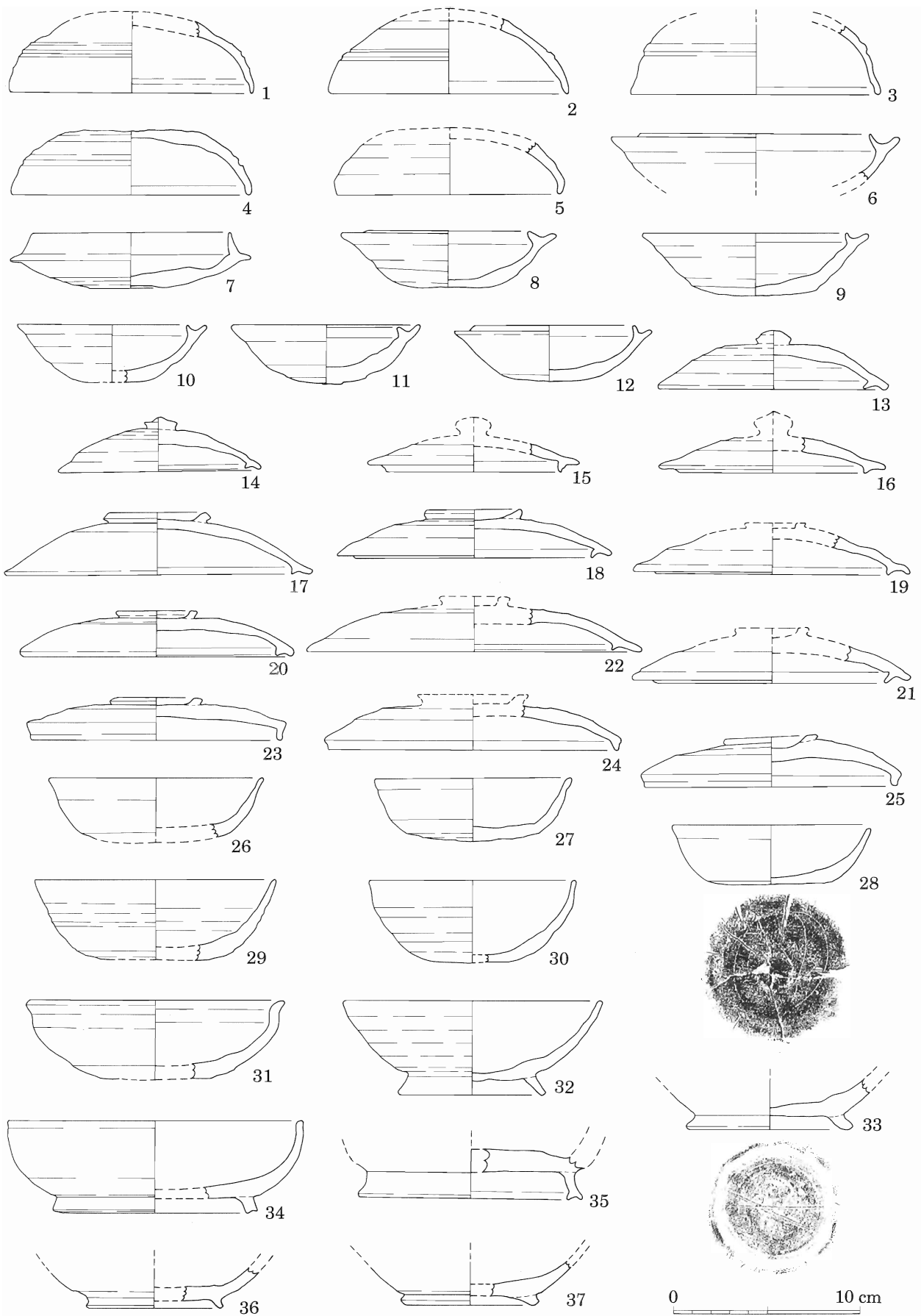
4 B 区 SB 12出土遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第111図-1	86	須恵器蓋	口径12.8	稜は沈線1条による。		回転ケズリ	蓋A5? 4期	ろくろ右回転?
-2	86	同上	口径12.4	同上		同上	同上	ろくろ右回転
-3	86	同上	口径13.2	稜は沈線2条による。			蓋A5-6 4期	
-4		須恵器杯	口径13.1	たちあがり短く内傾			杯A5-6 4期	
-5		同上	口径10.8	同上			同上	
-6		同上	口径11.6 高3	同上			同上	
-7	85	同上	口径9.6 高4.3	同上		ヘラ切り+ナデ	杯A6? 4-5期	「×」のヘラ記号
-8		同上	口径11.6	同上			同上	

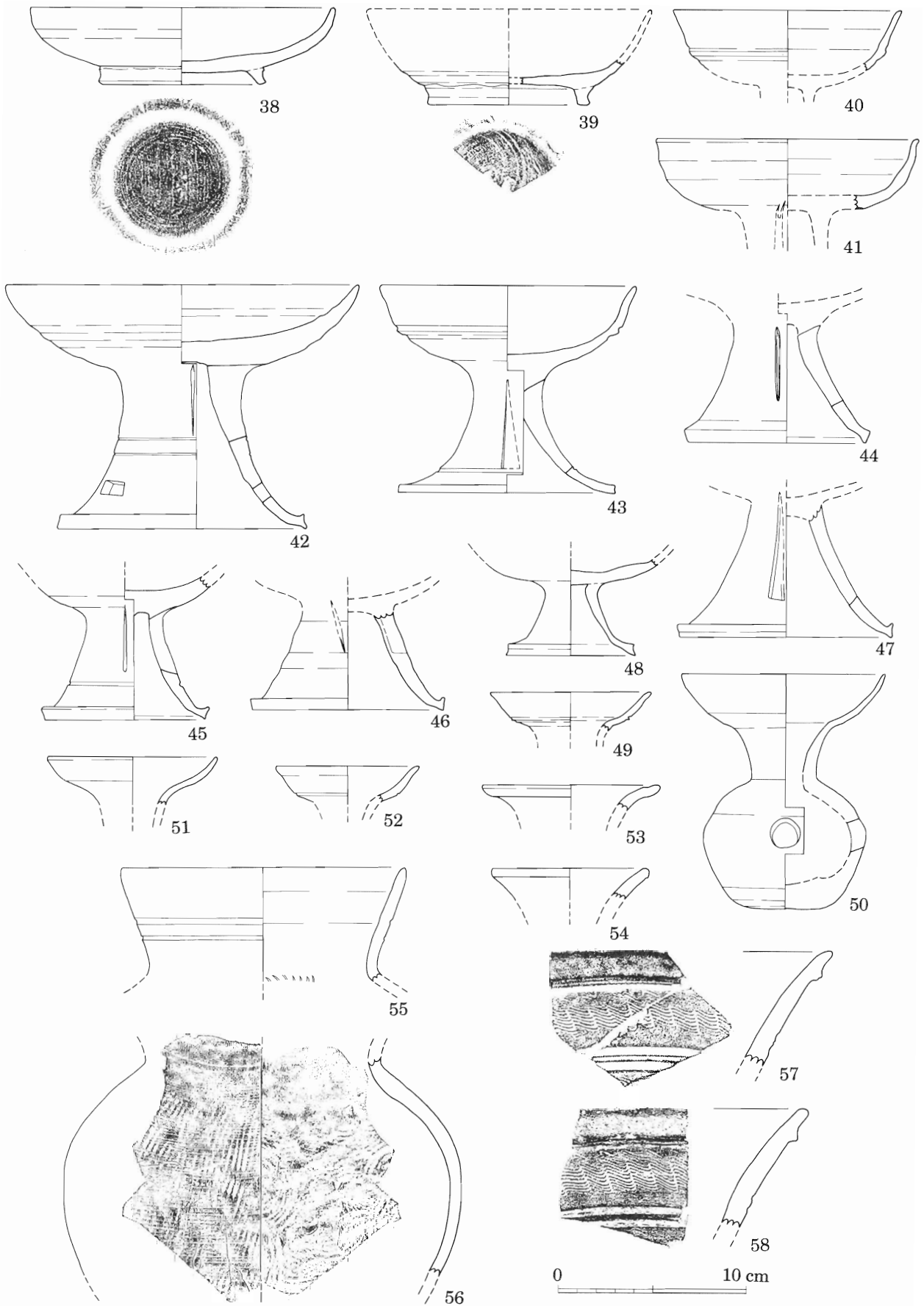


第112図 4 B 区 SB 12出土遺物 (2) 1:3

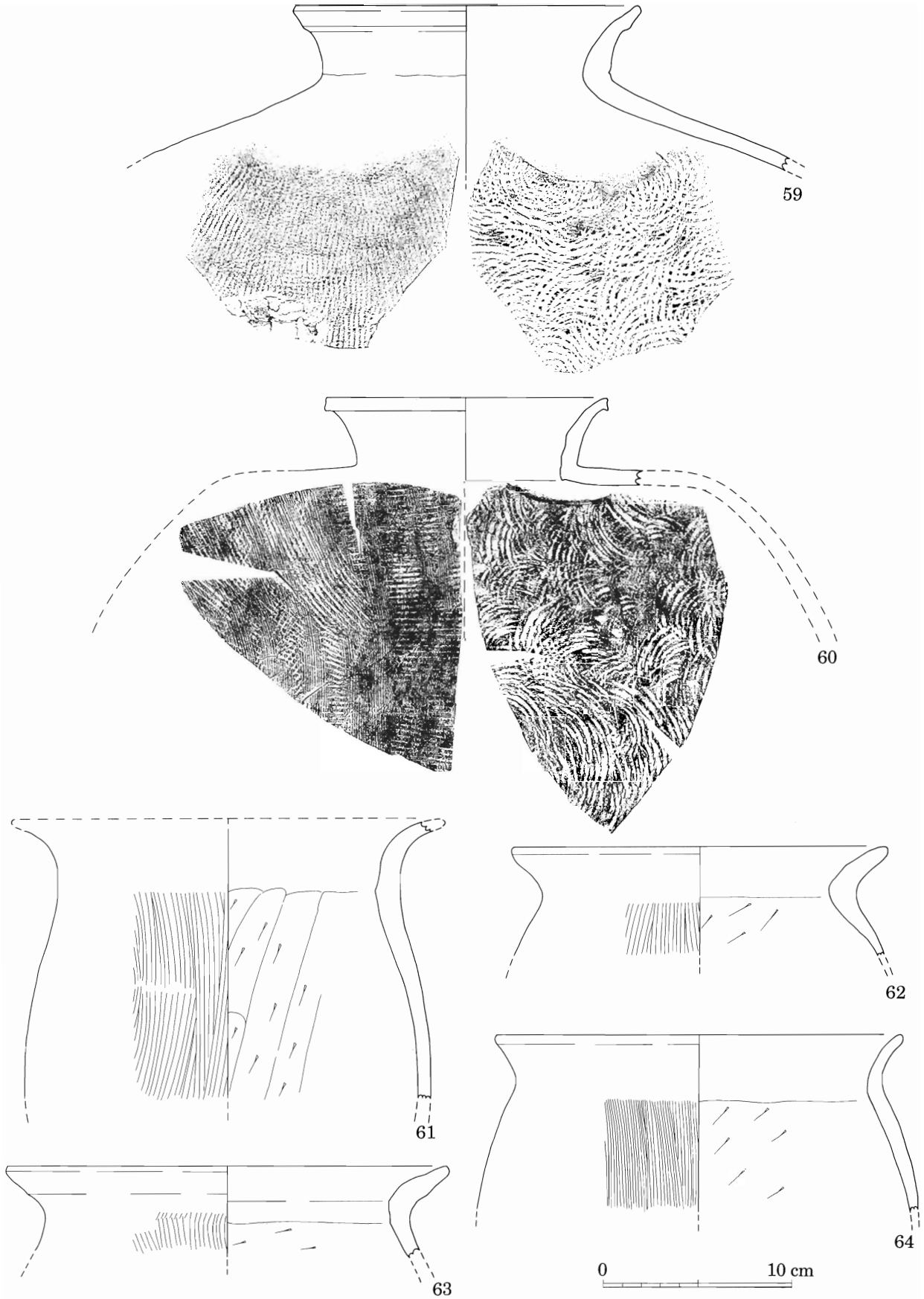
挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第111図-9		須恵器 坏	口径11.7	たちあがり短く内傾			坏A5-6 4期	
-10		同上	口径14.7	同上			同上	
-11	85	同上	口径11.2 高3.8	同上			坏A6 4期	
-12		同上	口径9.8	同上 やや厚い			同上	
-13		同上	口径9.4	たちあがり非常に短く 内傾			坏A8 6期	
-14	86	須恵器 蓋	口径11.8 高3.2	擬宝珠つまみ 内面かえり		回転ケズリ	蓋C2 6B期	ろくろ右回転
-15	86	同上	口径11.6	同上		同上	同上	同上
-16	85	須恵器 高坏	口径17.4	口縁外反	3条の凹線		長脚無蓋 B2? 4期	
-17	85	同上	口径16.6		2条の突線		長脚無蓋 A6-7 5期?	
-18		同上	口径14.3	皿形の口縁			低脚無蓋 A5-7 5-6期	
-19	87	同上	口径14.3	同上	透し		低脚無蓋 A5-6 5-6期	
-20		同上	口径15				低脚無蓋 A5-7 5-6期	
-21		同上			透し三方か?		長脚無蓋 A4? 4期?	
-22	85	須恵器 甕		口縁端に段	凹線2条の上にクシ描き 波状文			
-23		須恵器 短頸壺	口径11.4	肩強く張る				
-24		同上	底径6.6			回転ケズリ		ろくろは右回転
-25	89	須恵器 鍋?	口径23	口縁内湾して大きく開く。 把手付		外面平行叩 内面同心円当具痕		
112 図-26		土師器 甕	口径23.8	口縁短く外反		内面ケズリ		
-27		同上	口径23	同上。胸張らない		同上		
-28	89	同上	口径25.6	同上		外面ハケ目 内面ケズリ		
-29		土師器 支脚		底部凹み底		ケズリ?		
-30	87	土師器 竈		焚口の鏝		指押圧痕		
-31		土師器 椀		平底		内面ケズリ		
-32	87	石製 紡錘車	上面径3.2 底面径5.1 高2.5	断面台形				白色 凝灰岩?



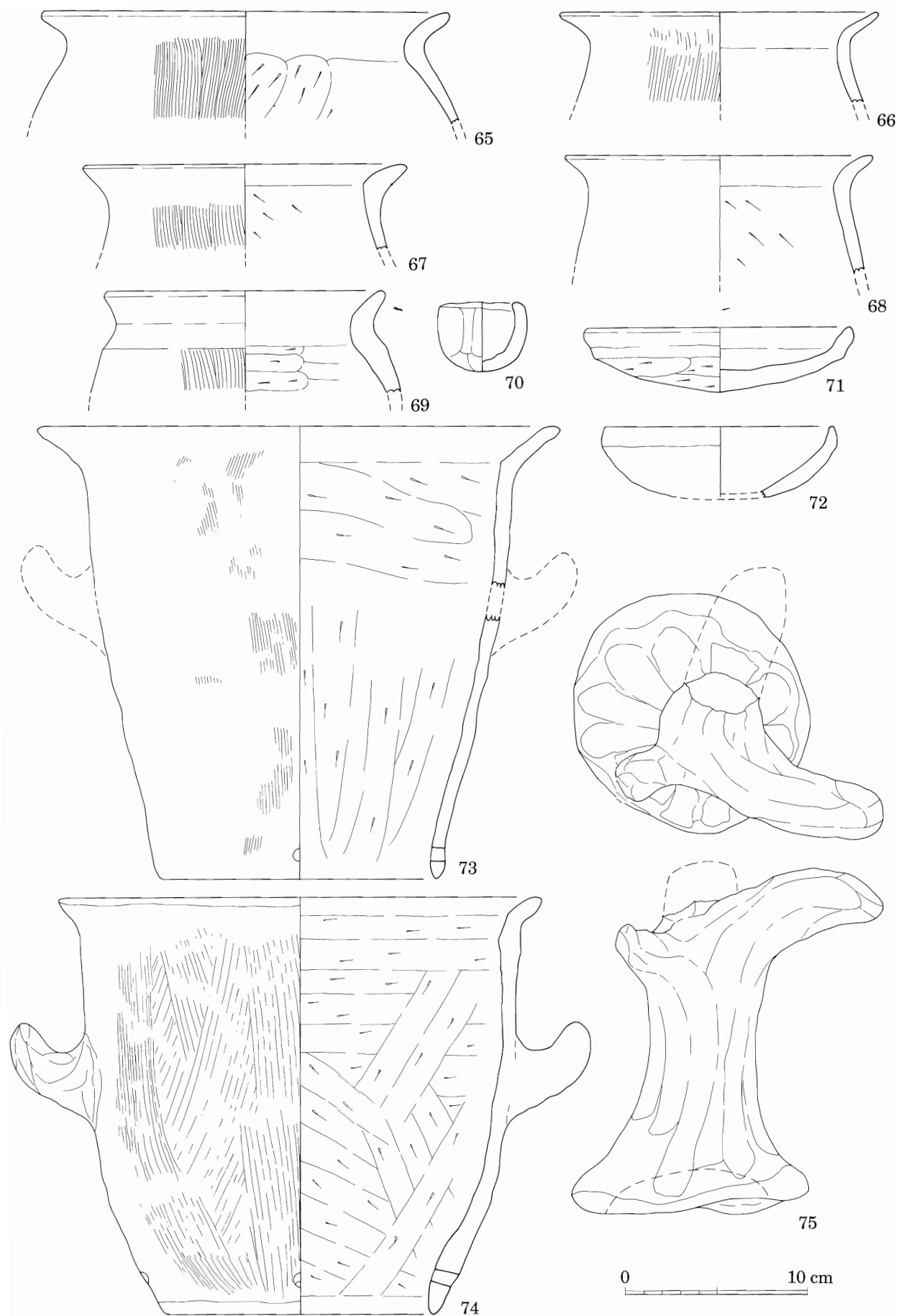
第113图 4B区 SB 12-1.2出土遗物(1) 1:3



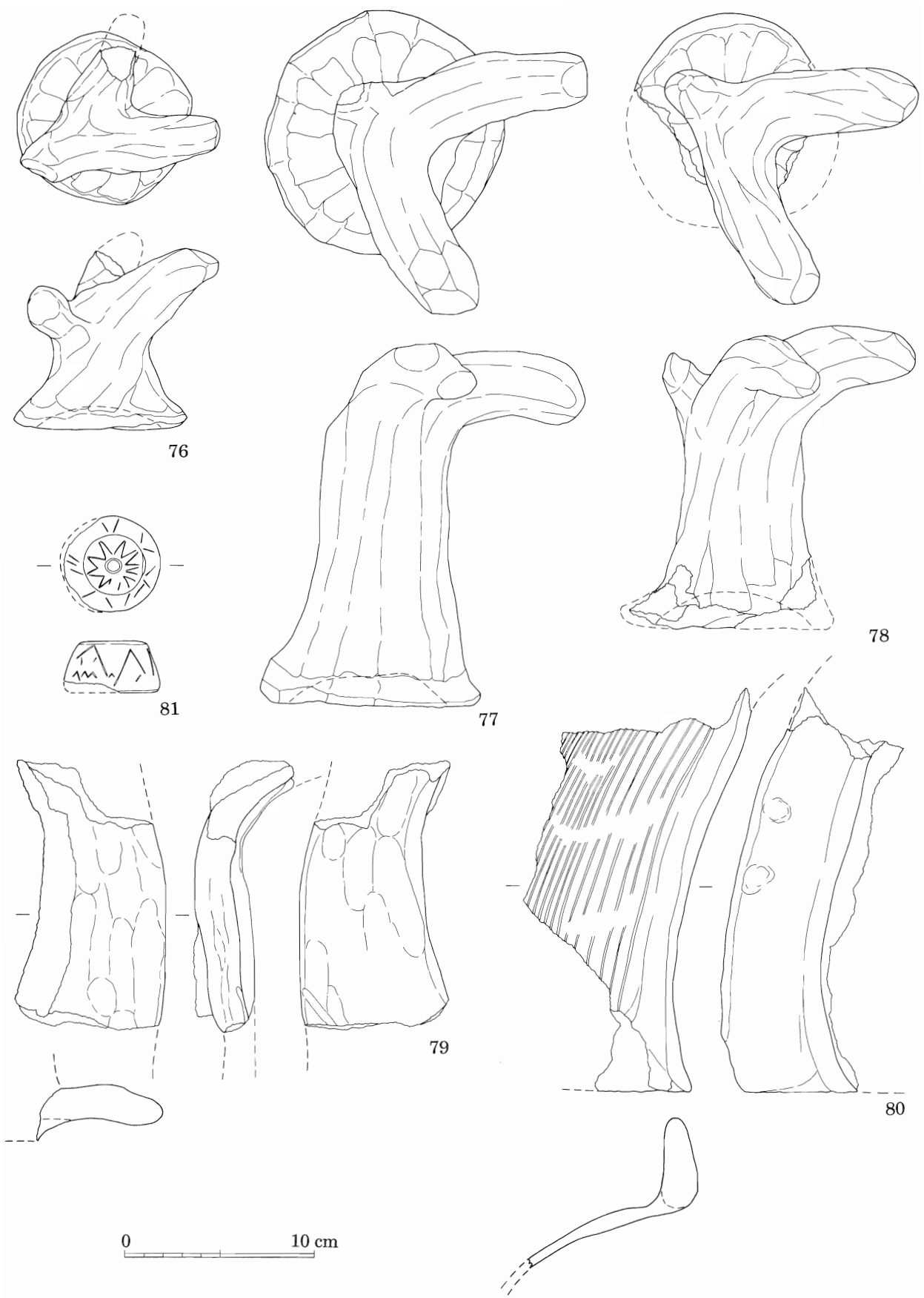
第114图 4B区SB12-1.2出土遺物(2) 1:3



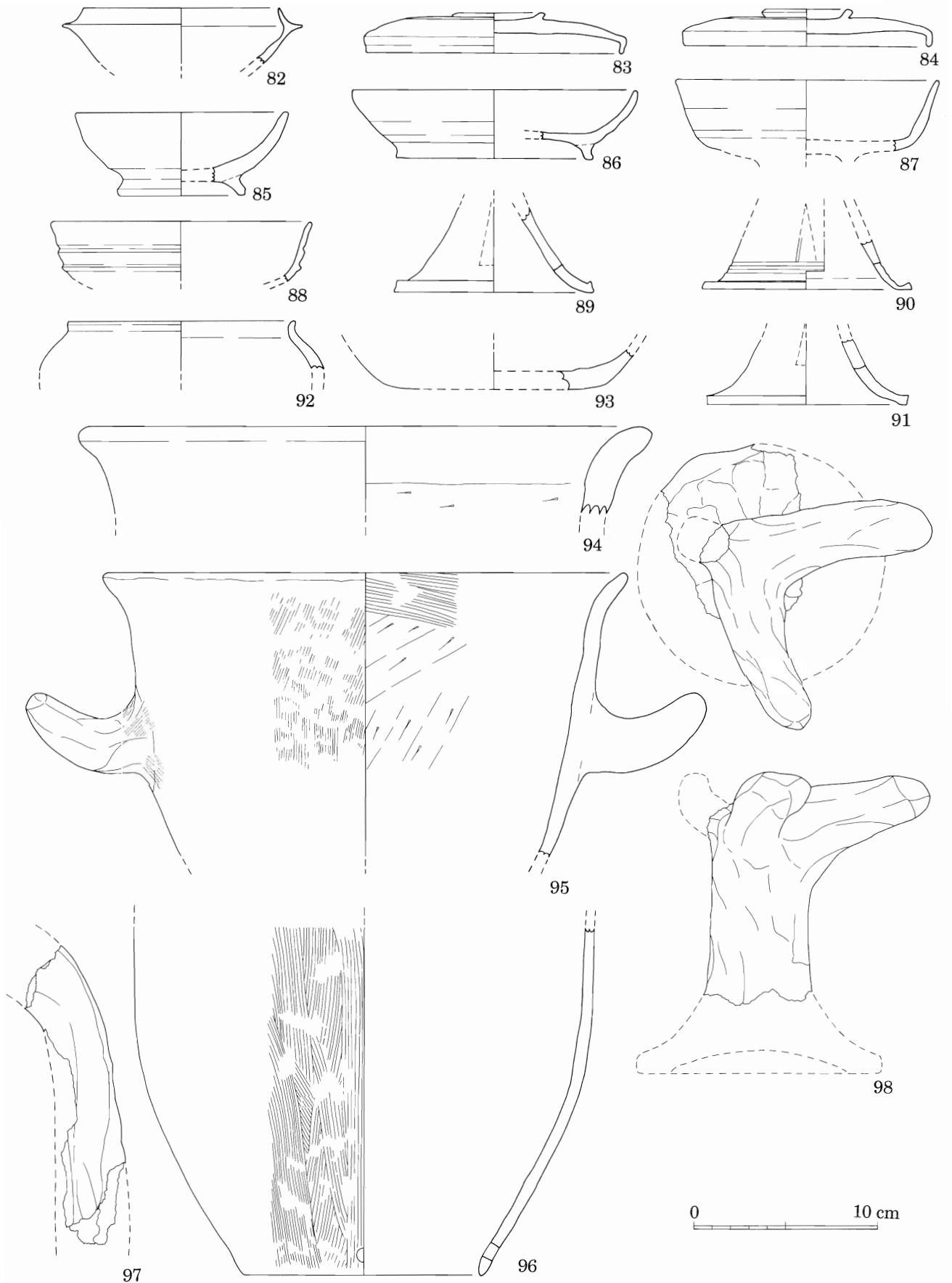
第115图 4B区SB 12-1.2出土遗物(3) 1:3



第116图 4B区 SB 12-1.2出土遗物(4) 1:3



第117图 4B区 SB 12-1.2出土遺物(5) 1:3



第118图 4B区 SB 12-1.2出土遺物(6) 1:3

4B区 SB12-1、2出土遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第113図 -1	89	須恵器 蓋	口径13	稜は沈線1条による。 口縁内面に段			蓋A3? 3期?	
-2	89	同上	口径12.8	稜は沈線2条による		回転ケズリ	蓋A4? 4期	ろくろは右回転
-3	89	同上	口径13.6	稜は沈線1条による 口縁内面に沈線?			蓋A4-5 4期	
-4	88 90	同上	口径13 高3.5	同上		回転ケズリ。中央ヘラ 切り痕	蓋A5-6 4期	ろくろは右回転
-5		同上	口径12	口縁端部に屈曲			蓋A7 5期	
-6		須恵器 坏	口径12.4	たちあがり短く内傾			坏A7 5期	
-7	88	同上	口径10.8 高3	たちあがり内傾		周辺のみケズリ	坏A6 4期	ろくろは右回転
-8	88	同上	口径11.6 高3.05	たちあがり非常に短く 内傾		ヘラ切り+ナデ	坏A8 6期	
-9	88	同上	口径12.2 高3.4	同上		同上	同上	
-10		同上	口径10.2 高3.2	同上		同上	同上	
-11	88	同上	口径12.2 高3.2	同上		同上	同上	
-12	88	同上	口径10.6 高3	同上		同上	同上	
-13	88	須恵器 蓋	口径12.4 高3.2	擬宝珠つまみ 内面かえり		回転ケズリ	蓋C2 6B期	ろくろは右回転
-14	88 92	同上	口径11 高2.9	同上		同上	同上	同上
-15		同上	口径11.3	同上		同上	同上	
-16		同上	口径12.2	同上		同上	同上	ろくろは右回転
-17		同上	口径16.6 高3.35	輪状つまみ 内面かえり		同上	蓋B1 6B期	同上
-18	88	同上	口径14.7 高2.6	同上		同上	同上	同上
-19		同上	口径15	同上			同上	
-20		同上	口径14.8 高2.5	輪状つまみ 内面かえり		ヘラ切り。回転ケズリ	同上	
-21		同上	口径15	内面かえり			同上	
-22		同上	口径15	同上		回転ケズリ	同上	ろくろは右回転
-23		同上	口径13.6	輪状つまみ 端部直立		ヘラ切り。回転ケズリ	蓋B2 7~8期	
-24		同上	口径15.6	同上		回転ケズリ	同上	

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第113図 -25	88 92	同上	口径14.1	輪状つまみ 端部直立		回転ケズリ	蓋 B 2 7~8期	ろくろは右回転
-26		須恵器 坏	口径8.64	口縁外傾		ヘラ切り	坏 C 2 6 B 期	
-27	88 90	同上	口径10.6 高3.3	同上		周辺のみ回転ケズリ	同上	
-28	88	同上	口径10.5 高3.2	同上		ヘラ切り	同上	内面にラセン状の ヘラ記号
-29		同上	口径13	同上		同上	同上	
-30	90	同上	口径11.2 高4.4	口縁内湾		同上	同上	
-31	88	同上	口径14 高4.3	口縁くびれる		同上	7期	
-32	88	同上	口径14 底径8 高5.1	口縁内湾 高い高台		ヘラ切り+ナデ	坏 B 2 7期	
-33	91	同上	底径9	同上		同上	同上	「X」のヘラ記号
-34		同上	口径16 底径11 高5	同上			坏 B 2 7~8期	
-35	91	同上	底径12.1	高くふんばった高台		ヘラ切り?+ナデ	同上	
-36		同上	底径7.2	低い高台		糸切?	坏B3? 8期?	
-37		同上	底径7.6	同上		ヘラ切り?	坏B2? 7期	
114 図 -38	91 92	同上	口径16.4 高4.2	口縁内湾 高い高台		静止糸切+ナデ	坏 B 2 8期	
-39		同上		同上		回転糸切	同上	
-40		須恵器 高坏	口径12.36		鈍い突線1条		長脚無蓋 A 5~7 4~5期	
-41		同上	口径14.1	口縁わずかに外反			長脚無蓋 A 6? 5期?	
-42	92	同上	口径18.8 底径13.2 高13.2		脚部に沈線2条 上段線状、下段小方形 透し(位置そろわない)		長脚無蓋 B 5? 5~6期	
-43	91 92	同上	口径13.8 底径11.6 高11.2		坏部に鈍い突線1条 三角形透し(2方)		低脚無蓋 A 4 4~5期	
-44		同上	底径9.6		線状透し(2方)		低脚無蓋 A 6 6期	
-45		同上	底径8.8		同上		同上	
-46		同上	底径10.2		同上		同上	
-47		同上	底径11.4		三角形透し(3方)		低脚無蓋 A 3 3~4期	
-48	92	同上	底径6.9				長脚無蓋 A 7 5~6期	
-49		須恵器 残	口径8.7		屈曲部に沈線、突線		残 A 8 6 B ~ 7期	

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第114図 -50	92	須恵器 甌	口径11	口縁の屈曲鈍い 胴部球形		回転ケズリ	同上	ろくろ右回転
-51		同上	口径9.2	口縁の屈曲鈍い			同上	
-52		同上	口径7.6	同上	屈曲部に沈線		同上	
-53		須恵器 壺?	口径9.6	口縁外反				
-54		同上	口径8.4	同上				
-55	93	同上	口径15.4	直口	沈線2条	内面同心円当具痕		
-56		須恵器 壺		球形の胴部		外面平行叩+カキ目 内面同心円当具痕		
-57		須恵器 甕		口縁端部に段	クシ波状文間に凹線2 条			
-58	93	同上	最大径21.4	同上	同上			
第115図 -59		同上	口径18.4	同上		外面平行叩 内面同心円当具痕		
-60		須恵器 横瓶	口径14.8	端部平坦面		外面平行叩+カキ目 内面同心円当具痕		
-61	93	土師器 甕		口縁短く外反		外面ハケ目 内面ケズリ		
-62		同上	口径20.0	同上		同上		
-63		同上	口径22.34	同上		同上		
-64		同上	口径21.4	同上		同上		
第116図 -65		同上	口径22.2	同上		同上		
-66		同上	口径17.2	同上		同上		
-67	93	同上	口径17.0	同上		同上		
-68		同上	口径17.0	同上		同上		
-69	93	同上	口径14.8	同上		同上		
-70	94	土師器 ミニチュア	口径3.8 高3.8	椀形		手握ね+ナデ	古墳 時代?	
-71	94	土師器 坏	口径14.4 高3.6	皿形。体部中程で屈曲		底部ケズリ	古墳 時代?	
-72		同上	口径12.6 高3.9	同上(やや深身)		底部ケズリ?凹凸 著しい	古墳 時代?	
-73	95	土師器 甌	口径28 高7.5	口縁わずかに外反。 円筒形。底部近くに小孔。 把手付		外面ハケ目 内面ケズリ		
-74	94	同上	口径26 底径14.6	同上		同上		

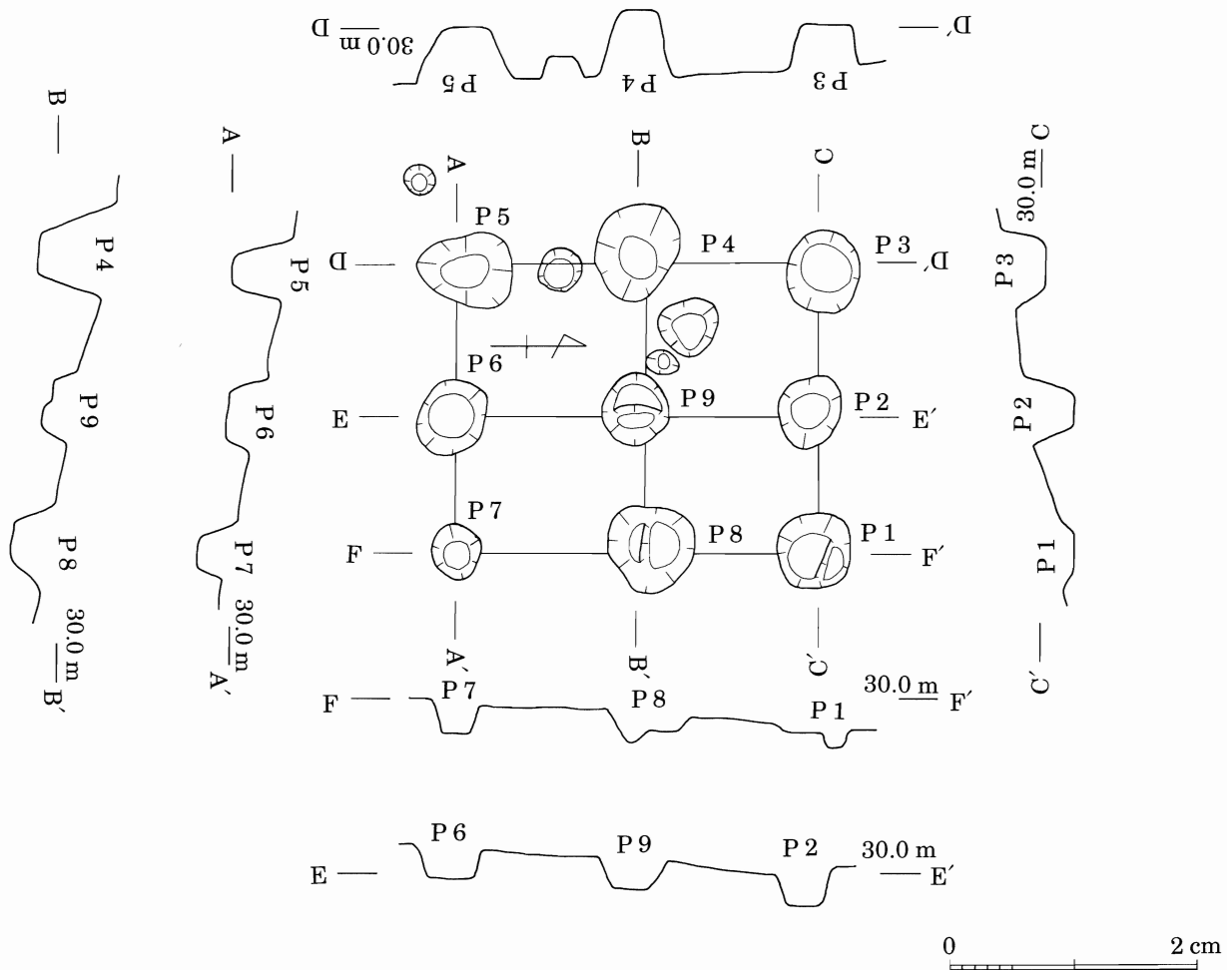
挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第116図 -75	95	土師器 支脚	底径13 高19.1	受部三支。底部凹み底		ケズリ?		
第117図 -76	95	同上	底径8.9 高9.7	受部三支。器高低い。 底部凹み底		ケズリ?		
-77	95	同上	底径10.8 高19.5	受部三支。底部凹み底		ケズリ?		
-78	95	同上	高16.2	同上		ケズリ?		
-79	95	土師器 竈		焚口の鐔		指押圧		
-80	95	同上		同上		指押圧 本体は外面粗いハケ目 内面ケズリ		
-81	94	石製 紡錘車	上面径3.2 底面径5.1 高2.7	断面台形	上面と側面に鋸歯文			白色 凝灰岩?
第118図 -82		須恵器 坏	口径10.5 高3.1	たちあがり内傾			蓋 A 6~7 4~5期	
-83	96	須恵器 蓋	口径14.3 高2.3	輪状つまみ 端部屈曲		回転ケズリ	蓋 B 2 7~8期	
-84	96	同上	口径13.6 高2.05	同上		静止糸切+回転ケズリ	蓋 B 3 8期	
-85	96	須恵器 坏	口径11.6 高4.6	口縁内湾 高い高台			坏 B 2 7期	
-86	96	同上	口径15.2 高3.8	同上		ヘラ切り?	同上	
-87		須恵器 高坏	口径14.4				長脚無蓋 A 7? 5~6期?	
-88		同上	口径14.2		突線2条		同上	
-89		同上	底径10.9		三角形透し? (2方向?)		長脚無蓋 A 6? 5~6期?	
-90		同上	底径11.4	端部屈曲	三角形透し? 沈線2条		同上?	
-91		同上	底径10.8		三角形透し?		同上	
-92		須恵器 短頸壺	口径12.4	口縁非常に短い				
-93		須恵器 坏?	底径12			回転糸切	8期	
-94		土師器 甌	口径30	口縁ゆるく外反		内面ケズリ		
-95	96	同上	口径28	口縁ゆるく外反 円筒形。把手付		外面ハケ目 内面口縁ハケ目 以下ケズリ		
-96		同上	底径13	円筒形。ややふくらむ 底部近くに小孔		ハケ目		95と同一個体か
-97		土師器 竈		焚口の鐔		ナデ		
-98	96	土師器 支脚	底径13.4 高16.3	受部三支。 底部凹み底		ケズリ?		

溝状の落ち込みや浅いくぼみができた（図版60）。当初は壁帯溝の一部と考えたが、壁帯溝にはなりえない形状である。SB 12の下部施設と考えられるが、具体的な性格は不明である。

SB 13（第119図 図版62） 2×2間（2.3×3 m）の総柱の掘立柱建物跡である。桁側の柱間

4 B 区 SB 13計測表

規 模	梁行き			桁行き			
	2間 (2.4 m)			2間 (3.0 m)			
主 軸	N-4° - E						
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	57×58	49×58	55×65	67×76	74×60	54×59
	深 さ	21	41	35	55	44	32
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	38×44	68×68	53×57			
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.2	1.2	1.5	1.5	1.2	1.2
		P 7-8	P 8-1	P 2-9	P 4-9	P 6-9	P 8-9
		1.5	1.5	1.5	1.2	1.5	1.2

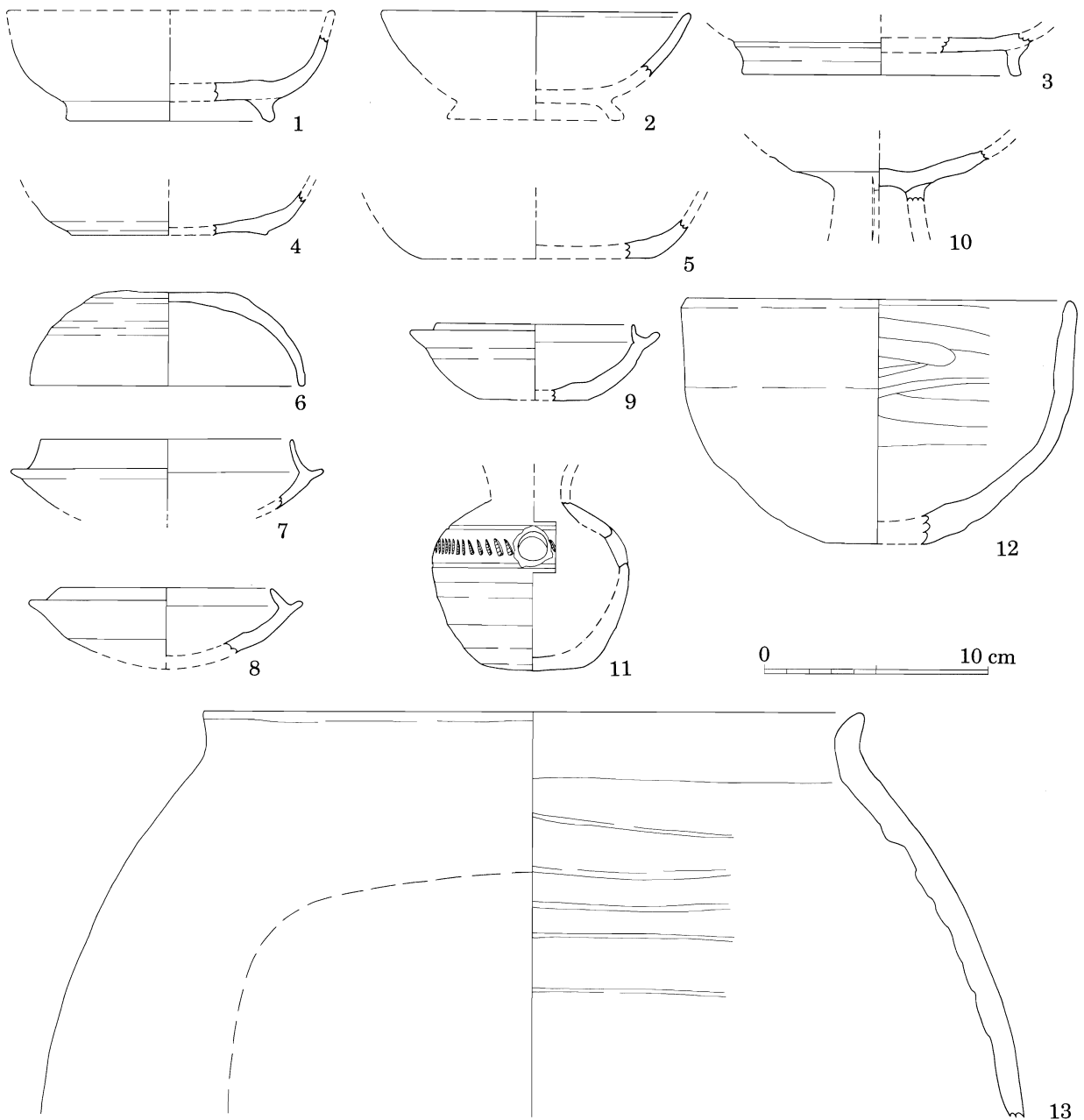


第119図 4 B 区 SB 13実測図 1:60

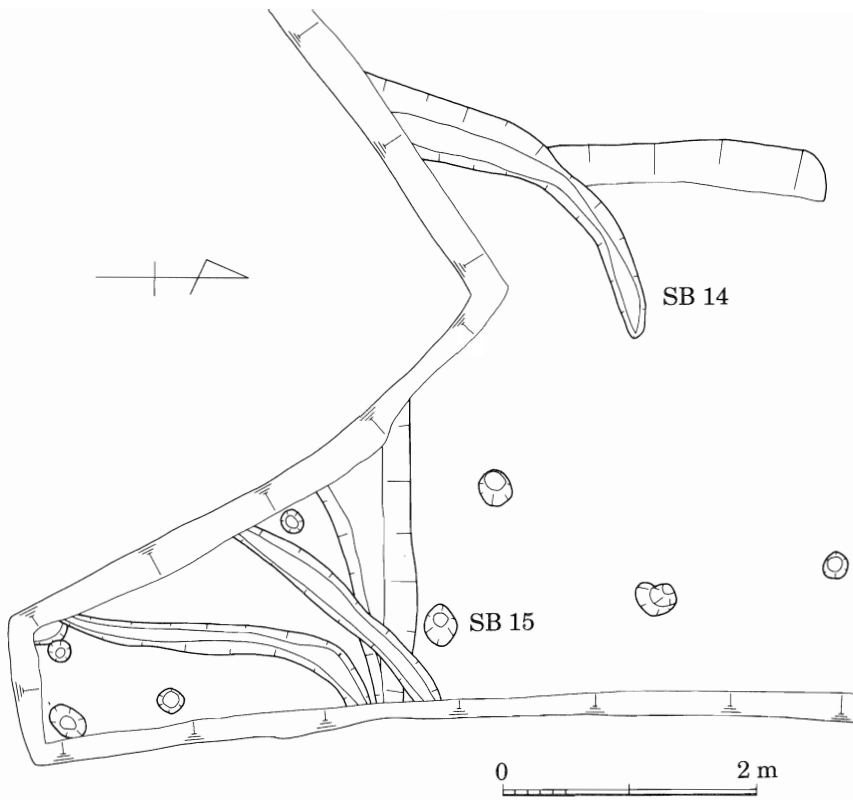
が1.5 m、梁側の柱間が1.2 m で、柱穴はほぼ等間隔に配されている。主軸はほぼ真北にとられており、SB 09との関係が推定される。

SB 14 (第121図) SB 12溝10の東側に位置する。2棟あると思われるが、調査区の南端にあたるため、壁帯溝および壁のごく一部を検出したにとどまった。出土遺物は第126図1~5である。いずれも須恵器坏で底部は3がヘラ切りと思われる以外は回転糸切り未調整である。8世紀前半と考えられる。

SB 15 (第121図 図版62) 調査区の南端にあたるため、壁帯溝2条と壁のごく一部を検



第120図 4 B 区 SB 14.15出土遺物 1:3

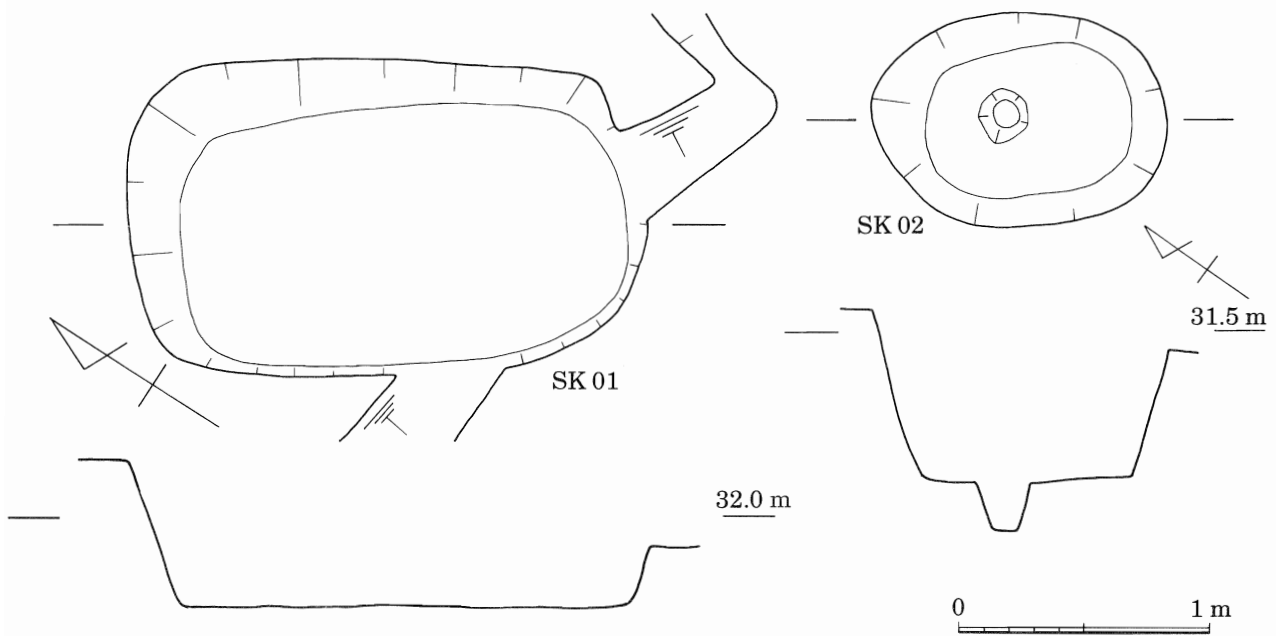


第121図 4B区 SB 14.15実測図 1:60

出したにとどまった。数棟が重複していると思われるが、全貌は不明である。出土遺物は第120図6～13(図版97)である。須恵器にはさまざまな時期のものがみられるが、調査が一部にとどまっているため、時期を特定できない。出雲5期から6A期の組み合わせであろうか。

土壌(第122図 図版63)

土壌は2個検出された。SK 01は2.04×1.44 mの長方形プランの土壌である。深さは約60cmと比較的深



第122図 4B区土壌実測図 1:30

4 B 区 SB 14、15出土土器一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第 120 図-1		須恵器 坏	口径9.4	口縁内湾 高い高台			坏 B 2 7~8期	
-2		同上	口径17	口縁内湾			坏 B 2 7期	
-3		同上	底径12.6				坏 B 2 8 C?	
-4		同上	底径8.8	口縁内湾		回転糸切	8 ~ 9 C'	
-5		同上	底径10.5	同上		同上	同上	
-6	97	須恵器 蓋	口径12.4 高4.2			ヘラ切り	蓋 A 8 6期	
-7		須恵器 坏	口径11.4	たちあがり内傾			坏 A 4~5? 4期	
-8		同上	口径9.8	たちあがり短く内傾		回転ケズリ	坏 A 6? 4期?	
-9	97	同上	口径8.8 高4.4	たちあがり非常に短く 内傾		ヘラ切り	坏 A 8 6期	
-10		須恵器 高坏			2方透し		低脚無蓋 A 4? 4期?	
-11	97	須恵器 瓦葺	底径4.7	球形の胴部	沈線間にクシ刺突	回転ケズリ	埴 A 6 4~5期	ろくろ右回転
-12	89	土師器 鉢	口径18 高11	ボール形の器形		内面ケズリ		
-13		土師器 甕	口径30	口縁直口。		内面ケズリ?		

い。遺物が出土しなかったため時期、性格は不明である。

SK 02は1.0×0.87 m を測る、楕円形の落とし穴状遺構である。底面中央に径20cm、深さ20 cmの円形の小孔がみられる。深さは約70cmと深い。遺物は出土していない。

3 小 結

4区では東斜面に集中して住居跡が検出された。住居跡は古墳時代後期から8世紀前後にかけてのものと、中世、近世のものに大きく分けられる。

古墳時代後期の住居跡のうち、ここでもっとも古いのは4 A 区 SB 02、05（出雲4期）である。SB 04、06、07、SB 12-3がそれに続く（出雲4期新、5、6期）。傾向としては斜面の低位の位置から上位の位置へ移行するようである。

これらはいずれも加工段を作ってその上に掘立柱建物を建てるという構造であるが、初期の住居跡は加工段と壁帯溝をもつものの、平面形が不整形で柱穴をもたないものがある（SB 05～07）。このような竪穴住居と掘立柱建物に伴う加工段との中間的ともいべき形態は東出雲町渋山池遺跡でもみられ、出雲4期のころの当地域では一般的な住居形態を示すのかもしれない（注）。

4 B 区では SB 12-3（出雲4期新）に続き SB 12-2・3と建物が大型化するとともに、敷地

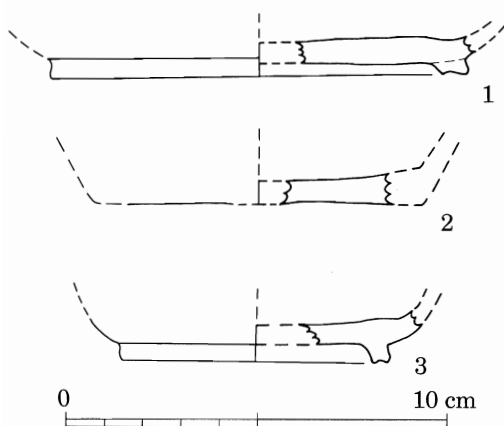
の拡張に努めるようになる。最終的には加工段（壁帯溝）の規模は長さ20 m、占有面積100 m²以上にもおよぶ。この面積に1棟だけが建っているとは思えないが、複数棟の建物があったとしてもこの加工段は奈良時代の一般的な住居の占有面積を大きく越えていると思われる。建物も3×5間、梁行き4.5 m、桁行き8.2 m と一般住居としては巨大である。しかし大型であるが官衙的な建物とはいいがたいので、在地有力層の居館といった建物がこの程度の規模であろうか。とすれば第103図18に図示した円面硯がこの上層から出土したのも理解できる。

SB 12では SB 12-3が古墳時代後期（出雲4期新）に作られ、SB 12-2→SB 12-1→溝8・9・10と奈良時代前半まで連綿と続いている。もしこの住居跡の住人が奈良時代に一定の地位をもった有力層と考えるなら、その萌芽は古墳時代後期にさかのぼることになる。時代が下るにつれ敷地を拡張することは、富や権力の集中が進んだことを表していると思われる。

このような大規模な住居に居住する人間は、具体的にはどのような階級・階層なのだろうか。遺跡で検出された遺構（住居跡）がどの階級・階層の住居か対比されたことがないので、SB 12がどの階級・階層であったか具体的に知ることは現段階では困難である。郡司クラスの居館にしてはやや貧相な感じも受けるし、里長クラスの住居にしては立派すぎるようにも思われる。いずれにしても根拠のない想像にすぎず、将来村落首長や在地首長などの居館が特定できるようになれば、この住居跡の地位が推定できると思われる。今のところは一般農民とは違った、在地有力層の住居を想定しておく。

なお、出土地点が把握できなかった土器で須恵器にへらで文字を書き込んだ土器が2点出土している。これについては玉作工房跡包含層から出土したへら書き土器1点を加えて、本小結のあとで別項を設けることにする。

（注） 椿真治の教示による。島根県教育委員会『洪山池遺跡・原ノ前遺跡 一般国道9号（安来道路）埋蔵文化財発掘調査報告書（西地区Ⅶ）』1997



第123図 へら書土器実測図（1：2）

福富Ⅰ遺跡出土のへら書き土器について

平石 充

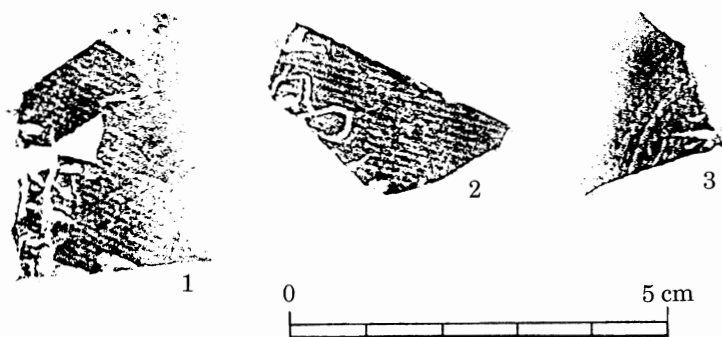
1. 釈文「^{こそべ}社邊」

へら書は、須恵器高台付坏の底部外面に、先端を尖らせた鋭利な器具によって薬研状に施されている。彫りは幅が0.6mm～1.0mm程度、深さが0.5mm～0.7mm程度である^{（注1）}。へら書の後再びナデが行われた痕跡はなく、快り出された胎土が一部文字周辺に盛り上がり、残存して

いる部分もある。

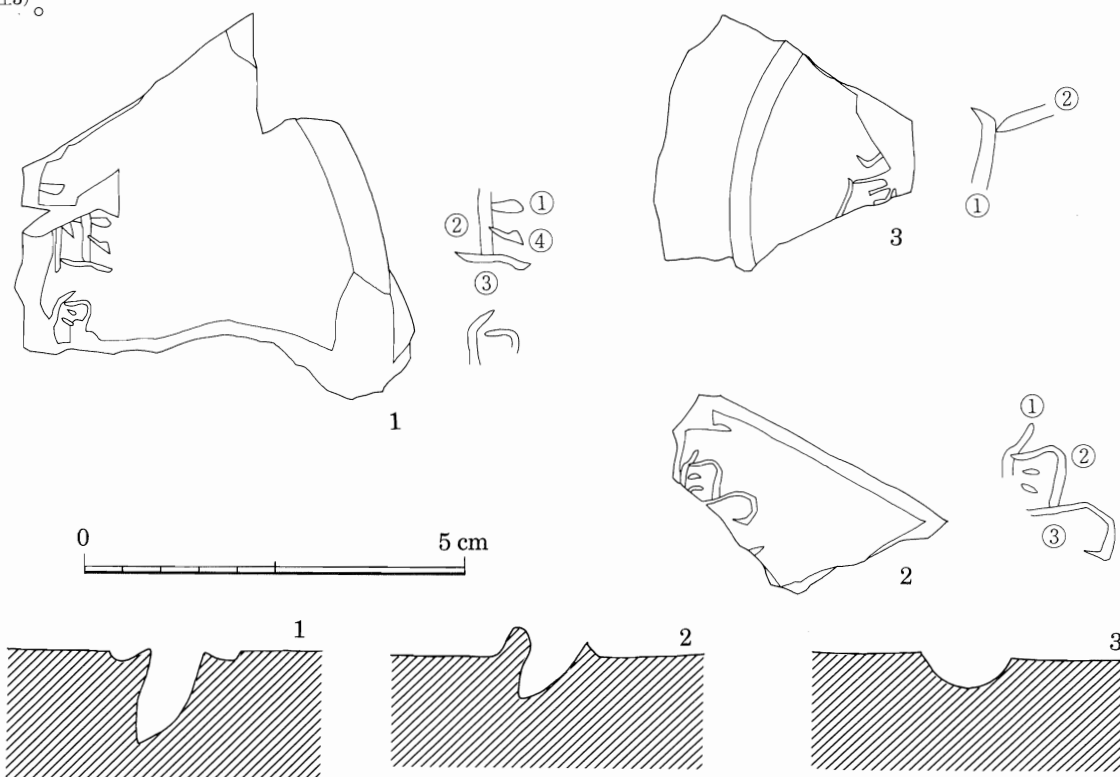
記された文字は、一文字目の旁が「土」であること、二文字目の旁に“自”状の部分が見られること、2や出雲国庁出土土器との比較検討から「社邊」と判断できる。

なお、旁は現在と同じ書き順であるが、偏の書き順は異なる可能性もある。



第124図 ヘラ書土器 拓影(1:1)

「社邊」は、『出雲国風土記』嶋根郡条の末尾の郡司の署名にみえる「大領外正六位下社部臣」、同秋鹿郡条の「嶋根郡大領社部臣国麻呂」にかかわるものであるとの見解がすでに示されており(注2)、妥当なものであろう。社部臣に関してはこのほかに『日本書紀』天武天皇元年七月壬寅条にみえる社戸臣大口がいる。この社戸臣大口については北野神社所蔵兼永本『日本書紀』の訓注に「コソヘノラムオホクチ」とあり、『日本書紀』の訓注自注説の可否にかかわらず、院政期には阿部渠曾部臣、後の許曾部朝臣と同様に訓読されていた。ただし、許曾部朝臣が社部と書かれた確実な例はない。許曾部朝臣は『新撰姓氏録』左京皇別上では阿部朝臣同祖とされ、その本拠地は摂津国島上郡の古曾部(現大阪府高槻市古曾部町)が本拠地と考えられている。佐伯有清氏はこの許曾部朝臣と出雲の社部臣が同族か否かは判定できないとしている(注3)。



第125図 ヘラ書実測図 1:1 (○内の数字は筆順 断面形は模式図 各番号は第123図と対応)

2. 积文 「社邊」

へら書は須恵器杯底部内面に先端の尖った器具によって薬研状に刻まれている。彫りは幅は0.4mm～0.6mm程度、深さは0.4mm～0.6mm程度であり、1よりもやや浅い。1同様にへら書の上にはナデが行われた様子はなく、抉り出された胎土が一部文字周辺に残存する。

文字の内容は、1と同じく「社邊」とすることができる。

3. 积文「□□」

へら書は、須恵器高台付杯底部外面に先端の尖った器具によって行われている^(注4)。しかし、1とは異なりへら書の底部が細く抉られるのではなく、幅約0.2mm程度の圧痕状になっており、断面型は半円形である。彫りは幅は0.5mm程度、深さは0.2mm程度であり、2よりも浅い。1同様にへら書の上にはナデが行われた様子は無いが、彫りの浅さに対応して、彫り出された胎土の残存は確認できない。

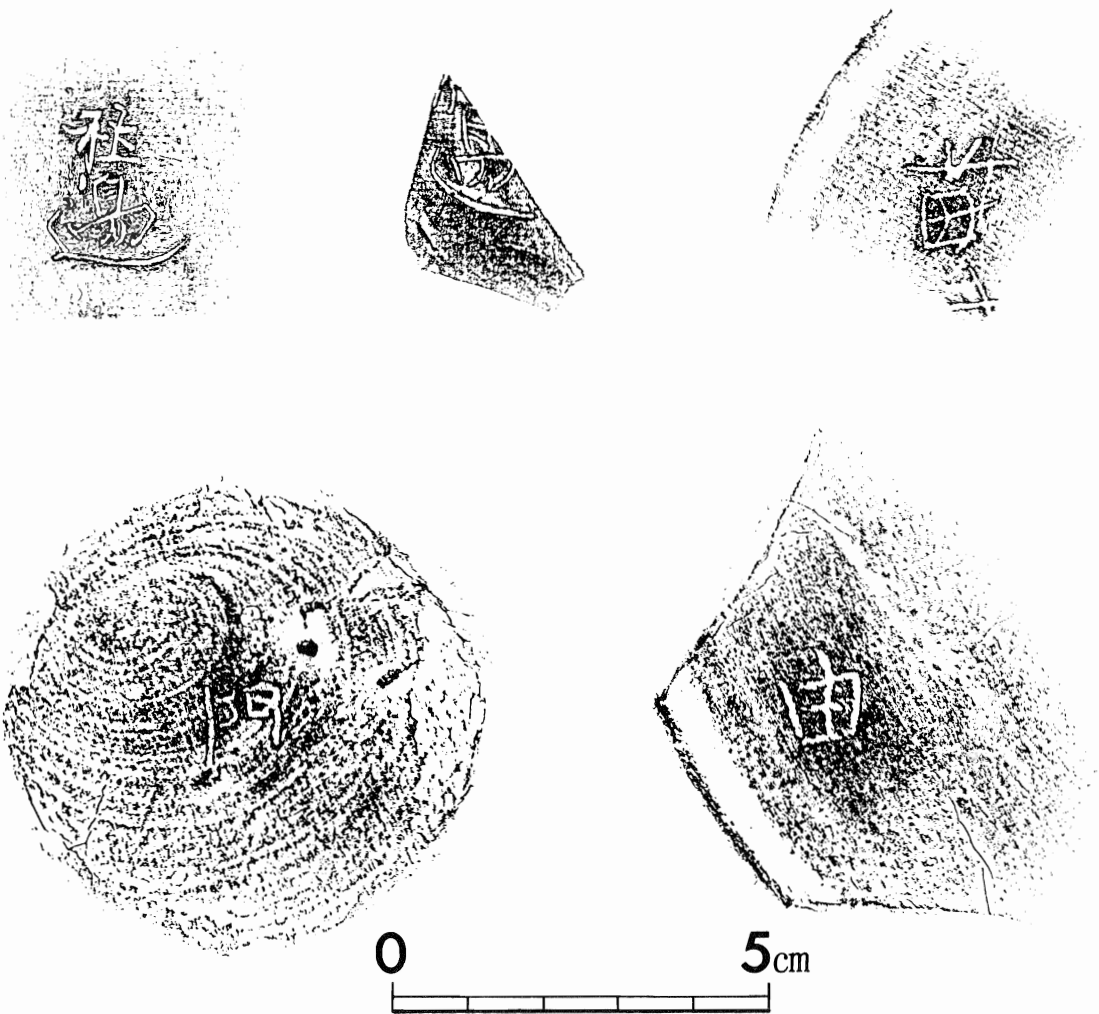
へら書について

1～3の土器とも、串状の先端の尖った工具による筆写を想定できるが、胎土の抉れ方は、1・2・3の順で浅くなっている。これは、筆写時の力の入れようにも左右されようが、3のへら書の底部が圧痕状になっていることからして、焼成前の土器の乾燥の程度にも関係すると思われる。また、へら書と土器の調整の関係は何れも調整後へら書であった。一般論として、土器があまり乾燥していない段階にへら書を行えば、文字は深く記されるが、抉り屑など土器表面の汚れも多くなり、土器が乾燥して固い場合、へら書は浅くなる一方で抉りの屑も少なくなると考えることもできる。

へら書土器については、その筆写の過程が、土器という素材を通して、土器そのものの製作過程と関連づけて考察可能であるにもかかわらず、ほとんど分析されていない現状である。今後はへら書土器の考察を行ううえで、土器の調整との関係や工具のありようや、へら書をした者の個性などの検討が重要となろう。

社邊のへら書について

「社邊」のへら書土器は、本遺跡の2例を含め現在3遺跡から計4点が出土している（表1）。先述のように、「社邊」は『出雲国風土記』において嶋根郡大領であった社部臣にかかわるものと考えられる。社部臣の本拠地について、松江市東川津と持田の境にある小正部屋敷を社部の名残と見る説もあるが^(注5)、風土記には嶋根郡大領社部臣の祖の波蘇等による秋鹿郡の恵曇の開発がみえることから、社部臣の支配する領域は後の嶋根・秋鹿両郡にわたったとする見解もある^(注6)。なお、現在嶋根郡家の有力な推定地である芝原遺跡からは「出雲家」の墨書土器



参考 出雲国庁跡出土へら書き土器 (1:1)

が出土している^(注7)。これが当施設の名称であるならば、風土記の書かれた天平5(733)年当時、嶋根郡の主帳を出していた出雲臣との関係が推定される。「社邊」のへら書土器が出土した3遺跡は何れも8世紀には意宇郡に属し、嶋根郡ではなかったと考えられる。『出雲国風土記』嶋根郡条によれば大井の浜で「陶器」が作られたことが知られており^(注8)、同郡の大領の姓と同じへら書土器の存在は、8世紀における須恵器の生産や流通を考える上でも重要な資料となろう。

表1 「社邊」のへら書土器

	遺跡名	所在地(8世紀の郡名)	へら書	種別	器種	部位	文献
①	福富I遺跡	松江市乃木福富町(意宇郡)	社邊	須恵器	坏	底部外面	
②	同上	同上	社邊	須恵器	坏	底部内面	
③	出雲国庁跡	松江市大草町(意宇郡)	社邊	須恵器	蓋坏	内面	(9)
④	青木遺跡	八雲町西岩坂(意宇郡)	社邊	須恵器	蓋坏	頂部内面	(10)

注 (1) 一筆ごとに、その最大値を取った。

(2) 『出雲国庁跡発掘調査概報』(松江市教育委員会 1971年)

(3) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考証編第一(吉川弘文館 1981年)

(4) 断面形が半円であることと一見矛盾するが、払いの部分の鋭さからすると、工具の先端は尖っていたと考えられる。

(5) 加藤義成『修訂出雲国風土記参究』(今井書店 1957年)

(6) 関和彦「佐太大神と地域社会」(『古代文化研究』3 1995年)

(7) 『芝原遺跡』(松江市教育委員会 1989年)

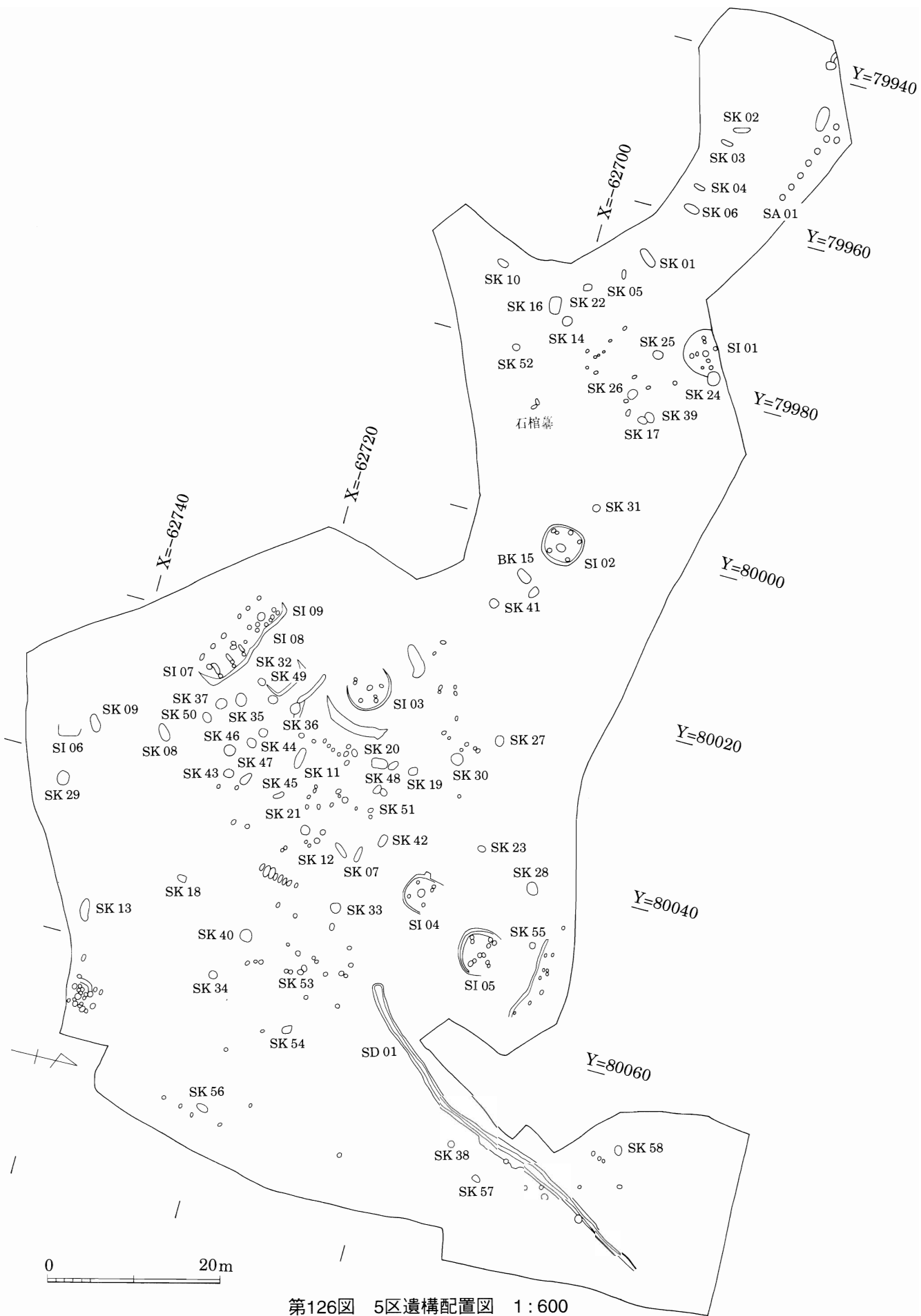
(8) 「大井浜」の須恵器生産については、柳浦俊一「大井産須恵器の流通について」(『出雲古代史の諸問題 第15回古代史サマーセミナーの記録』1987年)、内田律雄「『出雲国風土記』大井浜の須恵器生産」(『古代学研究』118・120 1988・89年)。

(9) 『出雲国庁跡発掘調査概報』(松江市教育委員会 1971年)

(10) 山陰中央新報(1996年6月29日朝刊)。

出稿後、出雲国庁跡出土須恵器の拓本を採取した際、表1に加えて新たに一片の「社邊」へら書き土器が発見されたので合わせて紹介する。(参考拓本参照)

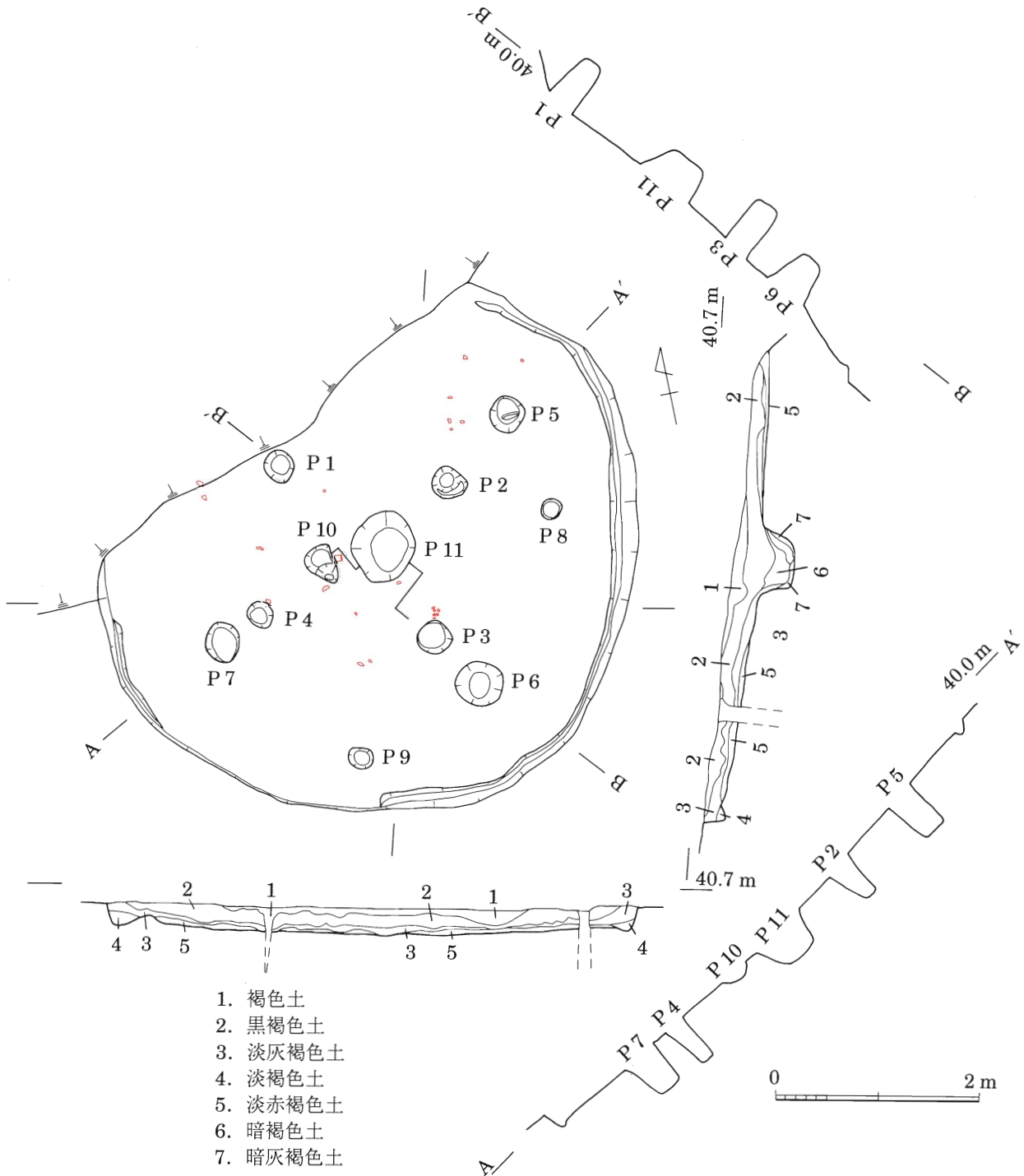
第7章 5 区



第126図 5区遺構配置図 1:600

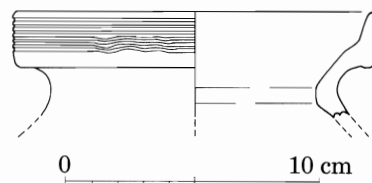
1、概 要

福富丘陵の基部に当たり、標高約44 m と本遺跡の最高位に位置する。ここでは竪穴住居跡(弥生時代後期、奈良時代)、加工段(奈良時代)土壇墓(古墳時代後期、平安時代)、落とし穴状遺構(時期不明)、溝状遺構(奈良時代?)などの遺構が検出された(第126図 図版98~100)。



第127図 5区 SI01実測図 1:60

この丘陵は頂部付近は比較的広くなだらかな丘陵で、遺構はおもに頂部からわずかに下がったところで検出された。遺物はおもに南側斜面から出土したが、これは遺構に伴うものではなかった。器台など墳丘墓に副葬される遺物が多くみられたことから、丘陵頂部にあった墳丘墓が開墾などによって壊された可能性が考えられた。



第128図 5区 SI 01出土土器 1:3

2、検出遺構

SI 01 (第127図 図版101) 調査区の西端に位置する。一部は山道で削られている。平面形は方形に近い円形で径約5 m を測る。壁沿いに浅い壁帯溝がめぐるが一周せずに各所で分断している。ピットは床面で11個検出され、このうち柱穴は P 1~P 7である。主柱穴は P 5~7と思われるが、その15cmから60cmほど内側にやや小さな柱穴を配している。建て替えとは考えられず、補助的な機能を果たす柱穴であろうか。P 11は中央ピットで径60~70cmと大きく、深目である。

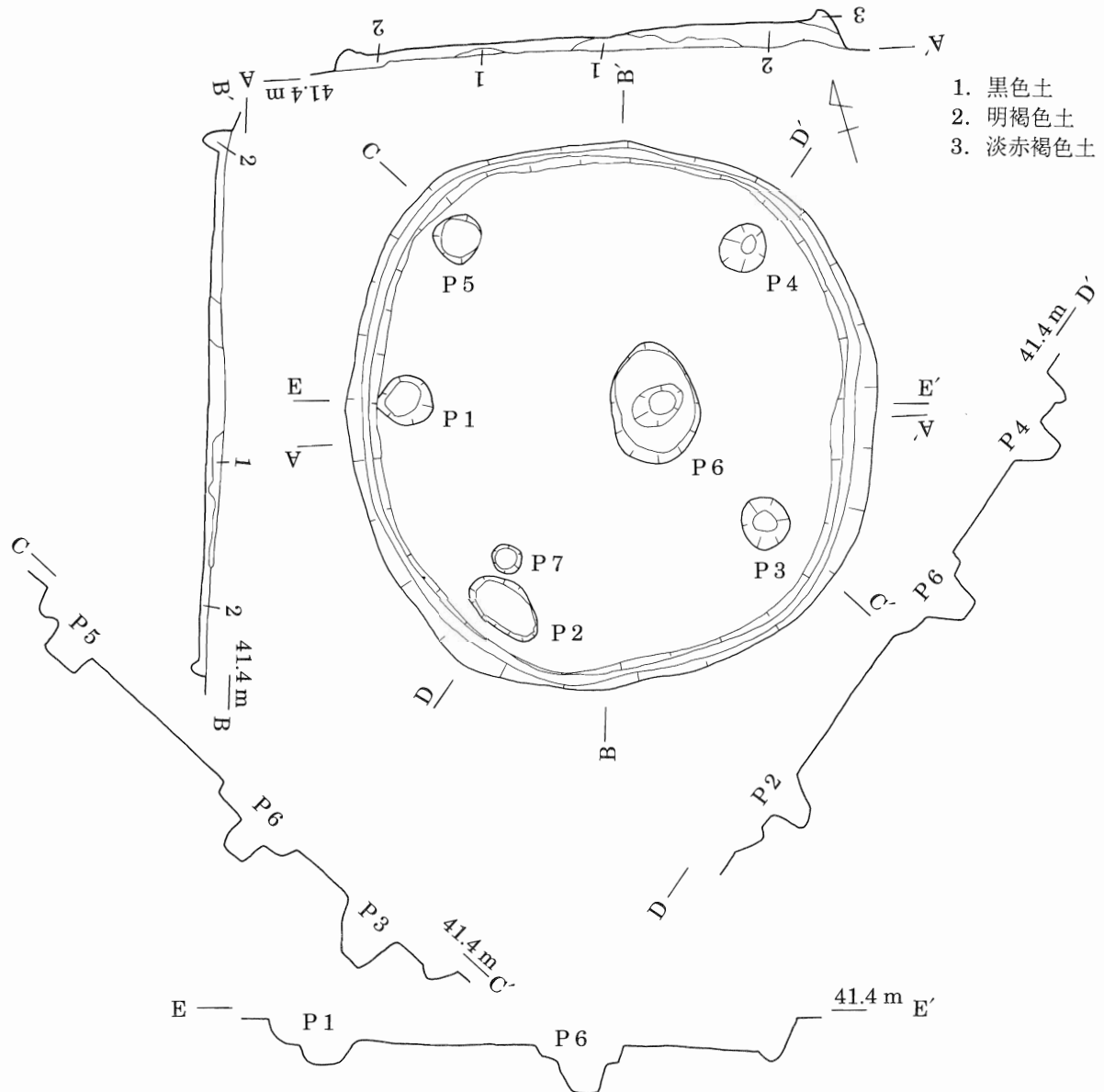
遺物の出土は少なく、図示できたのは第128図 (図版123) の1点だけである。口径13.8cmを測る甕である。直立する複合口縁をもち、口縁部にはクシ状工具による平行沈線文が6条施されている。弥生時代後期の出雲・隠岐V—2様式に相当する。

5区 SI 01計測表

平面形		円形					
規模	上面	下面				床面積	
	5.1×5.3	5×4.8				19.6m ²	
壁高		26cm					
柱穴 (cm)	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	34×30	31×35	33×34	27×24	34×35	43×47
	深さ	50	43	51	47	50	50
	番号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	
	上面径	40×34	20×21	21×24	40×26	71×62	
	深さ	43	11	10	15	31	
柱間距離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-1	P 5-6	P 6-7
		1.6	1.5	1.7	1.5	2.7	2.6

SI 02 (第129図 図版101.102) 調査区の中央に位置する。平面形は方形に近い円形であるが、支柱穴が5個あることから5角形の竪穴住居跡と考えられる。規模は上面で東西約4.5m、南北約4.8mを測る。壁沿いに浅い壁帯溝が一周している。ピットは床面で6個検出され、このうち柱穴はP1~P5と思われる。P6は中央ピットで平面形が楕円形を呈す。規模は75cm×100cmと大きい。

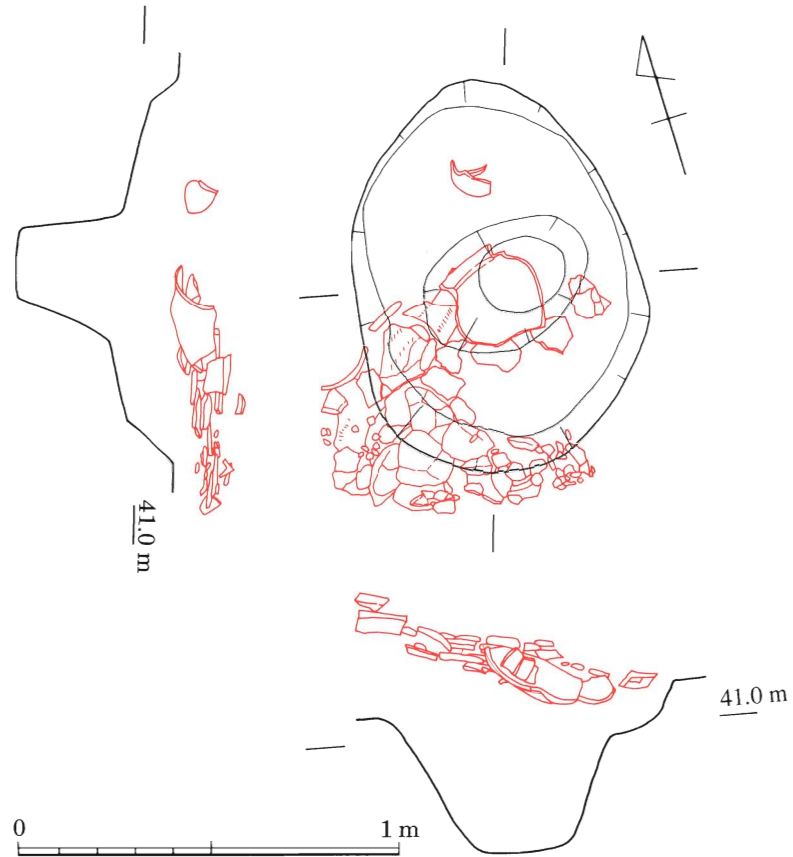
遺物は第131図1~4(図版122)は、中央ピットの上面で集中して出土した土器である。出土状態は第130図と図版102に示したが、中央ピットが埋没した後に廃棄された状態であった。1、2、4は複合口縁の甕で、1、2は大型の土器である。口縁部はいずれも外傾し、4がやや長く伸びるほかは短い。口縁部外面には4~6条の擬凹線文が施され、2、4の肩部にはクシ状工具による連続刺突文が施される。3は甕または壺の胴部で二枚貝による羽状文が密に施されて



第129図 5区 SI 02実測図 1:60

いる。これらはいずれも弥生時代後期の出雲・隠岐V-2様式でも新しい時期と考えられる。

同図5、6は砥石である。ともに乳白色の柔らかい石を利用し、全面に細かい擦痕を観察できる。また、部分的には深く鋭い擦痕を観察できるところもある。



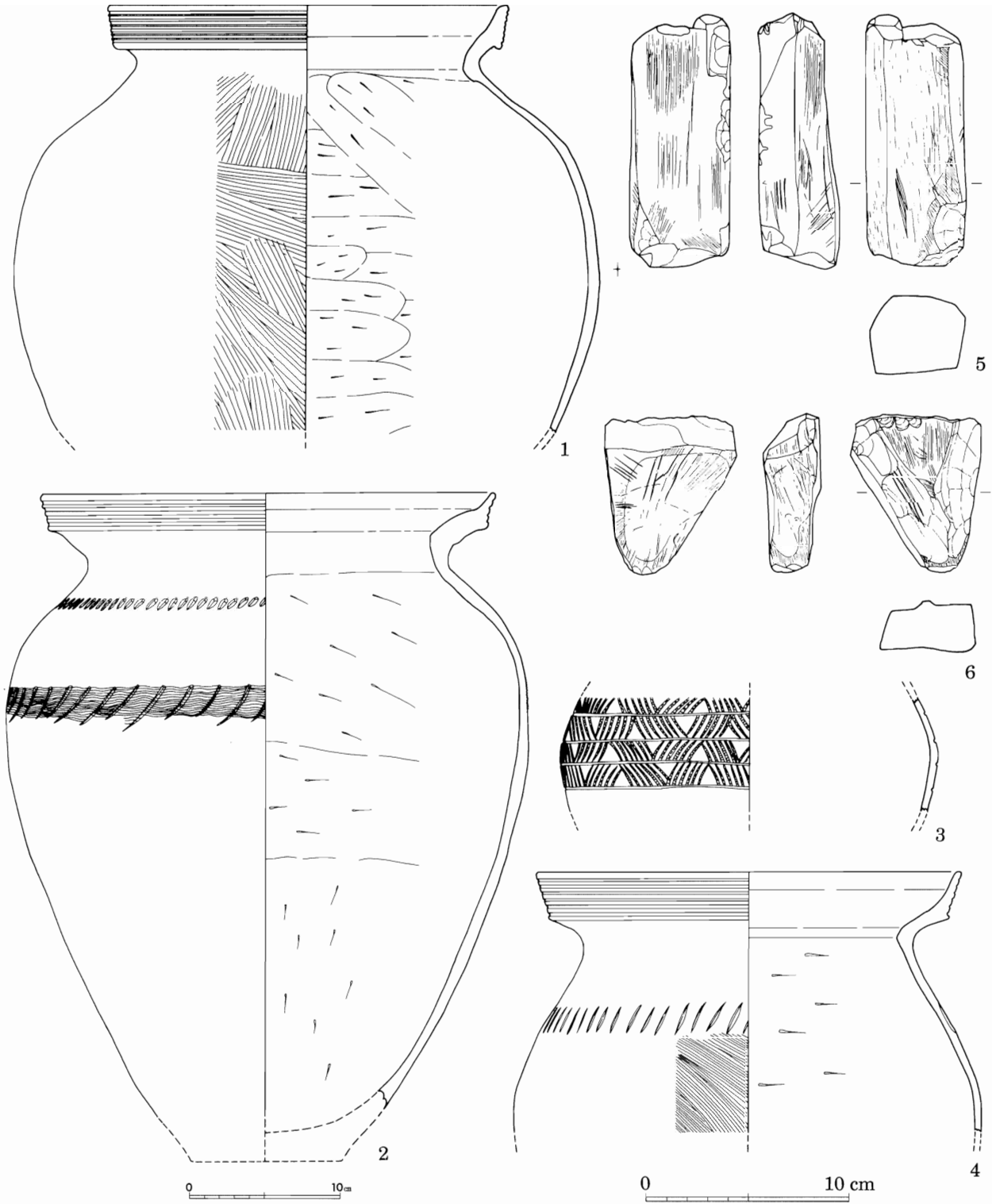
第130図 5区 SI 02中央ピット土器出土状況 1:20

5区 SI 02計測表

平面形		五角形				
規 模	上 面	下 面			床面積	
	4.5×4.8 m	4×4.4 m			17.6m ²	
壁 高		14~26cm				
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
	上 面 径	43×43	69×41	45×42	45×39	40×41
	深 さ	18	28	40	35	21
	柱 痕 径	26	25	20	18	33
柱 間 距 離 (m)	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-1	P 5-6	
	2.2	2.3	2.4	2.5	1.5	

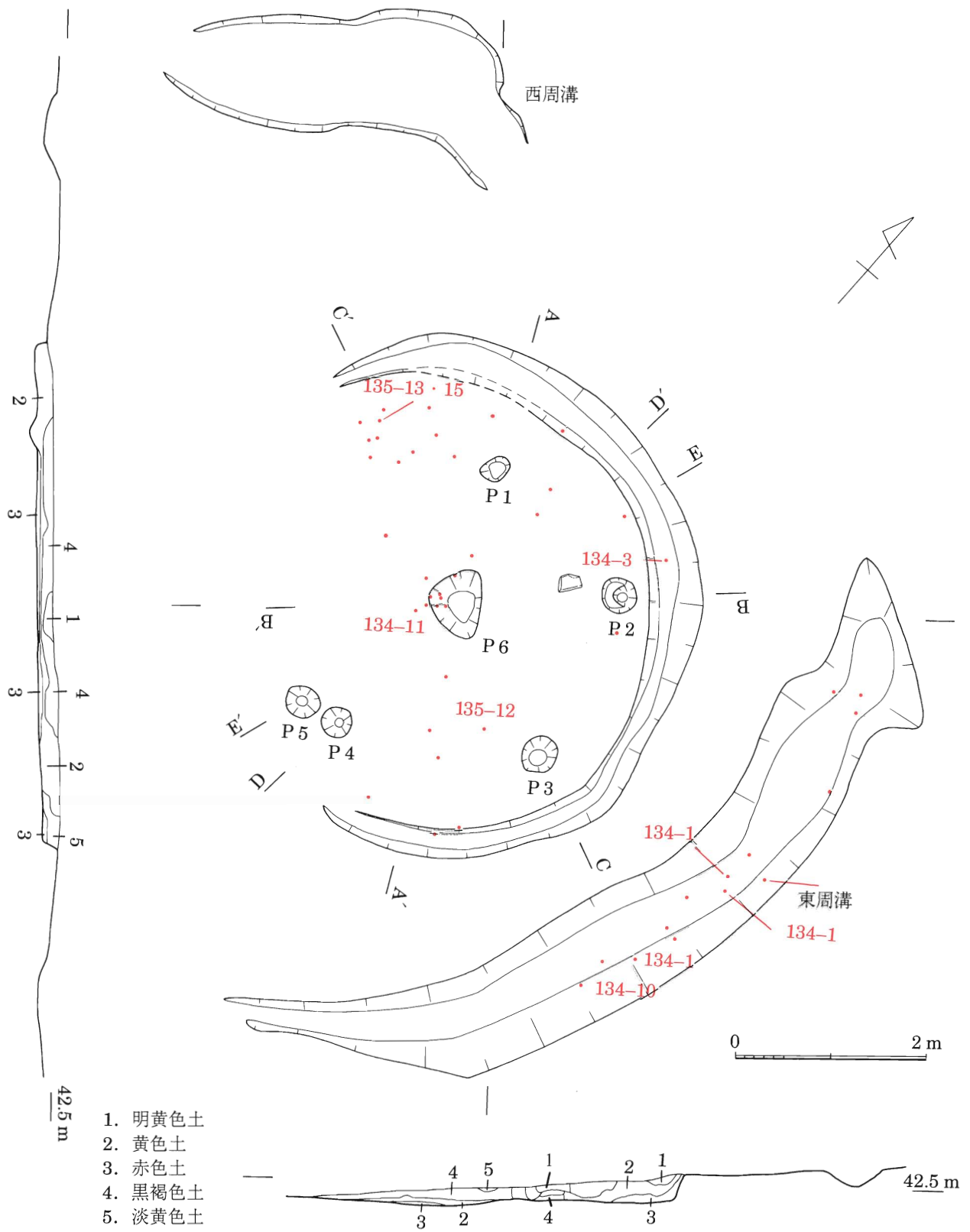
5区 SI 01・02出土遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形 態	文 様	調 整 其 他	時 期	備 考
第128図-1	123	弥生甕	口径13.8	直立気味・複合口縁	クシ描沈線6条		弥生 V-2様式	
第131図-1	122	弥生甕	口径25.2	外傾する複合口縁	クシ描沈線7条	内面ケズリ 外面ハケ目	同上	
-2	122	弥生甕	口径30.0	同上	擬凹線4条 刺突文	内面ケズリ	同上	
-3		弥生甕?	最大径18.4		2枚貝による羽状文 沈線	同上	同上	
-4		弥生甕	口径20.6	外傾する複合口縁	擬凹線6条 2枚貝による刺突	外面ハケ目 内面ケズリ	同上	
-5	122	砥石	最大長12.5 最大巾5.0 最大厚3.8			全面に擦痕		乳白色
-6	122	砥石	最大長7.7 最大巾3.5 最大厚2.4			同上		同上

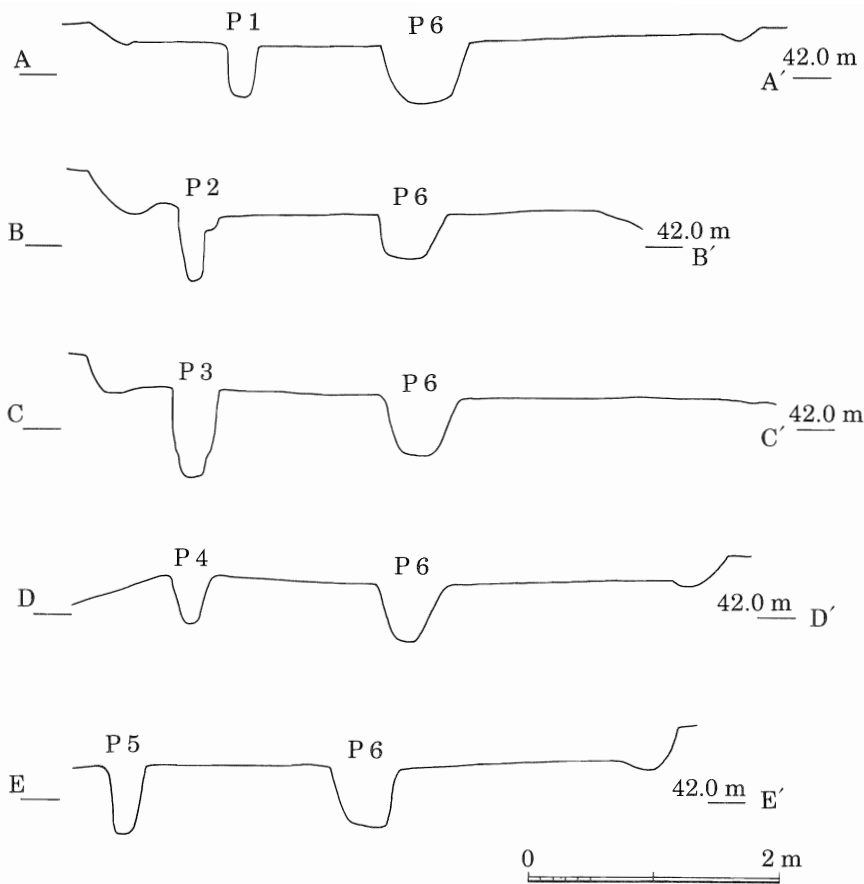


第131図 5区 SI 02出土遺物 (1~2 1:4、3~6 1:3)

SI 03 (第132図 図版103) SI 02の東に位置し、丘陵頂部からやや下った南緩斜面に立地する。平面形は円形で、丘陵側には住居跡をめぐるように溝が配されている。竪穴住居跡の規模は上面で東西3.9 m 以上、南北約5.4 m を測る。壁沿いに浅い壁帯溝が一周している。ピットは床面で6個検出された。このうち柱穴は P1~P5と思われるが、P4と P5はほぼ同じ位



第132图 5区 SI 03实测图 1:60



第133図 5区 SI 03断面図 1:60

置にあり、規模も同様であったため、どちらを柱穴と考えるか判断できなかった。また、P1とP5の間隔がかなり広く空いていることから、間隔的には柱穴がもう1個配されていた可能性がある。P6は中央ピットで平面形が不整形円形を呈す。規模は70cm×55cmとあまり大きくない。

この竪穴住居跡の周囲には半周分ほど溝がめぐっていた。溝は連続せずに北側で分断されているが、これが溝の掘り込みが浅いため流失したものか、あるいは当初から連続していなかったのか、明確

ではない。ただ、竪穴住居跡の周溝で連続していないものがよくみられるので、これも当初から非連続の溝である可能性はある。溝の規模は東側が長さ8.1m、幅1.2m、深さは深いところで10cm程度である。西側の溝は長さ3.6m、幅1.2m、深さは深いところで10cm程度と浅い。

遺物は竪穴住居跡の内部から出土したほかに、周溝内からも出土した(図版104)。第134図2、4、6、14、17は竪穴住居跡内、第137図1、5、13は東周溝から、3、8、11は西周溝から出土した土器である。

1~8は甕口縁部である。いずれも複合口縁で、口縁部の形態は4が短く内傾する以外はいずれもやや長く伸び外傾する。5は頸部が長く伸びるものであるが、他は短く屈曲する。7以外の口縁部外面には3~5条の擬凹線文が施される。9は甕の底部と思われる。底径3.8cmと小型の底部である。10は器台脚部である。筒部が長く、脚端部は短く内傾する。端部外面には擬凹線文7条が施されている。11は甗形土器で、口縁部と下端部のみ出土したが、胎土、焼成、色調などから同一個体と判断した。口縁部が小さく下端部が大きく広がる器形と思われ、口縁部直下には幅広で高い突帯が1条つけられる。第135図12は磨製石斧片、13~16は赤メノウ剥片である。

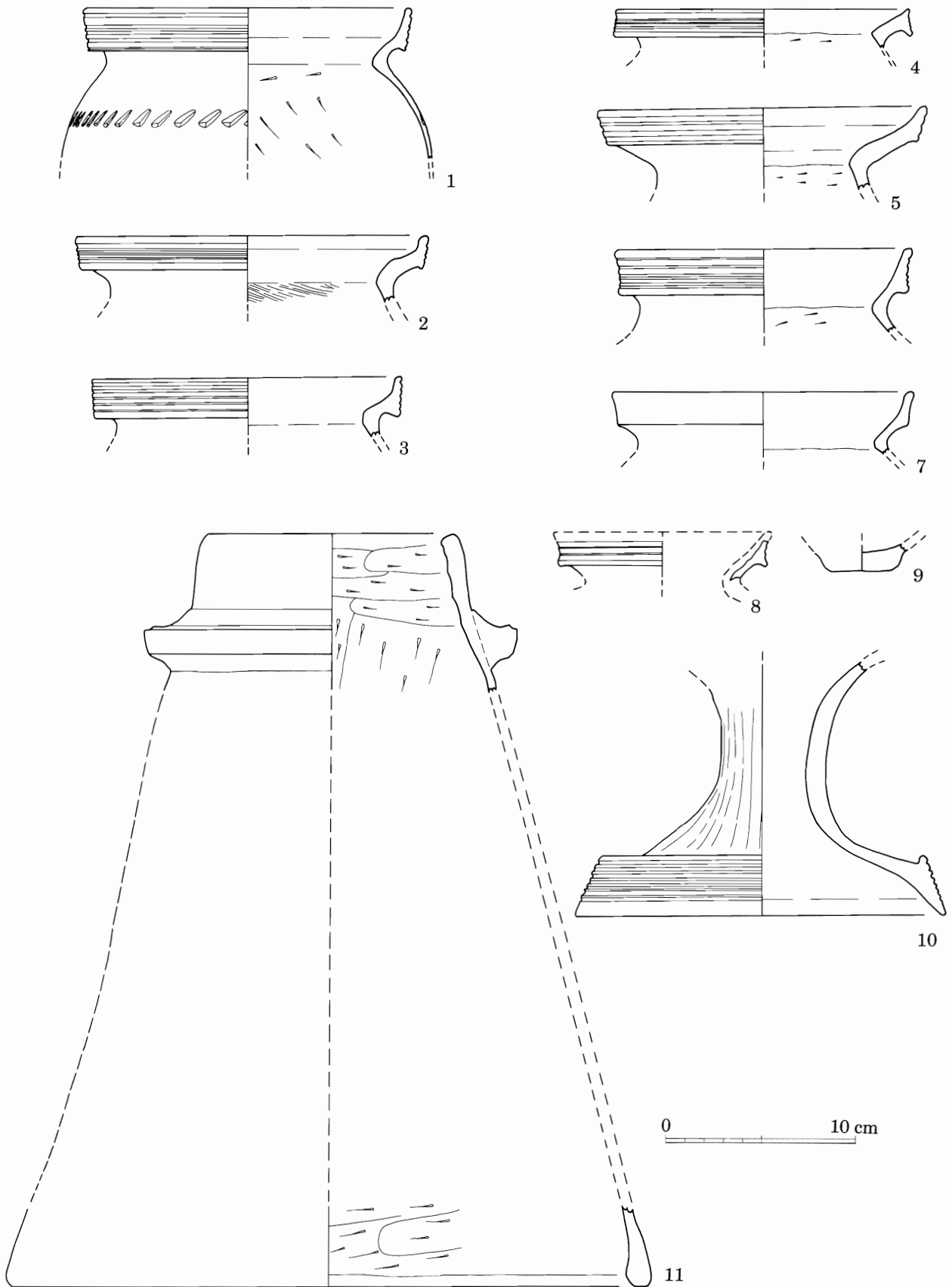
これらの土器はいずれも弥生時代後期の出雲・隠岐V-2様式と考えられる。

5区 SI 03計測表

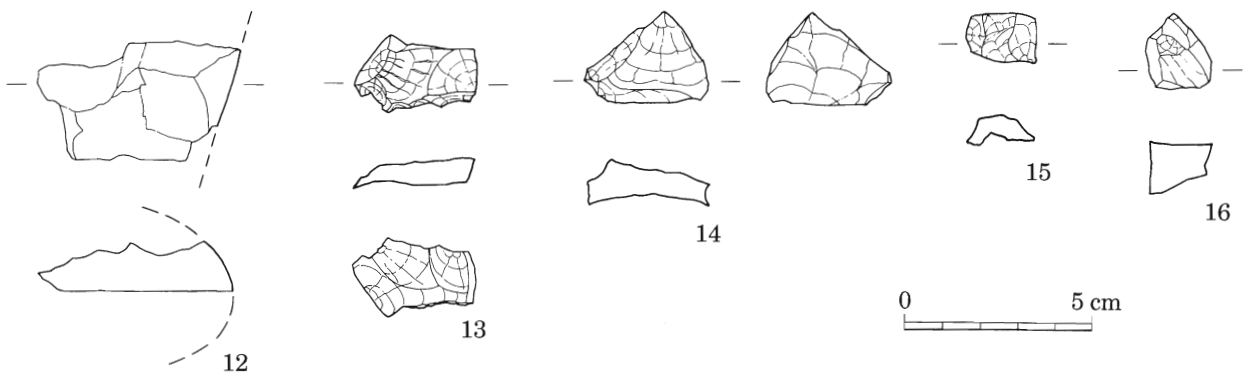
平面形		円形					
規模		上面		下面		床面積	
		5.4 × (4.5+α) m		5.3 × (3.9+α) m			
壁高		33cm					
柱穴 (cm)	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	30×22	36×33	41×35	32×32	36×32	70×54
	深さ	41	70	69	36	54	47
柱間距離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 3-5		
		1.8	1.8	2.1	2.5		

5区 SI 03出土遺物一覧表

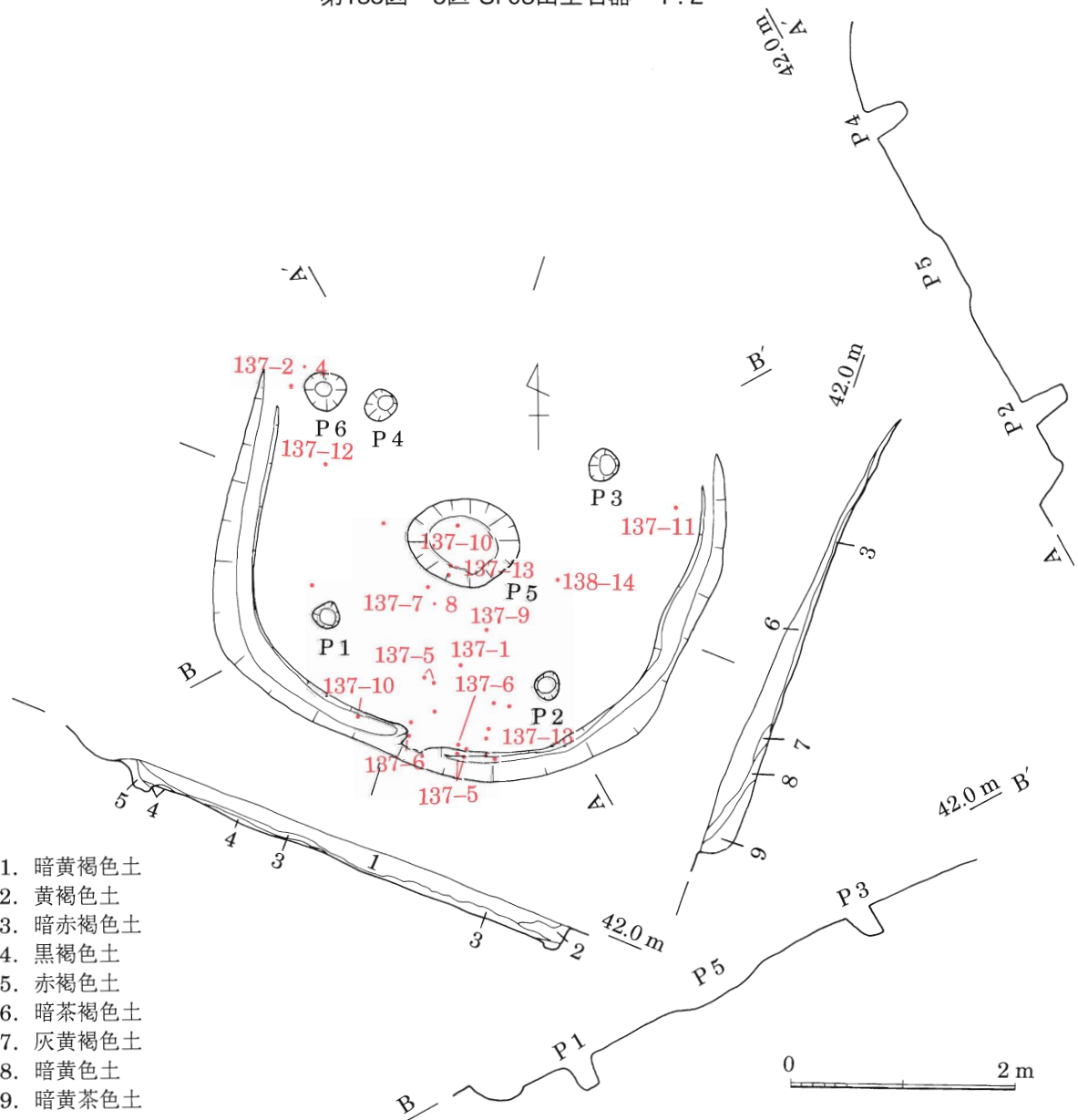
挿図番号	図版 ページ	器種	法量	形 態	文 様	調 整 そ の 他	時 期	備 考
第134図 -1	123		口径17.0	直立気味の複合口縁	擬凹線5条 へらによる刺突	内面ケズリ	弥生 V-2 様式	
-2		弥生 甕	口径19.2	同上	クシ沈線4条	頸部にハケ目	同上	
-3	123	同上	口径15.6	同上	擬凹線?5条		同上	
-4		同上	口径15.6	口縁端内傾	擬凹線4条	内面ケズリ	同上?	
-5		同上	口径17.2	外傾する複合口縁 頸部長い	擬凹線3条	内面ケズリ	同上	
-6	123	同上	口径14.8	直立気味の複合口縁	擬凹線5条	同上	同上	
-7		同上	口径15.8	同上			同上	
-8		同上	口径10.8	同上	凹線3条以上		同上	
-9		同 底部	底径3.8	平底		内面ケズリ?	弥生 後期	
-10	123	同 器台	脚部径19.2	複合口縁状の脚端部 筒長い	擬凹線7条	筒部ミガキ	弥生 V-2 様式	
-11	123	同 甕	口径13.0 底径33.4	口縁下に太い突帯		内面ケズリ	同上?	
135図 -12		磨 製 石 斧				一部に研磨痕		
-13		赤 め の う 剥 片	最大長2.1 最大巾3.2 最大厚0.9			2次剥離あり		
-14		同 上	最大長2.4 最大巾3.3 最大厚1.0					
-15		同 上	最大長1.3 最大巾1.9 最大厚1.0					
-16		同 上	最大長2.0 最大巾1.8 最大厚1.9					



第134图 5区 SI 03出土土器 1:3



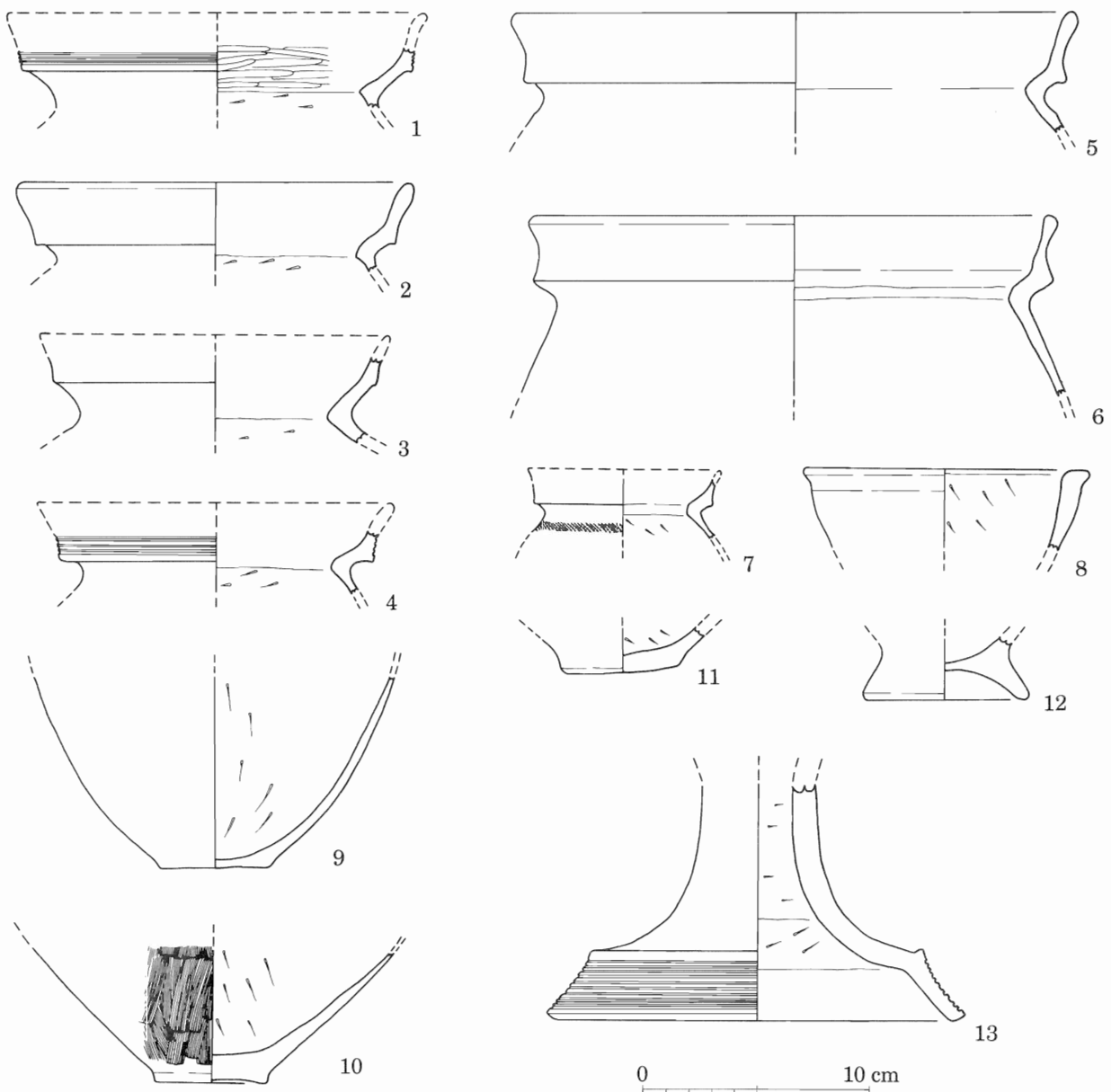
第135图 5区 SI 03出土石器 1:2



第136图 5区 SI 04实测图 1:60

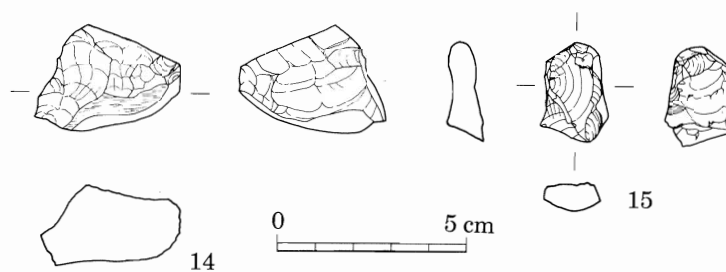
SI 04 (第136図 図版104・105) 丘陵北側の頂部からやや下った緩斜面に立地する。平面形は隅丸方形で、床面には壁帯溝がめぐっている。斜面に立地するため北側の壁および壁帯溝、床は流失している。規模は上面で東西4.4 m、南北約3.6 m 以上を測る。壁沿いには浅い壁帯溝があり、本来は一周していたと思われる。ピットは床面で6個検出され、このうち柱穴はP1~P4と思われる。中央には60cm×80cmのやや大きなピットがあり、この上面では焼土が検出された。

住居跡内からは弥生土器、石器片が出土した(第137・138図 図版124)。第137図1~7は複合口縁の甕で、いずれも長く伸びて外反し、頸部は短く屈曲する器形である。口縁部には1、4にクシ状工具による平行沈線文が施されるほかは、無文である。また7の肩部には二枚貝に



第137図 5区 SI 04出土土器 1:3

よる刺突文が施されている。8は口縁端部が肥厚して平坦となる鉢形土器で、内面には上端までへら削りが施される。9～12は甕または壺の底部である。11は9、10に比べやや底径が大きく、12は底脚がつけられている。13は器台脚部である。筒部は細く長く伸び、下端部は11条のクシ描き平行沈線文が施されている。14は赤メノウ、15は青メノウの剥片である。



第138図 5区 SI 04出土遺物 1:2

これらの土器はいずれも弥生時代後期の出雲・隠岐V-2様式と考えられる。ただし、口縁部の施文が擬凹線のものはなくすべて櫛描き沈線文であることから SI 02、03などより若干新

5区 SI 04計測表

平面形		隅丸方形					
規模		上面		下面		床面積	
		4.4 × (3.6+α) m		3.6 × (3.2+α) m			
壁高		27cm					
柱穴 (cm)	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	22×23	21×25	27×29	29×27	84×63	36×35
	深さ	25	37	24	34	9	14
柱間距離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-1		
		2.0	2.0	2.0	2.0		

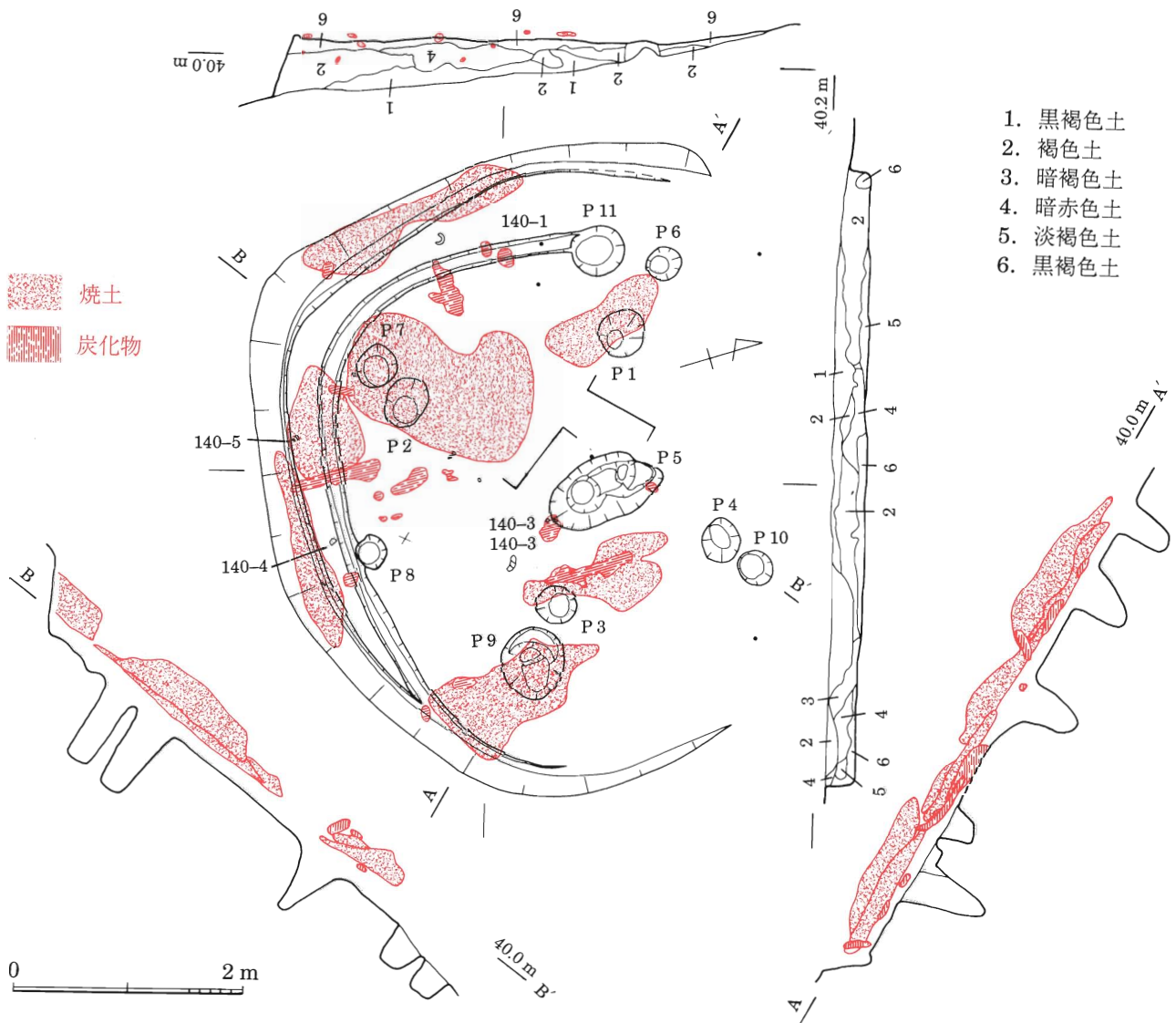
5区 SI 04出土遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第137図-1		弥生甕	口径17.0		クシ描沈線4条以上	内面口縁ミガキ以下ナズリ	弥生V2~3様式	
-2		同上	口径17.4	口縁外傾端部厚い		内面ケズリ	同上	
-3		同上				同上	同上	
-4		同上			クシ描沈線4条以上	同上	同上	
-5	124	同上	口径24.2	端部厚い			同上	
-6	124	同上	口径22.6	同上			同上	
-7	124	同上	口径7.6		2枚貝による刺突	内面ケズリ	同上	
-8		弥生鉢	口径11.2	口縁端平坦面		同上	同上	
-9	124	弥生底部	底径4.8	平底		内面ケズリ 外面ハケ目	同上	
-10	124	同上	底径5.0	同上		同上	同上	
-11	124	同上	底径5.0	同上		内面ケズリ	同上	
-12		弥生脚	底径7.5	低脚			同上	
-13	124	弥生器台	脚部径5.5	脚部長い	クシ描沈線1条	内面ケズリ	同上	
138図-14		赤めのう剥片	最大径2.8 最大口3.9 最大厚2.1					
-15		青めのう剥片	最大径2.6 最大口1.6 最大厚0.7			一端につぶれ?		

しい様相をもつと考えられる。

SI 05 (第139図 図版106) SI 04の北側の斜面に立地する。平面形は隅丸方形で、床面には壁帯溝がめぐっている。斜面に立地するため北側の壁および壁帯溝、床は流失している。規模は上面で東西5.5 m、南北約4.5 m 以上を測る。壁沿いには浅い壁帯溝があり、その内側にさらに1条の壁帯溝が検出された。建て替えによるものと考えられる。2条とも本来は一周していたと思われる。内側の壁帯溝の規模は東西で約4.8 m を測る。ピットは床面で11個検出され、このうち P1~P4は内側の住居跡の柱穴と思われる。P6~P10は外側の住居跡の柱穴と考えられるが、ピットは5個であるためこの竪穴住居跡は5角形のプランである可能性がある。中央には100cm×60cmの楕円形のピットがあるが、これは2つのピットが重複しており2つの中央ピットが重なっていると考えられる。

SI 05内からは焼土、炭化物が多く検出されたことから、この竪穴住居跡は焼失したものと



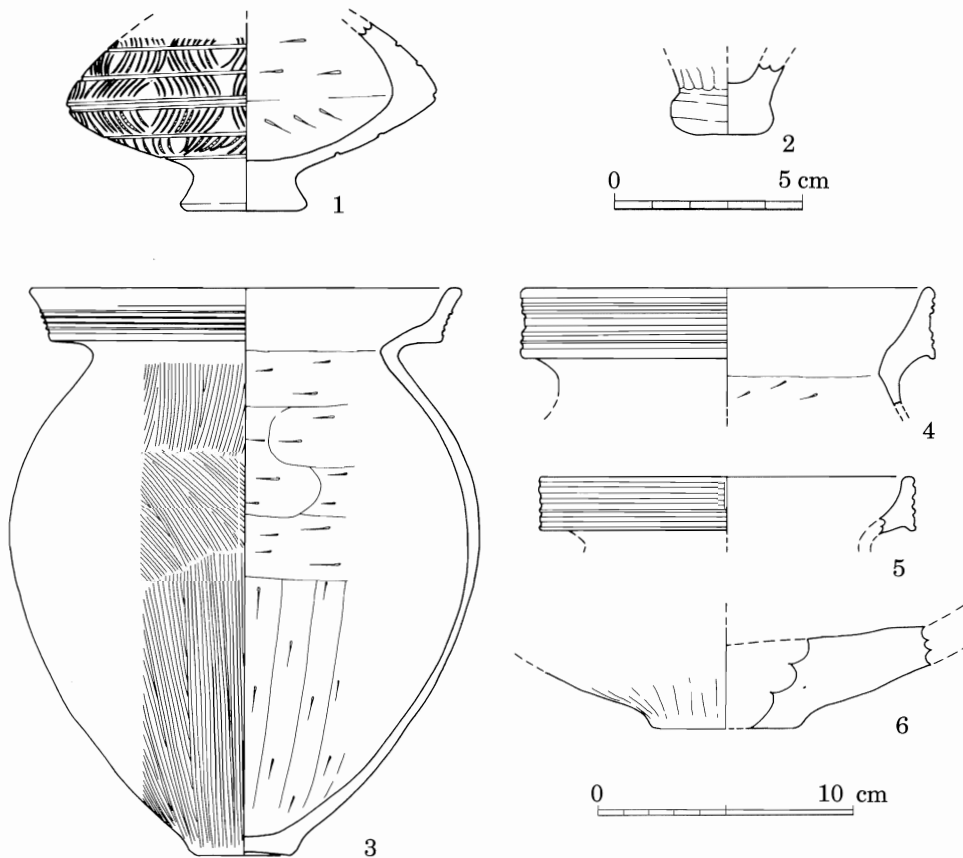
第139図 5区 SI 05実測図 1:60

考えられる。

住居跡内からは弥生土器が出土した(第140図 図版125)。第140図3~5は複合口縁の甕で、いずれも口縁部はやや短く外傾または直立して伸び、頸部は短く屈曲する器形である。口縁部には5に擬凹線5条が施されるが、3、4にはクシ状工具による平行沈線文5から6条が施される。

5区 SI 05計測表

平面形		隅丸方形					
規 模	上面	下面				床面積	
	5.5 × (4.5+α) m	5.3 × (4.2+α) m					
壁 高		55cm					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 6	P 7
	上面径	42×39	45×38	36×32	38×35	33×27	36×33
	深 さ	28	47	36	33	42	71
	柱痕径	17	23	18	23	15	26
	番 号	P 8	P 9	P 10			
	上面径	30×27	63×51	31×29			
	深 さ	10	49	25			
柱痕径	18	15	20				
柱間距離 (m)	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-1	P 6-7	P 7-8	
	2.0	2.3	1.7	2.0	2.6	1.6	
	P 8-9	P 9-10	P 10-6				
	1.6	2.1	2.7				



第140図 5区 SI 05出土土器 (1~2 1:2、3~6 1:3)

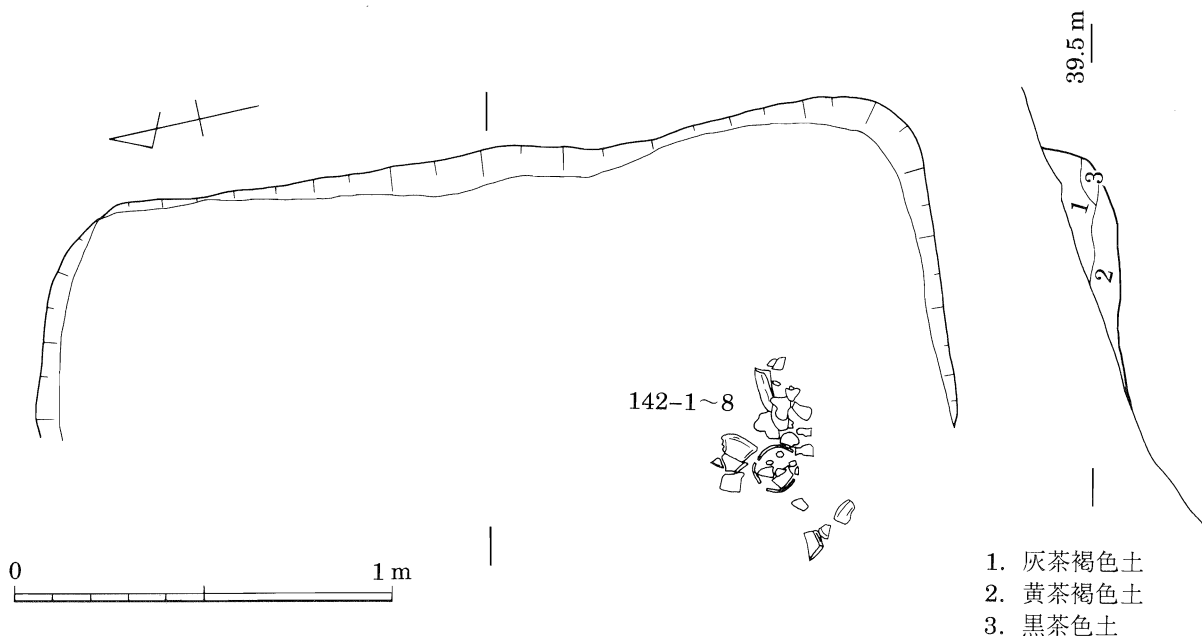
5区 SI 05出土遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第140図-1	125	弥生壺	底径3.4 最大径9.8	算盤玉状の胴部	沈線間に2枚貝による羽状文	内面ケズリ	弥生V-2様式	
-2	125	弥生底部?	底径1.6	突起状の底部		外面ミガキ 内面ケズリ	同上	蓋のつまみの可能性あり
-3	123	弥生甕	口径17.2 底径4.2 器高22.5	外傾する複合口縁	クシ描沈線5条以上	外面ハケ目 内面ケズリ	同上	
-4	125	同上	口径15.8	直立気味の複合口縁	クシ描沈線6条	内面ケズリ	同上	
-5	125	同上	口径14.2	同上	擬凹線5条		同上	
-6	125	弥生壺底部	底径5.8	平底。胴部大きく張る。		外面ナデ+ミガキ	同上	

完形に復元できる3は口径17.2cm、底径4.2cm、高さ22.5cmを測る。1は小型の壺で口縁部を欠く。算盤玉状の胴部で二枚貝によって羽状に刺突文が施されている。底部は厚く、つまみ状になる。6は壺の底部である。器壁は厚く胴部は大きく広がる器形で、大型の壺と思われる。2は底径2.7cmの小型の壺と思われる。底部はつまみ状のやや変わった器形である。

これらの土器はいずれも弥生時代後期の出雲・隠岐V-2様式と考えられる。ただし、口縁部の文様が擬凹線のものばかりでなく櫛描き沈線文が混じることから若干新しい様相をもつといえようか。

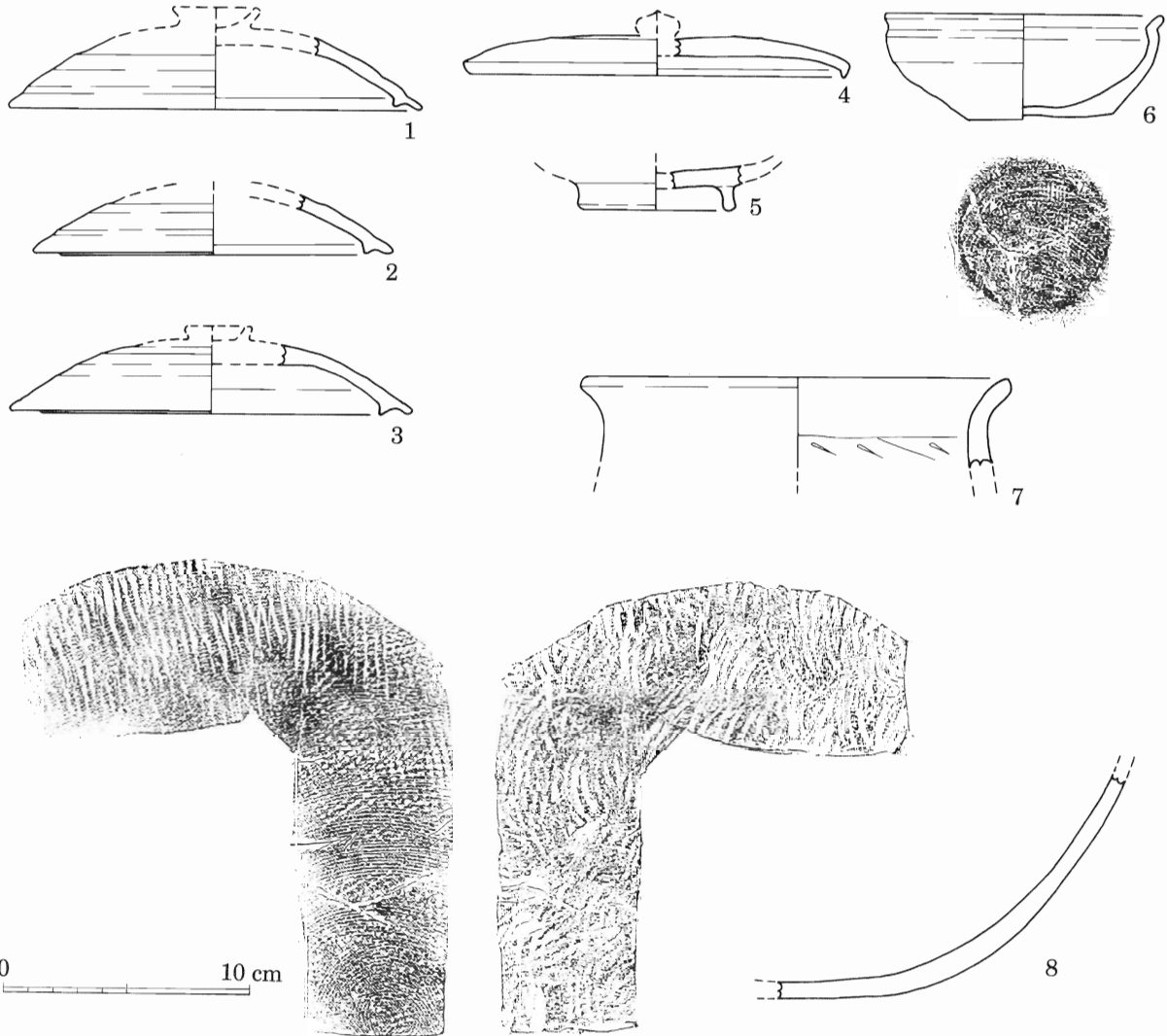
SI 06 (第141図 図版108) 調査区西側の急斜面にある小型の竪穴住居跡である。平面形は方形を呈し、隅は若干丸みをもつ。斜面のため谷(西)側は流失しており、確認できた規模は南北で2.4m、東西で0.8mであった。床面には壁帯溝や柱穴は検出できなかった。おそらく柱穴をもたない構造の竪穴住居跡であろう。



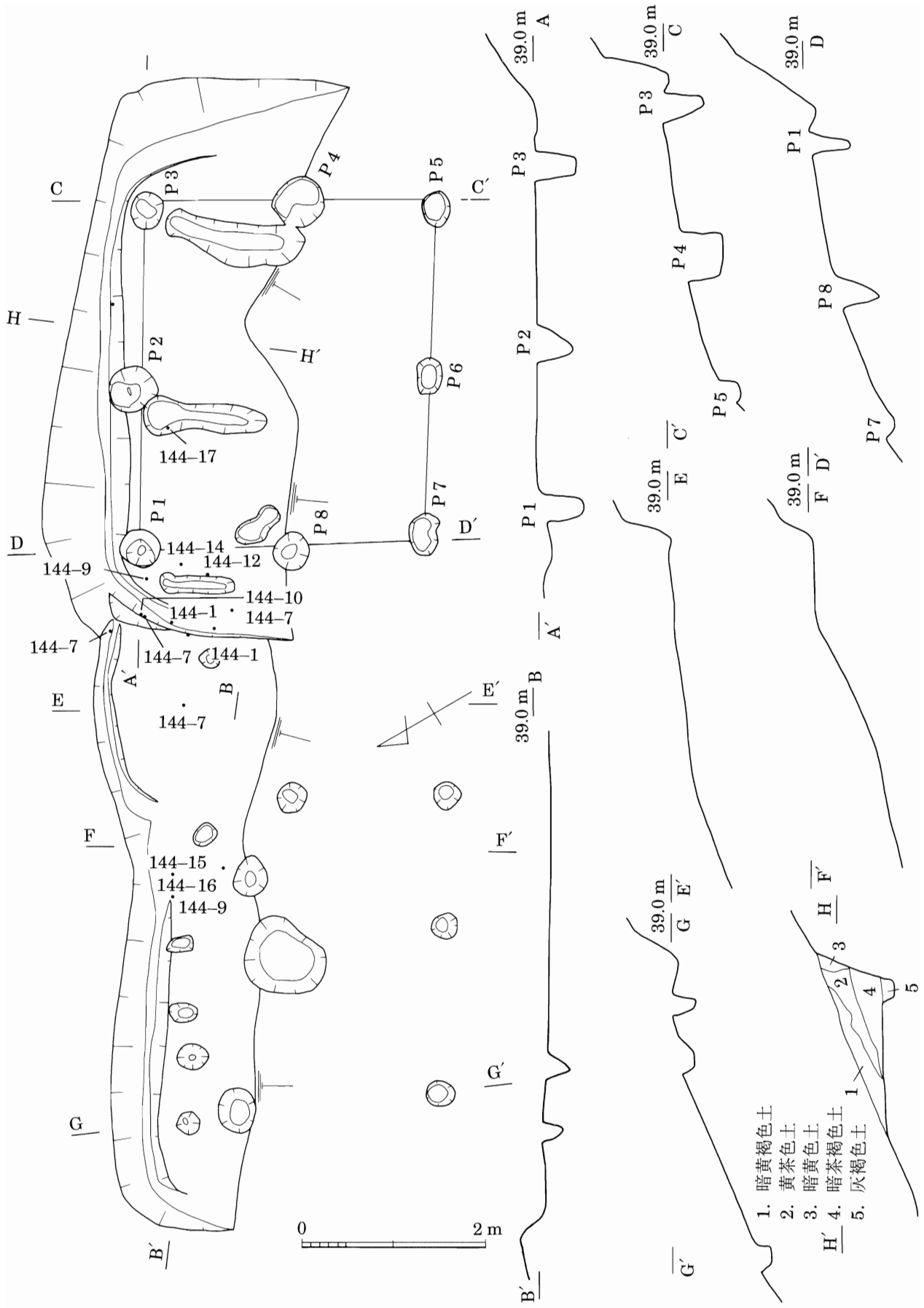
第141図 5区 SI 06実測図 1:20

5区 SI 06出土遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第142図-1		須恵器蓋	口径14.4	内面かえり			蓋B17期	
-2		須恵器蓋	口径12.4	同上		回転ケズリ	同上	
-3		須恵器蓋	口径13.8	同上		同上	同上	
-4		須恵器蓋	口径15.2	端部嚙状		同上	蓋B27~8期	
-5		須恵器坏	底径5.8	高い高台		回転ナデ	坏B27期?	
-6	126	須恵器坏	口径11.2 底径7.4 器高4.2	口縁くびれる		回転糸切	8期	
-7		土師器甕	口径17.7	口縁短く外反		内面ケズリ		
-8		須恵器甕		底部に近い		外面平行叩+カキ目 内面同心円当具痕		



第142図 5区 SI 06出土土器 1:3

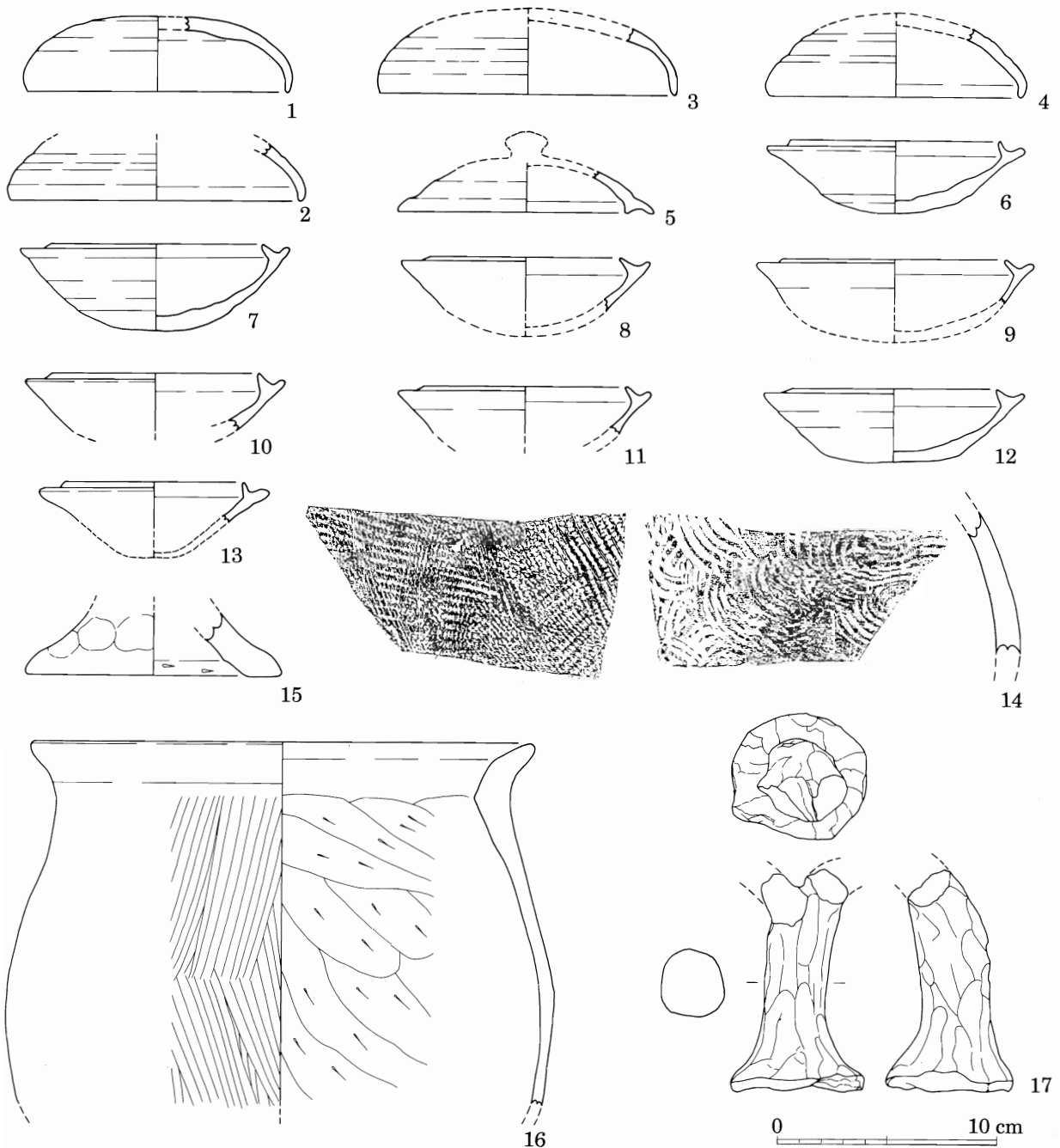


第143图 5区 SI 07.08.09实测图 1:60

遺物は南西の床面で集中して出土した（図版108）。図示したもののうち7は土師器、それ以外は須恵器である。第142図1～3は口径12.4cm～14.4cmのやや大型の蓋で、口縁部内面にかえりをもつ。4も蓋であるがかえりはつかず、嘴状につまみ出すだけである。5は高台がつく坏、6は口縁部がくびれる坏である。切り離しがわかるのは6のみで、回転糸切り後は調整が施されていない。7は土師器甕、8は須恵器甕胴部である。

これらの須恵器はおおむね7世紀末から8世紀前半にかけてのものと思われる。

SI 07・08・09（第143図 図版107） 調査区西側の急斜面にある。3棟が重複しており東

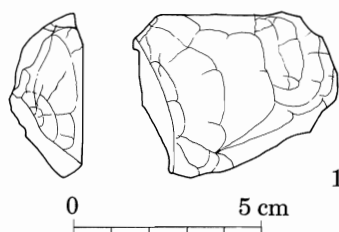


第144図 5区 SI 07.08.09出土遺物 1:3

5区 SI 07計測表

平面形		方形加工段					
規模	上面		下面		床面積		
	2×2間 (3.3×3.9 m)						
壁高		86cm					
柱穴 (cm)	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	44×42	54×42	36×41	57×56	30×41	27×40
	深さ	41	31	47	40	26	α
	番号	P 7	P 8				
柱間距離 (m)	上面径	32×46	39×42				
	深さ	19	47				
柱間距離 (m)	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7	
	1.8	1.9	1.6	1.5	1.8	1.8	
	P 7-8	P 8-1					
	1.5	1.6					

から SI 07、08、09とした。斜面のため谷（西）側は流失しており、残っているのは丘陵側のみであった。いずれも壁際には壁帯溝をめぐるすが、検出できたのが一部であったので、これらが竪穴住居なのか加工段であるのかは判断できなかった。確認できた規模は SI 07の東端から



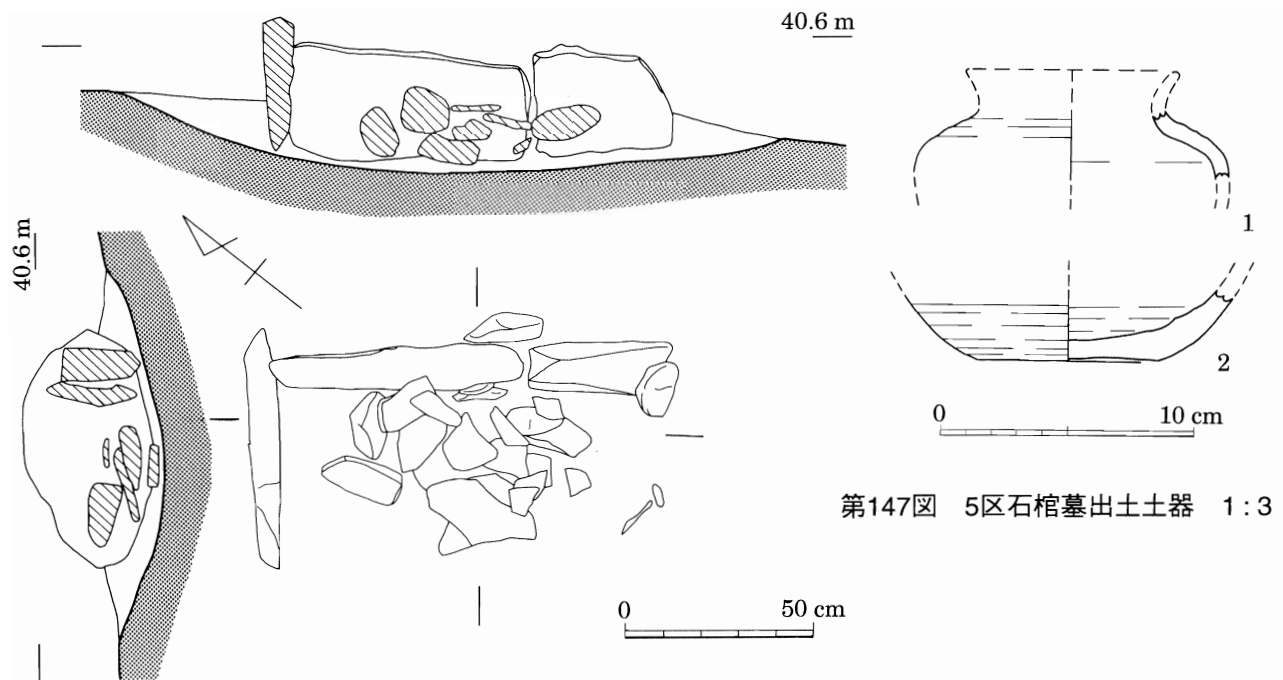
から SI 09の西端までを結んだ線で12.6 m、東西で0.8 mであった。

SI 07は壁帯溝の長さが約6 m で、床面の幅は1.8 m ほどが確認できた。ここでは2×2間 (3.3×3.9 m) の建物跡が検出されたことから、加工段と考えた方がよいと思われた。加

第145図 5区 SI 07出土石器 1:2 工段の規模は東西6 m、南北2.7 m である。

5区 SI 07・08・09出土遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第144図-1	127	須恵器蓋	口径9.8			へら切り+ナデ	蓋 A 7 5期	
-2		須恵器蓋	口径13.2	端部内側に屈曲			同上	
-3		須恵器蓋	口径13.4				同上	
-4	127	須恵器蓋	口径11.2	端部内側に屈曲			同上	
-5		須恵器蓋	口径9.2	内面かえり			蓋 C 6 B 期	
-6	127	須恵器坏	口径9.7 器高3.4	たちあがり非常に短く内傾		へら切り	坏 A 8 6期	
-7	126	須恵器坏	口径9.6 器高4.0	同上		同上	同上	「×」のヘラ記号
-8		須恵器坏	口径8.6	同上			同上	
-9		須恵器坏	口径10.1	同上			同上	
-10		須恵器坏	口径9.4	同上			同上	
-11		須恵器坏	口径9.2	同上			同上	
-12	126	須恵器坏	口径9.4 器高3.4	同上		へら切り+ナデ	同上	
-13		須恵器坏	口径8.2	同上			同上	
-14		須恵器壺か甕		肩部か		外面平行叩 内面同心円当具痕		
-15		土師器支脚	底径11.7	底部凹む		指押圧、ケズリ		
-16	128	土師器甕	口径23.0	口縁短く外反		外面ハケ目 内面ケズリ		
-17	127	土師器支脚	底径5.8	小型、受部2支?		粗い整形痕		
145図-18		めのう剥片	最大長4.4 最大巾5.8 最大厚2.0			背面に礫面	旧石器	SK 36出土石器と接合



第146図 5区石棺墓実測図 1:20

第147図 5区石棺墓出土土器 1:3

SI 08は壁帯溝の長さが約2.4 m、床面の幅約1.8 m が検出された。床面の高さは SI 07より若干高い。ピットは1個検出されたが柱穴の並びを知ることはできなかった。

SI 09は壁帯溝の長さが4.2 m、床面の幅約1 m が検出された。ピットは10個検出されたが、建物を抽出するには至らなかった。

遺物は SI 07と SI 08との重複部分で主に出土した。第144図（図版126、127）に示した土器で SI 08から出土したのは7と15、SI 09から出土したのは2、8、16で、他はすべて SI 06に含まれる。これらのうち須恵器蓋坏はいずれも小型のものばかりで、底部または天井部の調整は甘くヘラ切り痕が残るものばかりである。また、5は調査時の感覚では混入の形跡が窺えたのでこれを除外すると出雲6 A 期の組み合わせと考えられる。各住居跡から出土した遺物にはほとんど時期差がないことから、SI 06～09は短期間の間に連続して建て替えられたと考えられる。

なお、第145図18は碧玉製の剥片である。これは SK 36出土の石核と接合した、打面調整の剥片である。風化が進んでおり旧石器時代のものと思われるが、これらの住居跡とは無関係と考えられる。

石棺墓（第146図 図版109） 調査区の中央に位置し、頂部からやや下った緩斜面にある。地山を浅く皿状に掘り込み、その中に板状の石を立てて石棺としている。検出されたのは北側の小口壁と東側の側壁だけで、南側小口と西側壁は流失したものと思われた。石棺は小口に1枚石（長さ65cm、厚さ10cm、高さ35cm）、側壁には2枚の石（長さ65cmと35cm、ともに厚さ10cm、高さ30cm）を利用しており、側壁が小口に挟まれる構造となっている。残った石から判断するとこの石棺墓は内法で南北約1 m、東西約50cm程度の規模と推定される。石棺内には大

小の石が入れられていたが、後世に側壁を壊して入れたものかもしれない。

石棺が置かれた掘り形は東西約1.7 m、南北約1 m、深さ10cmほどの浅いものであった。石棺の東側（丘陵側）には幅約50cmの浅い溝が弧状に掘られていた。ごく一部しか確認できず記録することはできなかったが、本来は周囲をめぐる可能性はある。この溝内からは須恵器が2点出土している（第147図）。1は頸部径7.4cmを測る短頸壺、2は底径7.2cmを測る壺底部である。これが石棺墓に伴う可能性は少なく、石棺墓の時期を決定することはできない。

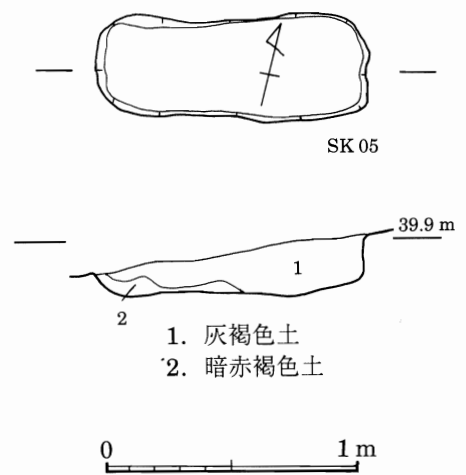
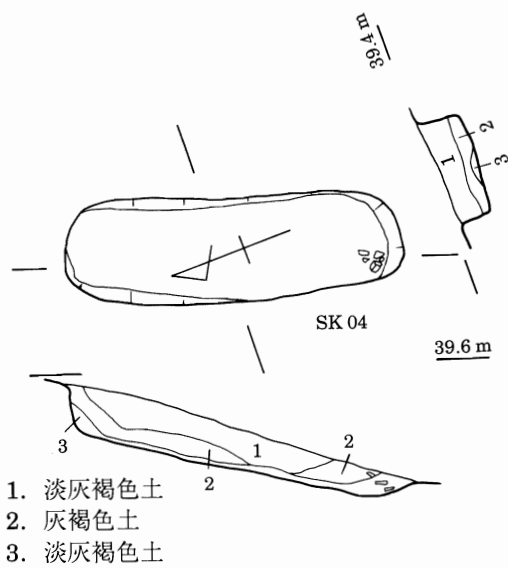
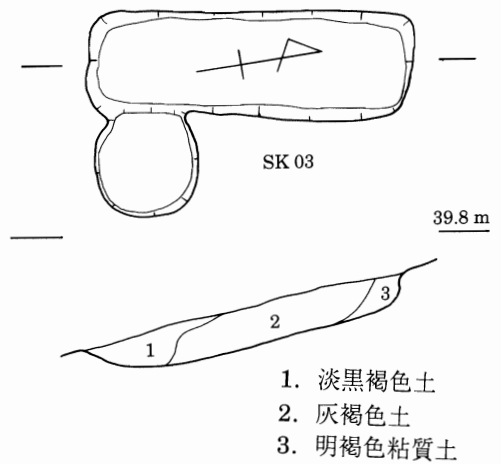
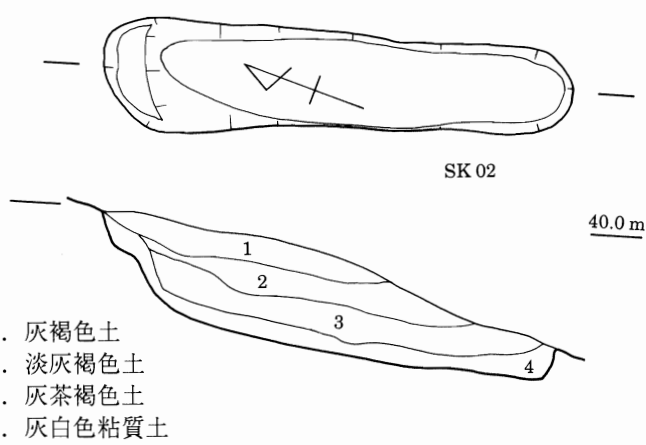
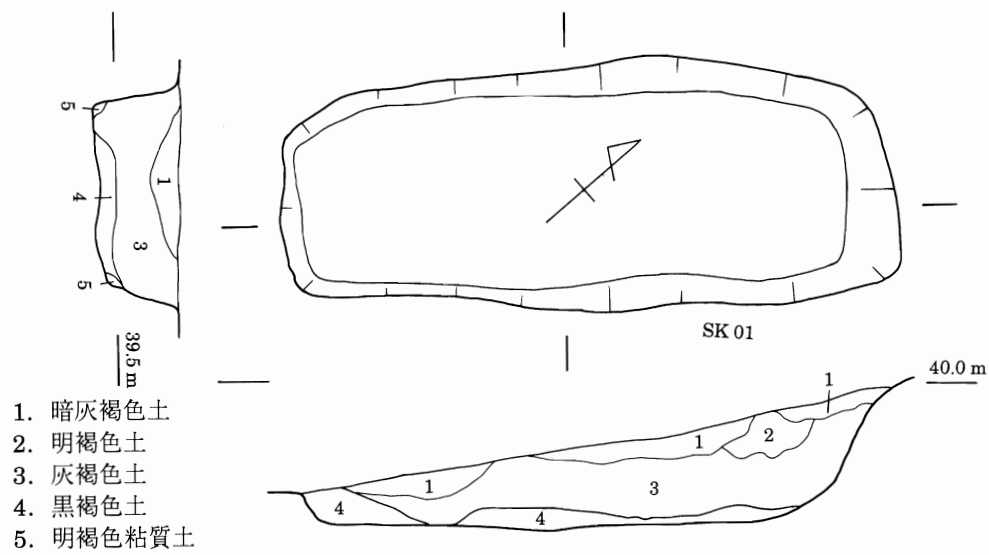
土壙墓（第148～151図 図版110～115） 古墳時代、平安時代、江戸時代の土壙墓が検出された。

古墳時代の土壙墓（SK 01～13）はおもに調査区の西端で検出された。いずれも丘陵の西側斜面に等高線に直交する形で掘られている。副葬品を伴うものは少ないが、形状が似ていることからほぼ同時期の土壙墓と考えた。平面形は長方形または長楕円形を呈し、規模は長さ約1.1 m～2.6 m、幅約0.4 m～1 m、深さ0.1 m～0.7 m を測る。土壙内には石棺や木棺を入れた痕跡はみられず、素掘りの土壙にそのまま遺体を埋葬したように思われた。SK 06は中央に45cmほどの大きさの石が置かれており、墓標的な意味があるように感じられた。その他の土壙には石は入れられていなかった。副葬品をもつものは SK 04、SK 08だけで、副葬品をもつ土壙墓は少ない。副葬品はいずれも須恵器で、第152図1が SK 06、同図2、5、6、7が SK 08、同図3、4が SK 04から出土している。これによると SK 06が出雲4期、SK 08が出雲5期、SK 04が出雲3期から4期古段階の組み合わせとなる。

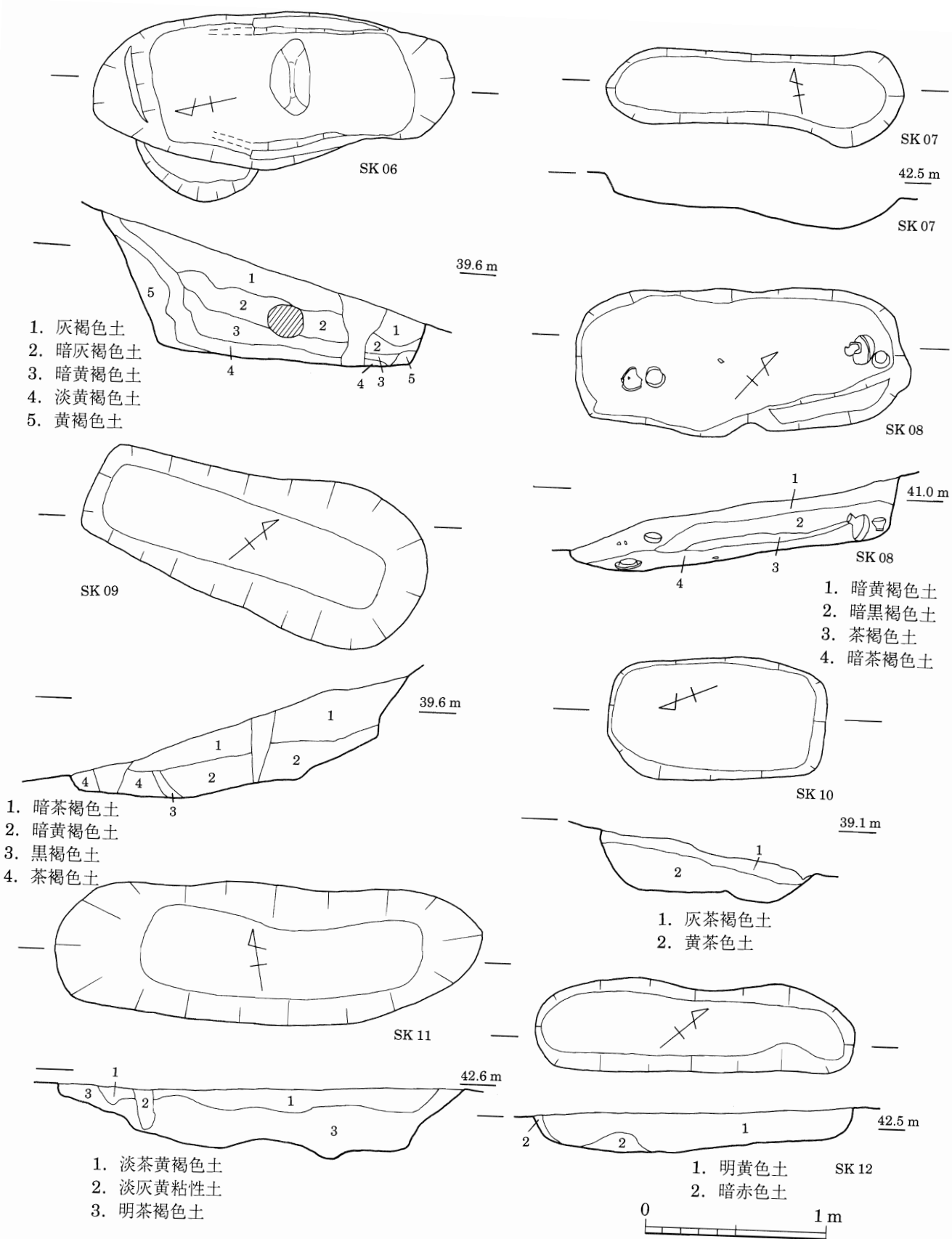
SK 14は平面形円形、SK 17、20は方形の土壙墓で、出土遺物から平安時代から中世と考え

土壙墓計測表

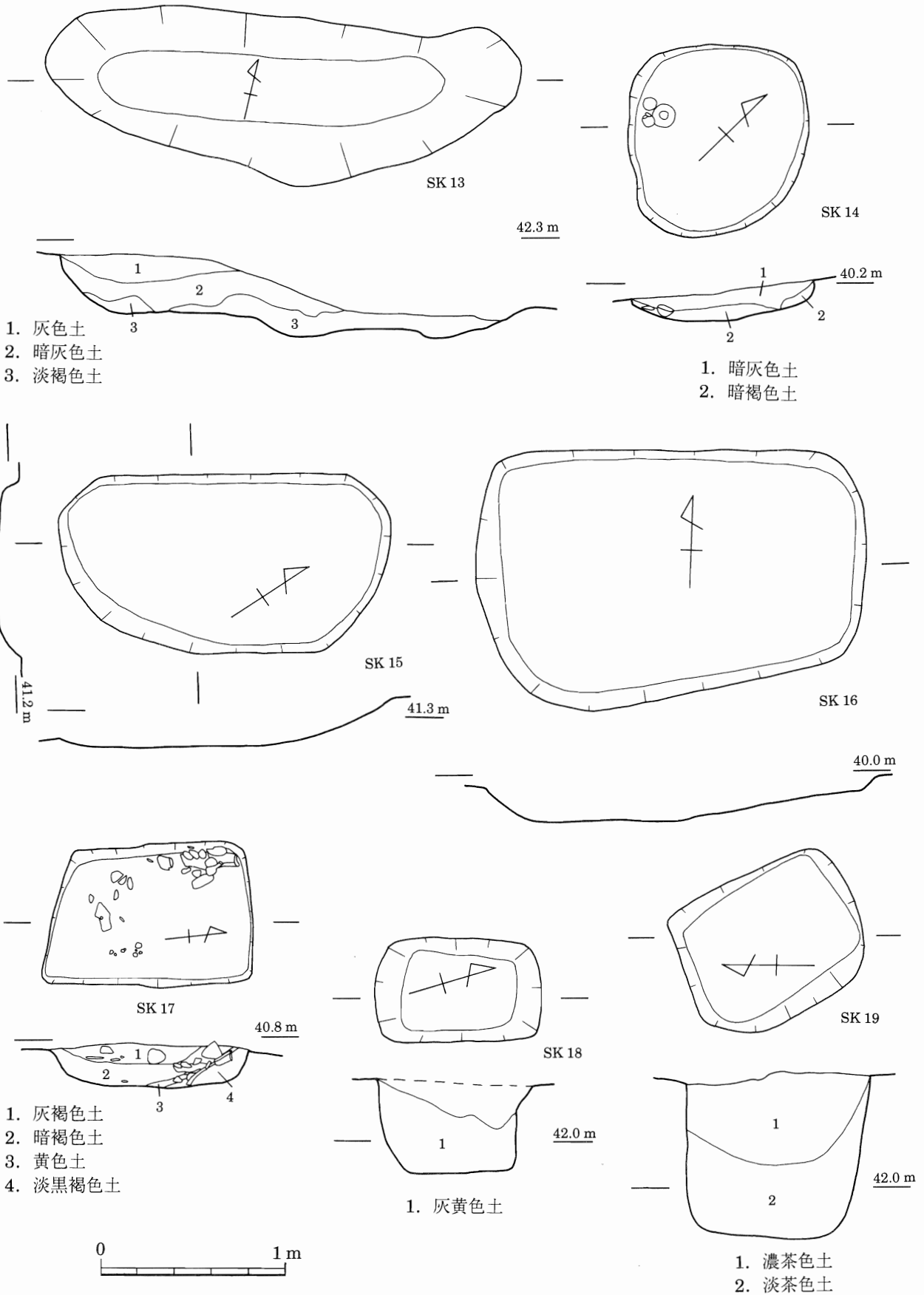
番号	平面形	平面規模 m	深さ m	時期	出土遺物他
01	長方形	2.44×1.00	0.43		
02	長方形	1.80×0.40	0.34		
03	長方形	1.28×0.41	0.15		
04	長方形	1.34×0.43	0.17		
05	長方形	1.08×0.37	0.19		
06	楕円形	1.96×0.86	0.68		須恵器（蓋）
07	楕円形	1.62×0.39	0.11		
08	長方形	1.80×0.82	0.25		須恵器（蓋、平瓶、坏、高坏）
09	長方形	1.90×0.74	0.38		
10	長方形	1.18×0.66	0.24		須恵器（坏）
11	楕円形	2.32×0.76	0.19		
12	長方形	1.74×0.52	0.09		
13	不整楕円形	2.56×1.00	0.50		
14	楕円形	1.14×1.00	0.28		土師器（椀）
15	楕円形	1.76×0.94	0.22		
16	長方形	2.08×1.34	0.19		
17	長方形	1.08×0.76	0.21		土師器（壺、椀、坏）
18	長方形	0.90×0.56	0.47		
19	長方形	1.02×0.80	0.89		
20	不整長方形	1.90×1.11	0.48		土師器（皿）
21	長方形	1.02×0.94	0.48		
22	長方形	1.00×0.73	0.50		
23	楕円形	0.87×0.73	0.51		



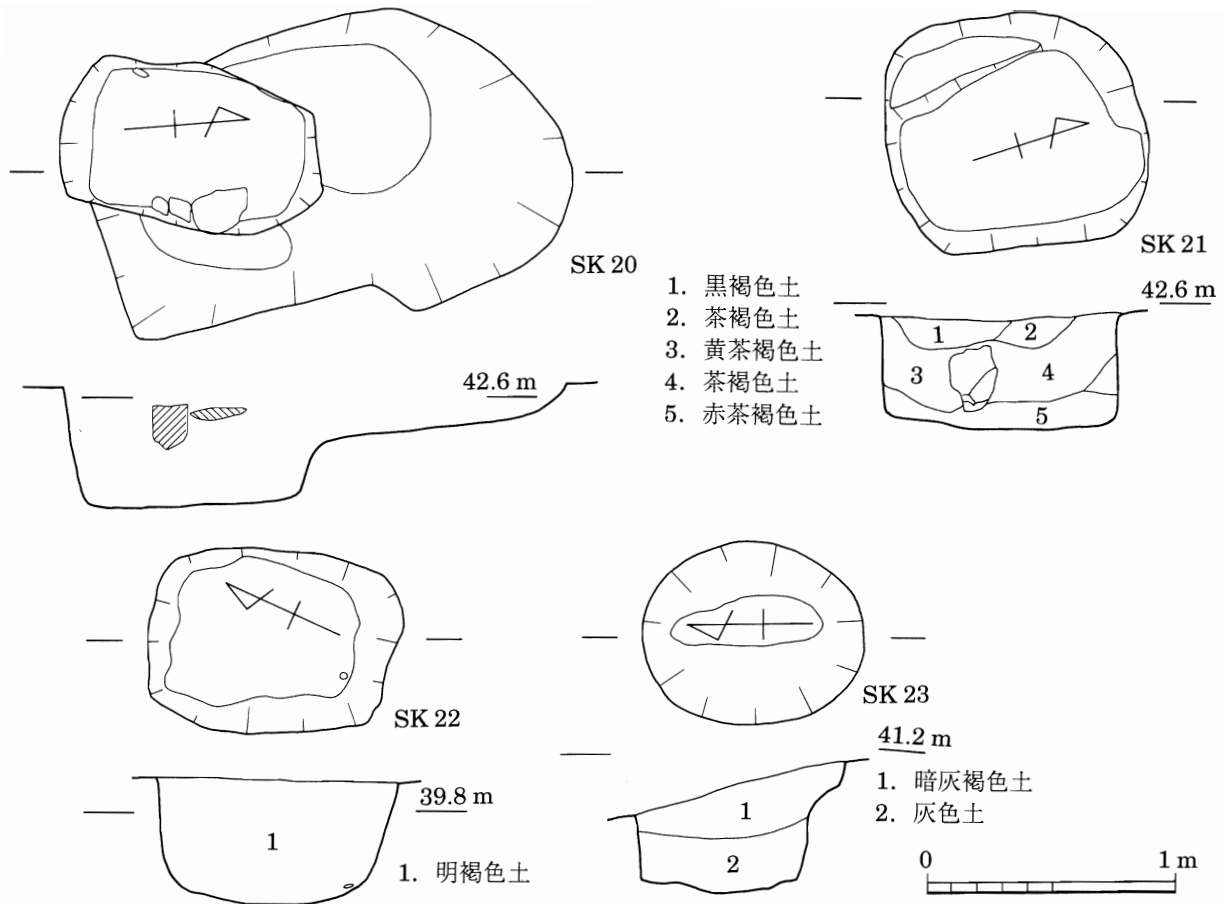
第148图 5区土壤墓(1) 1:30



第149图 5区土壤墓 (2) 1:30



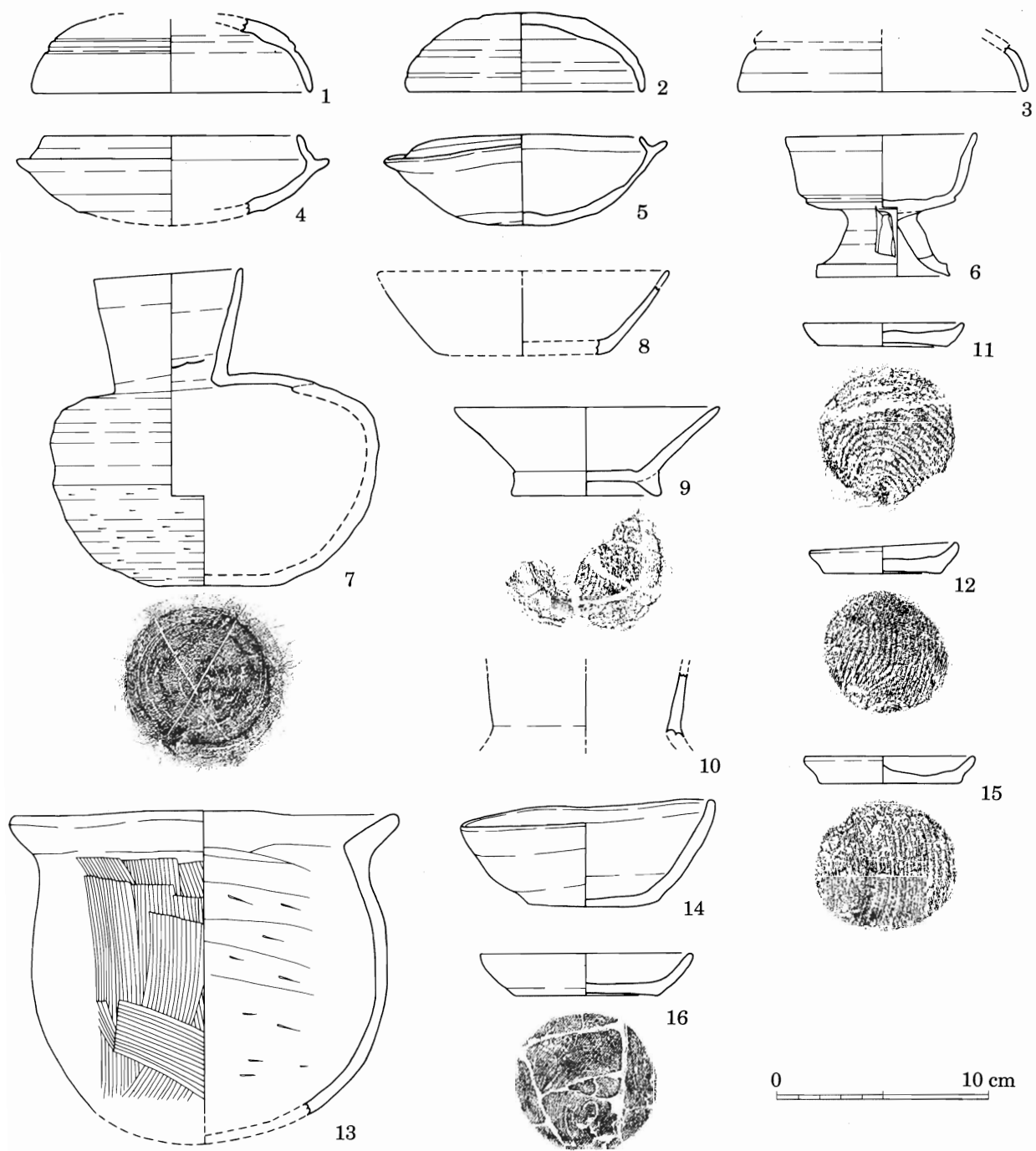
第150图 5区土壤墓 (3) 1:30



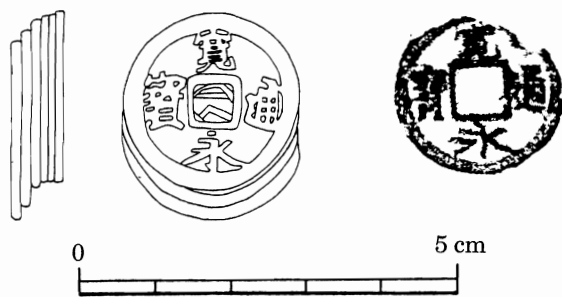
第151図 5区土墳墓(4) 1:30

5区土墳墓出土土器一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第152図-1		須恵器蓋?	口径13.0	沈線2条による稜			蓋 A 5-6 4期	SK 06
-2	127 128	須恵器蓋	口径11.2 器高3.8	口縁端内側に屈曲		へら切り+ナデ	蓋 A 8 6A期	SK 44
-3		須恵器蓋	口径13.4	上端に稜			蓋 A 5-6 4期	SK 05
-4		須恵器坏	口径12.0	たちあがり内傾		回転ケズリ	坏 A 4-6 4期	SK 05 ろくろ右回転
-5	127 128	須恵器坏	口径10.8 器高4.2	たちあがり短く内傾		へら切り+ナデ	坏 A 8 6A期	SK 44
-6	127	須恵器高坏	口径4.6 底径3.2 高さ6.7	低脚	方形透し(2方) 坏部に沈線		長脚無蓋 A 7 6A期	SK 44
-7	127	須恵器平瓶	口径7.0 底径6.2 器高15.1			回転ケズリ	平瓶 C 3 6A期	SK 44 ろくろ右回転
-8		土師器坏	底径8.2	平底。口縁直線的に開く。			平安?	SK 10
-9	128	土師器坏	口径12.5 底径6.8 器高4.2	同上(高台付)		回転糸切	同上	SK 10
-10		土師器壺	頸部径8.8	直口		ヨコナデ	同上	SK 10
-11	128	土師器皿	口径7.8 底径6.2 器高1.3	口縁短い		回転糸切	中世	SK 02
-12	128	土師器皿	口径6.9 底径5.8 器高1.3	同上		静止糸切	同上	SK 02
-13	128	土師器甕	口径18.0	口縁短く屈曲。胴張らない。		外面ハケ目 内面ケズリ	平安	SK 10
-14	128	土師器碗	口径11.4 器高5.1	口縁内湾		静止糸切	中世	SK 02
-15		土師器皿	口径8.1 底径6.6 器高1.3	口縁短い		同上	同上	SK 02
-16	128	土師器皿	口径9.8 底径6.6 器高2.0	口縁やや長く内湾		回転糸切	同上	SK 19



第152図 5区土墳墓出土土器 1:3



第153図 5区 SK 22出土古銭 1:1

た。出土遺物はいずれも土師器であった。SK 17は坏、皿、甕、壺が、SK 14は坏と皿、SK 20は皿が副葬されていた。坏、皿はいずれも底部は糸切り（回転、静止）のままである。

また副葬品はないが、形状が似ていることからSK 15、16、19～21、23も同時期の土壙墓の可能性もある。これらは単なる素掘りの土壙で木棺などは確認できなかったが、中に石が置かれているものがあつた（SK 20、21など）。これは墓標的な意味をもつであろうか。

SK 22は壙底から「寛永通寶」が出土し（第153図）、近世の土壙墓と考えられた。寛永通寶は6枚が重なった状態で出土し、副葬されたものと思われる。これは「古寛永」と呼ばれるもので、17世紀ころと考えられる。

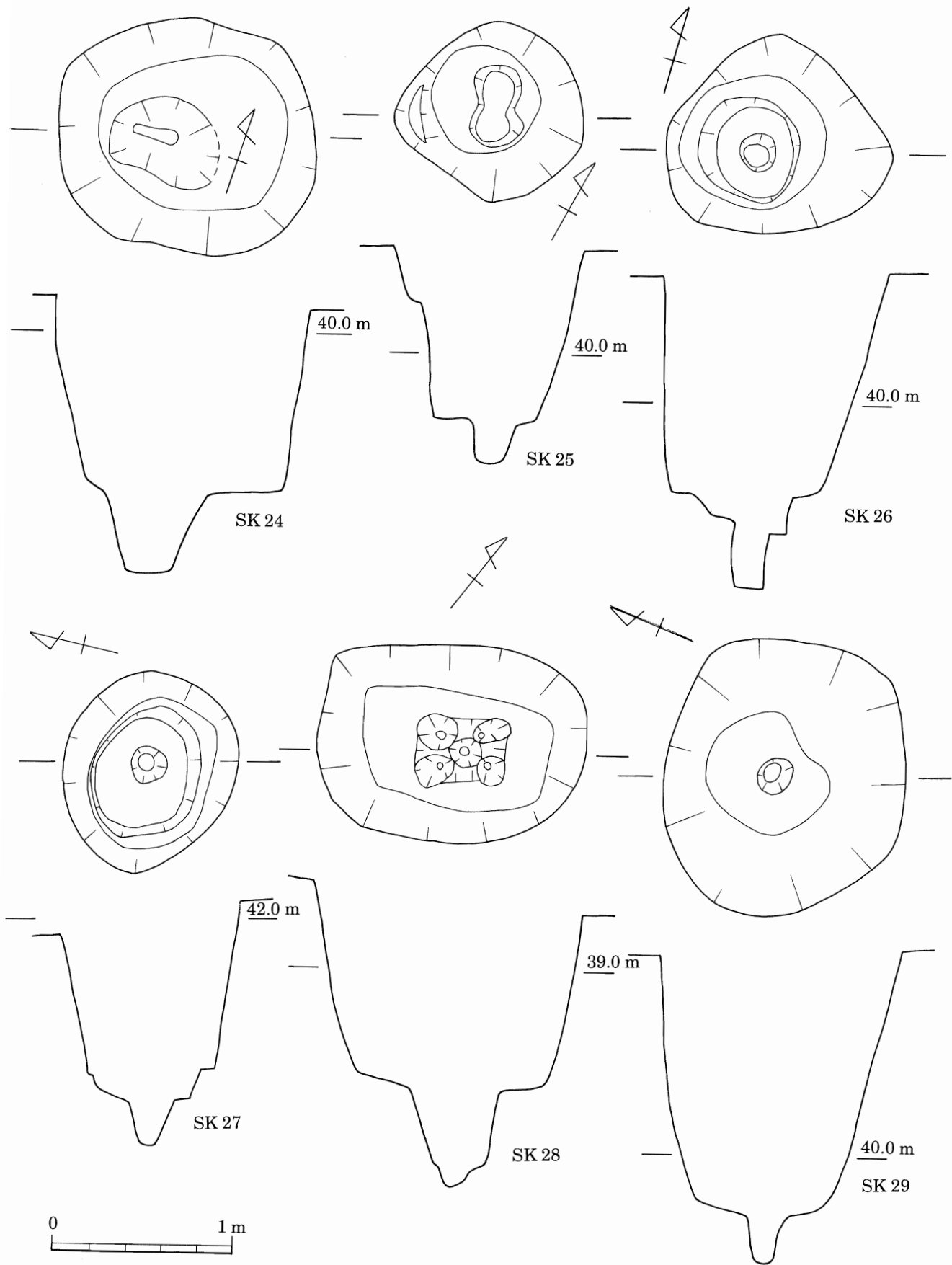
落とし穴状土壙（第154～156図 図版115～117） SK 24～36は深さの深い土壙で、壙底には小ピットが穿たれる、いわゆる落とし穴状土壙である。いずれも尾根稜線よりやや下つたところに立地する。平面形は円形または円形に近い楕円形で、径0.6～1.5 m、深さ1.1～1.6 mである。壙底の小ピットは径20cm前後、深さ30～40cmを測り、SK 25、SK 30、40が2個、SK 27が5個穿たれている。このほかはいずれも1個である。SK 25～27、33、37、41は2段に掘られており、拡張または作り直されたと考えられる。

これらからは黒曜石製石鏃、碧玉剥片、縄文土器片などが出土したが、いずれも細片で落とし穴状土壙に明確に伴うとはいえない。ただし弥生土器、土師器、須恵器など、新しい時期の

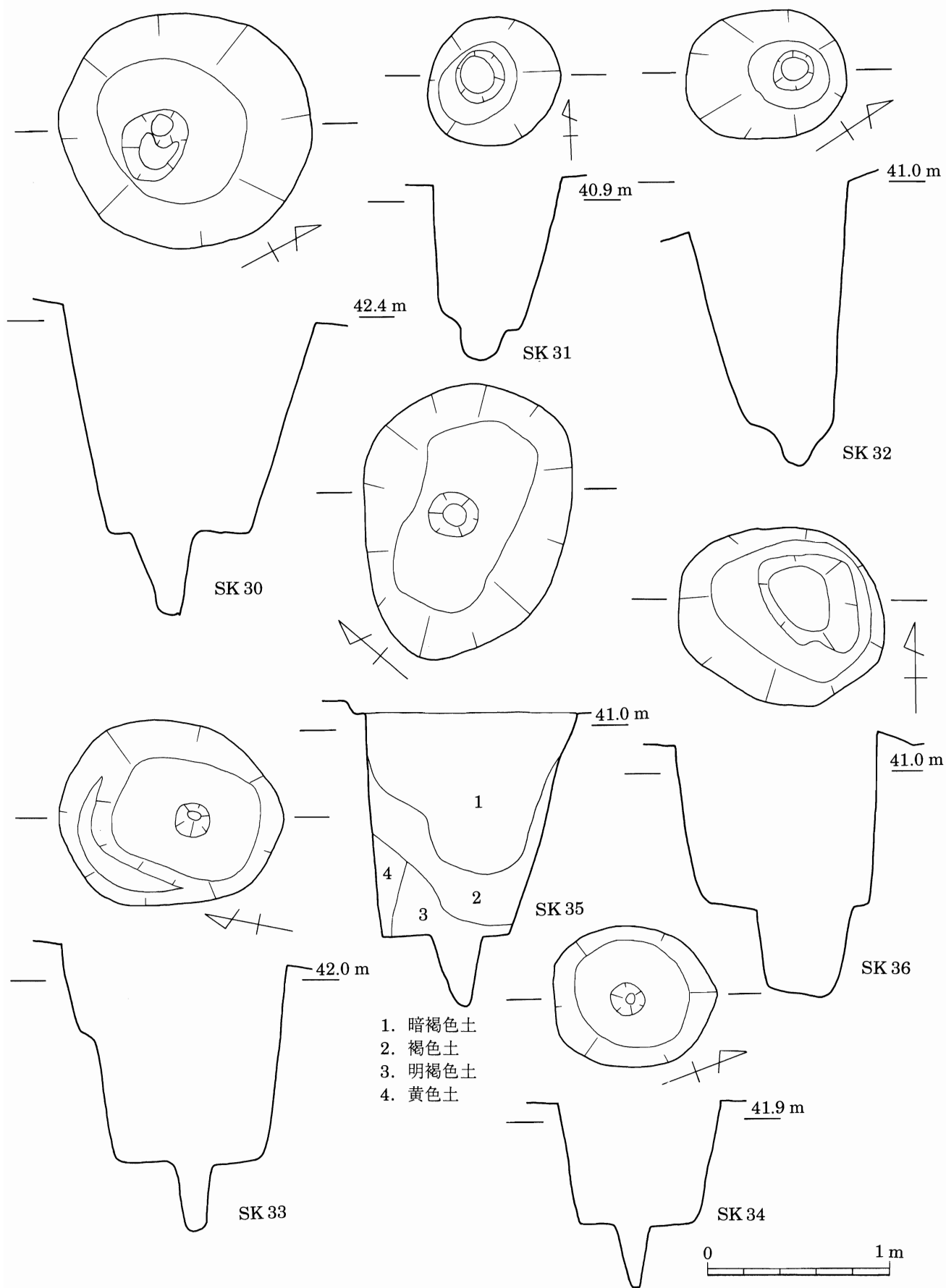
落とし穴状土壙計測表

土壙計測表

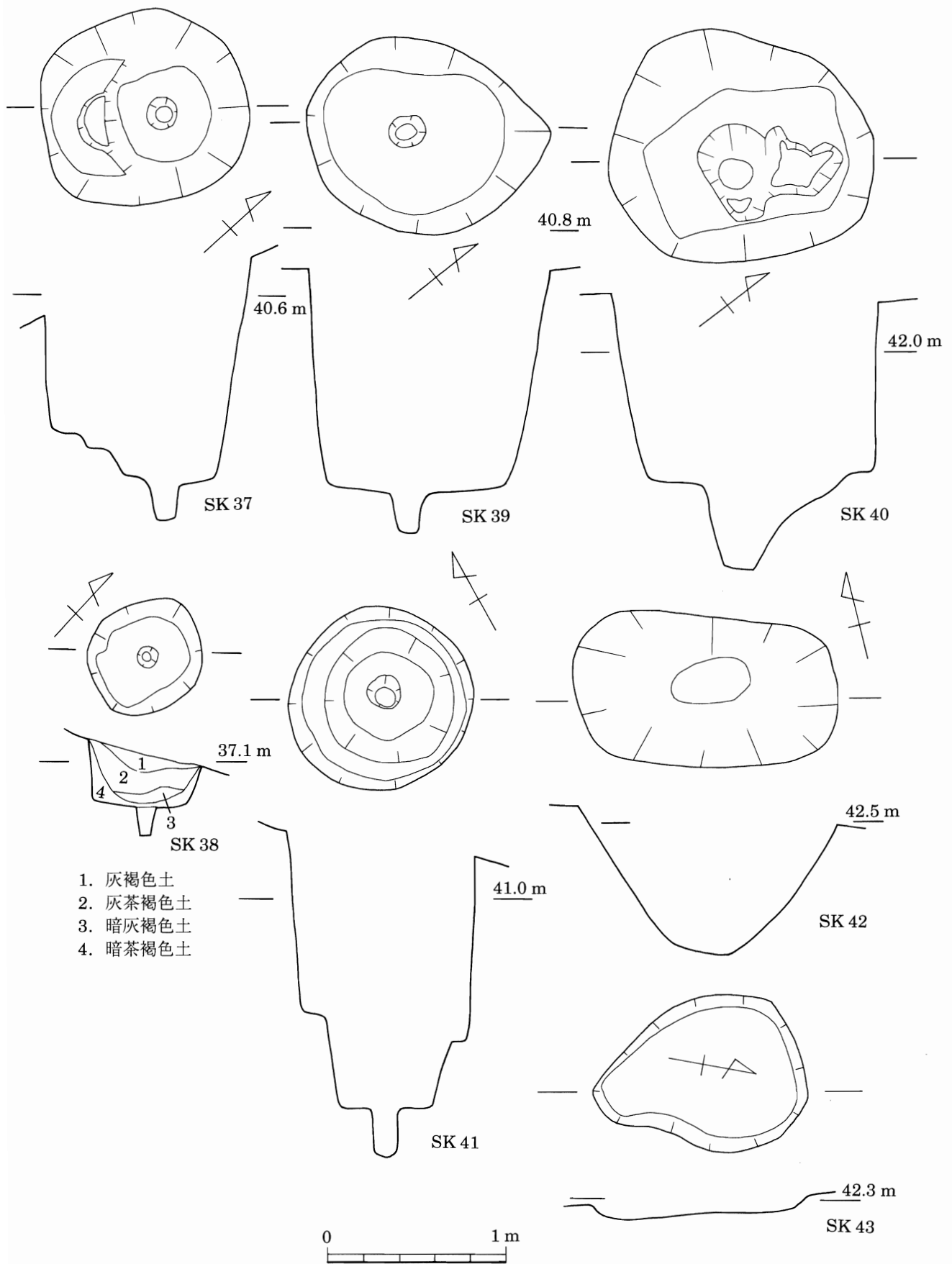
番号	平面形	平面規模 m	深さ(杭の底面まで) m	杭の径 m	杭の数	出土遺物	番号	平面形	平面規模 m	深さ m	備考
24	円形	1.42×1.30	1.25 (1.67)	0.56	1	黒曜石石鏃	42	長方形	1.48×0.84	0.77	
25	楕円形	1.04×1.00	1.00 (1.24)	0.24	1		43	不整楕円形	1.20×0.88	0.22	
26	楕円形	1.25×1.12	1.46 (1.76)	0.19	1		44	楕円形	1.06×0.98	0.87	
27	楕円形	0.96×1.10	1.11 (1.36)	0.24	1	縄文土器破片	45	楕円形	1.47×0.82	0.20	めのう
28	長方形	1.50×1.10	1.22 (1.75)	0.18	5	黒曜石剥片	46	円形	0.72×0.71	0.90	
29	楕円形	1.34×1.57	1.50 (1.79)	0.20	1	青めのう	47	楕円形	1.08×0.92	0.91	
30	円形	1.30×1.38	1.29 (1.74)	0.35	1		48	楕円形	1.14×0.80	0.36	
31	円形	0.72×0.70	0.85 (1.01)	0.22	1		49	不整楕円形	1.06×0.79	0.26	
32	楕円形	0.72×0.88	1.40 (1.58)	0.23	1		50	楕円形	1.22×0.88	1.24	
33	楕円形	1.23×1.01	1.24 (1.60)	0.20	1		51	楕円形	0.84×0.67	0.59	
34	楕円形	0.88×0.76	0.76 (1.13)	0.19	1		52	楕円形	0.72×0.51	0.54	石器(玉髄)剥片
35	楕円形	1.13×1.44	1.34 (1.74)	0.27	1		53	楕円形	0.56×0.62	0.22	硯、鏃、甕破片
36	楕円形	1.10×0.98	0.99 (1.45)	0.51	1	黒曜石剥片、めのう	54	長方形	1.16×0.70	0.55	土師器(椀)須恵器(坏)
37	円形	1.14×1.08	1.24 (1.47)	0.17	1		55	円形	1.36×1.30	1.13	
38	円形	0.64×0.63	0.38 (0.57)	0.09	1		56	楕円形	1.16×0.62	0.32	
39	楕円形	1.34×1.11	1.26 (1.47)	0.21	1		57	長方形	0.80×0.58	0.26	
40	楕円形	1.47×1.34	1.10 (1.58)	0.46	1		58	楕円形	1.08×0.86	0.32	
41	円形	1.03×1.04	1.58 (1.84)	0.15	1						



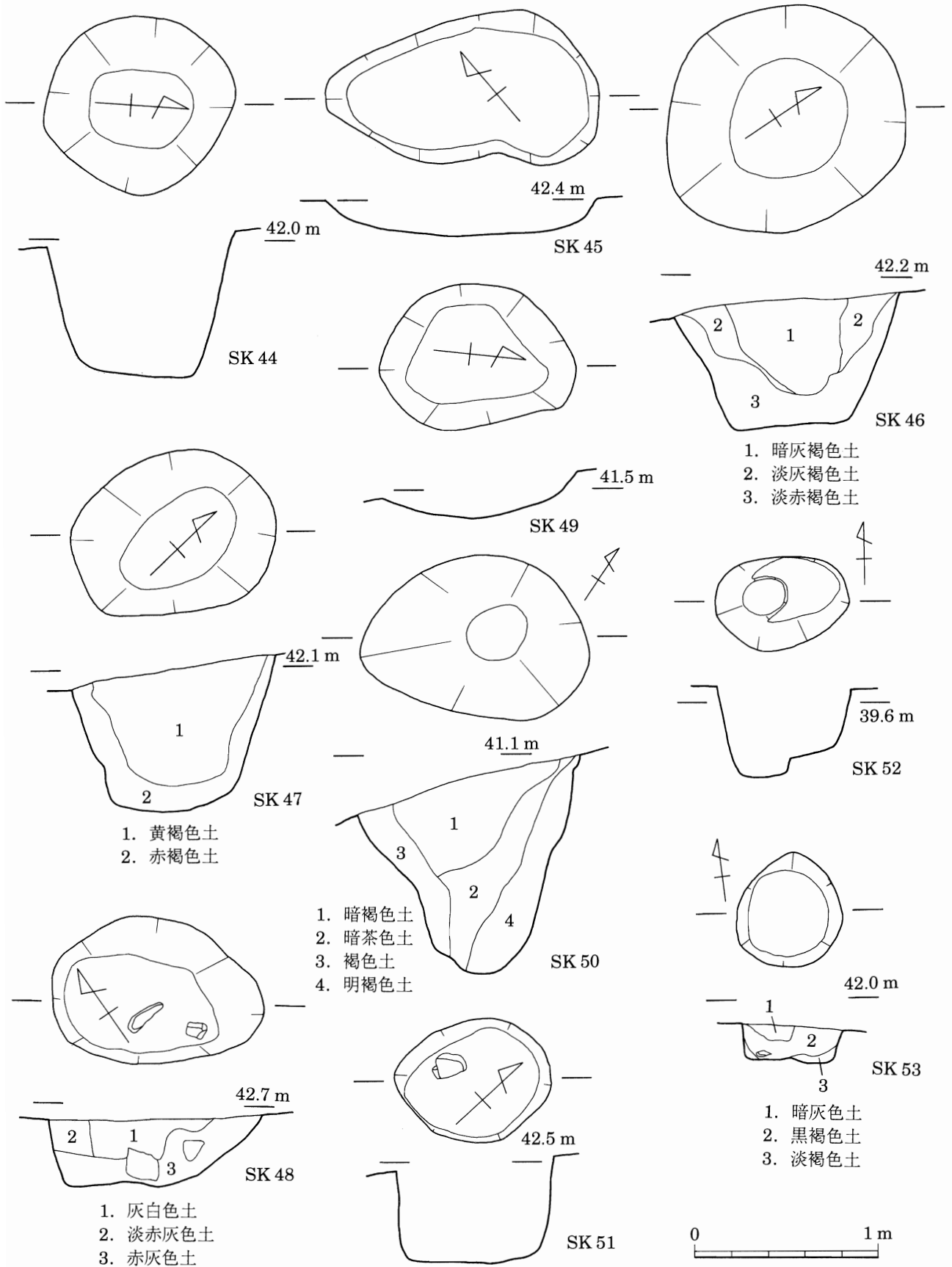
第154図 5区落とし穴状土坑 (1) 1:30



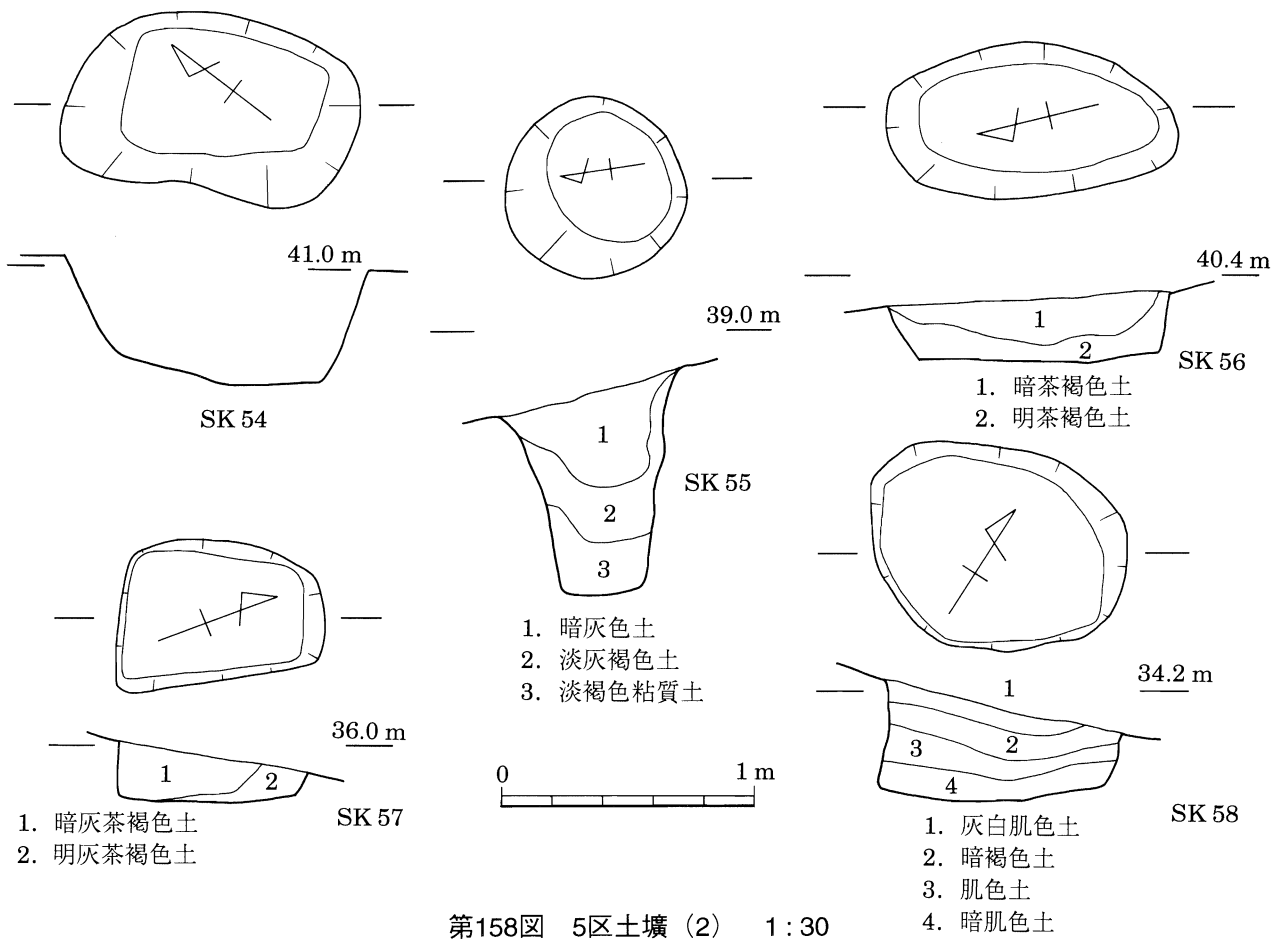
第155図 5区落とし穴状土壌 (2) 1:30



第156図 5区落し穴状土坑 (3) 1:30

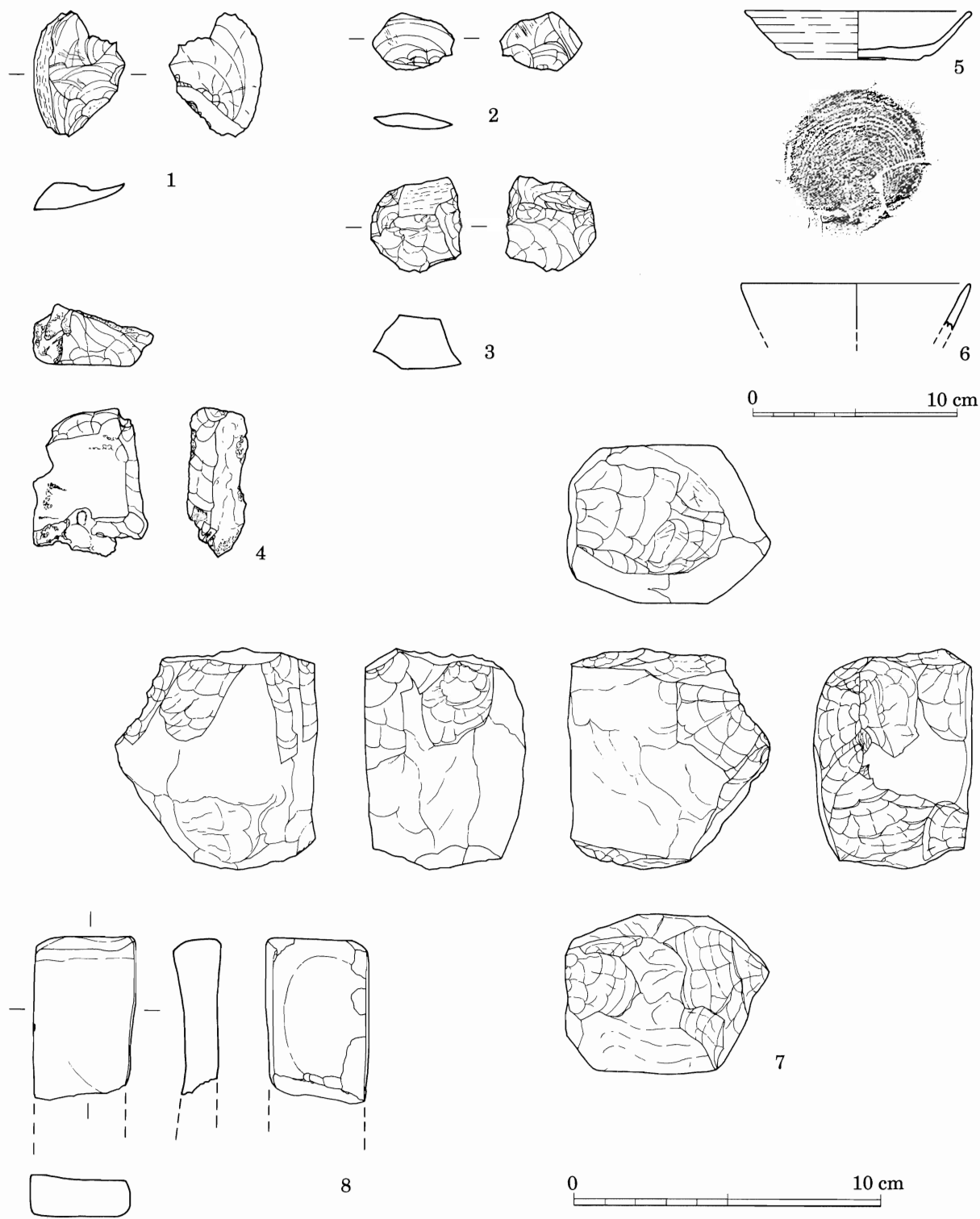


第157图 5区土壤(1) 1:30



5区土壌出土遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	出土遺構
第159図-1		黒曜石	最大長4.1 最大巾3.0 最大厚0.9	剥片		一部に礫面残す		SK 28
-2		青めのう	最大長1.9 最大巾2.6 最大厚0.5	同上				SK 29
-3		青めのう	最大長2.9 最大巾2.9 最大厚1.8	同上		一部に礫面残す		SK 45
-4		玉髓(白)	最大長4.8 最大巾3.8 最大厚2.0	同上		同上		SK 52
-5		土師器皿	口径11.0 底径6.2 器高2.4	口縁大きく開がる		回転糸切	平安?	SK 54
-6		須恵器坏	口径11.3	同上			平安?	SK 54
-7	129	青めのう石核	最大長7.3 最大巾6.6 最大厚5.3			剥離少ない。 打面調整	旧石器	SK 36
-8		砥石	最大長5.3 最大巾3.3 最大厚1.7			5面使用		SK 53



第159図 5区土壌出土遺物 (5~6 1:3、他は1:2)

遺物が含まれていないことから、縄文時代に作られた遺構である可能性が高い。注目されるのは SK 36から出土した第159図7である。上面を打面調整した碧玉製石核で、旧石器時代のものであると思われる。打面調整でできた剥片は SI 07から出土しており、接合できる (図版129)。その他の土壌 (第156~158図 図版118~119) 平面形が不整形で底面に小ピットを伴わな

いものをまとめた。不整形ながら方形を呈するもの(SK 54、55)や石を含むもの(SK 48、51)は土壇墓の可能性もある。また、深いものは貯蔵穴の可能性もある。土壇内からはほとんど遺物が出土していないが、土壇の時期が分かる資料としてはSK 54から出土した第159図5、6がある。SK 17とほぼ同じ時期か、やや古いと思われる。

溝状遺構 (第160図 図版120) 調査区東端の丘陵頂部から玉作工房跡に向かって等高線に直交するように作られた遺構である。全長は22 m と長いが、幅は40cm程度と狭い。地山にしっかりと掘られており、壁は急角度で、深さは25cmから60cmである。溝内からは土師器、須恵器の細片が出土したが、図示できるものはなかった。古墳時代後期から奈良時代ころのものと思われる

遺構に伴わない遺物 (第161～165図 図版130～135) 主に調査区の南西斜面から弥生土器、土師器、須恵器、陶器などが出土した。

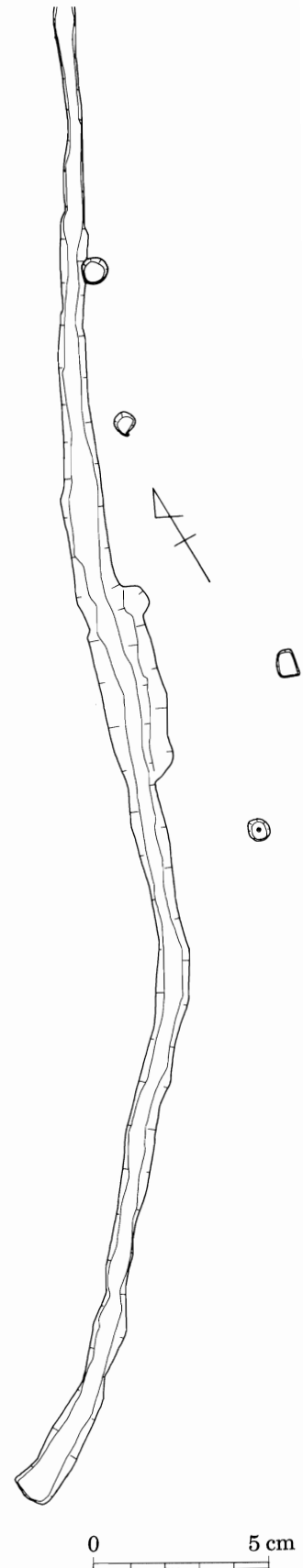
弥生土器(第161～162図)はいずれも後期の土器で、前期、中期の土器は出土していない。壺は復元実測できるのは1だけで、他は41～49のような小片だけである。いずれもクシ状工具を多用して文様が施されており、刺突文(48、49)や平行沈線文と刺突文の組み合わせも多い(41、42)。また、連弧状のクシ描文(46、47)や連続渦文のスタンプ文(45)もある。44は胴部が玉葱状に強く張る器形である。17は無頸壺と考えられる。

甕(2～16)はいずれも複合口縁だが、口縁部が短く伸びて外傾または直立するもの(2～10、15、16)と長く伸びて外反するものがある(11～14)。口縁部の施文は前者が擬凹線文、後者がくし描き沈線文が多い。

注口土器は数点出土したが、数は少ない。18の注口上面には綾杉状の文様が描かれている。底部は4cm未満の小型の底部と5cm近い大型の底部が出土している。

25、26、29は高坏である。29は長く伸びる複合口縁で、胴部に鋭い稜がつき、鉢の可能性もある。

27、28、32～40は器台である。口縁部、脚端部が複合口縁状を呈す鼓形器台と思われる。口縁部、脚端部には櫛描き平行沈線



第160図 5区 SD 01実測図

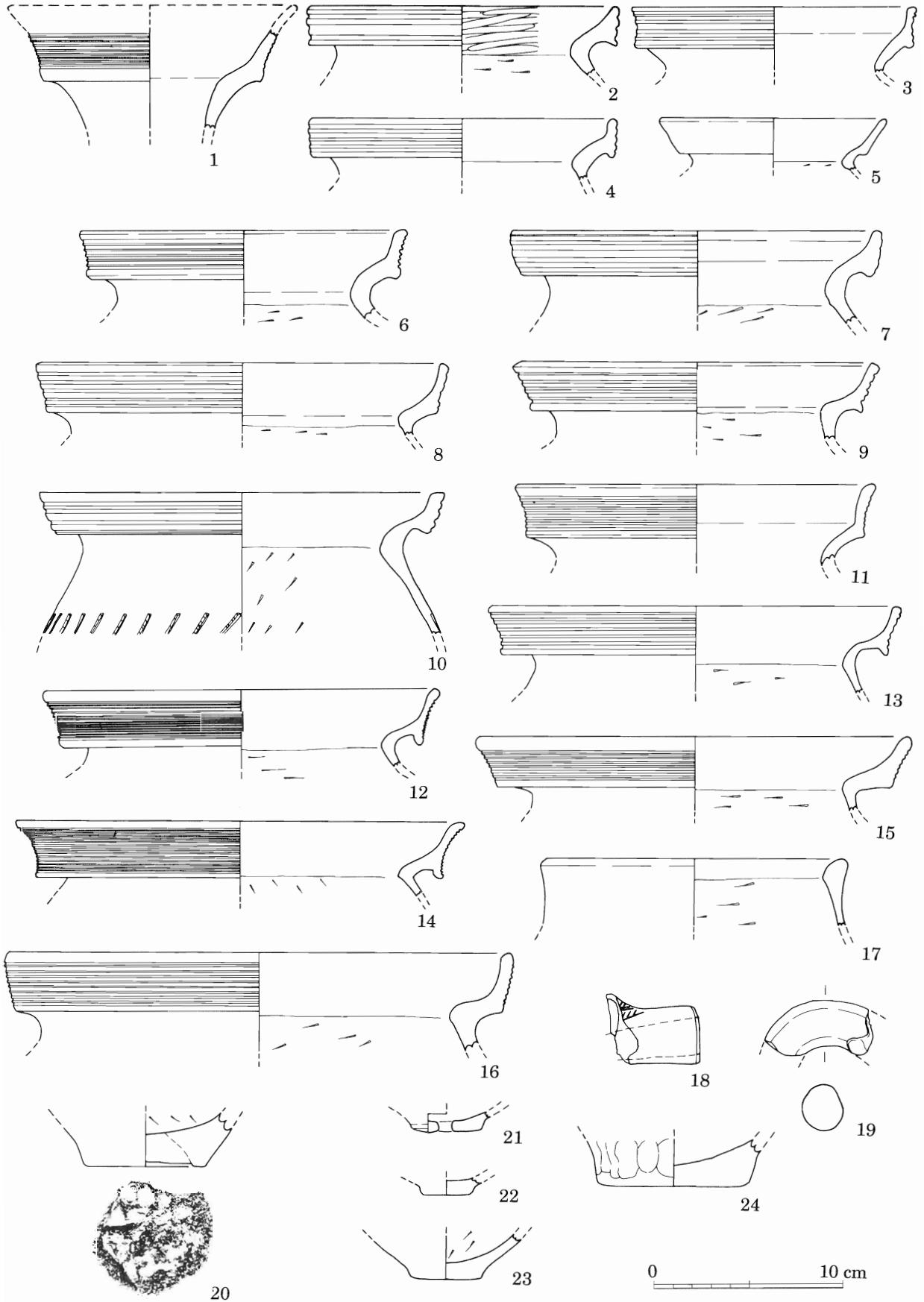
5区遺構に伴わない遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第161図-1	130	弥生壺		大きく外反する複合口縁	クシ描沈線13条以上	ヨコナデ	弥生V-3様式	
-2	130	弥生甕	口径16.6	直立する複合口縁	擬凹線3条	内面ミガキ・ケズリ	弥生V-2様式	
-3	130	同上	口径14.6	同上	擬凹線5条		同上	
-4		同上	口径16.0	同上	擬凹線4条		同上	
-5		同上	口径11.8	外傾する複合口縁		内面ケズリ	弥生V-2~3様式	
-6	130	同上	口径17.2	同上	クシ描沈線7条	同上	弥生V-2様式	
-7	130	同上	口径19.8	同上	擬凹線4条	同上	同上	
-8	130	同上	口径21.2	同上	クシ描沈線?5条	同上	同上	
-9		同上	口径19.3	同上	同上	同上	同上	
-10		同上	口径20.6	同上	擬凹線4条 クシ刺突	同上	同上	
-11	130	同上	口径18.8	外反する複合口縁	クシ描沈線文7条以上		同上	
-12	130	同上	口径20.5	同上	クシ描沈線13条	内面ケズリ	弥生V-2~3様式	
-13		同上	口径21.8	外傾する複合口縁	クシ描沈線6条	同上	同上	
-14	130	同上	口径24.0	外反する複合口縁	クシ描沈線14条	同上	弥生V-3様式	
-15		同上	口径22.8	外傾する複合口縁	クシ描沈線7条	同上	弥生V-2様式	
-16		同上	口径27.0	同上	クシ描沈線9条	同上	同上	
-17		弥生無頸壺	口径15.4	口縁内傾		同上	同上?	
-18	130	弥生注口土器	径2.6		ヘラによる斜線文	同上	弥生後期	
-19		弥生把手	径2.4			ナデ?	同上	
-20	130	弥生底部	底径4.4	わずかに凹み底		内面ケズリ 底面扇状に指圧痕	同上	
-21	130	同上	底径3.8	底部穿孔		内面ケズリ 外面ナデ	同上	
-22		同上	底径2.4			同上	同上	
-23		同上	底径3.8			同上	同上	
-24		同上	底径8.2			外面指押圧痕	同上	

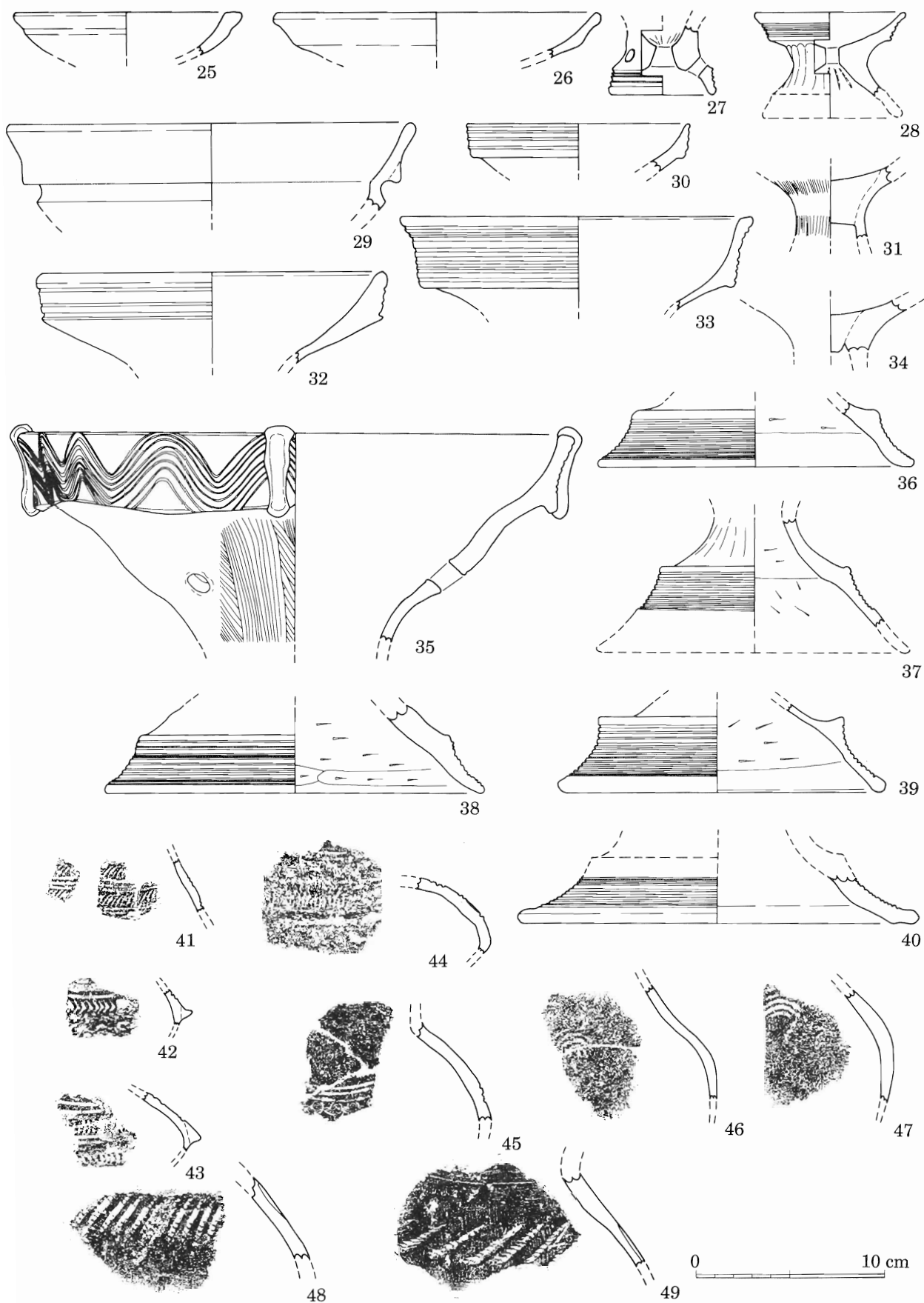
挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第162図 -25		弥生高坏	口径10.05	口縁端平坦		内面ミガキカナデ	同上	
-26		弥生高坏	口径17.0	中央でわずかに屈曲		内面ケズリ様に砂が動く	同上	
-27	130	同上	底径5.4	2方に円孔	クシ沈線4条	ヨコナデ	弥生V-2様式	
-28		同上	口径8.2		同上	筒部ミガキ	同上	
-29	130	弥生高坏	口径21.6	肩部に鋭く稜			弥生V-3様式?	
-30	130	弥生器台	口径12.0	口縁直立	擬凹線4条		弥生V-2様式	
-31		弥生高坏				外面ハケ目	弥生後期	
-32		弥生器台	口径18.3	口縁直立	擬凹線3条	内面ミガキ?	弥生V-2様式	
-33	130	同上	口径19.2	口縁外反端部平坦	クシ沈線8条	内面ミガキ?	弥生V-2~3様式	
-34	130	弥生高坏				内外面ミガキ	弥生後期	
-35	131	弥生器台	口径23.3	直立気味の口縁受部大きく開かる円孔あり	クシ描波状文(10条)垂下浮文	外面ハケ目	同上	
-36	130	同上	底径16.6	脚部外反	クシ描沈線12条	内面ケズリ	弥生V-2様式	
-37		同上		同上	クシ描沈線9条以上	内面ケズリ 外面ミガキ	同上	
-38		同上	底径20.4	同上	クシ描沈線12条	内面ケズリ	同上	
-39		同上	底径21.4	同上	クシ描沈線12条	内面ケズリ	同上	
-40		同上	底径21.5	同上	クシ描沈線12条		同上	
-41	131	弥生			クシ描沈線 爪形の刺突文		弥生後期	
-42	131	弥生壺		算盤玉状の胴部	突帯文、羽状文	ナデ	同上	
-43	131	同上		同上	同上	ナデ	同上	
-44	131	同上		同上	爪形文	ナデ	同上	
-45	131	同上			沈線文 渦状スタンプ文	ナデ	同上	
-46	131	同上			クシによる連弧文	内面ケズリ	同上	
-47	131	同上			同上	同上	同上	
-48	131	弥生			クシ刺突文	同上	同上	
-49	131	同上			同上	同上	同上	

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第162図 -50	135	土師器 支脚	底径12.6	底部凹み底		ケズリ? (工具痕残る)		
-51		土師器 甕	口径30.0	短く外反				
-52		同上	口径17.1	直立気味に外反				
-53		土師器 ミニチュア	口径5.7	椀形		手捏ね	古墳?	
-54		土師器 高坏	底径6.4	短く開く		内面ハケ目	古墳?	
-55	132 133	須恵器 蓋	口径6.8 器高3.4	稜は2条の沈線による 内面に段		回転ケズリ	蓋 A 4 4期	
-56	133	須恵器 蓋	口径14.5	突線状の稜		回転ケズリ	蓋 A 4~5 4期	
-57	132 133	須恵器 坏	口径10.8 器高4.0	たちあがり内傾		回転ケズリ	坏 A 4~5 4期	
-58		須恵器 坏	口径10.1	たちあがり短く内傾			坏 A 8 6期	
-59		須恵器 高坏脚部		長脚	方形透し		長脚無蓋 A 2? 3期?	
-60		須恵器 高坏		椀形の坏部	2方透し		低脚無蓋 A 6 6期	
-61		須恵器 蓋	口径14.6	内面かえり		回転ケズリ	蓋 B 1 7期	
-62	133	須恵器 蓋		輪状つまみ		回転ケズリ	蓋 B 1~ 2 7~8期	
-63	133	須恵器 蓋		同上		ヘラ切り+ 回転ケズリ	蓋 B 1~2 7期	
-64		須恵器 蓋	口径17.0	端部屈曲			8~9C'	
-65	132	須恵器 坏	口径15.7 底径8.6 器高4.9	口縁内湾 高台高い		ヘラ切り?	坏 B 1 7期	
-66		須恵器 坏	口径14.4	同上			同上	
-67		須恵器 坏	口径15.0 底径7.8 器高5.1	同上		ヘラ切り+ナデ	同上	
-68	132	須恵器 坏	口径16.0 底径10.4 器高5.9	口縁直線的 低い高台		回転糸切	8~9C'	
-69	132	須恵器 坏	口径15.8 底径10.6 器高5.9	同上		同上	同上	
-70	132	須恵器 坏	口径12.8 底径8.1 器高3.7	口縁くびれる		同上	同上	
-71		須恵器 坏	口径12.0 底径5.0 器高4.2	同上		同上	同上	
-72		須恵器 坏	口径16.0	同上			同上	
-73		須恵器 坏	口径16.8 底径10.8 器高3.6	同上		回転糸切	同上	
164 図 -74		須恵器 坏	口径17.0 底径9.2 器高5.5	同上		同上	同上	

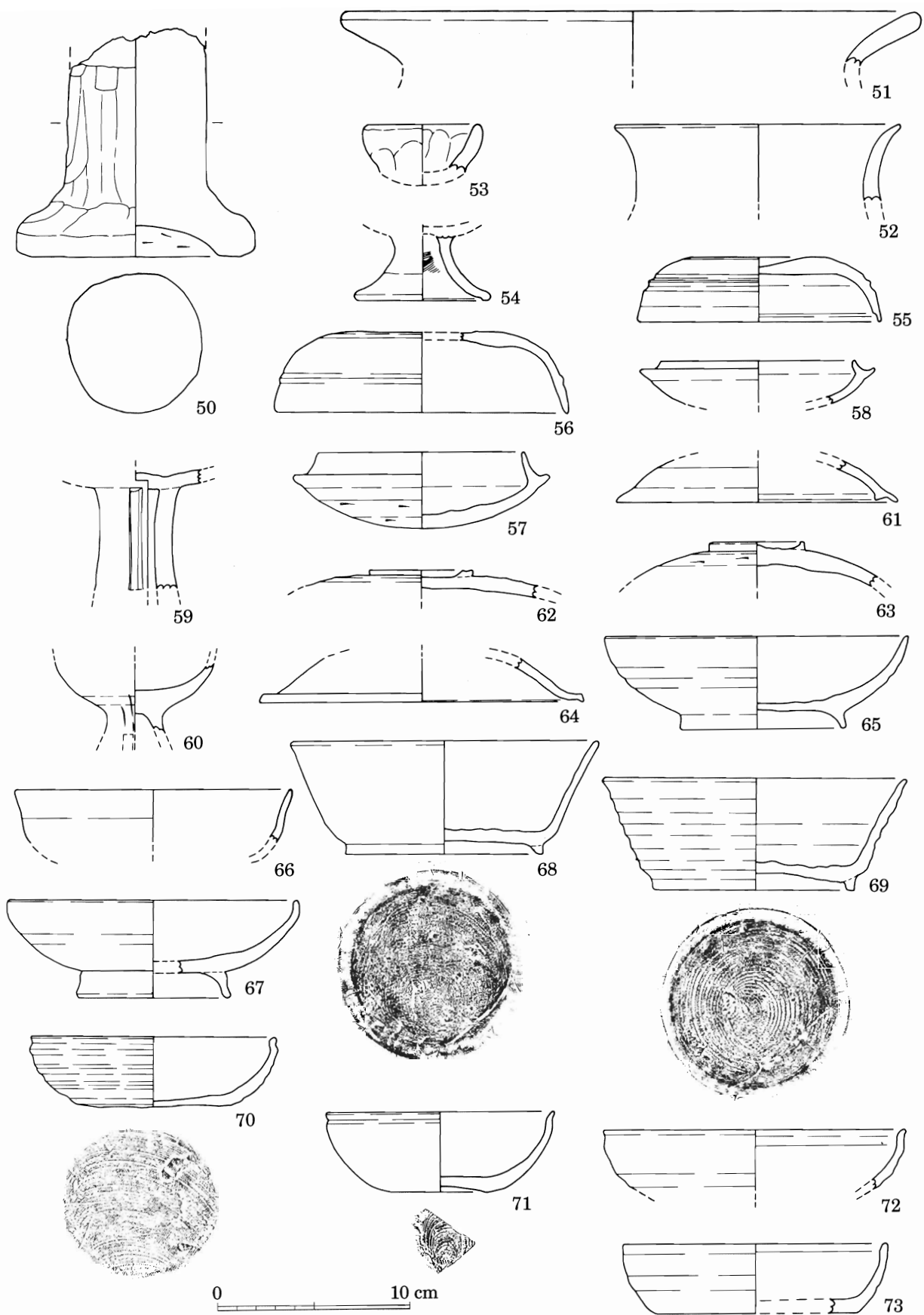
挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
164 図 -75	132	須恵器 皿	口径17.0 底径10.5 器高3.4	口縁大きく開く 高台高い		同上	同上	
-76		須恵器 皿	口径10.6	体部丸い			同上	
-77	132	同上	口径9.3 底径5.9 器高2.8	口縁外反		回転糸切	9 C'	
-78		須恵器 直口壺	口径10.6	肩張る				
-79	133	須恵器 長頸壺		肩張る	沈線	頸部接合痕明瞭	長頸壺3 6B期	
-80		須恵器 鉢?				外面平行叩 内面ナデ		
-81		須恵器 甌か鉢				同上		
-82		須恵器 甌か鉢				同上		
-83		須恵器 短頸壺	口径11.2	肩強く張る				葉壺形
-84		須恵器 甕	口径20.0	口縁端わずかに段		内面同心円状当具痕		
-85		須恵器 甕	口径27.8	同上		外面平行叩 内面同心円当具痕		
-86		陶器 壺	口径4.3 底径4.2 高さ8.2	円筒形。 玉縁状の口縁		回転糸切 素焼き	江戸	「神惣次郎」 「☆」の墨書
-87		土師器 皿	口径9.2 底径5.2 器高1.7	口縁内湾		同上	江戸	
-88	135	砥石?	最大長5.7 最大巾4.2 最大厚2.7			粗い擦痕		
-89	135	土製品		靴形		押による押圧		
-90		磨製石斧	最大長8.0 最大巾4.6 最大厚3.3					
165 図 -91	134	五輪塔	長23.3 巾17.3					白色 凝灰岩?



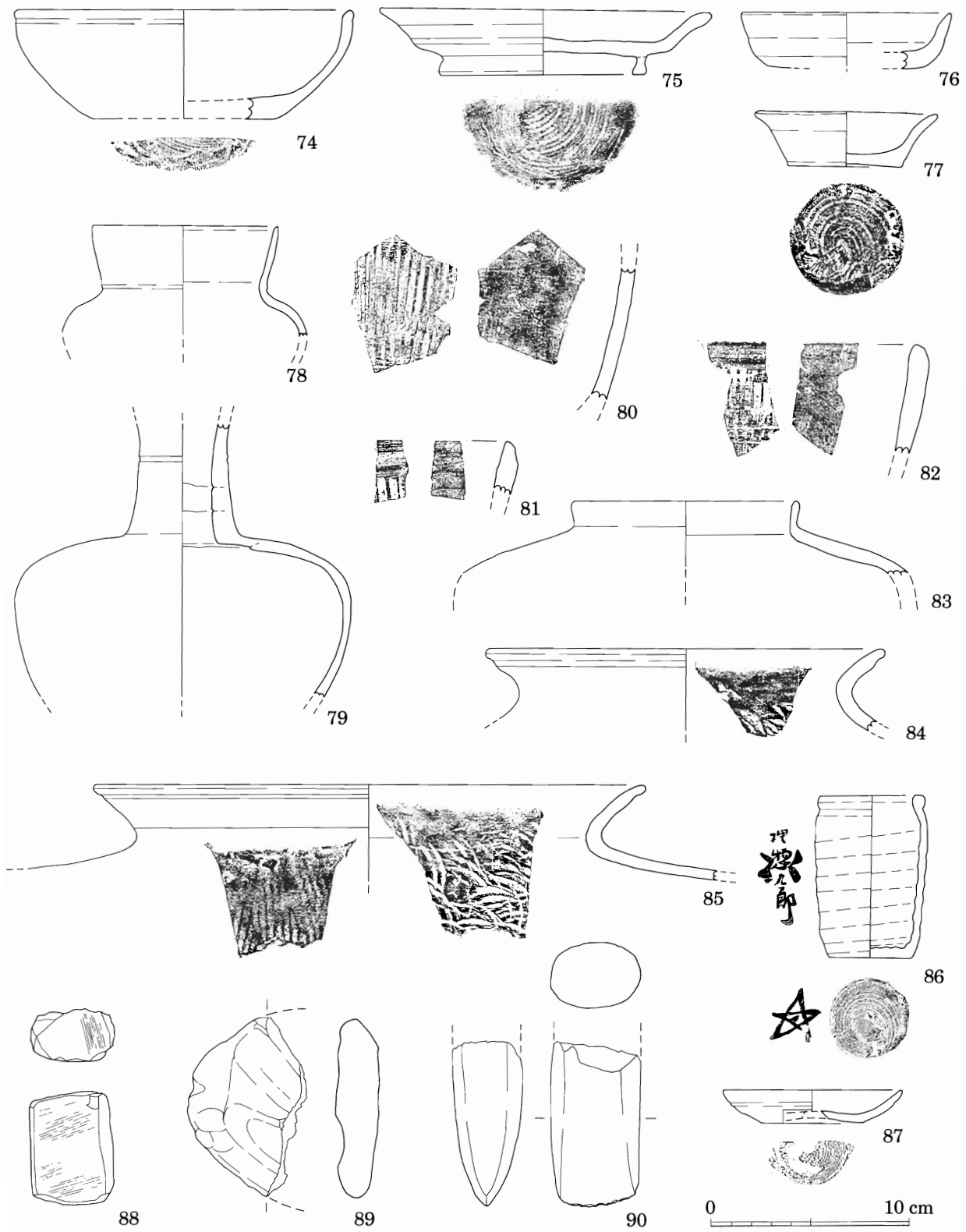
第161图 5区南東斜面出土遺物 (1) 1:3



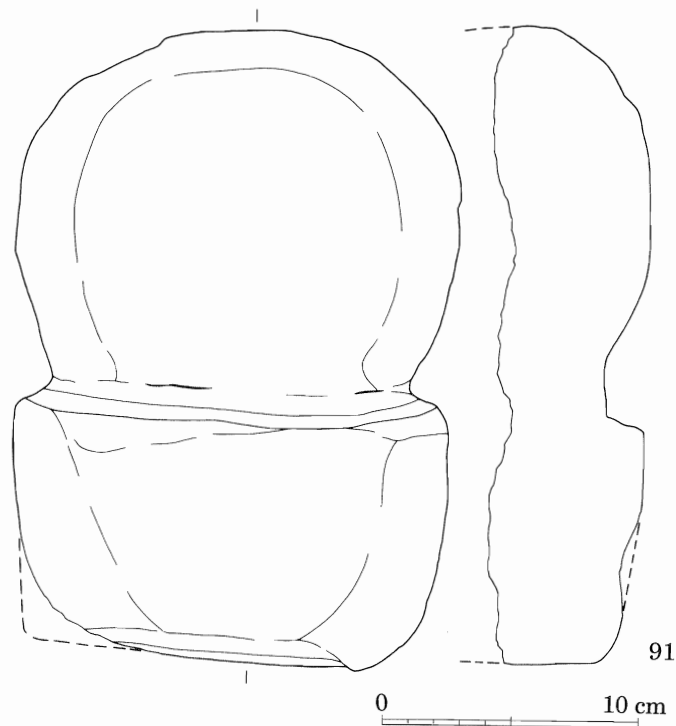
第162图 5区南東斜面出土遺物(2) 1:3



第163图 5区南東斜面出土遺物 (3) 1:3



第164図 5区南東斜面出土遺物(4) 1:3



第165図 5区南東斜面出土遺物 1:3

文が描かれるものが多いが、32には擬凹線文、35には櫛描き波状文と垂下する浮文が施されている。35の土器は出雲地方にはあまりみられない土器である。この上方は福富Ⅰ遺跡では一番の高所にあたり、遺物の内容から墳丘墓が存在していた可能性がある。

55～59は古墳時代の須恵器で、出雲4期から5期にかけてのものである。また、61～83は7世紀末から9世紀代の須恵器と思われる。上方にはこの時期の遺構が検出されていないので、その出自は不明である。

86は素焼きの無頸小型壺である。胴部には「神(?)惣次郎」、底部には「☆」の墨書がある。焼き物としては近世のものと思われ、胞衣壺として使われたものであろうか。

3. 小 結

5区では弥生時代、古墳時代の住居跡、古墳時代後期の土壙墓、平安時代の土壙墓、近世の土壙墓、落とし穴状遺構などが検出された。

弥生時代の竪穴住居跡は5棟検出された。これらは若干の時期差があるものの、ほぼ出雲・隠岐V-2様式の範疇にまとめられ、同時期の集落と考えられる。ここでの在り方は各住居跡が集中せずに散村的であることが特徴である。SI 04と SI 05は近くに作られているが、それ以外は約30 mの間を置いて作られている。近くでは7区や8区でもこの時期の竪穴住居跡が検出

されているが、やはり散在的である。福富丘陵ではこれ以外に同時期の住居跡は検出されていないので、弥生時代の住居は集中した在り方ではなかったと思われる。この状況は近隣では松江市勝負遺跡でも認められる（注1）。一方、住居跡が密集している遺跡もあるので、この時期には2つの集落形態があったのかもしれない。ただ、密集しているようにみえても実際には建て替えによって、住居の密集が見かけであることもあるので、さらに検討が必要である。

これらの竪穴住居跡は遺物からみるとV-2様式の土器しか出土していない。また、建て替えの痕跡もSI 05でしか認められなかった。つまりこれらは極めて短い期間だけの集落で、この後古墳時代後期になるまでここでは集落が営まれない。古墳時代に至っても、7世紀前半の極めて短期間の集落で（SI 07～09、11）、全時代を通じて5区は集落としては栄えなかったようである。

集落に比べ、5区で特徴的なのは土壙墓であった。ここでは古墳時代後期、平安時代から中世、近世の3時期にわたって土壙墓が築かれている。古墳時代後期の土壙墓は西南斜面に集中しており、大きく西部群（SK 01～6）と東部群（SK 07～13）の2つに分けられる。2つの集団の墓域としていたのであろうか。平安時代～中世、近世の土壙墓は丘陵頂部に築かれているが、とくにめだつた分布はしていない。

このように5区では集落の衰退と機を一にして、土壙墓が多く作られるようになる。いまのところ古墳時代以降連続して土壙墓が作られた形跡はないが、ここは墓地として意識されたのではなかろうか。とすれば、SI 07～09、SI 11が一般的な住居跡ではない可能性も出てくる。

なお、古墳時代後期の土壙墓は島根県では発見例が少なく、これほど多く検出されたことはない。もしこのような埋葬の在り方が当地で普遍的であるなら、ここに埋葬された人々は階層的には横穴墓にも入れなかった一般農民の墓と考えることができる。しかし、後述する屋形1号墳との関連で捉え、横穴式石室の単葬墓化として捉えるなら（注2）、この埋葬が階層的なものではないとする見方もできる。ただ、わずかながらでも同様な土壙墓は6世紀前半からみられることから、以前からの一般的な埋葬方法という考え方も捨て切れない。これも将来の検討が必要であろう。

また、5区の特徴的な遺構としては落とし穴状土壙がある。今回検出できたのは18穴であった。遺物が出土していないために具体的な時期を知ることはできないが、SK 24とSI 01との重複関係からSI 01が新しいことを確認しているので、落とし穴状遺構は少なくとも弥生時代後期（弥生土器出雲・隠岐V-2様式）より古い時期に作られたことになる。また傍証ながら弥生時代遺構の遺物が出土していないことから、縄文時代にさかのぼる可能性も十分ある。これらは丘陵の頂部を挟んで北側緩斜面に作られた群と南側緩斜面に作られた群に分けられる。数としては北側緩斜面のグループが12個と多く、南側緩斜面のグループは5個と少ないうえに南部に集中している。当時の人々がこの獣道を熟知したうえで落とし穴を掘ったことは容易

に想像できるので、この分布が当時の獣道を反映していると考えられる。このようにみるなら、南北の2つの獣道がこの丘陵中央部で合流して西側は一本になったと想像される。

5区の落とし穴状遺構は、2回以上改築したものが6個あり、簡単に廃棄するには惜しいという当時の人々の心情がうかがえる。おそらく、ここは狩猟場としては格好の地であったのではなかろうか。

注1 島根県教育委員会『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ（勝負遺跡）』 1990

注2 松本百合子「横穴式石室の終末（群集墳）」『季刊考古学第45号』 1993

なお弥生土器の年代については正岡陸夫・松本岩雄『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 1992 木耳社、須恵器の年代は大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』 1994 によった。

第8章 6 区

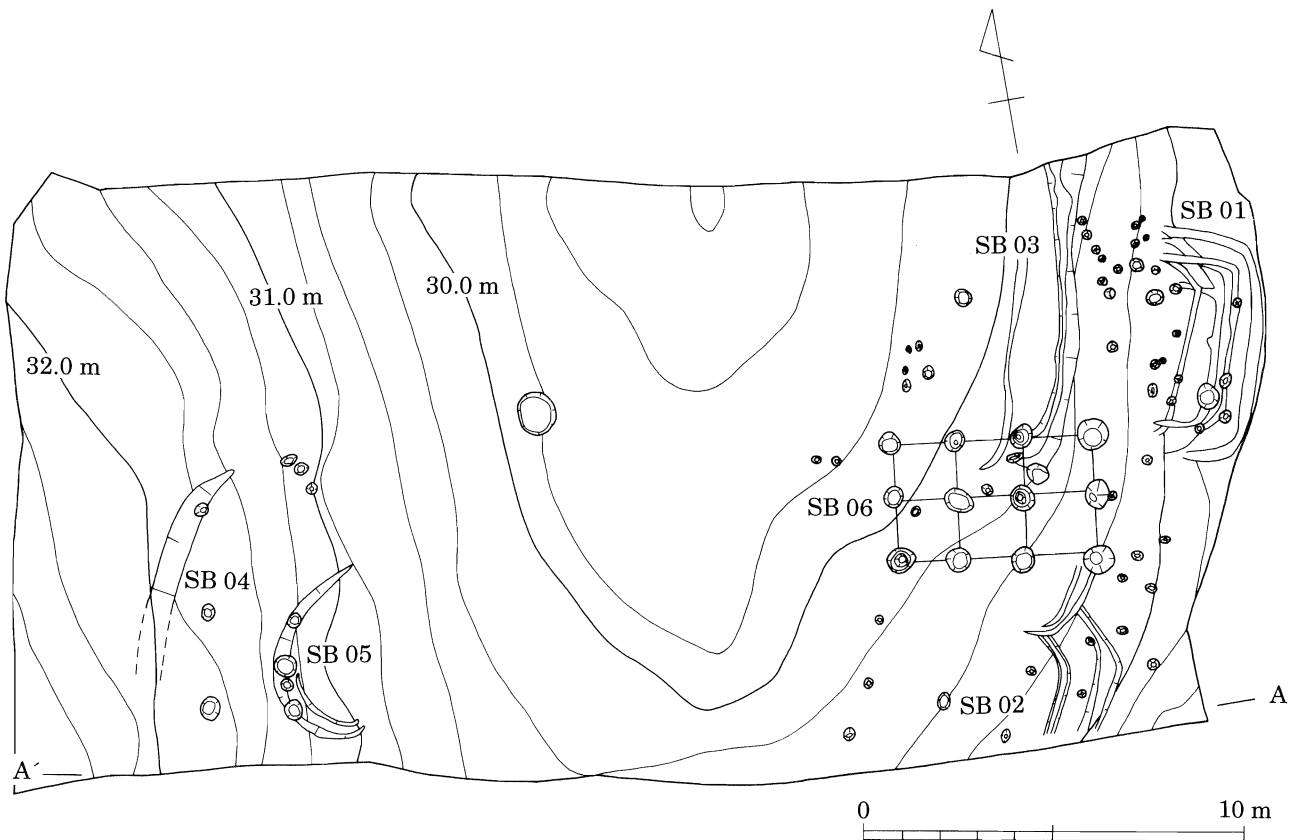
1. 概 要

福富丘陵の最奥部となる（図版136・137）。6区西側は4区の東斜面の続きとなり、中央部は谷底となって東側は再び緩斜面となる。発掘前は比較的なだらかな斜面であったが、これはここが谷底で土砂が厚く堆積していたためである。調査の結果、中央部では厚さ約2mの土の堆積があった。さらに耕作土直下から水が流れたような痕跡が認められ、地山まで達していた。この部分では土がグライ化して灰色を呈していた。ここでは調査時でも湧水があり、以前から流路となっていたことがわかる。

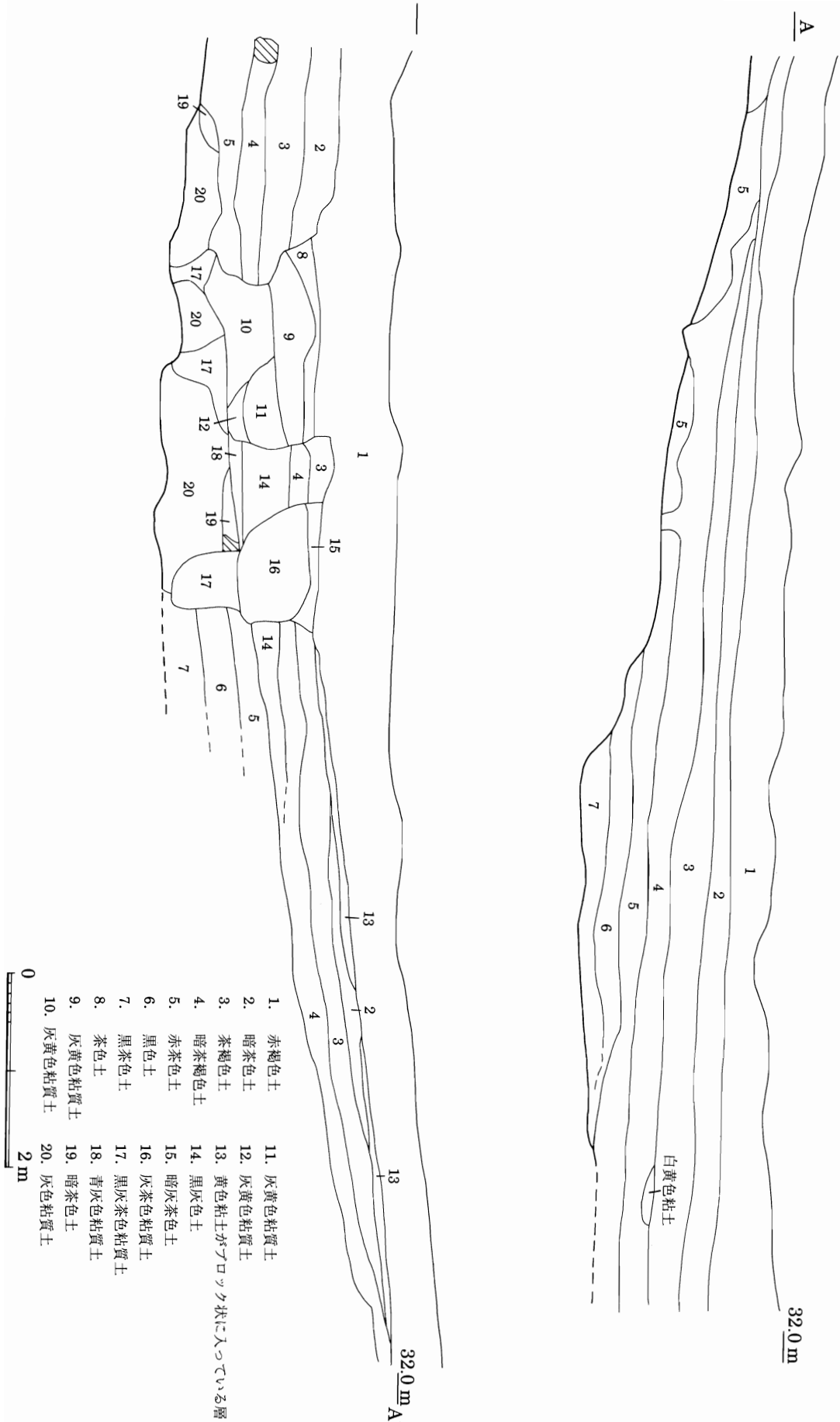
土層は第167図（図版137）に示した順に堆積していた。耕作土直下（第2層）から遺物が大量に出土し始め、第4層まで包含していた。遺構はいずれも第5層上面で検出されたが、掘立柱建物跡（SB 06）は第4層上面から掘り込まれていることが土層の観察から判明した。平面的な観察では3層と4層の区別が付きにくかったので、4層上面での遺構検出は困難であった。

検出遺構は竪穴住居跡（SB 01、02、05）、総柱の掘立柱建物跡（SB 06）、加工段（SB 03）などがある（第166図）。竪穴住居跡としたものは壁帯溝だけが検出できたため、加工段との区別は難しく、とりあえず規模からみて竪穴住居跡と考えた。

遺構検出面である第5層からは黒曜石製剥片、同尖頭器、同石鏃、玉髓製ナイフ形石器が出



第166図 6区遺構配置図 1:200



- | | |
|------------|-----------------------|
| 1. 赤褐色土 | 11. 灰黄色粘質土 |
| 2. 暗茶色土 | 12. 灰黄色粘質土 |
| 3. 茶褐色土 | 13. 黄色粘土がフロック状に入っている層 |
| 4. 暗茶褐色土 | 14. 黒灰色土 |
| 5. 赤茶色土 | 15. 暗灰茶色土 |
| 6. 黒色土 | 16. 灰茶色粘質土 |
| 7. 黒茶色土 | 17. 黒灰茶色粘質土 |
| 8. 茶色土 | 18. 青灰色粘質土 |
| 9. 灰黄色粘質土 | 19. 暗茶色土 |
| 10. 灰黄色粘質土 | 20. 灰色粘質土 |

第167図 6区南壁土層図 1:60

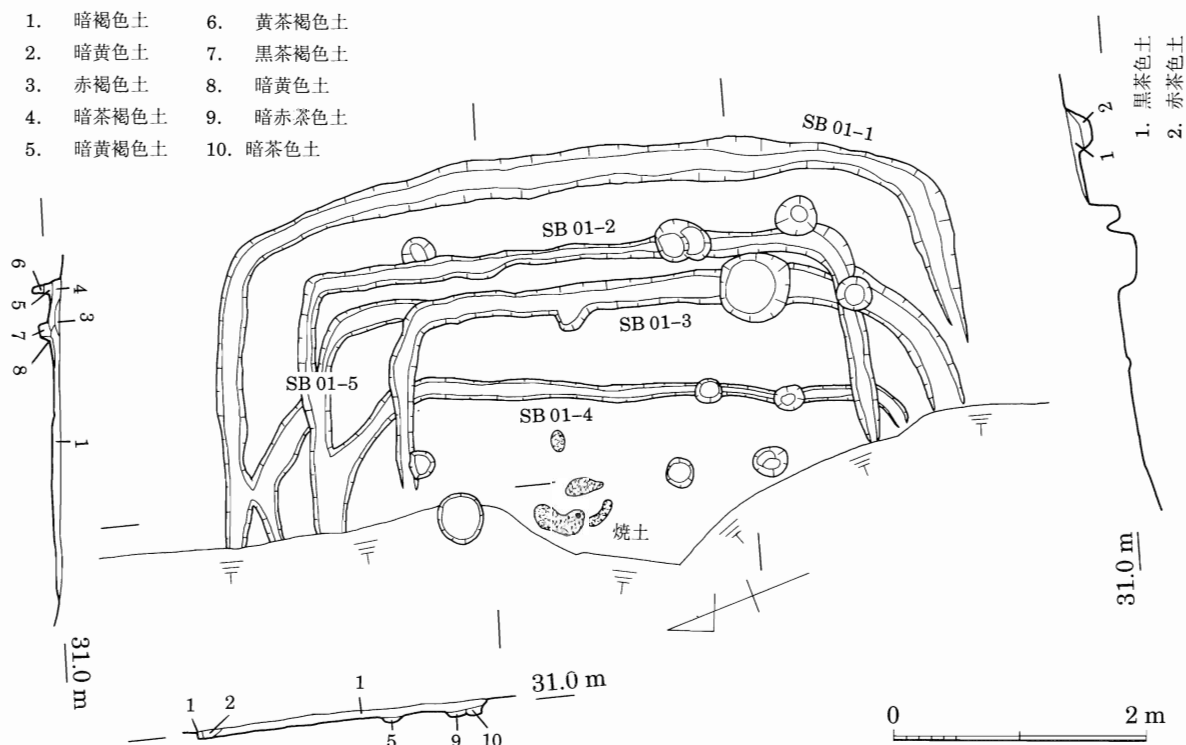
土した。遺構は検出できなかったが、この周囲に縄文時代草創期の集落が存在したと考えられる。

出土遺物で注目されるのは、円面硯、緑釉陶器、土馬などがある。以前採集された唐三彩とともに一般の集落跡では出土しない遺物が出土したことから、官衙的な遺構の存在が予想されたが、今回の調査ではSB 06以外にはそれらしい遺構は確認できなかった。また、包含層からは鉄滓がコンテナ1箱程度出土したことから、時期は不明であるがここで鉄製作の作業がおこなわれたことが判明した。

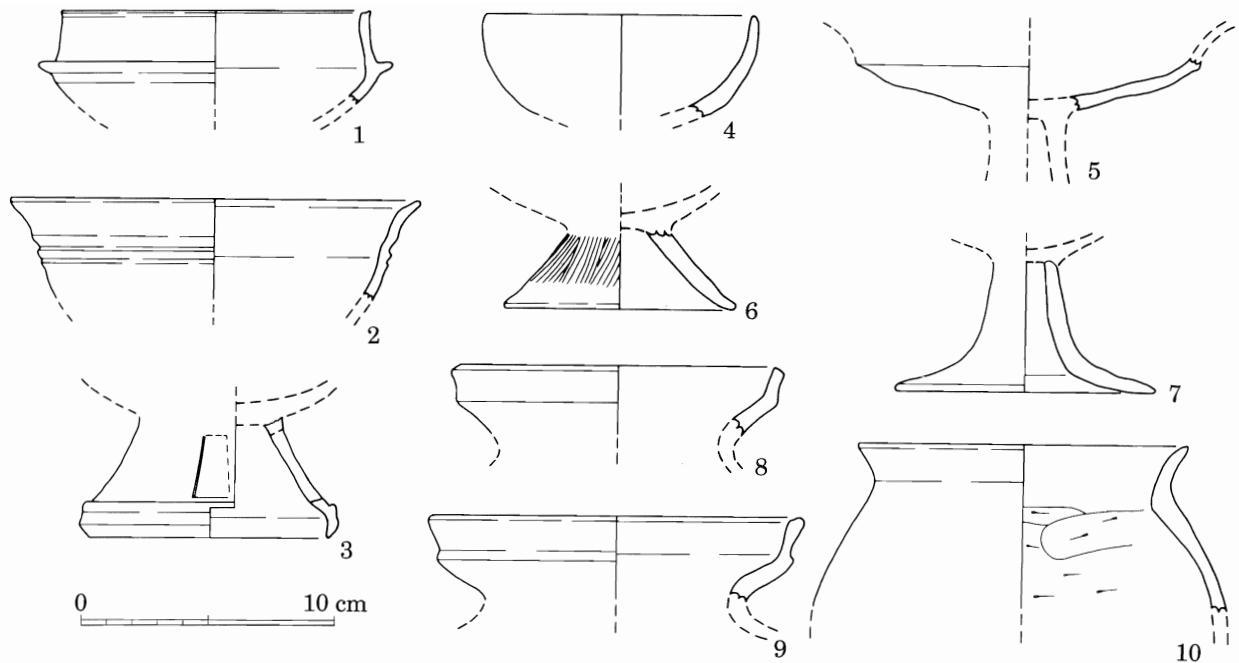
2、検出遺構と遺物

SB 01 (第168図 図版138) 壁はすべて流出しており、壁帯溝だけが検出できた。規模からみるとこれらは竪穴住居跡とも加工段を伴う建物跡とも考えることができるが、プランが比較的整っているのでここでは一応竪穴住居跡と考えた。

壁帯溝は少なくとも5条が重複しているが、その前後関係は把握できなかった。平面形はいずれも弧状に近い「コ」の字形を呈し、それぞれの規模はSB 01-1が南北5.9 m、東西2.4 m、SB 01-2が南北4.4 m、東西2.1 m、SB 01-3が南北4.5 m、東西1.5 m、SB 01-4が南北4.8 m、東西1.3 mである。SB 01-5はSB 01-3の北端からさらに北に伸びるもので、SB 01-5を北に1 mほど拡張したと思われる。溝の幅はいずれも20~30cmであった。ピットは11個検出でき



第168図 6区 SB 01実測図 1:60



第169図 6区 SB 01出土土器 1:3

たが、建物が建つようには並んでいない。床面は傾斜しており、本来の面は流出していると思われるが、中央部分で焼土塊が4箇所検出された。

遺物は須恵器、土師器が出土している（第169図 図版145）。1は須恵器杯、2、3は同高杯である。これらはいずれも出雲1期と考えられる。8、9は複合口縁の甕であるが、屈曲部分はあまり鋭くなく、形骸化した複合口縁である。5、7は高杯で、5が体部中程で屈曲する器形、7が脚の裾が大きく広がる器形である。これらは須恵器が一般化する直前に位置づけられる。10は甕であるが、口縁部は単純口縁で頸部が強く屈曲する。1~3など同時期であろうか。4

6区 SB 01出土土器一覧表

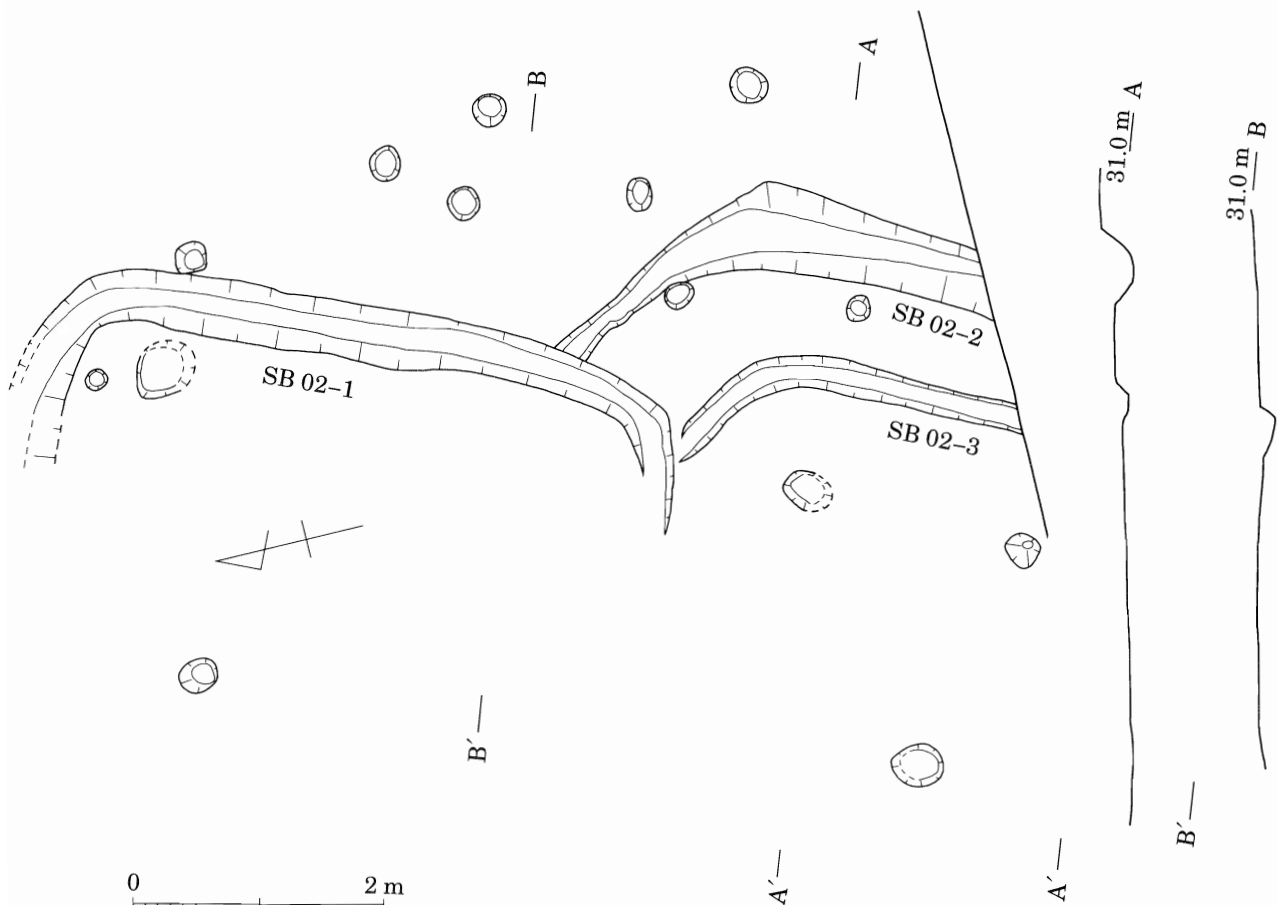
挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第169図-1	145	須恵器杯	口径12.2	口縁直立し長い端部凹面			坏A11期	
-2	145	須恵器高杯	口径16.2	口縁ゆるく外反	突線1条		低脚無蓋A11期	
-3	145	同上	底径9.6	脚端部内側に屈曲	端部突線1条 方形透し(三方)		同上	
-4		土師器高杯	口径10.6	口縁内湾		内面ミガキ?	古墳中期~後期?	
-5		同上		体部中程で段			古墳中期	
-6		同上	底径9.2	「ハ」字形に短く開く		ハケ目	古墳中~後期?	赤色塗彩
-7		同上	底径10.4	脚端部大きく開く		内面ケズリ	古墳中期?	
-8	145	土師器甕	口径12.4	屈曲鈍い複合口縁			古墳中期	
-9	145	同上	口径14.8	同上			同上	
-10	145	同上	口径13.0	口縁「く」字形に屈曲 胴部張る			同上?	

は碗、6は底脚である。詳細な時期は不明であるが、他の土器とさほど変わらない時期と考えられる。

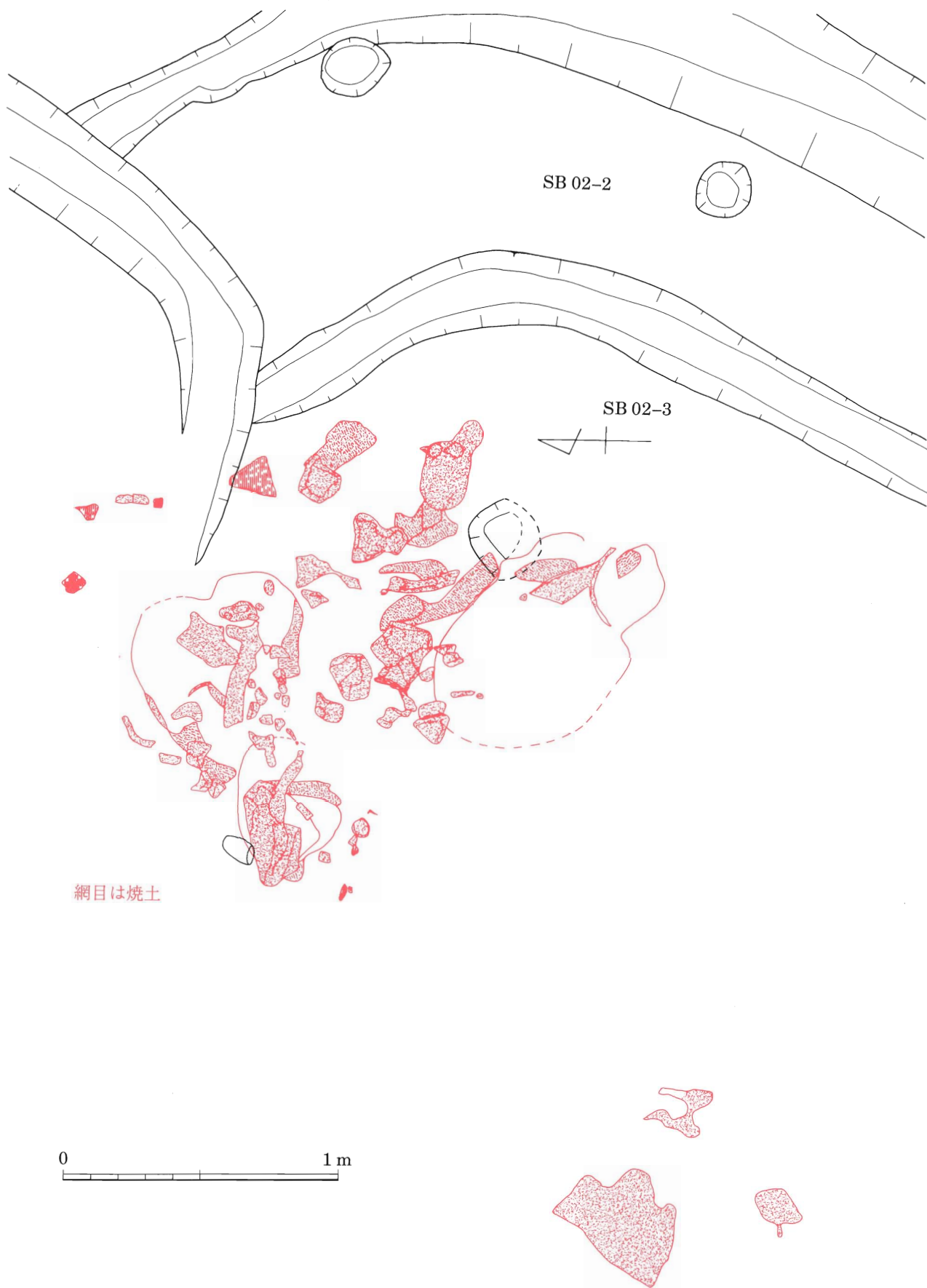
出土遺物から SB 01は須恵器が一般化する直前の時期から出雲1期の須恵器ころまで連続して作られたと思われる。

SB 02 (第170図 図版138・139) 調査区の南東側に位置し、SB 03、06と重複している。SB 01同様、壁帯溝のみが検出された。壁帯溝は3条確認され、住居跡の SB 02-1はほぼ全形が窺えるが、SB 02-2、3は調査区外に伸びているため一部だけを確認した。SB 02-1は平面形が隅丸の「コ」の字形を呈し、検出できた規模は南北5.3 m、幅0.5 mであった。SB 02-2、3は弧状を呈し、それぞれ3.3 m、幅0.6 mと2.7 m、幅0.3 mの範囲で検出できた。床面は本来の面は傾斜しており流出していると思われた。ここでは柱穴が検出できなかった。

遺物は主に壁帯溝から出土した(第172図 図版146)。第172図1~3が SB 02-2、その他が SB 02-1から出土した。須恵器は、短頸壺、蓋坏、高坏、脚、土師器は甕、高坏、碗、鉢などであるが、2つの住居跡の時期的な違いは顕著ではない。15、16が須恵器出現前後の土師器と考えられることから、SB 02-2が SB 02-1より若干古いかもしれない。いずれにしてもほぼ同じ時期に連続して建て替えられたと思われる。



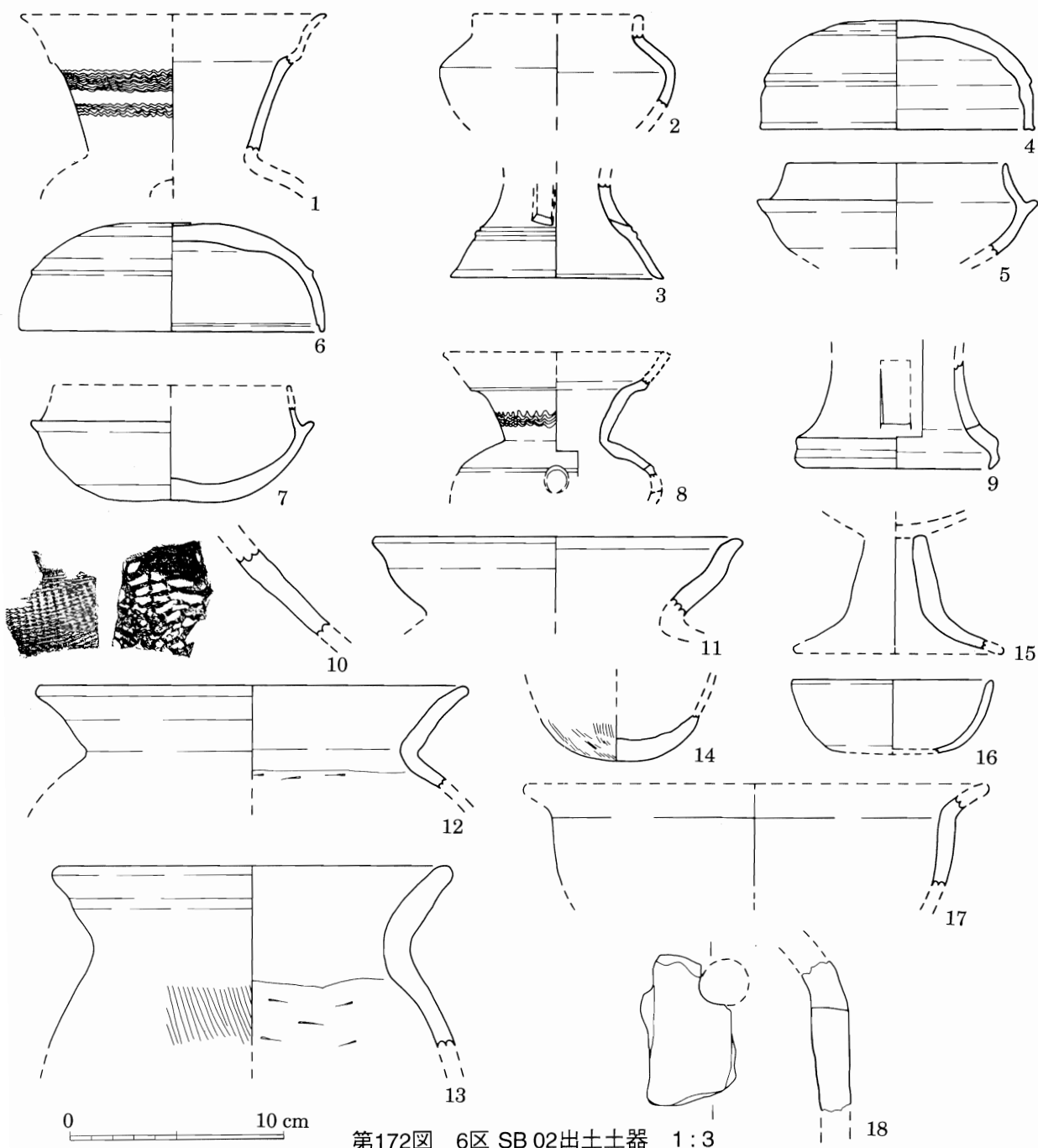
第170図 6区 SB 02実測図 1:60



第171図 6区 SB 02焼土検出状況 1:20

出土遺物のうち3は器壁の薄いものであるが、透かしが入れているやや変わった須恵器である。また、18は円形の透かしをもつ土師器片で、透かし部分で大きくカーブする器種不明の土器である。

SB 02-3は遺物が出土しなかったため年代を判断することができなかった。しかし、これはSB 02-2の床面を掘り下げた時点で確認されたことから、SB 02-1、2より古く位置づけられる。ここでは焼土塊が多量に出土した(第171図 図版139)。焼土塊は非常によく焼けており、土器のように固まっていた。色は赤褐色、黄褐色、青灰色と変化しているものもあり、高温で



焼かれたように感じられた。検出できた範囲は2 m×1.6 m で、出土地点の土も焼けていることから、原位置か原位置に非常に近いと考えられる。この焼土塊は非常によく焼けており、ブロック状を呈すものも多い。これはきわめて異常で、一般住居の炉跡とか焼失時の焼土とは考えられない。この場所で作られた構造物の残片（造り付けの竈とか製鉄炉など）（注1）のように思われた。

ここでは炭化物も出土したため、14 C 年代測定をおこなった（注2）。測定の結果、BC 180 年という測定値が得られた。6区ではこの年代に見合った遺物が出土していないので考古学的には若干の疑問は残るが、この測定値を信用するなら SB 02-3は弥生時代前期末ころの住居跡となる。

（注1） 竈とか製鉄炉の残片ではないという意見が多い。「例え」として上げておく。

（注2） 14C 年代測定は（株）地球科学研究所に依頼した。14C 年代測定値は2180±60年 BP、13C（13C/12C 比を補正するための13C/12C 比）は-27.2、それによる補正14C 年代は2150±60 BP。既に年代が明らかになっている樹木年輪の14C 測定値によって作成された補正曲線で算出された暦年代は BC 180年であるという。

SB 03（第173図 図版140） SB 01のやや下方に位置する、長さ約12 m の加工段状の住居跡である。壁沿いには幅約8.4cmの壁帯溝が設けられ（SB 03-1）、約1 m の間隔をおいて別の壁帯溝が作られている（SB 03-3）。SB 03-1は南端から約6 m の地点で北側の壁が若干向きを変えており、壁帯溝もこの部分で非連続的になる。このことから SB 03-1の北に続く壁は別の住居跡（SB 03-2）が重複していると考えられる。これは後述する遺物の時期からみて

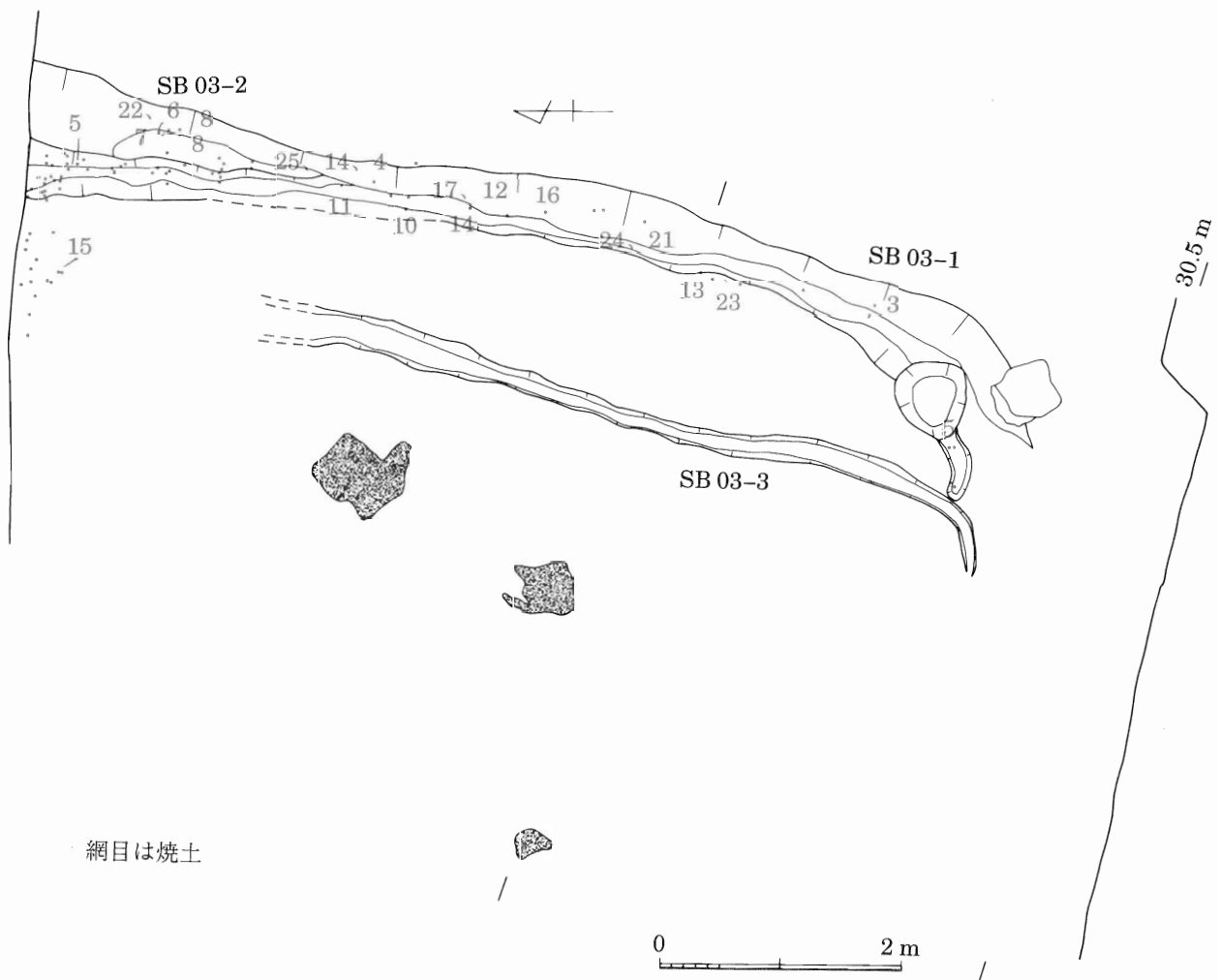
6区 SB 02出土土器一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第172図-1	145	須恵器 瓦			クシ波状文2段		A 1 1期	
-2		須恵器 短頸壺	最大径11	肩強く張る			1期?	
-3	145	須恵器 脚	底径10	端部平坦面	方形透し 沈線2条		1期?	小型の器種
-4	145 ~ 146	須恵器 蓋	口径12 高5.2	稜明瞭。端部凹面		回転ケズリ	蓋 A 1 1期	ろくろ右回転
-5	145	須恵器 坏	口径10.4	口縁やや内傾		同上	蓋 A 1 1期	
-6	145 ~ 146	須恵器 蓋	口径14.4 高5.1	稜明瞭。 内面に段		回転ケズリ	同上	
-7	145	須恵器 坏				同上	同上	
-8	145	須恵器 瓦		頸部短く、胴強く張る	クシ波状文 段		A 1 1期	
-9	145	須恵器 高坏	底径9	端部内側に屈曲	方形透し		低脚無 蓋	
-10	146	須恵器 甕?				内面車輪状当具痕	A 1 1期	
-11	146	須恵器 甕	口径17.4	形骸化した複合口縁			古墳中 期	
-12	146	同上	口径20.4	頸部「く」字に強く 屈曲		内面ケズリ		
-13	146	同上	口径18.8	同上		外面ハケ目 内面ケズリ		
-14	146	土師器		丸底		同上		小型の甕?
-15		土師器 高坏		脚端部大きく開く		内面ケズリ	古墳中 期	
-16		土師器 坏	口径9.4	平底		ヨコナデ		
-17	146	須恵器 鉢?		口縁短く屈曲 胴部張らない		回転ナデ		
-18	146	土師器		大きなカーブ?	円形透し	ナデ		底部か?

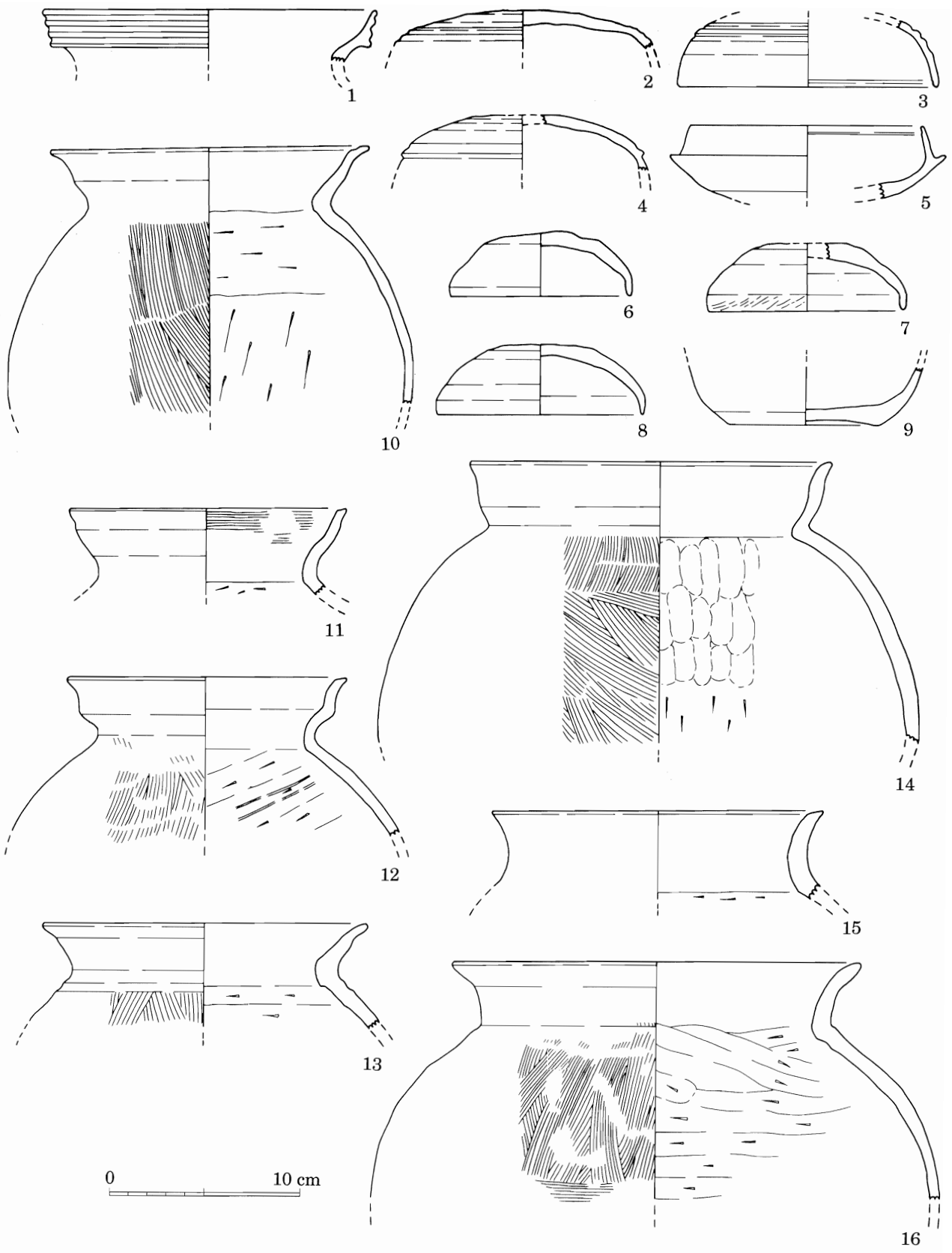
も整合する。

検出できた規模は SB 03-1が長さ約6 m、壁帯溝の幅約10cm、SB 03-2が長さ約6 m、壁帯溝の幅約60cm（北は調査区外に伸びる）、SB 03-3が長さ約6 m、幅約10cmである。床面は緩やかに傾斜しており、本来の面を保っていないと思われた。また SB 03-3の壁帯溝から約80 cm西では地山面で50～60cmの焼土が2カ所で検出された。これがどちらの住居跡に伴うのかは判断できなかった。ここでは柱穴は検出できず、どのような建物が建っていたかは不明である。

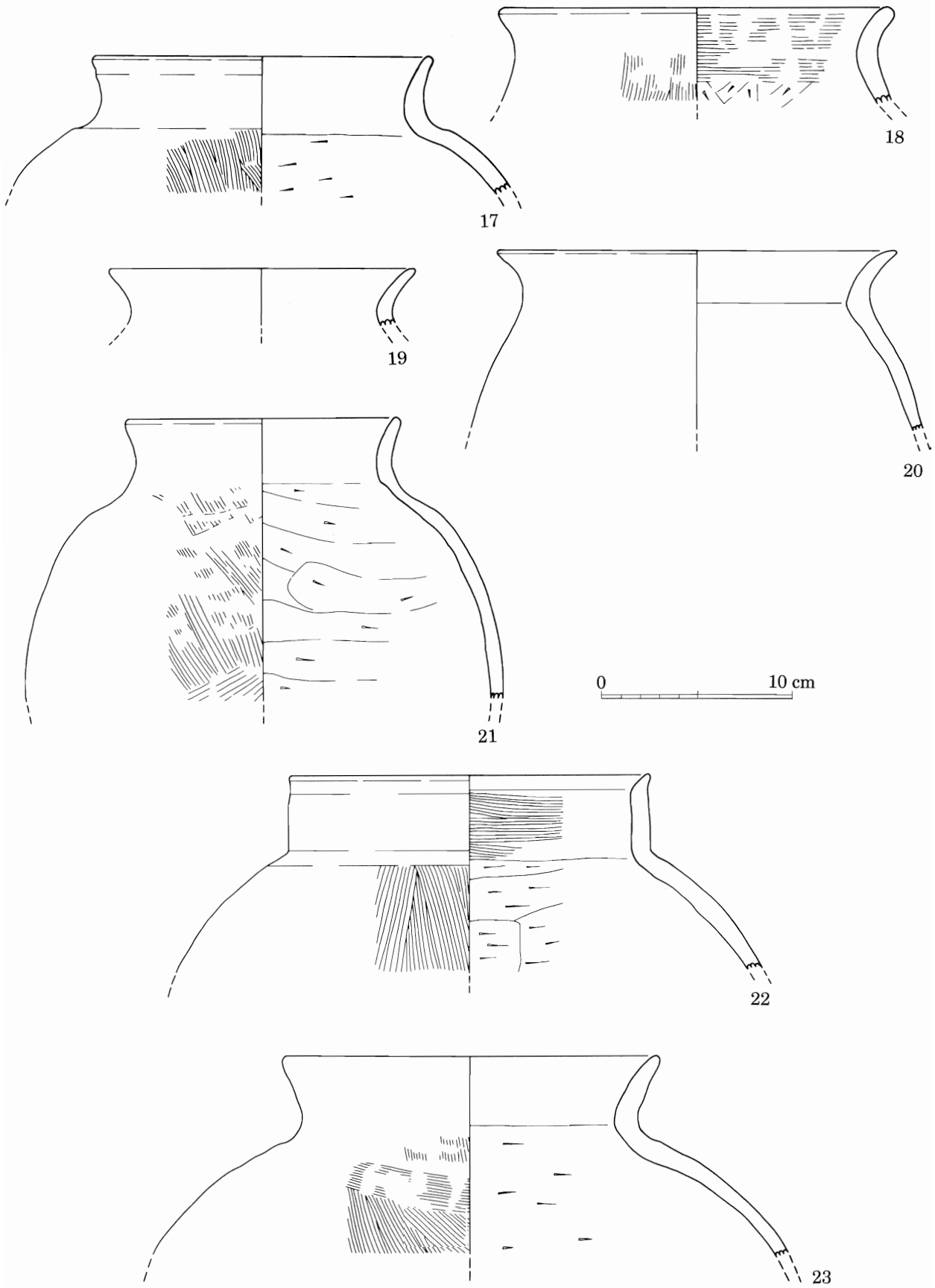
遺物は SB 03-1、2の壁際から出土した（第173図 図版140）。SB 03-1では比較的まとまった資料が得られたが、SB 03-2では概して小片が多かった。出土地点の明らかなものでは、第174図4、10～16、第175図17、21、23、第176図24、25が SB 03-1から出土した。4は須恵器蓋である。稜がしっかりと作り出されており、天井部の削りも丁寧で、出雲1期と考えられる。その他は土師器甕である。口縁部が複合口縁の名残を残すもの（10～12、14）と単純に外反するもの（13、15～17、21、23）がある。11、12は比較的複合口縁の痕跡が残るもので、



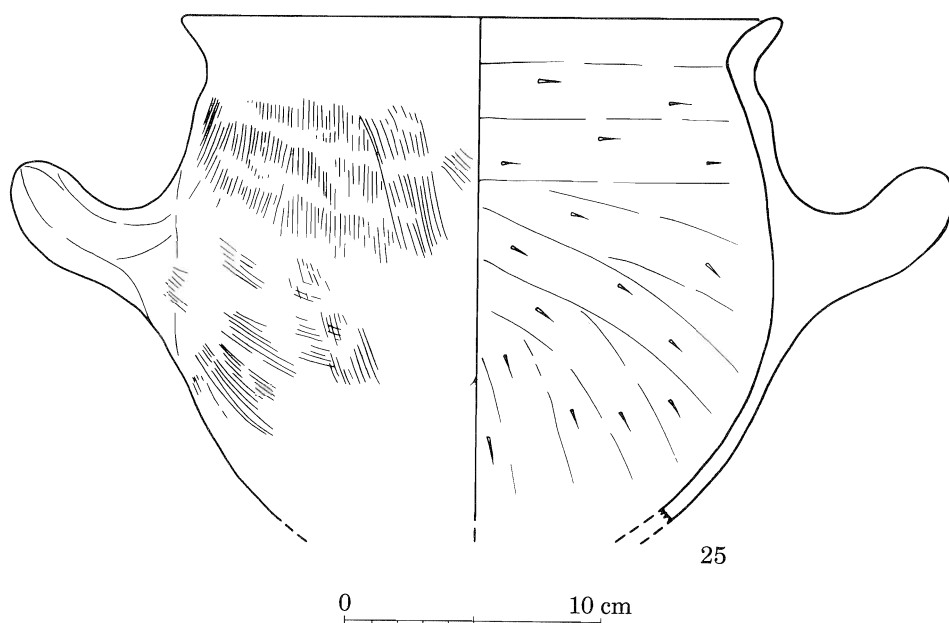
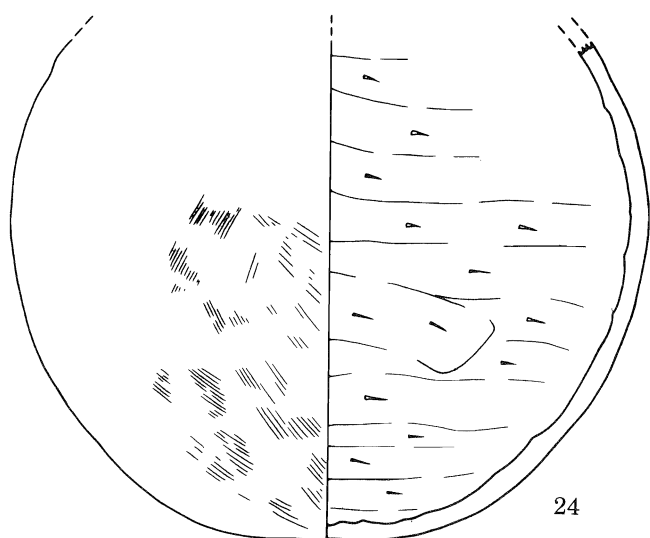
第173図 6区 SB 03実測図 1:60



第174图 6区 SB 03出土土器 (1) 1:3



第175图 6区 SB 03出土土器 (2) 1:3



第176図 6区 SB 03出土土器 (3) 1:3

端部は平坦である。13、15、16は口縁部が比較的強く外反する。17、21、23は直立気味に外反し、反りも弱い。25は把手がつく鍋または甑である。これらの土師器はいずれも肩部が張り、胴部が球形に近い。

SB 03-2からは第174図5~8、第175図22が出土した。このうち6~8は須恵器蓋で、天井部には調整が施されず、口径も10cm未満と小型である。

出土遺物から SB 03-1は須恵器が一般化する直前から出雲1期の時期、SB 03-2が出雲6A期の時期の住居跡と考えられる。SB 03-3は遺物が出土していないので時期ははっきりしないが、

SB 03-1の下層から検出されたことから考えてこれより古いと思われる。なお、2、9、18~20は出雲1期より新しいと思われるが、いずれも上部から出土しているので混入と思われる。

SB 04 (第177図 図版141) 西斜面中腹に位置する加工段である。南部は調査区外に伸びており、検出できた範囲は8.7 m ほどであった。壁帯溝は明確ではなく、南端で若干が検出できたにとどまる。地山の掘削は幅約2.7 m におよび、東側は土を盛って床としていたようである。ピットは10個ほど検出でき、柱穴と考えられるピットは P 1~3である。これらはほぼ2.7 m の間隔で配されている。貼床の部分では径30cmほどの焼土が検出された。これは非常によく焼けており、小鉄片などが出土したことから、鍛冶炉と考えられた。

遺物が出土していないが SB 05の上層に作られていることから、8世紀以降の住居跡と考え

6区 SB 03出土土器一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第174図 -1	148	弥生甕	口径17.4	複合口縁	擬凹線3条	ヨコナデ	弥生V-2	
-2	148	須恵器蓋		稜不明瞭		回転ケズリ	蓋 A 3? 3期?	
-3		同上	口径13.8	稜明瞭 内面段		同上	蓋 A 2? 2期?	
-4	148	同上		稜明瞭		同上	蓋 A 1 1期	
-5	148	須恵器 坏	口径12.4	たちあがり高くやや内傾		同上	坏 A 2 2期	
-6	147	須恵器蓋	口径9.6	口縁内側に屈曲		ヘラ切り+ナデ	蓋 A 8 6期	
-7	148	同上	口径10.4高 3.6	同上		同上 口縁にしわ	同上	
-8	147	同上	口径10.8高 3.7	同上		同上	同上	
-9	148	須恵器 坏	底径8	口縁内湾		回転糸切	8~9C'	
-10	146	土師器 甕	口径16.8	口縁 S 字状 胴部球形		外面ハケ目 内面ケズリ		
-11	148	同上	口径14.4	口縁 S 字状 端部平坦		口縁内面ハケ目+ ヨコナデ、以下ケズリ		
-12	148	同上	口径24.4	形骸化した複合口縁 端部平坦、胴部球形		外面ハケ目+ 内面ケズリ		
-13	148 ~ 149	同上	口径16.8	頸部強く屈曲		同上		
-14	146	同上	口径19	口縁直立気味の S 字状、胴部球形		同上、指押圧痕		
-15	149	同上	口径17.2	口縁直立気味に外反		内面ケズリ		
-16	149	同上	口径21.2	頸部強く屈曲 胴部球形		外面ハケ目 内面ケズリ		
第175図 -17	149	同上	口径17.6	口縁直立気味に外反 胴部球形		同上		
-18		同上	口径20.4	口縁外反		外面、口縁内面ハケ目 内面ケズリ		
-19	149	同上	口径16	口縁強く外反		ヨコナデ		
-20		同上	口径20.8	同上 胴部球形		内面ケズリ?		
-21	147	同上	口径14	口縁直立気味に外反 胴部球形		外面ハケ目 内面ケズリ		
-22	148	同上	口径19	口縁直立、端部外反 胴部球形		外面口縁内面 ハケ目、内面ケズリ		
-23	148	同上	口径19.6	口縁外反 胴部球形		外面ハケ目 内面ケズリ		
第176図 -24		同上	最大径25.2	胴部球形		同上		
-25	148	同上	口径23.2	口縁短く外反 胴部球形、把手付		同上		

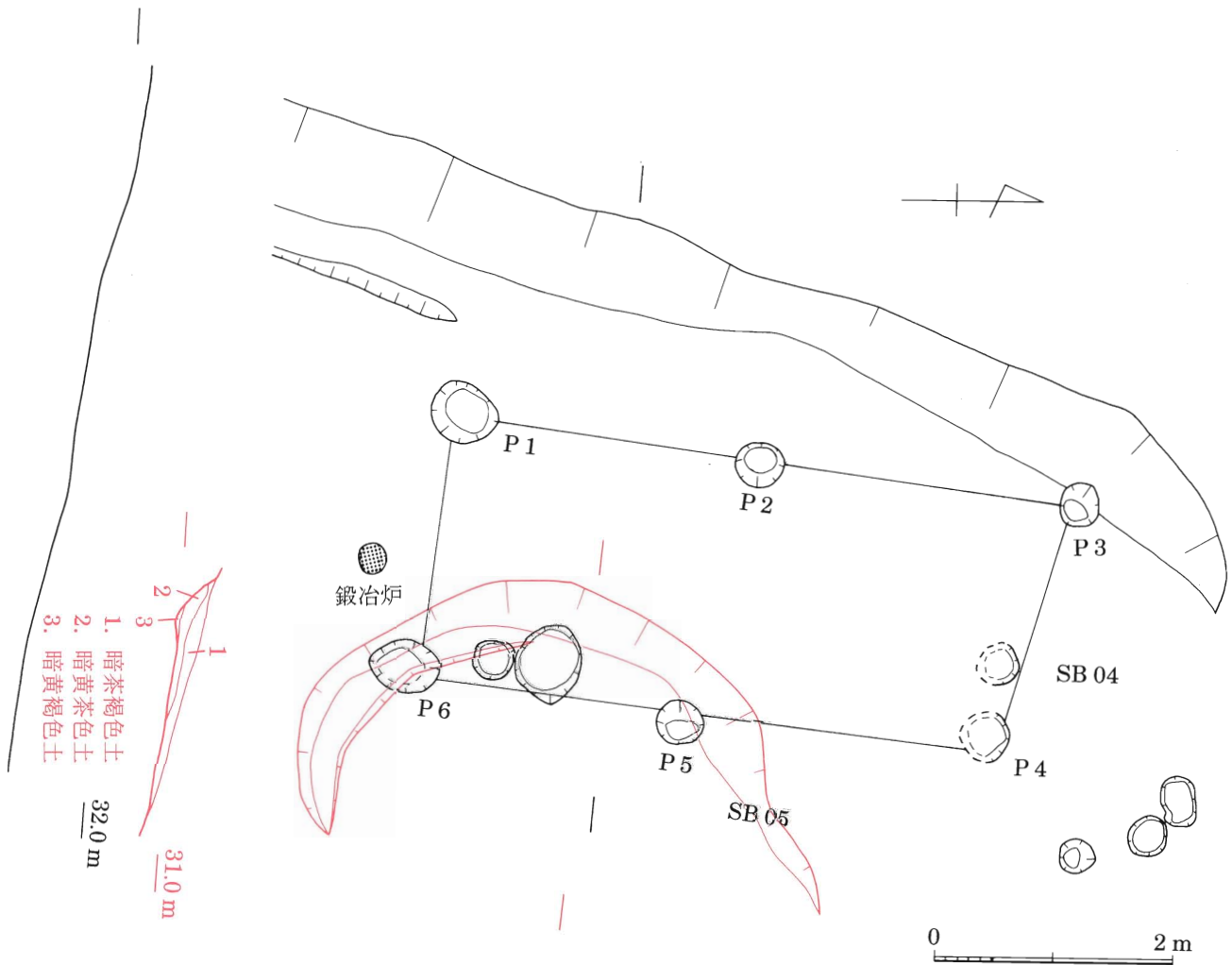
られる。

SB 05 (第177図 図版142) SB 04の貼床を除去後に検出された加工段である。平面形が不整形な半円形を呈し、壁帯溝と思われる浅い溝が南部にみられる。検出できた範囲は南北4.5 m、東西2.4 mである。底面は水平ではなく、ピットも検出できなかったことから、住居跡ではない可能性もある。

ここからは須恵器、土師器が出土した(第178図 図版149・150)。須恵器は出雲6 B 期のものが中心である(第178図1~4、8、11、12)。5は底部に回転糸切り痕が残ることから奈良時代のものと考えられる。土師器は甕(7)、竈(13)がある。

遺物が2時期にわたっているが、総体的には出雲6 B 期のものが多く、SB 05もこのころの遺構と考えたい。

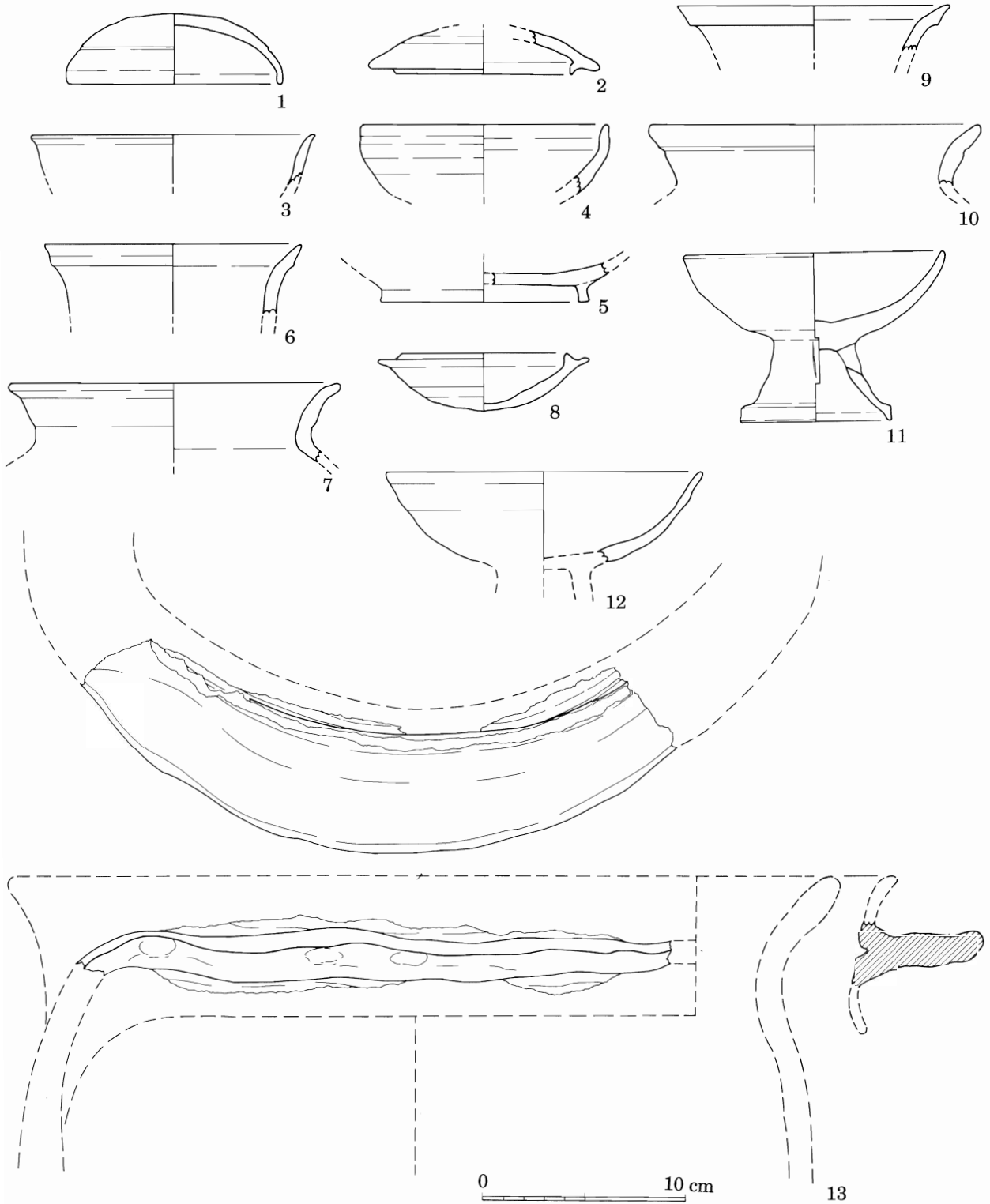
SB 06 (第179図 図版143) 東側斜面の谷底近くの緩斜面で検出された。2×3間の総柱の掘立柱建物跡である。梁行き3 m、桁行き5.4 m の大きな建物で、柱穴も径60cm~90cmと大型である。P 4、6、8~10、12では底面に柱圧痕が残っており、また P 1、4、5、8~10、11、



第177図 6区 SB 04.05実測図 1:60

12では土層観察で柱痕が確認されている。それによると柱は直径20cm前後あったと考えられる。柱間は梁側が1.5 m 間隔、桁側が1.8 m 間隔でそれぞれ等間隔で配されている。

この建物跡は当初他の遺構検出面と同じ赤茶色土層（第167図第5層－第179図では第3層）



第178図 6区 SB 04 (1~7) .05 (8~12) 出土土器 1:3

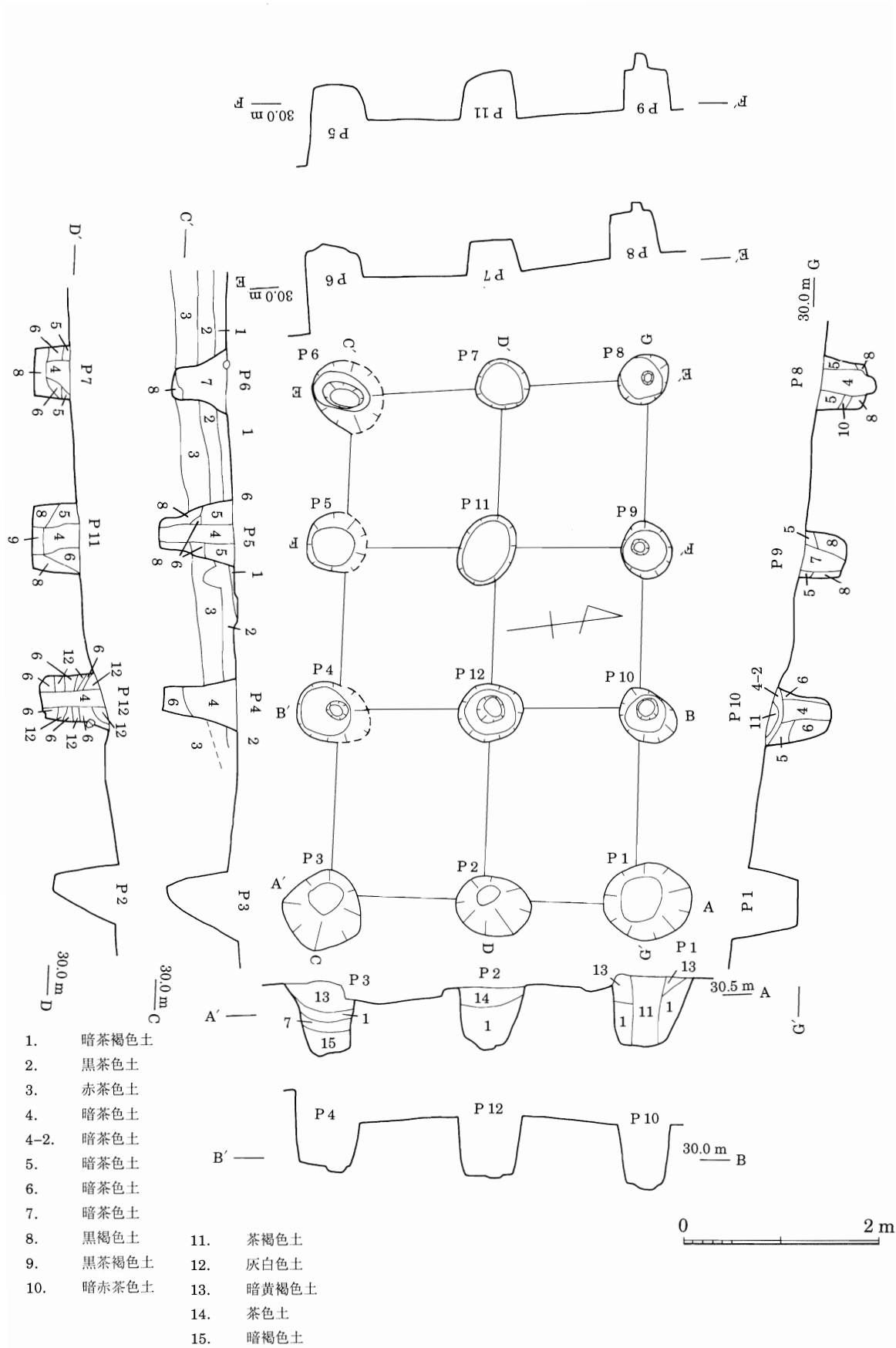
6区 SB 04・05出土土器一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形 態	文 様	調 整 そ の 他	時 期	備 考
第 178 図-1	149	須恵器 蓋	口径10.8 高3.5	浅い沈線による稜		ヘラ切り+ナデ	蓋 A 8 6期	
-2	149	同上	口径8.8	内面かえり		回転ケズリ	蓋 C 6 B 期	
-3		須恵器 坏	口径14	やや外反			坏 B 1~2 7~8期	
-4		須恵器 坏	口径12.4	口縁くびれる			6 B 期	
-5		同上	底径10.4	低い高台 口縁大きく開く		回転糸切	8 ~ 9 C'	
-7	149	須恵器 壺	口径16.4	口縁短く外反	浅い沈線			
-8	149	須恵器 坏	口径10.6 高2.85	たちあがり非常に短い		回転ケズリ	坏 A 8 6期	蓋 C の可能性あり
-9	149	須恵器 壺	口径13.7	口縁端に段				
-10	149	須恵器 壺	口径18.6	口縁外反				
-11	150	須恵器 高坏	口径12.8 底径7.5 高8.5	口縁内湾	線状透し(2方)		低脚無 蓋 A 6 6期	
-12		同上	口径15.8	皿形の口縁				
-13		土師器 壺		焚口の嚮		擬口縁明瞭		

上面から掘り込まれていると考えていたが、P3~P6の位置で偶然土層観察用ベルトを設定しており、この土層観察によって暗茶褐色土（第167図第4層-第179図では第1層）から掘り込まれていることが判明した（図版143）。これにより SB 06は少なくとも SB 02・03よりも新しい時期の建物であることが分かる。具体的な時期は遺物が出土していないので不明である。

6区 SB 06計測表

規 模		梁 行 き			桁 行 き		
		2間 (3.0 m)			3間 (5.4 m)		
主 軸		N-80° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	91×54	78×63	84×84	(66+α)×63	(55+α)×63	(61+α)×75
	深 さ	67	64	85	77	63	57
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
	上面径	54×52	53×52	51×59	60×55	60×72	67×61
	深 さ	36	59	48	67	48	72
柱間距離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7
		1.5	1.5	1.8	1.8	1.8	1.5
		P 7-8	P 8-9	P 9-10	P 10-1	P 5-11	P 7-11
		1.5	1.8	1.8	1.8	1.5	1.8
		P 9-11	P 11-12	P 2-12	P 4-12	P 10-12	
1.5	1.8	1.8	1.5	1.5			



第179图 6区 SB 06 1:60

遺構に伴わない遺物（第180～183図 図版151～153）

第1層から第4層には多くの遺物が含まれていた。須恵器は出雲1期が少数（第180図6、12、14、15、19）で、多くは出雲6期から奈良時代のものであった。

特殊な遺物としては円面硯（第182図30）、緑釉陶器（同図31）、土馬（同図32～34）である。円面硯は復元径17cmの大型の硯である。上面は非常に滑らかで、明らかに使用されているようであった。緑釉陶器は底径6.8cmを測り、低い高台を付け内面には1条の沈線がめぐる。須恵器質の胎土で京都付近が産地ではないかと思われる。土馬はいずれも欠損している。32が現存長3.6cmを測る小型の土馬、33が現存長7cmを測る大型の土馬である。ともに目、鼻、口、耳、たてがみが表現されているが、馬具は表現されていない。首部は32がやや太い感じを受けるが、33は偏平である。32の頭部には「×」印がみられるが、非常に浅くへら記号なのか傷なのか判断しがたい。34は現存長6.6cmの胴部である。尻部には尾と雌を表現する小孔がつけられており、背部には「×」のへら記号がつけられている。胴部断面形はほぼ円形で直径3.8cmほどである。

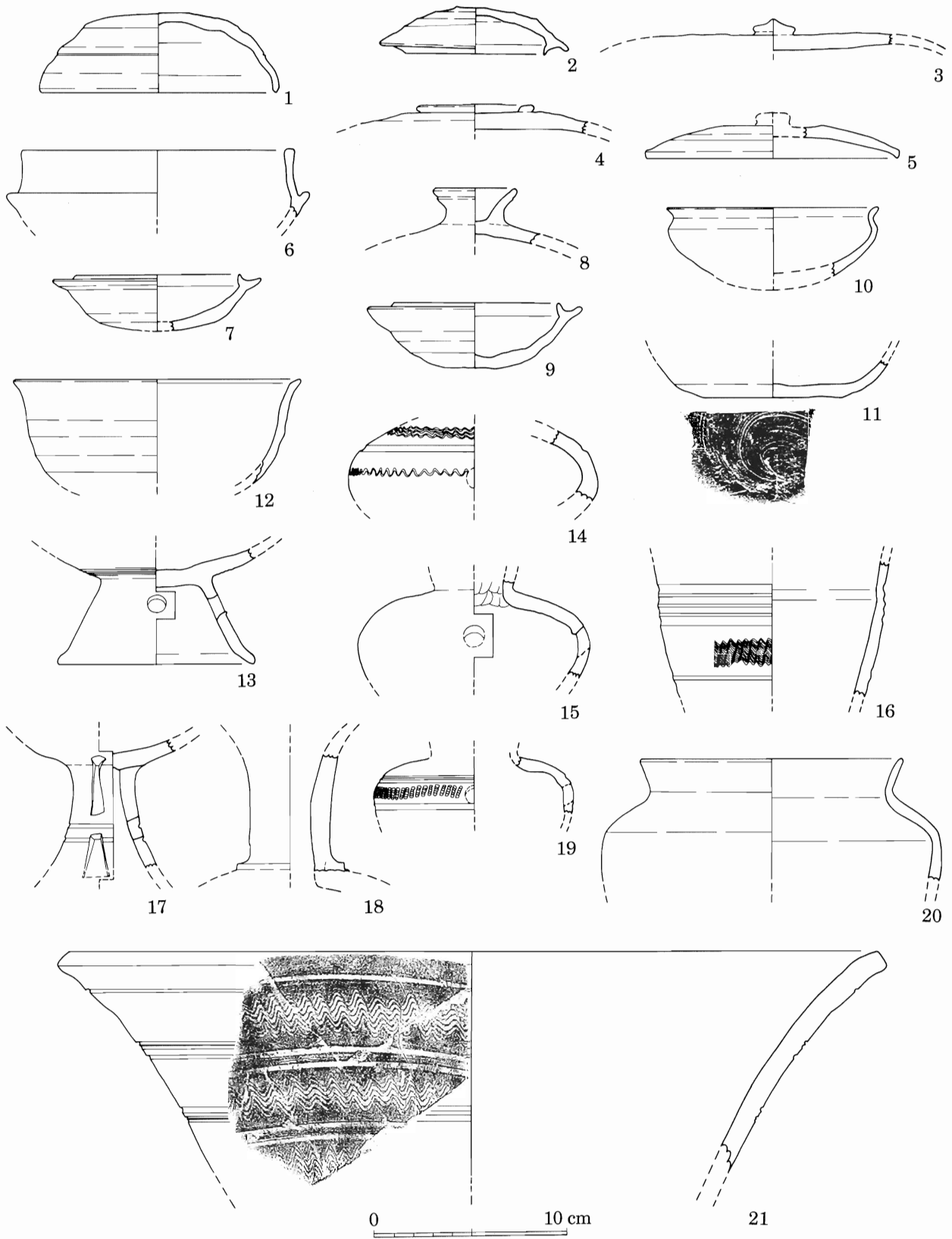
36は緑色凝灰岩製と思われる剥片である。擦り切り技法によって分割されている。弥生土器はここではあまり出土していないが、37～39の磨製石斧とともに弥生時代の玉作工房が近隣に存在する可能性を窺わせる資料である。

なお、ここでは古墳時代の碧玉製、水晶製、メノウ製の管玉・勾玉未成品をはじめ、剥片が大量に出土した。玉作工房跡は検出できなかったが、近隣に必ず存在すると思われる。これらの遺物は、後章「玉作関係遺構と遺物」でまとめて報告する。

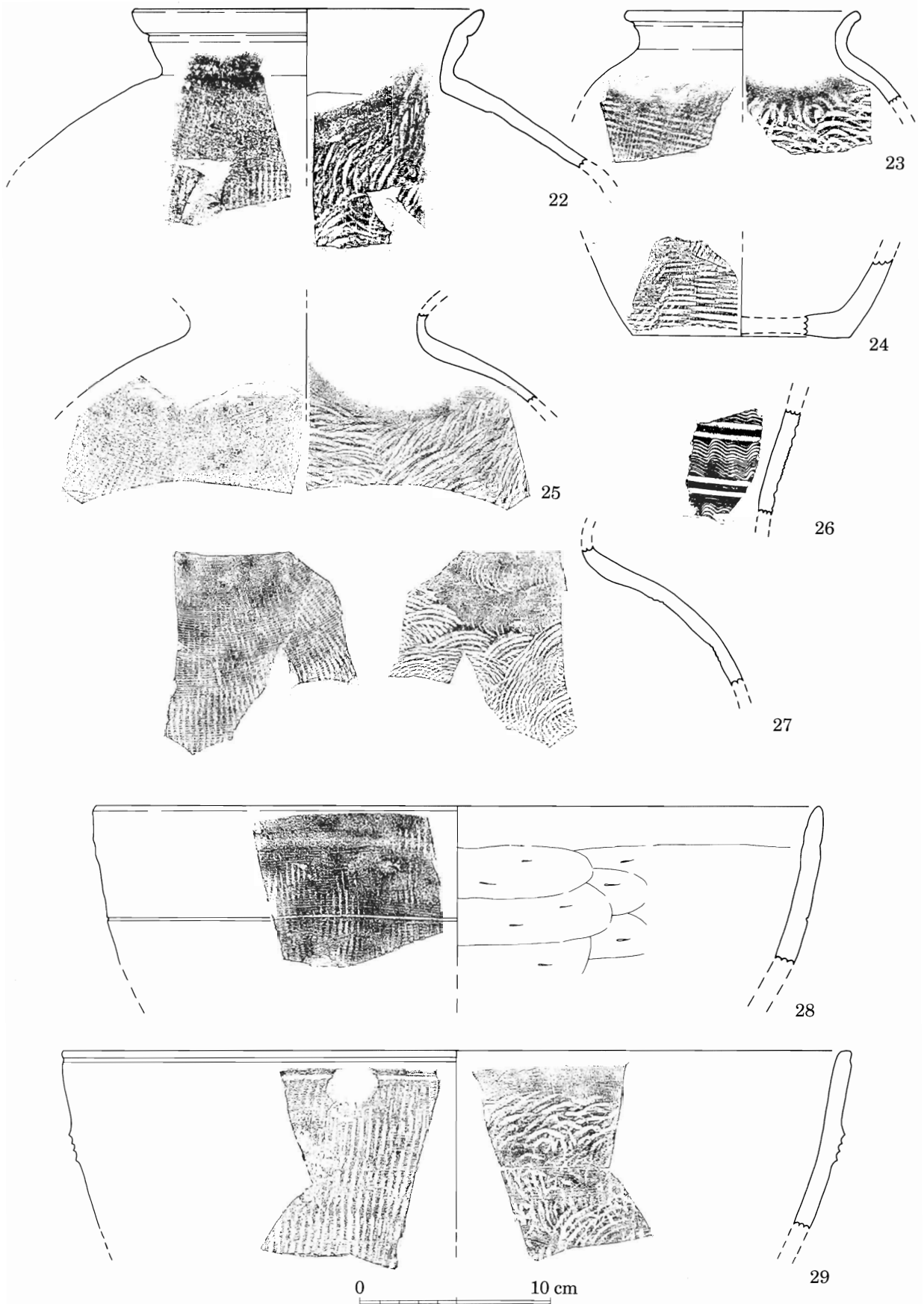
6区遺構に伴わない遺物一覧表

挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第180図-1	150	須恵器蓋	口径12.2 高4.2			へら切り+ナデ	蓋 A 7 5期	
-2	150	同上	口径7.2 高2.4	内面かえり		回転ケズリ	蓋 C 6 B 期	
-3		同上		擬宝珠つまみ		回転ケズリ	8 ~ 9 C'	
-4		同上		輪状つまみ			蓋 B 2 7 ~ 8 期	
-5		同上	口径13	擬宝珠つまみ剥脱 端部嘴状		回転ケズリ	8 C'	
-6	151	須恵器 坏	口径10.4	たちあがり直立			坏 A 1 1期	
-7		同上	口径8.5 高3	たちあがり非常に短く 内傾		へら切り+ナデ	坏 A 8 6期	
-8	151	須恵器 蓋		高い輪状つまみ				特殊な器種の蓋 か？
-9	150	須恵器 坏	口径8.8 高3.4	たちあがり非常に短い		へら切り+ナデ	坏 A 8 6期	
-10	151	同上	口径11	口縁くびれる			6 B 期	

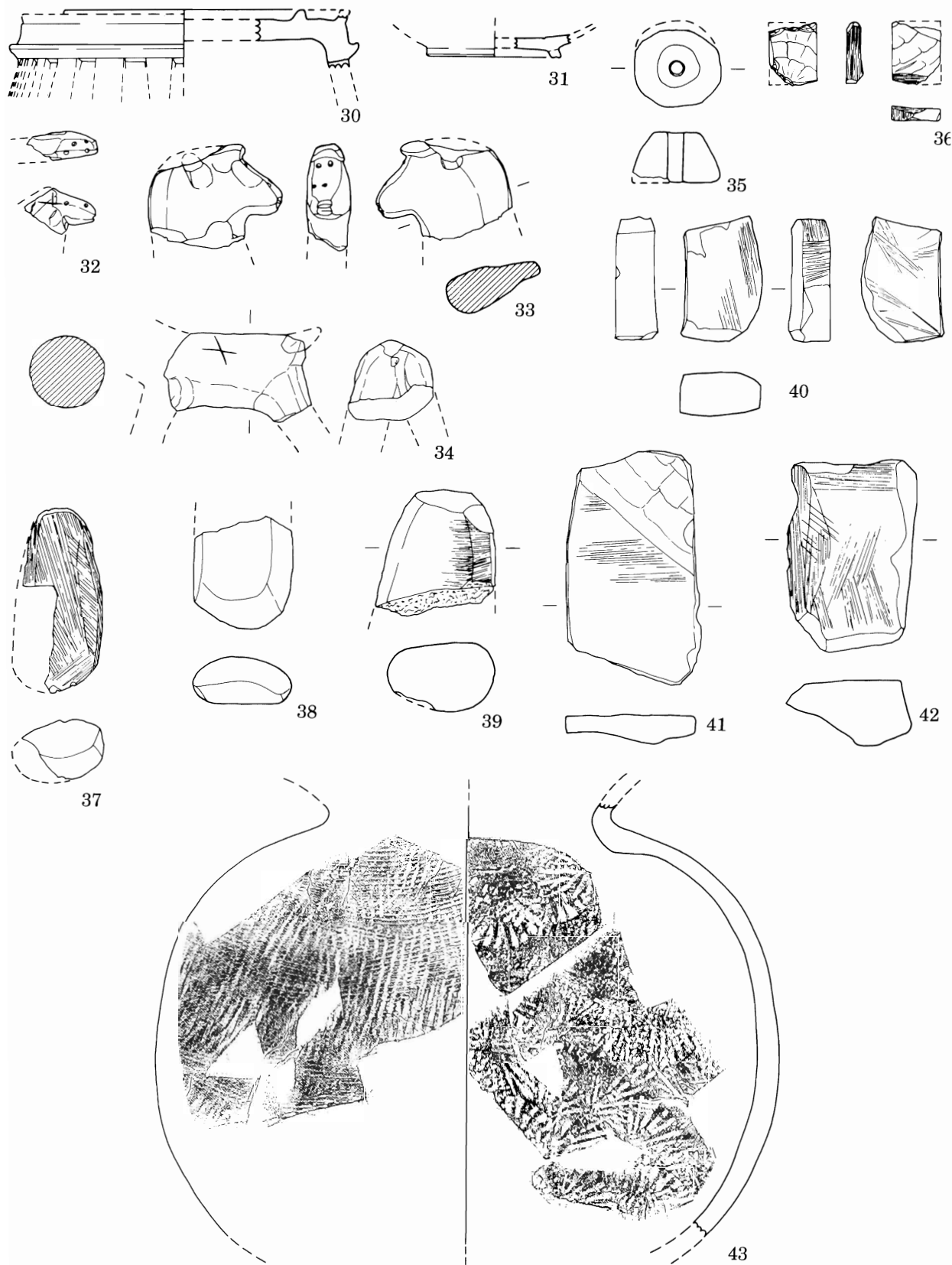
挿図番号	図版ページ	器種	法量	形態	文様	調整その他	時期	備考
第180図-11		須恵器 坏	底径7.2	口縁内湾		回転糸切	8 C'	
-12	151	須恵器 高坏	口径14.8	深身。端部平坦			1期	
-13	150	同上	底径10.2	低い脚。	円形透し(3方)	カキ目	4~6期	搬入品?
-14	151	須恵器 罍	最大径13	たまねぎ状の胸部	沈線をはさんで 波状文2帯		1期	
-15		同上	最大径12.1	同上		頸部指で押え	1期	
-16	153	須恵器 コップ形 土器		直口?	凹線、クシ波状文		1期	
-17	150	須恵器 高坏			方形2段透し(2方) 沈線		長脚無蓋 A 2? 3 期?	
-18	150	須恵器 長頸壺			頸部に突帯	内面絞目	8~9 C'?	
-19	151	須恵器 罍		肩部張る	沈線間にクシ刺突		A 5-6 3~5期	
-20	150	須恵器 短頸壺	口径13.4	口縁やや長い		回転ナデ		
-21	150	須恵器 甕	口径42	大きく外反 端部面取	沈線とクシ波状文 をくりかえす			
第181図-22	152	同上	口径18.3	口縁端に段		外面平行叩 内面径の大きな同心円 当具痕		
-23	151	同上	口径11.9	口縁外反		外面平行叩 内面同心円当具痕		
-24	151	須恵器 壺	底径11.4	平底		外面平行叩		
-25		須恵器 甕		胸部球形		外面平行叩 内面弧状の当具痕		
-26	151	同上			クシ波状文と凹線 くり返す			
-27	152	同上		肩部張る		内面細い当具痕		
-28	151	須恵器 鉢?	口径38.2	口縁大きく広がる		外面平行叩+カキ目 内面静止ケズリ?		
-29	151	同上	口径41.8	同上。把手付		外面平行叩+カキ目 内面同心円当具痕		
第182図-30	153	須恵器 円面硯			方形透し			上面非常に 滑らか
-31	153	緑釉 坏	底径6.8		内面に沈線1条	回転糸切 全面に釉		須恵質
-32	153	石製紡 錘車	上面径2.2 底面径4 高2.6	断面形台形				白色 粗い石
-33	153	碧玉 未成品?		正方形		小口面に擦切痕 一部小さな剝離		緑色凝灰岩?
-34	153	土馬				目、鼻は刺突、口は刻 目 耳は貼付け		「×」のヘラ記 号?
-35	153	同上		たてがみ幅広 全体に偏平		同上		
-36	153	同上		断面形正円に近い				「×」のヘラ記号 雌
-37	153	磨製石斧				全面に研磨痕		黒色
-38	153	同上		刃部				きめ細かな石
-39	153	同上		基部		研磨痕あり		きめ細かな石
-40	153	砥石				4面使用		
-41	153	同上				2面使用 擦痕顕著		きめ細かな石
-42	153	同上				3面使用 粗い擦痕あり		
-43		須恵器 壺	最大径32.4	胸部球形		外面平行叩+カキ目 内面放射状当具痕		



第180图 6区出土土器 (1) 1:3



第181图 6区出土土器 (2) 1:3

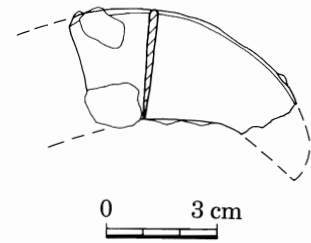


0 10 cm

第182图 6区出土土器 (3) 1:3

第5層出土の遺物 (第184～186図 図版154)

遺構検出面となっていた第5層 (赤茶色土) 中からは黒曜石を中心に剥片が300点以上出土した (第184図 図版144)。この層からは土器は全く出土しなかったことから旧石器時代の層の可能性が考えられ、遺構の調査が終了後剥片が多く出土する地点を中心に第5層を発掘した。



第183図 6区出土鉄器

調査の結果、剥片の他に尖頭器、石鏃、ナイフ形石器などが出土したことから、この層は単純層ではなく、縄文時代草創期に堆積した層で、遺物は原位置ではないと考えられた。また、この層は地山直上の層ではなく、さらにその下に黒色土 (第6層)、黒茶色土 (第7層) が堆積していることがわかった。剥片などは第6・7層では出土していない。

剥片は谷部から集中的に出土した。とくに東斜面北寄りに多く分布していた。石鏃、ナイフ形石器もここから出土したが、尖頭器は西斜面から単独で出土している (図版144)。

第185図1はナイフ形石器の欠損品である。玉髓製で、背つぶしが両面から行われている。両面には大きな剥離面が残る。

2～6は石鏃で6が有茎であるほかは凹基式である。すべて黒曜石製である。

7は黒曜石製の尖頭器で、先端が若干かけるがほぼ完形である。基部は明瞭に抉られており茎は短く突出している。剥離は丁寧で、中央部まで達している。縁辺は鋸歯状を呈す。

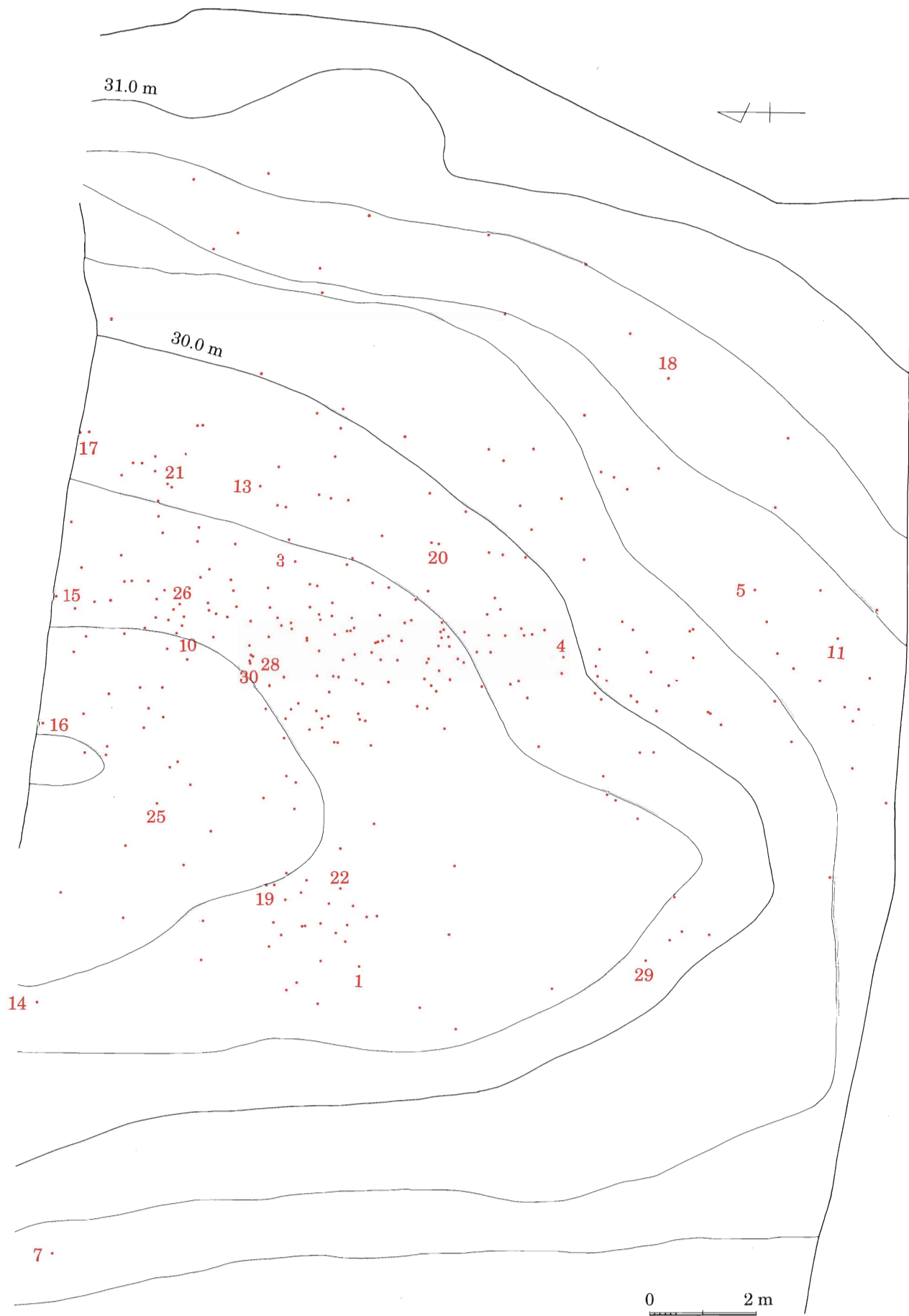
8は石錐の欠損品と考えられる。

9～20、24は黒曜石製の縦長の剥片である。図示したのは一側縁に二次加工が施されるものが多く、刃こぼれ状の使用痕がみられる。21、22、28～30は横長の剥片である。21、22は黒曜石製、28～30は安山岩製である。背つぶし状の剥離が一端に施されている。23、25、26、27は黒曜石製の残核と考えられる。

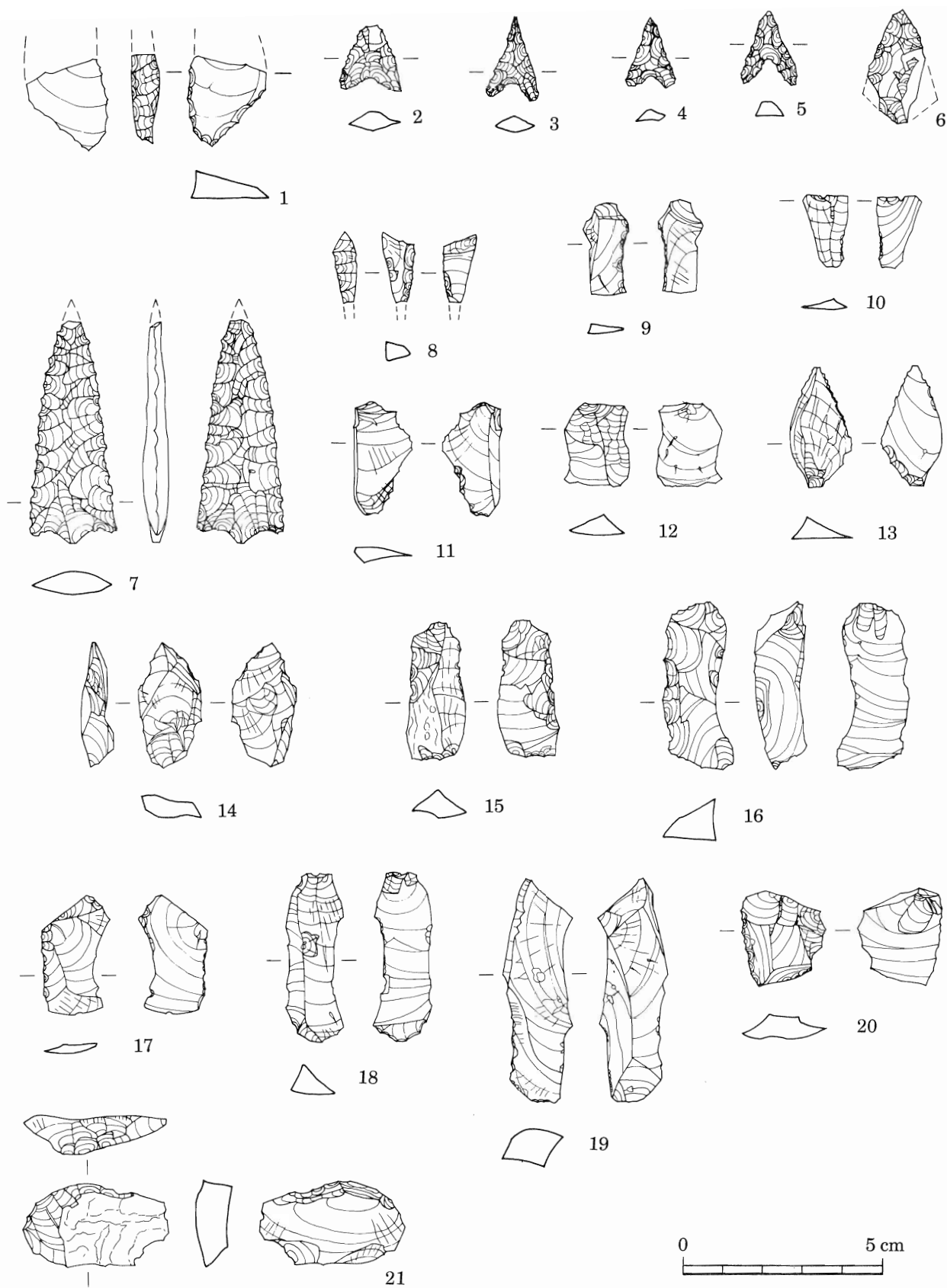
31は安山岩製の磨製石器である。一面と刃部に研磨痕と擦痕が顕著に観察できる。刃部の擦痕は横方向についており、擦り切り具としての機能があったかもしれない。

3. 小 結

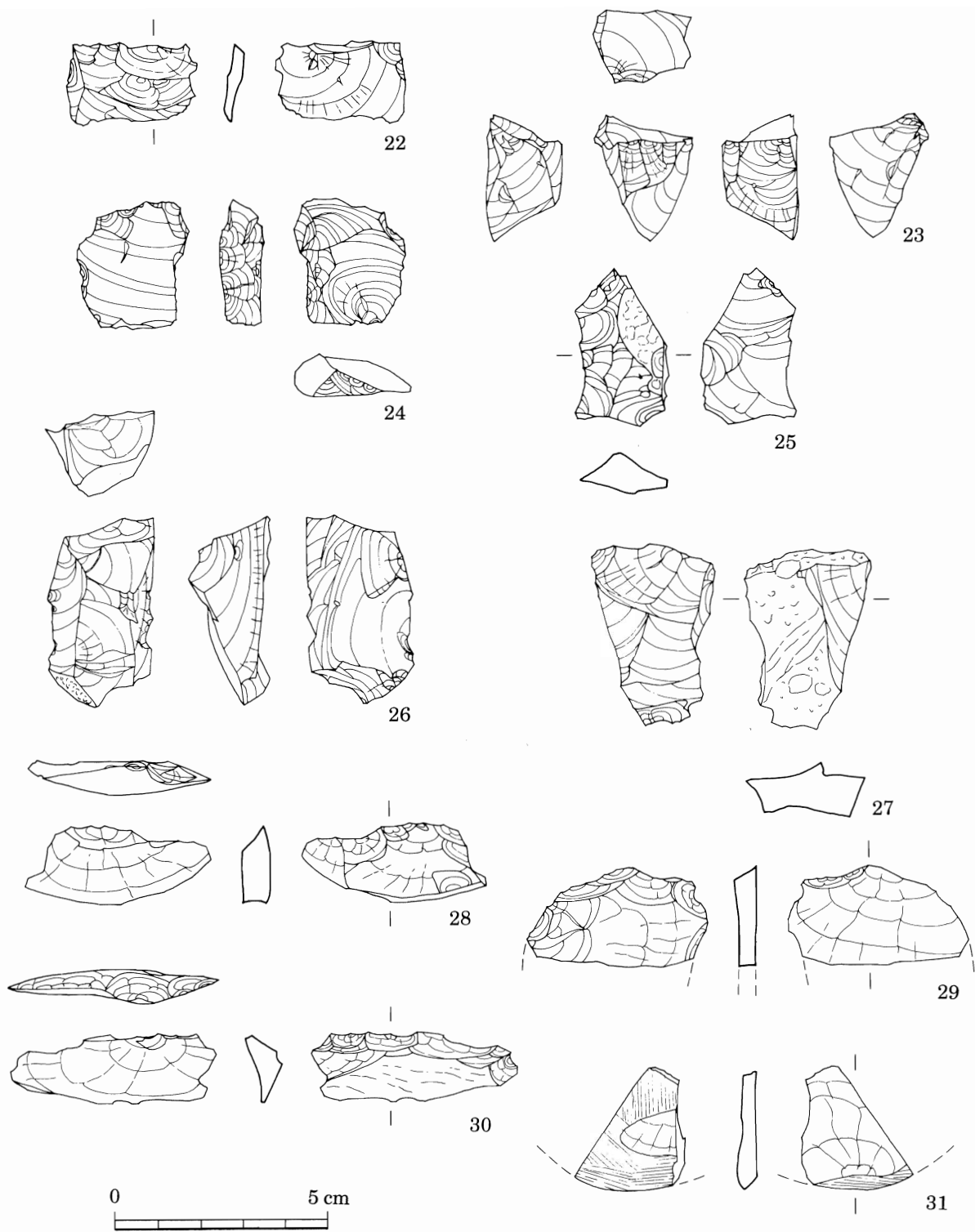
5区では住居跡はおもに東斜面に集中していた。ここで注目されるのは SB 06とした大型の総柱掘立柱建物跡である。これはその平面規模や柱規模からみて通常の集落に設置された倉庫とは考えにくい。公的な倉庫と考えてもよいほどの規模である。ただし、すでに述べたとおり、『出雲国風土記』にはこの周囲に公的な施設が存在するという記載がないので、『出雲国風土記』勘造後に設置された官衙的な建物か、有力層の私的な施設ということになる。6区では円



第184图 6区最下層黒曜石 分布状況 1:100



第185图 6区最下层出土土器 (1) 7:10



第186図 6区最下層出土土器(2) 7:10

面硯、緑釉陶器、唐三彩などの特殊な遺物が出土していることを併せて考えるなら、一般農民とはちがったある程度の富や地位のある者が管理した倉庫と考えられる。とすれば、4B区SB12が大規模な住居跡であることから、これとの関連が注目される。

福富Ⅰ 6区出土石器計測表

押印番号	石材・器種	長さ	幅	厚さ	重量	二次加工の有無	使用痕の有無	とりあげ番号	備考
1	玉髄・ナイフ形石器	1.93	1.89	0.6	2.19	あり	なし	7K-7 951211	黄褐色の石材
2	黒曜石・石鏃	1.59	1.53	0.41	0.71	あり	あり	7K-22 1 960131	水酸化
3	同上	2.05	1.29	0.36	0.45	あり	あり	11 960119	
4	同上	1.71	1.25	0.25	0.35	あり	あり	7K-33 33 960124	
5	同上	2.0	1.35	0.28	0.41	あり	あり	7K-24 64 960124	
6	同上	2.82	1.3	0.46	1.57	あり	あり	F7中央流 路960131	
7	黒曜石 尖頭器	5.53	2.13	0.6	5.66	あり	あり	7区 DK 1 951201	水酸化
8	黒曜石 ・石鏃	1.75	0.79	0.59	0.58	あり	あり	7K-1 7区 赤色土 960124	
9	黒曜石 ・剥片	2.3	1.05	0.41	0.73	あり	あり	7K-16 960117	
10	同上	1.76	1.09	0.21	0.34	あり	あり	7K-10 33 960122	
11	同上	2.76	1.42	0.4	1.2	あり	あり	7K-2 3 951211	水酸化
12	同上	2.05	1.54	0.5	1.45	あり	なし	7K-12 92 960124	
13	同上	3.04	1.49	0.51	1.68	あり	あり	7K-20 25 9601	
14	同上	3.09	1.59	0.81	2.94	あり	あり	10 960125	水酸化
15	黒曜石 ・剥片	3.32	1.38	0.62	3.06	あり	あり	7K-15 14 960126	
16	同上	4.12	1.34	1.6	7.71	あり	あり	7K-14 8 960131	
17	同上	2.9	1.64	0.32	1.51	あり	あり	7K-11 18 960126	
18	同上	4.24	1.27	0.8	3.55	あり	あり	7K-9 3 960129	
19	同上	5.59	1.39	1.03	7.92	あり	あり	7K-4 31 960119	
20	同上	2.32	2.08	0.65	2.81	あり	あり	7K-13 65 9601	
21	同上	3.5	2.25	0.91	6.71	あり	なし	7K 3 951215	水酸化
22	同上	3.06	1.71	0.6	3.16	なし	あり	10 960129	
23	黒曜石 石核	3.01	1.92	1.63	8.25	なし	なし	7K-17 960117	
24	黒曜石 剥片	2.81	2.38	0.88	6.97	あり	あり	7K-18 流路内(南側) 960130	水酸化
25	同上	3.61	2.65	1.09	5.31	あり	あり	7区 960117	
26	同上	4.59	2.5	1.86	15.8 3	あり	あり	7K-6 12 960124	水酸化
27	同上	4.28	2.78	1.64	15.3 3	あり	なし	20 960201	水酸化
28	サヌカ イト・ 剥片	4.28	1.74	0.69	5.94	あり	なし	7K-27 4 951215	
29	同上	4.18	2.24	0.58	6.34	あり	あり	7K-29102 960124	スクレイ パー?
30	同上	4.68	1.55	0.57	4.25	あり	あり	7K-28 5 951215	
31	安山 岩?・擦 切工具?	3.1	2.01	0.41	3.89	あり	あり	7K-30 赤 色土 960124	灰色の石材 刀部に擦痕

石材 器種	長さ	幅	厚さ	重量	二次 加工の 有無	使用痕 の有無	とりあげ 番号	備考
黒曜石・剥片	1.73	1.52	0.65	1.41	あり	なし	No2 960131	水酸化
同上	1.53	0.75	0.12	0.16	なし	なし	No3 960131	
同上	1.58	0.92	0.38	0.31	なし	なし	No4 960131	
同上	1.87	0.98	0.42	0.66	なし	あり	No5 960131	
同上	1.9	1.7	0.61	1.55	あり	なし	No6 960131	
同上	1.71	1.69	0.29	0.93	なし	なし	No7 960131	水酸化
同上	3.44	2.08	0.44	2.58	あり	なし	No8 960131	水酸化
同上	1.22	1.09	0.34	0.52	なし	なし	No9 960131	
黒曜石・チップ	1.07	0.3	0.1	0.05	なし	なし	No10 960131	
黒曜石・剥片	0.74	0.64	0.11	0.08	なし	なし	No11 960131	
同上	1.23	0.55	0.23	0.24	なし	なし	No12 960131	
同上	2.53	2.14	2.21	9.74	なし	なし	No13 960124	水酸化
同上	0.72	0.6	0.05	0.04	あり	なし	No14 960124	
同上	1.02	0.72	0.51	0.51	なし	なし	No15 960124	
同上	1.74	0.96	0.22	0.33	あり	なし	No16 960124	
黒曜石・チップ	0.75	0.27	0.05	0.02	なし	なし	No17 960124	
黒曜石・剥片	3.03	0.87	0.65	1.45	あり	なし	No18 960124	水酸化
同上	2.09	1.20	0.33	0.89	あり	あり	No19 960124	
同上	1.44	1.39	0.23	0.47	なし	あり	No20 960124	
黒曜石・剥片	1.96	1.02	0.32	0.51	あり	なし	No21 960124	
同上	0.91	0.55	0.11	0.06	なし	なし	No22 960124	
同上	1.66	0.18	0.12	0.19	なし	なし	No23 960124	水酸化
同上	1.26	0.60	0.19	0.21	あり	なし	No24 960124	
同上	1.45	0.98	0.15	0.17	あり	あり	No25 960124	
同上	1.80	0.85	0.65	1.39	なし	なし	No26 960124	
同上	0.91	0.62	0.08	0.06	なし	なし	No27 960124	
同上	0.90	0.57	0.11	0.11	あり	なし	No28 960124	水酸化
黒曜石・チップ	0.67	0.48	0.11	0.04	なし	なし	No29 960124	
黒曜石・剥片	0.78	0.61	0.09	0.07	あり	なし	No30 960124	
同上	1.68	0.95	0.21	0.29	なし	なし	No31 960124	
同上	2.20	2.07	0.69	2.90	なし	あり	No32 960124	
同上	1.00	0.29	0.08	0.05	あり	なし	No33 960124	
同上	0.68	0.42	0.06	0.04	なし	なし	No34 960124	
同上	1.24	0.84	0.19	0.16	なし	なし	No35 960124	
同上	2.24	1.59	0.40	1.24	なし	あり	No36 960124	水酸化
同上	3.08	1.13	0.18	0.67	あり	あり	No37 960124	水酸化
黒曜石・チップ	1.55	1.19	0.08	0.07	なし	なし	No38 960124	
黒曜石・剥片	1.37	0.94	0.24	0.37	あり	なし	No39 960124	
黒曜石・チップ	0.70	0.23	0.06	0.03	なし	なし	No40 960124	
碧玉・剥片	1.39	1.53	0.32	0.47	なし	なし	No41 960124	
黒曜石・剥片	1.05	0.84	0.30	0.27	なし	なし	No42 960124	
同上	1.48	0.58	0.34	0.28	なし	なし	No43 960124	
同上	1.98	0.51	0.43	0.48	なし	なし	No44 960124	
同上	1.20	0.73	0.27	0.30	あり	あり	No45 960124	
同上	1.04	0.47	0.21	0.14	なし	なし	No46 960124	
同上	3.50	2.56	1.15	6.70	あり	あり	No47 960124	
同上	1.87	1.00	0.29	0.56	あり	あり	No48 960124	
同上	1.61	0.82	0.41	0.55	なし	なし	No49 960124	
同上	0.78	0.51	0.07	0.06	なし	なし	No50 960124	
同上	0.68	0.47	0.25	0.07	なし	なし	No51 960124	
同上	1.89	1.20	0.62	1.19	あり	なし	No52 960124	
同上	1.09	0.75	0.32	0.30	あり	あり	No53 960124	
同上	3.48	1.04	0.44	1.70	あり	あり	No54 960124	水酸化
同上	0.93	0.86	0.27	0.25	なし	なし	No55 960124	
同上	1.53	1.13	0.13	0.35	なし	なし	No56 960124	
同上	0.62	0.45	0.17	0.05	なし	なし	No57 960124	水酸化
安山岩・剥片	2.02	0.80	0.21	0.42	あり	あり	No58 960124	
黒曜石・剥片	0.71	0.50	0.47	0.21	なし	なし	No59 960124	
同上	0.93	0.52	0.21	0.11	なし	なし	No60 960124	
同上	2.74	2.32	0.90	4.68	なし	あり	No61 960124	
同上	3.07	1.45	0.57	2.04	なし	あり	No62 960124	水酸化
同上	1.83	1.07	0.29	0.68	なし	あり	No63 960124	
同上	1.63	1.07	0.18	0.32	あり	なし	No64 960124	
安山岩・剥片	1.18	0.98	0.23	0.32	あり	なし	No65 960124	

石材	長さ	幅	厚さ	重量	二次加工の有無	使用痕の有無	とりあげ番号	備考
黒曜石・剥片	0.89	0.76	0.08	0.09	なし	なし	No62 960124	
同上	1.87	1.48	0.36	0.70	あり	あり	No63 960124	水和化
同上	1.12	0.67	0.07	0.07	なし	なし	No66 960124	
黒曜石・チップ	1.11	0.42	0.11	0.07	なし	なし	No68 960124	
黒曜石・剥片	1.60	1.10	0.63	0.86	なし	なし	No65 960124	
同上	2.05	1.36	0.53	1.07	なし	なし	No76 960124	水和化
同上	3.79	2.30	2.28	17.8 4	あり	なし	No77 960124	水和化
同上	2.37	1.31	0.64	1.60	あり	なし	No86 960124	
同上	1.81	1.28	0.42	0.80	あり	なし	No93 960124	
同上	1.46	1.37	0.35	0.50	なし	なし	No94 960124	
黒曜石・チップ	0.73	0.33	0.01	0.02	なし	なし	No96 960124	水和化
黒曜石・剥片	1.94	1.28	0.20	0.73	なし	なし	No105 960124	
同上	1.94	0.86	0.54	1.03	なし	あり	No106 960124	水和化
同上	1.67	1.00	0.22	0.27	なし	なし	No111 960124	
同上	2.41	1.75	0.64	2.12	なし	なし	No117 960124	水和化
同上	1.34	1.08	0.24	0.41	なし	なし	No119 960124	
同上	1.94	1.40	0.32	0.89	なし	あり	No121 960124	
黒曜石・剥片	1.31	1.14	0.17	0.35	あり	なし	No122 960124	
黒曜石・チップ	1.00	0.59	0.18	0.08	なし	なし	No123 960124	
黒曜石・剥片	0.72	0.57	0.17	0.06	あり	なし	No125 960124	
同上	1.25	1.02	0.08	0.15	あり	あり	No126 960124	
同上	0.85	0.47	0.16	0.06	なし	あり	No127 960124	
黒曜石・チップ	1.07	0.64	0.08	0.07	なし	なし	No130	
黒曜石・チップ	0.67	0.68	0.05	0.04	なし	なし	960124	
黒曜石・剥片	1.15	0.92	0.24	0.21	なし	なし	No131 960124	
同上	1.10	0.85	0.17	0.21	なし	なし	No132 960124	水和化
同上	1.52	1.21	0.61	0.79	あり	あり	No134 960124	
同上	3.20	2.01	0.84	6.81	なし	あり	No50 960124	
同上	2.01	1.46	0.91	2.80	なし	なし	No67 960124	
同上	2.19	1.71	0.40	1.27	あり	なし	No120 960124	
同上	2.54	2.01	0.48	2.49	あり	あり	No14 960122	
同上	1.61	1.08	0.47	0.58	なし	あり	No32 960122	
同上	1.97	1.35	0.35	0.69	なし	あり	No34 960122	
同上	1.05	0.13	0.30	0.17	なし	なし	No35 960122	
同上	0.83	0.69	0.07	0.08	なし	なし	No36 960122	
同上	1.75	1.30	0.12	0.31	なし	なし	No37 960122	
同上	4.21	1.63	0.42	1.24	あり	あり	No38 960122	
同上	1.33	0.78	0.23	0.21	なし	なし	No39 960122	水和化
同上	1.83	1.80	0.77	2.12	なし	あり	No40	
黒曜石・剥片	2.54	2.27	0.90	3.48	なし	あり	No41 960122	水和化
同上	3.24	1.71	0.67	3.42	あり	なし	No42 960122	水和化
同上	3.48	2.37	0.43	2.86	あり	なし	No44 960122	水和化
黒曜石・チップ	0.97	0.34	0.12	0.06	なし	なし	No61 960122	
黒曜石・剥片	1.15	0.98	0.25	0.24	なし	なし	No62 960122	
同上	1.09	0.89	0.16	0.17	なし	なし	No63 960122	
同上	0.61	0.61	0.15	0.06	なし	なし	No64 960122	
同上	1.92	1.27	0.29	0.61	なし	なし	No67 960122	
同上	2.17	1.80	0.69	1.77	なし	あり	No70 960122	水和化
同上	0.97	0.77	0.27	0.24	あり	なし	No71 960122	
同上	1.97	1.04	0.48	0.86	あり	あり	No72 960122	
同上	1.00	0.68	0.16	0.09	なし	なし	No73 960122	
同上	0.97	0.58	0.07	0.08	なし	なし	No74 960122	
同上	1.02	0.67	0.13	0.09	なし	なし	No75 960122	
同上	0.67	0.48	0.08	0.02	なし	なし	No76 960122	
同上	1.48	1.14	0.48	0.80	なし	なし	No81 960122	
同上	2.40	1.62	0.79	1.68	あり	なし	No82 960122	
同上	1.59	1.19	0.38	0.54	あり	なし	No83 960122	
同上	1.77	0.71	0.81	0.22	なし	なし	No84 960122	
黒曜石・剥片	1.71	0.74	0.19	0.28	なし	あり	No2 960201	
同上	1.55	0.95	0.15	0.21	なし	あり	No3 960201	
同上	2.17	1.51	0.38	1.33	なし	あり	No4 960201	
同上	2.97	1.62	0.42	1.79	なし	あり	No7 960201	水和化
同上	1.59	0.84	0.52	0.51	なし	あり	No8 960201	
同上	2.57	2.15	0.87	3.01	なし	あり	No9 960201	水和化

石材	長さ	幅	厚さ	重量	二次加工の有無	使用痕の有無	とりあげ番号	備考
同上	1.80	1.00	0.29	0.56	あり	あり	No10 960201	
同上	3.07	2.11	1.67	8.57	なし	なし	No11 960201	
同上	1.22	1.10	0.38	0.58	なし	なし	No13 960201	
同上	2.08	1.29	0.60	1.62	なし	なし	No14 960201	水和化
同上	2.08	0.91	0.54	0.71	なし	あり	No15 960201	
同上	1.81	1.73	0.31	1.13	なし	あり	No17 960201	
同上	2.68	2.11	0.48	1.43	なし	あり	No18 960201	
同上	2.53	1.44	0.86	2.11	あり	あり	No19 960201	
同上	0.93	0.61	0.07	0.06	なし	なし	No1 951221	
同上	1.56	1.08	0.25	0.37	あり	あり	No2 951221	
黒曜石・剥片	0.92	0.78	0.35	0.16	なし	なし	No1 960119	
同上	2.01	0.62	0.40	0.41	あり	なし	No2 960119	水和化
同上	1.80	0.87	0.35	0.53	なし	あり	No3 960119	
同上	1.95	1.16	0.76	1.53	あり	なし	No4 960119	
黒曜石・チップ	0.80	0.59	0.11	0.06	なし	なし	No5 960119	
黒曜石・剥片	1.33	0.87	0.41	0.39	なし	あり	No6 960119	
同上	2.44	1.65	0.42	1.85	あり	あり	No7 960119	
同上	1.55	0.68	0.21	0.19	あり	なし	No8 960119	
同上	0.78	0.45	0.31	0.09	なし	なし	No9 960119	
同上	1.53	0.96	0.28	0.37	なし	なし	No10 960119	
同上	1.53	0.72	0.22	0.31	あり	あり	No12 960119	
同上	2.12	2.04	0.55	1.87	なし	あり	No13 960119	
同上	1.31	0.97	0.25	0.21	なし	なし	No14 960119	
安山岩・剥片	1.29	0.64	0.37	0.30	あり	なし	No15 960119	
黒曜石・剥片	1.02	0.70	0.08	0.09	なし	なし	No16 960119	
同上	2.01	1.11	1.05	1.62	なし	なし	No17 960119	
同上	0.94	0.59	0.12	0.06	なし	なし	No18 960119	
同上	1.16	0.62	0.25	0.20	あり	あり	No19 960119	
同上	2.36	1.89	1.07	3.25	なし	あり	No20 960119	水和化
同上	2.39	1.68	0.75	1.90	なし	あり	No21 960119	水和化
同上	1.55	1.23	0.65	0.95	なし	あり	No22 960119	
黒曜石・チップ	0.44	0.28	0.20	0.03	なし	なし	No23 960119	
黒曜石・剥片	6.46	1.91	1.16	10.8 4	なし	あり	No24 960119	水和化
黒曜石・剥片	1.18	0.61	0.21	0.17	なし	なし	No27 960119	
同上	0.75	0.37	0.06	0.03	なし	なし	No28 960119	水和化
同上	1.14	0.83	0.14	0.19	なし	なし	No29 960119	
同上	0.94	0.59	0.14	0.10	なし	なし	No30 960119	
同上	0.93	0.84	0.11	0.15	あり	あり	No32 960119	
同上	0.85	0.65	0.15	0.08	なし	なし	No1 960122	
同上	0.98	0.89	0.90	0.63	あり	なし	No2 960122	
同上	0.92	0.63	0.07	0.09	なし	なし	No3 960122	
同上	1.99	0.83	0.25	0.41	なし	あり	No4 960122	
同上	1.58	0.51	0.26	0.20	あり	なし	No5 960122	
同上	1.56	1.05	0.19	0.26	なし	あり	No6 960122	水和化
同上	2.30	1.21	0.59	0.93	なし	あり	No7 960122	
同上	1.67	0.47	0.09	0.10	なし	なし	No8 960122	
同上	0.95	0.51	0.26	0.13	なし	なし	No9 960122	
同上	1.27	0.41	0.25	0.13	なし	なし	No10 960122	
同上	2.94	1.72	0.63	3.13	なし	あり	No11 960122	水和化
同上	0.96	0.61	0.14	0.09	なし	なし	No12 960122	
同上	3.13	1.07	0.94	2.81	あり	あり	No13 960122	
同上	0.55	0.39	0.16	0.09	なし	なし	No15 960122	水和化
安山岩・剥片	0.95	0.82	0.19	0.22	あり	なし	No16 960122	
黒曜石・剥片	0.85	0.65	0.07	0.06	なし	なし	No17 960122	
同上	1.10	0.71	0.31	0.34	あり	なし	No18 960122	
同上	0.56	0.55	0.10	0.04	なし	なし	No19 960122	
同上	0.98	0.36	0.32	0.13	なし	なし	No20 960122	水和化
同上	1.48	0.49	0.40	0.23	あり	なし	No23 960122	
同上	2.05	1.75	0.26	1.05	なし	あり	No24 960122	
同上	1.15	0.81	0.16	0.19	なし	なし	No25 960122	水和化
同上	1.65	0.85	0.27	0.30	なし	あり	No26 960122	
同上	0.7	0.54	0.01	0.03	なし	なし	No27 960122	
同上	1.08	0.81	0.19	0.16	なし	なし	No28 960122	
黒曜石・チップ	0.61	0.46	0.04	0.02	なし	なし	No29 960122	

石材	長さ	幅	厚さ	重量	二次加工の有無	使用痕の有無	とりあげ番号	備考
黒曜石・剥片	1.25	0.63	0.17	0.14	あり	なし	No30 960122	
同上	3.11	1.35	0.70	2.60	なし	あり	No31 960122	水酸化
同上	0.80	0.51	0.02	0.03	なし	なし	No17 951211	
同上	0.79	0.48	0.11	0.08	なし	なし	No2 951211	水酸化
同上	1.17	0.79	0.11	0.15	なし	なし	No4 951211	
黒曜石・チップ	0.85	0.34	0.04	0.02	なし	なし	No5 951211	
黒曜石・剥片	1.92	1.12	0.22	0.59	あり	なし	No6 951211	
同上	1.71	0.63	0.32	0.28	なし	あり	No8 951211	
黒曜石・剥片	2.32	0.81	0.61	1.15	あり	なし	No2 960126	
同上	1.23	0.85	0.10	0.11	なし	なし	No3 960126	
同上	1.06	0.71	0.14	0.12	なし	なし	No6 960126	水酸化
同上	3.40	2.13	0.92	3.94	あり	あり	No8 960126	
同上	1.80	1.46	0.72	1.70	あり	なし	No9 960126	水酸化
同上	2.10	1.61	0.50	1.63	なし	あり	No10 960126	
同上	1.42	0.88	0.40	0.46	なし	なし	No11 960126	
同上	1.22	0.78	0.05	0.11	なし	あり	No12 960126	
同上	1.42	1.24	0.29	0.63	なし	なし	No13 960126	
同上	1.73	1.24	0.60	0.75	あり	なし	No15 960126	
同上	2.62	1.29	0.30	0.78	なし	あり	No17 960126	
同上	2.06	1.20	0.30	0.73	あり	なし	No19 960126	水酸化
黒曜石・チップ	0.81	0.42	0.05	0.04	なし	なし	No12 951128	
黒曜石・剥片	1.34	1.12	0.67	1.09	なし	なし	No13 951128	
同上	2.22	1.17	0.16	0.61	なし	なし	No14 951128	
同上	5.20	2.62	1.09	16.46	あり	あり	No15 951128	水酸化
同上	1.44	0.95	0.68	0.59	なし	なし	No16 951128	
同上	0.81	0.67	0.08	0.07	なし	なし	No17 951128	
同上	2.35	1.67	0.26	1.30	あり	なし	No18 951128	
黒曜石・チップ	0.65	0.31	0.07	0.03	なし	なし	No19 951128	
黒曜石・剥片	1.54	1.23	0.26	0.09	あり	なし	No4 960125	
同上	1.87	1.26	0.29	0.67	あり	なし	No5 960125	
同上	1.63	0.75	0.95	1.12	なし	なし	No6 960125	
同上	0.98	0.52	0.11	0.06	なし	なし	No7 960125	水酸化
同上	1.50	0.72	0.25	0.28	なし	なし	No8 960125	
同上	1.52	1.23	1.08	2.11	なし	なし	No9 960125	
同上	1.61	0.83	0.21	0.35	なし	なし	No11 960125	
同上	1.65	0.92	0.17	0.32	なし	なし	No12 960125	水酸化
同上	1.17	1.01	0.14	0.25	なし	なし	No13 960125	
同上	2.89	1.56	0.25	1.29	あり	なし	No14 960125	水酸化
同上	1.67	1.31	0.56	1.27	なし	なし	No15 960125	水酸化
同上	1.75	1.33	0.41	1.10	あり	なし	No16 960125	水酸化
同上	1.89	1.13	0.57	0.85	なし	なし	No17 960125	水酸化
同上	0.61	0.42	0.35	0.14	なし	なし	No18 960125	
同上	1.80	1.27	0.15	0.50	なし	なし	No20 960125	水酸化
同上	0.29	1.13	0.21	1.00	あり	なし	No21 960125	水酸化
同上	2.38	1.51	0.43	1.85	あり	あり	No22 960125	
同上	2.12	1.49	0.45	1.33	なし	あり	No23 960125	
同上	2.25	2.00	0.35	1.78	あり	あり	No24 960125	水酸化
黒曜石・剥片	2.24	2.24	0.60	3.85	なし	あり	No1 960129	水酸化
黒曜石・チップ	0.64	0.51	0.05	0.04	なし	なし	No2 960129	
黒曜石・剥片	1.46	0.99	0.19	0.30	なし	あり	No4 960129	
同上	1.33	0.73	0.86	0.22	なし	なし	No2 960129	水酸化
同上	2.13	1.69	0.50	1.69	なし	あり	No6 960129	水酸化
同上	1.20	1.10	0.05	0.09	なし	なし	No7 960129	
同上	1.47	1.15	0.31	0.56	なし	あり	No8 960129	
同上	1.31	1.04	0.15	0.22	なし	あり	No9 960129	
同上	2.00	1.01	0.32	0.69	なし	あり	No11 960129	水酸化
同上	1.46	0.83	0.17	0.22	なし	なし	No12 960129	
同上	2.77	2.01	0.49	1.90	あり	あり	No13 960129	水酸化
同上	2.62	0.90	0.65	1.06	なし	なし	No1 951215	
同上	1.60	1.18	0.17	0.27	なし	あり	No2 951215	水酸化
同上	2.21	0.63	0.42	0.56	なし	なし	No6 951215	
同上	4.33	2.67	1.03	11.03	あり	なし	No8 951215	水酸化
同上	2.75	1.73	0.33	1.28	なし	あり		
同上	1.62	1.13	0.37	0.73	なし	なし		

石材	長さ	幅	厚さ	重量	二次加工の有無	使用痕の有無	とりあげ番号	備考
同上	1.50	1.09	0.11	0.26	なし	あり		
同上	1.88	1.59	0.72	1.68	なし	なし		
同上	1.92	0.95	0.31	0.48	なし	あり		
同上	1.31	0.92	0.12	0.14	なし	なし		
黒曜石・チップ	0.54	0.42	0.07	0.02	なし	なし	No88 951213	
同上	0.53	0.38	0.01	0.02	なし	なし	No39 951213	
同上	0.48	0.35	0.07	0.02	なし	なし	No40 951213	
黒曜石・剥片	0.72	0.64	0.13	0.10	なし	なし	No41 951213	
同上	1.27	0.99	0.09	0.13	なし	なし	No42 951213	
同上	1.24	0.90	0.33	0.32	なし	なし	No43 951213	
黒曜石・チップ	1.04	0.41	0.11	0.06	なし	なし	No44 951213	
黒曜石・剥片	0.95	0.49	0.07	0.07	なし	なし	No45 951213	
同上	2.04	1.13	0.48	1.54	なし	あり		水酸化
碧玉・剥片	2.03	0.80	0.55	0.92	なし	なし		
黒曜石・剥片	2.33	1.93	0.65	3.21	あり	あり		
同上	2.76	2.40	1.02	4.04	あり	あり		
同上	2.42	1.63	0.12	3.17	なし	あり		
同上	2.29	1.22	0.22	0.60	なし	あり		水酸化
同上	1.90	1.55	0.34	1.00	なし	あり		
同上	1.35	0.62	0.22	0.21	なし	なし		水酸化
同上	1.10	0.72	0.33	0.34	なし	なし		水酸化
同上	2.73	2.55	1.14	3.71	あり	あり		
同上	1.18	0.76	0.23	0.32	なし	なし		
同上	2.16	1.89	0.62	2.46	あり	なし		
同上	1.91	1.85	0.50	1.54	あり	あり		水酸化
同上	1.97	1.39	0.47	1.67	あり	あり		
赤めのう・剥片	6.08	3.14	0.87	34.97	あり	なし		
黒曜石・剥片	0.81	0.55	0.08	0.03	なし	なし		
同上	1.08	0.76	0.39	0.22	なし	なし		
安山岩・剥片	1.18	1.02	0.11	0.24	あり	なし		
同上	1.81	1.02	0.18	0.47	あり	あり		
黒曜石・剥片	1.65	0.32	0.35	0.16	なし	なし		
同上	0.65	0.48	0.18	0.05	なし	なし		
同上	0.90	0.86	0.45	0.26	なし	なし		
同上	0.95	0.85	0.14	0.16	なし	なし		
同上	1.45	0.76	0.23	0.31	なし	あり		
同上	2.65	1.19	0.38	1.22	なし	あり		
同上	1.78	0.66	0.18	0.13	なし	なし		
同上	1.25	0.46	0.21	0.16	なし	なし		
同上	2.31	1.12	0.58	1.23	あり	あり		
同上	0.84	0.53	0.22	0.15	なし	なし		水酸化
同上	1.59	0.89	0.43	0.51	あり	なし		
同上	4.50	2.45	1.14	16.22	あり	あり	No1 960125	水酸化
同上	2.87	1.67	0.66	3.53	あり	あり	No2 960125	水酸化
同上	2.40	1.59	0.49	2.35	あり	なし	No3 960125	水酸化
同上	2.72	1.92	0.82	6.79	なし	なし	No13 960131	
同上	2.45	1.72	0.45	1.28	なし	なし	No16 960201	
同上	2.13	1.69	0.42	1.74	あり	あり	No19 960125	
黒曜石・剥片	2.73	2.25	0.64	2.88	あり	あり	No26 960125	
同上	1.47	0.96	1.23	1.85	なし	なし	No66 960122	
同上	2.28	1.45	0.26	0.97	あり	なし		
同上	2.24	1.81	0.37	1.61	あり	なし		
黒曜石・チップ	1.01	0.41	0.05	0.03	なし	なし		
黒曜石・剥片	1.25	0.35	0.37	0.18	なし	なし		
同上	2.22	1.54	0.55	2.76	なし	なし	水酸化	

もう一つ特殊な遺物としては土馬がある。土馬は水に関係する遺物と考えられているが、6区中央では流水の痕跡がみられたことから、ここでそれに関する祭りが行われたとしても不思議ではない。ここは当時豊富な水が湧き出るところとして、神聖視されていたのかもしれない。前述のようにこの地が有力層の居住地だとすれば、大きな屋敷に住み、巨大な倉庫を管理しつつ、水の祭りをつかさどっていた村の有力者の姿が想像できる。

しかし両者は直線距離にして約60 m 離れており、同時期の関連施設にしては距離が離れ過ぎている感はある。この距離を離れているとみるか、比較的近いとみるか微妙であり、意見の別れるところであろう。さらに地形的な制約があったとしても、両者に企画性が窺えない。こうしてみると4区と6区の間は調査を行っていないので、本当に両者が関係あるのかどうか、積極的な根拠があるわけではない。6区に隣接して4区とは別の有力層の居館がある可能性も否定できない。

ところで、遺構が掘り込まれている赤褐色土層中からは、黒曜石を中心として剥片、石器が多数出土した。この層からナイフ形石器や尖頭器が出土した。調査で出土した剥片、石器は原位置を保っていないと考えられるので、この周辺に後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけての集落が存在する可能性がある。

これまでに島根県内で発見されている尖頭器は以下の9点である。(注1)。

資料名	所在地	保管場所
(伝)意多岐神社	安来市飯生町	島根県立博物館(4点)
西川津遺跡	松江市西川津町	島根県埋蔵文化財調査センター
乃木福富	松江市乃木福富町	島根大学
ドンデ遺跡	邑智郡石見町	八雲立つ風土記の丘資料館
(伝)匹見町	鹿足郡匹見町	八雲立つ風土記の丘資料館
堀田上遺跡	邑智郡瑞穂町	島根県埋蔵文化財調査センター

これらは意多岐神社の1例以外はすべて安山岩製である。意多岐神社例は4点とも特異な形態をしており、搬入品の可能性が指摘されているので、出土地がはっきりしたものでは黒曜石製は本例が初めてである。また、茎が明瞭に作り出されている尖頭器も意多岐神社例を除くと県内では初めてである。黒曜石製の尖頭器は鳥取県ではすでに発見されている(注2)ので、島根県側にも一般的であったと考えるのが自然であろう。今後、黒曜石製の尖頭器が県内で発見される可能性は高い。

今のところ県内の尖頭器は(伝)匹見町出土資料のように茎が三角形のものが多く、本例のように突出するものはない。これが時期差になるのか、系譜差になるのか、興味深いところである。今後の資料の増加と検討が期待される。

(注1) 丹羽野裕「島根県における旧石器研究の現状と課題—宍道湖周辺地域を中心に—」
『島根考古学会誌第8集』1991

(注2) 根鈴輝雄「鳥取県の旧石器研究」『島根考古学会誌第8集』1991

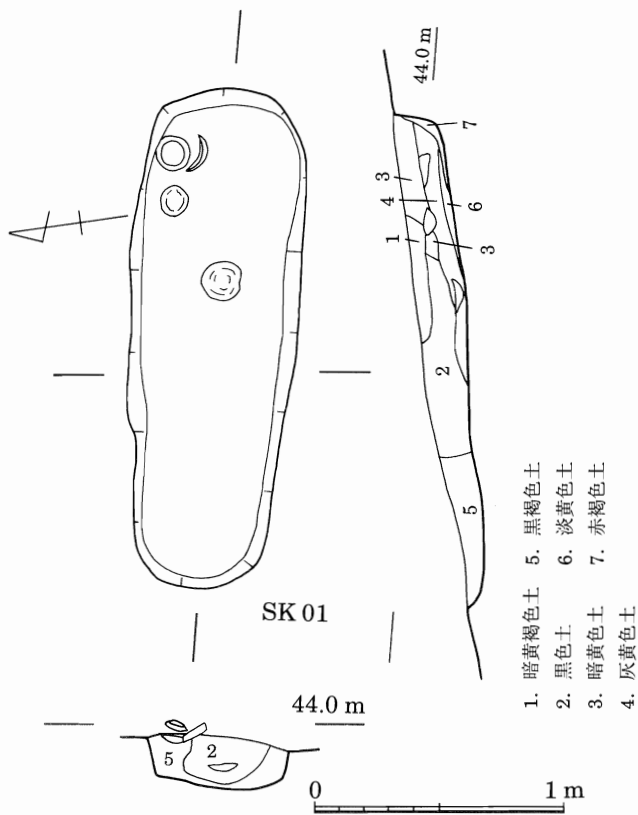
第9章 7·8 区

1.7 区

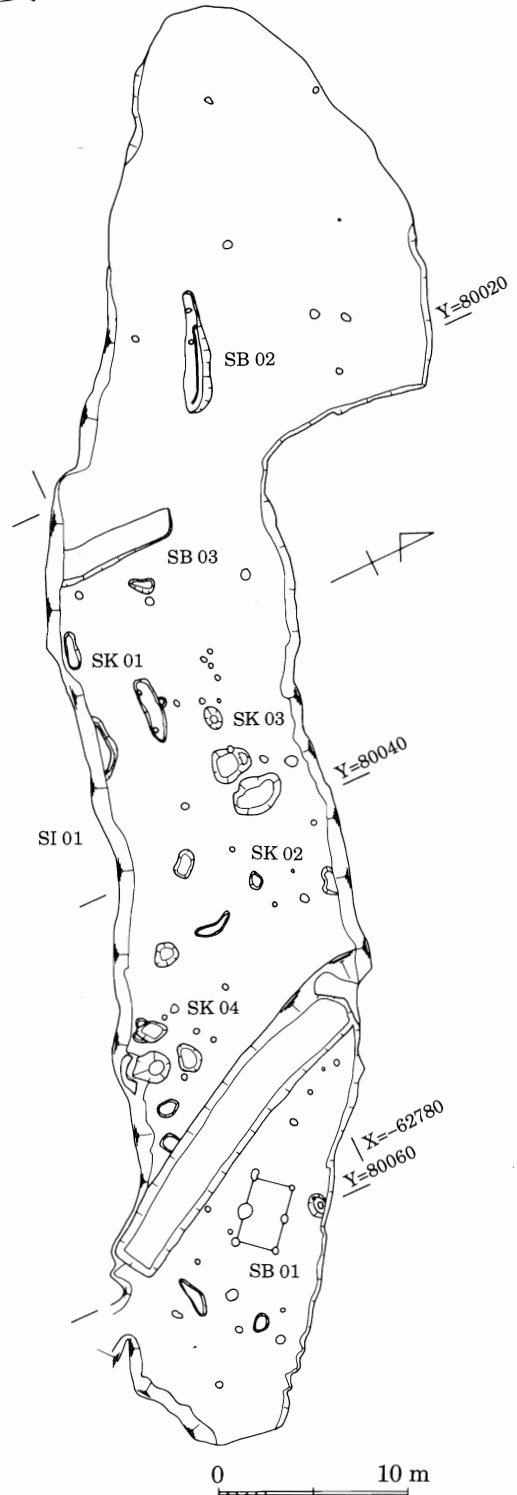
(1) 概要

7区は5区の南側に位置する、標高約45 m の丘陵上にある。この丘陵は基部を5区と同じにして西に伸び、両者の中間はやや深い谷となっている。この丘陵の頂部は基部ではやや広い面積をもつものの、先端に向かうにしたがって狭くなる。斜面は比較的急で住居とするにはあまりよい条件とは思えなかった。

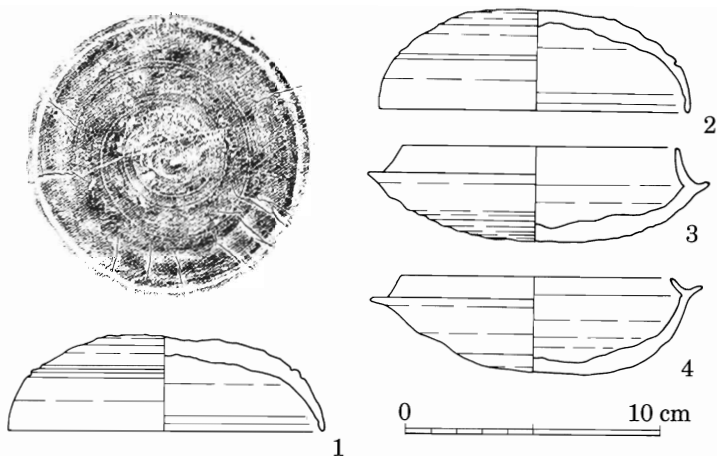
調査の結果、遺構の集中度は低く、丘陵基部付近を中心に竪穴住居跡（弥生時代後期）、掘立柱建物跡（古代?）、加工段（中世?）、土壇墓（古墳時代）、落とし穴状遺構（縄文時代?）、土壇（時期不明）が少数検出できたにとどまった（第188図 図版155）。



第187図 7区 Sk 01実測図 1:30



第188図 7区遺構配置図 1:400



第189図 7区 Sk 01出土土器 1:3

(2) 検出遺構と遺物

土 墳 墓 (SK 01 第187図 図版 157) 丘陵中央部の西斜面に等高線に直交するように作られている。長さ約1 m、幅東部で約70cm、西部で50cm、深さ約20cmを測る。遺物は東側底部近くから須恵器蓋坏が4個体出土した。このうち底面に接して出土したのは

1個だけで、他は底面から10cmほど浮いた状態で出土した。土層の堆積状況からみると、第4層を埋めた後に須恵器を副葬したように思われる。土層の観察でも木棺などが入れられた痕跡はみられなかった。幅が広いことや土器が東端に集中していることから、東側が頭位と思われる。

出土遺物は須恵器蓋 (第189図1、2) と坏 (同図3、4) である (図版160、161)。蓋はともに沈線によって稜が作り出され口縁内面にはわずかに段がつく (図版160)。天井部の調整は1が中央まで施されるが2は中央にヘラ切り痕が残る。坏はともに立ち上がりが内傾し、底部のへら削りは中央までおよんでいない。これらはいずれも蓋坏 A 4型または5型で、出雲4期と考えられる。

掘立柱建物跡 (SB 01 第190図 図版156) 丘陵基部の標高がもっとも高いところで検出

7区 SB 01計測表

規 模		梁 行 き			桁 行 き		
		1間 (2.1 m)			2間 (3.6 m)		
主 軸		N-49° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	36×39	42×38	75×85	39×61	31×33	33×43
	深 さ	26	39	47	34	22	28
柱間距離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-1
		2.1	1.7	1.9	2.1	1.7	1.8

された。1×2間の掘立柱建物跡で、梁行き2.1 m、桁行き3.6 m を測る。柱間は桁側がほぼ1.8 m の等間隔、梁側が2.1 m を測る。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

竪穴住居跡 (SI 01 第191図 図版156) 調査区中央の南端で一部のみ検出できた。住居跡は南に続いているが、ここは調査区外に当たるため調査はできなかった。検出できた規模は東西で約3.3 m、南北で約0.9 m である。壁沿いの床面には壁帯溝がめぐるといえる。この住居跡の北約2.1 m には長さ約3.3 m、幅約0.9 m の浅い溝が検出された。これは5区 SI 03の

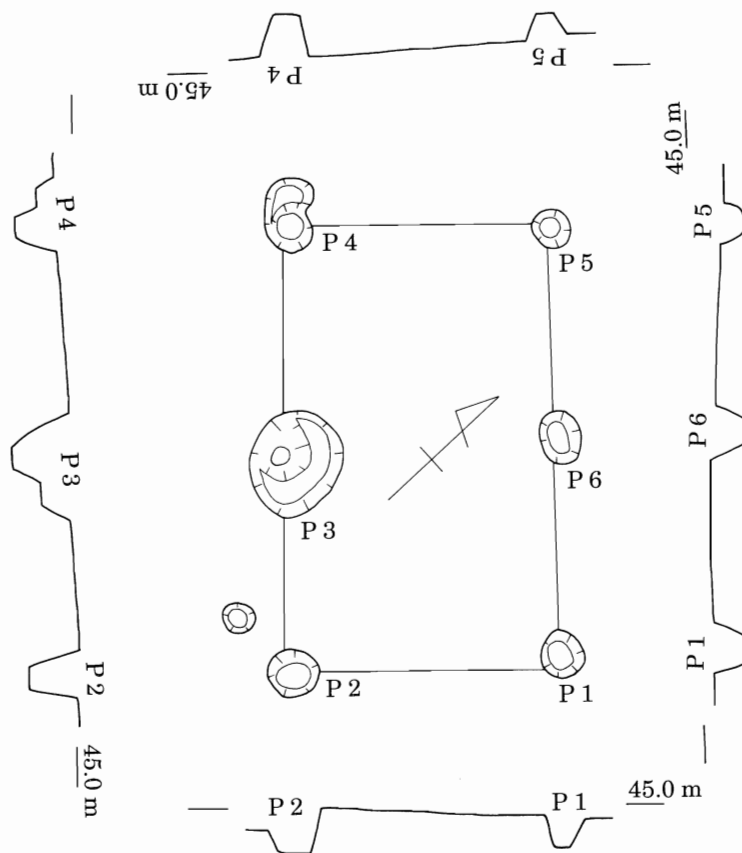
ように竪穴住居跡の外部に設けられた施設と考えられる。

SI 01では遺物は少なく、わずかに第194図1(図版159)が出土した。これは複合口縁の甕で、口縁部には深いへら描き沈線文が施されている。沈線間には赤色顔料がわずかながら付着している。弥生時代後期の出雲・隠岐V-2様式と考えられる。

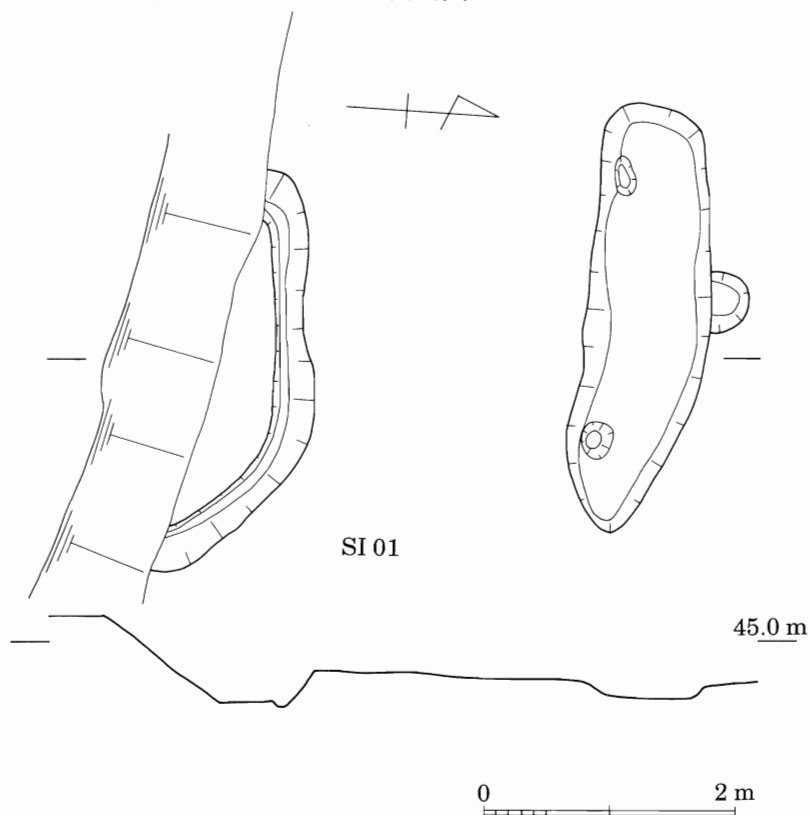
加工段(SB 02・03 第192・193図) 丘陵中央部の西斜面(SB 03)と先端近くの南斜面(SB 02)に位置する。ともに丘陵頂部よりやや下ったところに作られている。SB 02が長さ約6.5 m、SB 03が長さ6.3 mを測る。SB 02の壁際には壁帯溝が掘られている。ともに加工段で、住居跡の可能性はあるが、平坦面の幅がSB 02が0.9 m、SB 03が1.5 mと狭く、住居跡として機能するかどうかは疑問が残る。ここでは住居跡の可能性を指摘するにとどめる。

SB 02からは土師器坏(第194図8)が出土した。底部小片のため全形は不明であるが、底部は回転糸切り未調整のようである。中世ころの土器と考えられる。

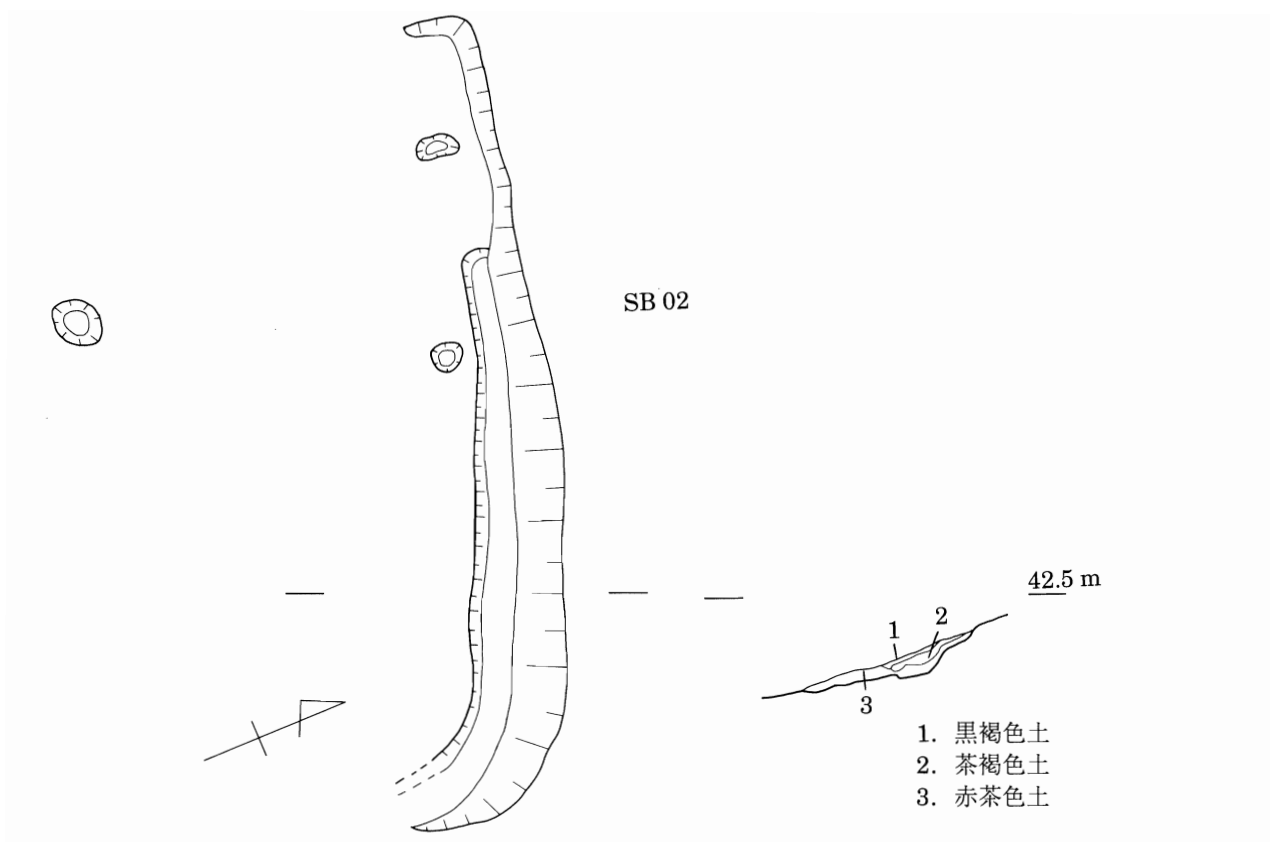
土壌(SK 02 第195図) 不整円形の土壌で、約70×10cm、深さ約60cmを測る。貯蔵穴のような性格であろうか。土壌内からは玉髓製



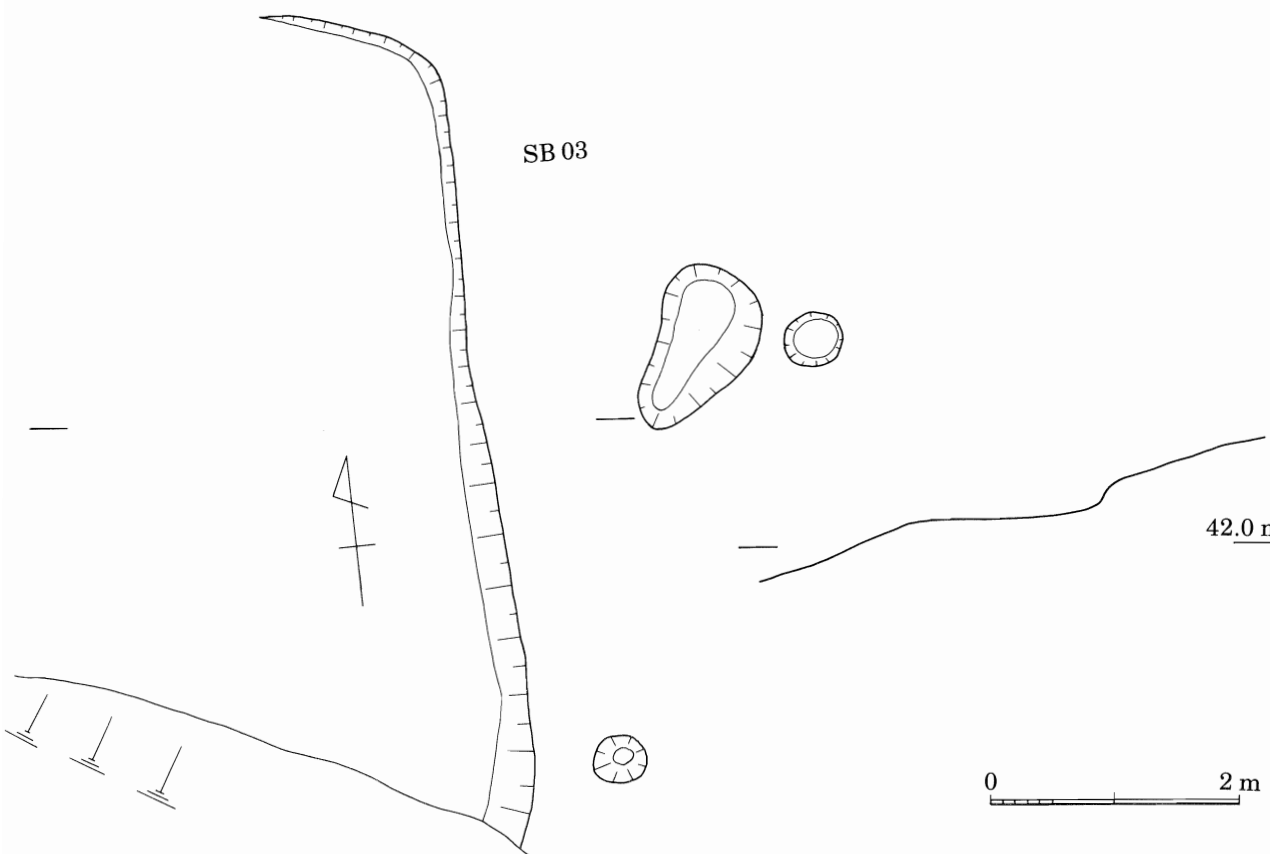
第190図 7区 SB 01実測図 1:60



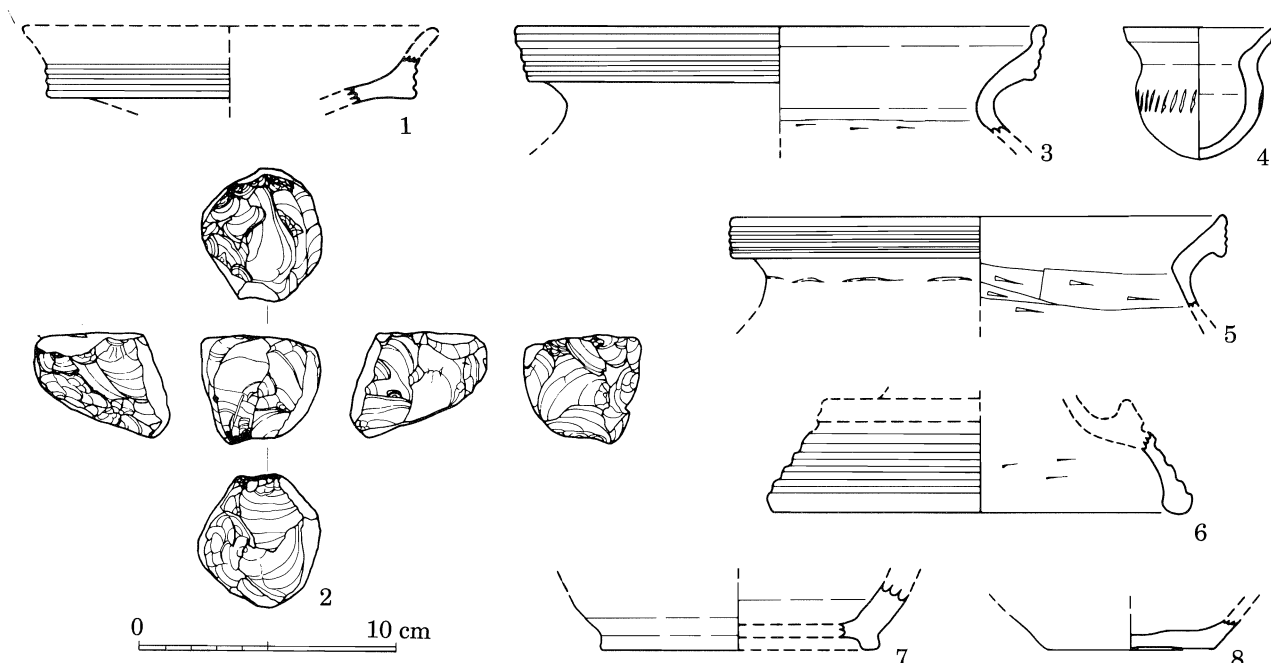
第191図 7区 SI 01実測図 1:60



第192图 7区 SB 02实测图 1:60



第193图 7区 SB 02·03实测图 1:60

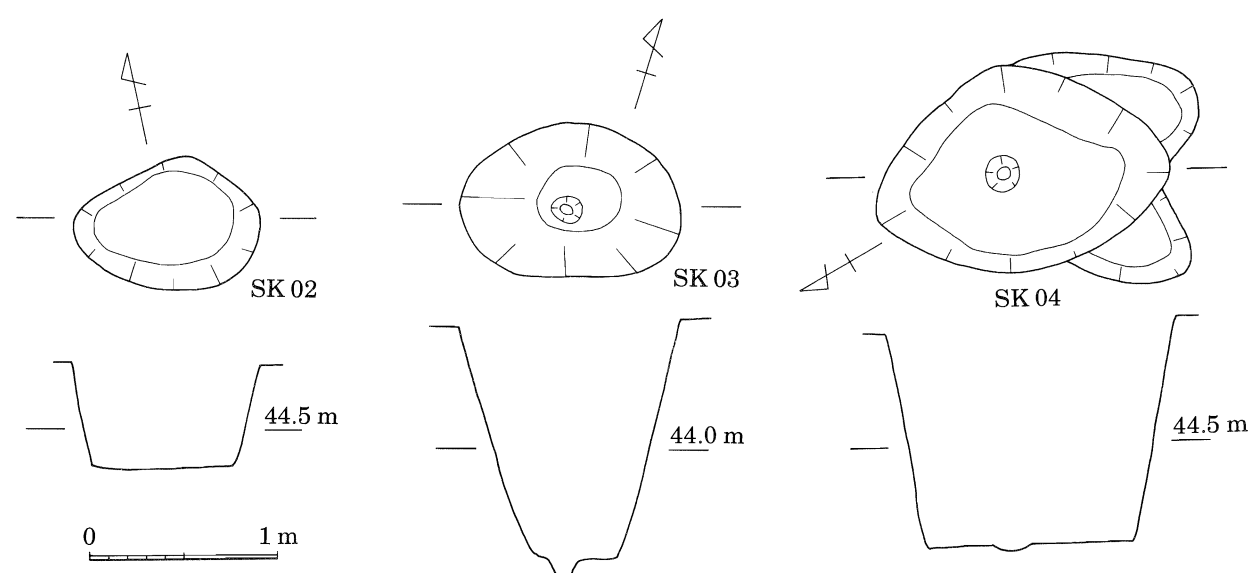


第194図 7区 SI 01. SK 02他出土遺物 1:3

の石核が出土した(第194図2 図版159)。上端は打面調整が行われているが、打点の方向は一定ではない。上端にはつぶれ状の小さな剥離がみられる。

落とし穴状土壌(SK 03、04 第195図) 平面形が楕円形または不整楕円形を呈する。壙底には径10cm、深さ5~10cm程度の小孔が穿たれている。SK 03が140×80cm、深さ130cm、SK 04が160×110cm、深さ120cmを測る。

遺構に伴わない遺物(第194図3~7 図版159) 主に SB 02と SB 03の下方から出土した。3~6は弥生土器で3、5が甕、6が器台である。いずれも複合口縁で、口縁部には4が無文である以外は凹線文、擬凹線文が施される。4の胴部には二枚貝腹縁による刺突文が施される。いずれも弥生時代後期の出雲・隠岐V-2様式である。7は須恵器で高台がつく壺底部と考えられる。奈良時代ころのものであろうか。



第195図 7区土壌実測図 1:40

7区 SK 01出土土器一覧表

挿図番号	図版	出土遺構	器種	法量	形 態	文 様	調 整 そ の 他	時 分 期 類	備 考
第189図 -1	160	SK 01	須恵器 蓋	口径12.3 高3.7	稜は2条の沈線による 内面沈線		天井部回転ケズリ	蓋 A 5 4期	天井部に「ノ」 状のヘラ記号
-2	160	SK 01	同上	口径11.9 高4	稜は1条の沈線による 内面沈線		周縁のみ回転ケズリ	蓋 A 6 4期	
-3	160 161	SK 01	同坏	口径10.6 高3.8	たちあがり内傾。		同上	坏 A 6 4期	底部に平行沈線 状の庄痕
-4	160 161	SK 01	同上	口径10.2 高3.8	たちあがり短く内傾。		同上	坏 A 6 4期	

7区 SI 01 SK 02他出土遺物一覧表

挿図番号	図版	出土遺構	器種	法量	形 態	文 様	調 整 そ の 他	時 分 期 類	備 考
第194図 -1	159	SI 01	弥生 甕			ヘラ描沈線3条	内面ミガキ	弥生 V -2様式	
-2	159	SK 02	玉髓 石核	長5.3 幅4.1 厚5.2			簡単な打面調整	旧石器	
-3	159	7区	弥生 甕	口径21	直立気味の複合口縁	擬凹線4条	ヨコナデ、ケズリ	弥生 V -2様式	
-4	159	7区	同上	口径6 高5.3	口縁肥厚。 底部尖底	2枚貝による刺突文	内面指によるケズリ?	弥生 V -2様式	
-5	159	7区	同上	口径19.6	口縁肥厚。	擬凹線4条	内面ケズリ	同上	
-6	159	7区	弥生 器台	底径16.4		凹線6条以上	内面ケズリ	同上	
-7		7区	須恵器 坏?	底径11	低い高台			奈良	壺の可能性もあり
-8		7区	土師器 坏	底径6.6			回転糸切	平安?	

2. 8 区

(1) 概 要

5区から連続する丘陵である。5区を基部にした丘陵が屋形1号墳の付近で分岐するが、ここから北に伸びる支脈が8区に当たる。この丘陵も頂部がなだらかで、試掘の際に遺物が出土したことから調査に至った。

比較的広い平坦面をもつ丘陵であったことから多数の遺構が予想されたが、調査の結果検出できたのは堅穴住居跡3棟、土壙墓1、土壙2であった（第196図 図版161、162）。

8区 SI 01計測表

平 面 形		隅丸方形				
規模 (m)	上 面	下 面			床 面 積	
	4.2×4.4	3.8×4.1			13.0 m ²	
壁 高 (cm)	28					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
	上面径	24×24	26×24	30×29	31×42	66×49
	深 さ	54	52	52	59	49
柱間距離 (m)	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-1		
	2.1	2.1	2.3	2.1		

(2) 検出遺構と遺物

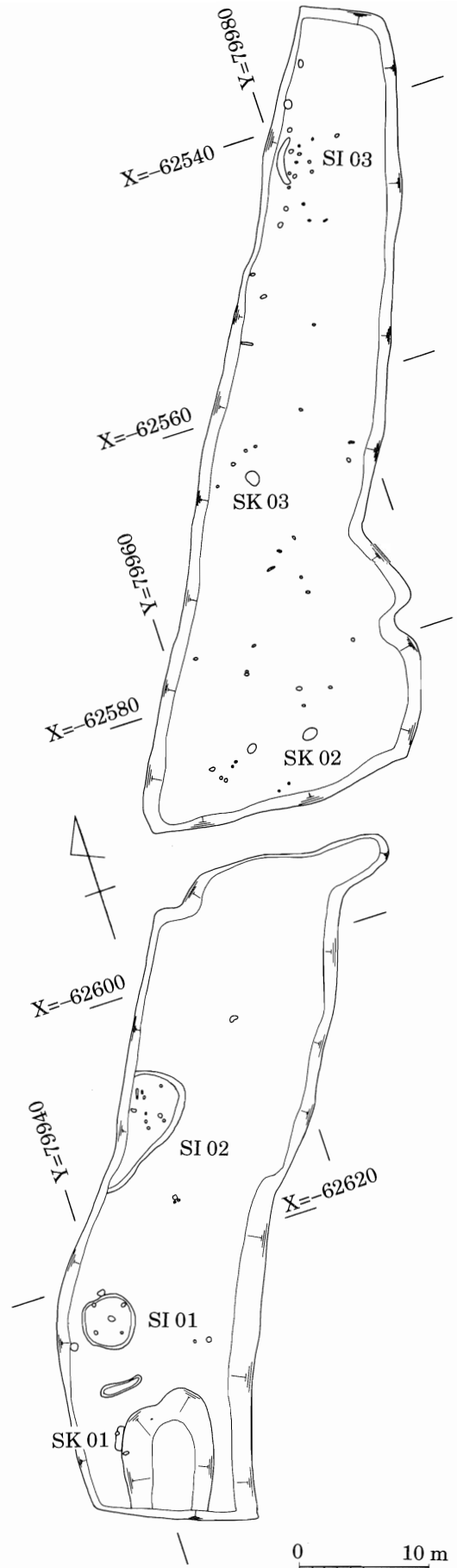
SI 01 (第197図 図版163) 平面形五角形の竪穴住居跡である。壁沿いには幅約10cmの壁帯溝がめぐり、支柱穴は4個配されている。規模は南北4.2 m、東西3.9 m を測る。その南には約2.5 m 離れて長さ3.3 m、幅約0.7 m、深さ約0.2 m の弧状の溝が設けられている。柱穴はいずれも径30cm程度で、柱間は約2.7 m とほぼ等間隔である。床面中央には径50cmほどのピットがある。東南部分の床面には焼土が4カ所検出されている。

ここからは弥生時代後期の土器が出土している (第198図 図版165)。1、2、4~6は複合口縁の甕で、口縁部が直立するものが多い。1は無文であるが、2、4、5には凹線または擬凹線が、6には櫛描き沈線文が施されている。3、8は器台で、3に櫛描き沈線文、8に擬凹線が施される。7は底径5.6cmを測る底部である。胴部の張りに比べ底部が小さい器形である。これらは弥生時代後期の出雲・隠岐V-2様式と考えられる。

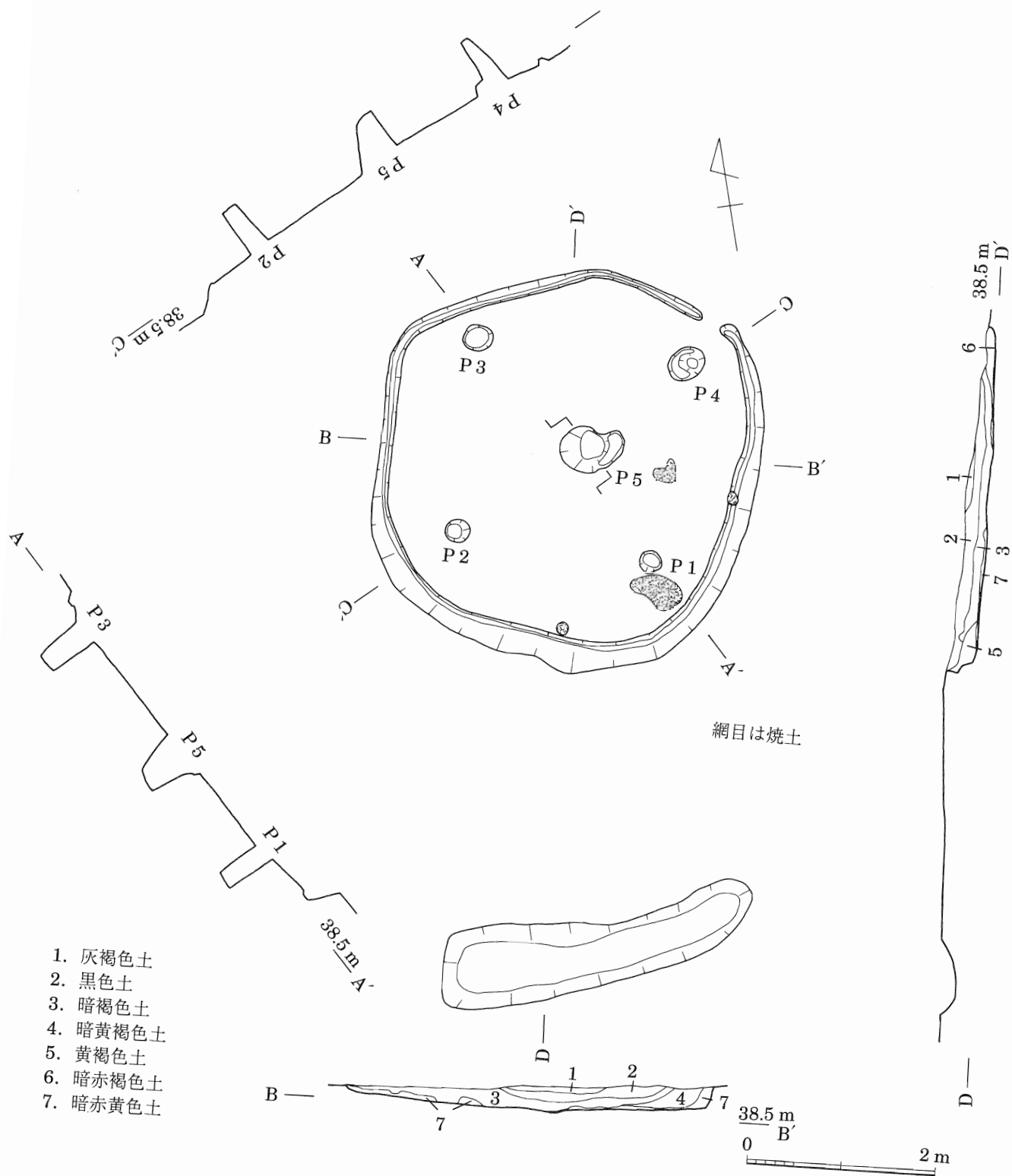
SI 03 (第199図 図版164) 丘陵北端にの緩斜面に位置する。斜面のためか残存状況は非常に悪く、壁帯溝の一部のみ検出された。検出できた規模は南北約3.9 mで、弧状を呈す。本来は平面形が円形の竪穴住居跡であったと思われる。ここでは約2 m の範囲で平坦面がみられ、床面の一部が残っていると考えられた。ピットは11個検出されたが、竪穴住居の支柱穴となるものは山側の2個だけであった。これらは壁帯溝の約30cm内側にあり、柱間距離は約1.5 m である。中央ピットは検出できなかった。

ここからは弥生時代後期の土器小片が数点出土している。図示はできなかったが、この中には複合口縁の甕があり擬凹線が描かれている。出雲・隠岐V-2様式と考えられる。

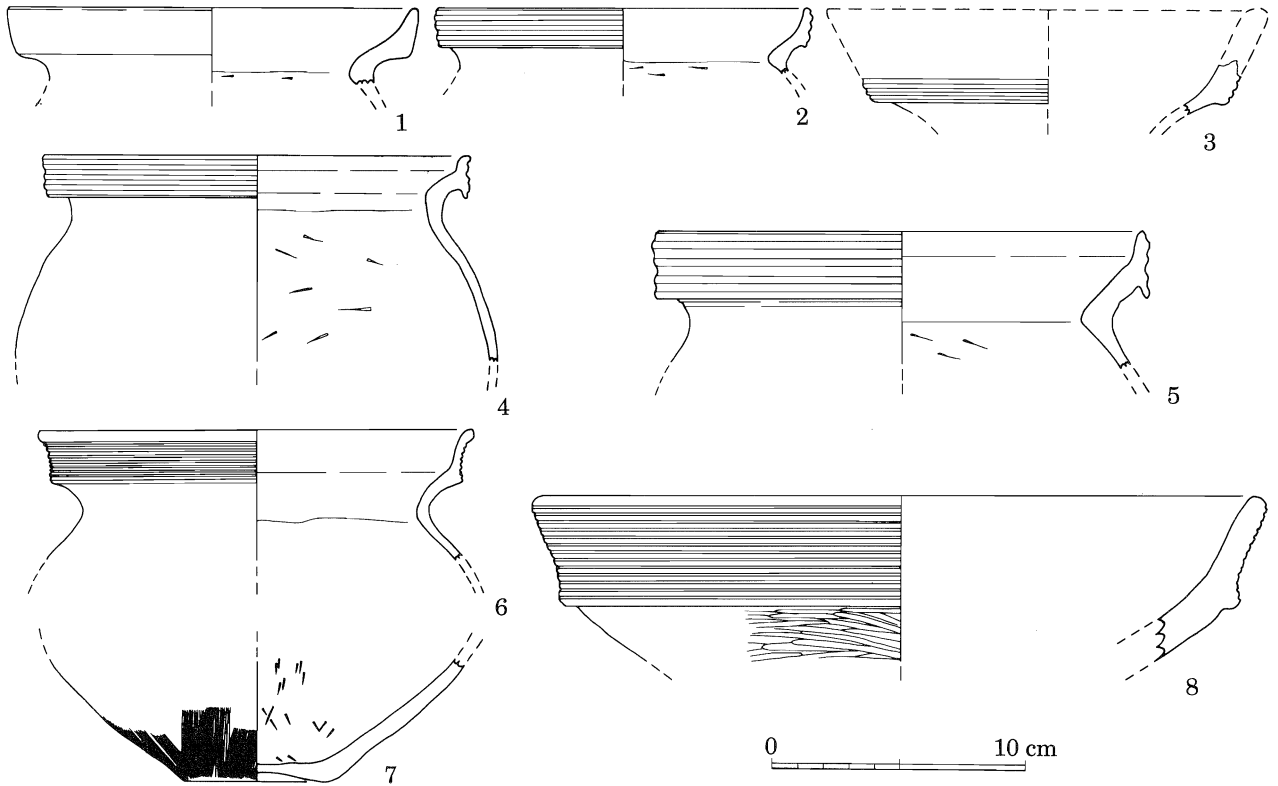
SI 02 (第200図) SI 01の北側の谷斜面に立地する。



第196図 8区遺構配置図 1:500

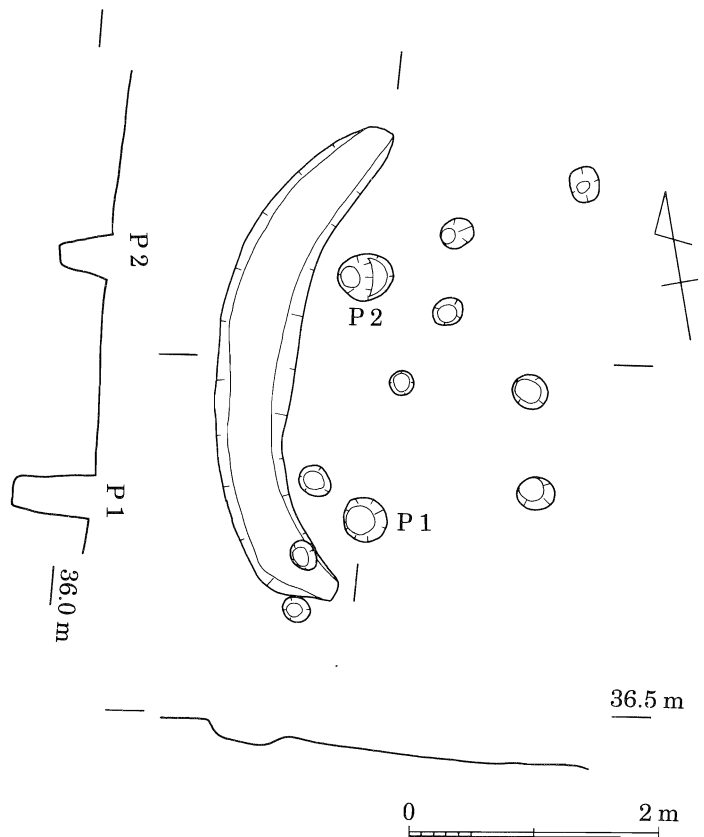


第197図 8区 SI 01実測図 1:60

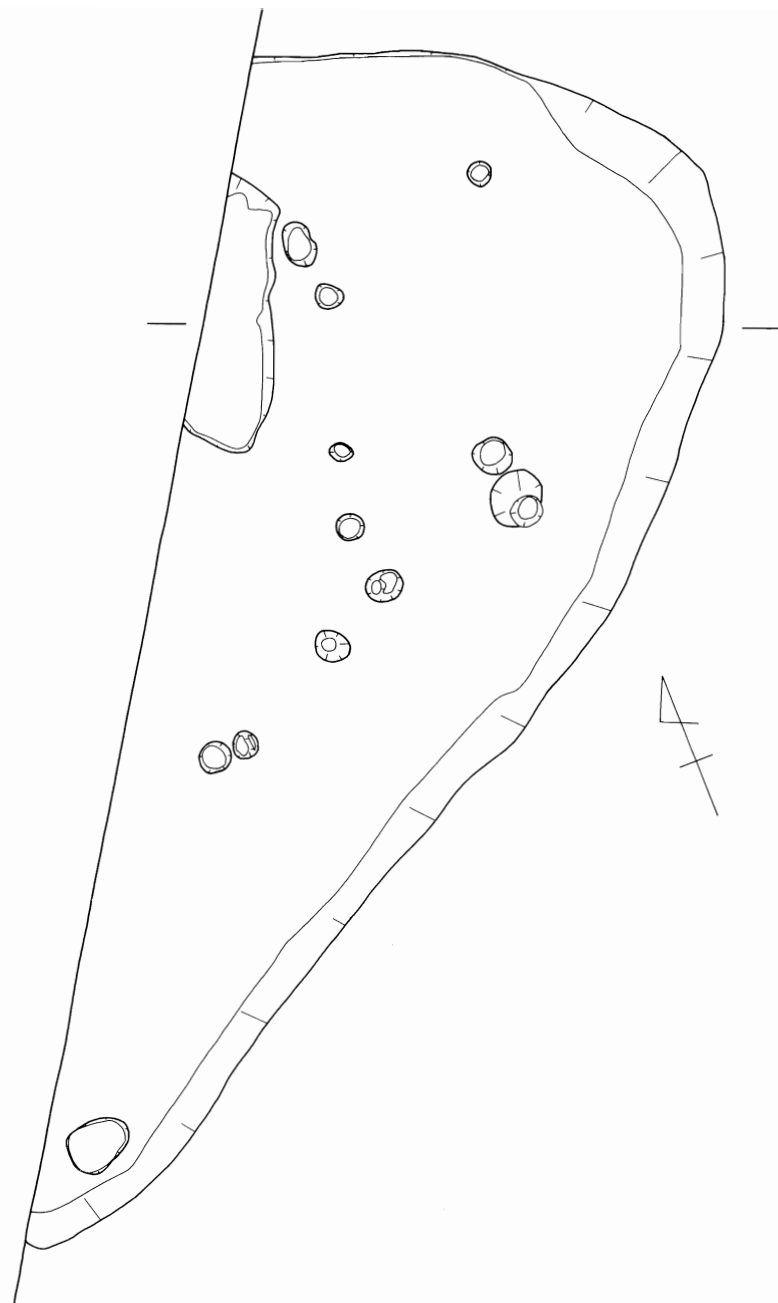


第198図 8区 SI01出土土器 1:3

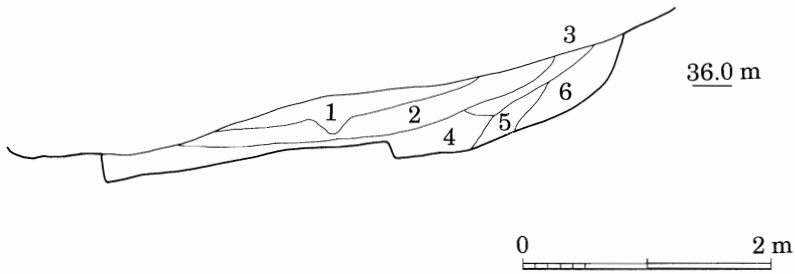
南北約9 m の大きな加工段である。当初は竪穴住居跡が複数重複していると考えたが、柱穴、壁帯溝、中央ピットは検出できず、竪穴住居跡とする積極的な証拠は見いだせなかった。ここでは遺物が比較的多く出土したことから、とりあえず住居跡として報告する。出土遺物は第201図（図版166）に図示した。1~10は複合口縁の甕で、口縁部は直立または外傾するものが多い。外面には1、5、8には擬凹線文が施されるが、他はすべて櫛描き沈線文が施される。11は単純口縁の甕である。頸部は「く」の字形に鋭く屈曲する。18は器台脚部である。外面に櫛描き沈線文が施される。17は高坏脚部、12~16は底部である。これらはいずれも出雲・隠岐V-2様式の特徴をもつが、口縁外面の文様に擬凹線文が少なく櫛描き沈線が多いことから、やや新し



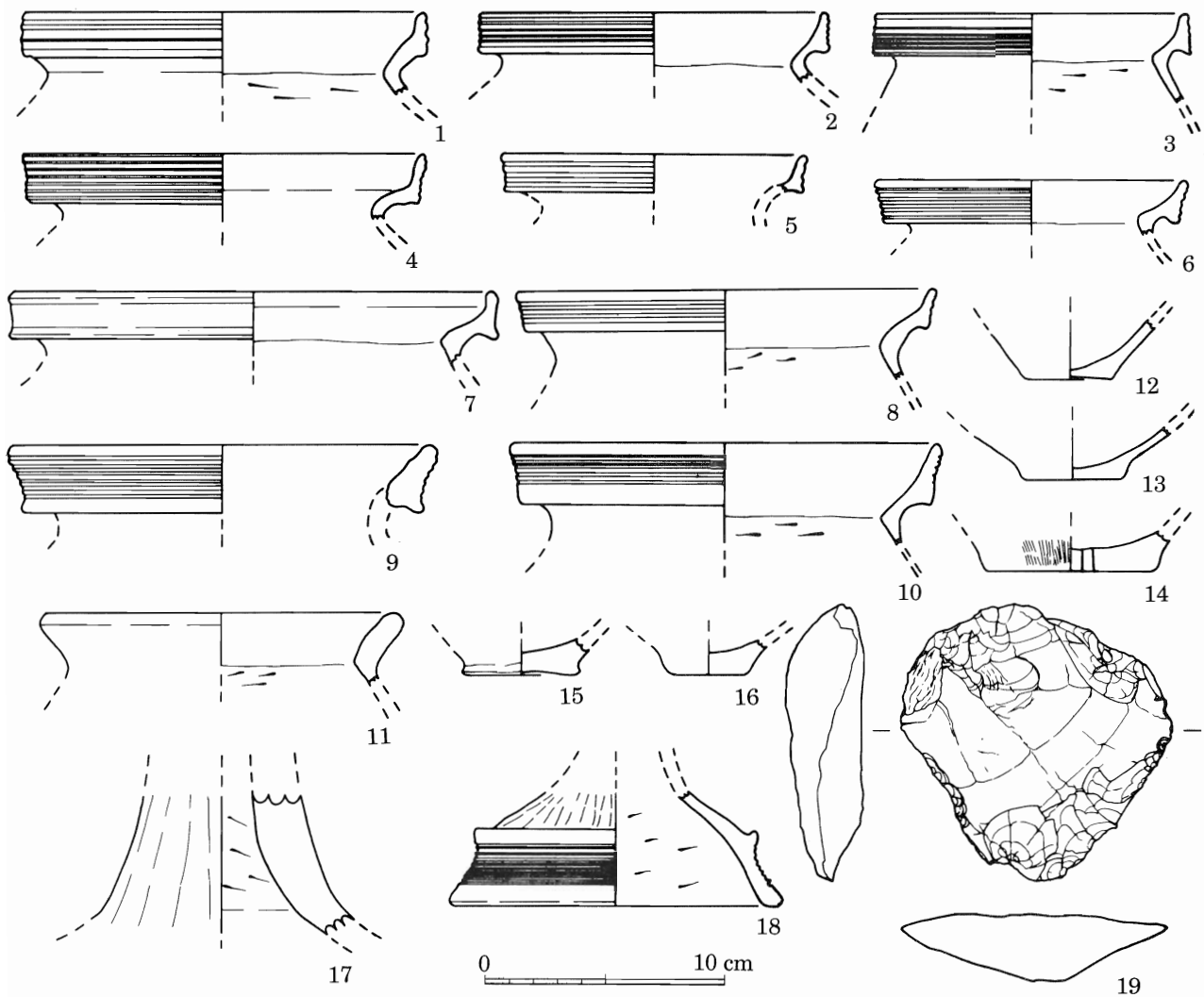
第199図 8区 SI03実測図 1:60



- 1. 暗茶色土
- 2. 黒色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 暗黄褐色土
- 5. 灰褐色土
- 6. 暗赤褐色土



第200図 8区 SI 02実測図 1:60



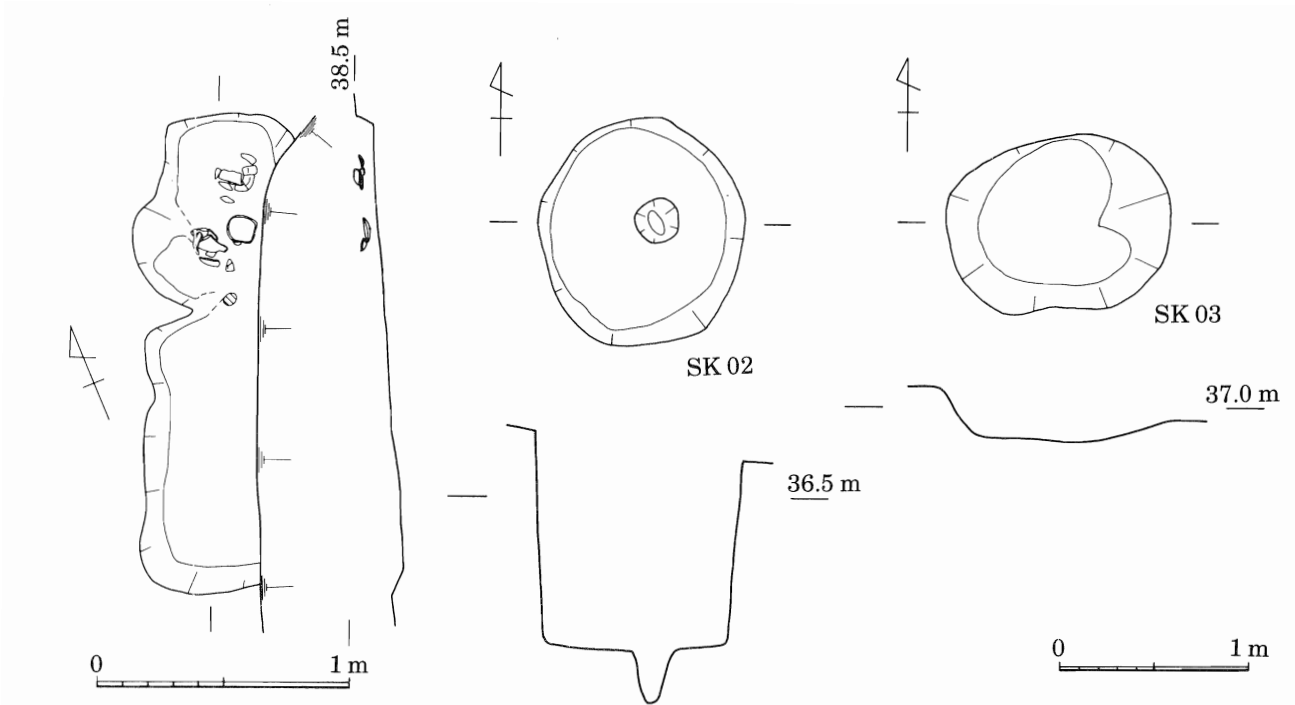
第201図 8区 SI02出土遺物 1:3

い様相の土器群と思われる。

19は玉髓製の剥片石器である。背面には礫面が残り剥離はみられない。腹面は中央に主要剥離面を大きく残し、縁辺に簡単な剥離を施す。旧石器時代の剥片石器と思われる。

土壌墓 (SK 01 第202図) 調査区南端に位置し、西側斜面に立地する。表土掘削時に掘り過ぎたため、上部は若干削れている。平面形は長方形を呈し、等高線に直交するように掘られている。検出できた規模は長さ約1.9 m、幅約50 cmで、深さは約10 cmである。

遺物は北部に集中して出土した。重機による掘削で、すべてが原位置で出土したわけではないが、ほぼこの地点から出土したことを確認している。これらはいずれも須恵器で (第204図 図版167. 168)、1~4が蓋、5、6が坏、7、8が壺 (短頸壺か? 同一個体と思われる)、9が高坏である。蓋の稜はいずれも沈線によって作り出され、口縁内面には3に沈線、4に段がつく。蓋坏の天井部、底部の調整はへら削りが全面におよぶものが多く、1が中央にへら切り痕を残す。これらは蓋坏 A 4型と思われる。9は坏部中央に沈線によって突線が作り出され、底部に櫛による刺突文が施される。脚部は長く三角形透かしが2段三方に配されている。長脚無蓋 B



第202図 8区 SK 01出土遺物 1:30

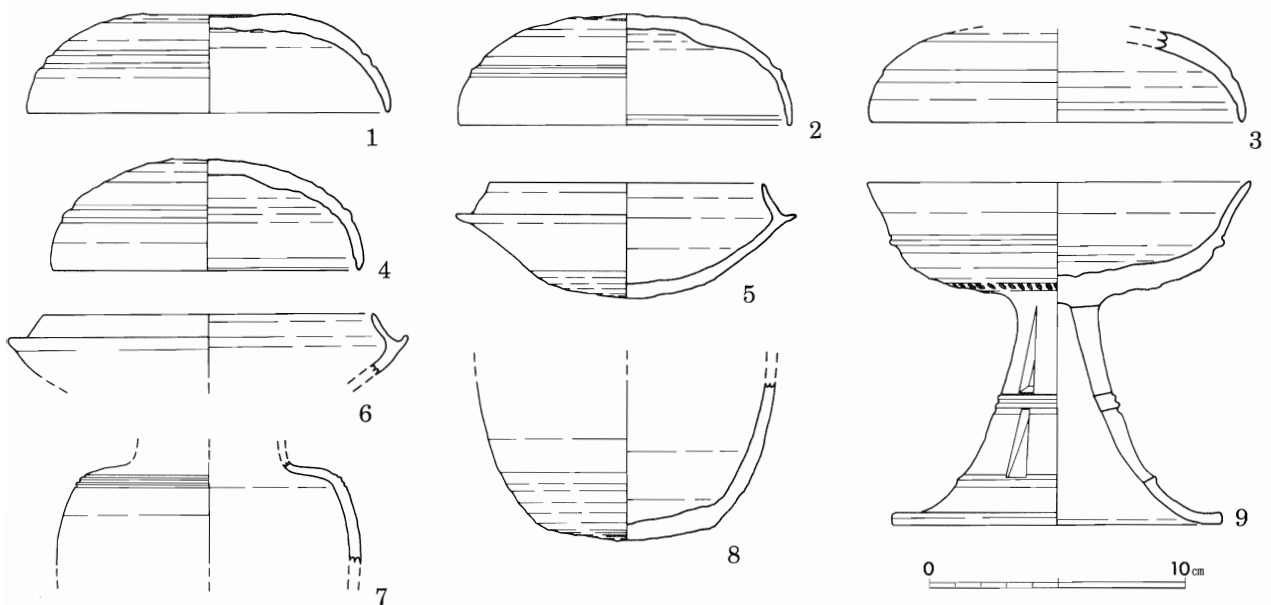
第203図 8区土壌実測図 1:40

2型である。

これらの組み合わせは出雲4期でも比較的古い様相をもつ。

土壌(第203図) SK 02は底面に小孔をもつ落とし穴状遺構である。平面形は円形で、径約1.2 m、深さ約1.1 m、小孔の径約30 cm、深さ30 cmの規模である。

SK 03は平面形が楕円形の土壌である。規模は約1.2×0.9 m、深さ約0.3 mの浅い土壌である。



第204図 8区 SK 01出土土器 1:3

8区 SI01出土土器一覧表

挿図番号	図版	出土遺構	器種	法量	形態	文様	調整その他	時分期類	備考
第198図-1	165	8区 SI01	弥生甕	口径16	直立気味の複合口縁		内面ケズリ	弥生 V-2様式	
-2	165	SI01	同上	口径14.4	同上	擬凹線4条	内面ケズリ	同上	
-3	165	SI01	弥生器台			クシ沈線4条以上	内面ミガキ?	同上	
-4	165	SI01	弥生甕	口径16.8	直立気味の複合口縁	擬凹線4条	内面ケズリ	同上	
-5	165	SI01	同上	口径18	内傾する複合口縁	凹線4条	同上	同上	
-6	165	SI01	同上	口径17.2	外反する複合口縁	クシ描沈線8条	同上	弥生 V-3様式	
-7	166	SI01	弥生底部	底径5.6	やや凹み底		外面ハケ目 内面ケズリ	弥生後期	
-8	165	SI01	弥生器台	口径27.8	外反気味の複合口縁	擬凹線13条	外面ミガキ	弥生 V-2様式	

8区 SI02出土遺物一覧表

挿図番号	図版	出土遺構	器種	法量	形態	文様	調整その他	時分期類	備考
第201図-1	166	8区 SI02	弥生甕		直立気味の複合口縁	凹線3条		同上	
-2		SI02	同上		同上	沈線	内面ケズリ	同上	
-3	166	SI02	同上		内傾気味の複合口縁	クシ描沈線6条以上	内面ケズリ	同上	
-4	166	SI02	同上		直立気味の複合口縁	クシ描沈線8条		同上	
-5		SI02	同上		同上	擬凹線3条		同上	
-6	166	SI02	同上		外傾する複合口縁	クシ描沈線5条	内面ケズリ	同上	
-7	166	SI02	同上		直立気味の複合口縁	無文	内面ケズリ	同上	
-8	166	SI02	同上		同上	擬凹線4条	内面ケズリ	同上	
-9		SI02	同上		外反気味の複合口縁	クシ描沈線6条	ヨコナデ	同上	
-10	166	SI02	同上		同上	クシ描沈線5条?	内面ケズリ	同上	
-11	166	SI02	同上		「く」字形の単縁口縁		同上	弥生後期	
-12	166	SI02	弥生底部		平底		内面ケズリ	同上	
-13	166	SI02	同上		同上		内面ナデ?	弥生	
-14		SI02	同上		同上 底部穿孔		内面ケズリ 外面ハケ目	弥生後期	
-15	166	SI02	同上		同上		内面指による押圧? ケズリではない	弥生	
-16		SI02	同上		同上		内面ケズリ	弥生後期	
-17	166	SI02	弥生高坏?				外面ミガキ 内面ケズリ	同上	
-18	166	SI02	弥生器台			クシ描沈線9条	外面ミガキ 内面ケズリ	弥生 V-2様式	
-19	166	SI02	打製石器	長11.7 幅11.5 厚3.2			背面は礫面。主要剥離面縁辺に2次調整。	旧石器?	

8図 SK 01出土土器一覧表

挿図番号	図版	出土遺構	器種	法量	形態	文様	調整その他	時分期類	備考
第204図 -1	168	8区 SK 01	須恵器 蓋	口径10.2 高3.9	稜は2条の沈線による		天井部回転ケズリ	蓋 A 5 4期	
-2	167 168	SK 01	同上	口径12.5 高4.4	同上		天井部回転ケズリ (中央ヘラ切痕)	同上	
-3		SK 01	同上	口径14.5	稜は1条の沈線による内面に沈線		天井部回転ケズリ	同上	
-4	167 168	SK 01	同上	口径12 高4.4	稜は2条の沈線による内面に段		同上	同上	
-5	167 168	SK 01	須恵器 環	口径10.8 高4.6	たちあがり内傾		底部回転ケズリ	同上	
-6		SK 01	同上	口径12.8	同上			同上	
-7		SK 01	同 短頸壺	最大径12			カキ目		
-8	167	SK 01	同上?	最大径12			回転ケズリ		
-9	167	SK 01	須恵器 高環	口径15 脚端径13 高13.7	口縁外反	底部に刺突 2段3方透し 沈線2、突線1		長脚無蓋 B 2 4期	

第10章 玉作関係遺構と遺物

1. 玉作工房跡・関係遺物の概要

福富Ⅰ遺跡では玉作関係遺物が大量に出土した。

もっとも多く出土したのは4区と5区の間で、当初は5区の東端として調査をおこなった。ここは、福富丘陵の西側斜面で、現在の福富集落の最奥部にあたる。『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅰ－玉作関係遺跡』（注1）では「松本遺跡」として登録されている遺跡と同一である。地形的には5区から続く急斜面が緩斜面に転換する地点で、この付近から本書で3区とした平坦な丘陵が東に伸びる。

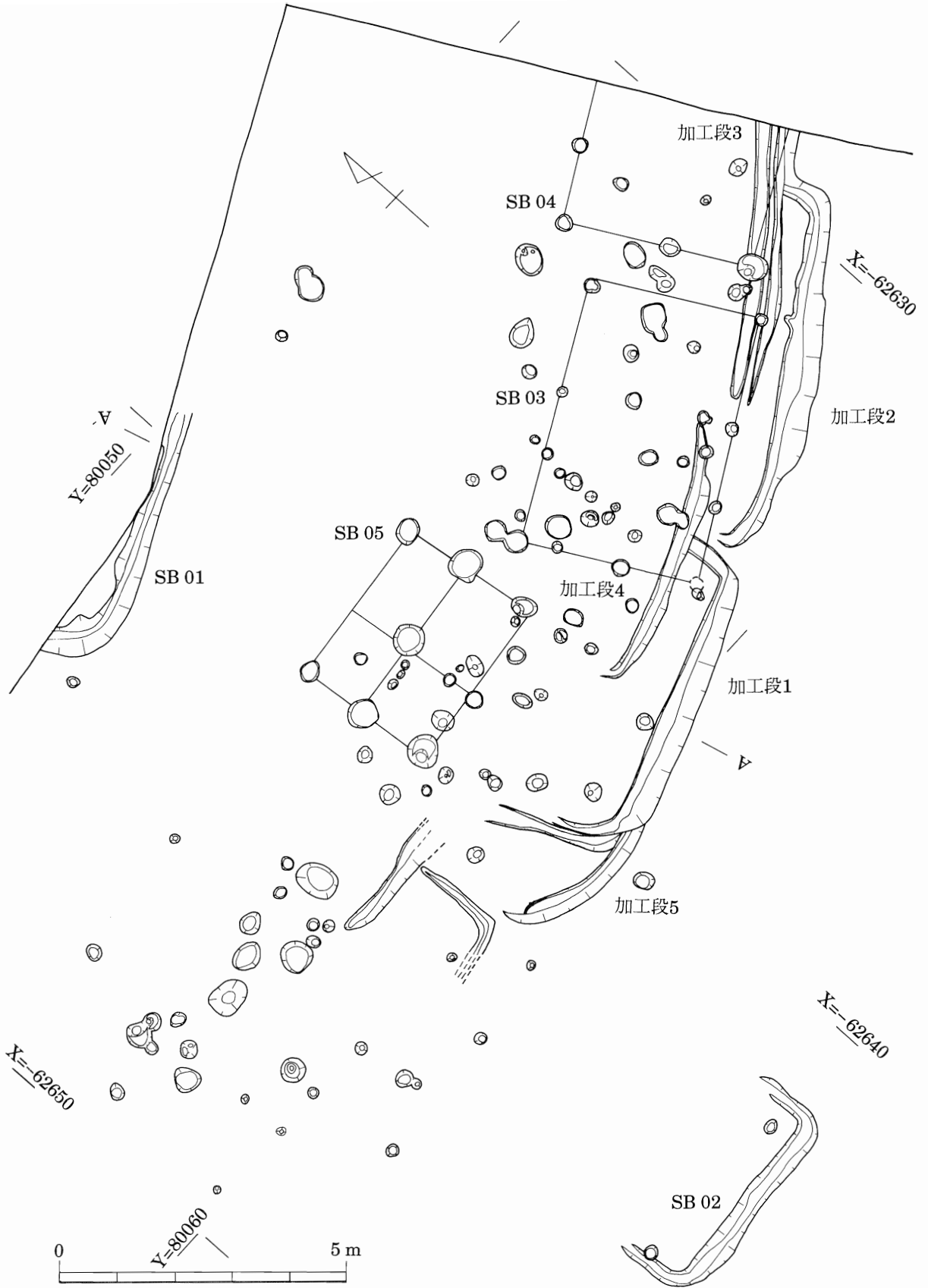
検出された遺構は竪穴住居跡（？）2棟（SB 01、02）のほか、加工段状の住居跡5棟以上が重複して検出された（加工段1～5）。これらの住居跡内からは碧玉のほか、めのう、水晶、滑石などが少量出土し、また未成品も散見されたことから玉作工房跡と判断した。主な遺物は碧玉で、剥片、チップを含めると5,000点以上にのぼる。これにめのう、水晶、滑石が少量混在している。碧玉と滑石については原石の集積が確認された。

ところで、滑石は非常に軟弱で調査時に崩れてしまうものが多く、実際には検出数以上あった可能性もある。反対に、大きな剥片でも採集後時間がたてば摂理面から剥離が進んだものもあり、自然の剥離と人為的な剥離の区別がつきにくい。大きな原石の集積が発見されたことから滑石製品を大量に作った可能性があるが、小さな剥片の取り上げが困難でありまた人為的な剥片の抽出ができなかったことから、今回の報告では滑石については出土数を数えなかった。

このほかに、4区と7区でも比較的多く玉作関係の遺物が出土した。ここでは工房跡などの遺構は検出できず、遺物はいずれも包含層中から出土した。両地区ともめのう製勾玉の未成品が比較的多い。4区は玉作工房跡とは直線距離にして約20 m と近いので玉作工房跡の遺物が混入したとも考えられるが、両者が丘陵頂部を挟んで東西両側斜面に立地し互いの遺物が自然の状態では混じり合うことが考えられないこと、製作品に違いがみられることから、遺構は検出できなかったが4区周辺でも玉生産を行っていた可能性が強い。

砥石は、各地区とも結晶片岩製の砥石が多く、玉作工房に特徴とされる砂岩製の筋砥石は出土しなかった。ただし、結晶片岩製砥石の表面に微妙な筋状の凹凸がみられるものがあることから、いわゆる筋砥石と同様な使い方をしていたと思われる。なお、結晶片岩については島根大学高須晃氏に分析を依頼した。

（注1） 島根県教育委員会『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅰ－玉作関係遺跡』1987



第205図 玉作工房跡遺構配置図 1:100

2. 玉作工房跡 (第205図 図版169)

4区の住居跡同様、地山を掘削して加工段を作り出し、その上に掘立柱建物を建てたものと考えられる。

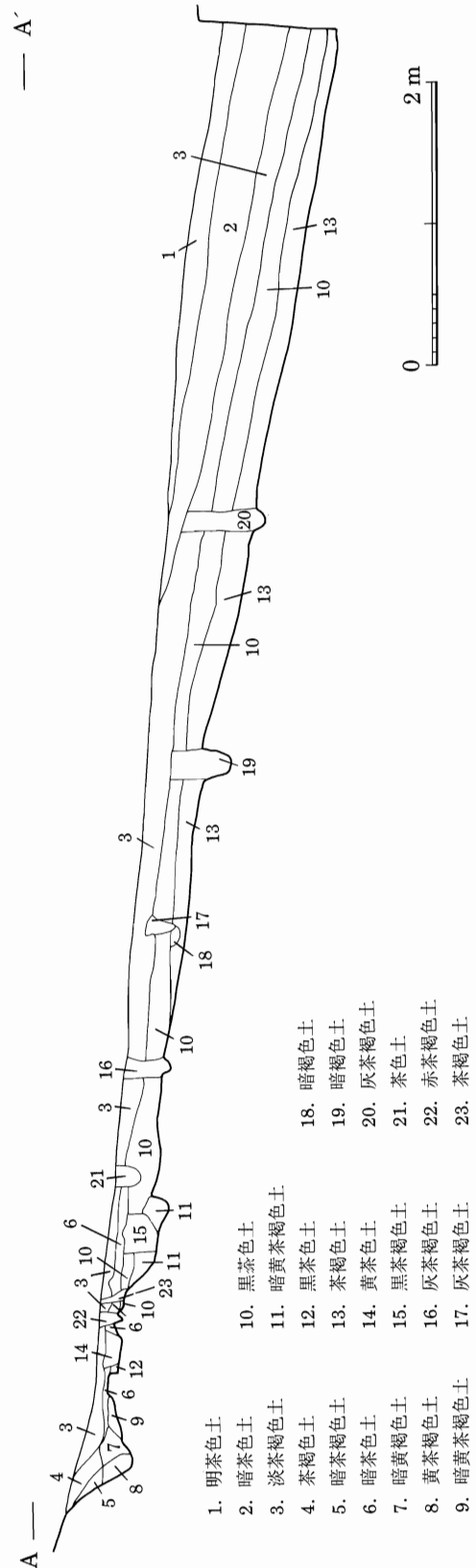
加工段は少なくとも5つが重複していると思われるが、前後関係については確認することができなかった。いずれも壁沿いには壁帯溝がめぐっている。住居跡の壁および壁帯溝は重複しているため、加工段1から加工段5にかけては一つの大きな弧状の加工段に見えるが、ところどころで壁の向きが変わっていることから4棟の加工段の重複と考えた。

床面ではピットが多数検出したが、掘立柱建物として抽出できたのは3棟にすぎない。これらは加工段に収まらないものばかりで、玉作工房の建物跡と考えることはできないと思われる。

遺構は山側では地山に掘り込まれていたが、谷側では暗赤褐色土に掘り込まれていた。6区の調査結果からこの暗赤褐色土からは尖頭器などの石器が出土したことから、この層は縄文時代草創期に堆積した層と考えられる。この層では非常に遺構が検出しづらかったためピットを見落としていることも考えられる。そのため加工段に伴う掘立柱建物跡が検出できなかったかもしれない。

遺物は第10層から上の層で出土した(第206図 図版170)。第1、2層では土器の出土が多く、時期的にも弥生土器から中世までさまざまであった。碧玉などの玉作関係の遺物は第3層と第10層でとくに多く出土した。しかし大多数の遺物は平面的には加工段1から北側約5mまでの範囲(調査区中程まで)でしか出土していない。自然の堆積で同一層なら、多寡はあったとしても谷側に流れているのが自然と思われる。あるいは第10層がさらに遺物を包含している層と無遺物層とに分かれるかもしれない。

調査区中程から谷側(北)は自然の傾斜に沿って土層



第206図 玉作工房跡土層図

が堆積しているように思われたが、加工段1から約5 m までの範囲は水平に近い状態で堆積していた。第13層は加工段4の加工段の掘削により、第10層は加工段1の加工段の掘削により影響を受けたと考えられる。この部分の第10層については加工段1を作る際に加工段6を埋めて貼床とした可能性もある。

各加工段の形態、規模は以下のとおりである。

遺構名	平面形	東西長	南北長	備考
加工段 1	「コ」の字形	5.5 m	2.5 m	壁は南側のみ残る
加工段 2	南北端わずかに「コ」の字形に屈曲	6.5 m		壁は南側のみ残る
加工段 3	直線状	4.5 m		大部分壁帯溝のみ残存
加工段 5	弧状	3.0 m		加工段1を拡張か
加工段 4	直線状	4.5 m		加工段1の床面下で検出

このうち加工段1・2は比較的原形を留め、規模が確認できる遺構である。一辺が5～7 m の住居跡は5世紀から6世紀によくみられる住居跡の規模であるので、同時期とみられるこれらの遺構も矛盾のない規模である。

加工段1の西側には加工段5が重複して作られている。前後関係についてははっきりしない。地山面近くでところどころ粘土がみられこれが床面と考えられたが、粘土の検出範囲は小範囲で面的な広がりはみられなかった。

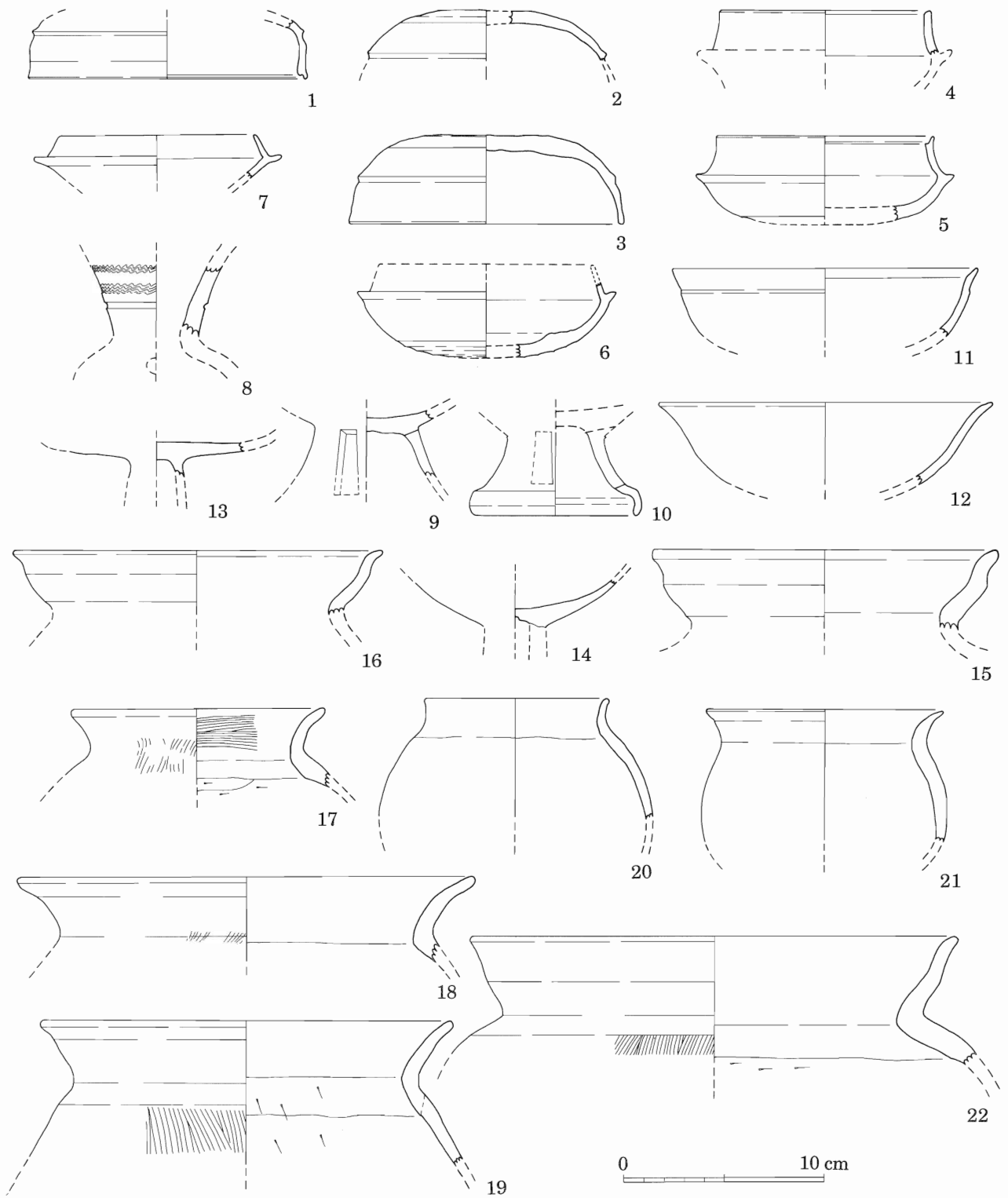
ところで、碧玉をはじめとする玉作関係遺物は、後述のように加工段1・4・5にとくに集中している。このことから玉生産の中心はここに求めることができ、加工段1・4・5は玉作工房跡として連続的に建て替えられた可能性が考えられる。

玉作工房跡出土の土器と工房跡の年代（第207～208図 図版177. 178） この部分での土器の出土は少ない。須恵器（1～12）は7、8のように新しい時期のものが少数混じるが、ほとんどは出雲第1期の須恵器である。土師器甕は口縁部が複合口縁状を呈するもの（15、16）と単純に外反するもの（17～23）とがあるが、いずれも頸部は「く」の字形に強く屈曲し、胴部は球形に近い。高坏は口縁部が大きく開く浅い坏部をもつ（12～14）。また、甑は底部に1本の棧を渡すものが出土している（第208図25～27）。これらの土師器は須恵器が普及する直前のものから上記の須恵器と時期を同じにするものである。

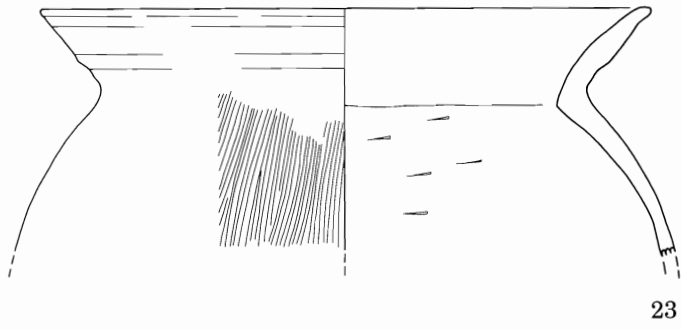
以上のように、出土した土器はほとんどが須恵器が普及する直前から須恵器出雲1期に平行するもので、7、8は混入の可能性が高い。このことからこの玉作工房跡では須恵器出雲1期前後に短期間玉製作がおこなわれたと考えられる。

玉の分布状況

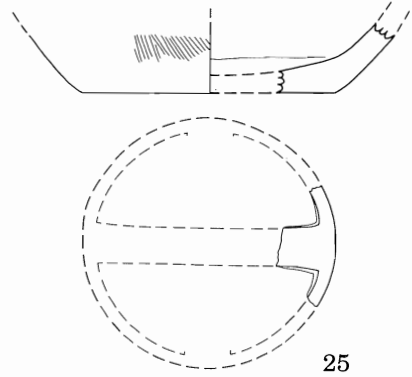
碧玉の分布状況（第210図） 碧玉は各所で出土しているが、とくに加工段1・4・5で多く



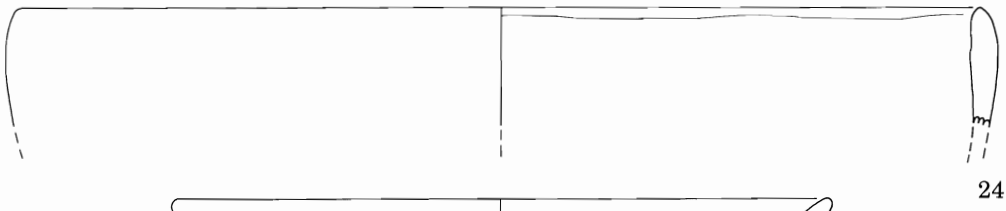
第207图 玉作工房跡出土土器 (1) 1:3



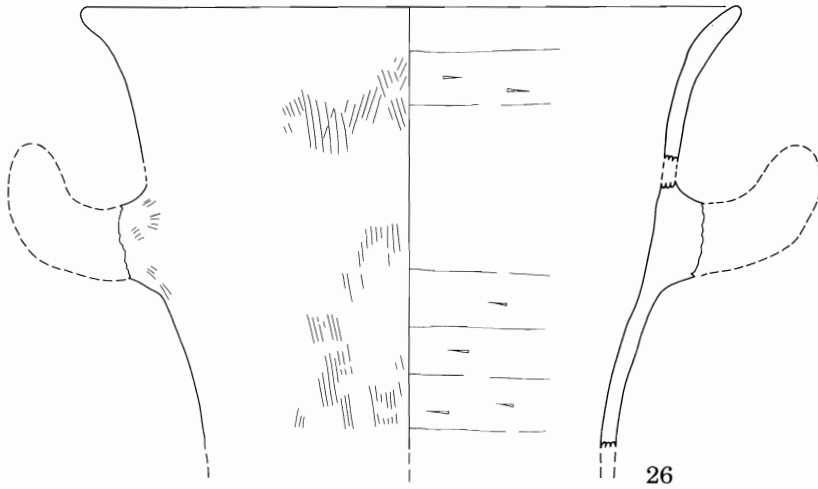
23



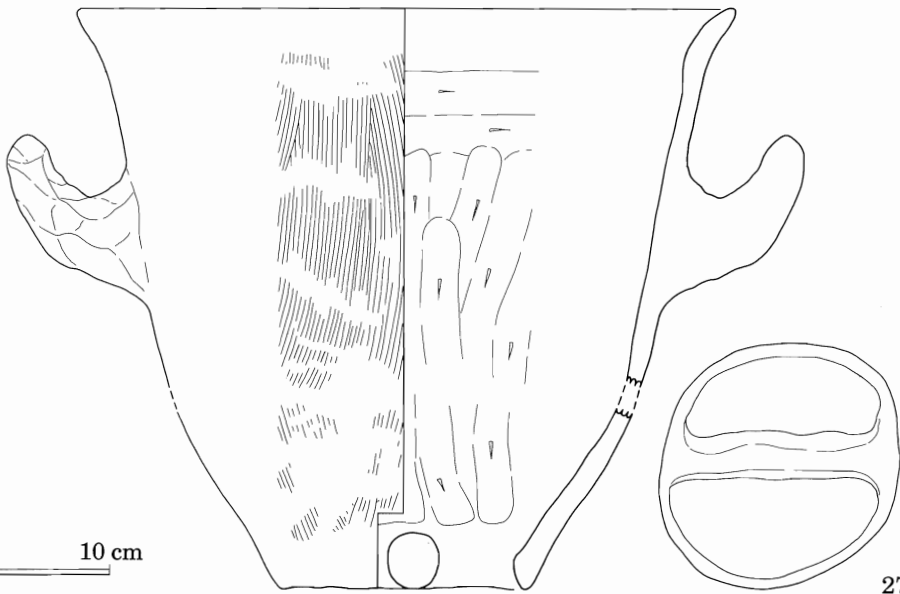
25



24



26



27

0 10 cm

第208図 玉作工房跡出土土器 (2) 1:3

玉作工房跡出土土器 一覧表

挿図番号	図版ページ	法量 (cm)	形態の特徴	文 様	手 法	時 期	備 考
第207図 -1		口径13.9	稜鋭く、口縁端に段			出雲1期	
-2			天井丸く稜明瞭		回転ケズリ	同上	ろくろ左回転
-3		口径13.8 高さ4.5	稜明瞭で口縁端平坦面		同上	出雲1~2期	ろくろ右回転
-4		口径10.6	たちあがり長く端部平坦面			出雲1期	
-5	図版177	口径10.8	同上		回転ケズリ	同上	ろくろ右回転
-6	同上		受部短い		同上	同上	ろくろ左回転
-7	同上	口径9.8	たちあがり短く内傾			出雲5期	
-8	同上		頸部細い	波状文		出雲4期	
-9	同上		短脚	方形透し(3方)		出雲1期	
-10	同上	底径8.2	短脚・端部屈曲	方形?透し		同上	
-11	同上	口径15.4	口縁端外傾外面に段			同上	高坏か?
-12	同上	口径16.8	口縁外反			同上?	同上
-13	同上				内面ミガキ?	中期	
-14	同上		深い坏部			同上	
-15	同上	口径17.4	形骸化した複合口縁		ヨコナデ	同上	
-16		口径18.4	同上		ヨコナデ	同上	
-17	図版177	口径12.4	口縁外反		ハケ目、ケズリ	同上	
-18	同上	口径23	口縁強く外反		内面、ケズリ	同上	
-19	同上	口径20.8	同上		内面ケズリ 外面ハケ目	同上	
-20		口径9.2	短頸球形の胴部			中期	
-21	図版177	口径12	口縁短く外反球形の胴部		内面ケズリ	中期	
-22	同上	口径24.6	形骸化した複合口縁		内面ケズリ 外面ハケ目	中期	
第208図 -23	図版178	口径24	口縁外傾胴部張る		同上	中期	
-24	図版178	口径38	内湾気味に直立		内面ケズリ		
-25	同上		底孔中央に棧状の棧		内面ケズリ		
-26	同上	口径25.6	口縁外反		外面ハケ目+ナデ 内面ケズリ		
-27	同上	口径25.6 底径9.6 高さ23	底孔中央に棧状の棧		同上		

出土した。また、加工段3でも、加工段1ほどではないが、集中的に出土している。このことから、ここでの玉作生産は加工段1・4・5と加工段3が中心であったと思われる。

加工段1では中央部とやや南寄りで碧玉が集中的に出土する地点があった。中央部分の集中地点では剥片素材が集中しており（第209図 図版172）、明らかに人為的に集積された状態で出土した。ここでは約30cm四方の範囲で上部から下部まで剥片やチップが集中しており、検出はできなかったがここに何らかの遺構が存在した可能性は高い。

加工段1の南寄りの地点では碧玉原石の上に剥片素材または石核が載せられた状態で出土した（図版171）。これも人為的に集積された状態であった。

これらは、原石、石核、素材剥片の集積場所であったと考えられる。

石核はおもに加工段1の南寄りで出土している。ここでは他の未成品も出土しているが、とくに石核が集中していることが注目される。素材剥片は加工段1の南寄りの地点のほかに中央部分でも集積がみられる（第209図 図版172）。また、側面調整剥片の分布は把握できなかったが、角柱状未成品は加工段1の北東半部に集中しているようである。

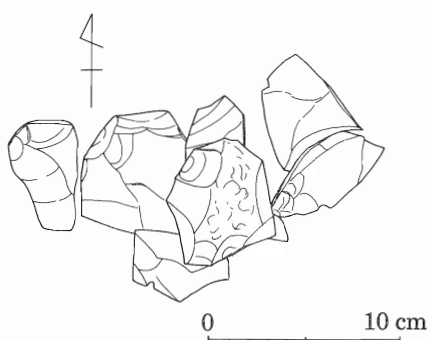
以上の分布状況から考えると、加工段1では西南端部で原石から石核の作出および石核から剥片素材の作出が行われ、北東半部で素材剥片から調整剥離にかけての作業が行われていたと復元することができる。

めのうの分布状況（第211図） この調査区ではめのうの出土はあまり多くない。めのうは加工段1の西北部で多く出土しているが、ほとんどは加工段1より新しいと思われる SB 05の柱穴から出土している。これは柱穴を埋める際、掘り起こした土の中に含まれていためのうも同時に埋めたものと解される。いずれにしてもめのうの分布状況からは作業状況を復元することは困難である。

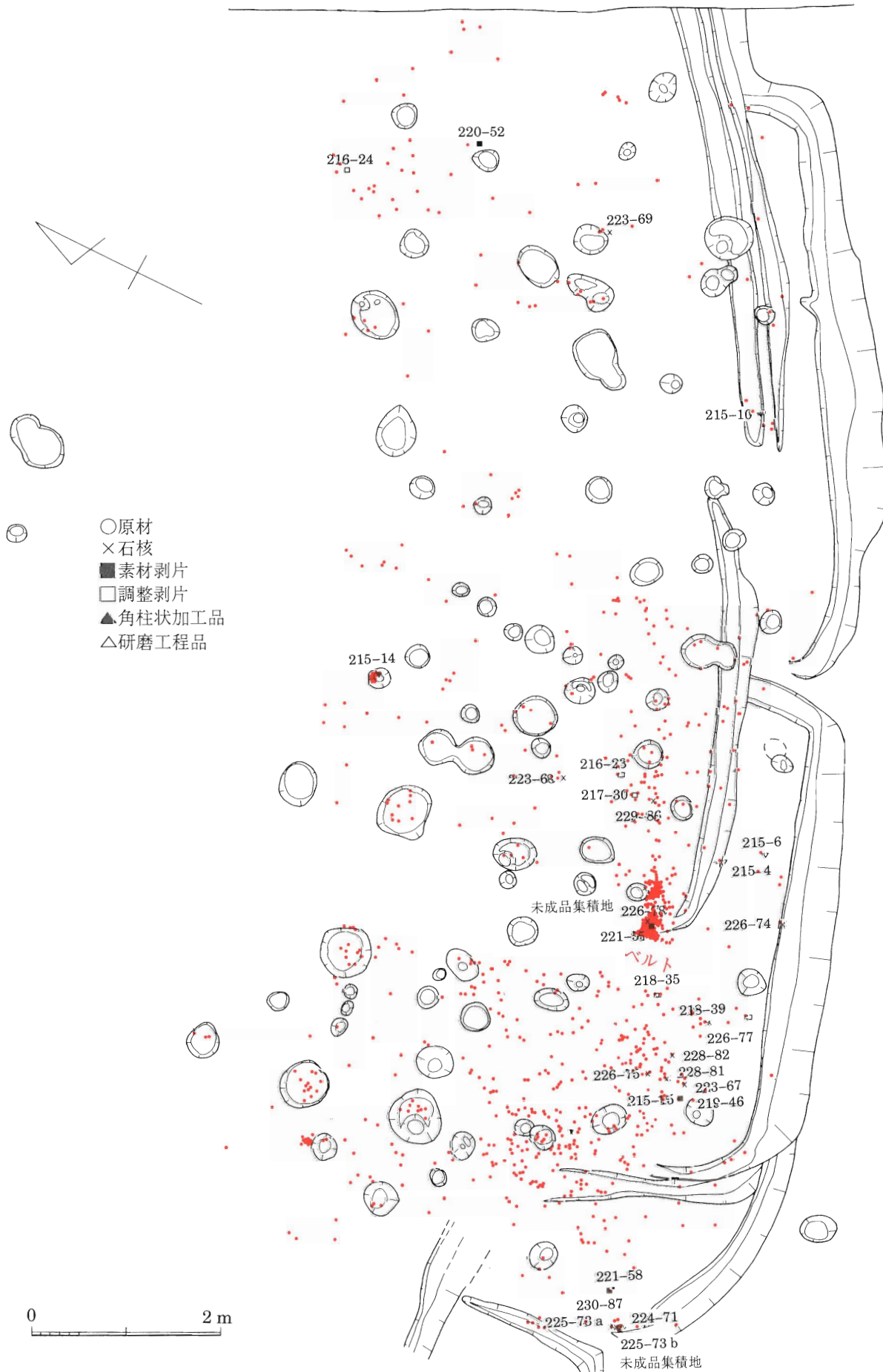
水晶の分布状況（第212図） 水晶も出土量が少ないが、加工段1全面から出土している。石核や素材剥片の分布は顕著な集中が見いだせないが、調整剥離完了品は中央から北東半に多く分布する傾向が窺える。碧玉同様、この部分で細部の調整を行っていた可能性がある。

滑石の分布状況（第213図） 滑石もおもに加工段1から出土している。滑石については前述のように自然の摂理か人為的な剥離か区別できないこともあり、各工程ごとの分布は把握できていない。また、精査中に崩れてしまい取り上げられなかったものも多かったため、この分布図が当時の滑石製品の作業状況を表すとはいえないことを断っておく。

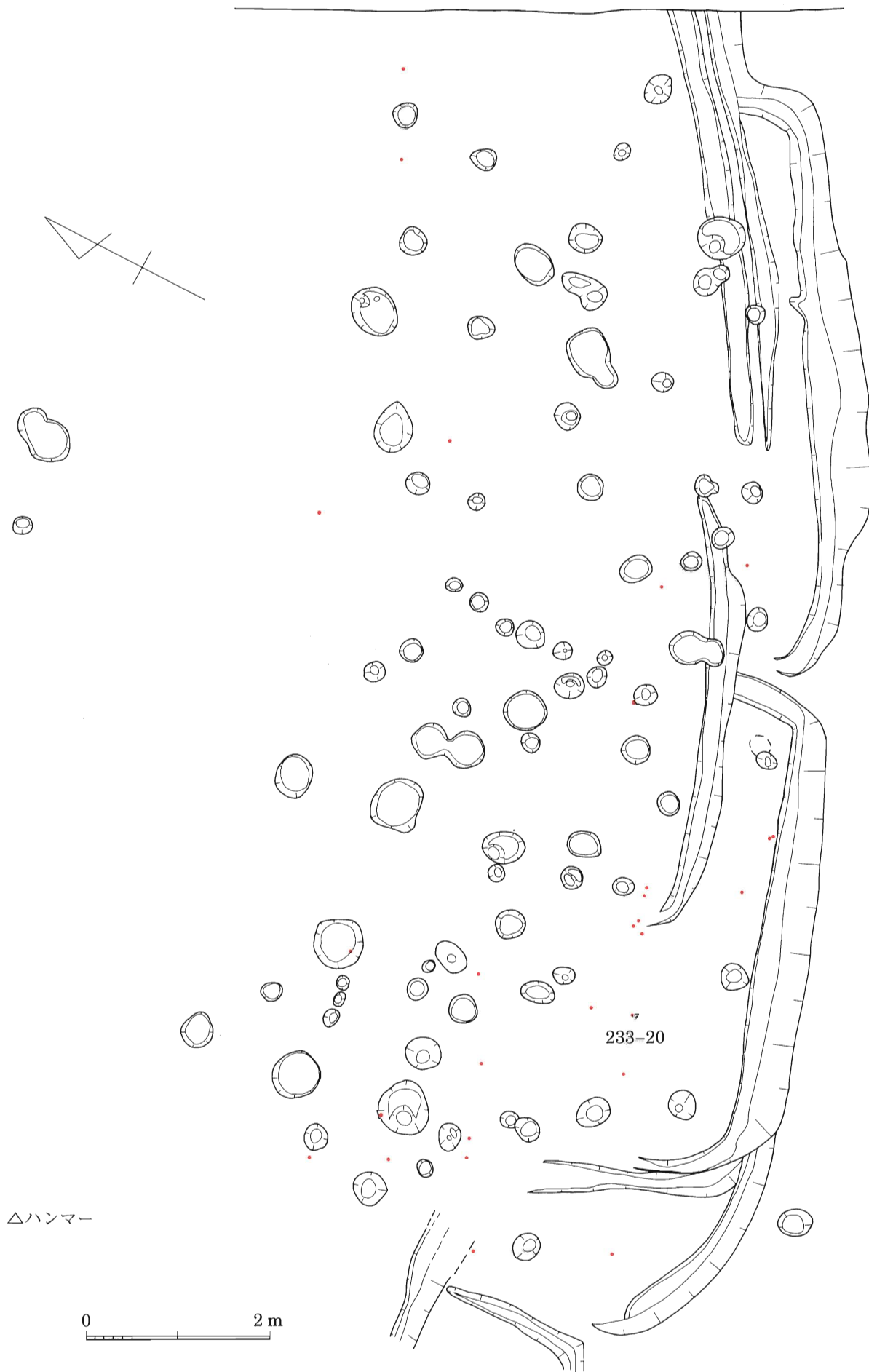
滑石で注目されるのは加工段3の北側で出土した原石の集積である（第214図 図版173）。大きなものでは約40cmの原石が4個積み重ねられていた。これも人為的な集積と思われた。



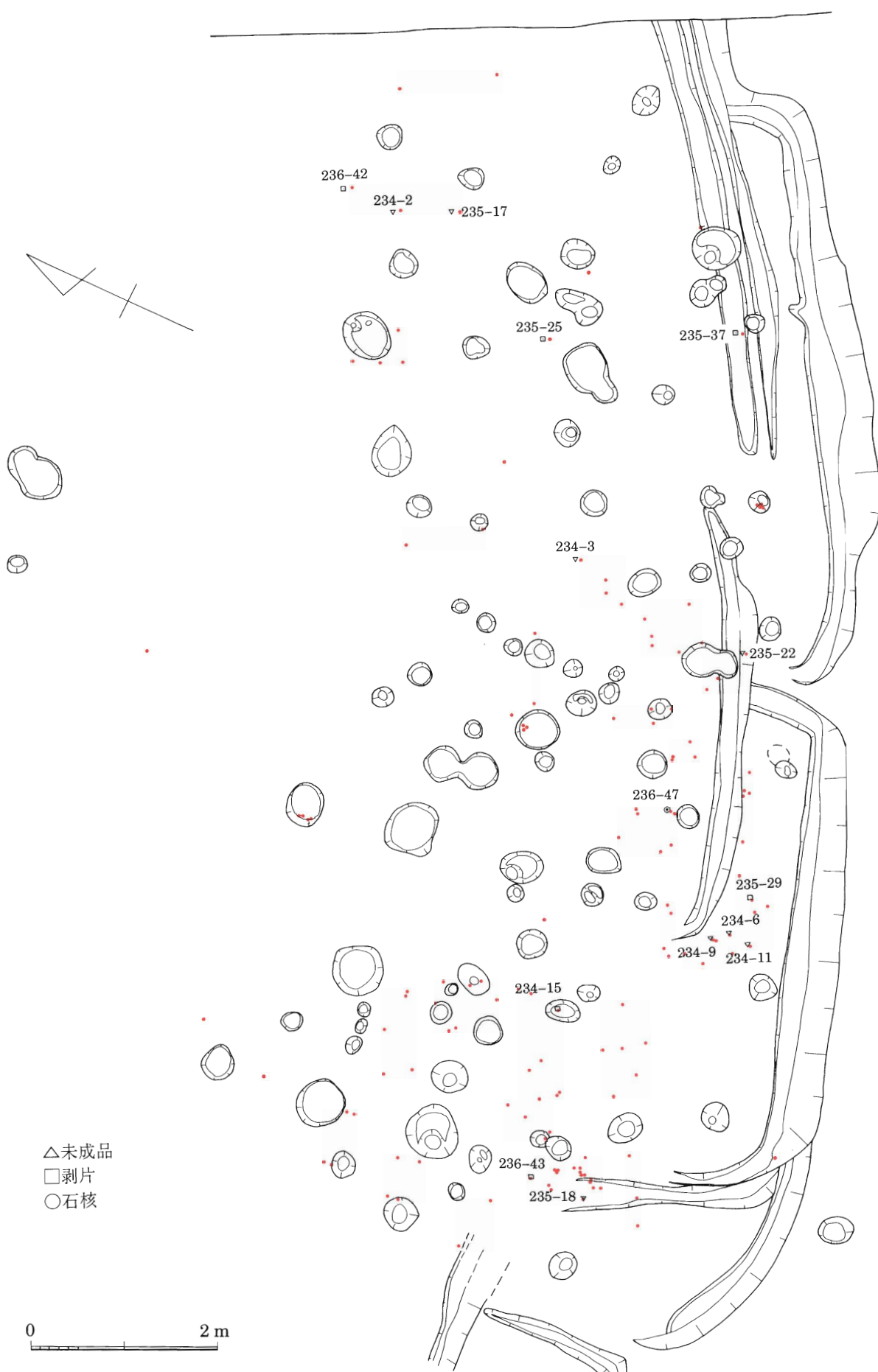
第209図 碧玉集積状況 1:4



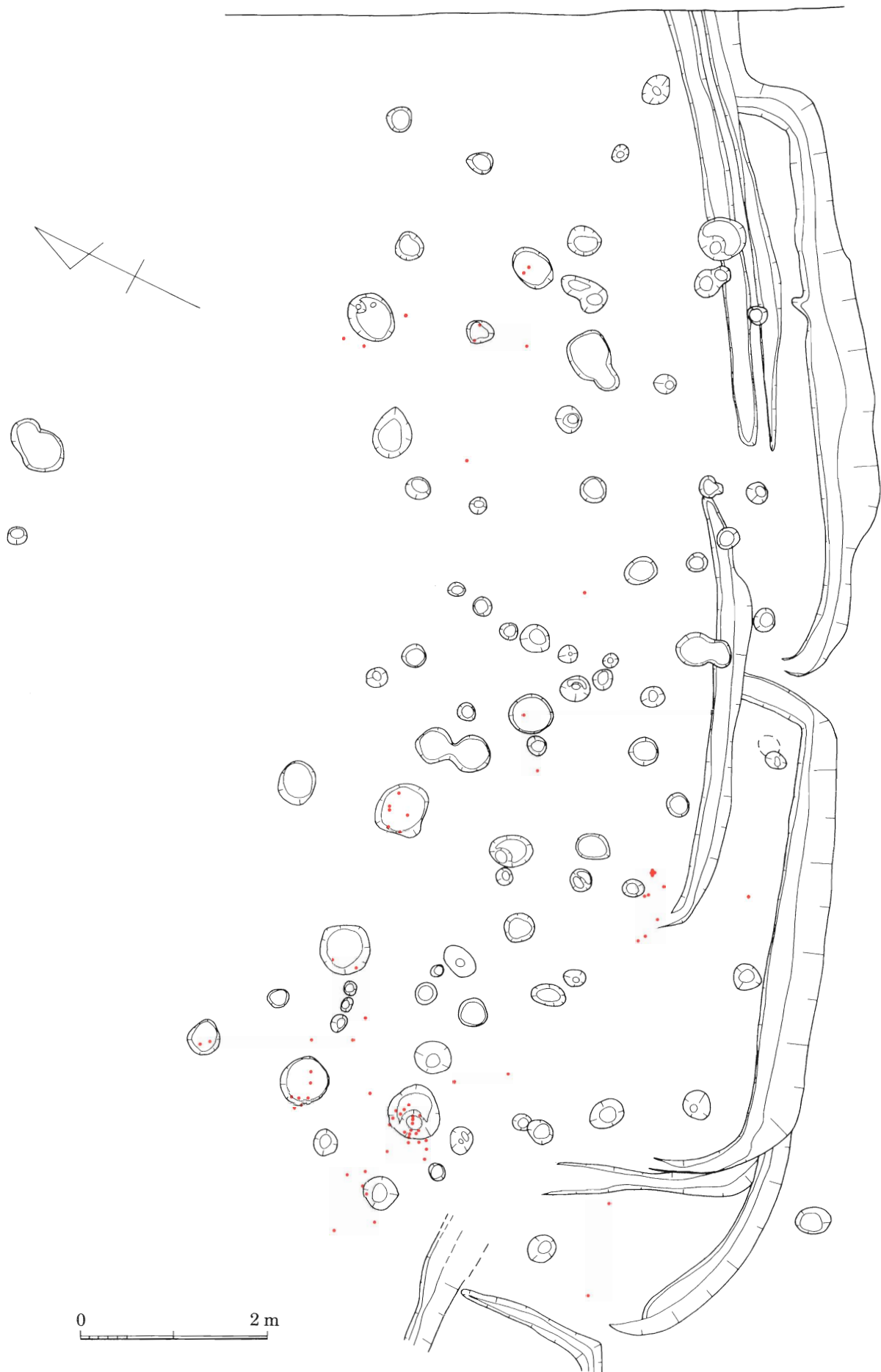
第210図 碧玉分布状況 1:60



第211図 めのう分布状況 1:60



第212図 水晶分布状況 1:60

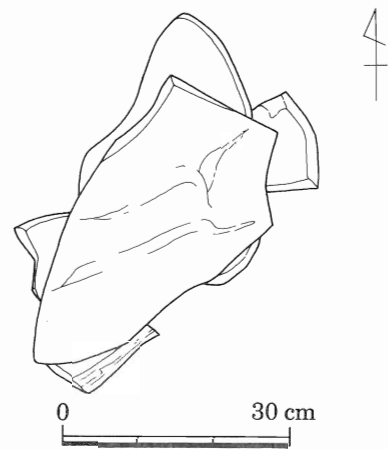


第213図 滑石分布状況 1:60

滑石の明らかな未成品の出土は少ないが、このような大きな原石が集中して出土したことは滑石製品が大量に生産された可能性を示唆している。加工がしやすいので製作中の失敗が少なく、多くが成品として流通した結果、剥片や未成品の出土が少ないと考えることはできないだろうか。

玉作関係遺物

碧玉製管玉未成品（第215～234図 図版179～184） 玉作工房跡からは碧玉は5,000点以上出土した。ここでは碧玉で勾玉未成品と判断されるものは出土せず、器種の明らかな未成品は管玉だけであった。



第214図 玉作滑石原石出土状況
1:10

出土した碧玉はほとんどがチップおよび剥片であるが、石核や未成品も500点近く出土している。未成品のすべてを報告することはできないため、工程順に分類したうえでそのなかから一部を図化し掲載した。掲載の順は、完成品に近いものから原石へと工程の逆に掲載することとした。

製作工程は、①荒割り－②形割り－③側面打裂－④研磨－⑤穿孔という工程が復元され、この名称が一般化されている（注1）。ここでは基本的にはこれに倣うが、この呼び方は工程名であってそれぞれの段階の遺物と呼ぶには適当ではない。また、最近の調査で必ずしも研磨工程終了後に穿孔するのではなく、第1次的な研磨を施した後に穿孔し、その後さらに仕上げの研磨を施すことが判明している（注2）。以上のことから、本書では管玉未成品については各未成品を原材、石核、素材剥片、調整剥片、角柱状加工品、一次研磨工程品、仕上げ工程品と呼ぶことにする。先の製作工程名に照らせば、①荒割り工程によって、原材から石核を作出、②形割り工程によって石核から素材剥片を採取、③側面打裂工程によって調整剥片から角柱状加工品へと整形、④研磨工程により第一次研磨品に整形、⑤穿孔工程により第一次研磨品を穿孔、⑥穿孔完了後さらに仕上げ研磨（仕上げ工程品）し完成 という対応となる。なお、穿孔工程が仕上げ研磨工程に先行することはまちがいないが、現物に即すと区別しにくい。穿孔が完成したものを穿孔の完了として評価するのか、仕上げ調整の開始と評価するのか。前者の評価をした場合は仕上げ研磨の途中のものがあるのか、あるいは研磨途中であることを現実に識別できるのか、という問題もある。また、「原石」と呼ばず「原材」と呼ぶのは、原料採取場である程度原石を加工して持ち帰ることが予想されるためである。

以上のように定義すると、福富I遺跡から出土した碧玉製管玉未成品は、仕上げ工程品、一次研磨工程品、角柱状加工品、調整剥片、素材剥片、石核、原材である。

仕上げ工程品（第215図1～4 図版179） ほとんど完成品に近い未成品である。孔は貫通

しており一見すれば管玉完成品であるが、表面は幅1～2mmの平坦面の集合体であり、その境にはわずかながら稜が観察される。出土量は少なく、掲載した4点がすべてである。

いずれも長さ2.2cm～2.7cm、径6～7mmの大きさである。1は他の未成品よりも断面形が円形に近く、仕上げ研磨の途中で中央から折れたものと思われる。孔は一端が3mm前後と大きく、反対の一端が1～2mmと小さい。さらに、孔径の小さな一端はわずかに皿状にくぼんでいることから、穿孔はいずれも片面穿孔と考えられる。

これらの管玉の大きさは今までに島根県で出土した管玉の法量分布のほぼ中心に位置し、当地でごく一般的な管玉が生産されていた様子が窺える。

一次研磨工程品（第215図5～10 図版179） 角柱状加工品に研磨を施すもので、穿孔はされていない。これも図示したものがすべてで、出土量は少ない。5、6は一次研磨がほぼ終了した未成品で、剥離面がほとんど残っていない。とくに5は側面には7～8面の平坦面がみられるが、断面形は円形に近く両端面も研磨されており、すでに管玉の形状をなしている。7は研磨がかなり進んだ状態ではあるが、剥離面が随所にみられ研磨途中であることがわかる。断面形は方形で研磨は側面3面と端面1面に施されるが、側面1面と端面1面はまったく施されていない。9、10は研磨開始直後のものと考えられる。側面または端面の一部のみに研磨が施され、大部分は調整剥離がそのまま残っている。

研磨痕は側面が長軸に平行するして残るものが多いが9では長軸に直交してつけられている。また、6、9、10は側面の研磨が終了していないにもかかわらず、端面の研磨が行われている。研磨痕の観察ではとくに規則性は窺えないことから、研磨の順番や方向はとくに決まっていなかったようである。。

角柱状加工品（第215図11～第216図22 図版179） 側面や端面に調整剥離が施されたもののうち、研磨直前の未成品である。法量は長さ1.8～3.9cm、幅または厚さ0.8～2.5cmの間に収まるが、長さ2.5cmから3cm、幅または厚さ1.5cm程度のものが多い。全体の形状は10～16のように直方体に近いものと、17～22のように平面形がきれいな直方体をせず断面形が三角形または丸みをもつものの2者がある。おそらく素材剥片の形状によって形態が違うものになったと考えられる。

側面には調整剥離がみられるが、1面につき3～4回程度の剥離が多くあまり細かい剥離の集合とはいいがたい。また、大多数の角柱状加工品は一面に主要剥離面と思われる大きな剥離面が残っている。端面は大きな剥離のままで調整が施されないもの（20、21など）と、2次調整が施されるもの（13、22など）とがある。また、19には工具痕が多くみられ（図版202）、22には敲打によるつぶれが顕著に残っている。

なお、剥片のなかには細かな剥離面をもつ円形の剥片が100点以上出土している。これは角柱状加工品の端部と思われるが、欠損品としては数が多いように思われる。この段階の仕上げ

に端部を剥離して形を整えたこともあったのかもしれない。ただ両端に調整剥離がみられる角柱状加工品もあるので、これが普遍的な技法であったとはいえない。

角柱状加工品の出土数は多く、欠損品も含めると80個あまり出土した。これは研磨段階以降の未成品に比べ、非常に多い出土量である。これはこの工程での欠損率がかなり高かったためとも考えられるが、完形のものが約60点もあるので欠損率の高さだけでは説明できない。研磨工程品がここに偶然に残った感が強いのに対し、角柱状加工品の出土量は何らかの製作工人の意志が反映していると感じざるをえない。

調整剥片（第216図23～第219図41 図版179.180） 素材剥片に調整剥離を加えたもの。わずかでも調整剥離がみられるものはここに分類した。角柱状加工品はこれに調整剥離を加え続けた結果の形状と考えられる。調整剥片は剥離が少ない段階であるので、完形と欠損品との区別は難しい。ここでは明らかな欠損品以外は完形としてあつかった。

形状は、大きく板状（28～32など）または直方体状（23～27など）を呈するものと、断面形が三角形で背面に稜線をもつもの（36～41）とに分けられる。後者は前者に比べ背面に剥離が多い傾向がある。板状または直方体状の調整剥片はほとんどが各面に大きな剥離面を残し、主要剥離面の認定が困難である。板状または直方体状と判断した調整剥片は100点と、断面三角形を呈す調整剥片の17点と比べると圧倒的に多い。

法量は長さ1.5～5.5cm、幅0.9～3.5cm、厚さ0.6～2.7cmの範囲である。当然ながら板状のものは幅に比して厚さが薄く、断面三角形のものは厚さが厚い傾向にある。長さが2cm未満のものは2点しかなく、調整剥片としてはきわめて小型の部類である。この大きさの剥片から果たして管玉が作れるのか疑問が残るところであるが、長さ8mm、径4mm程度の管玉もあるので（注3）、この剥片から管玉が作れないわけではない。

調整剥離は角柱状加工品の調整剥離と変わらないように思われる。また、板状または直方体状の調整剥片にみられる調整剥離前の大きな剥離面には規則性はみられないようである。

素材剥片（第219図42～第222図62 図版180） 石核から剥離したばかりの剥片で、調整剥離は施されていない。大きなものでは石核の小さなものと区別がつきにくい。形状は、大きく板状または直方体状（42～51など）を呈するものと、断面形が三角形で背面に稜線をもつもの（52～64）とに分けられる。前者は各面に大きな剥離面を残し、どの面が主要剥離面か判断がつきにくい。断面形三角形のものは主要剥離面を明瞭に残し、背面には石核段階での剥離面が多くみられる。両者ともに長さ4cm、幅3cm以上（第220図48程度の大きさ）のものはさらに分割して素材剥片を作り出す可能性もある。

両者の出土数は板状または直方体状のものが70個、断面形三角形のものが55個とやや前者が多いものの、調整剥片ほどの開きはみられない。

これらは最小のもので長さ長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm、最大のもので長さ6.9cm、幅5.8

cm、厚さ4.3cmを測る。小さなものはあまり調整剥離を加えなくても、さほどの労力をかけずに成品ができるほどの大きさである(42など)。ただし長さ2cm未満の素材剥片は1点しかなく、このような効率のよい剥片が採れるのはかなり偶然性に左右されると思われる。全体の比率をみても、長さ3cm未満が19.2%、3cm～3.9cmが36%、4cm～4.9cmが25.6%、5cm以上が18.4%と、3cm～3.9cmの長さがやや高い比率を示すものの、法量ではとくに突出した数値を示す物はない。長さ3cmから7cm程度の大きさの剥片が採ればよかったのであろうか。

板状または直方体状の剥片は剥離の方向には規則性がみられないようである。また、断面形三角形の剥片では主要剥離面は上下端からの打点が多いが、これは石核の形状に起因すると思われる。背面の剥離のうち連続的に剥離したと思われる剥離面(53、54など)をみても、規則性は認められない。

なお、48 a が素材剥片、48 b が調整剥片で、48は両者の接合状態である。これをみると長さ4.5cm、幅3.2cmの板状の剥片を石核として(48)、これを分割して素材剥片とし(48 a)、さらに調整剥離を加えていった(48 b)ことがわかる。この接合資料から、47などは剥片石核となる可能性もある

石核(第223図63～229図86 図版180～184) 素材剥片の剥離を目的としたものを石核とした。残核もこれに含めた。小さなものでは素材剥片と区別がつきにくいものが多く、複数の素材剥片が採れるものを石核とした。したがって、長さや幅が複数個体分あっても厚さが一定でなく管玉分の厚さが一部にしかないものは素材剥片または剥片とした。

形状は板状、直方体または立方体状、礫状、断面形三角形などさまざまな形態がある。板状、直方体または立方体状の石核は比較的大きなもの(65～72など)と、小さく厚さの薄いもの(74～76など)とがある。48や70の接合資料をみると薄く小さな石核は、大きな石核から採られた剥片石核の可能性が高い。ただし、法量は長さ2.7cm～7.9cm、幅2.1cm～4.8cmの間で連続的であり、どの大きさから剥片石核とするかを明確にすることはできない。

また、立方体状の石核のうち3～4cmの大きさの正立方体に近いものがある(61、65など)。これは残核と考えたが、形状があまりに立方体に近く、工人が意識的にこの形を作り出したようにも感じられる。少数ながら碧玉の丸玉も存在するので、あるいは丸玉などの素材剥片かもしれない。ただし、66のように直方体形の石核もあるので、調整剥離の段階で剥離された不要部分の可能性も考えられる。

板状、直方体状の石核のうち、70は調整剥片(70 a)と接合できた。70 b は剥片石核で、これを分割すると48 a・bのように素材剥片になる。また、73は3cmから4cmの厚い剥片2個の接合資料である。これは接合状態では立方体に近い形状で、分割された剥片は厚く大きい。素材剥片とするには大きすぎるように思われ、48や70 b のようにこれを剥片石核としてさらに分割され、48 a・bのような素材剥片ができると考えられる。

礫状の石核（79 d～83など）は拳大の丸みをもった石核である。いずれも各面に多くの剥離面がみられる。端部などに細かなつぶれ状の剥離がみられるものが多く、さらに分割しようとしたかハンマーに転用した残核もあるかもしれない。法量は長さ5.1～7.9cm、厚さ3.8～6.9cmと比較的まとまりがみられる。

77、78は断面形が三角形を呈する石核である。一面には主要剥離面と思われる大きな剥離面があり、背面には多くの剥離面がみられる。79の接合資料をみると、これらは礫状の石核から剥離された、剥片石核と考えられる。

79は礫状の石核と剥片との接合資料である（図版183）。79 a・bが剥片（素材剥片？）、cが剥片石核または素材剥片、dが礫状石核である。接合した状態では側面に浅い剥離痕がみられるが、これは表皮を取り除くための剥離と思われた。頂部は大きな剥離面が残るが、これはc同様の素材剥片または剥片石核を剥離したものであろう。頂部にはcを剥離した際の打痕が明瞭に残る（図版183.202）。打痕は極小の円形で、工具は断面形が丸いものと思われる。1回の打撃ではcが剥離しなかったと見え、数度にわたって打撃を繰り返している。また、a・bの接合面近くにはつぶれ状の細かな剥離が多くみられる。

84～85は礫状の小さな石核である。礫状石核の残核と考えられる。これは残核とはいえ法量的には管玉をつくることのできるもので、このような残核をさらに分割して56、57のような素材剥片を採った可能性もある。

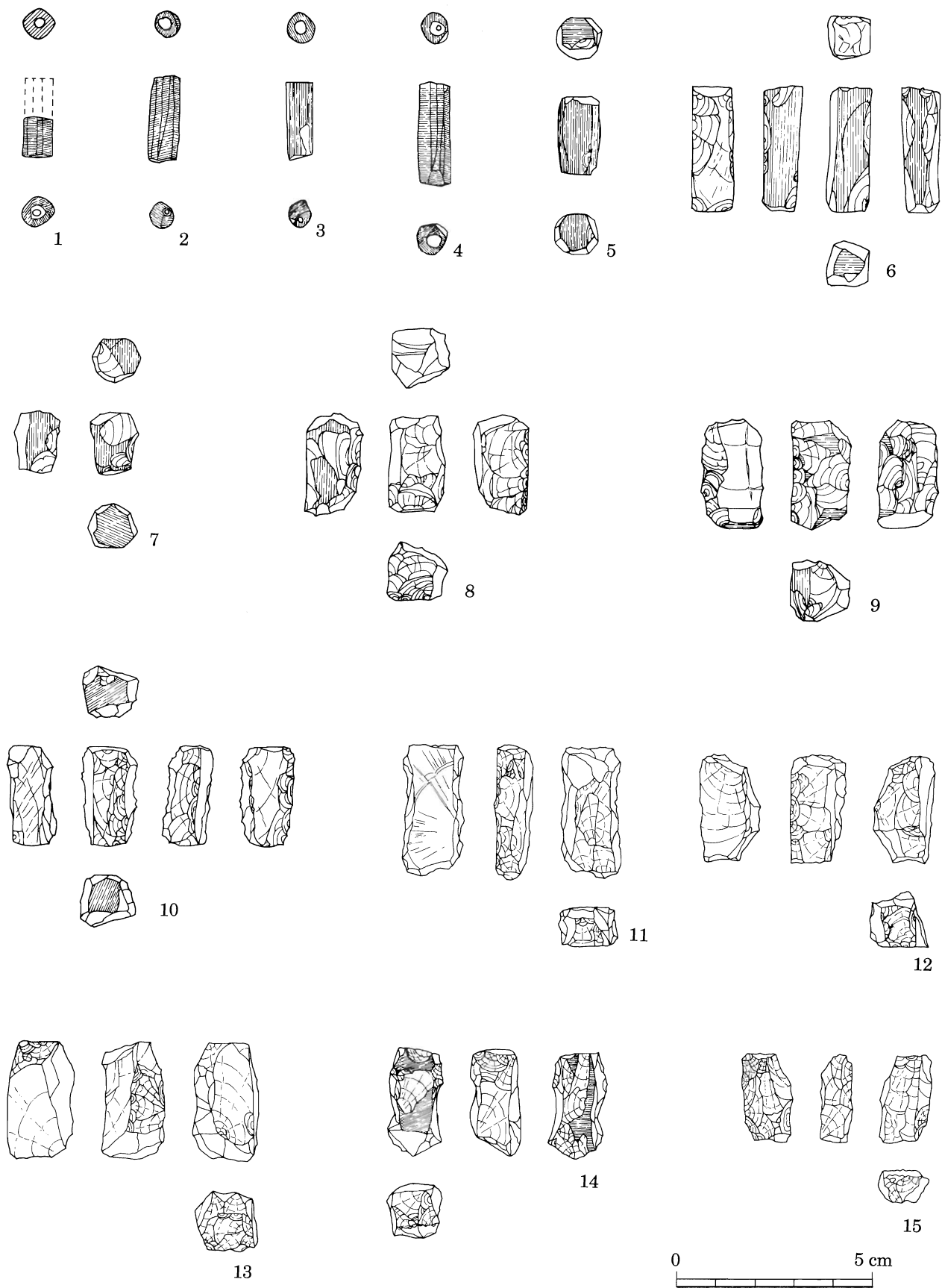
玉作工房跡で石核として認識したものは約80個である。このうち、剥片石核を採った石核と推定できるものは板状のもので10個、礫状のもので8個であった。そのほかは剥片石核か残核と推定されるが、両者は明確に区別できるものではなく、また素材剥片との区別も厳密なものではない。

原材（第230図87） 長さ18cm、幅15cm、厚さ3.9cmを測る方形板状の石塊である。表面は表皮を取り除く程度の浅い剥離がみられるが、裏面は礫面がそのまま残っている。4辺は各面とも大きな剥離面がみられ、各面とも2～3片の剥片を採っている。剥片剥離のため表面と剥離面の角度が鋭角になる面が2面あるが（図上では上と下の面）、打点は逆方向である。このような石塊から素材剥片を作出したとも考えることもできる。しかし当遺跡から出土した石核が比較的小型のものが多く、各剥離面の大きさが素材剥片の主要剥離面より大きいことから、これから直接素材剥片を剥離したとは考えにくい。石核はこのような石塊から作出されたものと考えたい。これが石核の母岩とすれば、原料採取場から玉作工房へ持ち込まれた当初の姿にきわめて近い形状と想像される。

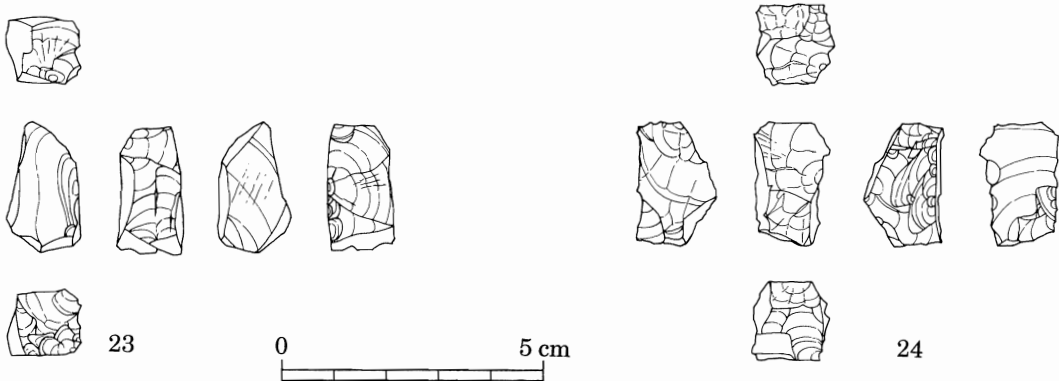
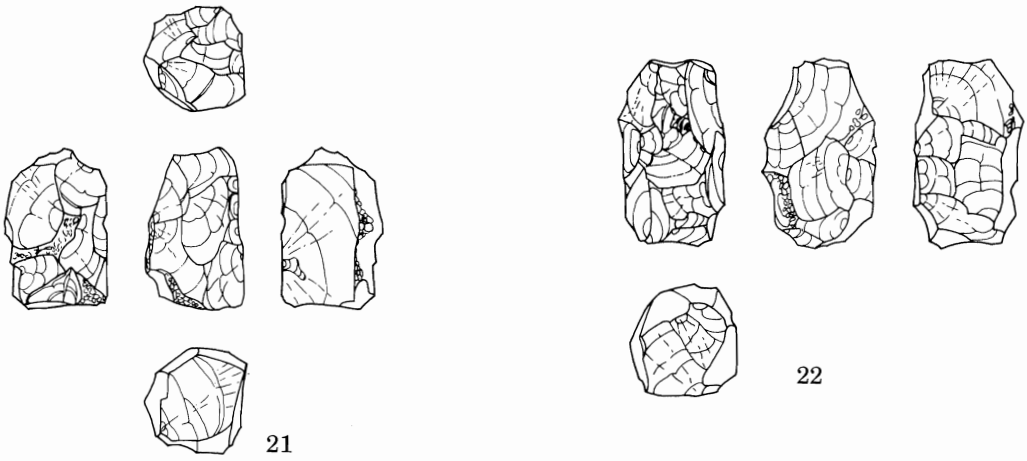
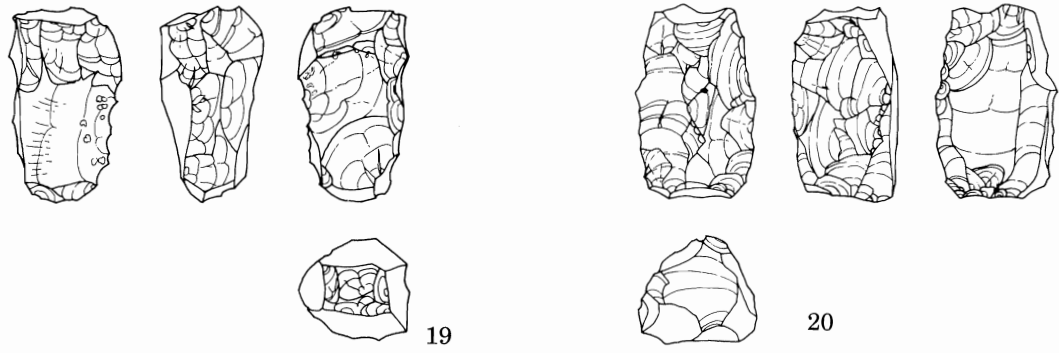
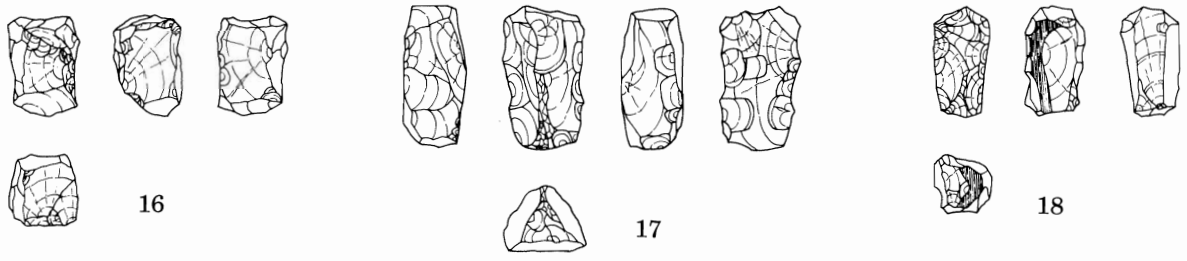
（注1） 寺村光晴『古代玉作形成史の研究』1980 吉川弘文館

（注2） 島根県教育委員会『白コクリ遺跡・大原遺跡 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』1994

（注3） 諸友大師山横穴群 I 群2号横穴墓出土管玉など 大田市教育委員会『諸友大師山横穴群』1983

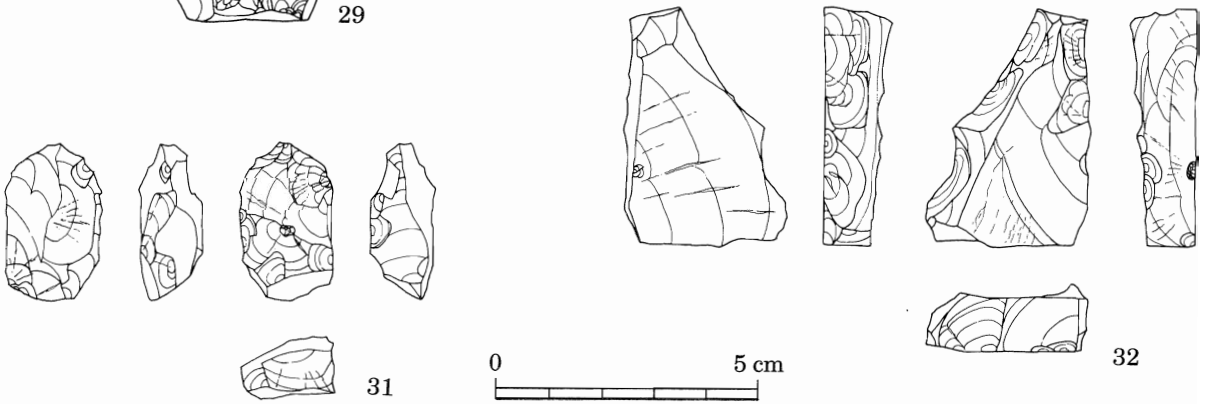
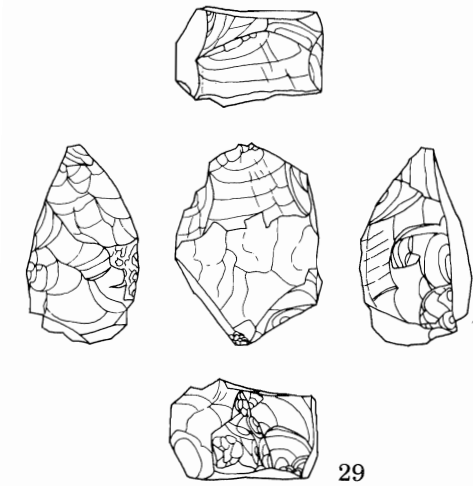
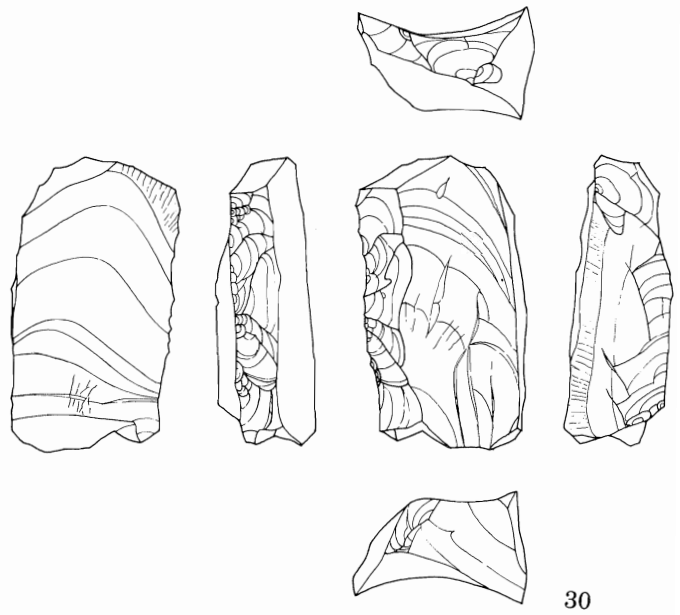
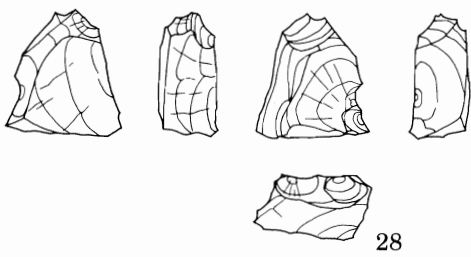
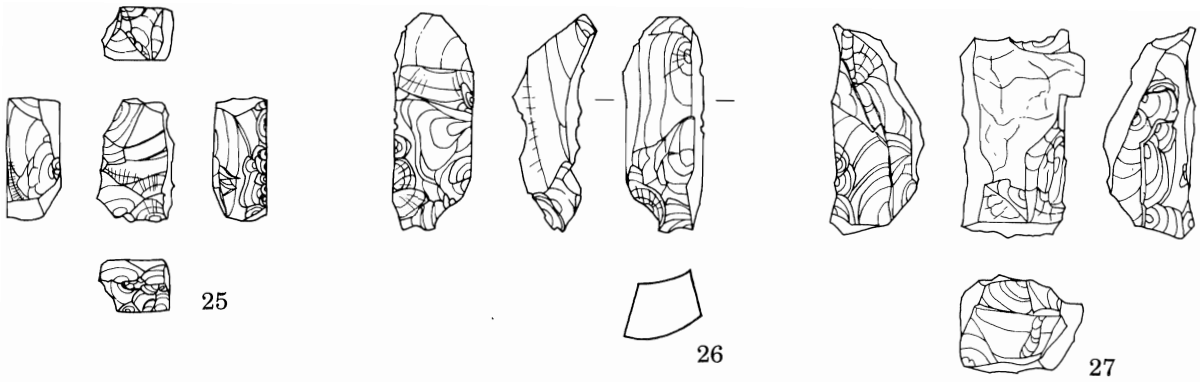


第215图 玉作工房跡出土碧玉製管玉未成品 (1) 7:10

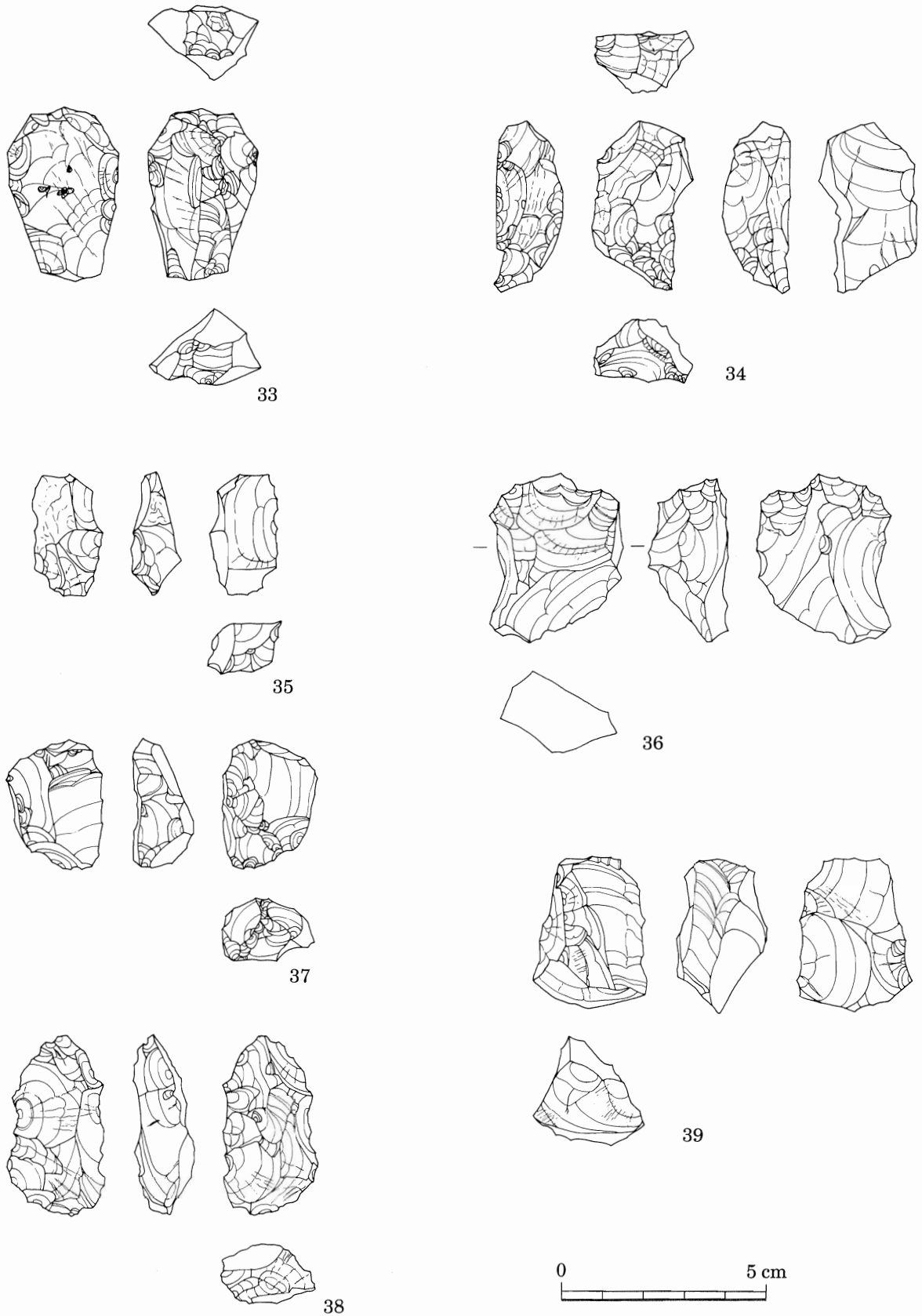


0 5 cm

第216图 玉作工房跡出土碧玉製管玉未成品 (2) 7:10



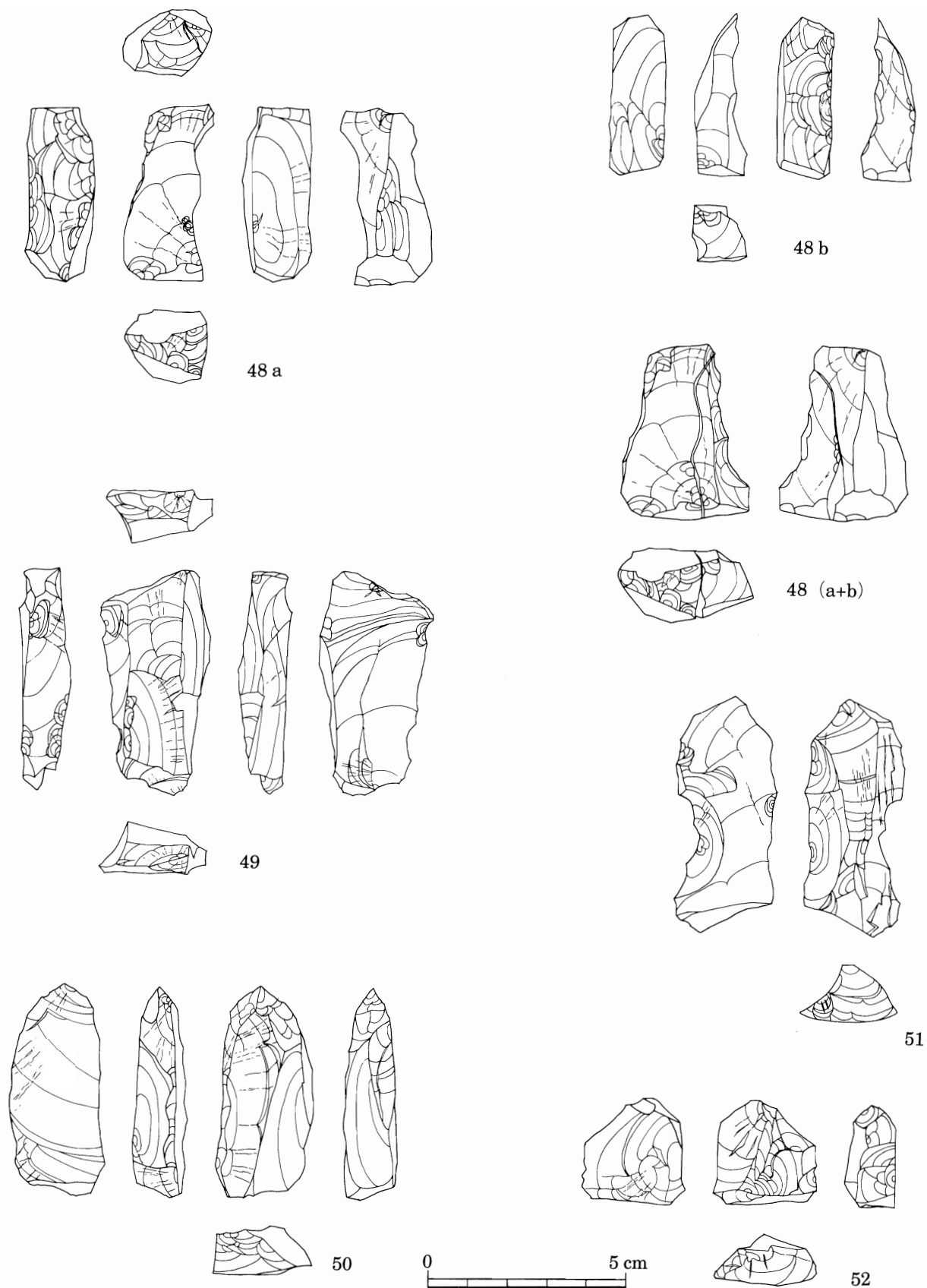
第217图 玉作工房跡出土碧玉製管玉未成品 (3) 7:10



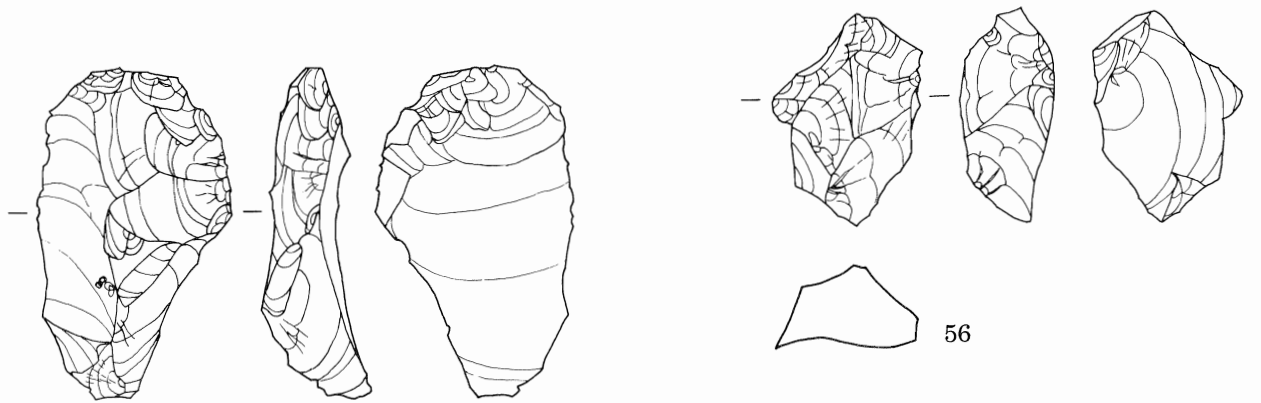
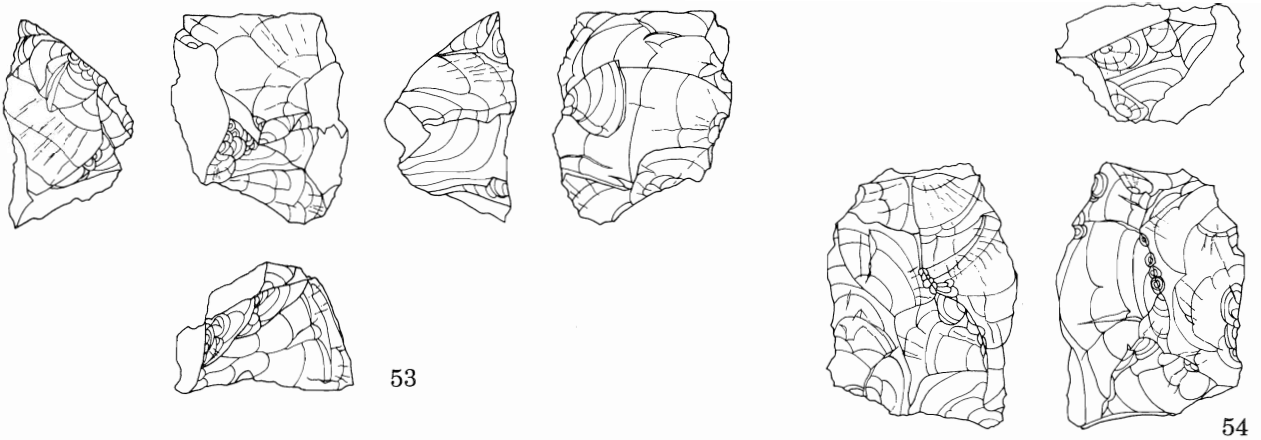
第218图 玉作工房跡出土碧玉製未成品(4) 7:10



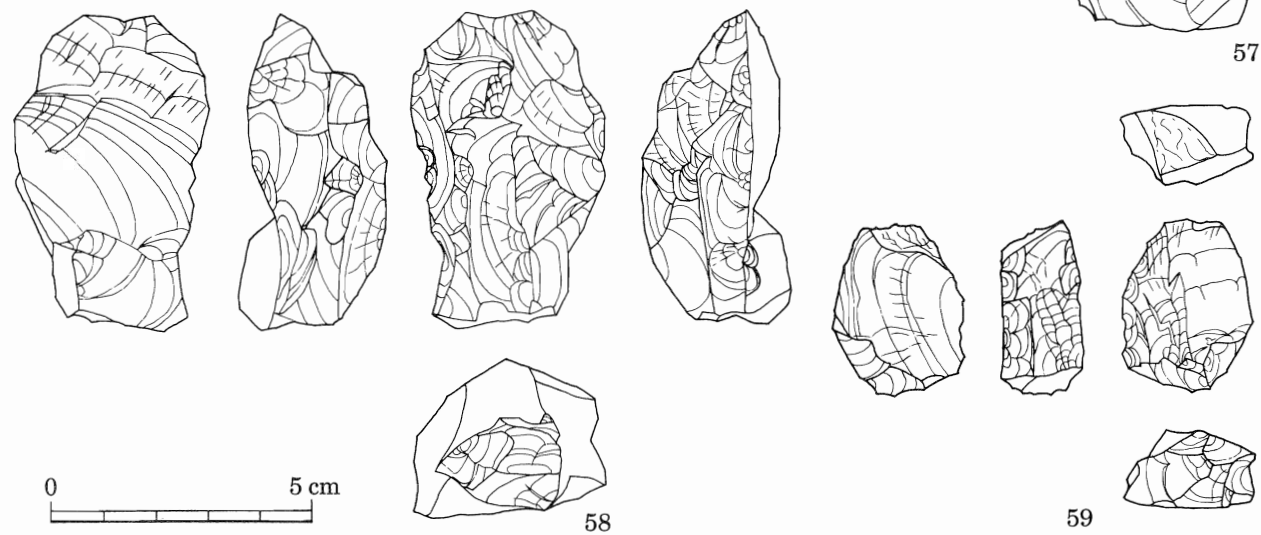
第219図 玉作工房跡出土碧玉製未成品 (5) 7:10



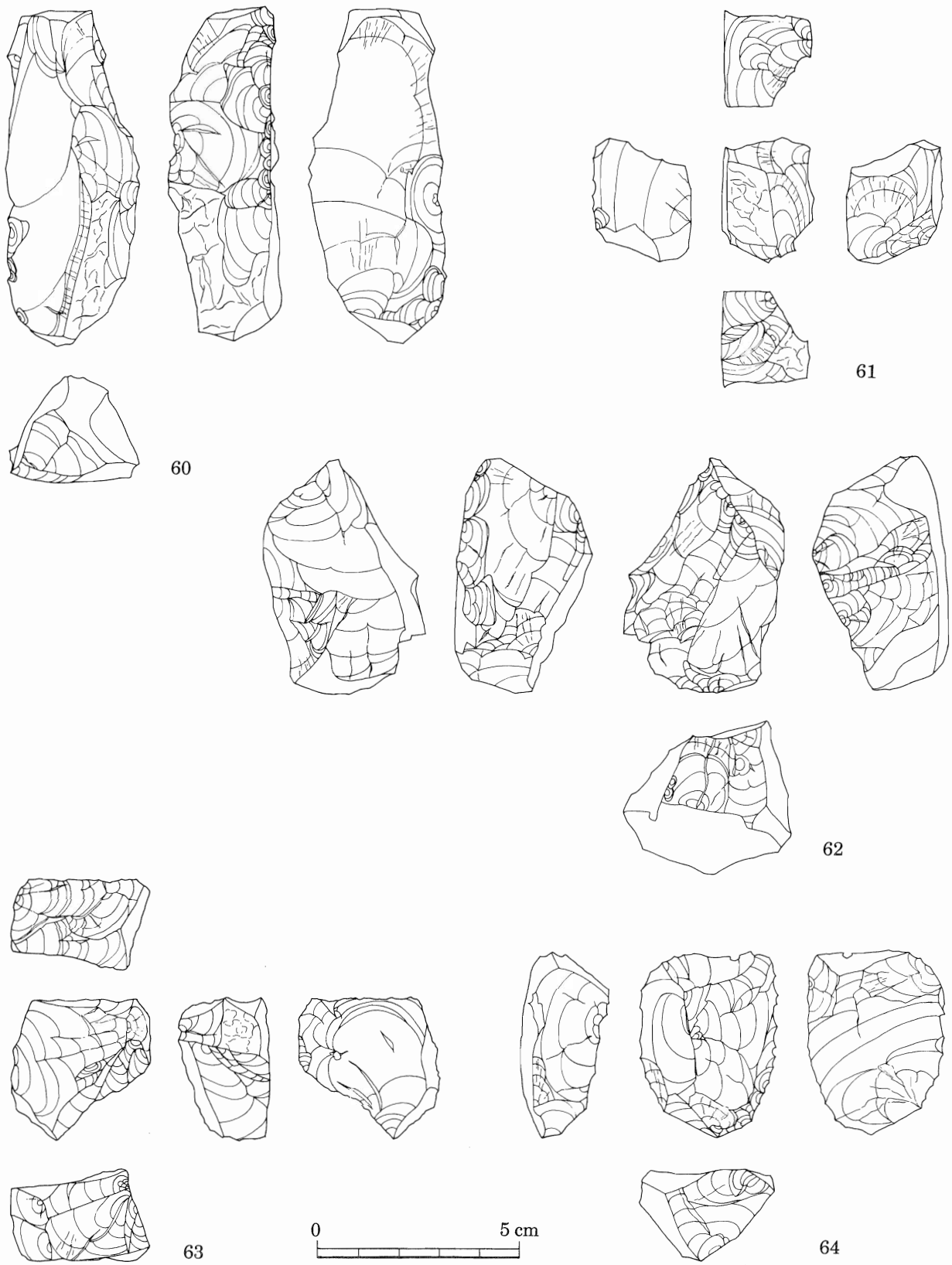
第220图 玉作工房跡出土碧玉製未成品(6) 7:10



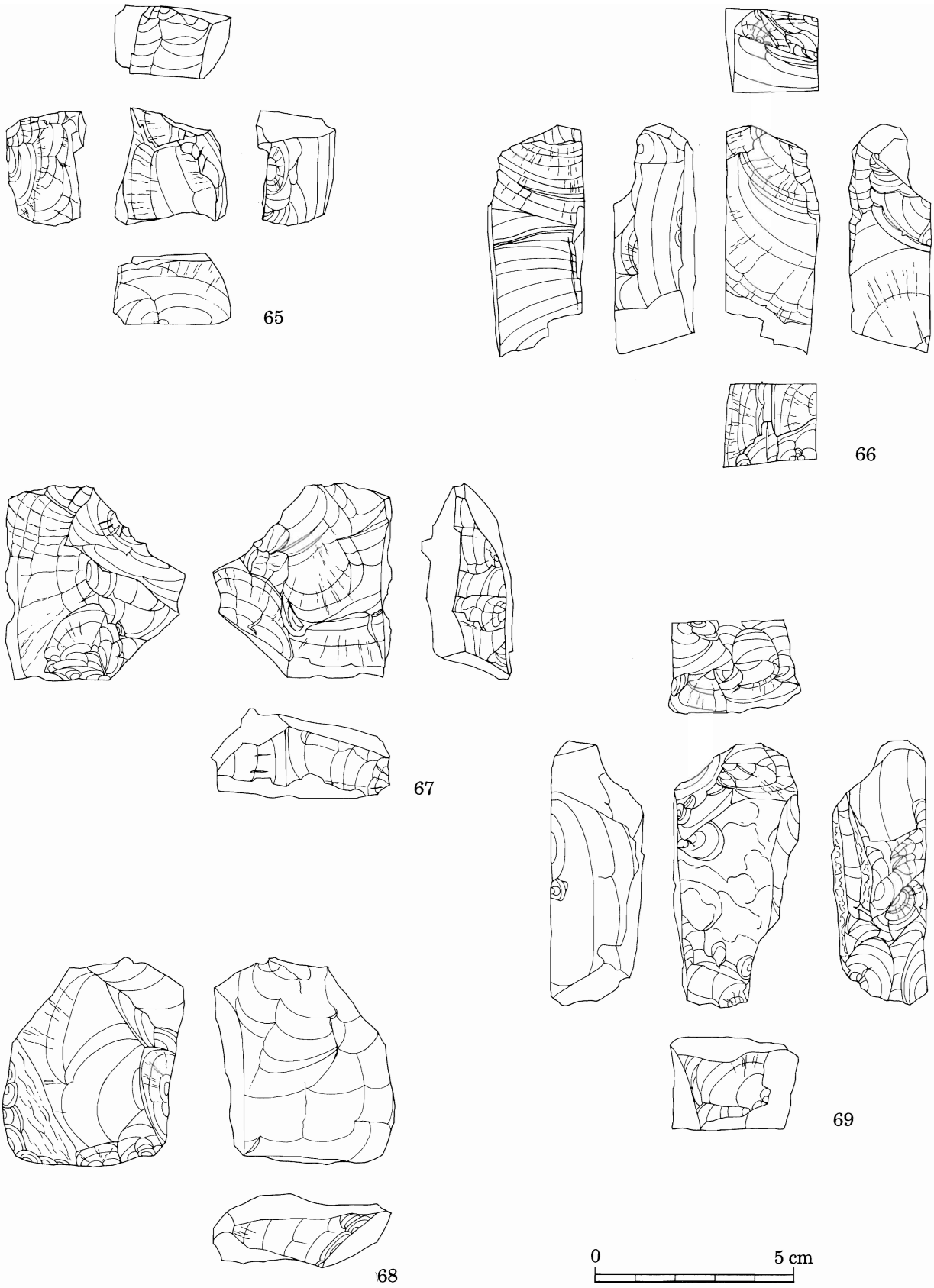
0 5 cm



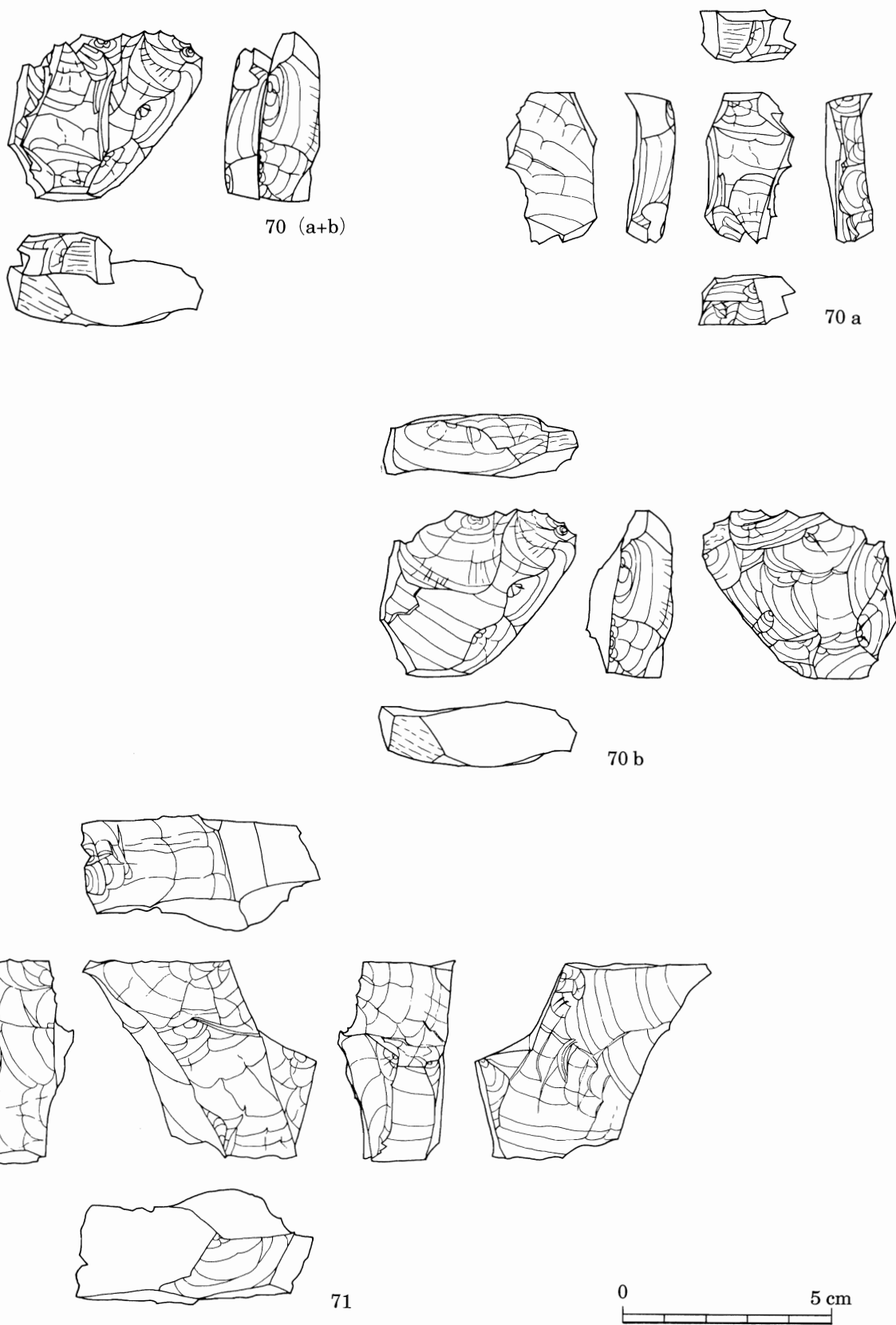
第221图 玉作工房跡出土碧玉製未成品 (7) 7:10



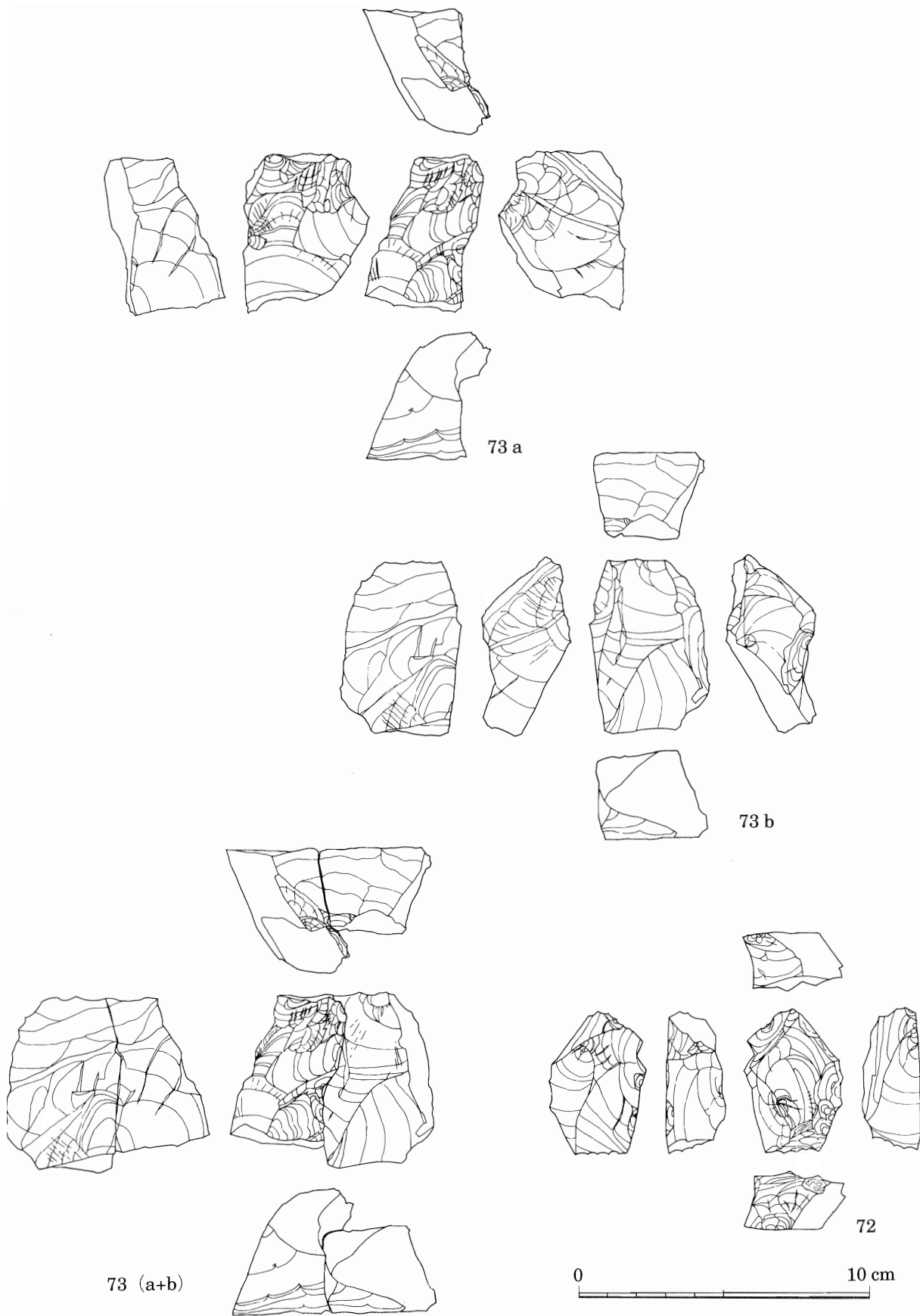
第222图 玉作工房跡出土碧玉製未成品 (8) 7:10



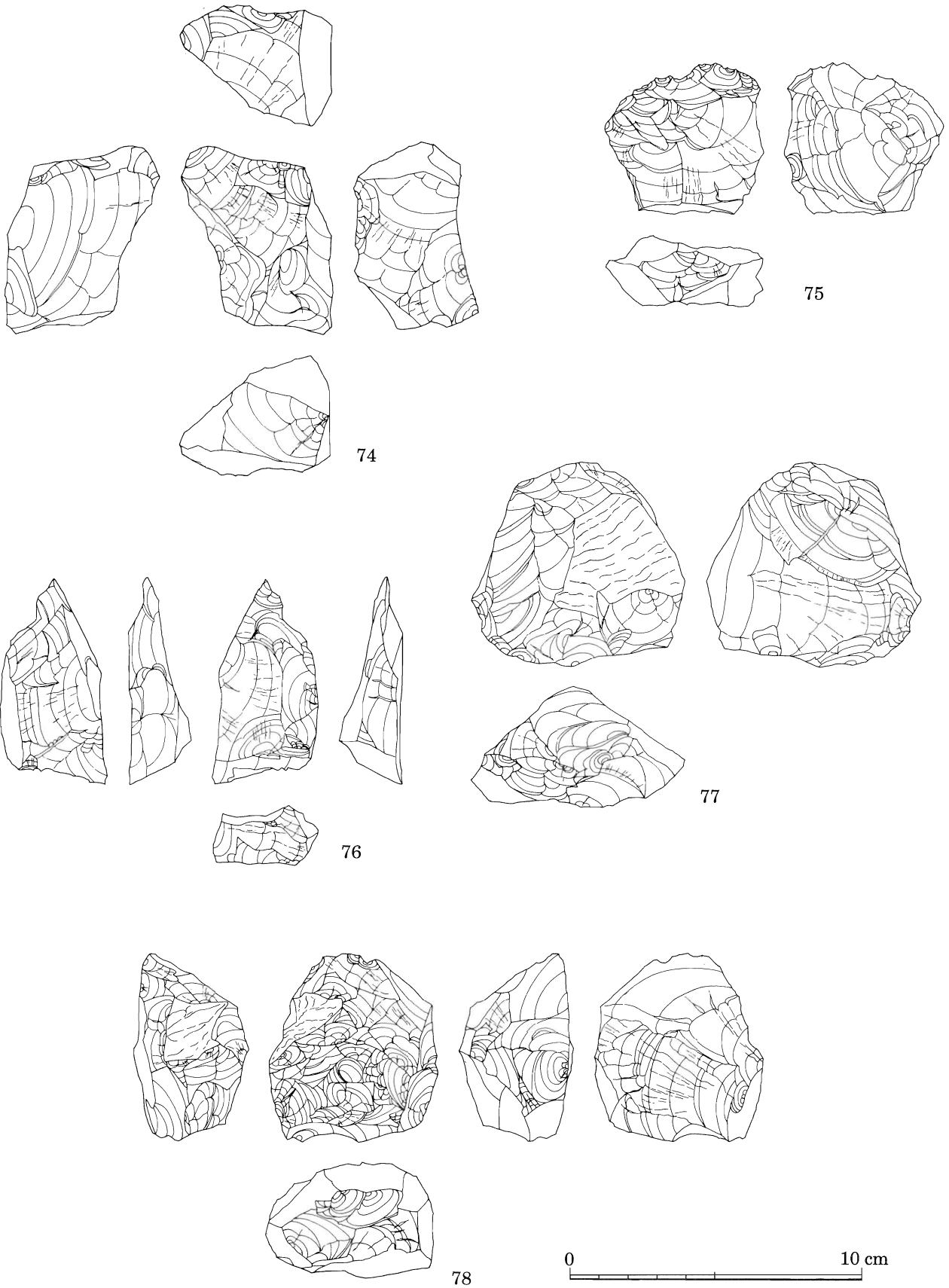
第223图 玉作工房跡出土碧玉製未成品 (9) 7:10



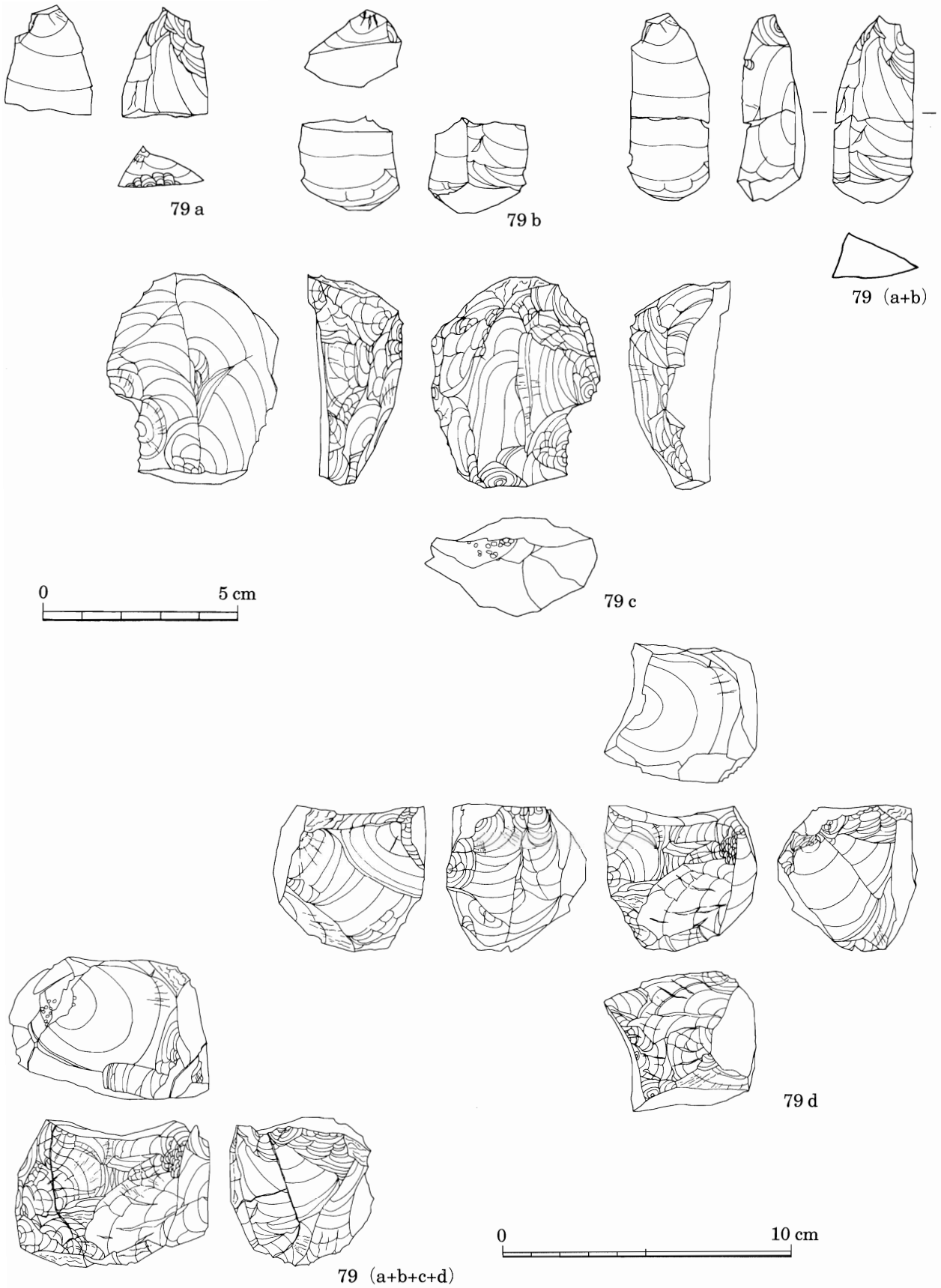
第224图 玉作工房跡出土碧玉製未成品 (10) 7:10



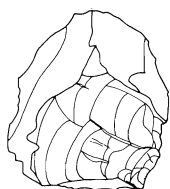
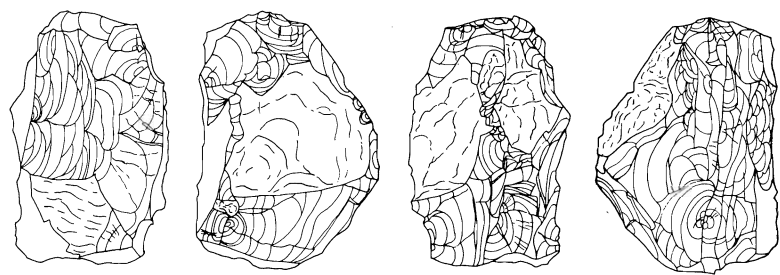
第225図 玉作工房跡出土碧玉製未成品 (11) 1:2



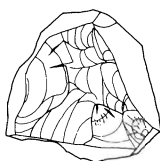
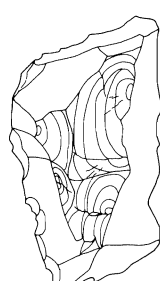
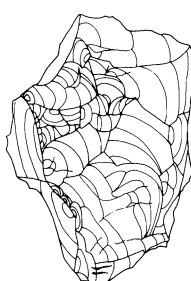
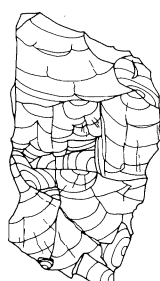
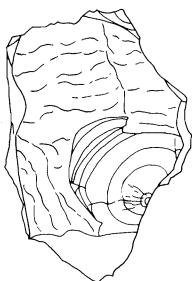
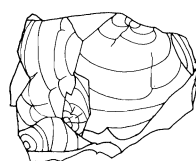
第226图 玉作工房跡出土碧玉製未成品 (12) 1:2



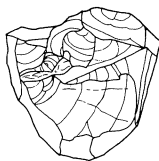
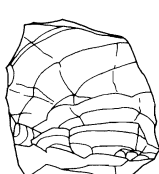
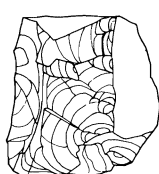
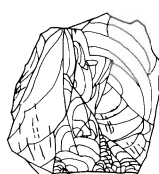
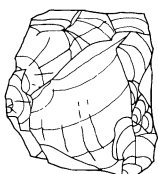
第227図 玉作工房跡出土碧玉製未成品 (13) 1:2



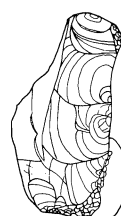
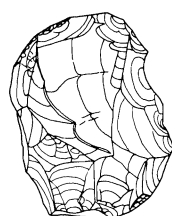
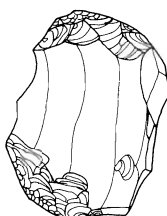
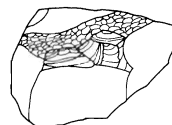
80



81



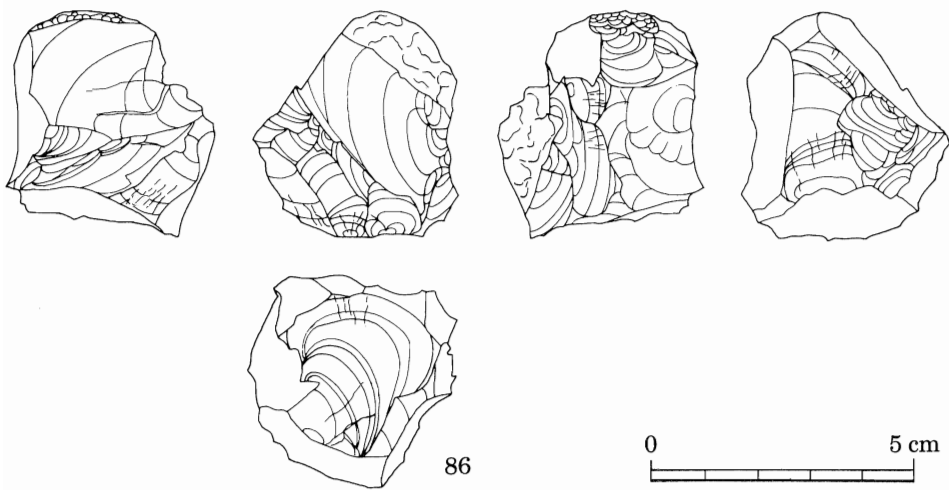
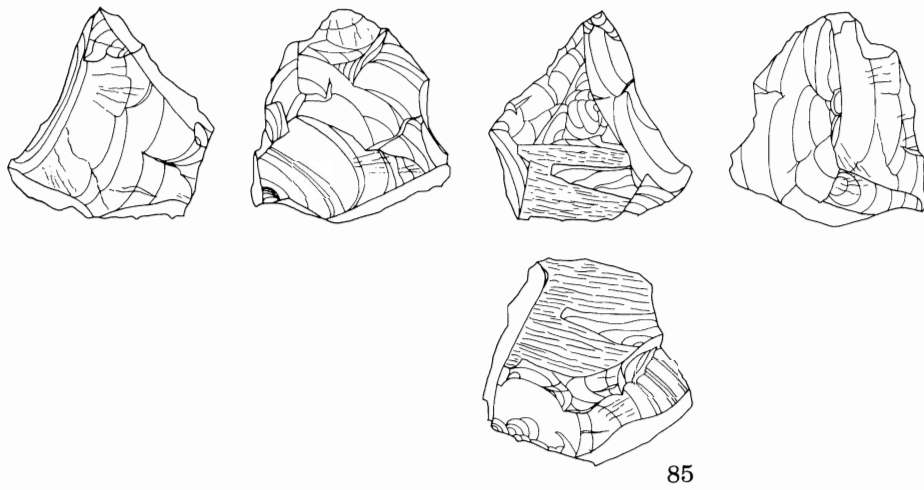
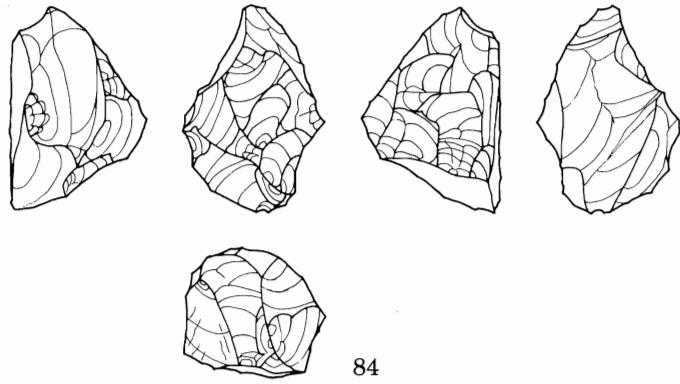
82



83

0 10 cm

第228图 玉作工房跡出土碧玉製未成品(14) 1:2

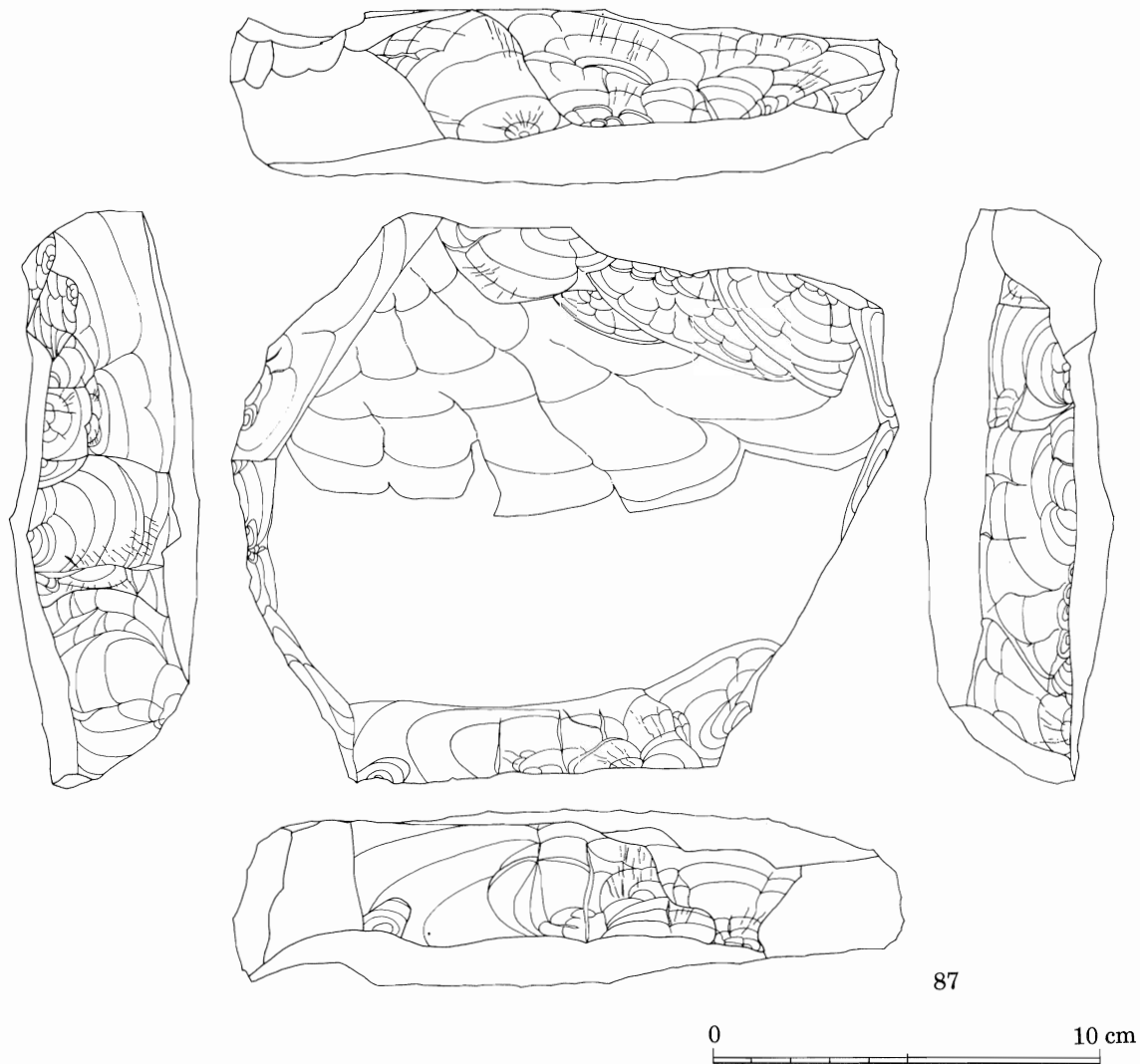


第229图 玉作工房跡出土碧玉製未成品 (15) 7:10

めのう製勾玉未成品（第231図1～第233図20 図版185） 玉作工房跡ではめのうの出土は少なく、剥片、チップを数えても250点あまりしか出土していない。これは玉全体の5%にも満たず、碧玉が5,000点以上出土したことと比べると極めて少ない出土量といえる。

めのう製の未成品は勾玉だけが確認されている。勾玉以外の器種は確認していないが、第232図14のような平面形がほぼ正方形の素材剥片が白玉のようなものになる可能性はある。ただ、めのう製の白玉は出土したことがないので、これが不要の剥片の可能性もある。

これらの未成品には一部に礫面を残すものが多いがこれは石材の特性に起因すると思われる。製作工程の呼称は管玉に準ずるが、穿孔がどの段階で行われるのかが特定できないため、ここでは穿孔工程については取り上げない。各工程の未成品は石核、素材剥片、調整剥離完了品、調整剥片、一次研磨工程品、仕上げ工程品と呼ぶこととする。調整剥離完了品は調整剥離が終了したもので、管玉の角柱状加工品に相当するものをいう。



第230図 玉作工房跡出土碧玉製未成品（16） 1:2

一次研磨工程品（第231図1.2） 2点だけ出土している。1は研磨の途中で欠損したものと思われる、現存長1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.7cmを測る。表裏面には粗い研磨が施されるが、ごく一部に研磨がおよばず剥離面が残る部分もある。側面には剥離が残る部分がある。2は一次研磨を開始したばかりの未成品で長さ3.6cmの大型品である。平面形は半月形で断面形は丸みもち楕円形を呈す。表裏面、側面ともに比較的ていねいな調整剥離が施され、上端の一部にわずかに研磨が施される。

調整剥離完了品（第231図3～5） 剥離調整が完成した状態のものである。形状は平面形が長方形を呈し、長さに対して厚さが薄い。長さ2.9～3.4mm程度の比較的小型のものが多い。各面には小さな調整剥離が多くみられる。なお、福富Ⅰ遺跡では勾玉未成品で平面形がC字形や半月形をするものは少なく、ほとんどは平面形長方形に近い。

調整剥片（第231図7、8、10、11） 素材剥片に調整剥離が加えられるもので、形状はいずれも長方形に近い板状である。側縁のみに調整剥離が施された段階のもので表裏面に大きな剥離面か礫面が残る。表裏面はともに1回の打撃で剥離されており、どちらが主要剥離面か判断がつかない。

素材剥片（第231図6、9、第232図12～14） 石核から剥離された剥片で、調整剥離は施されていない。13、14には礫面が残る。剥離は1回の打撃によるものが多く、碧玉のように剥片剥離前につけられた方向を異にする剥離面はみられない。これらは板状の薄い石核から剥離された剥片と思われる。

14は2cm四方の正方形に近い剥片である。この大きさでは勾玉は作れないので、別器種の未成品の可能性がある。この法量で推定できる成品は白玉か丸玉であるが、めのう製の白玉は出土した例がないので、白玉の未成品とするには躊躇される。あるいは勾玉素材剥片を採る際にできた不要な剥片かもしれない。

石核（第232図15、16） 長さ4～4.2cm、幅3.7～5cm、厚さ3～3.2cmの石核である。ともに全面に剥離面がみられ、残核の可能性もある。法量的には勾玉が数個作れる大きさであるので、あるいはこれを分割して素材剥片にする予定であったかもしれない。15の一端には礫面が残っている。

原材（第233図18、19） 長さ4～6.2cm、厚さ3cm前後のものを図示した。一部に剥離面がみられるものの、大部分には礫面が残る。このようなめのうの塊は福富丘陵の地山内に多く包含しており、玉作工房跡から出土しためのう塊がすべてめのう製品の材料であると断定することは困難である。実験してみるとめのうは比較的楽に剥片を採ることができるので、工房の近隣で採取できる石を使用していたこともあったかもしれない。

ハンマー（第232図17、第233図20） とともに平面形が楕円形を呈すもので、めのう製である。端部には敲打によるつぶれが観察できる。20には礫面が大きく残っているが、17は大部



第231図 玉作工房跡出土めのう製未成品 (1) 7:10

分剥離されている。17は打撃の際に欠損したものと思われる。20は自然礫をそのままハンマーとしたように思われるが、17は石核を転用したものと思われる。

水晶製品（第234図1～第236図47 図版186.187） 剥片、チップを含め300点以上出土した。管玉、勾玉、丸玉が製作されているようである。水晶製品の製作は基本的には、①石核から素材剥片を剥離 ②素材剥片を調整剥離 ③敲打を加え整形 ④穿孔後仕上げ研磨という工程を経るようである。各未成品の呼称は基本的には管玉、勾玉に倣うが、③の段階の未成品を敲打整形品と呼ぶことにする。この整形は調整剥離後に敲打を重ねることによって整形したもので（図版202）、この段階でほとんど目的とした器形が整形されると思われる。管玉などの一次研磨と同様な意味合いをもつと考えられる。水晶成品は最終的には仕上げ研磨が施されると思われるが、研磨が認められるのは1点のみであった（第235図16）。

平玉成品（第234図1 図版186） 直径1.5cm、厚さ0.7cmの平玉の成品である。工房跡上層の包含層から出土している。平玉は奈良時代以降に盛行するものとされ、時期的には本遺跡の玉作工房跡とは整合しない。また、ここでは平玉の未成品も出土していないことから、この平玉は今回検出された玉作工房跡で製作されたとは考えにくい。

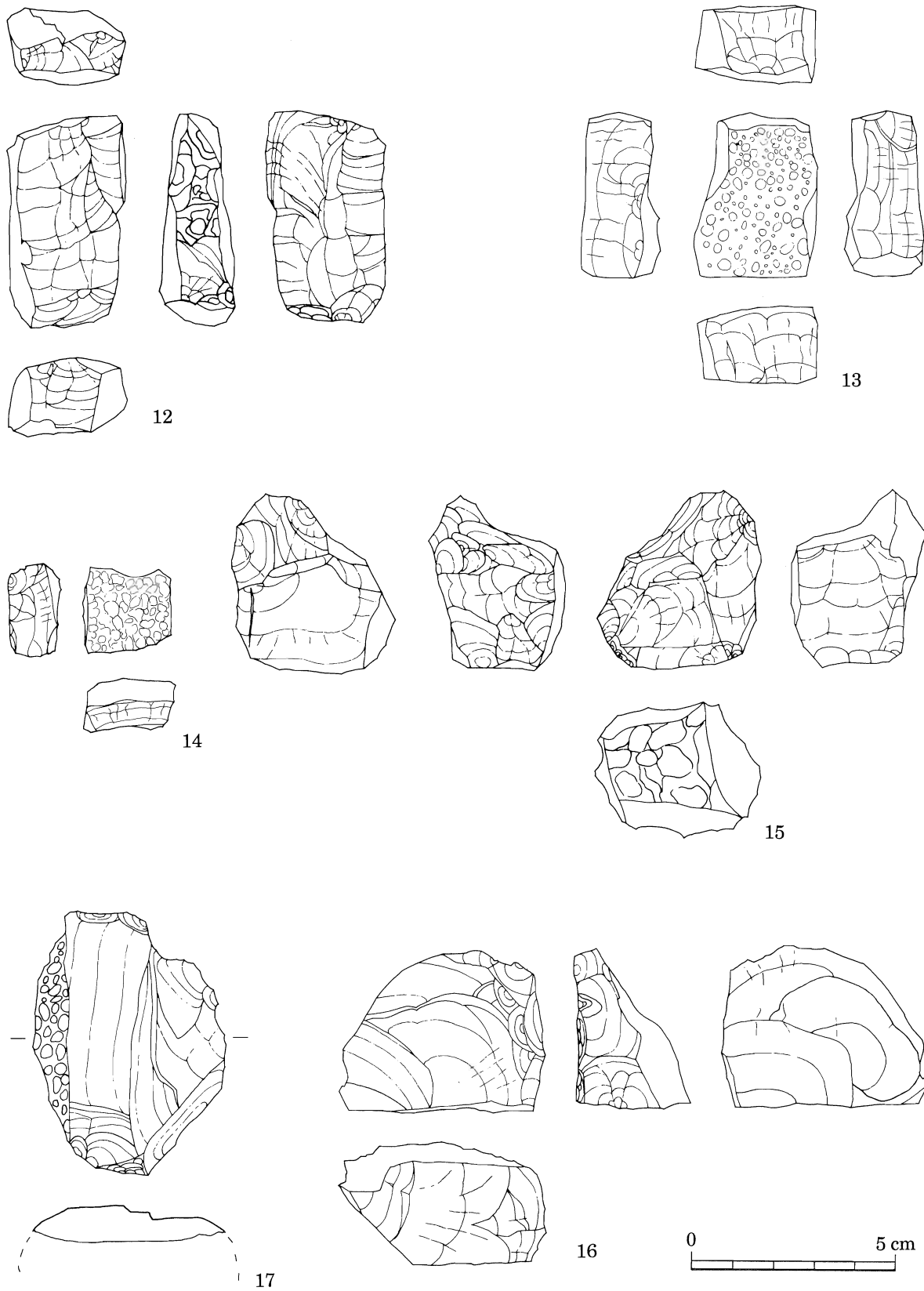
管玉未成品（第234図2～6 図版186） 管玉未成品と判断できるのは敲打整形品（2～4）と調整剥片（5、6）である。2は敲打整形完了直前の欠損品で、側面、端面ともに全面に細かい敲打痕が観察される。3、4は側面に敲打整形が施されるが、調整剥離面を多く残している。また、3には側面に結晶面（礫面）が1面ほど観察され、素材剥片は原材となった水晶を長軸方向に剥離したものと考えられる。

5、6は調整剥片である。6は小さな剥離が各面にみられ、調整剥離が完成に近いことを窺わせる。それに対し5は大きな剥離面を各所に残し、調整剥離の初期の段階のものと考えられることができる。

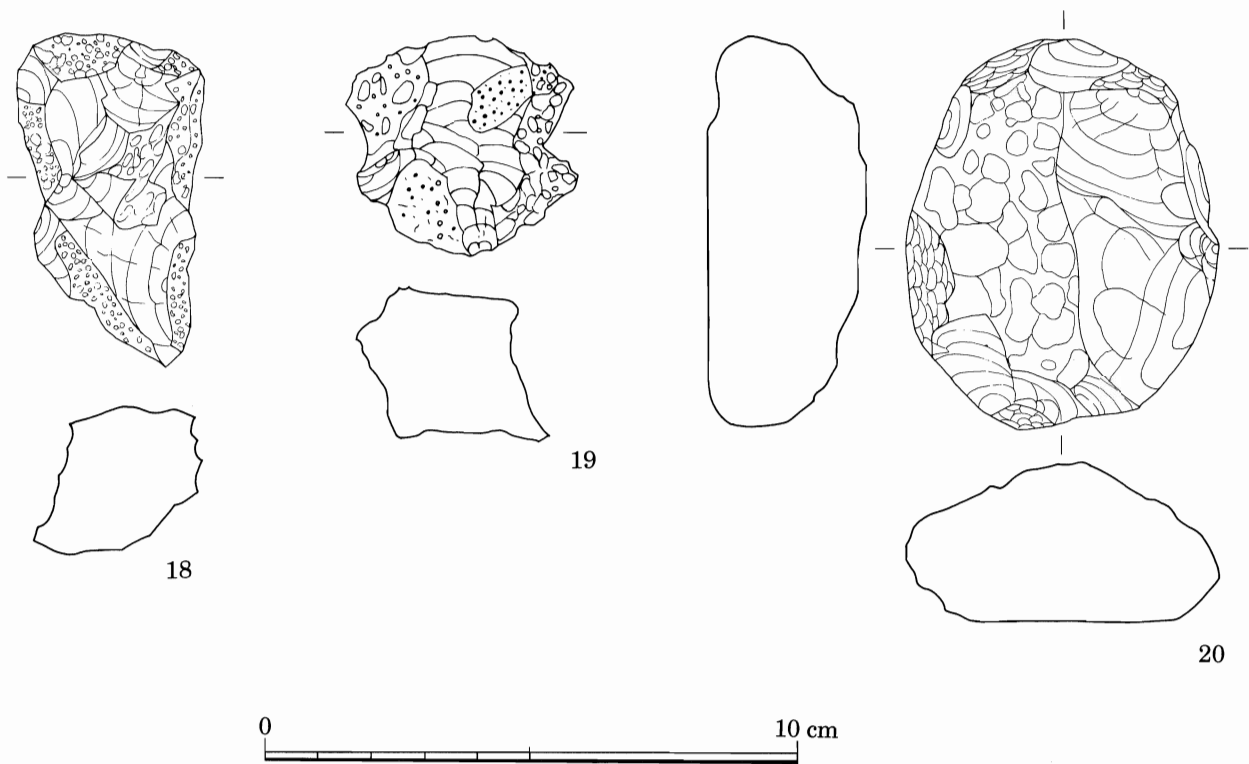
勾玉未成品（第234図7～15 図版186） 管玉同様勾玉未成品と判断できるのは敲打整形品（7、8）、調整剥片（9～14）、素材剥片（15）である。7はC字形を呈し、敲打整形がほとんど終了した段階の未成品である。全面に敲打痕が観察できるが、上端など一部には調整剥離面が残っている。8は表裏2面に敲打痕が観察されるが、他の面は調整剥離面が多く残る敲打整形途中のものである。

9～13は調整剥離完了品で、14は調整剥離開始直後の調整剥片と考えられる。側面に結晶面（礫面）を残すものが多く、ほとんどの素材剥片は原材となった水晶を長軸方向に剥離したものと考えられる。

15は素材剥片である。各面には大きな剥離面が残り、下端には折断面がみられる。これを分割して管玉の素材剥片とすることもできるが、形状が勾玉に近いことから幅が広いものは勾玉の素材剥片と考えた。



第232図 玉作工房跡出土めのう製未成品 (2) 7:10



第233図 玉作工房跡出土めのう製原石、ハンマー 7:10

丸玉未成品（第235図16～20 図版186） 確実に丸玉の未成品と分かるものは16～20である。剥片や欠損品で丸玉未成品と推定できるものもあるが、確信がないので剥片としてあつかう。

16は穿孔途中の未成品である。径1.1cm、厚さ0.7cmを測ることから、径1cm前後の成品を作ろうとしたことがわかる。両面から穿孔されているが、裏面の穿孔位置が中央ではないため中心で穿孔の両端部が大きくずれている。裏面では研磨痕、他の面では敲打痕と調整剥離面が観察でき、かならずしも敲打整形が完了しなくても穿孔や研磨工程に入ったようである。

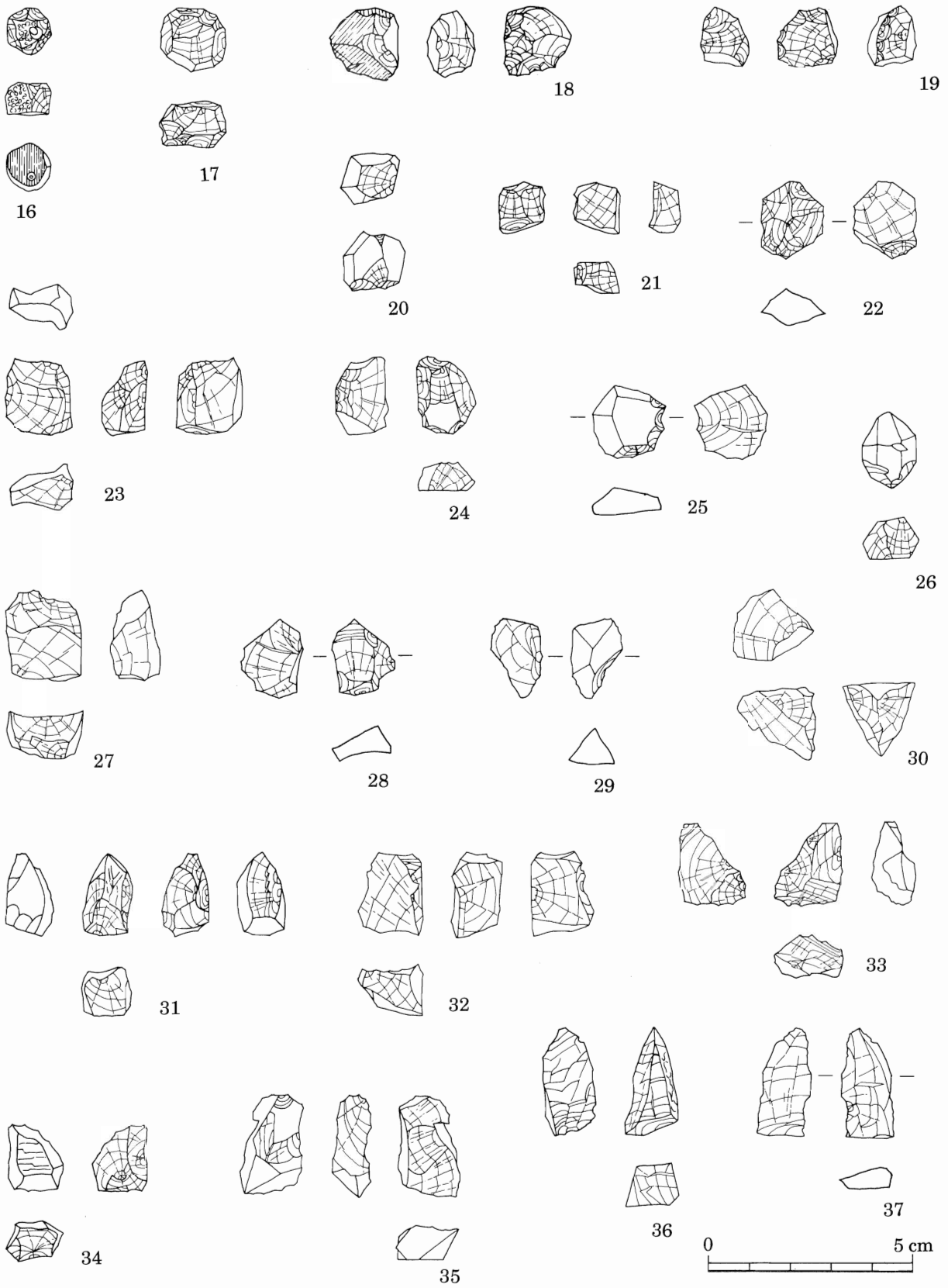
17～19は調整剥片である。17は全面に小さな剥離が施され、ほぼ丸玉の形となっている。19は大きな剥離面もみられるが多くは調整剥離面で、17ほどではないが調整剥離がすすんだことが窺える。18は1面には調整剥離がみられるが、反対面には結晶面（礫面）が3面残っており調整剥離が始まったばかりの未成品であることがわかる。

素材剥片（第235図20、26 図版186） 直径1cm程度の石核（原材か）の両端（20）または一端（26）を打ち欠いたもので、側面には結晶面（礫面）が残る。平所遺跡の「荒割り」工程品と同じものである。平所遺跡ではこの段階の同様な未成品が複数出土し、水晶成品製作の一般的な技法としている（注1）が、福富Ⅰ遺跡では2点しか出土していないのですべてがこれと同じ技法によったものか疑問である。

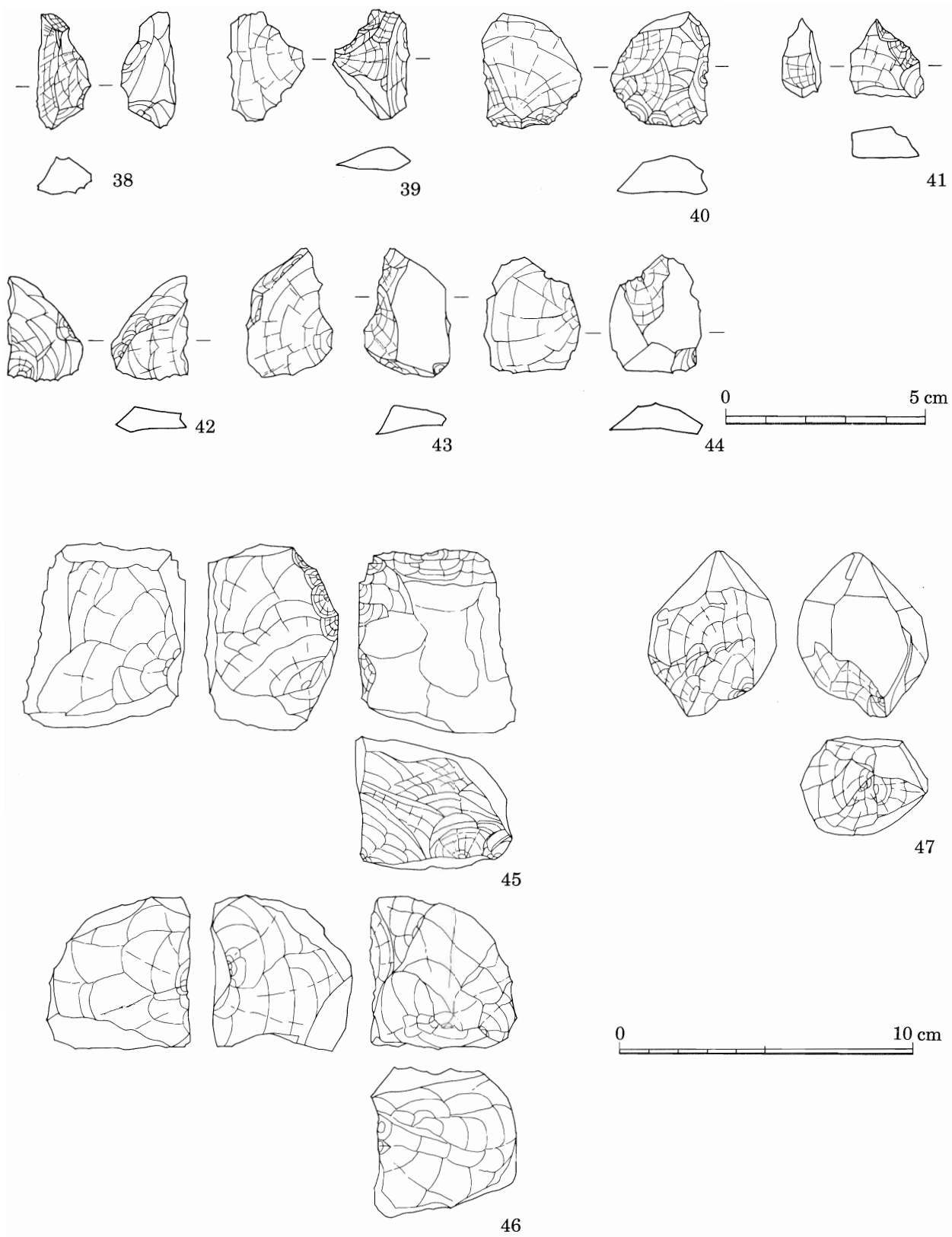
剥片（第235図21～25、27～44 図版186） 成品となりうる剥片も含めて図示した。21～



第234図 玉作工房跡出土水晶製未成品 (1) 7:10



第235图 玉作工房跡出土水晶製未成品 (2) 7:10



第236図 玉作工房跡出土水晶製未成品 (3) 38~44 7:10 45~47 1:2

25などは調整剥離がみられるので調整剥片の欠損品の可能性もある。

剥片の形状は①平面積に対し比較的厚みのあるもの(21~25、26~34)、②細長いもの(35~38)、③幅広で平面積に対し薄いもの(39~44)がある。主要剥離面が残っているものがほとんどで不要部分の剥片と思われるが、21~25、27などは丸玉が作成できるほどの法量をもつので、丸玉の調整開始直後の調整剥片か素材剥片の可能性もある。②、③からは丸玉以外の成品が作れるほどの大きさではなく、製作時に生じた不要部分の剥片と思われる。

②、③の剥片ができる要因としては、a 剥離調整を行うとき、b 石核から素材剥片を剥離するとき、c 素材剥片を分割するとき、などが考えられる。平所遺跡の調査成果から、従来はaの作業の際におもにこのような剥片ができるという考えが主流であったと思われる。しかし福富I遺跡の調整剥離段階の未成品をみる限りでは、長さ2cm、幅1cmを超えるような剥片剥離面は調整剥離段階の未成品ではあまりみられない。福富I遺跡では後述するように剥片から調整剥片が作出されられると思われることから、bの原因が考えられないだろうか。とすればこのような剥片は、完成予定の成品を暗示しているのかもしれない。

石核(第236図45~47 図版187) 45、46は不純物を多く含み結晶化していない石英を石核としている。ともに立方体に近い形状で、比較的大きな剥片を採ったと思われる。47は径4.5cmあまりを測る大きな水晶である。表面はややくすんでいるが、剥離面をみると内部は透明である。基部方向から左右2方向に剥離を行っており、長さ2~3.5cmの剥片を採っていたようである。

以上の石核では平所遺跡でみられるような六角形柱状の素材剥片を採ることは不可能である。当遺跡では結晶化しているしていないにかかわらず、石核から板状の剥片を採り素材剥片とするのが主体ではなかったかと思われる。しかし、第235図20、26のように原石の両端または一端を打ち欠いた平所遺跡でみられるような技法の未成品もあるので、石核の形状によって製作技法を変えていた可能性が高い。

滑石製未成品(第237図1~11 図版188) 非常に軟質の石材で、前述のように自然に剥離したものも多い。また、フィッシャーが平行に走るため一見研磨痕に見えるものもかなりみられた。そのため人工的に剥離・加工されたものか、自然の力によって剥片となったのか、区別できないものがほとんどであり、今回は人工的に加工されている可能性が高いと判断されたものに限って図示した。

滑石ではおもに白玉が製作されていたようである。2~4は穿孔された未成品である。一辺6~8mm、厚さ1~2mm程度の平面形方形をした板状の剥片に径1mm前後の穿孔がみられる。5~11は穿孔前の方形板状の剥片である。5~7の表面には研磨痕が観察でき、11の表面中央には細い溝がつけられている。また、7、10の一側辺には施溝の一部と思われる痕跡が観察できる。8、10は研磨痕も施溝痕も観察できないが、比較的整った方形を呈しているので掲載した。同様

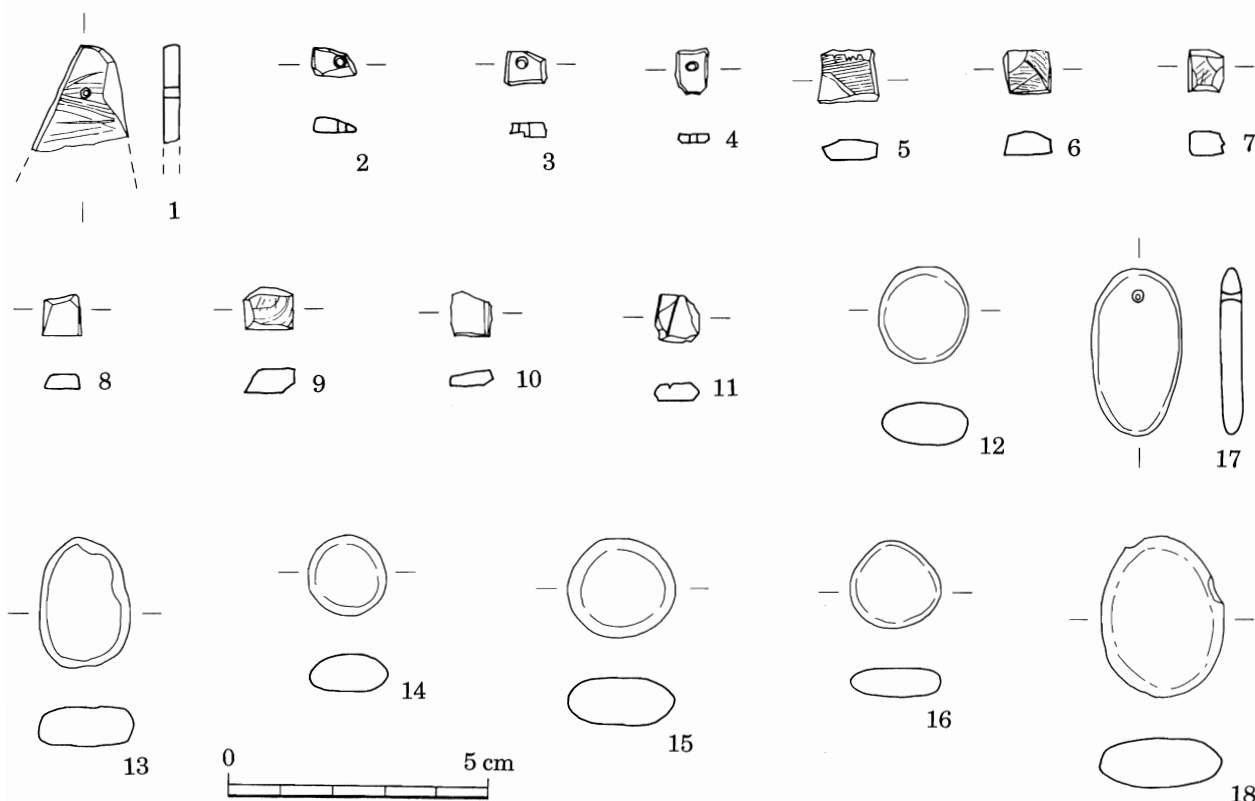
の剥片はこれ以外にもあるが、このような形が自然の状態でも偶然できる可能性もあり、これらが白玉未成品である積極的な根拠はない。

1は器種不明である。中央よりやや上の位置に穿孔され、表面・側面は研磨されている。下部は欠損し全形は不明であるが、ペンダント状の玉であろうか。研磨痕は粗いが側面も研磨されていることから成品か、成品に近いものと思われる。石質は他の滑石製品より硬い感じをうけ、違う石材の可能性もある。

以上の未成品から考えると、滑石製白玉は①薄い板状の石核に基盤状に分割線を施溝し、②分割線に沿って分割して方形板状の小剥片を作り、③穿孔・研磨し、④周縁を丸く整形するという製作工程が復元できる（注3）。

しかし何度もいうようにこの石材は非常にもろく、研磨痕や施溝痕が消えやすいので、このような製作法が一般的であったのか判断できない。成品自体も小さいので、原石を無作為に破碎し、そこでできた小剥片に加工を加えても、白玉の製作は難しいものではないと思われる。いずれにしても上記の製作工程は①の施溝のある石核が出土しない限りは説明できない。

なお、この工房跡では滑石の原石が集積した状態で4個出土した。これは大きなもので長さ37cm、幅20cm、厚さ3.5cm程度、小さなもので長さ21cm、幅16cm、厚さ2.5cm程度を測る（図版203.204）。これらは原石産出地から持ち込まれたままの状態と思われた。仮に、30cm四方、



第237図 玉作工房跡滑石製未成品 川原石 7:10

厚さ1.5cmの原石から一辺1cm、厚さ5mmの方形剥片を作出したとしたら、2,700個の剥片ができる試算となる。軟質であるので作業はしやすく、欠損率も高くないと思われるので、今回出土した原石からはかなり大量の白玉が製作できることになる。福富Ⅰ遺跡では未成品の出土数は少ないが、本来は滑石製品の製作も盛んだったのかもしれない。

川原石（第237図12～18 図版187） 楕円形または円形の小さな川原石を利用したものである。人為的な加工が明らかなものは17で、長さ3.2cm、幅1.7cm、厚さ4cmの楕円形の石の上端部に両面から穿孔が施されている。穿孔以外に人工的な加工ははっきりしないが、表面や側面も研磨されているかもしれない。この石は黒色を呈し、八束郡美保関町玉結浜の石と似ているという（注2）。明確な加工痕はみられないが同様な石は約30個出土しており、これを材料として何らかを製作していた可能性はある。

このほかやや緑がかった灰色の石ではほぼ正円形をしたもの（12、14など）やきれいな楕円形をしたものもある。円形のものでは直径1.5～2cm、楕円形のものでは長軸長2.5～3cm、厚さ0.5～1cmを測る。非常にきれいな形をしているので、若干整形されているかもしれない。

砥石（第238図） 結晶片岩製と砂岩製とがある。1、2、5は結晶片岩（泥質片岩）製である。2、5は表面はほぼ平坦であるが、1の表面にはわずかながら起伏があり平坦ではない。この稜線をたどると幅程度の溝状のくぼみが集合していることがわかる。おそらく筋砥石のような使い方をしたと思われる（注4）。

結晶片岩製の砥石は、縁辺に凹凸が顕著であることから一見欠損品にみえる。しかし縁辺の凹凸は剥離の集合の結果で、かならずしもすべてが欠損品とは言えないように思われる。ここに掲載したものは、縁辺を剥離して整形したものと考えたい。

なお、結晶片岩については島根大学高須晃氏に分析を依頼した。分析の結果、紅簾片石珪質片岩は徳島県吉野川、和歌山県紀ノ川流域の三波川変成帯の結晶片岩の可能性が高いという。この報告は後章に掲載している。

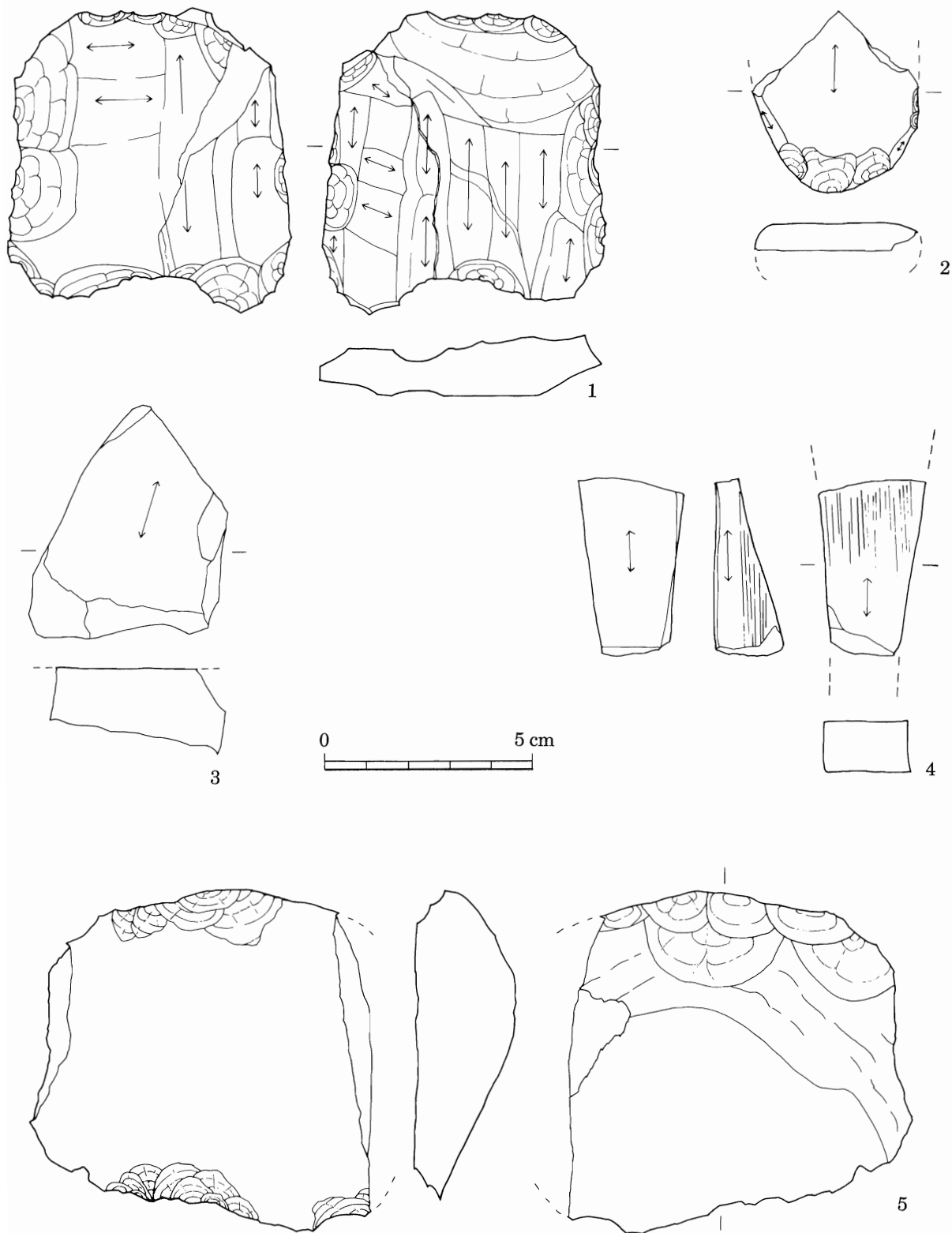
3、7は砂岩質の砥石である。使用面は平滑であり、玉砥石と断定することはできない。工具用の砥石の可能性も考えられる。

（注1） 島根県教育委員会「平所遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1976

（注2） 内田律夫の教示による。なお『出雲国風土記』「嶋根郡」の条には「玉結浜……有基石」と記載がある。

（注3） 八束郡玉湯町史跡玉作跡でも施溝分割によっているという。
玉湯町教育委員会『史跡玉作跡』1972

（注4） 八束郡東出雲町原ノ前遺跡出土の結晶片岩製砥石も同様な使われ方をしているので、筋砥石はかならずしも砂岩製ばかりではないかもしれない。このように考えれば、玉作遺跡で筋砥石の出土量が少なく、結晶片岩製砥石が多いのも理解できる。
島根県教育委員会「原ノ前遺跡」『洪山池遺跡 原ノ前遺跡 一般国道9号安来道路建設予定地内（西地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』1997



第238图 玉作工房跡出土砥石 7:10

3. その他の遺構

SB 01 (第239図 図版174) 調査区の北端に位置している。壁と壁帯溝の一部だけを調査した。**SB 01**は等高線に沿って平行に作られ、東南隅が丸みをもって「L」字形に曲がっていた。検出できた規模は東西で5 m、南北で1.5 mであった。竪穴住居跡にもみえるが、検出されたのが一部にとどまるので加工段状の掘立柱建物跡の可能性も考えられる。

住居跡内からは小片ながら比較的多くの遺物が出土した。土器のほか碧玉、めのう、水晶、滑石の剥片、チップをはじめ未成品も出土し、玉生産を窺わせる。碧玉などの玉関係の遺物はおもに西南隅を中心に分布しているようである。

図化できる土器は、1~4が須恵器、5が土師器である(第240図 図版188)。1、2は立ち上がりが高く直立した深身の坏、3は脚端部が屈曲し突線を1条巡らす高坏である。4は口縁部がやや外反する直口壺である。口縁端部は平坦面をもち、突線を2条、櫛描き波状文を2帯めぐらしている。

これらの須恵器はいずれも出雲第1期の特徴をもつことから、**SB 01**はこのころの時期の住居跡と考えられる。

玉関係の遺物としては、碧玉、めのう、水晶、滑石の未成品、剥片、チップなどが出土している(第241図~第245図 図版188.189)。第241図1、2は勾玉の一次研磨工程品で、ともに研磨途中で欠損したものと思われる。1は背面に、2は表裏面に研磨痕がみられるが、そのほかの面には調整剥離面が残る。

第241図3~5、7は調整剥離が終了した段階の未成品である。4、7は管玉未成品で、角柱状加工品である。4は直方体状、7は断面三角形を呈す。4は小さな調整剥離面がありていねいに加工されているが、7の剥離面は大きくやや雑な感じをうける。3、5は勾玉の未成品である。一部に細かい剥離がみられるが、大きな剥離面を各所に残している。

同図8~11は調整剥片である。いずれも主要剥離面は残るが、一部に調整剥離が施される。8は幅広で厚さが薄く、勾玉を目標にしたと思われる。9~11は厚さがあり管玉を目標とした可能性が考えられるが、明確な根拠はない。

第242図12~20は素材剥片である。個々の剥片が目標とした器種は知ることができない。12~16は板状の剥片で、17~20は断面三角形の剥片である。

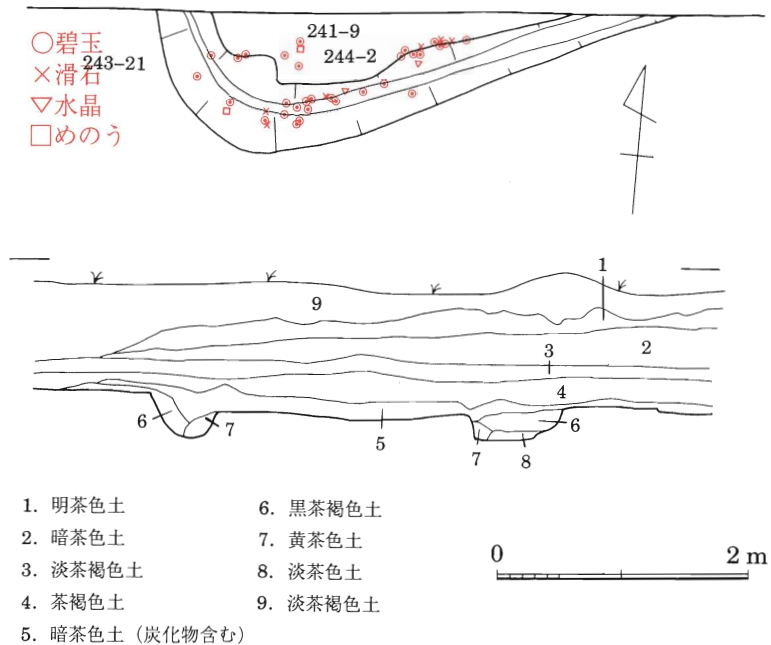
第243図21~23は石核である。21は板状の剥片石核で、22、23は残核と思われる。

第244図1~3はめのう製で、いずれも勾玉を目標にしたと考えられる。1は調整剥離完了品、2が調整剥離開始直後の調整剥片、3が素材剥片と思われる。

同図4~6は水晶製の未成品、剥片である。4は大きく礫面を残す調整剥片で、径の細い原材料の両端を打ち欠いて作られている。6は勾玉未成品の欠損品で、表面は敲打によって調整され

ている。小さな剥離は敲打後のものと観察できるが、敲打整形後になぜ再び剥離調整したのか理解しがたい。5は細長で薄い剥片である。一端に小さな剥離がわずかに施される。形状から考えると、勾玉製作時にできたものであろうか。

同図7~11は滑石である。9は白玉の成品または仕上げ研磨工程品で、径6mm、厚さ2mmを測る。ほぼ正円で、中央には孔が貫通している。表面、側面ともに研磨痕が観察できる。7は方形板状の研磨工程品である。中央には小円孔が穿孔され、表面には研磨痕が観



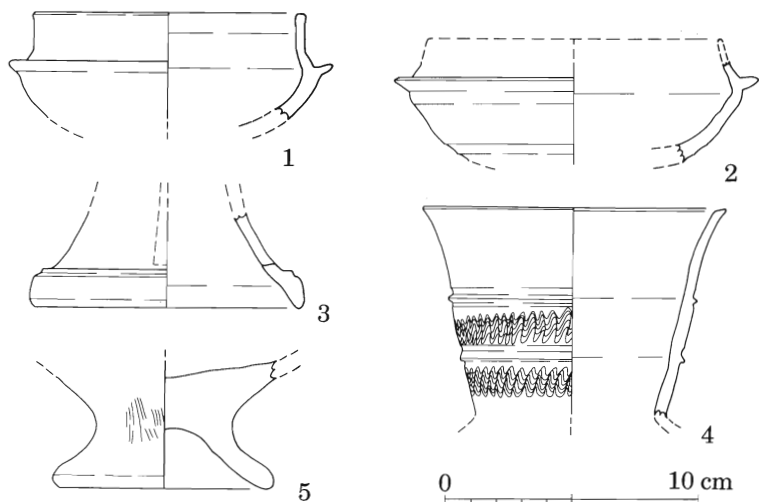
- | | |
|-----------------|----------|
| 1. 明茶色土 | 6. 黒茶褐色土 |
| 2. 暗茶色土 | 7. 黄茶色土 |
| 3. 淡茶褐色土 | 8. 淡茶色土 |
| 4. 茶褐色土 | 9. 淡茶褐色土 |
| 5. 暗茶色土 (炭化物含む) | |

第239図 玉作 SB 01実測図 1:60

察できる。8は方形板状の剥片である。形状からみて白玉の素材剥片のように思われるが確証はない。11は1.8×2.1cmを測る方形板状の研磨工程品であるが、どの器種を目標にしたか不明である。欠損の部分が認められないことからこれが完形と思われるが、これに見合うような器種は見当たらない。これをさらに分割して白玉の材料とすることは考えられないだろうか。もし、このような剥片が碁盤状石核とするなら、10のような剥片は11の素材となるのではなかろうか。

第245図は砥石である。黄褐色のきめの細かい石で、2面が使用されている。玉砥石とは限らないが、玉砥石とすれば仕上げ用と思われる。

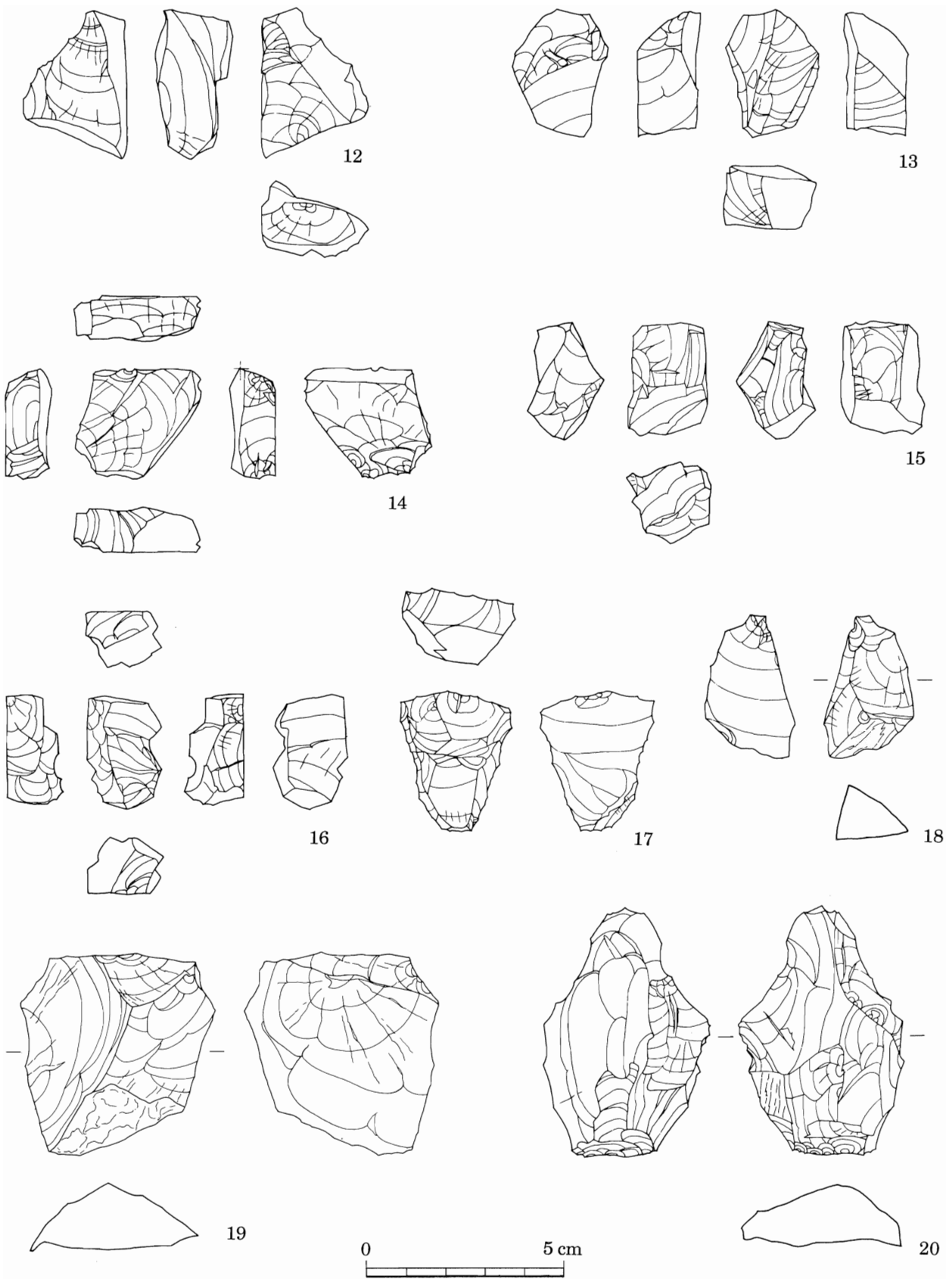
SB 02 (第246図) 玉作工房跡加工段4の南約5mに位置する。東西4m、南北1.5mを測る竪穴住居跡である。斜面に立地するため南部分のみ残存する。平面形は「コ」の字形を呈し、壁沿い



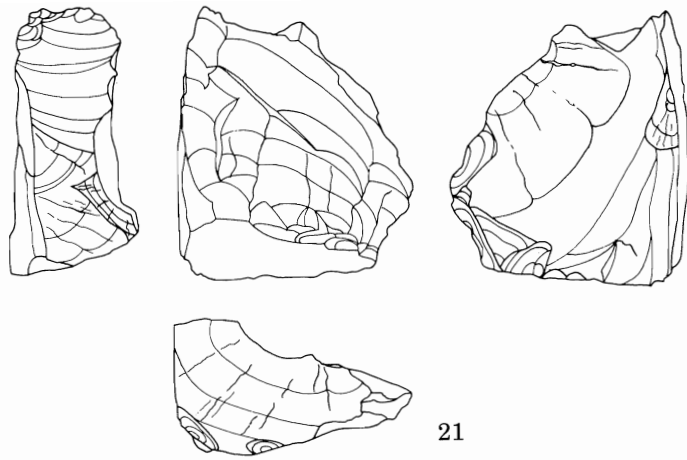
第240図 玉作 SB 01出土土器 1:3



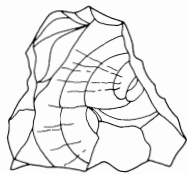
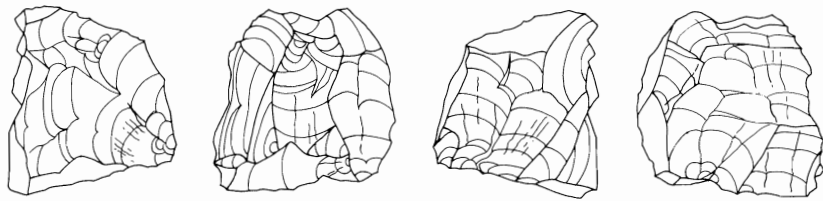
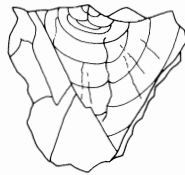
第241图 玉作 SB 01出土碧玉製未成品 (1) 7:10



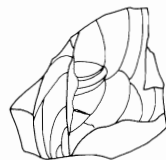
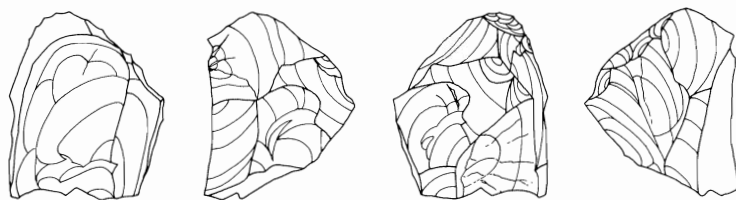
第242図 玉作 SB 01出土碧玉製未成品 (2) 7:10



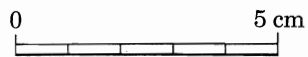
21



22



23



第243图 玉作 SB 01出土碧玉製未成品 (3) 7:10

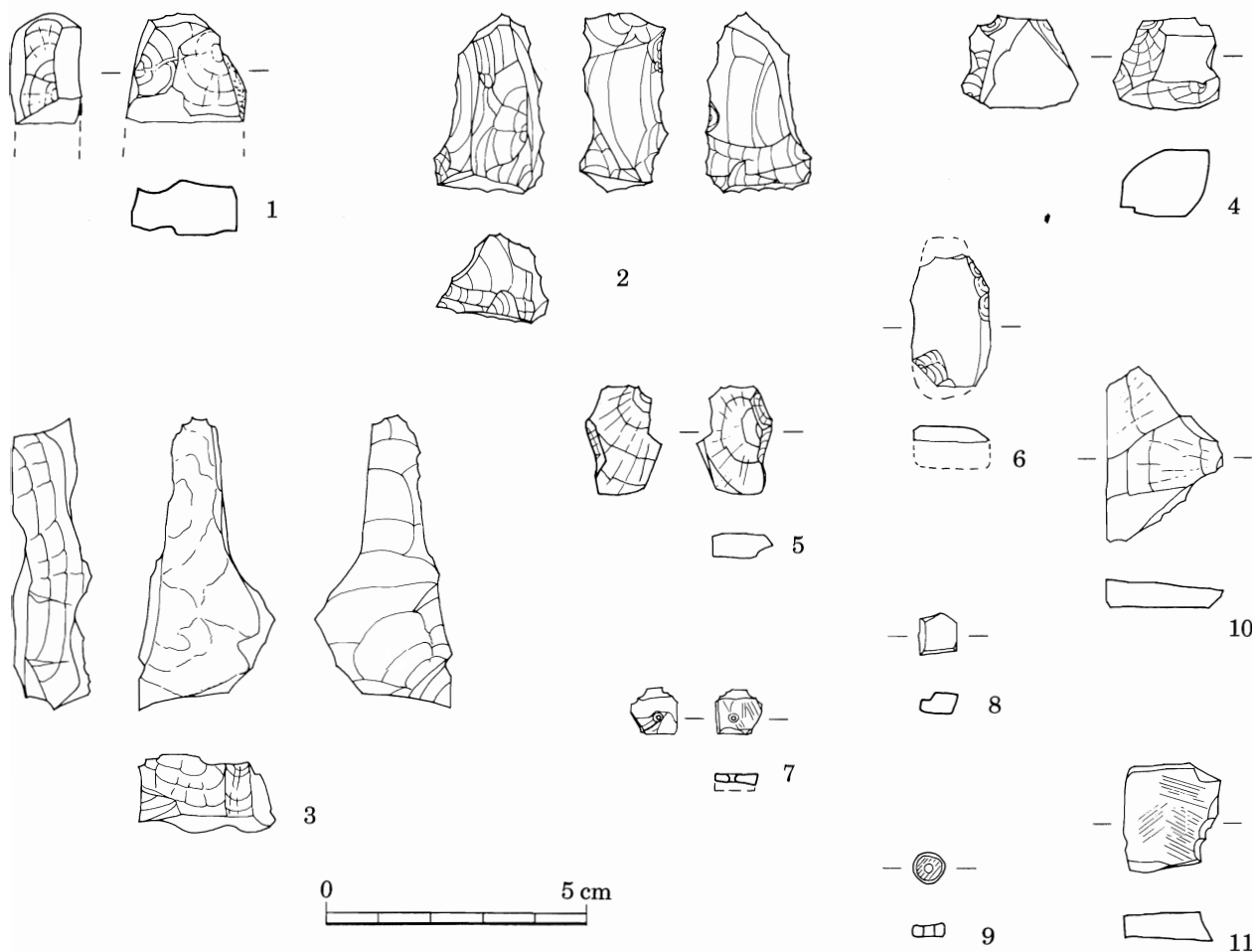
には壁帯溝がめぐる。床面ではピットが2つ検出できたが、支柱穴とは考えにくい。

住居跡内からは須恵器、土師器（第248図 図版190）のほか、図示しなかったが碧玉、滑石の剥片、チップが少量出土し、ここでもいくばくかの玉生産が行われたことが窺える。須恵器は蓋（1）、坏（2）、高坏（3、5）、甕（4）などが出土した。2以外は出雲第1期と考えられ、2は混入品の可能性がある。

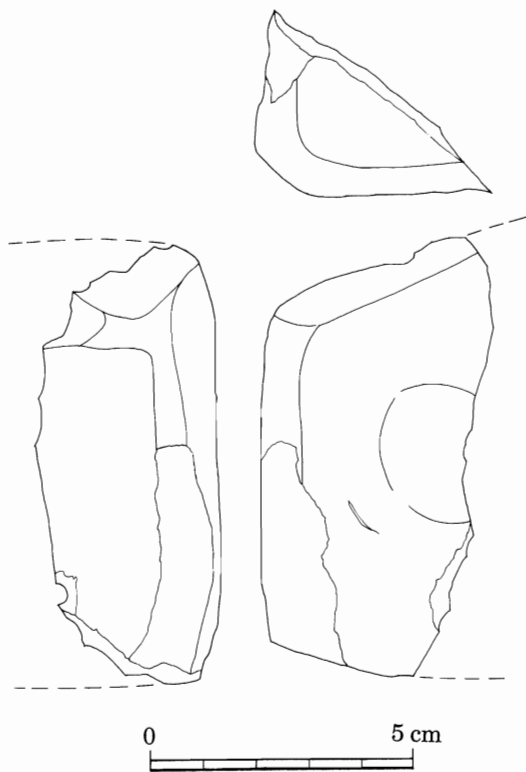
第247図1～4は碧玉で、1は管玉の調整剥片である。2も調整剥片であるが、幅広で断面三角形に近い形状をする。管玉、勾玉どちらでもできる大きさである。3、4は石核である。4は板状の石核から剥離された剥片石核である。4は残核と思われるが、素材剥片の可能性もある。

5、6はめのう製の未成品で、勾玉の調整剥片の可能性はある。縁辺にはわずかながら調整剥離が施される。

SB 03（第249図） 玉作工房跡加工段1の東端から加工段2にかけて建てられた掘立柱建物跡である。玉作工房跡の加工段壁に平行しているが、この加工段に伴う建物跡とは考えにくい。



第244図 玉作 SB 01出土めのう・水晶・滑石製未成品 7:10



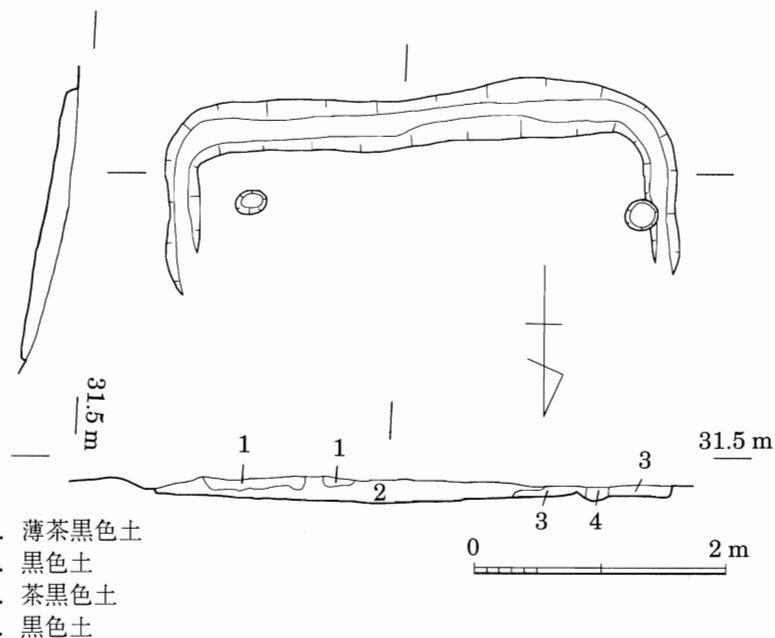
第245図 玉作 SB 01出土砥石 7:10

主軸方向が加工段の壁と違うこと、総柱の建物が玉作工房とは考えにくいことから、SB 05は玉作工房跡の建物ではないと思われる。この建物跡は4 B 区の掘立柱建物跡群との関連でとらえたほうがよいと思われる。

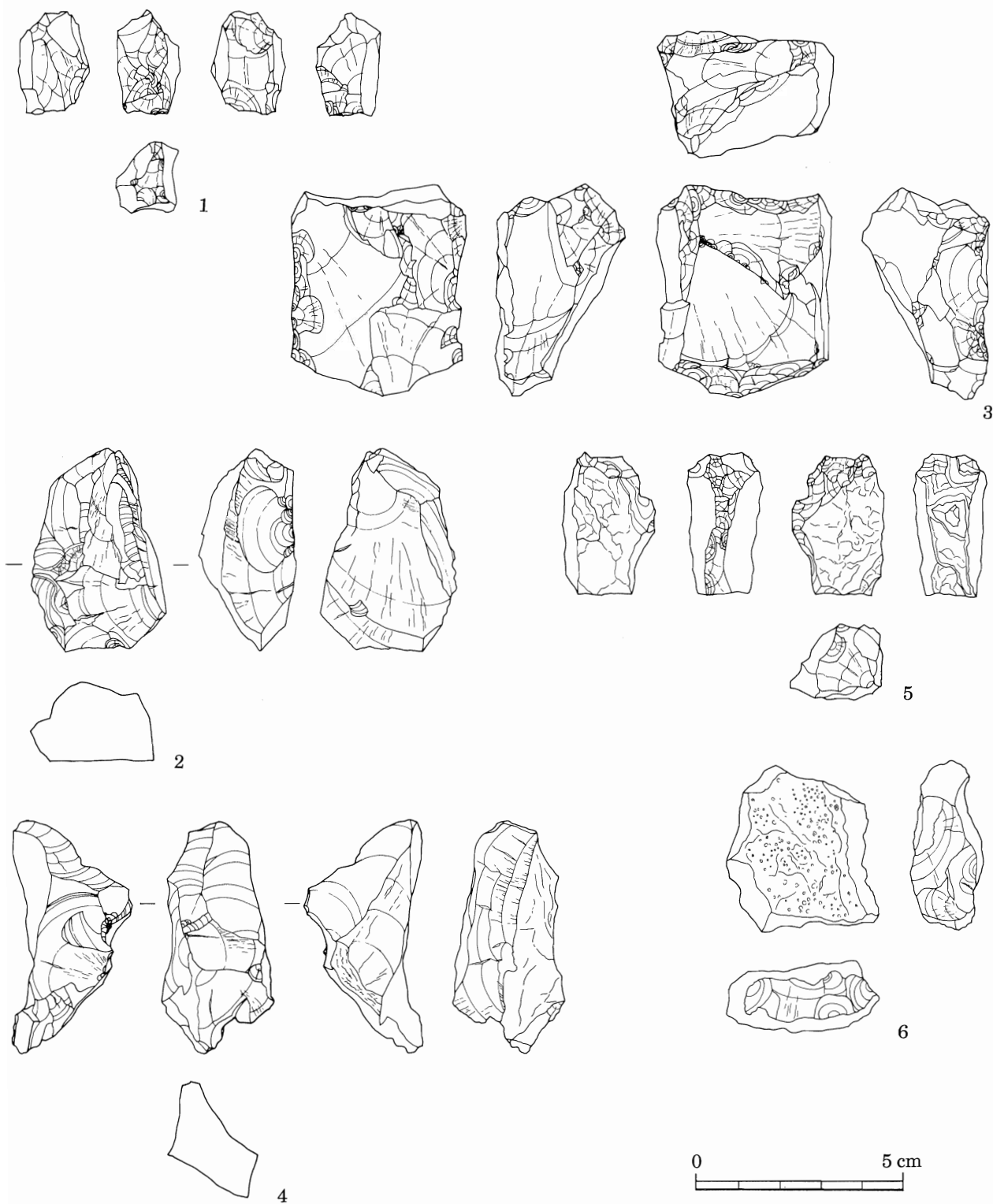
SB 03は2×3間（梁行き3.1 m、桁行き4.8 m）の掘立柱建物跡で、柱間は1.1 m から1.9 m とまちまちで、柱の並びもふぞろいである。

SB 04（第250図） 玉作工房跡加工段2と重複している。壁帯溝上に柱穴があるので、玉作工房跡の建物とは考えにくい。2×1間以上の掘立柱建物跡で、梁行き3.3 m、桁行き1.4 m 以上の規模である。

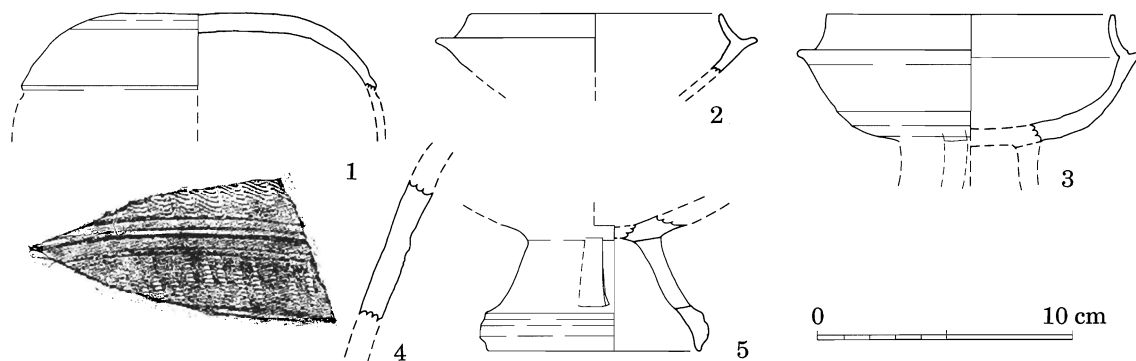
SB 05（第251図） 玉作加工段1・5の床面に当たる位置にあるが、やや北寄りに建てられている。2×2間の総柱の掘立柱建物跡で、3.2 m×2.7 m の規模である。P 2の位置がややずれているため P 1-P 2、P 2-P 3間が不ぞろいだが、他はほぼ1.5 m 間隔である。



第246図 玉作 SB 02実測図 1:60



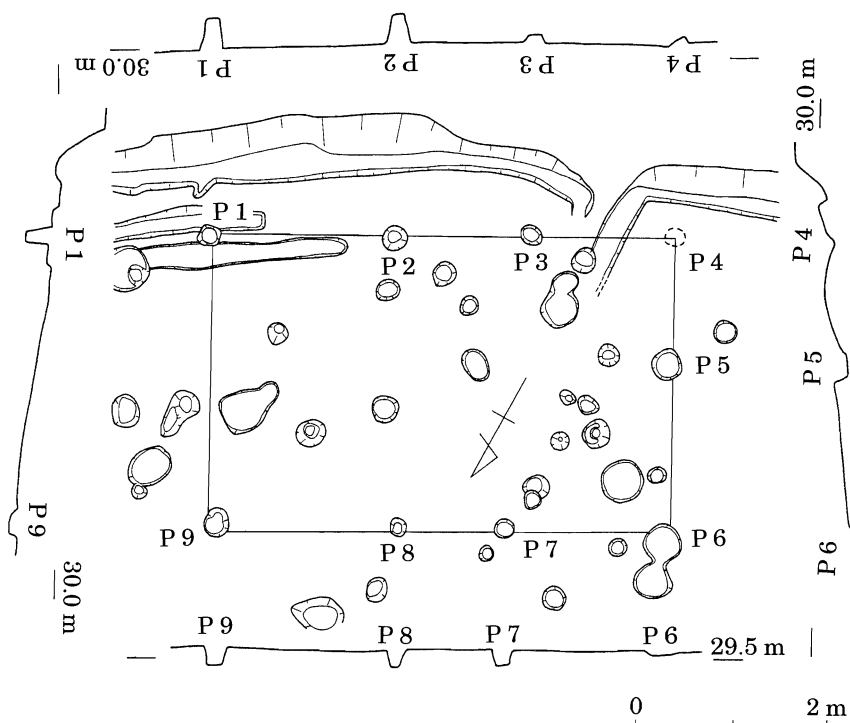
第247图 玉作 SB 02出土玉未成品 7:10



第248図 玉作 SB 02出土土器 1:3

SB 02 出土土器一覧表

挿図番号	図版ページ	法量 (cm)	形態の特徴	文様	手法	時期	備考
第248図-1	図版190		稜小さい		回転ケズリ	出雲1期	ろくろ右回転
-2	同上	口径9.8	たちあがり短く内傾			出雲5期	
-3	同上	口径11.4	たちあがり長い	方形透し	回転ケズリ	出雲1期	ろくろ右回転
-4	同上			波状文、凹線文			
-5	同上	底径8.4	端部屈曲	方形三方透し		出雲1期	



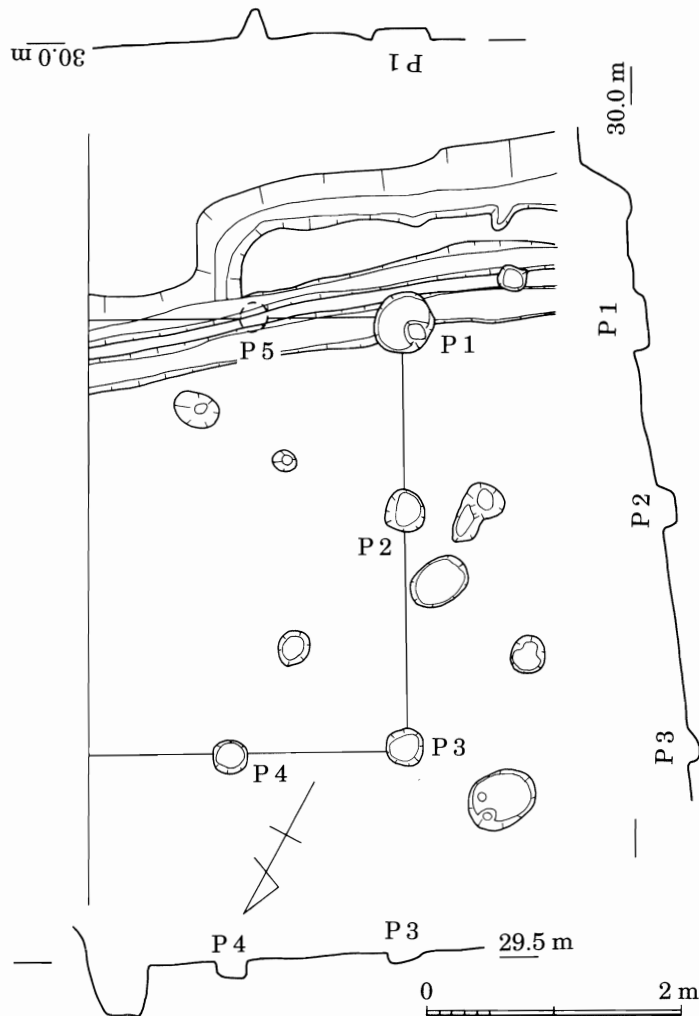
第249図 玉作 SB 03実測図 1:60

SB 04 計測表

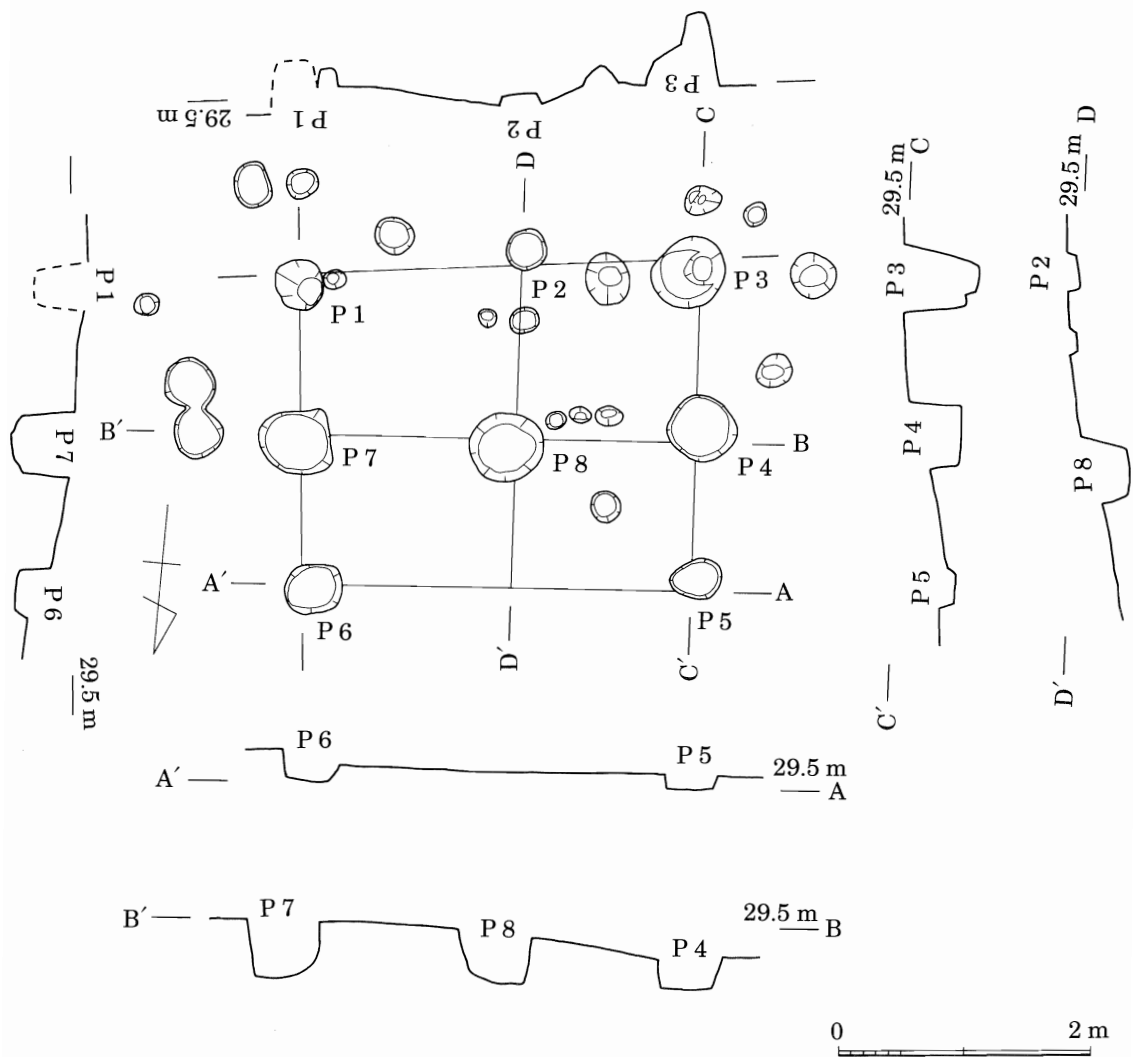
規 模	梁行き				桁行き	
	2間 (3.3 m)				1間 (1.4 m)	
主 軸	N-62° -W					
柱穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	
	上面径	48×48	34×31	30×30	27×27	
	深 さ	12	14	11	14	
柱間距離 (m)	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 5-1		
	1.5	1.8	1.4	1.2		

SB 03 計測表

規 模	梁行き				桁行き		
	2間 (3.1 m)				3間 (4.8 m)		
主 軸	N-63° -W						
柱穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	22×21	26×25	22×21	?	30×33	40×42
	深 さ	33	31	9	?	15	7
	番 号	P 7	P 8	P 9			
	上面径	22×19	18×19	27×30			
	深 さ	17	18	21			
柱間距離 (m)	P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5	P 5-6	P 6-7	
	1.9	1.4	1.5	1.3	1.8	1.7	
	P 7-8	P 8-9	P 9-10				
	1.1	2.0	3.1				



第250図 玉作 SB 04実測図 1:60



第251図 玉作 SB 05実測図 1:60

SB 05 計測表

規 模		梁行き			桁行き		
		2間 (3.2 m)			2間 (2.7 m)		
主 軸		N-9° -E					
柱 穴 (cm)	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	(18+α)×39	30×31	59×56	57×53	41×33	45×39
	深 さ	?	9	59	4.2	11	26
	番 号	P 7	P 8				
	上面径	58×54	58×55				
	深 さ	50	44				
柱 間 距 離 (m)		P 1-2	P 2-3	P 3-4	P 4-5		P 6-7
		1.8	1.4	1.5	1.2		1.2
		P 7-8	P 2-8	P 4-8	P 7-8		
	1.3	1.5	1.5	1.6			

4. 4区の玉作関係遺物

4区では碧玉を中心にめのう、水晶の剥片、未成品が出土した。とくに4A区からの出土が多い。ここでは前述のように多くの住居跡が検出されたが、玉作工房跡のようにチップ、剥片が集中せず、ここで玉生産を行っていた形跡はみられなかった。玉関係の遺物はほとんどが包含層からの出土であること、4区の建物跡が古くても6世紀末であることから、玉作工房はこの周辺にあったと考えられる。

碧玉製未成品（第252図1～第254図25 図版190.191）

勾玉未成品（第252図1～6） 1は仕上げ研磨中に欠損した仕上げ工程品である。表面には粗い研磨痕が残り、幅の狭い平坦面が観察できる。穿孔は片面穿孔で、裏面には穿孔によってできた剥離面が孔の周囲にみられる。

2は一次研磨工程品である。各面に研磨痕が観察できるが、調整剥離面も残っている。研磨痕はいずれも1方向からの研磨である。長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ1cmを測るが、勾玉の未成品としてはやや小さいと思われる。研磨痕がみられない一端に小さな調整剥離がみられるが、これはこの部分が欠損したため再調製したものかもしれない。そのため勾玉の未成品としては小さいものとなったと思われる。

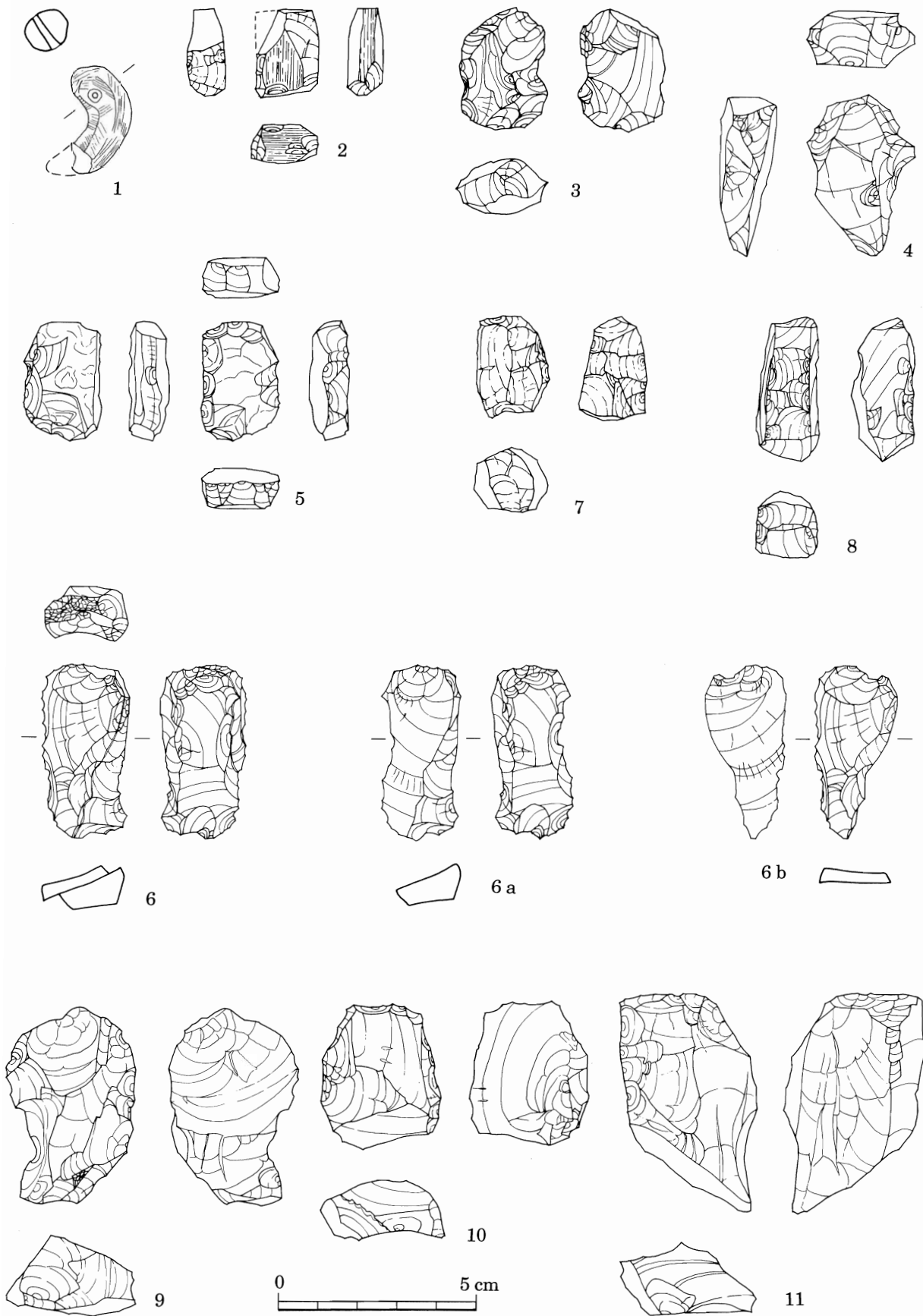
4～6は調整剥片である。4、5は長方形の板状をし、縁辺に小さな調整剥離が施され、表面には主要剥離面や礫面を残している。6は剥片2個の接合資料である。接合状態では一見管玉の角柱状加工品に見えるがやや薄く、勾玉の未成品としていた可能性が高い。6a、6bは調整剥離時に欠損したものと思われ、厚みのある6aはさらに調整が加えられ勾玉を完成させようとしている。

管玉角柱状加工品（第252図7、8） ともに側縁に小さな調整剥離面をもつ角柱状加工品である。8は向かい合う2側縁に大きな剥離面をもち、調整剥離は他の2面のみ施されている。7は長さ2.6cmとやや短く、断面五角形を呈しややごつごつした感じの未成品である。

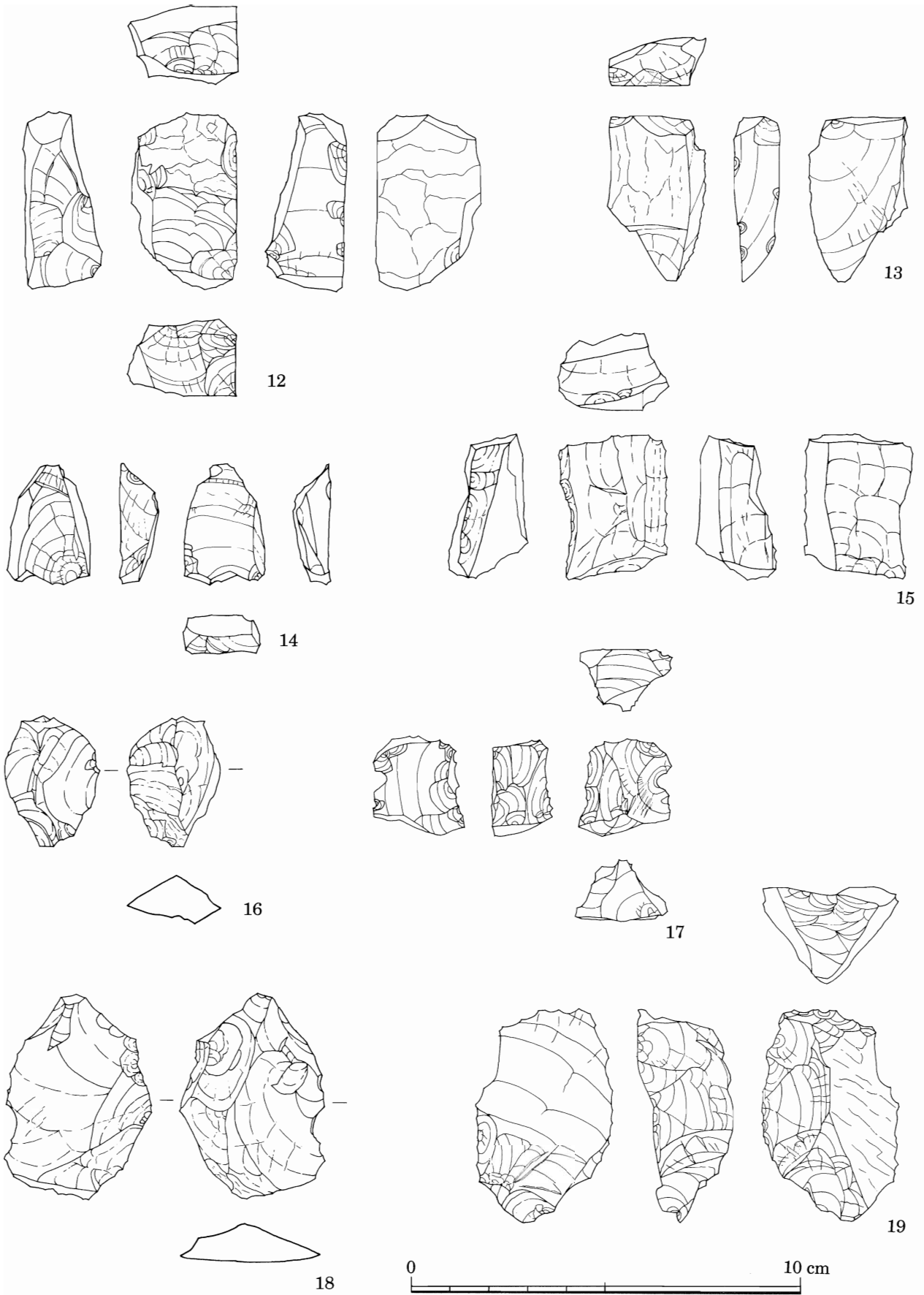
調整剥片（第252図9～第253図12） 剥片の縁辺を調整剥離したものである。調整剥離が進んでいない段階のもので、目標とした器種は不明である。ただし、図示したものは玉作工房跡から出土した管玉の調整剥片より幅広の感じがするので、勾玉の未成品と考えることもできる。

素材剥片（第253図13～19） 全体に幅広の剥片が多い。調整剥片同様、勾玉の未成品が多いのかもしれない。板状のもの（13～15）と断面三角形のもの（16～19）とがあるが、これは石核の形状によるものと考えられる。18、19はかなり大型の剥片なので、これをさらに分割して管玉の素材剥片としようとしていた可能性も否定できない。

石核（第254図20～24） 20、23は板状の石核、22、24は礫状の石核である。23は比較的



第252图 4区出土碧玉製未成品 (1) 7:10



第253图 4区出土碧玉製未成品 (2) 7:10



第254图 4区出土碧玉製未成品 (3) 1:2

大きな剥離面をもちきれいな剥片剥離が行われているが、このほかの剥離面はあまりきれいとはいえない。残核に近い状態かもしれない。

ハンマー（第254図25） 残核を転用したものと思われる。端部にはつぶれ状の細かな剥離が各所にみられる。一部に研磨痕がみられるが、これがどのようなものかについては不明である。

めのう製未成品（第255図1～第257図28 図版192）

勾玉未成品（第255図1～10） 1は仕上げ研磨途中で欠損した仕上げ工程品である。仕上げ研磨開始直後のものと思われ、各面にはやや幅広の平坦面とそれによってできる稜線が明瞭に残る。研磨がおよばずに剥離面が残っている部分もある。全体に雑な作りで、調整剥離によって大きくくぼむところもある。研磨痕は全体に粗いが腹面は非常にていねいに研磨されており、研磨痕は観察できず光沢がある。穿孔は片面穿孔である。

2～4は一次研磨工程品である。2はほぼ全面に研磨がおよんでいるが、背面と上面は研磨されていない。下部が欠損するが、本来の形状は長方形で腹面が若干削り込み状になっていたようである。3、4も欠損品である。4は一次研磨開始直後に欠損したと思われ、研磨の範囲は狭い。2、4には腹面の方向からの剥離が観察される。このことから長方形板状加工品の1長辺を剥離して削り込みを整形したと思われる。2、4の上部には穿孔途中の円孔が穿たれている。ともに貫通はしていない。

5～10は調整剥離完了品で、全面に調整剥離が施される。7は側縁のみに調整剥離が施される。7は腹面に当たる側縁がわずかに抉れ勾玉を思わせるが、そのほかは平面形長方形を呈し背面に当たる部分が若干丸みをもつ程度である。5～7の上部には穿孔途中の小円孔がみられる。これらはいずれも貫通していない。6は浅い位置で止まっているが、5、7は貫通直前で止まっている。孔端は丸みをもっており、穿孔工具の先端はあまり鋭くなかったように思われる。これらは長さ2.7～4.1cm、幅2～2.7cmとやや小型である。

調整剥片・素材剥片（第255図11～第256図17） 11～13は調整剥離が施された調整剥片である。12は欠損品の可能性がある。

14～17は素材剥片である。礫面が両面に残るものが多く、石核は板状を呈していたと考えられる。

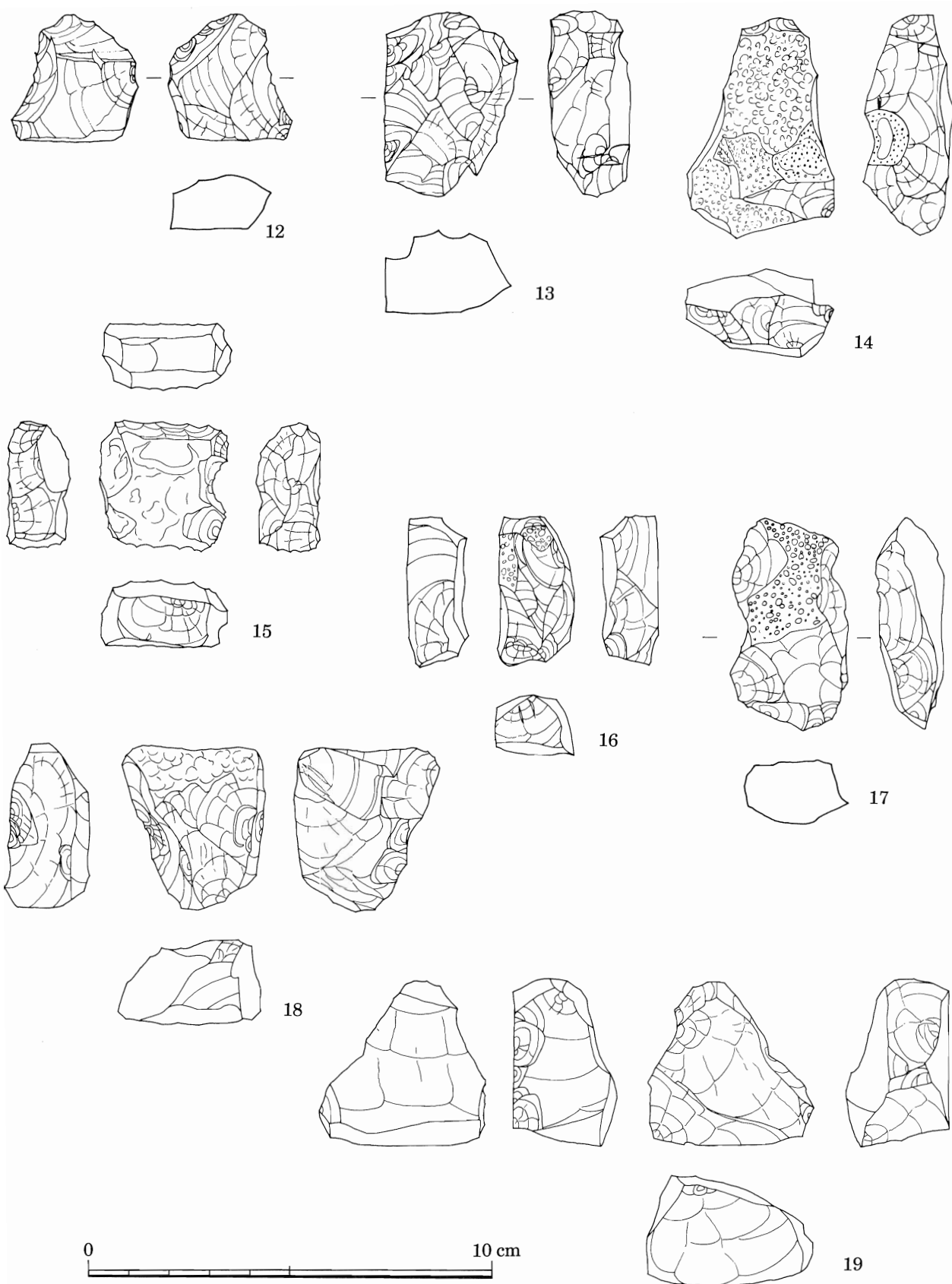
以上の剥片は16のようにやや細長いものもあるが、総じて偏平板状のものが多い。本遺跡ではめのう製の角柱状加工品が出土していないので、これらの剥片は勾玉を目標としていたと考えられる。

石核（第256図18～第257図26） 図示しなかったものも含め、比較的偏平なものが多い。打面調整などはみられず、打点もまちまちのようである。

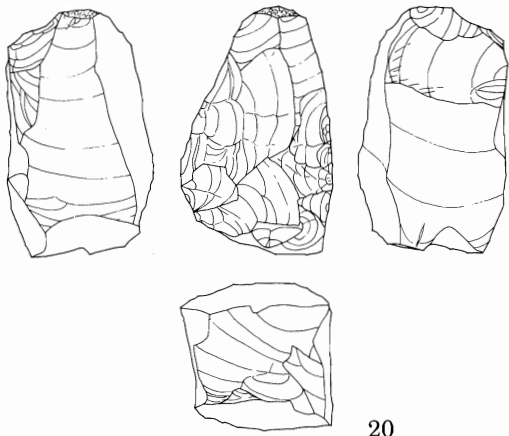
23～25は一辺2～3cmの立方体状を呈し、調整剥離が施されないものである。ここでは残核としたが、同様の形状をしたものが10個以上出土していることからなんらかの成品を目的と



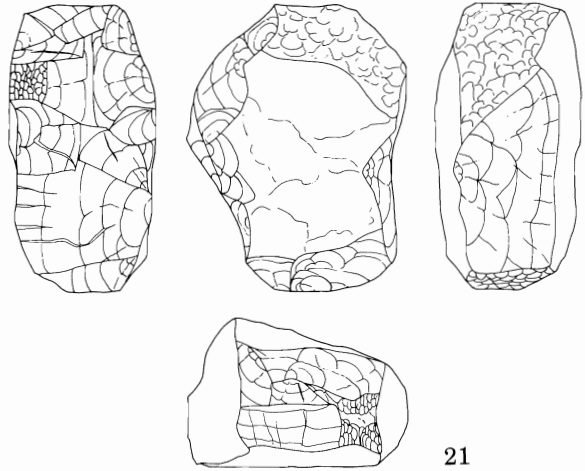
第255図 4区出土めのう製未成品 (1) 7:10



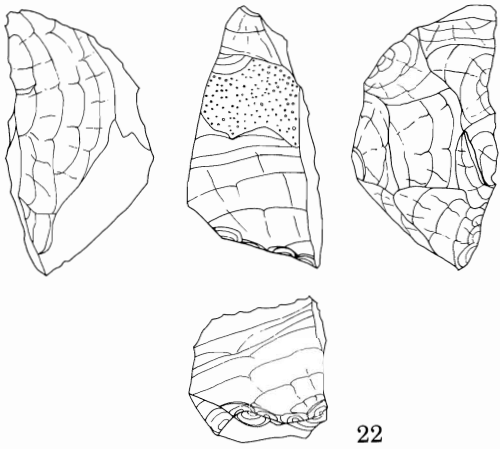
第256図 4区出土めのう製未成品 (2) 7:10



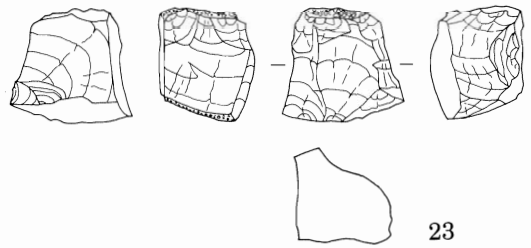
20



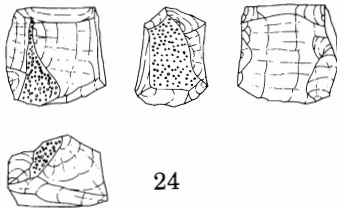
21



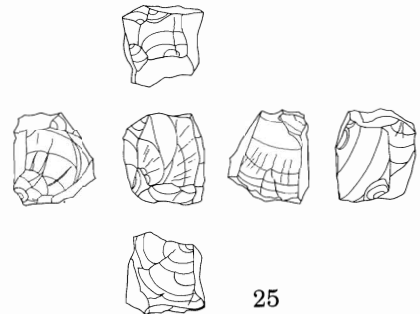
22



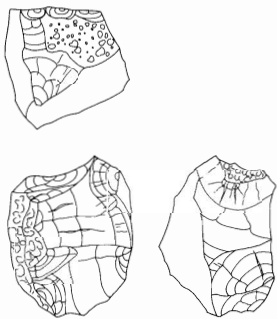
23



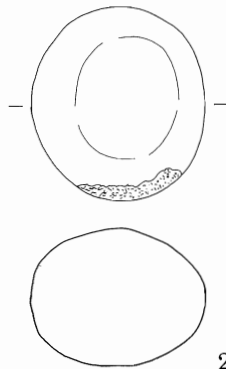
24



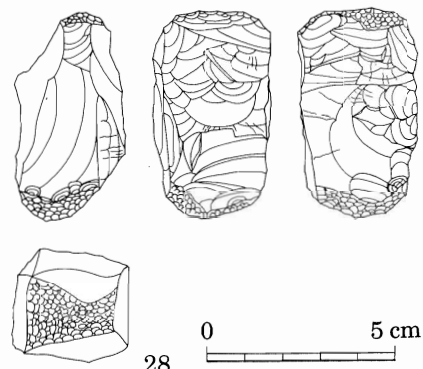
25



26



27



28



第257図 4区出土めのう製石核・ハンマー 1:2

した可能性が考えられる。これらが未成品であると仮定したら、これから作ることができる器種としては丸玉が想定できる。めのう製丸玉は数が少ないものの八束郡東出雲町島田池横穴墓群（注1）などで出土しており、存在しないわけではない。福富Ⅰ遺跡では丸玉と断定できる研磨工程の未成品などが出土していないので、単なる残核である可能性が高いが、丸玉の素材剥片の可能性も指摘しておく。

ハンマー（第257図27、28） 28はめのう製、27は川原石を利用したものである。端部に敲打による打痕が顕著に観察できる。28の各面には剥離面があり、石核を転用したものと思われる。

水晶製未成品（第258図1～8 図版192）

勾玉未成品（第258図1～3） 1は敲打整形品で、敲打調整が施されるのは一部にとどまり調整剥離面が多く残る。また、腹面に当たる側縁には礫面が残されている。おそらく敲打整形開始直後のものであろう。2、3は調整剥離完了品である。2は比較的厚さが薄いもので、表面には大きな剥離面が残り、背面に当たる側縁の一部には礫面（結晶面）が残る。3は厚みのあるもので、一面には礫面（結晶面）が大きく残る。主要剥離面側は調整剥離で埋められており、主要剥離面そのものは残されていない。

管玉未成品（第258図5） 管玉の角柱状加工品または調整剥片と思われるが確証はない。やや幅広だが、側縁を調整剥離し柱状に整形されている。各面とも大きな剥離面が残る。

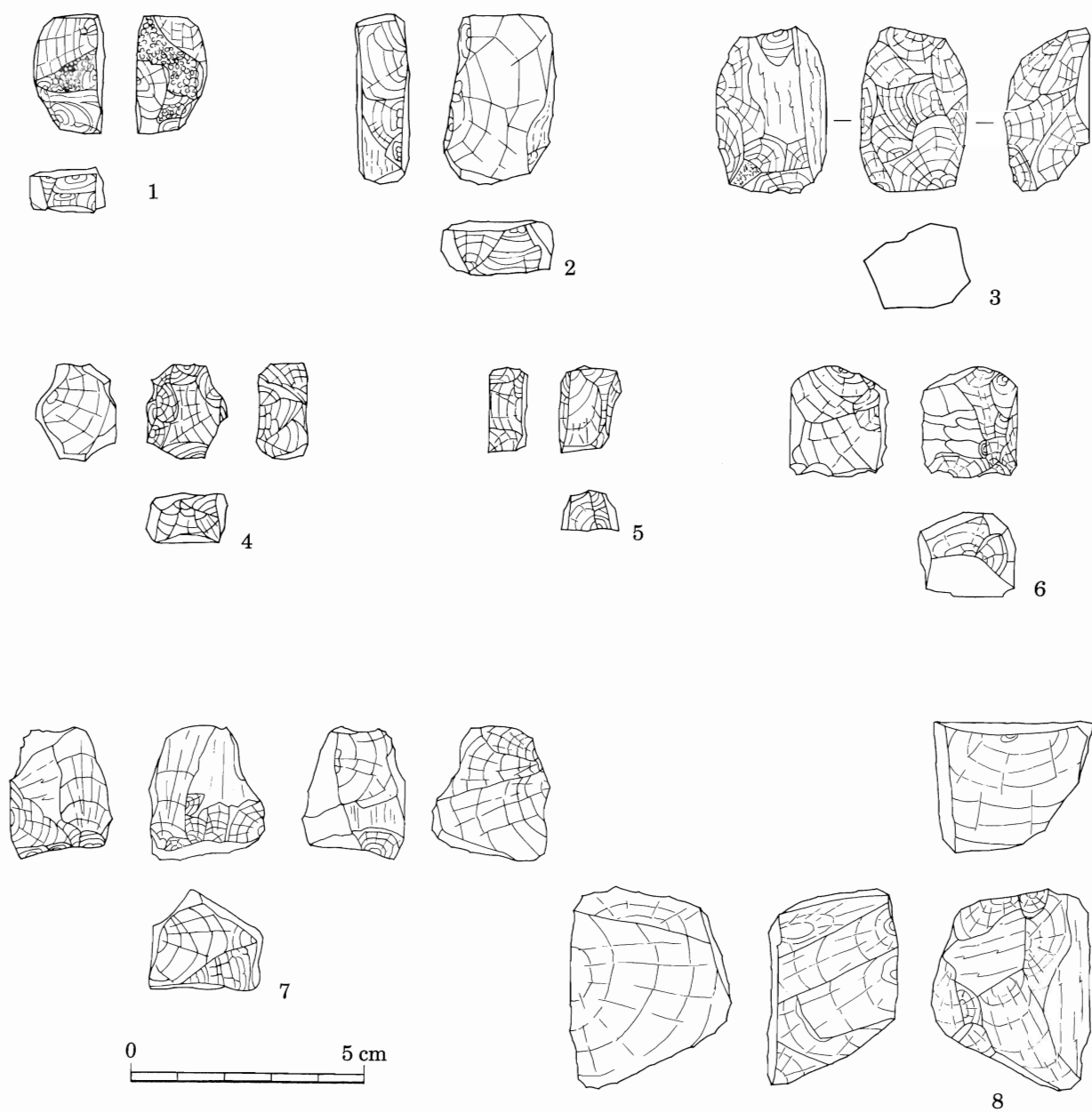
丸玉未成品（第258図4） 側縁を調整剥離して円盤状にしている。表裏面には大きな剥離面が残るが、側縁には小さな調整剥離がみられる。

調整剥片（第258図6、7） 比較的厚みのある剥片の一部に調整剥離が施されている。長さが2～3cmと短く、勾玉未成品としては短すぎるように思われる。分割して管玉未成品にできるが、調整剥離が開始されているので丸玉を目標にしていた可能性が考えられる。ともに一部に礫面（結晶面）が残されている。

石核（第258図8） 立方体状の石核で、結晶化していない石英を使用している。剥離面は比較的大きく、大きな素材剥片が採られたようである。打点は各所にみられ、一定の剥片剥離技術はなかったように思われる。

砥石（第259図1～5 図版196） 図示したものはすべて結晶片岩である。平面形は1、2が羽子板状、4が波状の側縁である。2、4、5は表裏面、両側面とも、1は両側面、3は上面が滑らかになっており、使用面と考えられる。1、2、4は側縁がとくに滑らかで、内磨き用とされていたと考えられる。ただし、表面も使用しているものがあるので、内磨き用としてだけ使用されたとは考えにくい。

(注1) 島根県教育委員会「島田池遺跡」『島田池遺跡・鶴貫遺跡 一般国道9号安来道路建設
 予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅷ』1997



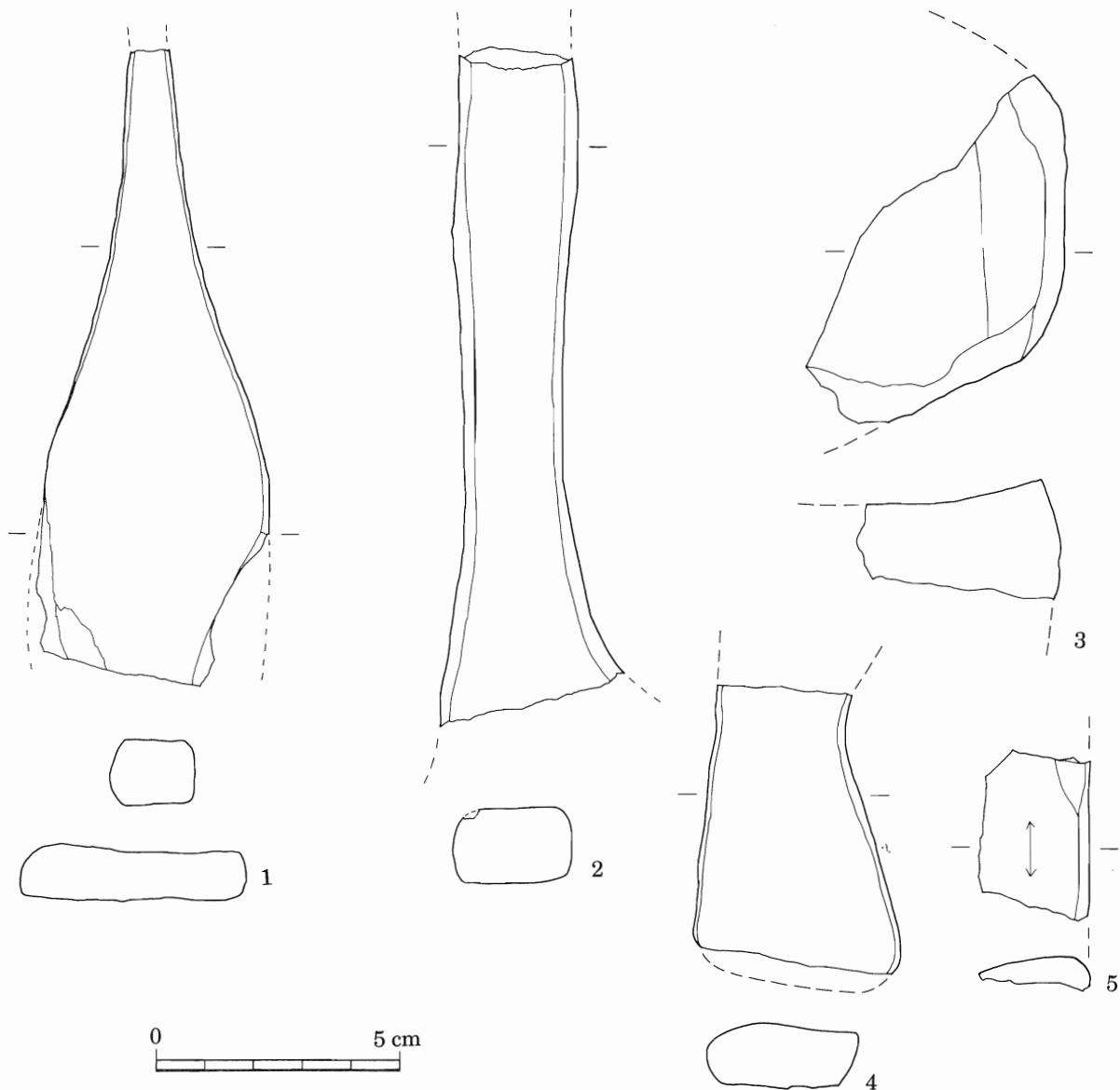
第258図 4区出土水晶製未成品 7:10

5. 6区の玉作関係遺物

6区でも碧玉を中心にめのう、水晶の剥片、未成品が出土した。ここでは玉作工房跡とほぼ同時期の住居跡が検出されたが、玉作工房跡のようにチップ、剥片が集中せず、ここで玉生産を行っていた形跡はみられなかった。玉関係の遺物はすべて包含層からの出土であることから、これらの遺物は上方からの流れ込みの可能性が高く、玉作工房はこの周辺にあったと考えられる。

碧玉製未成品（第260図1～第262図22 図版193.194）

勾玉未成品（第260図6、7、9） 6は一次研磨工程品である。表裏面と背面に研磨痕が観察できるが、調整剥離面も残っている。研磨痕はいずれも1方向からの研磨である。



第259図 4区出土砥石 7:10

7、9は調整剥離完了品である。7は若干C字形をし、9は楕円形に近い。7は勾玉の形状をなしているが、これは矩形の未成品の腹面に当たる部分を調整剥離の最後に、打撃して剥離したためである。

管玉未成品（第260図1～5） 1は仕上げ工程品である。断面八角形側を呈し側面には研磨によってできた平坦面と稜線が観察できる。研磨はすべて長軸方向に行われている。

2は穿孔開始直後の未成品である。表面は研磨によってできた狭い平坦面の集合によっており、断面形は一見丸くみえるが、断面形は七角形をなす。上面には穿孔しようとした痕跡がみられる。これはごくわずかな痕跡で、研磨後につけられたものである。長軸に直交するように研磨痕が観察され、穿孔とともに仕上げ研磨も行われ始めたと思われる。

3～4は一次研磨工程品である。研磨痕は長軸に直交するようにつけられている。3、4は一次研磨開始直後のもので、3は側面のごく一部、4は側面のごく一部と両端面に研磨痕がみられる。

5は角柱状加工品である。平面形、断面形とも不整形で、あまりきれいな柱状をしていない。

調整剥片（第260図10、11、第261図15、16） 剥片の縁辺を調整剥離したものである。偏平な板状を呈するもの（15、16）と、断面三角形に近い厚みのあるもの（10、11など）とがある。長さに対して幅広のものが多く、また一側縁が丸みをもつものがある（10、11、15、16）ことから勾玉の未成品と考えることもできる。

素材剥片（第260図12～14、17、18） 全体に幅広の剥片が多いが、13は細長い形状である。調整剥片同様、勾玉の未成品が多いのかもしれない。板状のもの（12、13、18）と断面三角形に近く厚いもの（14、17）とがあるが、これは石核の形状によるものと考えられる。17、18は残核の可能性もある。

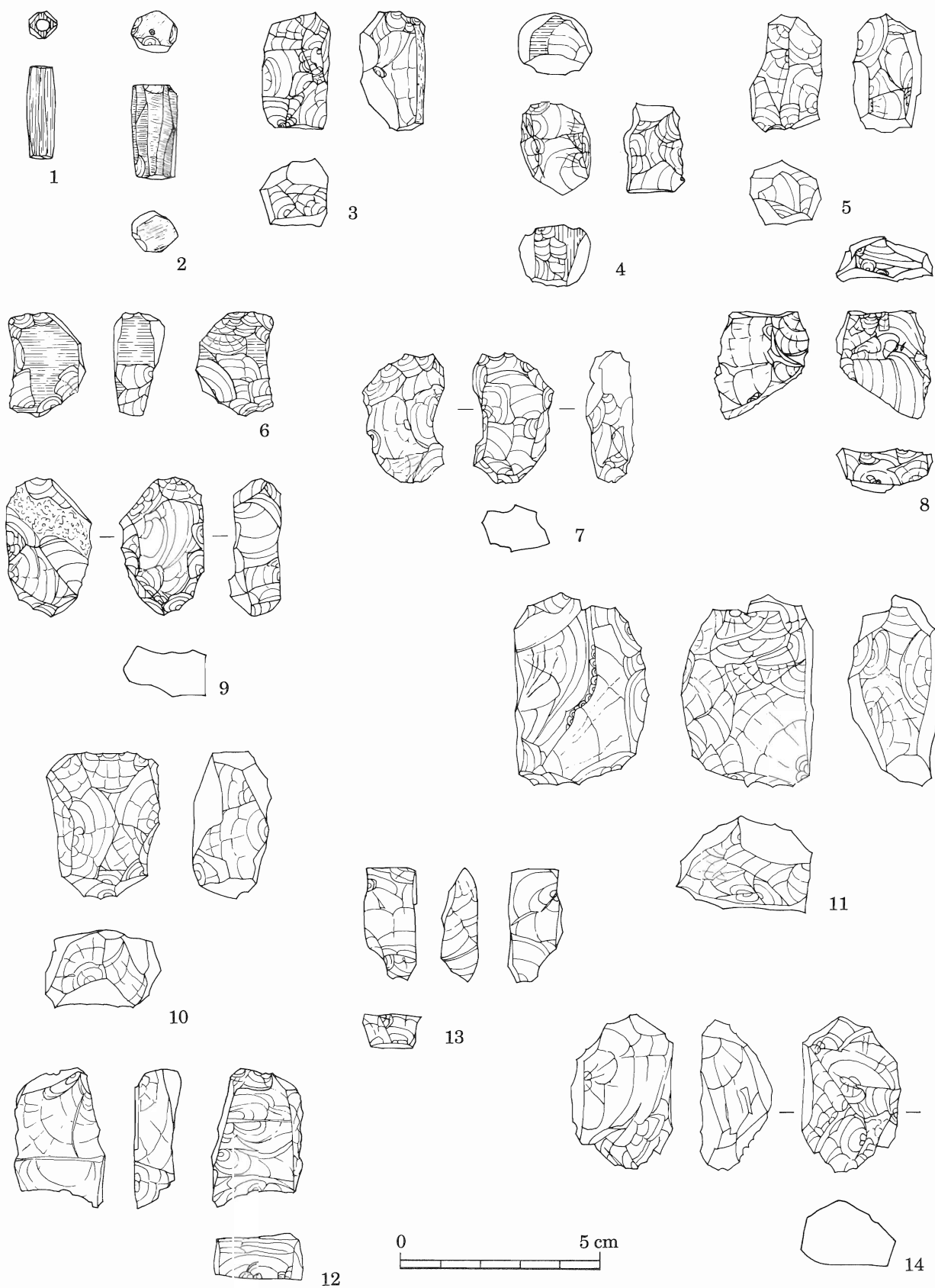
石核（第261図19～第262図21） 6区ではおもに板状の石核が出土している。21は厚さが薄く、剥片石核と思われる。このほかは比較的厚さがある板状あるいは直方体状をしている。

ハンマー（第262図22） 拳大の球形に近い形状で、残核を転用したものと思われる。端部にはつぶれ状の細かな剥離が各所にみられる。

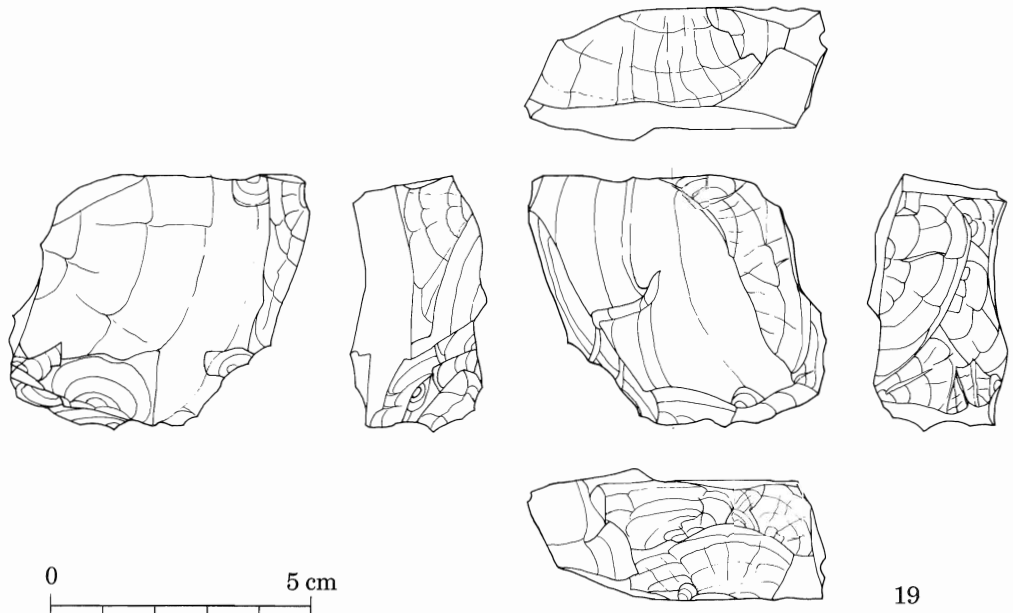
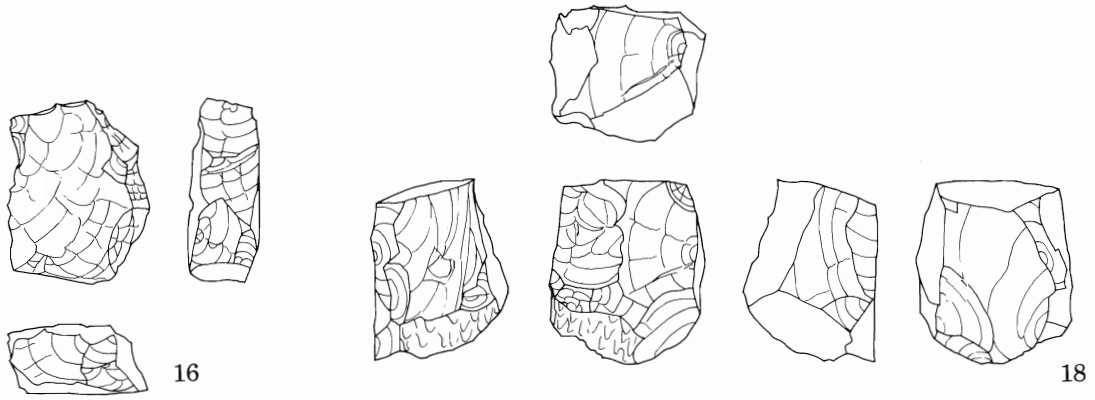
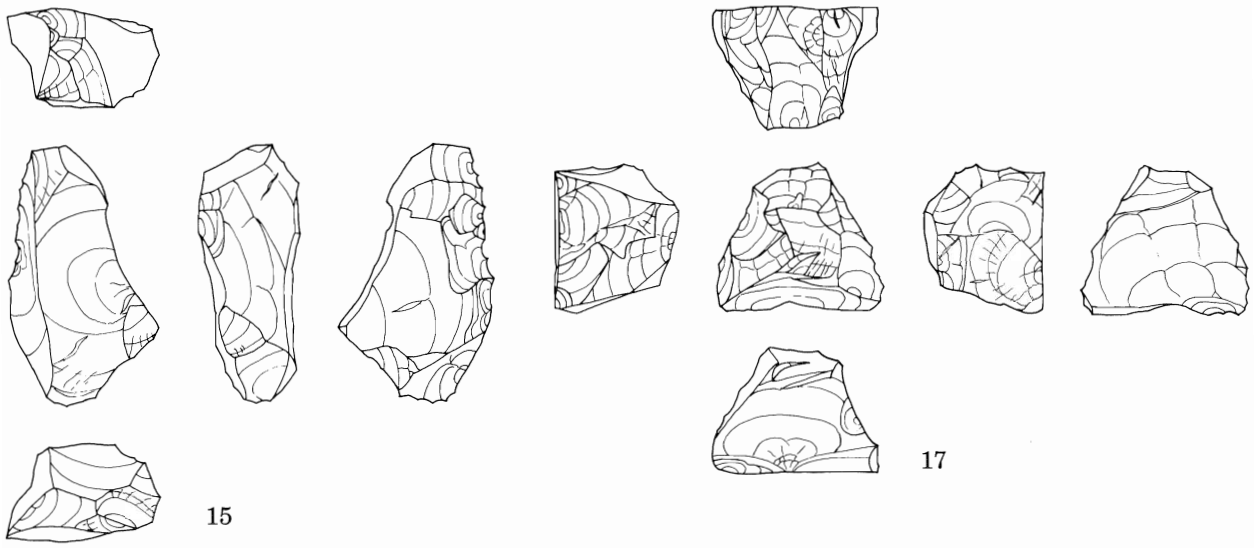
めのう製未成品（第263図1～第264図10 図版194）

勾玉未成品（第263図1、2） 1、2は調整剥離完了品で、1は全面に、2は側縁に調整剥離が施される。1は腹面に当たる側縁が抉れ勾玉の形状をしている。2は平面形が楕円形である。表裏面には礫面が全面に残る。

調整剥片（第263図3、4、6） わずかながら縁辺に調整剥離が施されている。3、4は一辺1.6cm前後を測る方形板状の調整剥片で、両面に礫面が残る。非常に小さな剥片で勾玉、管玉とも作れそうにない。これから作れるものは丸玉か白玉と思われるが、研磨段階の未成品が出土していないので断定できない。



第260图 6区出土碧玉製未成品 (1) 7:10



第261图 6区出土碧玉製未成品(2) 7:10

素材剥片 (第263図5、7)

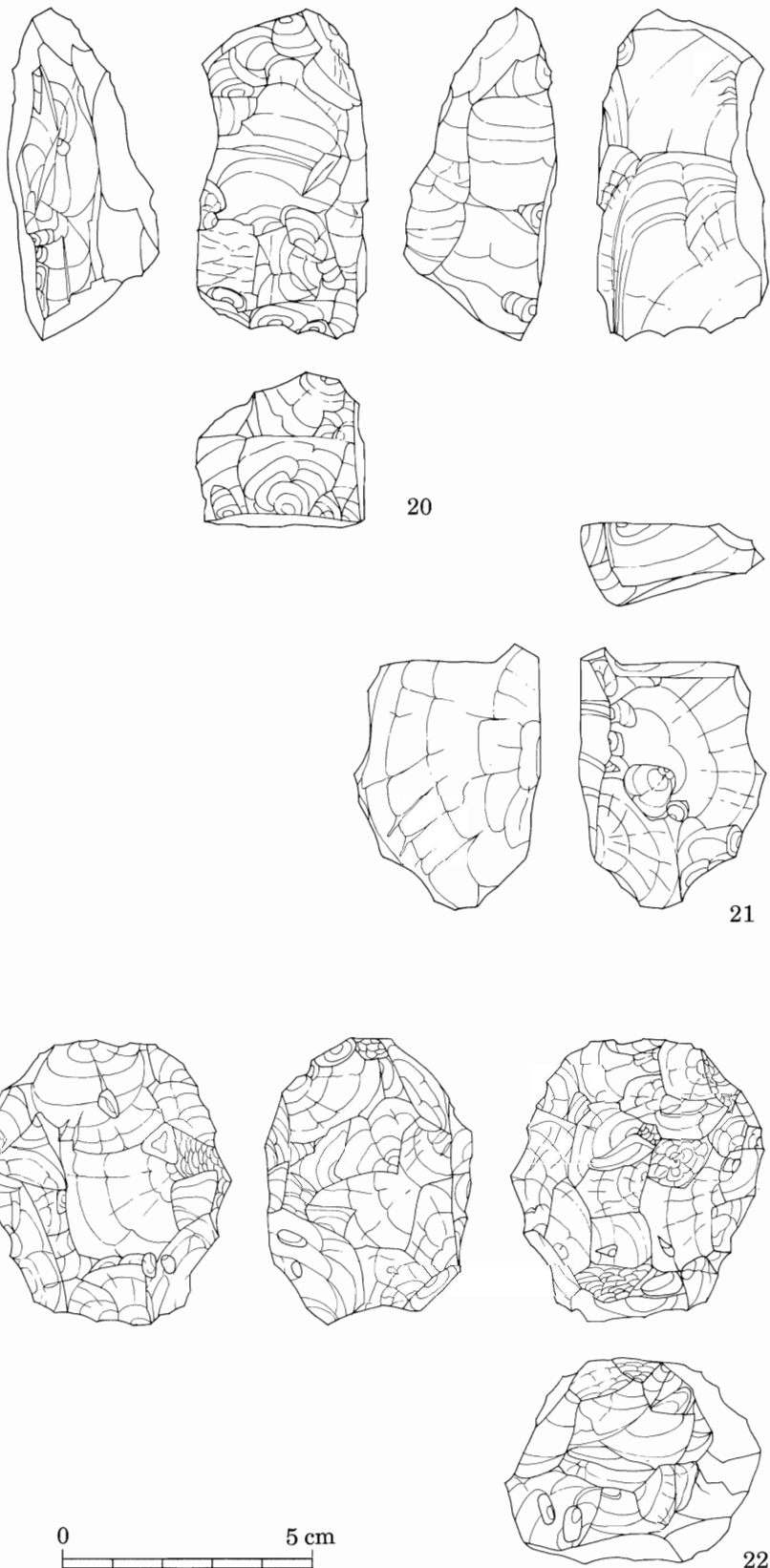
5、7は素材剥片である。ともに礫面が隣り合う面があり、石核端部と考えられる。

石核 (第263図8～第264図10) 図示しなかったものも含め、礫面が残るものも多く、あまり大きな石核ではなかったようである。8のような扁平な板状のものと、9、10のように礫状のものがある。板状の石核は比較的打点の方向がそろっているが、礫状の石核は打点もまちまちのようである。

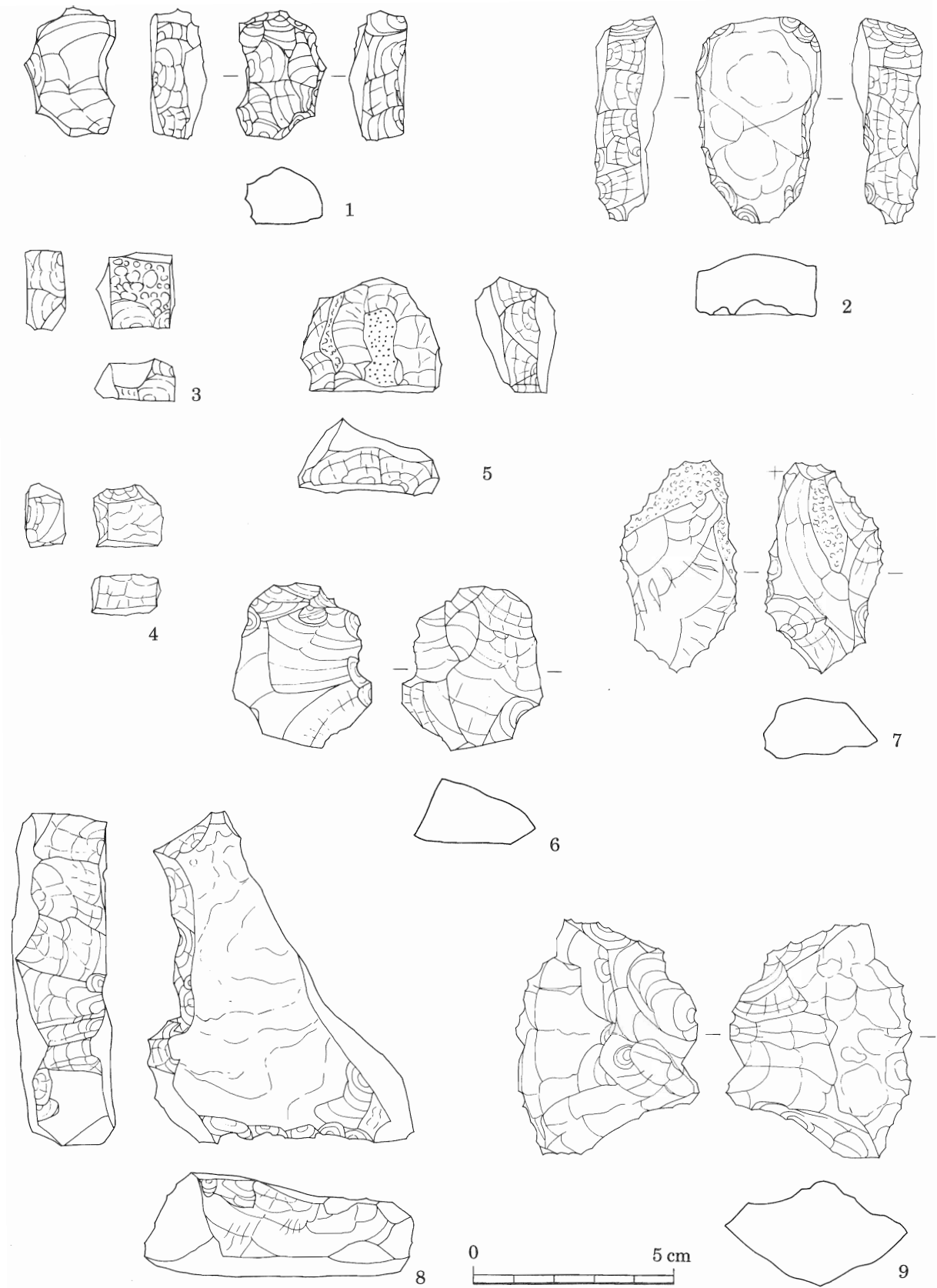
水晶製品 (第264図11～16 図版195)

三輪玉成品 (第267図16) 長さ4.5cm、幅2.7cm、厚さ2cmを測る。全面滑らかに研磨されており、研磨痕などは観察できない。不純物を多く含んだ石材らしく白濁色を呈し、透明感はない。

6区では水晶製の玉を製作しているが、未成品は丸玉、勾玉、管玉で、三輪玉を製作した痕跡はみられない。16そのものも工房跡の出土遺物らしくなく、古



第262図 6区出土碧玉製石核・ハンマー 7:10



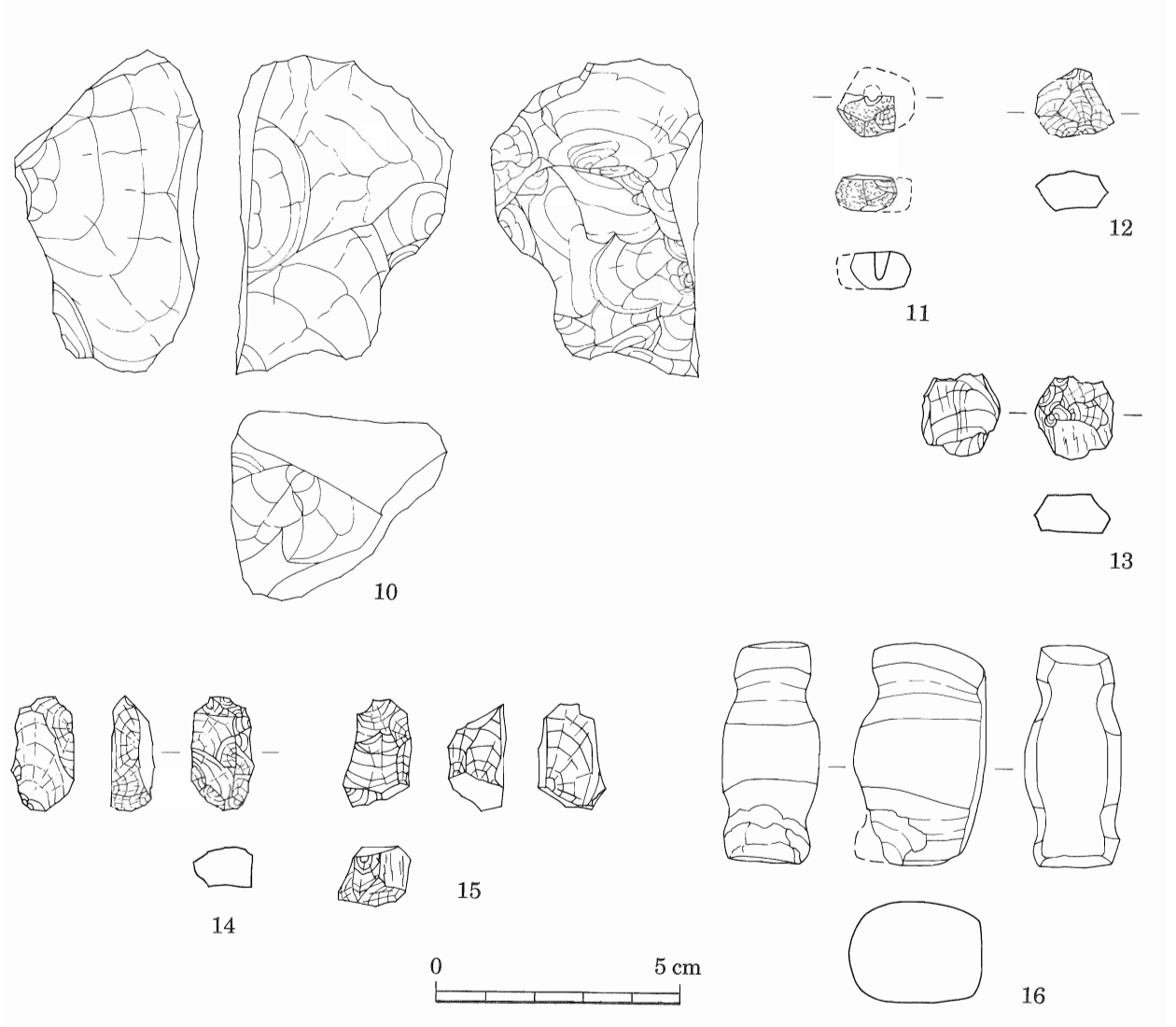
第263図 6区出土めのう製未成品 7:10

墳の副葬品の可能性が高い。調査区東側の丘陵上に過去に古墳が存在した可能性も考えられ、本遺物はそこからの流入と考えられる。

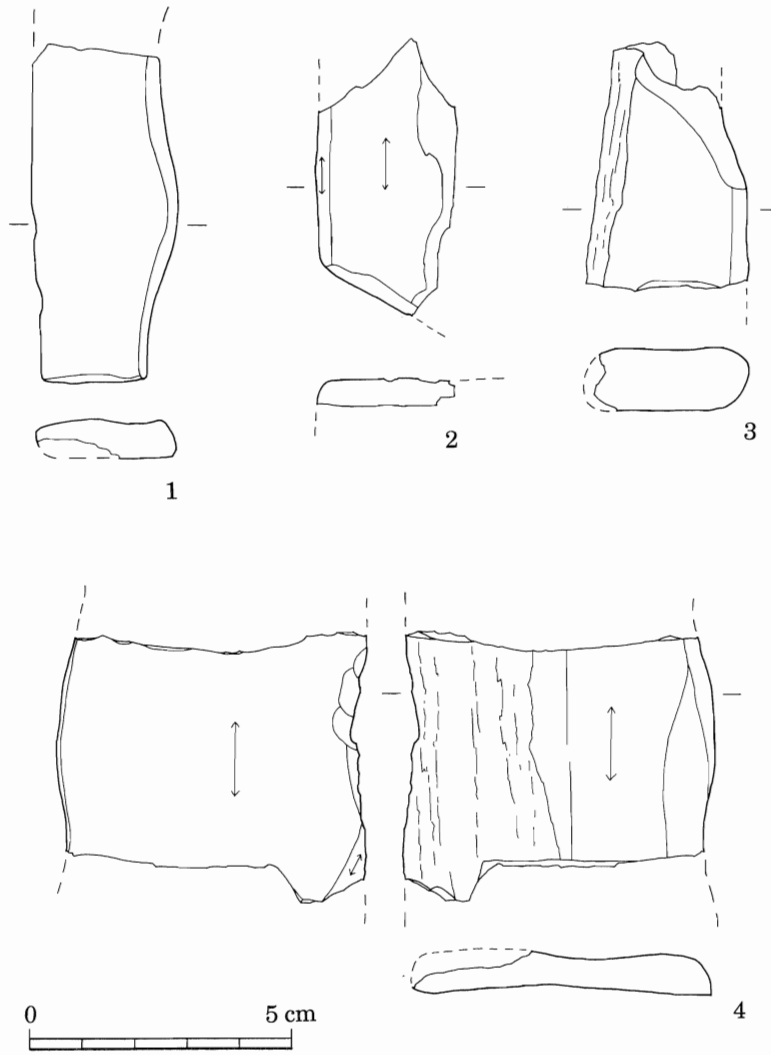
丸玉未成品（第264図11～13） 11は敲打整形品である。全面に細かな敲打痕が観察され上面から円孔が穿たれているが、貫通していない。穿孔途中で欠損したと思われる。12、13は調整剥離が施された剥片である。ともに主要剥離面と思われる面には大きな剥離面を残し、背面に調整剥離が施されている。

管玉未成品（第264図14、15） 細長い剥片で、側縁および上下に調整剥離が施される。管玉の調整剥片と思われるが確証はない。15の一面には礫面（結晶面）が残る。

砥石（第265図1～4） 図示したものはすべて結晶片岩である。1、4が波状の平面形である。いずれも表面、両側面ともによく使用されており、滑らかになっている。側縁はとくに滑らかで、内磨き用とされていたと考えられる。ただし、表面も使用しているものがあるので、内磨



第264図 6区出土めのう製石核・水晶製未成品・三輪玉 7:10



き用としてだけ使用された
とは考えにくい。

第265図 6区出土砥石 7:10

玉作工房跡 出土碧玉未成品計測表

実測番号	挿図番号	図版番号	工程	長さ	幅	厚	重量 (g)
8	215-1	179	仕上げ	1.0	0.8	0.7	1.01
6	-2	同上	同上	2.2	0.8	0.7	1.96
7	-3	同上	同上	2.0	0.7	0.7	1.50
9	-4	同上	同上	2.5	0.8	0.8	2.96
14	-5	同上	一次研磨	2.0	1.1	0.9	3.62
15	-6	同上	同上	3.2	1.0	0.9	6.43
13	-7	同上	同上	1.6	1.1	1.1	3.09
12	-8	同上	同上	2.5	1.4	1.2	7.83
19	-9	同上	同上	2.7	1.4	1.3	8.52
2	-10	同上	同上	2.5	1.3	1.2	7.19
3	-11	同上	角柱状・加工品	3.2	1.4	1.1	9.78
1	-12	同上	同上	2.7	1.4	1.3	8.60
11	-13	同上	同上	3.0	1.8	1.8	13.24
4	-14	同上	同上	2.7	1.6	1.4	8.98
17	-15	同上	同上	2.2	1.5	0.9	4.38
10	216-16	同上	同上	1.9	1.4	1.4	5.44
22	-17	同上	同上	2.7	1.4	1.3	5.65
16	-18	同上	同上	2.1	1.2	1.2	4.63
17	-19	同上	同上	3.5	1.9	1.8	16.55
21	-20	同上	同上	3.5	2.1	1.9	19.98
18	-21	同上	同上	2.9	1.8	1.7	13.34
20	-22	同上	同上	3.4	1.9	1.8	17.93

実測番号	挿入番号	図版番号	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
27	-23	同上	調整剥片	2.4	1.1	1.1	5.78
33	-24	同上	同上	2.3	1.5	1.4	6.05
29	217-25	179	調整剥片	2.3	1.3	1.0	4.98
37	-26	同上	同上	4.1	1.4	1.2	8.28
30	-27	同上	同上	4.0	2.3	1.6	17.12
35	-28	同上	同上	2.2	1.9	0.9	6.06
32	-29	同上	同上	3.8	3.1	2.1	25.75
31	-30	同上	同上	5.6	3.0	1.4	34.17
18	-31	同上	同上	3.0	1.8	1.1	7.09
25	-32	同上	同上	4.6	2.9	0.9	19.47
34	218-33	同上	同上	4.0	2.1	1.7	17.89
22	-34	同上	同上	4.2	2.4	1.5	15.40
20	-35	同上	同上	3.0	1.7	1.1	4.68
23	-36	同上	同上	4.1	3.9	1.7	21.21
24	-37	同上	同上	3.0	2.1	1.4	10.82
28	-38	同上	同上	4.3	1.4	1.4	13.51
21	-39	同上	同上	3.5	2.6	2.4	17.36
19	219-40	同上	同上	5.0	3.2	1.5	22.09
26	-41	同上	同上	4.8	2.6	1.2	17.20
49	-42	180	素材剥片	3.1	1.4	0.9	5.35
46	-43	同上	同上	2.9	2.3	1.2	12.99
50	-44	同上	同上	3.5	1.8	1.2	10.58
52	-45	同上	同上	3.2	1.8	1.2	6.03
53	-46	同上	同上	2.7	2.0	1.1	6.18
44	-47	同上	同上	5.2	3.1	1.3	20.37
79	220-48 a	同上	素材剥片	3.8	1.3	1.1	7.18
79	220-48 b	180	調整剥片	4.3	1.8	1.6	16.75
79	-48 (a+b)	同上	剥片石核	4.3	3.0	1.5	23.91
45	-49	同上	素材剥片	5.5	2.6	1.0	19.56
43	-50	同上	同上	5.2	2.2	1.1	17.04
47	-51	同上	同上	5.9	2.4	1.3	16.98
40	-52	同上	同上	2.5	2.5	1.1	8.03
54	221-53	同上	同上	4.0	3.3	2.3	29.94
42	-54	同上	同上	4.3	4.1	1.9	30.50
51	-55	同上	同上	6.3	3.7	1.5	29.59
41	-56	同上	同上	4.0	2.7	1.4	13.05
48	-57	同上	同上	3.3	2.5	1.5	11.81
39	-58	同上	同上	5.8	3.7	2.2	54.66
62	-59	同上	同上	3.1	2.3	1.4	14.32
36	222-60	同上	同上	8.3	3.1	2.4	68.08
56	-61	同上	同上	3.2	2.6	2.1	19.42
71	-62	同上	同上	5.9	3.2	3.0	57.72
57	-63	同上	石核	3.5	2.9	2.0	29.99
38	-64	同上	同上	4.6	3.4	2.0	30.76
63	223-65	同上	同上	2.8	2.5	1.6	17.68
55	-66	同上	同上	5.8	2.3	2.0	37.14
67	-67	182	同上	4.7	3.3	2.2	47.07
59	-68	180	同上	4.9	4.0	1.5	40.37
61	-69	182	同上	6.5	3.1	2.3	66.79
74	224-70 a	181	調整剥片	3.5	1.9	0.9	9.06
73	224-70 b	181	剥片石核	5.1	3.5	1.3	26.95
	-70 (a+b)	同上	同上	5.1	3.5	2.2	35.96
58	-71	182	石核	6.7	3.6	2.2	61.80
60	225-72	同上	同上	5.1	3.5	1.9	38.84
83	-73 a	181	剥片石核	7.2	4.5	3.1	70.27
83	-73 b	同上	同上	6.2	3.9	3.1	80.16
	-73 (a+b)	同上	石核	7.2	6.1	7.1	150.43
82	226-74	182	同上	7.9	4.0	3.8	128.49
77	-75	同上	同上	5.4	5.1	1.8	66.01
78	-76	同上	同上	7.2	3.5	1.9	46.27
76	-77	同上	同上	7.0	6.8	4.7	202.04
75	-78	同上	同上	6.9	6.9	3.8	170.07
86	227-79 a	183	素材剥片?	2.6	2.2	1.1	6.63
87	-79 b	同上	同上?	2.2	1.9	1.2	6.06
	-79 (a+b)	184	素材剥片	4.7	2.3	1.3	12.71
85	-79 c	183	同上	5.2	4.2	2.2	52.91

実測番号	挿図番号	図版番号	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
84	227-79 d	同上	石核	5.9	5.2	5.6	165.05
	-79(a+b+c+d)	同上	同上	7.9	5.0	4.9	230.69
72	228-80	182	同上	6.8	4.6	4.1	148.71
81	-81	同上	同上	7.5	4.6	4.3	140.61
66	-82	同上	同上	4.3	3.9	3.2	78.26
65	-83	同上	同上	5.3	4.0	2.8	75.90
70	229-84	-	同上	3.8	2.8	2.6	24.09
64	-85	182	同上	3.9	3.6	3.3	44.07
69	229-86	182	石核	4.3	3.7	3.6	62.53
80	230-87	184	原材	18.0	15.0	3.9	1499.50

玉作工房跡出土めのう未成品

実測番号	挿図番号	図版番号	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
114	231-1	185	一次研磨	2.2	1.7	1.7	6.56
120	-2	同上	同上	2.5	1.9	0.6	2.29
107	-3	同上	調整剥離完了	4.3	1.8	1.6	16.75
112	-4	同上	同上	2.1	1.1	0.8	2.40
109	-5	同上	同上	2.9	2.2	2.1	13.24
103	-6	同上	素材剥片	3.4	1.6	1.4	10.92
101	-7	同上	調整剥片	4.4	3.1	1.5	22.81
106	-8	同上	同上	4.4	2.8	1.8	22.20
115	-9	同上	素材剥片	2.6	1.6	0.9	4.07
108	-10	同上	調整剥片	3.0	2.0	1.6	12.97
105	-11	同上	同上	2.0	1.5	1.1	3.61
102	232-12	同上	素材剥片	2.2	1.4	1.2	5.75
100	-13	同上	同上	1.4	0.9	0.8	1.73
104	-14	同上	同上	4.6	2.5	1.2	12.08
111	-15	同上	石核	4.3	3.5	2.6	31.10
110	-16	同上	同上	3.5	2.0	1.2	7.91
116	-17	187	残核(ハンマー)	4.0	3.2	1.2	-
119	233-18	185	原材	1.5	1.2	1.2	3.66
118	-19	同上	同上	3.3	2.3	1.0	6.01
117	-20	187	残核(ハンマー)	1.7	1.4	0.5	1.52

玉作工房跡水晶製未成品計測表

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
175	234-1	186	平玉	成品	2.9	1.8	1.5	11.42
170	-2	-	管玉	敲打	2.2	1.1	0.4	1.07
141	-3	186	同上	敲打	2.3	1.9	1.2	3.92
140	-4	同上	同上	同上	3.4	1.4	1.1	4.52
142	-5	同上	同上	調整剥片	2.2	1.5	0.6	1.36
143	-6	同上	同上	同上	1.9	1.5	1.0	2.46
131	-7	同上	勾玉	敲打	2.8	2.0	1.5	6.85
130	-8	同上	同上	同上	2.9	2.2	2.1	13.24
137	-9	同上	同上	調整剥離完了	1.7	1.2	1.0	2.09
138	-10	同上	同上	同上	4.4	2.7	0.8	10.29
134	-11	同上	同上	同上	2.1	1.8	0.3	1.09
133	-12	同上	同上	同上	2.5	1.1	0.9	1.90
135	-13	同上	同上	同上	2.5	1.8	1.1	4.96
136	-14	同上	同上	調整剥片	2.4	1.6	0.3	1.42
132	-15	同上	同上	素材剥片	4.0	3.3	2.5	45.48
151	235-16	同上	丸玉	穿孔研磨	2.3	2.0	0.5	3.51
145	-17	同上	同上	調整剥片	1.7	1.5	1.0	3.73
146	-18	同上	同上	同上	2.4	1.8	1.1	7.23
144	-19	同上	同上	同上	3.0	2.6	1.4	15.19
147	-20	同上	同上	素材剥片	3.3	2.9	1.3	8.09
150	-21	同上	剥片	同上	2.0	1.6	1.6	10.08
154	-22	同上	同上	同上	2.7	1.1	0.7	1.62
152	-23	同上	同上	同上	2.3	1.7	1.5	8.54
148	-24	同上	同上	同上	1.9	1.8	0.3	1.45
165	235-25	186	同上	同上	2.8	1.6	1.5	10.18
163	-26	同上	丸玉	素材剥片	2.6	1.1	0.9	2.63
164	-27	同上	剥片	同上	1.6	1.7	0.9	2.54
167	-28	同上	同上	同上	3.7	2.8	2.0	15.48
171	-29	同上	同上	同上	3.5	3.0	1.1	1.53
169	-30	同上	同上	同上	4.3	3.5	2.6	31.10
176	-31	同上	同上	同上	2.3	1.7	0.7	1.84

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
157	-32	同上	同上		1.8	1.3	0.8	2.22
153	-33	同上	同上		1.1	1.5	0.6	2.68
149	-34	同上	同上		2.3	1.3	1.0	4.98
177	-35	同上	同上		2.9	1.8	0.8	5.40
172	-36	同上	同上		3.0	1.9	0.4	3.50
173	-37	同上	同上		2.2	1.9	1.2	1.74
174	236-38	同上	同上		3.2	2.1	0.5	2.40
160	-39	同上	同上		1.9	1.9	0.5	1.48
156	-40	同上	同上		2.8	1.5	0.8	2.04
161	-41	同上	同上		3.8	3.1	1.3	18.40
166	-42	同上	同上		2.3	2.3	1.2	6.70
159	-43	同上	同上		2.8	2.5	1.6	17.68
158	-44	同上	同上		3.2	1.4	1.1	9.78
155	-45	187	石核		4.0	2.5	1.0	15.45
168	-46	同上	同上		2.1	1.6	0.7	2.61
162	-47	同上	同上		5.8	4.8	3.3	93.79

玉作工房跡出土滑石川原石計測表

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
219	237-1	188	不明	滑石	仕上げ?	2.4	1.6	0.3	1.80
220	-2	同上	白玉	同上	研磨?	0.8	0.5	0.3	0.05
218	-3	同上	同上	同上	同上?	0.8	0.6	0.3	0.02
215	-4	同上	同上	同上	同上?	0.8	0.6	0.2	0.07
213	-5	同上	同上	同上	素材剥片	1.1	1.0	0.4	0.53
210	-6	同上	同上	同上	同上	0.9	0.8	0.4	0.39
212	-7	同上	同上	同上	同上	0.8	0.7	0.4	0.21
211	-8	同上	同上	同上	同上	0.8	0.7	0.3	0.10
216	-9	同上	同上	同上	同上	0.9	0.8	0.3	0.18
214	-10	同上	同上	同上	同上	0.9	0.8	0.3	0.14
217	-11	同上	同上	同上	同上	0.9	0.8	0.3	0.19
233	-12	187	川原石			1.9	1.7	0.9	3.98
232	-13	同上	同上			2.5	1.7	0.6	4.24
231	-14	同上	同上			1.6	1.5	0.7	2.08
235	-15	同上	同上			2.1	1.9	0.9	5.38
234	-16	同上	同上			1.7	1.6	0.5	2.07
236	-17	同上	同上			3.2	1.8	0.4	3.27
230	-18	同上	同上			3.0	2.3	0.9	10.10

玉作工房跡砥石計測表

実測番号	挿図番号	図版番号	石材	長さ	幅	厚	重量 (g)
201	238-1	195	結晶片岩	7.3	6.5	1.5	106.75
202	-2	同上	同上	3.8	3.7	0.7	14.85
200	-3	同上		6.2	4.5	2.1	66.97
203	-4	同上		4.2	2.5	1.5	14.15
501	-5	196	結晶片岩				

SB 01出土玉計測表

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
324	241-1	188	勾玉	碧玉	一次研磨	2.5	1.4	0.7	2.40
311	-2	同上	同上	同上	同上	2.1	1.4	1.0	3.27
317	-3	同上	同上	同上	調節剥片完了	2.5	1.7	1.4	8.06
313	-4	同上	勾玉?	同上	同上	3.7	1.8	1.9	18.32
320	-5	同上	勾玉	同上	同上	2.6	2.0	1.4	8.84
307	-6	同上	管玉	同上	角柱状加工品	2.3	1.5	1.2	4.86
300	-7	同上	同上	同上	同上	2.3	1.3	1.2	5.01
310	-8	同上	勾玉?	同上	調節剥片	3.3	2.3	1.0	10.42
318	-9	同上	管玉?	同上	同上	2.7	2.4	2.1	13.34
315	-10	同上	同上?	同上	同上	2.2	1.9	1.7	8.57
316	-11	同上	同上?	同上	同上	2.6	1.7	1.4	7.47
306	242-12	同上		同上	素材剥片	3.0	2.6	1.4	15.19
302	-13	同上		同上	同上	3.1	2.3	1.5	12.43
303	-14	同上		同上	同上	3.4	2.6	1.0	12.46
305	-15	同上		同上	同上	2.7	2.1	1.9	9.66
301	-16	同上		同上	同上	2.9	1.6	1.5	6.56
312	-17	同上		同上	同上	3.7	2.7	1.1	13.23
304	-18	同上		同上	同上	3.7	2.0	1.3	8.13
314	-19	189		同上	同上	6.1	4.9	1.8	42.88
308	-20	同上		同上	同上	6.3	4.1	1.6	38.92
319	243-21	同上		同上	石核	5.9	5.0	2.5	52.03

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
322	-22	同上		同上	同上	3.7	3.3	3.1	33.11
321	-23	同上		同上	同上	5.9	5.2	2.5	52.02

めのう・水晶・滑石

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚	重量 (g)
350	244-1	189	勾玉	めのう	調整剥離完了	2.6	2.3	1.3	7.65
351	-2	同上	勾玉?	めのう	調整剥片	3.4	1.9	1.5	10.79
352	-3	同上	勾玉?	めのう	素材剥片	5.6	2.4	1.4	18.96
360	-4	同上	丸玉?	水晶	調整剥片	2.1	1.5	1.5	5.84
361	-5	同上	勾玉?	同上	同上	2.0	1.4	0.4	1.74
362	-6	同上	勾玉	同上	敲打	2.5	1.5	0.4	2.03
371	-7	同上	白玉	滑石	研磨?	1.0	0.9	0.2	0.21
373	-8	同上	同上	同上	素材剥片	0.7	0.7	0.5	0.34
221	-9	同上	同上	同上	成品?	0.6	0.6	0.2	0.11
370	-10	同上		同上	石核?	3.4	2.5	0.5	3.28
372	-11	同上		同上	石核?	2.3	1.7	0.4	2.00

4区玉 未成品計測表 4区

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚	重量 (g)
403	252-1	190	勾玉	碧玉	仕上げ	2.7	1.5	1.0	4.97
405	-2	同上	同上	同上	一次研磨	2.2	1.6	0.9	4.67
404	-3	同上	同上	同上	調整剥離完了	3.0	2.0	1.3	9.91
400	-4	同上	同上	同上	調整剥片	4.1	2.6	1.3	13.35
408	-5	同上	同上	同上	調整剥離完了品	2.9	1.9	1.0	8.39
402	-6	同上	同上	同上	調整剥片	4.3	2.0	1.3	15.11
	6 a	同上	同上	同上	同上	4.3	1.9	1.0	10.20
	6 b	同上	剥片	同上		4.3	2.0	0.7	4.91
401	-7	同上	管玉	同上	角柱状加工品	2.6	1.8	1.7	8.60
407	-8	同上	同上	同上	同上	3.6	1.6	1.5	12.94
419	-9	同上		同上	調整剥片	4.9	3.2	1.7	28.43
416	-10	同上		同上	同上	3.5	2.9	1.3	16.28
421	-11	同上		同上	同上	6.2	3.5	1.8	33.78
410	253-12	同上		同上	同上	4.6	2.6	1.8	34.51
409	-13	同上		同上	素材剥片	4.3	2.9	1.1	14.58
413	-14	同上		同上	同上	3.1	1.0	0.9	6.85
422	-15	同上		同上	同上	3.2	2.7	1.8	20.59
417	-16	同上		同上	同上	3.4	2.0	1.2	9.36
418	-17	同上		同上	同上	2.8	2.1	1.8	9.48
415	-18	191		同上	同上	5.2	3.8	1.1	22.55
424	-19	同上		同上	同上	5.1	2.9	2.3	42.24
411	254-20	同上		同上	石核	5.8	4.5	2.8	86.02
414	-21	同上		同上	同上	6.4	4.4	1.8	38.86
423	-22	同上		同上	同上	5.8	4.5	3.1	80.94
412	254-23	191		同上	同上	4.4	3.6	1.9	39.57
420	-24	同上		同上	同上	5.7	4.2	3.0	77.37
425	-25	同上	ハンマー	同上		7.2	6.4	4.0	250.75

4区玉 めのう

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚	重量 (g)
429	255-1	192	勾玉	めのう	仕上げ	2.4	1.7	1.0	4.65
431	-2	同上	同上	同上	一次研磨	3.3	2.0	1.2	8.38
427	-3	同上	同上	同上	同上	1.9	1.6	1.0	4.35
426	-4	同上	同上	同上	同上	3.4	2.2	0.9	7.80
450	-5	同上	同上	同上	調整剥離完了品	3.2	2.2	1.3	11.35
451	-6	同上	同上	同上	同上	2.7	2.0	1.0	7.31
447	-7	同上	同上	同上	同上	4.1	2.4	0.9	15.99
433	-8	同上	同上	同上	同上	3.2	2.3	1.3	13.22
428	-9	同上	同上	同上	同上	4.0	2.7	1.7	22.92
432	-10	同上	同上	同上	同上	3.3	2.4	1.4	14.03
448	-11	193		同上	調整剥片	3.5	2.9	1.4	19.63
446	256-12	同上		同上	同上	3.4	2.9	1.3	15.97
442	-13	同上		同上	同上	4.7	3.2	1.9	36.86
441	-14	同上		同上	素材剥片	5.4	3.5	2.0	43.61
444	-15	同上		同上	同上	3.2	3.2	1.6	23.09
436	-16	同上		同上	同上	3.7	1.8	1.4	14.60
437	-17	同上		同上	同上	5.3	3.2	1.6	28.90
439	-18	同上		同上	石核	4.2	3.2	2.0	33.15
445	-19	同上		同上	同上	4.3	4.0	2.6	48.01

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
440	257-20	同上		同上	同上	6.3	3.8	3.8	136.70
435	-21	192		同上	同上	7.5	5.8	3.8	228.46
434	-22	同上		同上	同上	7.1	3.6	3.5	91.46
452	-23	193		同上	同上	2.9	2.8	2.5	27.56
453	-24	同上		同上	同上	2.5	2.5	1.6	16.76
443	257-25	193		同上	同上	2.4	2.1	1.8	14.20
449	-26	同上		同上	同上	3.9	2.8	3.0	46.78
406	-27	192	ハンマー	同上		5.1	4.6	3.6	116.00
430	-28	同上	ハンマー	同上		5.6	3.0	2.7	70.82

4区 水晶

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
454	258-1	192	勾玉	水晶		2.6	1.5	0.8	5.36
455	-2	同上	同上	同上		3.7	2.2	1.1	16.61
458	-3	同上	同上	同上		3.7	2.3	1.6	19.16
457	-4	同上	丸玉	同上		2.1	1.7	0.9	4.87
456	-5	同上	管玉	同上		1.8	1.1	0.8	2.77
459	-6	同上		同上	調整剥片	2.3	2.0	1.8	10.94
460	-7	同上		同上	同上	3.0	2.6	2.1	19.16
461	-8	—		同上	石核	4.9	3.9	2.8	45.22

4区 砥石

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
4	259-1	196	砥石	結晶片岩		12.8	4.5	1.4	92.00
1	-2	同上	同上	同上		—	—	—	—
3	-3	同上	同上	同上		7.7	4.5	2.4	92.77
5	-4	同上	同上	同上		6.9	3.9	1.1	46.68
2	-5	—	同上	同上		3.5	2.3	0.7	8.49

6区 碧玉

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
517	260-1	193	管玉	碧玉	仕上げ	2.3	0.6	0.6	1.64
502	-2	同上	同上	同上	同上	2.4	1.1	1.1	5.34
504	-3	同上	同上	同上	一次研磨	3.0	1.6	1.5	11.04
516	-4	同上	同上	同上	同上	2.3	1.7	1.4	7.64
508	-5	同上	同上	同上	同上	2.9	1.8	1.6	10.62
520	-6	同上	勾玉	同上	同上	2.5	1.8	1.2	7.53
514	-7	同上	同上	同上	調整剥離完了	3.3	2.0	1.1	8.60
505	-8	同上	同上	同上	調整剥片	3.2	2.2	0.9	7.05
503	-9	同上	同上	同上	調整剥離完了	3.4	2.1	1.3	11.01
507	-10	同上	勾玉?	同上	調整剥片	3.7	2.8	1.7	22.22
519	-11	同上	勾玉?	同上	同上	4.8	3.3	2.2	41.07
515	-12	同上		同上	素材剥片	3.4	2.1	1.0	11.69
509	-13	同上		同上	同上	2.6	1.2	0.9	3.42
513	-14	同上		同上	同上	3.7	2.4	1.8	16.02
506	261-15	194		同上	調整剥片	4.9	2.2	2.0	26.87
511	-16	同上	勾玉?	同上	調整剥片	3.5	2.3	1.3	15.58
518	-17	同上		同上	素材剥片	3.1	2.7	2.3	23.87
521	-18	同上		同上	同上	4.0	3.7	2.7	32.87
510	-19	同上		同上	石核	6.9	4.6	2.1	79.00
527	262-20	同上		同上	同上	6.7	3.2	2.9	71.14
512	-21	同上		同上	同上	5.3	3.6	1.6	29.26
105	-22	同上	ハンマー	同上	残核?	5.6	4.6	3.7	114.97

6区 めのう 水晶

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
530	263-1	194	勾玉	めのう	調整剥離完了品	3.2	2.3	1.4	12.35
524	-2	同上	同上	同上	同上	5.0	3.1	1.5	33.78
525	-3	同上		同上	調整剥片	2.4	1.8	1.0	5.30
523	-4	同上		同上	調整剥片	1.8	1.6	1.0	4.00
529	-5	同上		同上	素材剥片	3.5	3.0	1.8	17.64
531	-6	同上		同上	調整剥片	4.2	3.4	1.7	21.07
526	-7	同上		同上	素材剥片	5.3	3.1	1.6	22.36
462	-8	同上		同上	石核	9.4	5.3	2.3	127.19
528	-9	同上		同上	同上	5.9	4.3	2.5	66.36
532	264-10	同上		同上	同上	6.7	4.4	3.8	97.66
539	-11	195	丸玉	水晶	敲打	1.2	0.9	0.7	0.90
537	-12	同上	同上	同上	調整剥片	1.5	1.2	0.7	1.86
535	-13	同上	同上	同上	同上	1.6	1.6	0.8	2.48
536	-14	同上	管玉	同上	同上	2.3	1.2	0.7	3.20

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
538	-15	同上	同上	同上	同上	2.1	1.3	1.1	4.06
534	-16	同上	三輪玉	同上	成品	4.5	2.7	2.0	38.45

6区 砥石

実測番号	挿図番号	図版番号	器種	石材	工程	長さ	幅	厚さ	重量 (g)
	265-1	196	砥石	結晶片岩		6.4	2.7	0.7	18.03
	-2	-	同上	同上		-	-	-	-
	-3	-	同上	同上		-	-	-	-
	-4	196	同上	同上		7.1	6.2	0.8	37.61

小 結

今回の福富 I 遺跡の調査では、良好な玉作資料が出土した。製作地点が明らかになった玉作工房跡から出土した玉石材は剥片、チップを含めると総重量は30kgを超える。この量は、史跡出雲玉作跡を除けば、県内でも上位にランクされるほどの出土量と思われる。また、工房は明らかにできなかったが、4区や6区でも多くの玉作資料が出土した。これらを分析することによって出雲の古代玉生産の一端をうかがい知ることができるかもしれない。ここでは出雲玉生産を考えるうえで基礎となる分析を試みたい。

なお、福富 I 遺跡の玉作関係資料は良好な基礎資料となる可能性があるため、可能な限り実測図を掲載し、未成品と認識したものについてはすべて写真を掲載した。

(1) 石材と目的とした器種

玉作工房跡では5世紀末から6世紀初頭の時期に碧玉、めのう、水晶、滑石を利用して玉製作が行われている。各石材の出土数と重量は第1表のとおりである。

個体数は剥片、チップも含めできるだけ数を数えた。滑石は取り上げ後に自然に剥離したものが多く、出土した時点と現在では個体数が変わってきているため、個体数数えることはしなかった。

玉作工房跡では碧玉がもっとも多く出土している。碧玉で器種のわかる未成品は管玉だけで、他の器種の未成品は出土していない。このことからここでは碧玉は管玉製作に限られると考えてよい。一方、めのうは勾玉の未成品だけが出土しており、勾玉のみを製作していたと考えられるがその数は少ない。また、水晶は勾玉、管玉、丸玉の未成品が出土しているが、これも出土数は少ない（第2表）。このことは未成品・剥片の個体数比、重量比からも窺える。本遺跡の玉作工房跡では主に碧玉製の管玉が製作され、補助的にめのう製、水晶製の勾玉、水晶製の管玉丸玉が製作されていたと考えられる。

ところで重量比をみた場合、滑石の重量が碧玉に次ぐ。ところが未成品と考えられるのは10点程度と非常に少ない。これをどのように考えればいいのだろうか。滑石は剥片などのほか、

第1表 玉作工房跡の玉材出土数と重量

石 材	碧 玉	め の う	水 晶	滑 石	総 量
個 体 数	5,051個	231個	343個		5,625個
重 量	16,220.7 g	3,461.2 g	2,361.6 g	10,081.5 g	32,125 g

第2表 玉作工房跡出土未成品の石材と器種

器種	石材	管玉	勾玉	丸玉	白玉	計
碧玉		94	0	0	0	94
めのう		0	11	0	0	11
水晶		5	6	11	0	22
滑石		0	0	0	10以上	10以上
計		99	17	11	10以上	137 (個)

原石が4個体出土している。これらは1個2kg以上の重量があり、これが滑石の総重量を押し上げている。原石を除いた剥片の重量はわずかに218.8gにすぎず、滑石製品を大量に製作したとは断定しにくい。しかし、10kgを近い原石が集積する状況は、滑石の生産が小規模とは思えない。滑石は軟質のため加工がしやすいので、無駄なく製作できたと思われる。そのために、大量に製作しても剥片やチップがあまりでなかったのではなかろうか。ただし、史跡玉作跡71BI号址では滑石製白玉未成品の集積が検出されていることを考えると(注1)、福富I遺跡で盛んに滑石製品を製作していたのなら未成品がもっと出土すべきかもしれない。

4区と6区では工房跡は検出できなかったが、管玉製作に加え勾玉も製作されている。とくに4区では勾玉未成品の出土量が管玉未成品を上回っており(表3)、玉作工房跡と違って勾玉が主に生産されていた可能性がある。4区に工房跡があったとすれば、玉作工房跡では碧玉製の管玉、4区では勾玉、というように器種を作り分けていたことはないだろうか。4区、6区では包含層から出土しているため製作時期が明らかでなく、各地区で同時期に生産していたとは限らないが、工房が時期を異にして移動しているのか、あるいは同時期に各工房が異なる器種を生産をし、互いに補完していたのか、興味深いところである。

玉作工房跡では碧玉製管玉を中心に製作が行われているが、碧玉製管玉だけを製作しているわけではない。石材と器種の組み合わせは6種類にのぼることから、主に碧玉製の管玉が製作され、補助的にめのう製、水晶製の勾玉、水晶製の管玉が製作されていたことがわかる。このような状況は4区や6区でも同様である。複数の石材を使用し、数種類の器種を製作する工房は全国的にも一般的で(注3)、ここが特別であるわけではない。しかし、それぞれの遺跡または遺構で、一つの器種が卓越して製作されることがわかる例は管見では松江市平所遺跡(注3)、千葉県成田市外小代遺跡(注4)があるが、未成品全体量の比較がなされていないものが多く、福富I遺跡の玉作工房跡が全国的、地域的に特殊であるのか、あるいは一般的であるのか、現状では不明といわざるをえな

第3表 4区・6区・勾玉・管玉・丸玉の出土数

	石材	器種		
		勾玉	管玉	丸玉
4区	碧玉	5	2	0
	めのう	15	0	0
	水晶	3	1	1
4区計		23	3	1
6区	碧玉	4	12	0
	めのう	2	0	0
	水晶	1	1	3
6区計		7	13	3

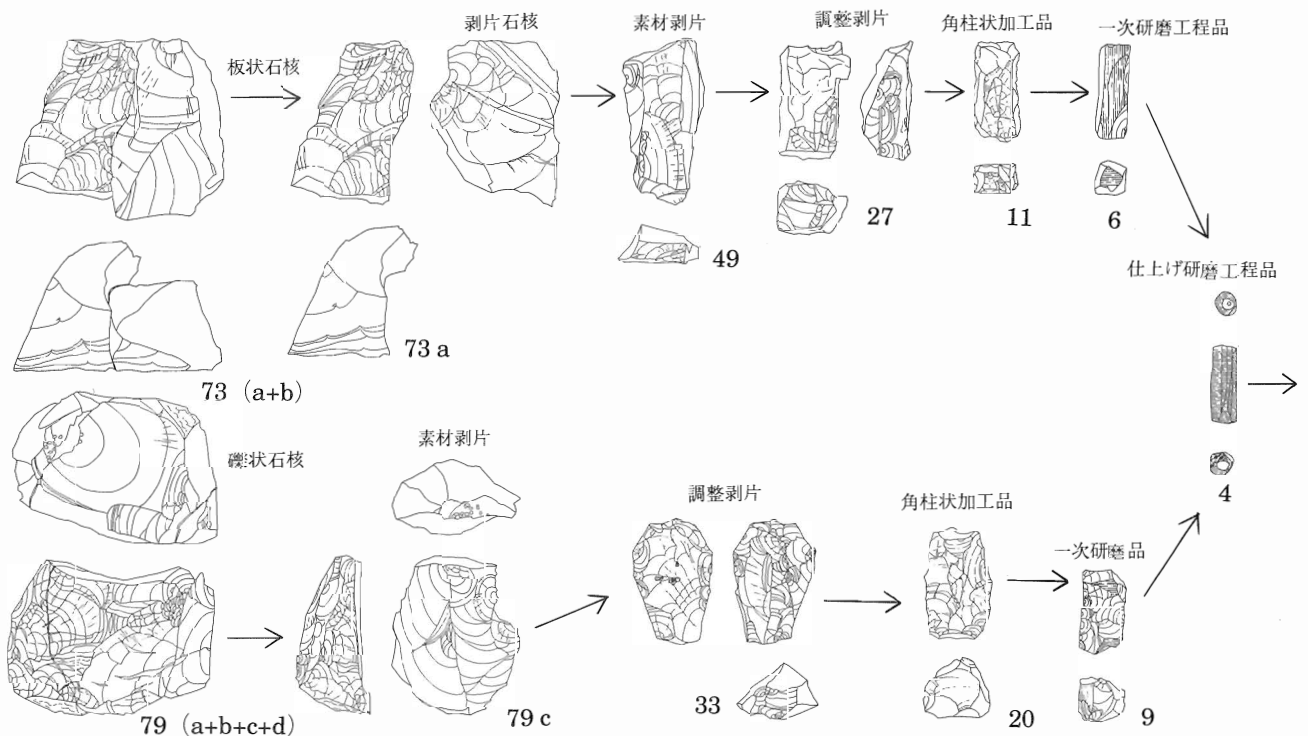
い。今後は、遺跡内における各器種の絶対数が明示されることを望む。

(2) 玉の製作技術

管玉、勾玉の製作技術は寺村光晴によって ①採石―②荒割―③形割―④側面打裂―⑤研磨―⑥穿孔―⑦仕上げ の工程が明らかにされている(注5)。基本的にはこの工程は間違いのないと思われるが、実際に出土した遺物をこの工程に当てはめて分類することはかなり難しい。また、各遺跡がすべて同じ技術で製作していたとも限らず、細部で違いがあるかもしれない。そこで、福富I遺跡での玉製作技術についてまとめてみたい。

第5章ですでに述べたとおり、寺村の分類は工程の分類であり、遺物そのものの分類ではない。そこで、ここでは各未成品について、原材、石核、素材剥片、調整剥片、角柱状加工品、一次研磨品、仕上げ工程品などと呼ぶこととする。このうち調整剥片とはわずかでも調整剥離が行われているものを指す。素材剥片は成品1個を作ることができる大きさの剥片のことをいう。さらに分割されて成品2個分となることもありうるので、石核との分類基準はあいまいである。いちおう、石核は複数個体の成品ができる大きさをもつものとした。また、成品となりえない剥片との区別が難しいものも多い。明確な分類基準を作ることを目標としたが、結局は成品ができる大きさの剥片を素材剥片とした。

碧玉製管玉(第266図) 管玉のみを生産し、他の器種の混じらない玉作工房跡の出土品をもとに復元する。管玉の製作は基本的には従来いわれているように ①原材から石核を剥離 ②石核から素材剥片を剥離(形割工程) ③素材剥片を調整剥離(調整剥片)し各柱状加工品に整形(側面打裂工程) ④一次研磨 ⑤穿孔(研磨・穿孔工程) ⑥仕上げ研磨(仕上げ工程) という工程で製作されている。



第266図 碧玉製管玉の製作工程 (数字は挿図番号)

出土した碧玉で、原材と考えられるのは第230図87である。これを材料に石核が剥離されると思われる。側面には各面とも剥離がみられるが、これが石核または剥片剥離によるものか、石材採取地から持ち帰るための剥離調整なのか意見が別れるところであろう。この資料は連続的に剥片（剥片石核？）を採ったと思われる側面があるが、石材採取地で持ち運びに便利なように原石を整形した蓋然性は高いと考えたい。

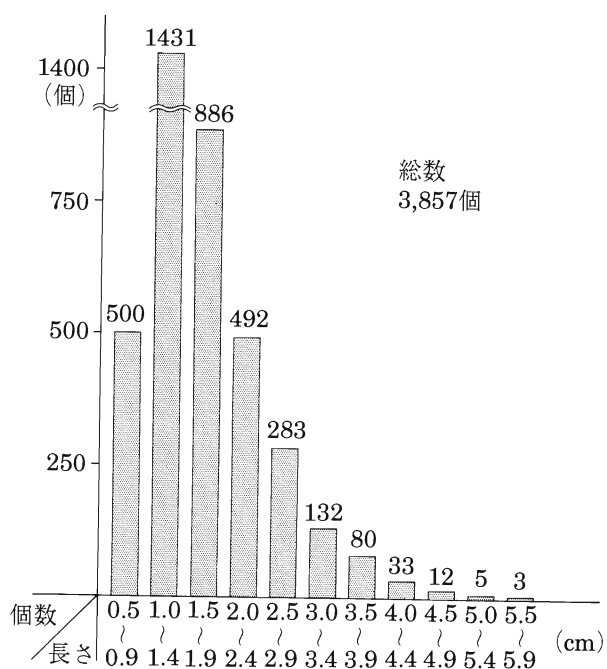
玉作工房跡からは接合資料が3点得られた（第220図48、第225図73、第227図79）。このうち第225図73、第227図79は石核と素材剥片の接合資料で、石核からの剥離の状況がうかがえる資料である。これによると、石核の形状は直方体状または板状（73+b）と、礫状（79 a+b+c+d）を呈する2者があることがわかる。

これらから採れた剥片は素材剥片となり、調整剥離が施される（調整剥片）。第220図48は剥片をさらに分割した資料で、48 bにはさらに調整剥離が施されている。素材剥片の形状に、①断面方形の板状のものと、②断面三角形の不整形な平面形をするものがある。前者は板状の石核から、後者は礫状の石核から作出された素材剥片と考えられる。両者の違いは、①の剥離面各面が平坦であり主要剥離面と背面の区別ができないこと、②の背面には複数の剥離面がつくこと、である。

素材剥片は調整剥離が加えられ（調整剥片）、調整剥離が完了すると角柱状加工品となる。調整剥離はあまり細かなものではなく、一面につき3～5回程度である。一側縁には必ずといってよいほど大きな剥離面（主要剥離面と思われる）が調整されずに残されている。これは調整剥離が絶対的なものではなく、剥片が角柱状にうまく剥離された場合には調整剥離が省かれる可能性を示唆している。第260図13のように柱状に整った剥片の場合はそのまま研磨工程に移行する可能性も考えられる。なお、角柱状加工品には断面が方形の直方体状をするものと、断面が三角形できれいな直方体をしないものがある。前者が板状の石核、後者が礫状の石核から作出された素材剥片に調整剥離を加えたものと思われる。

なお、これ以外の剥片は不要になったものと思われる。不要の剥片の形状や剥離の状況は、それぞれの工程をなんらかの形で反映していると考えられる。ここではそれを分析する方法を知らないので、将来に備えて計測表を掲示しておく（第4表）。

角柱状加工品はこの後一次研磨が施される（一次研磨工程品）。研磨作業は側面から行われることが多いが、上下端から始めた例もあり（第215図10、第260図4）、どこから始めるといったルールはなかったようである。



第4表 剥片の法量別個体数

第260図2や安来市大原遺跡（注6）などの穿孔途中品が例外なく研磨による平坦面を残しているため、一次研磨は七～八面体になった段階で終了しているようである。なお、この工程の研磨方向はほとんど例外なく長軸に平行である。

穿孔は一次研磨終了後に行われる。福富Ⅰ遺跡ではすべて片面方向からの穿孔である。第260図2では上端にわずかに穿孔しかけた痕跡がみられる。

穿孔後仕上げ研磨が行われ、管玉の完成である。仕上げ研磨は、まず一次研磨によってできた稜線を取り去ることから始まったようで、仕上げ研磨工程品のうちいくつかは長軸に直交するようなやや粗い研磨痕が観察できる（第215図1、2、4など）。完成品にはこのような研磨痕はみられないので、さらにきめの細かい砥石で研磨すると考えられるが、仕上げ研磨開始直後にはこのような研磨が施されることも多かったと思われる。

碧玉、めのう製勾玉 勾玉の製作は基本的には従来いわれているように ①石核から素材剥片を剥離（形割工程） ②素材剥片を調整剥離（調整剥片）し調整剥離完了品に整形（側面打裂工程） ③一次研磨・穿孔（研磨・穿孔工程） ④仕上げ研磨（仕上げ工程）という工程で製作されている。

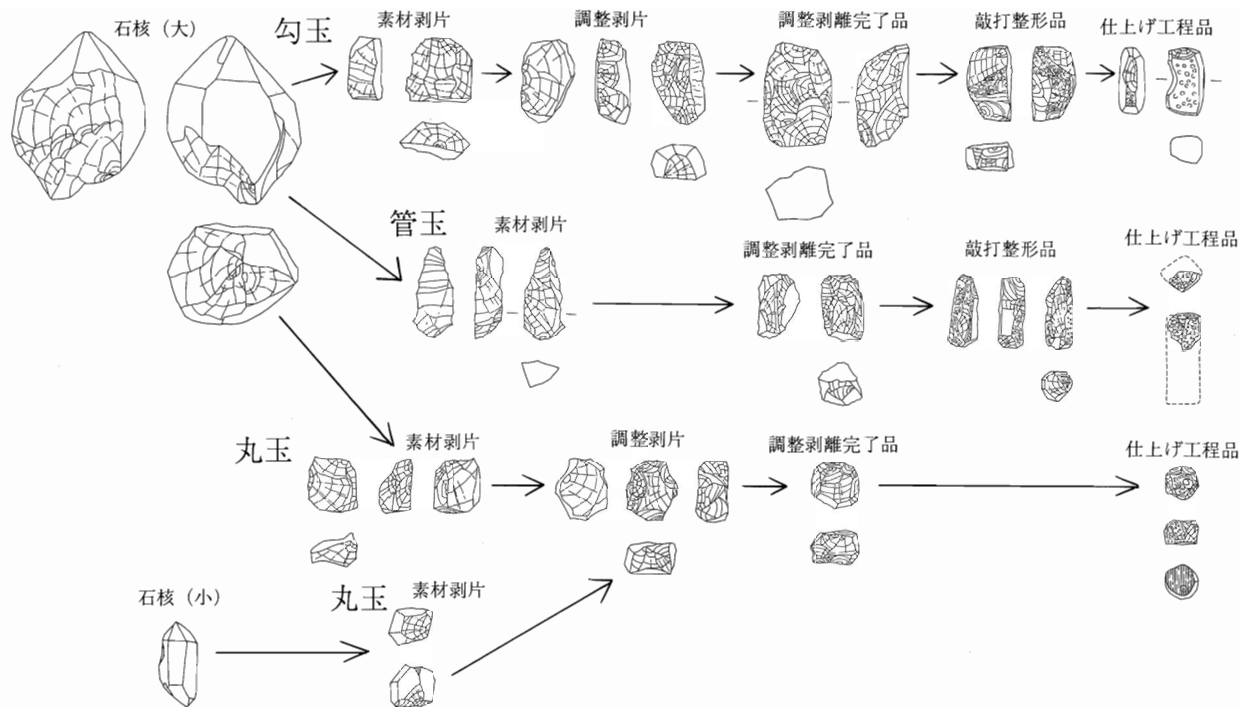
このなかで不可解なのが③の穿孔工程である。寺村によると一次研磨後に穿孔するとされるが、福富Ⅰ遺跡では第255図5～7のように調整剥離完了品に穿孔しかけている。しかしこれも完全には穿孔せず、今回出土したこの段階のものはすべて途中で穿孔作業をやめている。さらに、2や4の一次研磨品でもまだ貫通していない。また第260図6のように、一次研磨がかなり進んだ状態でも穿孔が行われた形跡はない。穿孔途中のものは作業中に硬質の部分に当たったために製作を放棄したと考えることもできるが、研磨中でなおかつ穿孔途中のものがあるので、製作作業は続けているとみたほうが妥当であろう。

このように本遺跡でのありかたは、穿孔と一次研磨の前後関係が一定ではない様相を示している（注7）。この工程では、ある時は研磨、ある時は穿孔、といったように、両方の作業を交互に同時進行していた印象が拭えない。とすれば、研磨と穿孔は同一工人の手によるものであろうか。いずれにしても穿孔作業は仕上げ研磨作業に入る前には完了していたと考えられる。

なお、調整剥片や素材剥片の段階では勾玉と管玉の区別は難しい。本報告では玉作工房跡の未成品と比較した結果、長さに対して幅広の剥片が勾玉を目標とした可能性が高いと考えた。

水晶製品（第267図） 水晶製品は従来、原石を輪切り状に分割して六角柱状の未成品を作出し、調整剥離（側面調整）され、その後研磨、穿孔工程を経て仕上げられる、とされてきた（注4）。しかし、福富Ⅰ遺跡では六角柱状の未成品は少なく、若干製作技術の違いがみられる。本遺跡での水晶製品は基本的には剥片を整形して作られていると思われる。これは六角柱状の未成品が多くないことに加え、結晶面（礫面）が残る調整剥片のほとんどが石核から作出された素材剥片であることが主な根拠である。福富Ⅰ遺跡出土の石核は大型のものが多く、平所遺跡のような技法がとれなかったのではなかろうか。

平所遺跡で報告されていない調整技法に敲打がある。従来はこの調整が施される未成は研磨工程とみる向きが多かった（注5）が、本遺跡では仕上げ研磨直前の未成品すべてに敲打痕が観察される。すくなくとも福富Ⅰ遺跡では、水晶製品は碧玉成品にみられるような一次研磨の



第267図 水晶製品の製作工程

かわりに敲打による調整が主流であったと思われる。敲打調整は本遺跡だけの特徴とは考えにくく、一般的であった可能性がある（注6）。

水晶製品は勾玉、管玉、丸玉が製作されているが、いずれの器種もほとんど同じ製作技法をとるようである。基本的には①石核から素材剥片を剥離（形割工程） ②素材剥片を調整剥離（調整剥片）し各器種の形状に整形（側面打裂工程） ③敲打 ④穿孔（穿孔工程） ⑤仕上げ研磨（仕上げ工程）という工程で製作されている。④の穿孔は敲打が施されないものにはみられず、敲打調整が終了したのちに行われたと思われる。

(3) 未成品の残存率

工房跡では碧玉製の未成品と認識したものが合計442個（重量10,823.66 g）出土した。これは碧玉全出土数の約12.3%、総重量の66.7%を占めることになる（第5表）。これと同じ傾向を示す遺跡としては千葉県外小代遺跡があるが（注4）、出雲の玉作遺跡の中で未成品の残存率として高いのかどうかは比較の対象がないのでわからない。

残された未成品では調整剥片がもっとも多く、次いで角柱状加工品が多い。角柱状加工品は欠損品も多いが、完形が59点出土しているのに対し、一時研磨工程以降の未成品は10個にすぎない。前述のように研磨段階の未成品は偶然ここに残された可能性が窺える。ところが、角

第5表 碧玉未成品、剥片の数量、重量

	原 材 石	核 素 材 剥 片	調 整 剥 片	角 柱 状 加 工 品	剥 片、チ ッ プ	計	
個数(個)	1	83	132	94	4607	5049	
重量(g)	1499.5	4887.54	2490.17	1211.33	735.12	5397.04	16220.7

柱状加工品の多さは偶然に残ったにしては多すぎることから、ここに製作工人の何らかの意図があるように思われる。この状況は製作作業が石核の作出から仕上げまで連続した作業ではないことを示しているのではなかろうか。角柱状加工品の状態でいったん集積しておき、随時に研磨・穿孔・仕上げを行ったように感じられる。角柱状加工品が加工段1の北東部に集中するという出土状態からも、この部分が角柱状加工品の集積場所であった可能性を示唆している。このように考えれば、石核や素材剥片の集積の意味も理解できるのではなかろうか。

ところで、これだけ多くの未成品を残したまま、どうしてこの工房は廃絶したのであろうか。もし工房が移動したのであれば、未成品も移動するはず、と考えるのは現代的すぎるかもしれない。新たな工房では新しい原石採取から始めたのかもしれない。しかし、石核や素材剥片の集積、少し手を加えれば完成する角柱状加工品の多さ、などの状況からは、唐突に生産を中止したという印象を強く受ける。このような状況は福富Ⅰ遺跡に隣接する大角山遺跡（注8）や安来市大原遺跡（注7）などでも窺える。これらの遺跡に共通するのは古墳時代中期に突如出現し、比較的短期間に廃絶することである。史跡出雲玉作跡以外の周辺遺跡ではこのようなありかたが一般的とってよかろう。玉作遺跡の突然の出現と廃絶のしかたは、玉という実生活に密着しない特殊な文物の生産だからであろうか。ここで働いていた人々がなぜ玉製作に携わったか、うかがい知ることのできる現象ではなかろうか。

結 語

今回の調査でえられた豊富な玉作関係資料について想像を交えながら若干考察してみた。京都大学が1927年に『出雲上代玉作遺物の研究』を刊行して以来、出雲の玉作は全国的に有名である。また最近の発掘調査でも新たに玉作遺跡が発見され、資料の蓄積は進んだといえる。しかしながら、基礎的な作業は十分とはいえず出雲地域の玉作が解明されているとはいいがたい。整理の指針も明確にされておらず、今回の整理作業でも手探りの状態であった。そのため、このような整理の方法が十分であったか、不安が残るところである。

今回の報告では、近隣の玉作遺跡との比較を試みる余裕はなかった。細部については遺跡毎に製作技術の違いがみられるようである。今後、遺跡間の比較をすることによって、出雲玉作の実態を明らかにする必要がある。

(注1) 玉湯町教育委員会『史跡玉作跡 発掘調査概報』1972

(注2) 寺村光晴「三 玉作遺跡の類型」『古代玉作形成史の研究』1980

(注3) 島根県教育委員会「平所遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』1976
1977

(注4) 千葉県文化財センター『研究紀要13 生産遺跡の研究2』1992

(注5) 寺村光晴『古代玉作の研究』1966

(注6) 水晶製平玉では敲打による細部調整が一般的であるという。高橋進一 1988年島根考古学会3月例会での口頭発表による。

(注7) 島根県教育委員会「大原遺跡」『白コクリ遺跡・大原遺跡 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』1994

(注8) 島根県教育委員会『大角山遺跡発掘調査報告書』1988

第11章 島根県松江市福富 I 遺跡より 出土した玉作砥石の岩質と原産地

高 須 晃*

* 島根大学総合理工学部地質資源環境学教室

1. はじめに

鳥根県松江市乃木福富町の福富 I 遺跡より出土した結晶片岩製試料4点について記載岩石学的検討を行った。

試料は福富 I 遺跡4区、5区及び6区より出土したもので、5区からは玉作の工房跡がみつかり、およそ5世紀末から6世紀前半にかけてのものと推定されている。ここでは、碧玉製の管玉を中心に、若干の勾玉も作っていたようである。また、水晶、赤めのう、“滑石”製の勾玉および丸玉もわずかながら作っていたようである。4区と7区からは工房跡は発見されていない。今回の遺物試料はほかの遺物と混じって堆積土の中から出土したものである。年代は特定できないが、6世紀後半以降は玉作遺構がほとんどないこと、今までに発見された玉作工房跡が4世紀から5世紀末に集中すること、5区の工房が5世紀末から6世紀にかけてであること、などから5世紀頃のものが多いのではないかと考えられている。

今回検討した結晶片岩製遺物試料は、いずれも珪質片岩（石英片岩）であり、そのうち3試料は紅れん石を含む珪質片岩（紅れん石—石英片岩）であることが明らかになった。これらの試料について、これまでに日本の変成帯から報告されている石英片岩、紅れん石—石英片岩の記載と比較検討し、遺物の原産地の推定を試みた。

2. 遺物試料の岩石学的記載

福富 I 遺跡より出土した結晶片岩試料、試料1～4について以下に岩石学的記載をおこなう。尚、比較のため愛媛県宇摩郡土居町五良津に露出する三波川変成帯の紅れん石—石英片岩標本の岩石学的記載も併せておこなう。

1. 試料 1 (第259図2)

紅れん石—石英片岩。1.5 cm×2 cm×8.5 cm。2 cm×8.5 cm の面に平行に紅れん石に富む紅色の層と石英に富む灰色の層が約5 mm 幅でくりかえす縞状構造をなす。縞状構造の方向と片理面方向は一致し、片理面上には白雲母が肉眼で認められる。主要構成鉱物は石英、白雲母、紅れん石で、副成分とし緑れん石と曹長石が含まれる。そのほかに微量のざくろ石、角閃石、緑泥石、りん灰石および鉄鉱を含む、白雲母による片理が発達する。

石英は基質部分の大部分を占める。最大径0.1 mm の他形粒状。波状消光が著しい。白雲母は最大径1.5 mm。自形～半自形板状。紅れん石は半自形短～長柱状で長径最大1 mm。ブーディン化して伸長方向と垂直な方向に割れていることが多い。X=黄色、Y=桃色、Z=赤色の顕著な多色性を示す。緑れん石は半自形～短柱状、最大径0.4 mm。ざくろ石は半自形粒状、最大径0.7 mm。包有物として、石英、鉄鉱を含む。角閃石は半自形長柱状で、長径は最大0.5 mm。

無色透明.

2. 試料 2 (第259図2)

紅れん石-石英片岩. 1.3 cm×3.5 cm×5.5 cm. 3.5 cm×5.5 cm の偏平な面に平行に紅れん石に富む紅色の層と石英に富む灰色の層が縞状構造をなす. 縞状構造の方向と片理面方向は一致し, 片理面上には白雲母が肉眼で認められる.

石英と紅れん石を主体とし, その他に白雲母, 曹長石, 緑れん石を副成分鉱物として含む. 微量成分鉱物として鉄鉱, りん灰石, 角閃石, ざくろ石を含む. 白雲母の定向配列による片理の発達が顕著.

石英は他形粒状で, 最大径0.5 mm. 波状消光著しい. 紅れん石は半自形短柱状~長柱状で, 長径最大0.8 mm. X=黄色, Y=桃色, Z=濃桃色の顕著な多色性が見られる. 核部から縁部へ向かって色が濃くなる累帯構造を示すことがある. ブーディン化して伸長方向と垂直な方向に割れていることが多い. 角閃石は半自形柱状で, 長径最大0.5 mm. 無色透明. ざくろ石は半自形粒状で, 最大径0.4 mm. 包有物として鉄鉱を多数含む.

3. 試料 3 (第238図5)

石英片岩. 2.5 cm×8.5 cm×8.5 cm. 全体として灰色を呈する. 8.5 cm×8.5 cm の偏平な面上に白雲母が配列し片理面を形成している. 白雲母は片理面上で一定方向に引き伸ばされ, 線構造を作っている.

主要構成鉱物は石英と白雲母で, その他に副成分鉱物としてざくろ石, 鉄鉱, 曹長石, 緑れん石, 角閃石を含む. また, 微量成分鉱物としてりん灰石を含む. 白雲母の定向配列による顕著な片理が発達する.

石英は線構造方向に著しく伸長し, 長径最大0.5 mm. 波状消光著しい. 白雲母は自形から半自形板状で, 最大径1 mm. ざくろ石は自形を示し最大径0.1 mm. 曹長石は斑状変晶(曹長石点紋)をなし, 長径最大1.5 mm の紡錘形をする. 包有鉱物として, 緑れん石, ざくろ石, 石英, 鉄鉱を含む. 緑れん石は半自形~自形柱状で, 長径最大0.5 mm. 核部から縁部へバイリフリンゼスが減少し, Fe^{3+} の減少を示す. ブーディン化によって, 伸長方向と垂直な方向に引き伸ばされ割れ目が生じている. 角閃石は半自形柱状で, 最大長径は0.5 mm. 無色透明. 緑れん石同様にブーディン化によって, 伸長方向と垂直な方向に引き伸ばされ割れ目が生じている.

4. 試料 4

紅れん石-石英片岩. 0.8 cm×5.5 cm×9 cm. 全体として暗灰色を呈する. 5.5 cm×8.5 cm の偏平な面上に白雲母が配列し片理面を形成している. 片理面上には顕著な引き伸ばし線構造が認められる.

主要構成鉱物は, 石英, 白雲母, 紅れん石, 鉄鉱で, 副成分鉱物として曹長石と角閃石を含

む。また微量のりん灰石を含む。白雲母の定向配列による片理が顕著に発達する。石英がリボン石英の組織を示し、著しく引き伸ばされている。

石英は長径最大3 mm。波状消光著しい。白雲母は半自形～自形板状で、最大径1 mm。紅れん石は半自形柱状で長径最大0.3 mm。ブーディン化して伸長方向と垂直な方向に割れていることが多い。多色性顕著で、X=黄色、Y=桃色、Z=赤色。曹長石は斑状変晶をなし、長径最大0.8 mmの紡錘形をしている。包有物として、紅れん石、石英、鉄鉱を含む。角閃石は半自形長柱状で、長径最大1 mm。ブーディン化して伸長方向と垂直な方向に割れていることがある。無色透明。

5. 三波川変成帯紅れん石-石英片岩

紅れん石に富む鮮桃色と比較的石英に富む淡桃色の層が約5 mmごとに繰り返し縞状構造をなしている。縞状構造の面上には肉眼で確認できる白雲母が配列し片理面を形成している。片理面上には顕著な引き伸ばし線構造が発達している。石英に富む層中には肉眼で暗緑色角閃石が線構造方向に配列しているのが認められる。

主要構成鉱物は石英、白雲母、紅れん石で、副成分鉱物として、曹長石、角閃石、方解石と鉄鉱を含む。そのほかに微量のりん灰石と緑泥石を含む。白雲母の定向配列による顕著な片理が発達する。曹長石は斑状変晶を形成し（曹長石点紋）、長径最大2 mmの紡錘形をなす。

石英は線構造方向に伸長し、最大長径2 mm。波状消光著しい。白雲母は半自形～自形板状で、最大径1.5 mm。紅れん石は半自形～自形長柱状、最大長径0.6 mm。ブーディン化して伸長方向に垂直な方向に割れていることが多い。X=黄色、Y=桃色、Z=濃桃色の多色性顕著。曹長石は斑状変晶をなし、包有物として紅れん石、石英、鉄鉱を含む。曹長石斑状変晶中の紅れん石は基質中のものに比べ細粒で、半自形～他形の形態である。緑泥石は半自形～自形板状で、最大径2 mm。干渉色は灰色、伸長方向の符号は負である。角閃石は半自形柱状で、長径最大1.5 mm。包有物として、紅れん石と鉄鉱を含む。方解石は半自形～他形粒状で、長径最大2 mm。包有物として、紅れん石と石英を含む。

6. 遺跡試料の石英片岩の記載岩石学的特徴

福富I遺跡より出土した結晶片岩試料はすべて変成岩岩石学的には石英片岩に属する。これらのうち、試料3を除きほかの3試料は紅れん石を含む結晶片岩であり、紅れん石-石英片岩と分類される。

福富I遺跡から出土した紅れん石-石英片岩についての記載岩石学的特徴をまとめると以下のようなになる。

- (1) 紅れん石に富む桃色の層と石英に富む灰色の層が互層し、縞状構造を形成する。
- (2) 白雲母による顕著な片理が発達する。また、紅れん石、角閃石などの柱状鉱物の定向配列による線構造が発達する。

(3) 無色透明の角閃石を含む。

(4) 紅れん石や角閃石などの柱状鉱物が、線構造方向の伸長のためブーディン化している。

上記の福富 I 遺跡から出土の紅れん石-石英片岩試料の記載岩石学的特徴は比較試料として記載した三波川変成帯の紅れん石-石英片岩試料にもあてはまる。

3. 福富 I 遺跡出土の石英片岩の起源

紅れん石-石英片岩は一般に比較的低変成度の結晶片岩地域より産出する。原岩は普通チャートであると考えられている。

中国地方近辺における紅れん石-石英片岩の産出する変成帯は、三郡変成帯と三波川変成帯である。

三郡変成帯およびその東方延長と考えられる飛弾外縁帯は、新潟県西部から中国地方を経て九州北部にまで連続している。しかし、三郡変成帯の結晶片岩の実際の露出は、火山岩類の被覆や深成岩類の貫入によって断続的となっている。三波川変成帯の分布は関東山地から中部地方（諏訪、伊那）、紀伊半島、四国を経て九州東部に至る。三郡変成帯に比べると分布は連続的である。

三郡変成帯の紅れん石-石英片岩の分布は橋本（1964）によって総括された。それによると、三郡変成帯中の紅れん石-石英片岩は新潟県青海、鳥取県若桜、北九州など5カ所に限られ、三郡変成帯からの紅れん石-石英片岩の産出は比較的まれであるといえる。

Miyakawa（1961）は青海、若桜、北九州の三郡変成帯からの紅れん石-石英片岩の鉱物組み合わせを記載した。それによると、

（青海） 石英+曹長石+白雲母+紅れん石+ざくろ石

（若桜） 石英+曹長石+白雲母+紅れん石+ざくろ石+黒雲母

（北九州） 石英+白雲母+紅れん石+ざくろ石

また、唐木田（1987）は北九州の三郡変成帯からの紅れん石-石英片岩の鉱物組み合わせを以下のように記載した。

（北九州） 石英+曹長石+白雲母+紅れん石±ざくろ石±緑泥岩

一方、三波川変成帯からの紅れん石-石英片岩の産出は関東山地から九州西部に至るまで、三波川変成帯全体に普遍的である（たとえば、酒井，1980；廣田，1991；高須・牧野，1980）。とくに徳島県眉山の紅れん石-石英片岩は有名で、結晶片岩中から世界で初めて紅れん石が発見された地域である。

Iwasaki（1963）は四国東部・徳島県の眉山から高越山にかけての三波川帯から産出した紅れん石-石英片岩の鉱物組み合わせを以下のように記載した。

- (1) 石英±曹長石+白雲母+紅れん石+赤鉄鉱±方解石
- (2) 石英±曹長石+白雲母+紅れん石+緑泥石+赤鉄鉱±ざくろ石±方解石
- (3) 石英±曹長石+白雲母+紅れん石+緑泥石+角閃石+赤鉄鉱±方解石
- (4) 石英±曹長石+白雲母+紅れん石±緑泥石+角閃石+赤鉄鉱±ざくろ石
±エジルひすい輝石±ブラウン鉄±方解石
- (5) 石英±曹長石+白雲母+紅れん石±緑泥石+角閃石±ざくろ石+赤鉄鉱
±方解石±ブラウン鉄

これらのうち (3) ~ (5) の組み合わせには角閃石が含まれ、(3) の鉄物組み合わせの角閃石は無色藍閃石、(4) の鉄物組み合わせの角閃石は無色藍閃石からマグネシオリーベック閃石、(5) の鉄物組み合わせの角閃石はトレモラ閃石である。

福富 I 遺跡から出土した遺跡の紅れん石-石英片岩はいずれも特徴的に無色透明の角閃石を含む。

以上のことより、三郡変成帯産の紅れん石-石英片岩には角閃石の記載がない。これに対し、三波川変成帯産のものは、今回の比較試料として記載したものをふくめ、Iwasaki (1963) の記載においても紅れん石-石英片岩中に角閃石が含まれていることは一般的である。

また、Masuda and Kriyama (1988) の記載にも見られるように、三波川変成帯中の紅れん石-石英片岩の紅れん石には、しばしばブーディン構造が知られており、福富 I 遺跡の紅れん石-石英片岩中の紅れん石の組織と調和的である。

以上のことより、福富 I 遺跡より出土した紅れん石-石英片岩製遺物の原材料は三波川変成帯よりもたらされた可能性が高い。また、今回の試料3の紅れん石を含まない石英片岩も紅れん石-石英片岩と同一地域に分布していたとして矛盾がない。

4. 今後の課題

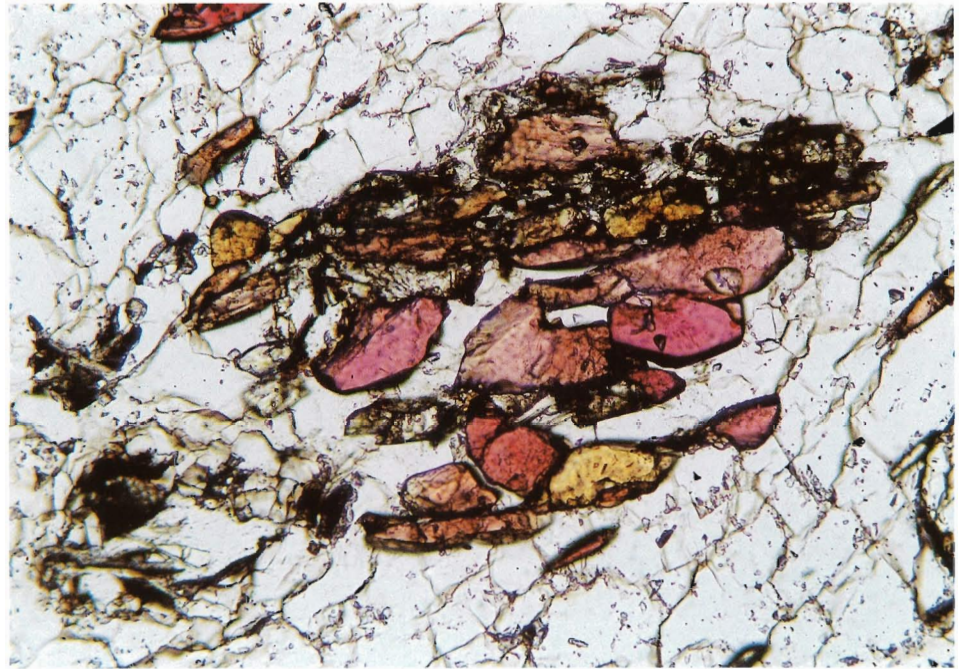
福富 I 遺跡より出土の紅れん石-石英片岩の原産地は三波川変成帯である可能性が高くなった。今後の課題としては、三波川変成帯起源であることをさらに確度のあるものにすることが必要である。また、三波川変成帯中のどこからもたらされたものであるのか、さらに地域を限定する必要もある。これらの課題を解決するためには、

- (1) 紅れん石-石英片岩の構成鉄物（紅れん石、角閃石、白雲母、鉄鉱など）の化学組成の分析と比較
- (2) 紅れん石-石英片岩中の白雲母の地質年代測定（K-Ar 法または $^{40}\text{Ar}/^{39}\text{Ar}$ 法）をおこなうことが有効であると考えられる。

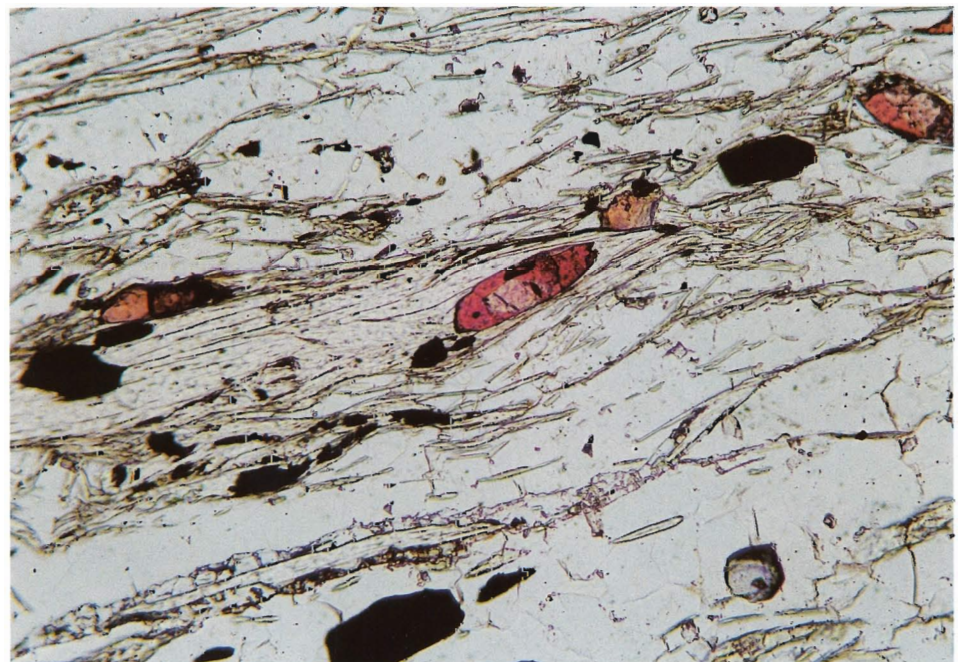
文 献

- Iwasaki, M. (1963) Metamorphic rocks of the Kotu-Bizan area, eastern Shikoku. Jour. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. II, 15, 1-9.
- 唐木田芳文 (1987) 福岡県八女地域における三郡変成岩の角閃石。西南学院大児童教育論集14, 55-75.
- Masuda, T. and Kuriyama, M. (1988) Successive "mid-point" fracturing during microboudinage : an estimate of the stress-strain relation during a natural deformation. Tectonophysics, 147, 171-177.
- Miyakawa, K. (1961) General considerations on the Sangun metamorphic rocks on the basis of their petrographical features observed in the San-in provinces, Japan. J. Earth Sci. Nagoya Univ, 9, 345-393.
- 橋本光男 (1964) 三郡変成岩の岩石学の総括。国立科研報, 7, 323-337.
- 廣田善夫 (1991) 紀伊半島西部の三波川変成帯の地質。島根大理紀要, No.19 131-142.
- 酒井千尋 (1980) 関東山地鬼石町東方の三波川変成帯の黒雲母帯。地質学雑, 86, 517-524
- 高須 晃・牧野州明 (1980) 四国・別子地域三波川変成帯の層序と構造—とくに横臥褶曲構造の再検討—。地球科学, 34, 16-26.

1. 試料1



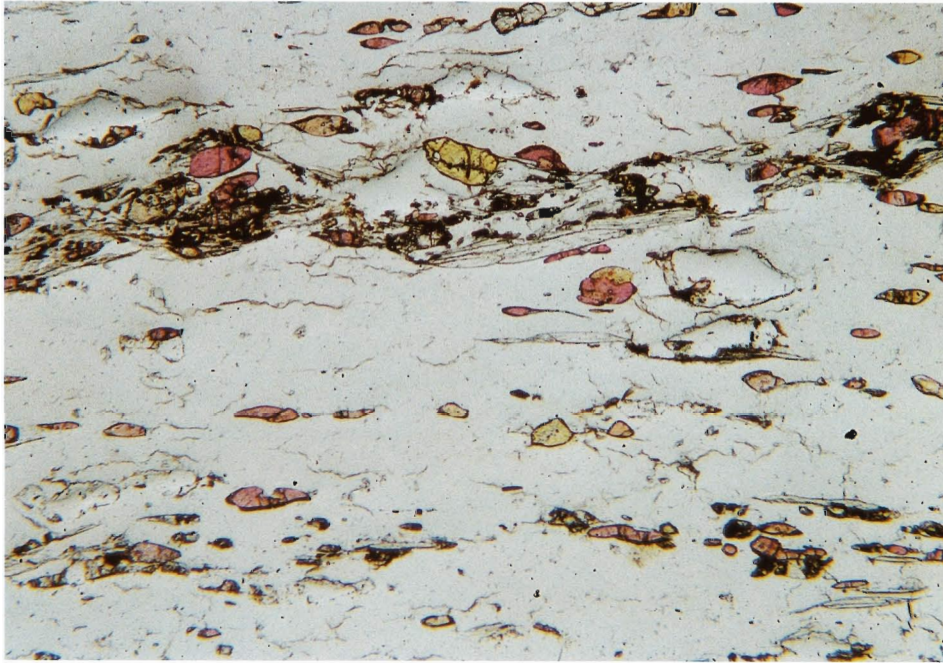
2. 試料1



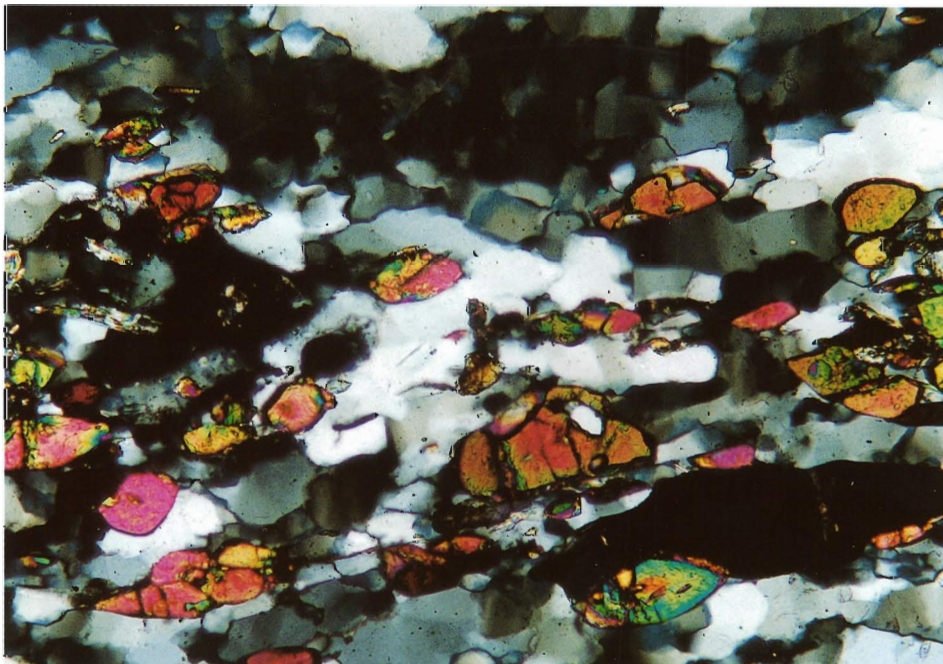
3. 試料2



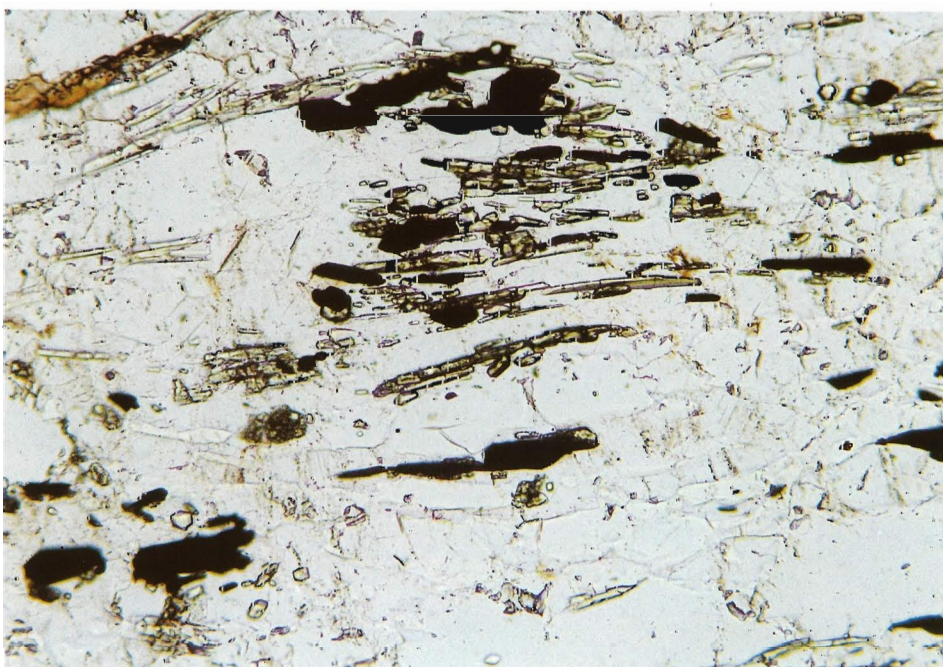
PL 2



4. 試料2



5. 試料2



6. 試料3

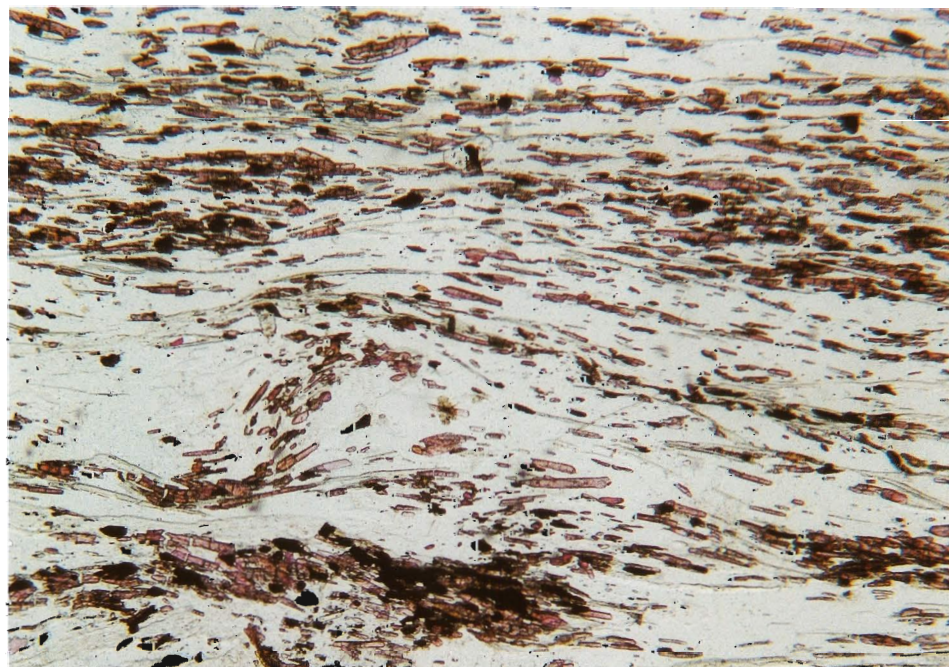
7. 試料4



8. 三波川変成帯産紅れん石-石英片岩。(愛媛県宇摩郡土居町五良津採集)



9. 同上



福富Ⅰ遺跡出土の結晶片岩製遺物および

三波川変成帯産紅れん石－石英片岩の偏光顕微鏡写真

1. 試料1の紅れん石－石英片岩中の紅れん石．オープンニコル，写真の横幅0.9 cm．紅れん石の桃色～黄色の多色性顕著．
2. 試料1の紅れん石－石英片岩中の紅れん石．オープンニコル，写真の横幅2.3 cm．紅れん石の多色性のちがいによる累帯構造が顕著．
3. 試料2の紅れん石－石英片岩．クロスニコル，写真の横幅2.3 cm．白雲母の定向配列による片理の発達．
4. 3の写真のオープンニコル．
5. 試料2の紅れん石－石英片岩．クロスニコル，写真の横幅0.9 cm．紅れん石に干渉色のちがいによる累帯構造が認められる．
6. 試料3の石英片岩．オープンニコル，写真の横幅0.9 cm．細粒粒状のざくろ石が認められる．
7. 試料4の紅れん石－石英片岩．オープンニコル，写真の横幅0.9 cm．紅れん石が線構造方向に引き伸ばされてブーディンを示す．
8. 三波川変成帯産紅れん石－石英片岩．オープンニコル，写真の横幅0.9 cm．紅れん石が線構造方向に引き伸ばされてブーディンを示す．
9. 三波川変成帯産紅れん石－石英片岩．オープンニコル，写真の横幅2.3 cm．紅れん石が片理面上に配列しているのが認められる．

第12章 松江市福富 I 遺跡出土炉壁 および鉄滓の調査

佐 藤 豊*・日立金属株式会社冶金研究所

* 和 鋼 博 物 館

福富Ⅰ遺跡は松江市乃木福富町に所在し、一般国道9号（松江道路）建設予定地内に位置するため、事前発掘調査が島根県埋蔵文化調査センターによって行なわれた。出土物から12～13世紀ごろの遺跡と考えられている。また出土した鉄滓および炉壁について分析依頼があったので金属学的調査を行った。その結果と若干の考察を加えたので併せて報告する。

1. 資 料

資料の明細および外観をそれぞれ表1、写真1～5に示す。

表1 資料の明細

番号	資 料 名	明 細	重量(g)
No1	福富Ⅰ4B区SB11 ベルト内炉壁950726	内側部は薄い黒色状を呈するが高熱を受けた感じはない。外側部はきれいな粘土色状の炉壁。	15
No2	福富Ⅰ2区SB02 No261饅頭形鉄滓950508	直径約150mmφの饅頭状の鉄滓、ひび割れがある。やや赤味を帯び光沢のある鉄滓。	1850
No3	福富Ⅰ6区鉄滓 黒色状のもの 1995	表面やや黒色状のもので光沢があり、断面緻密状鉄滓。	40
No4	福富Ⅰ6区鉄滓 赤色状のもの 1995	表面赤味を帯び、凹凸状重たい感じの滓滓。	250
No5	福富Ⅰ4B区SB11 No58赤色状鉄滓 950811	表面やや赤味を帯び、凹凸状重たい感じの滓滓。	140

2. 化学組成

各資料から試料を採取し、化学分析を行った。各資料の化学組成を表2-1に、資料No.2の金属部分を表2-2に示す。このうち炭素および硫黄は堀場製作所EMIA-1200型C・S同時定量装置による赤外線吸収法により、その他の元素は島津製作所高周波誘導結合プラズマ発光分光分析装置(ICPV-1012型)により定量した。

表2-1各資料の化学組成（重量%）

番号	資 料 名	C	SiO ₂	MnO	P	S	Ni	Cr ₂ O ₃	Na	K	CaO	MgO	V ₂ O ₅	TiO ₂	Cu	Al ₂ O ₃	T.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	M.Fe
No1	4B区SI11 炉壁粘土部	0.41	67.76	0.06	0.51	0.013	<0.01	0.01	0.78	1.38	0.51	0.65	0.020	0.40	<0.01	19.59	2.99	0.32	3.89	0.02
No1	炉壁黒色部	1.40				0.021														
No2	2区SI02 饅頭形鉄滓	0.56	27.73	0.25	0.12	0.083	0.04	0.08	0.22	0.81	1.05	0.45	0.28	2.66	<0.01	6.24	39.37	17.19	36.21	0.68
No3	6区 黒色状鉄滓	0.020	15.96	0.06	0.04	0.025	0.05	0.03	0.12	0.70	0.43	0.41	0.021	0.21	<0.01	4.02	59.52	66.52	10.55	0.43
No4	6区 赤色状鉄滓	0.12	21.45	0.09	0.05	0.062	0.03	0.04	0.19	0.53	0.76	0.44	0.059	0.60	<0.01	6.32	49.13	44.27	20.49	0.39
No5	4B区SI11 赤色状鉄滓	0.79	14.04	0.01	0.20	0.123	0.02	0.02	0.08	0.23	0.04	0.11	0.020	0.07	<0.01	3.48	50.99	3.18	69.27	0.07

EQ

表2-2 金属部分の化学組成 (重量%)

資 料 名	C	SiO ₂	Mn	P	S	Ni	Cr	V	Co	Cu	Al	Ti	Ca	Sn	As	Zr	Mg	Zn	T.Fe
No.2 鉄滓中の金属	0.29	0.11	0.005	0.018	0.015	0.05	0.01	<0.010	0.03	0.006	0.050	0.010	0.020	0.001	0.001	<0.01	0.008	<0.01	93.6

注：金属の大きさ：長さ約10 mm、厚み約3 mm のもの写真2-2の中央下辺部より採取

3. 顕微鏡組織

各資料の顕微鏡組織を写真6～10に示す。

資料 No.2は3ファイヤライト+ゲーサイトが主体である。

資料 No.3はヴスタイト+ファイヤライト組織が主体である。

資料 No.4はヴスタイト+ファイヤライト組織が主体である

資料 No.5は金属の銹化組織を示す。

4. 構成相の解析

前項で観察した資料を用い走査型電子顕微鏡 (SEM) による微細組織の観察ならびに EDX 分析 (エネルギー分散型 X 線分析) による局所的な定性分析を行った。また粉末試料を用いて X 線回折を実施し、構成結晶の同定を行った。

結果を写真11～18に示す。また、これらの結果を総括し、各資料の構成相を示すと表3のようになる。

表3 各資料の X 線回折による相解析

番号	資 料 名	(W) ヴスタイト FeO	(G) ゲーサイト FeO (OH)	(M) マグネタイト Fe ₃ O ₄	(F) ファイヤライト Fe ₂ SiO ₄	(U) ウルボスピネル Fe ₂ TiO ₄	シリカ SiO ₂	基 地 (ガラス質)
No2	饅頭形鉄滓		◎	○	◎	○		Si-Al-Fe-Ca-K-Zr
No3	黒色状鉄滓	◎			◎			Si-Al-K-Fe-Ca-Na
No4	赤色状鉄滓	◎		△	◎			Si-Al-Fe-K-Ca-Na
No5	赤色状鉄滓		◎	◎			△	G

注：◎多い，○あり，△僅かにあり

5. 考 察

大沢正己氏⁽¹⁾が調査された古墳出土鉄滓の化学組成及び構成相に準じて本鉄滓のそれらを表

4に示す。

表4により資料が製錬滓か鍛冶滓か、あるいは使用原料が砂鉄か鉍石（岩鉄）かについて考察してみる。

表4 資料の化学組成と鉍物組織

組 成		資 料			
		No2	No3	No4	No5
化学組成	全鉄分 (T . Fe)	39.37	59.52	49.13	50.99
	造 滓 成 分	35.11	20.82	28.97	17.67
	二酸化チタン (TiO ₂)	2.66	0.21	0.60	0.07
	バナジウム (V)	0.157	0.012	0.033	0.011
鉍物組織		F+M+U+G	W+F	W+F+M	M+G+SiO ₂

注：造滓成分 (SiO₂+CaO+MgO+Al₂O₃)

(1) 資料 No.1炉壁について

本炉壁資料の黒色部と粘土部に分けて試料採取しようとしたが、黒色部は表面の極薄い部分のみで、採取試料が少なく C、S のみ分析した。

外側粘土部と従来調査の各種釜土の化学組成比較を表5に示す。Al₂O₃はやや高めなるも、SiO₂高く、T.Fe 低い、製錬炉釜土と同等な良質な炉壁と推定される。また黒色部の C 量が1.40%と高いことから木炭による着色と推定され、低温部で木炭と接触するような箇所に使用されていたものと思われる。また粘土部 S 量0.013%のものが黒色部 S 量0.021%と高くなっている。後述の資料 No.3,No.4鍛冶滓の S 量は0.025%~0.062%、これに対し資料 No.2製錬滓の S 量0.083%と高いことから本炉壁は資料 No.2鉄滓を生成した製錬炉に使用された可能性が大きい。

表5 各種釜土の化学組成の比較 (重量%)

種 類	SiO ₂	Al ₂ O ₃	TiO ₂	CaO	MgO	T.Fe	Al ₂ O ₃ /SiO ₂
No.1SB11ベルト内炉壁 粘土部	67.76	19.59	0.40	0.51	0.65	2.99	0.289
砥波たたら釜土 (製錬炉) (1)	65.59	18.63	—	0.23	Tr	3.37	0.284
石見国備谷たたら釜土 (製錬炉) (1)	77.16	14.19	—	0.03	Tr	1.91	0.193
靖国たたら釜土 (製錬炉) (2)	68.54	13.12	—	0.25	0.26	3.10	0.191
日本鉄鋼協会復元たたら釜土 (製錬炉) (3)	64.44	13.60	—	0.20	0.38	2.83	0.211
鳥上作刀鍛練場火床羽口取付粘土 (製錬炉) (4)	54.28	19.10	0.89	1.17	1.33	4.62	0.352
島根県大東町塩田中新田羽口粘土部 (鍛冶炉) (5)	56.00	24.60	0.15	0.26	1.20	3.54	0.439

注 (1) 倭 国一：古来の砂鉄製錬法 丸善 1933

(2) 小塚寿吉：古来の砂鉄製錬法“たたら”について

鉄と鋼第52年第12号

(3) 日本鉄鋼協会：たたら製鉄の復元とその鉍について

昭和46年2月27日

(4) 和鋼記念館：鳥上作刀鍛練場鍛冶滓の調査

昭和63年6月30日

(5) 和鋼博物館：塩田中新田製鉄遺跡出土鉄滓の調査

平成5年12月15日

(2) 資料 No.2鉄滓について

鉄分39.37% to やや低く、造滓成分35.11%と高いことから分類的には製錬滓の範囲に入る。しかし化学組成的にはゲーサイト (FeO (OH)) が多いことから鍛冶滓の可能性も考えられるが、鍛冶滓の特徴であるヴスタイト (FeO) の検出が写真12の X 線回折像、写真11-1,11-2, の SEM 像及び、写真6のミクロ組織のすべてに認められないこと。それに晶出しているウルボスピネル結晶もかなり発達していることから鍛冶滓ではなく製錬滓と判断される。また TiO₂量2.66%, V 量0.157%の値から砂鉄を原料にした製錬滓と推定される。

No.2鉄滓中の含有金属鉄と従来調査した金属鉄の化学組成比較を表6に示す。S 量が他金属鉄では0.003%~0.007%に対し本金属鉄は0.015%とやや高いのが認められる。

表6本資料金属部分の化学組成と従来調査の砂鉄を原料とした金属鉄および西城川出土包丁鉄の化学組成比較 (重量%)

	C	Si	Mn	P	S	Ni	Cr	V	Co	Al	Ti	Ca	Sn	As	Cu	Zn	Zr	Mg
No2鉄 滓 中の金属	0.29	0.11	0.005	0.018	0.015	0.05	0.01	<0.010	0.03	0.050	0.010	0.020	0.001	0.001	0.006	<0.01	<0.01	0.008
大東町塩 田中新田 遺跡鉄片	0.63	0.33	0.002	0.02	0.003	0.005	0.004	0.010	—	0.015	0.012	0.003	0.002	0.001	<0.010	—	<0.01	0.001
左下鉄 (金屋子 鉦)	0.68	0.54	Tr	0.037	0.004	Nil	Nil	0.02	0.01	0.026	0.064	0.0146	0.004	0.005	0.01	0.01	0.01	0.0046
左下鉄 (A)(靖 国鉦)	0.84	1.69	0.01	0.023	0.006	Nil	Nil	0.02	0.04	0.040	0.006	0.0138	0.004	0.004	0.02	0.01	0.02	0.0041
左下鉄 (B)(靖 国鉦)	0.14	0.04	Nil	0.037	0.004	Nil	Nil	0.02	0.03	0.020	0.012	0.0106	0.004	0.005	0.01	0.01	0.01	0.0027
玉鋼 (つる A)	1.42	Tr	Tr	0.013	0.007	Nil	Tr	0.02	0.01	0.006	0.004	0.0022	0.004	0.001	Tr	Tr	0.02	0.0004
山本家錬 鉄	0.03	0.01	0.01	0.035	0.006	0.03	—	0.00	0.04	0.002	0.015	—	—	—	0.01	—	0.000	—
広島県三次市 西城川出土包 丁鉄 (C)	0.18	0.03	0.002	0.030	0.006	0.006	—	0.000	0.014	0.017	0.013	—	—	—	0.010	—	0.000	—
広島県三次市 西城川出土包 丁鉄 (B)	0.16	0.04	0.002	0.050	0.005	0.009	—	0.000	0.015	0.030	0.005	—	—	—	0.010	—	0.000	—

注：(1) 和鋼博物館：大東町塩田中新田製鉄遺跡出土鉄滓の調査 平成5年12月15日

(2) 矢野武彦：たたら製品の品質，たたら製鉄—その伝統と技術，金属材料誌所載昭和44年8月~45年1月

(3) 荊山信行：明治時代中期の包丁鉄の金属的調査、たたら研究 第30号1989年12月

(3) 資料 No.3鉄滓について

鉄分59.52%と高く、造滓成分20.82は鍛冶滓の分類範囲でもあり、写真14の X 線回折像にはヴスタイトが晶出していることから鍛冶滓と判断される。また鍛錬鍛冶滓にしては鉄分低く、造滓成分多いこと、それに TiO₂量0.21%, V 量0.012%から砂鉄を原料にした精錬鍛冶滓と推定される。

(4) 資料 No.4鉄滓について

鉄分49.13%，造滓成分28.97は鍛冶滓の分類に含まれるが、写真16の X 線回折像にヴスタイトの検出が資料 No.3と同程度に認められること。それに写真15の SEM 像及び写真9のミクロ組織にもヴスタイトが晶出していることと砂鉄を原料にした製錬滓にしては TiO₂量が低いことから製錬滓ではなく鍛冶滓と判断される。また鍛練鍛冶滓にしては鉄分低く、造滓成分多いこと。それに TiO₂量0.60% V 量0.033%から砂鉄を原料にした精錬鍛冶滓と推定される。

(5) 資料 No.5鉄滓について

写真10のミクロ組織及び写真17の SEM-EDX では金属の銹化物状を示している。写真18の X 線回折ではゲーサイト (FeO (OH)) が多く検出されていること、それに表2の化学組成で FeO/Fe₂O₃比は0.046と低く殆ど Fe₂O₃であることから、これらはゲーサイトであり、本資料は金属の銹化物であることが認められる。また、化学組成を見ると、TiO₂量0.07%，V 量0.011%は砂鉄を原料⁽²⁾に用いられたものであり、また、S 量0.123%はかなり高い。他資料では資料 No.3, No.4の S 量0.025%～0.062%であり、資料 No.2の S 量0.083%と高いことから本資料 No.5は資料 No.2の製錬によって生成された金属鉄と推定される。

6. 結 言

松江道路建設予定地内福富遺跡出土炉壁及び鉄滓について調査を行った。結果を要約すると次の通りである。

- (1) 資料 No.1炉壁は資料 No.2鉄滓を生成した製錬炉に用いられた可能性が大きい。
- (2) 資料 No.2鉄滓は砂鉄を原料にした製錬滓と推定した。
- (3) 資料 No.3, No.4鉄滓は砂鉄を原料とした精錬鍛冶滓と推定した。
- (4) 資料 No.5鉄滓は資料 No.2鉄滓を生成した製錬によって生成された金属鉄の銹化物と推定した。

以上の調査は日立金属株式会社冶金研究所で実施し、日立金属テクノクス清永取締役にご指導頂いた。

参 考 文 献

- (1) 大沢正巳：古代出土鉄滓からみた古代製鉄、日本製鉄史論集119 P (たたら研究会1984)
- (2) 清永欣吾：奈良県下の古墳より出土した鉄刀剣の化学分析、橿原考古学研究所紀要考古学論攷第9冊1983

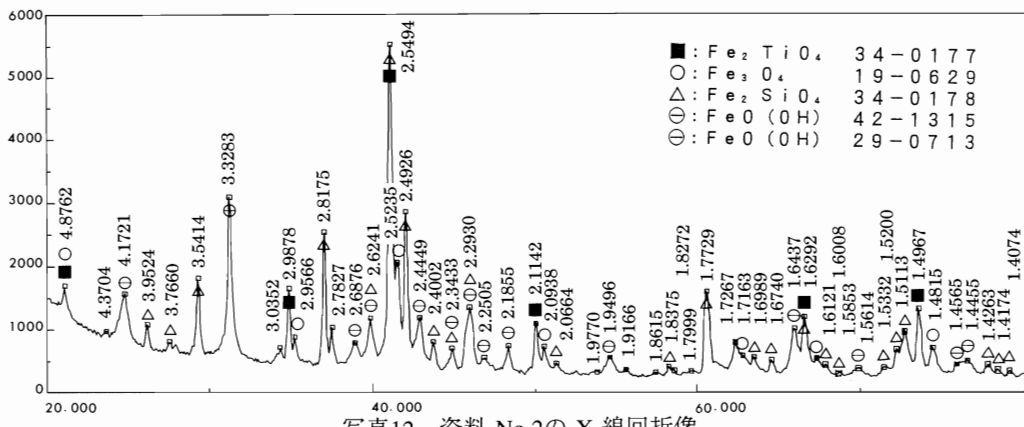


写真12 資料 No.2の X 線回折像

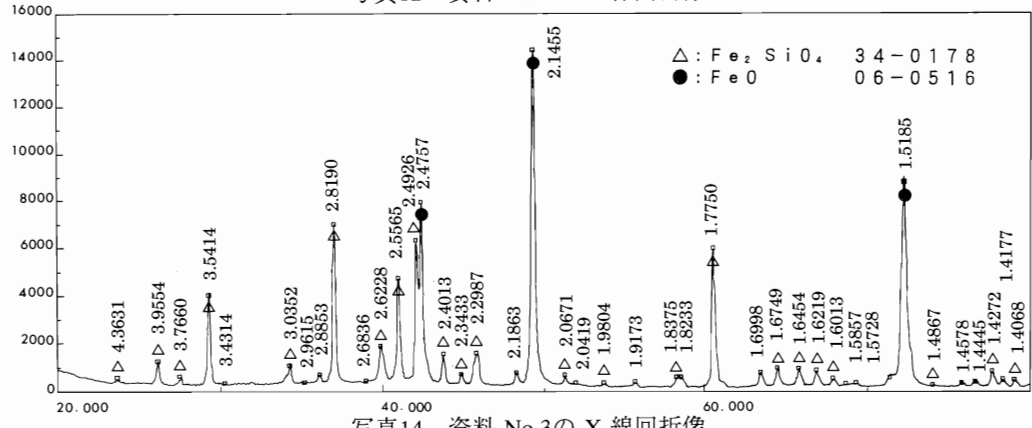


写真14 資料 No.3の X 線回折像

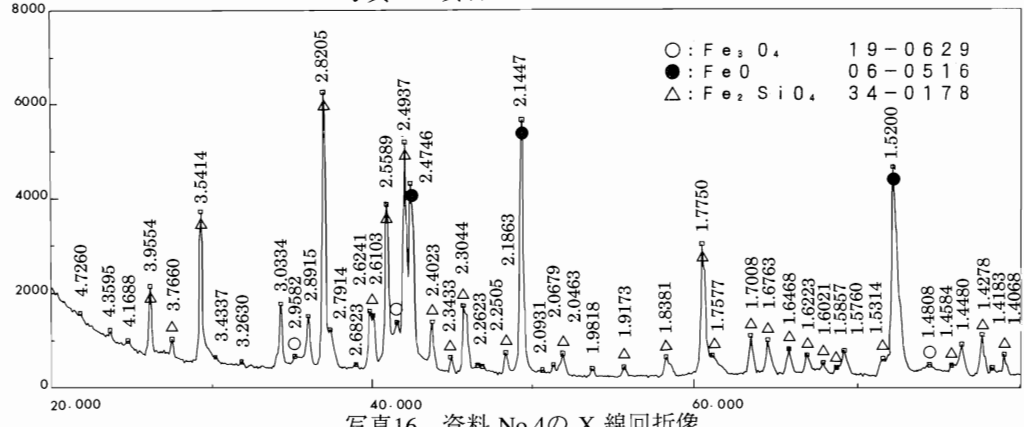


写真16 資料 No.4の X 線回折像

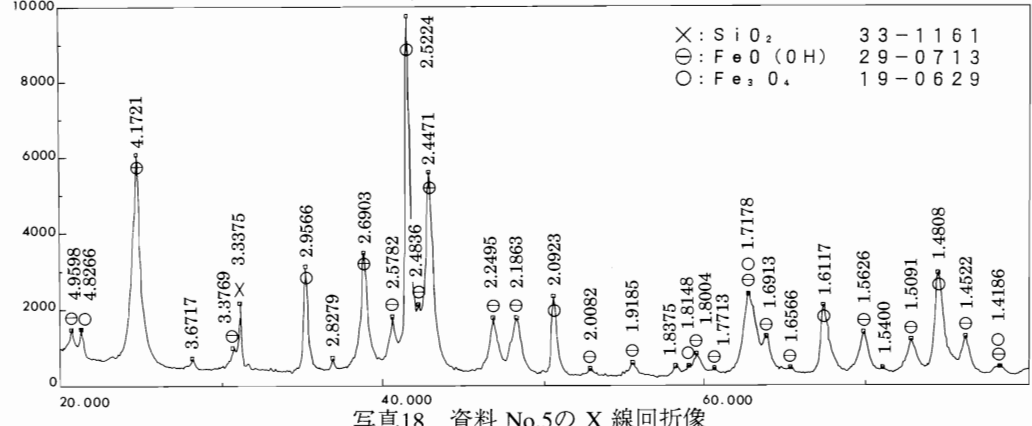


写真18 資料 No.5の X 線回折像



写真1 資料 No.1炉壁の外観



写真3 資料 No.3鉄滓の外観



写真2-1 資料 No.2饅頭形鉄滓の外観



写真4 資料 No.4鉄滓の外観



写真2-2 饅頭形鉄滓の断面



写真5 資料 No.5鉄滓の外観

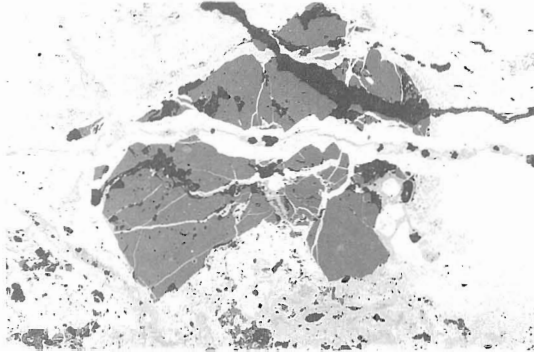
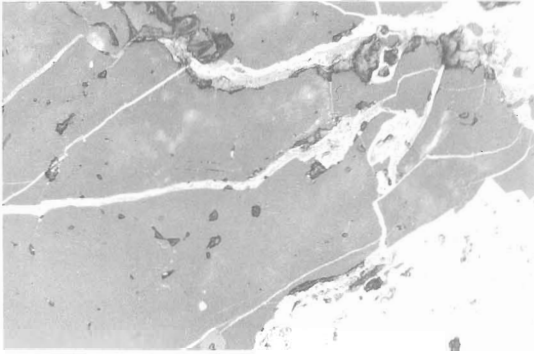


写真10 資料 No.5
赤色状鉄滓
白色結晶は金属の
錆化物

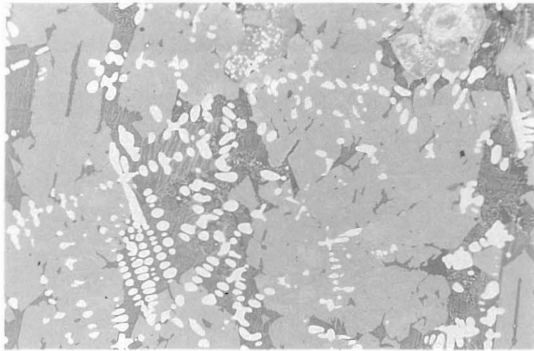
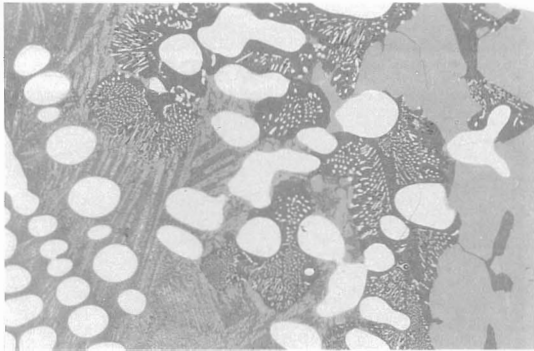


写真9 資料 No.4赤
色状鉄滓
白色結晶はヴスタ
イト
淡灰色の棒状結晶
はファイヤライト

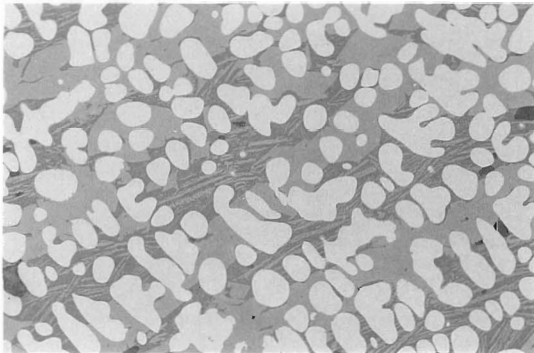
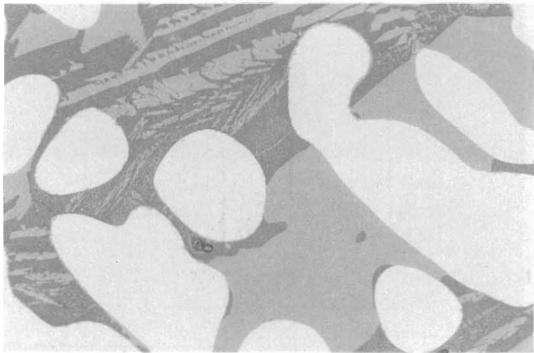


写真8 資料 No.3黒
色状鉄滓
白色結晶はヴスタ
イト
淡灰色の棒状結晶
はファイヤライト

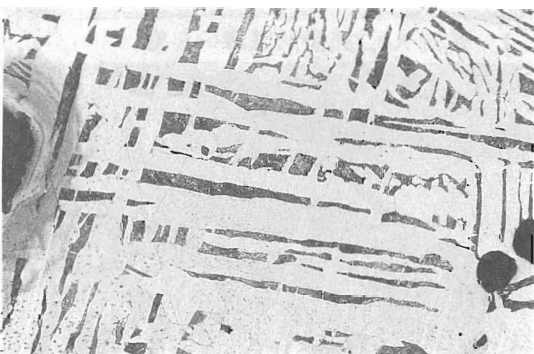


写真7 資料 No.2饅
頭形鉄滓金属部
白色結晶はフェラ
イト
やや黒色の地は
パーライト

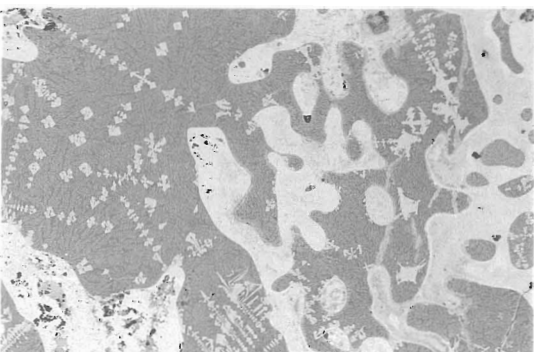
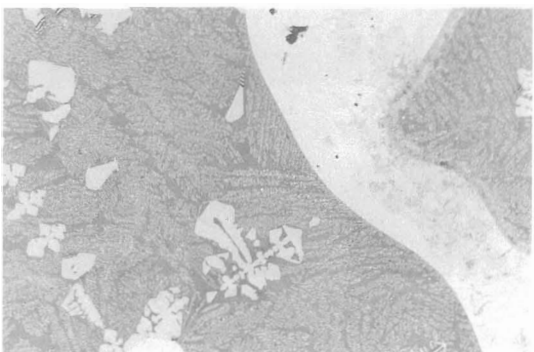
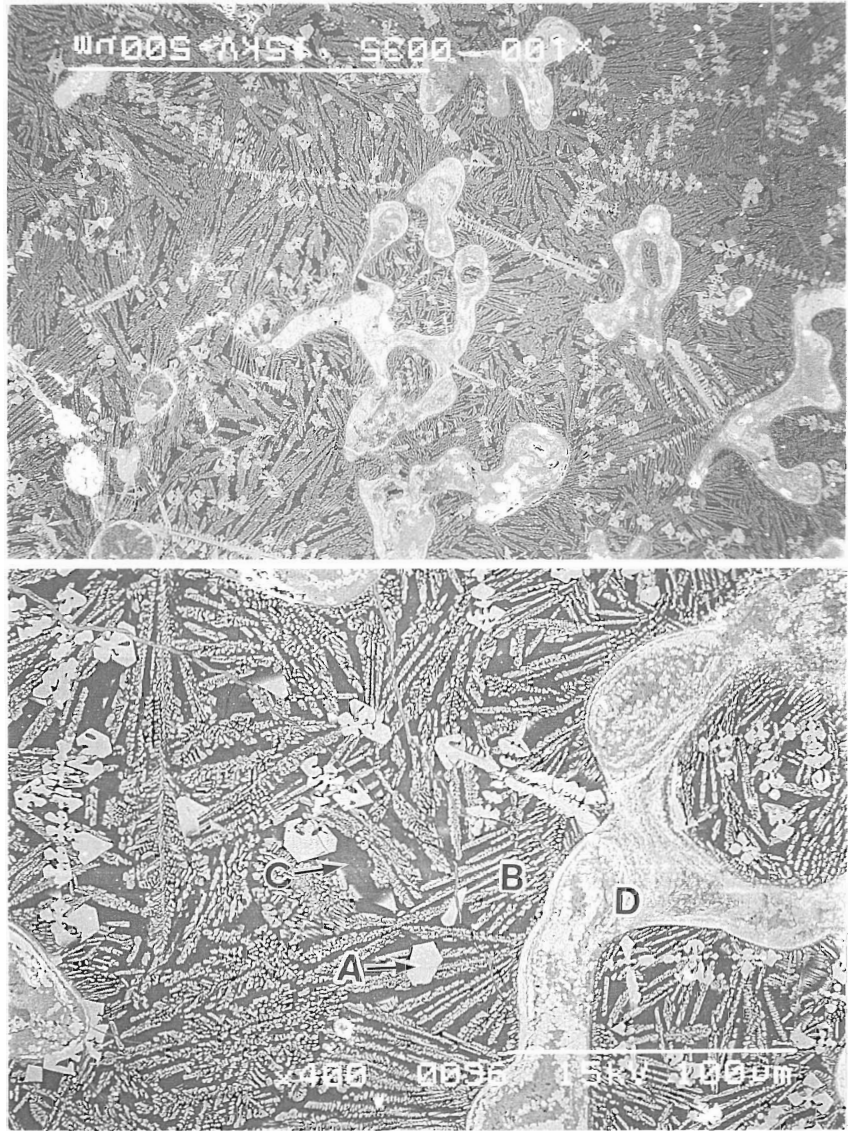
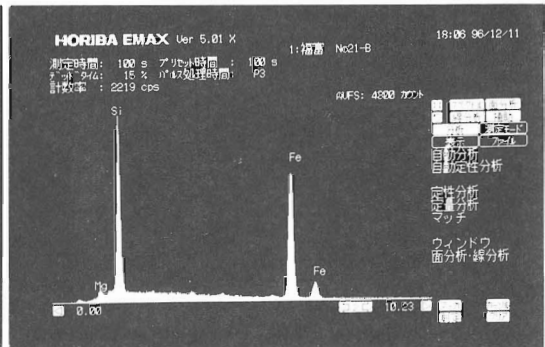
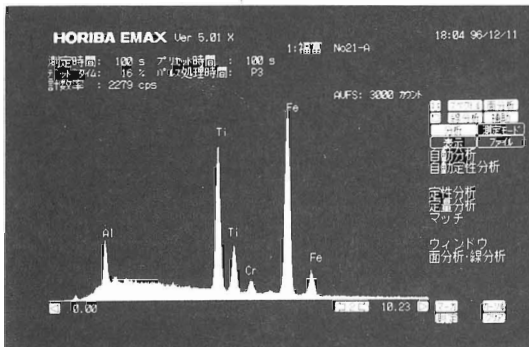


写真6 資料 No.2饅
頭形鉄滓
大きな白色結晶は
ゲーサイト
淡灰色の小さな結
晶はウルボスピネ
ル基地はアイヤ
ライト系

写真11-1 資料 No.2の SEM 像
と EDX 分析



左 A 部
ウルボスピネル
右 B 部
ファイヤライト



左 C 部
基地
右 D 部
ゲーサイト

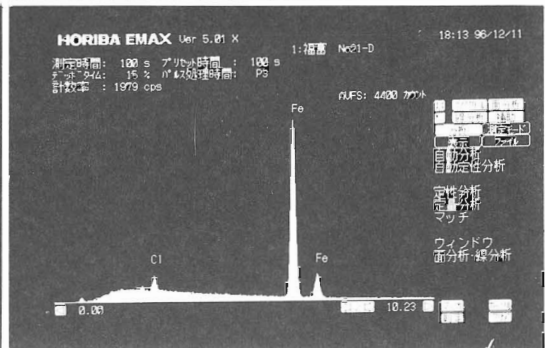
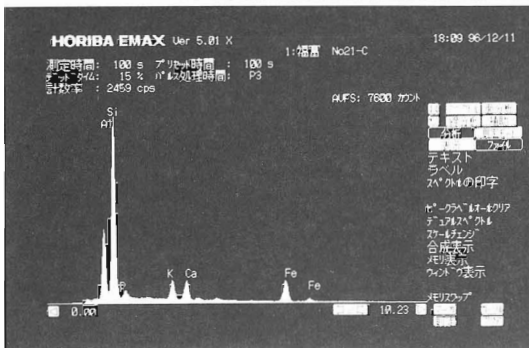
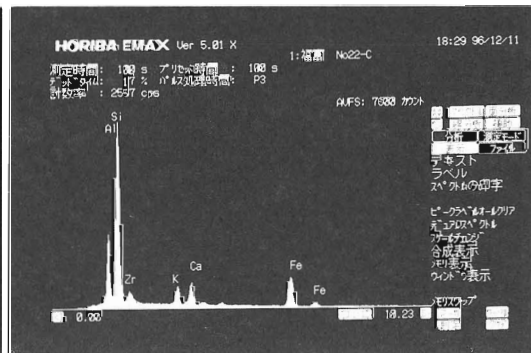
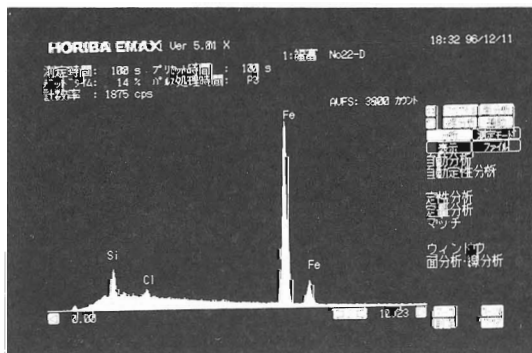
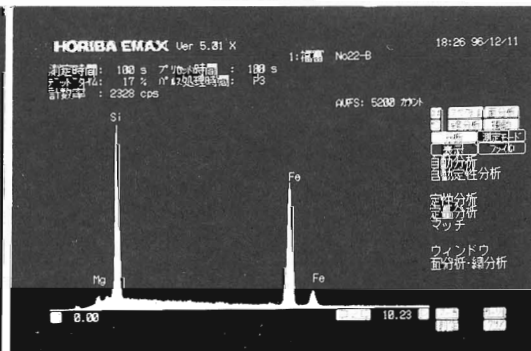
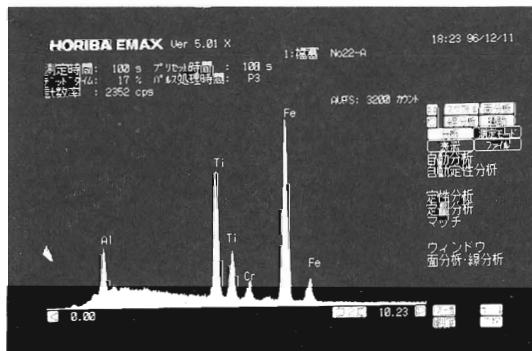
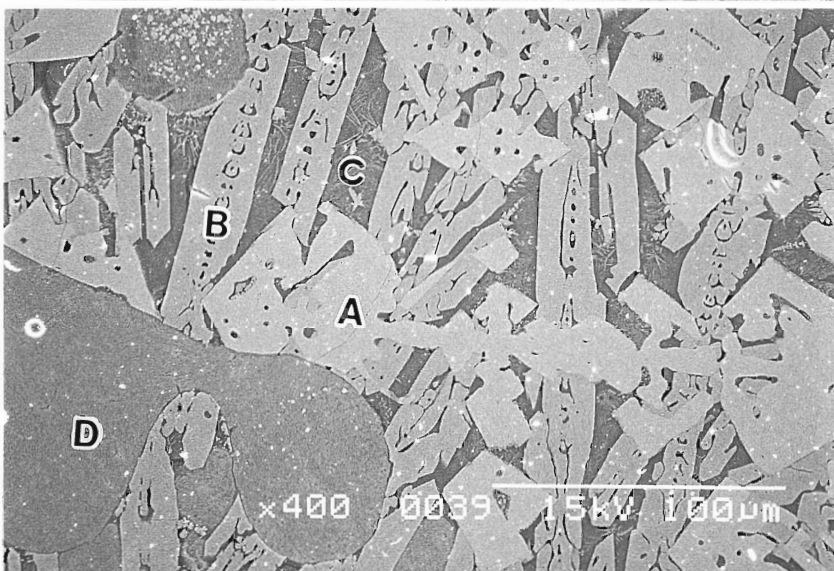
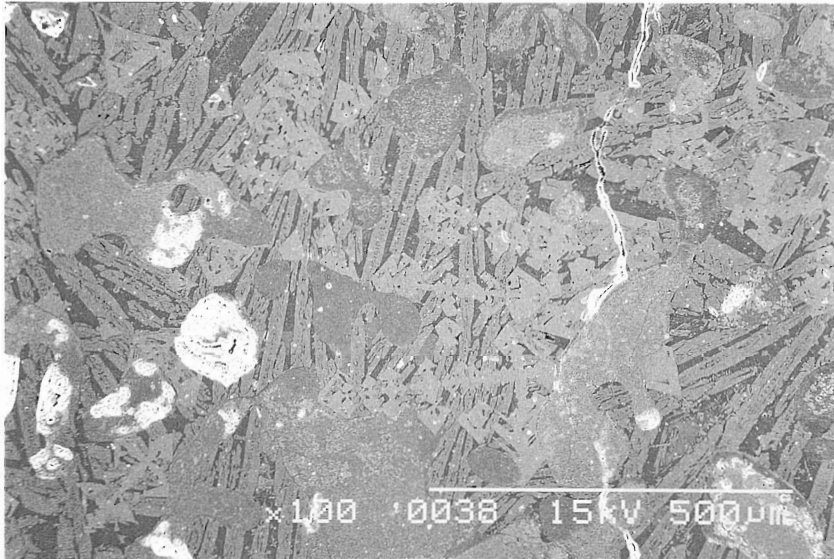


写真11-2 資料 No.2の SEM 像と EDX 分析



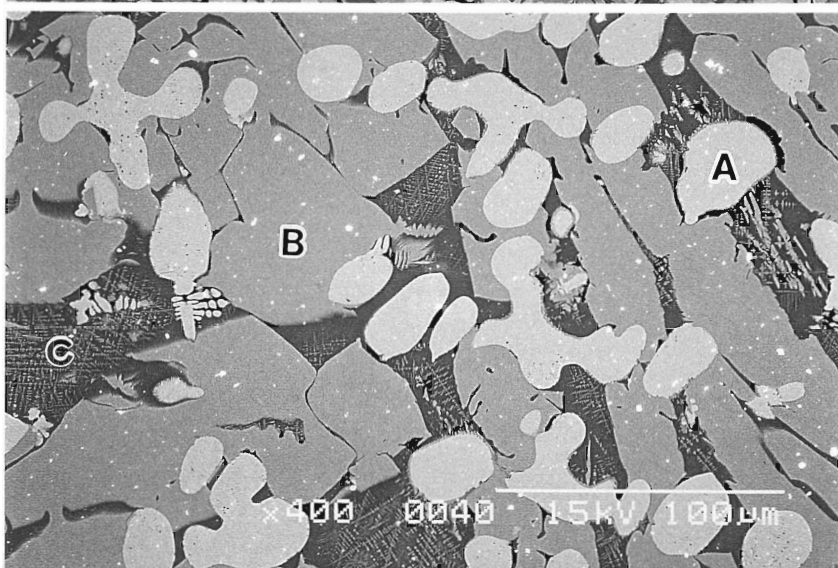
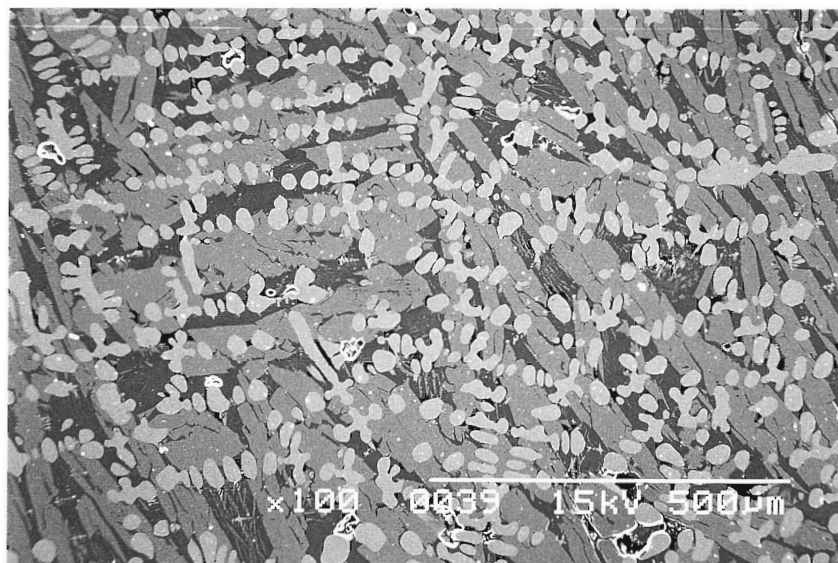
左 A 部
ウルボスピ
ネル

右 B 部
ファイラ
イト

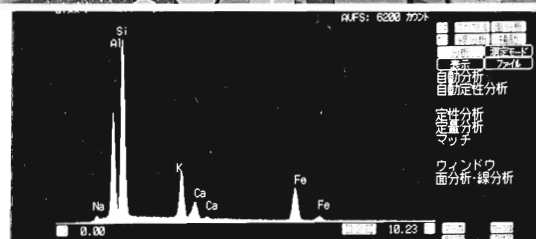
左 C 部
基地

右 D 部
ゲーサイト

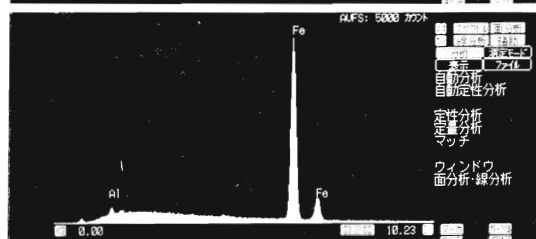
写真13 資料 No.3の SEM 像と EDX 分析



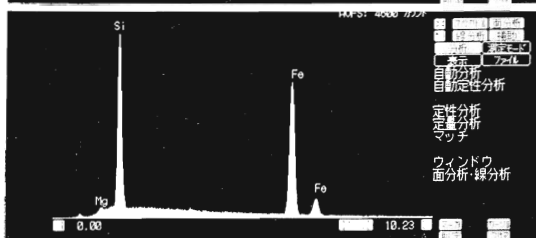
C 部
基地



A 部
ヴスタイト



B 部
ファイヤライト



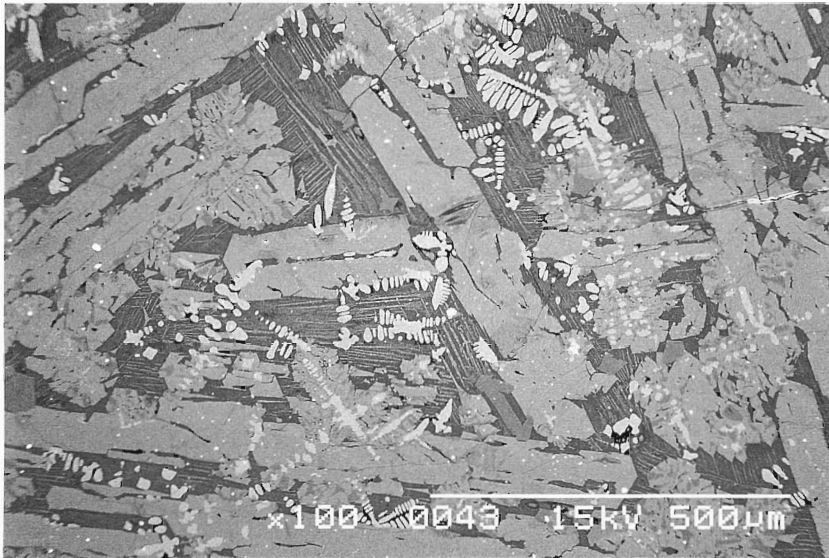
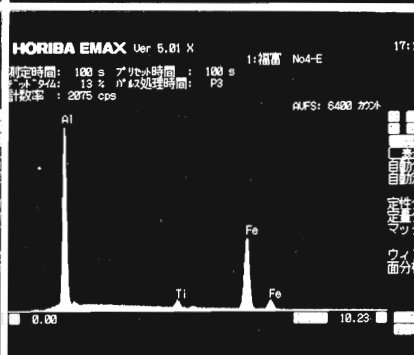
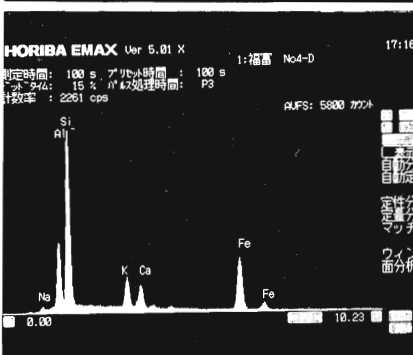
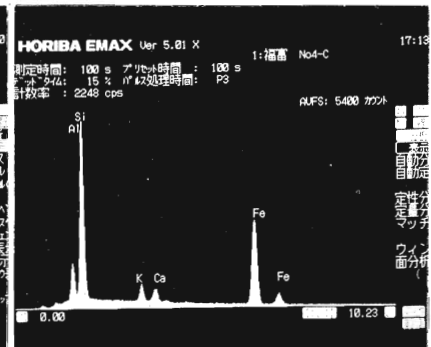
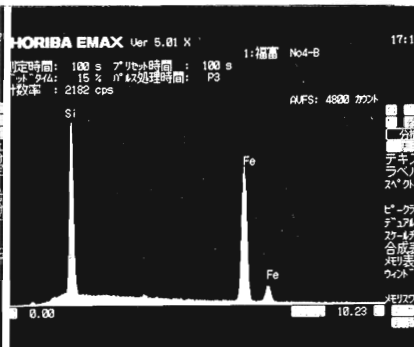
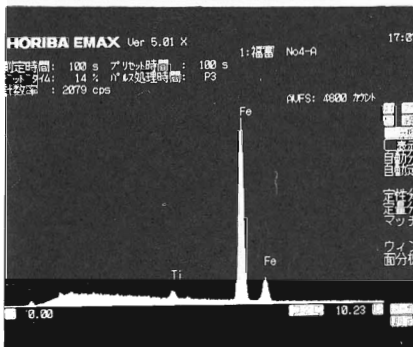
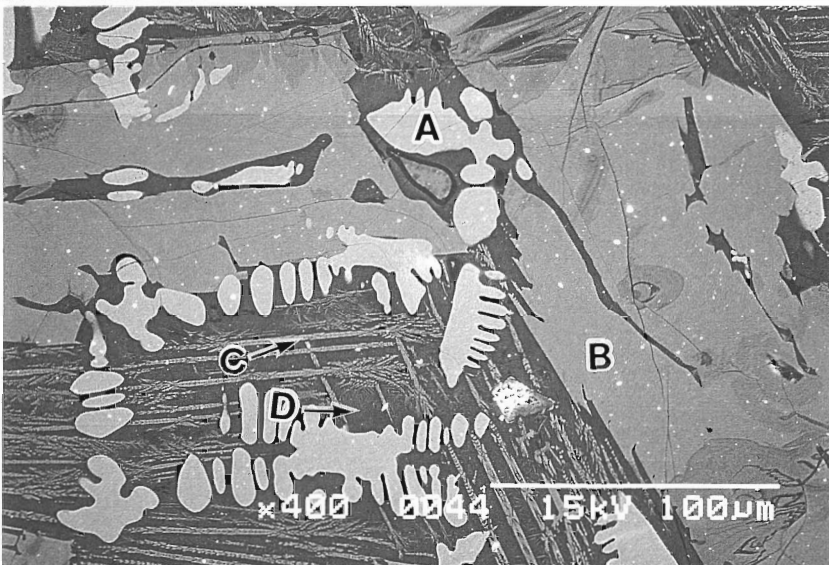


写真15 資料 No.4の SEM 像
と EDX 分析



1. A 部ウスタイト
2. B 部ファイヤライト
3. C 部ファイヤライト系
4. D 部基地
5. E 部ハーシーナイト

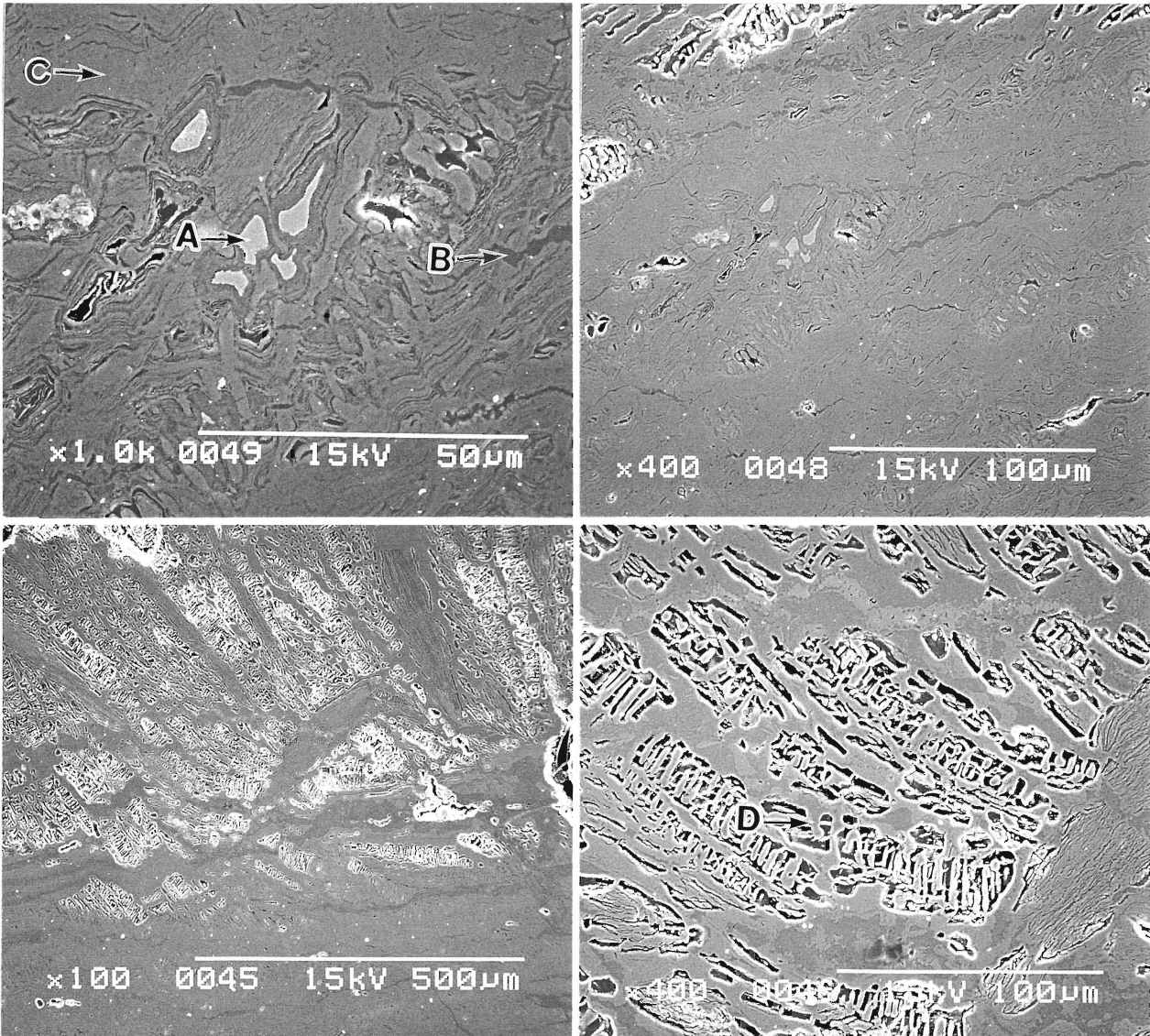
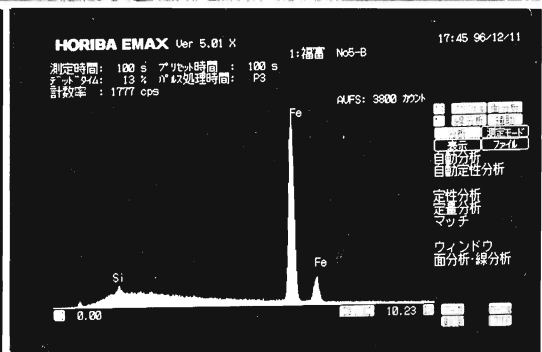
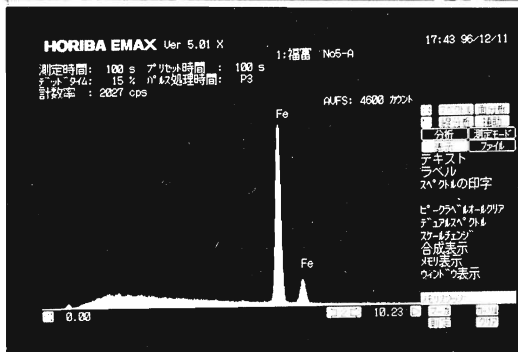
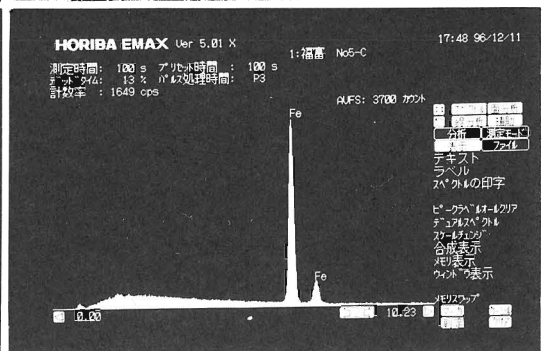
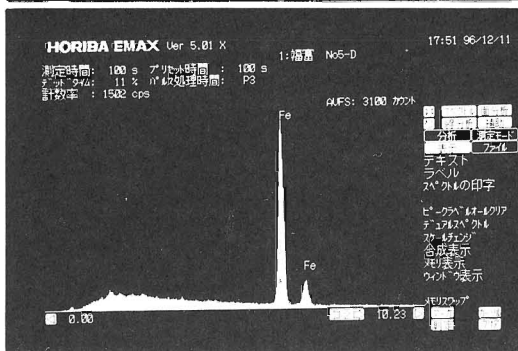


写真17 資料
No. 5のSEM
像とEDX分
析
左 A部
マグネタイト
右 B部
ゲーサイト



左 C部
ゲーサイト
右 D部
ゲーサイト



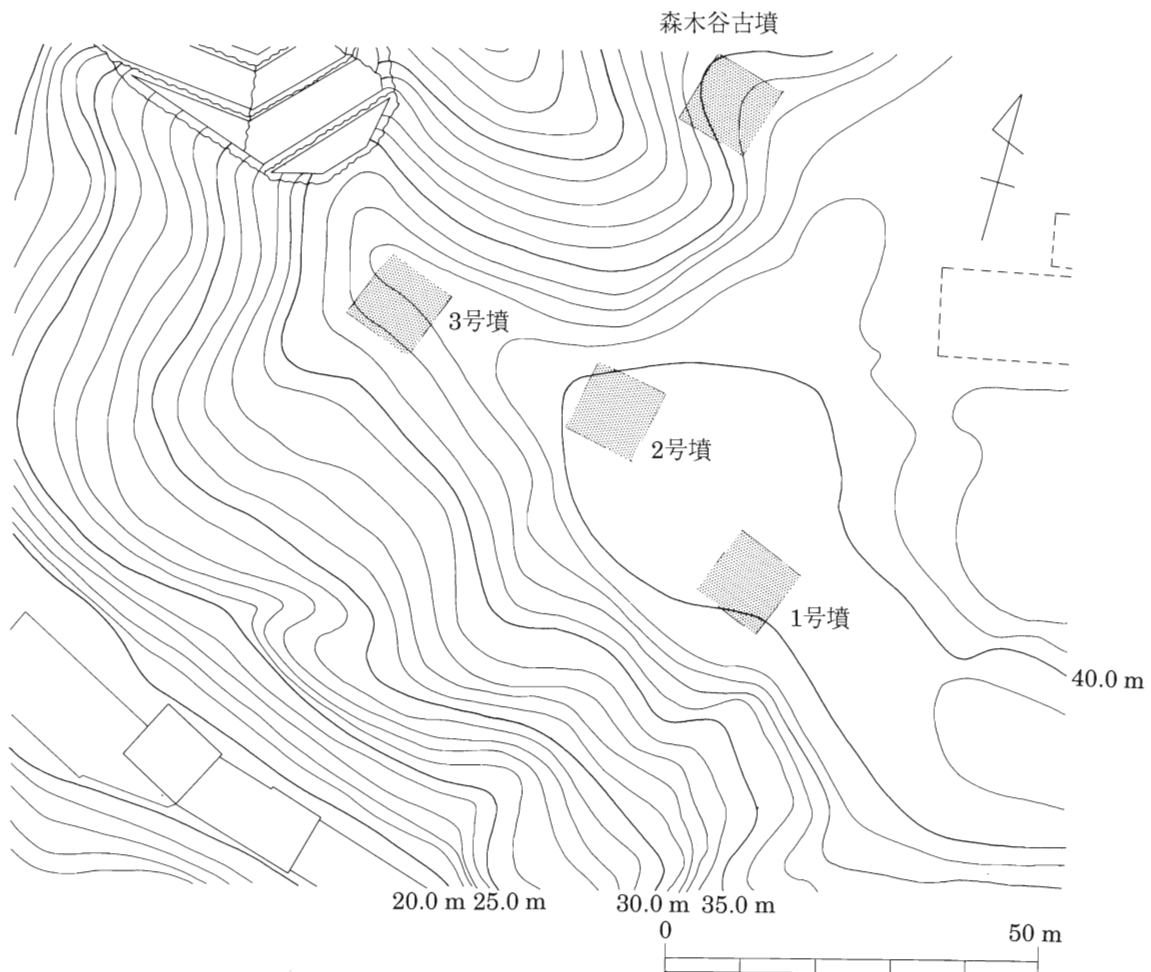
屋形 1 号墳

1. 屋形1号墳の立地と概要

屋形1号墳は福富丘陵の最高所に立地する古墳である。福富丘陵はめのうの原産地として有名な花仙山から北に派生する丘陵のひとつで、鞍部は非常になだらかとなっている。この丘陵は屋形1号墳が作られた地点でさらに北に伸びる支脈と北西に伸びる支脈に分岐する。古墳は福富 I 遺跡の5区の西端に隣接し、ここから北に伸びる丘陵支脈上には福富 I 遺跡8区が続く。

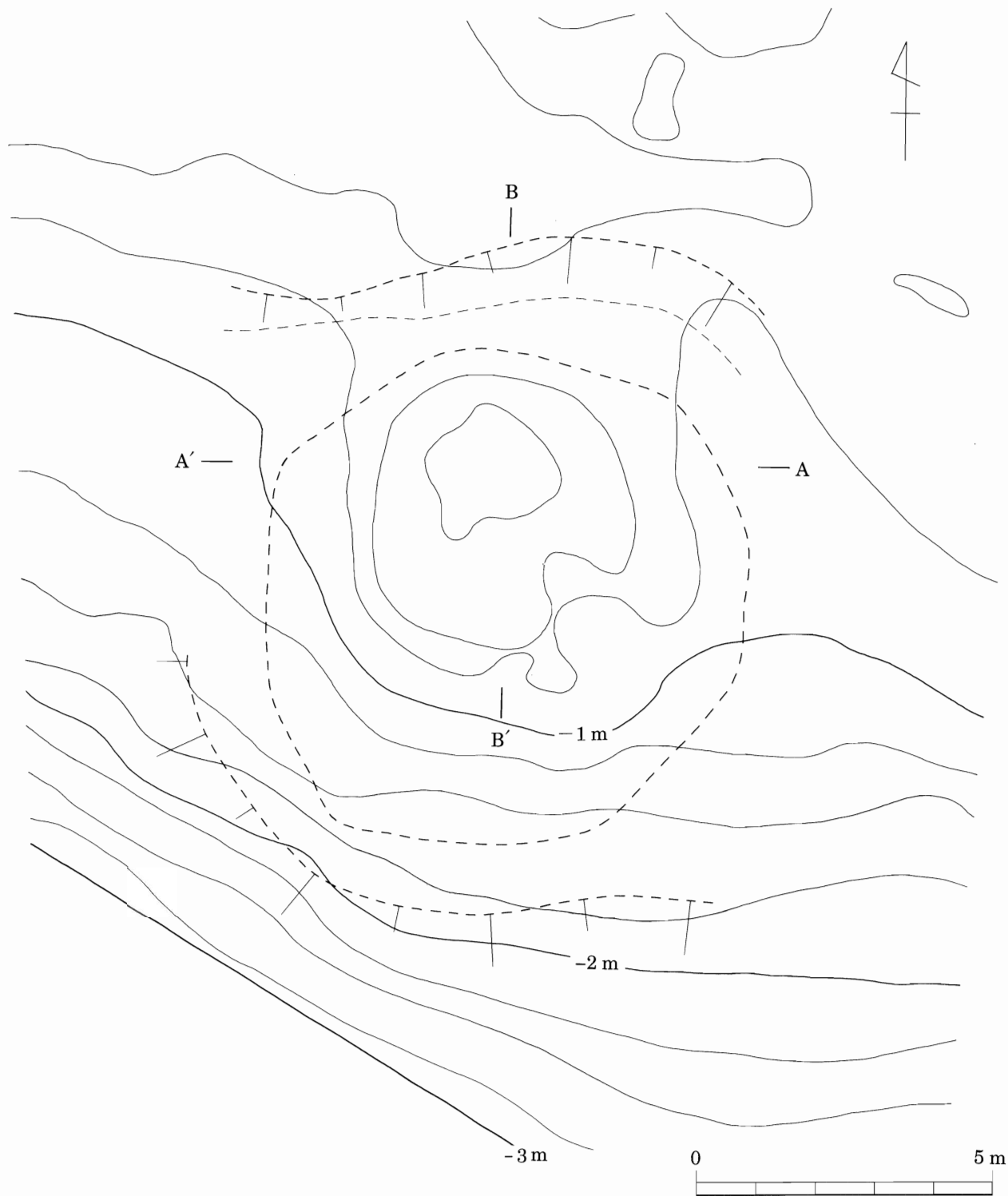
屋形古墳群は福富丘陵の西端から北西に伸びる支脈上に立地する古墳群である(第1図)。10 m 前後の小規模な古墳3基で構成される。いずれも方墳と思われた。これらは東から西に向かって、1号墳、2号墳、3号墳と呼ぶこととする。このうち調査を実施したのはもっとも東に位置する1号墳である。

発掘調査の結果、1号墳は一辺約8 m の方墳であることが判明した。主体部は当初横穴式石室と考えられたが、玄室内に大量の炭化物がみられたこと、玄室各コーナーに柱穴が配されていること、などから、この主体部は横穴式木室と判断された。



第1図 屋形古墳群分布図 1:1000

2号墳はこの古墳群の中ではやや規模が大きいように観察された。北西には平坦面が続いており、前方後方墳の可能性も考えられる。この平坦面を含めると全長は約25 m となる。ただし、この部分は全体に不整形なので、後世の掘削を受けていることも考えられ、現状では明確な判断は下しがたい。

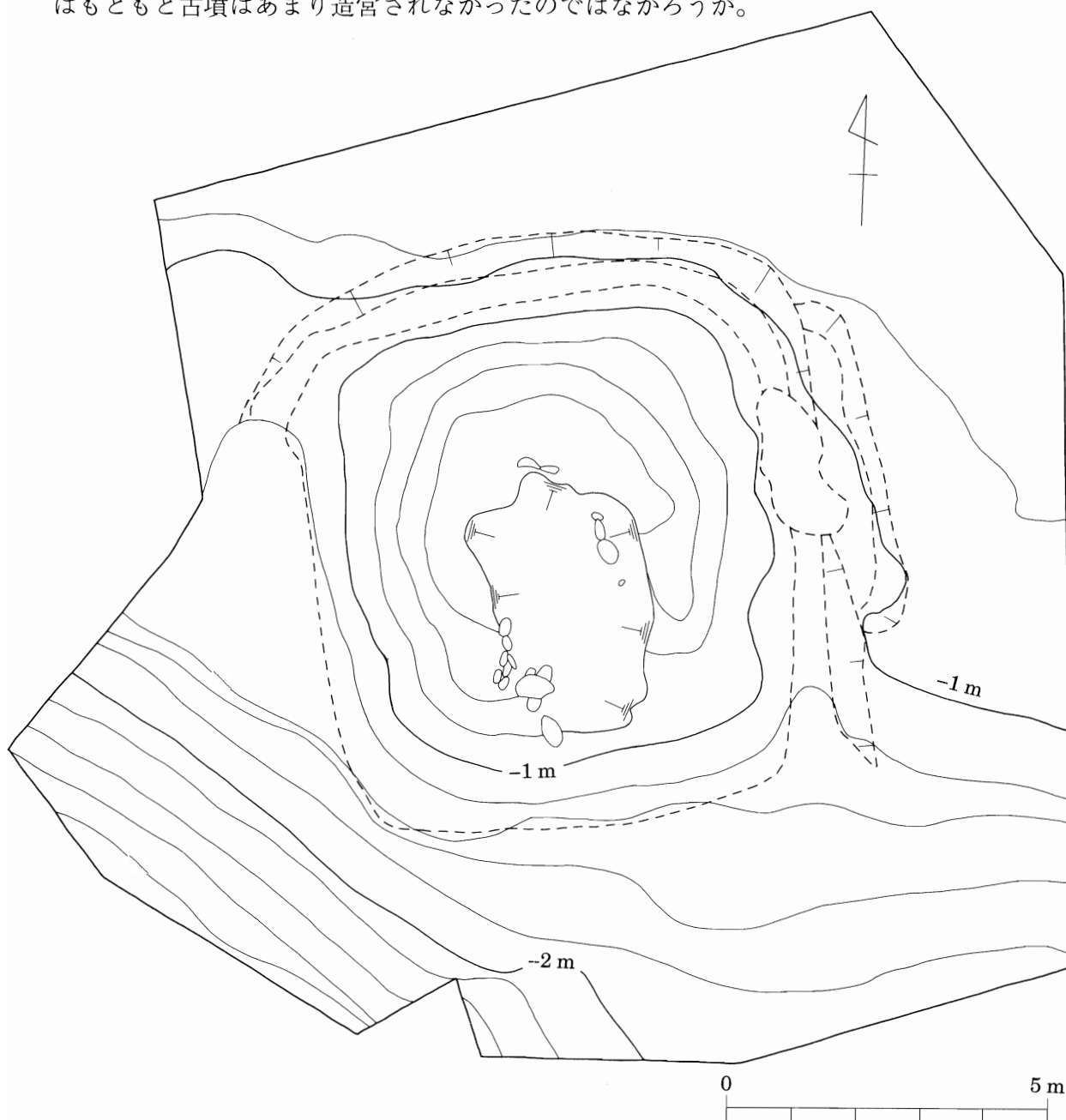


第2図 調査区前の地形測量図 1:100

3号墳は丘陵先端に位置する。ここから西は尾根幅が狭くなり急な下りになる。古墳は2分の1以上壊れており、北側の一部が残るだけである。

なお、屋形古墳群の北側の谷を挟んだ小丘陵には、森木谷古墳が1基確認されている。この古墳も屋形古墳群と同様10 m 前後の小規模な古墳である。

この周辺では以上の古墳以外には古墳が発見されていない。もっとも近くの古墳は南西約250 m に位置する松本古墳群（横穴墓）、南東約300 m に位置する天場古墳が確認されているだけである。福富 I 遺跡の調査では古墳らしい遺構は検出されていないことから、この丘陵ではもともと古墳はあまり造営されなかったのではなかろうか。



第3図 屋形1号墳調査終了後測量図 1:100

2. 墳 丘

屋形1号墳は発掘調査前には若干の高まりと北側に切削溝が認められたものの墳丘の流出が著しく、円墳、方墳どちらとも判断がつかない形状であった。地形測量の結果、平面形は南北9.5 m、東西約8 mの楕円形に近い円形であること（第2図）がわかったが、切削溝が直線的であることから円墳と断定することはできなかった。平面形も通常の円墳とちがいに不整形で、盛土がかなり流失していると考えられた。墳頂は東南部分にくぼみがみられ、盗掘されていると思われた。ここでは石がわずかにみられることから主体部が横穴式石室と予想された。

表土、流出土を除去した段階では、1号墳は東西約7.5 m、南北約8 m、高さ約1.3 mの方墳であることが判明した（第3図 図版1）。この段階での墳頂の標高は約41 mである。墳丘の北側と東側には幅約1 m、深いところで深さ約30cmの切削溝が「L」字形にめぐっている。この状態では中央には南北約4 m、東西2.5 mの範囲で大きくくぼみがあり、石が散在していた。

3. 主体部と玄室内の土層堆積状況

玄室は平面形は長方形を呈し、その規模は長さ2.3 m、幅1.7 m（柱穴の心々距離）である（第5図 図版4）。1～5段に石が積み、一見横穴式石室を思わせる。東壁の南半は石が欠失しているが、西南部は直角になるよう石積がなされているので、片袖式または両袖式の平面プランであったと考えられる。羨道部分は石組は検出されなかったが、地山が若干掘りくぼめられておりこれが羨道を反映していると思われた。このくぼみは長さ約2.4 m、幅約1 mの範囲で検出された。これを含めた主体部の長さは約5 mとなる。

玄室には最下段に幅30～40cm大の偏平な石が敷かれ、玄室の平面形をかたどっている。この敷石はその上に積まれる石組みより10cmほど内側に迫り出した状態である。

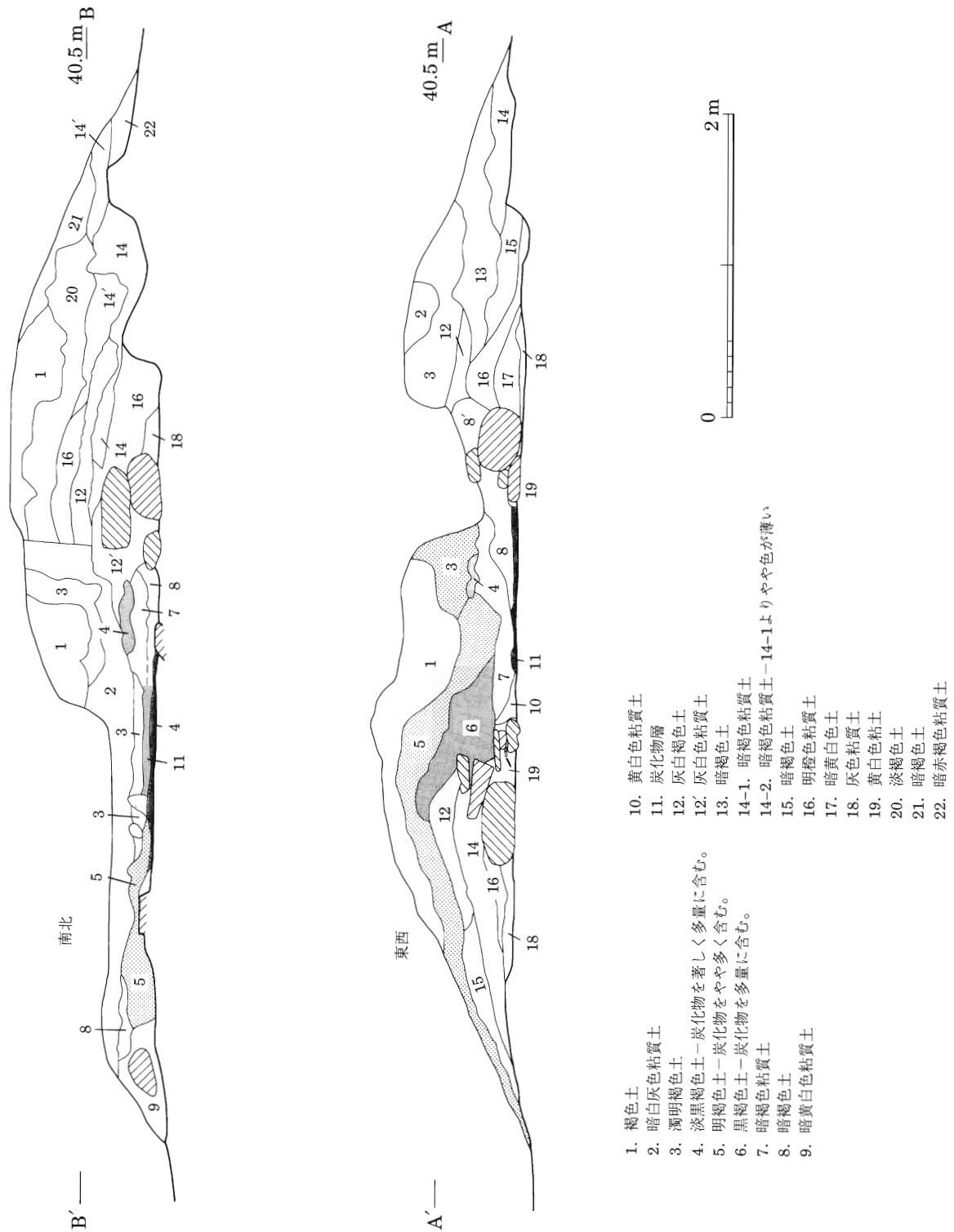
石組みは敷石の上に幅30cm程度、厚さ10～15cm程度の比較的偏平な石を積んで構成されている。石組みは側壁西南部分と西前壁が3～5段（最下段の敷石から高さ約0.5 m）ともっとも高く積み、東壁は1～2段（同0.4 m）ともっとも少ない。奥壁も2～3段と石組みは少ないが、中央に厚さ20cmの大きな石が2段（同0.4 m）積まれている。

玄室の各隅には径約20cmの柱穴が穿たれていた。石除去後の精査で、これが柱痕であることがわかったが、敷石、石組みもこれを囲むように配されており、玄室を構築するまえに柱が立てられたことがわかる。柱穴はいずれも地山面に掘り込まれていた。径50～80cm、深さ70 cmと大きな柱穴である。

床面は地山を削ってつくられ、ほぼ水平に整形されている。床面西寄りには方形偏平な石が4個置かれていた。これらの石は床面を掘りくぼめ、そこに埋め込まれていた。これらは棺台

としての機能があったと思われる。棺台の範囲は東西約60~80cm、南北約1.3~1.4mで(いずれも各敷石の遠端の距離)、棺もおおむねその程度の大きさだったと思われる。

玄室内の土層(第4図 図版2)は床面直上には約3cmの厚さで炭化物層(第11層)が堆積し、その上には内側に傾斜して土が堆積していた。7、8層は炭化物を含まないが、5・6層(とく



第4図 屋形1号墳墳丘土層図 1:40

に6層)には大量の炭化物が含まれていた。これらの炭化物は、木室が火を受けた際の側壁の倒壊を窺わせる。床面直上の炭化物層11層は奥壁までは分布せず、棺台を中心に分布していた。火力の強弱を思わせる。

4. 墳丘盛土の堆積状況 (第4図 図版5)

盛土は地山を造成した後に盛られており、盛土の厚さは約1 m である。地山の整形は大部分は平坦に整形されるが、奥壁より北側は凹凸が2段あり、東側壁より東側は段状になっていた。

主体部主軸方向(南北)の土層をみると、奥壁の部分で明らかに層が違っており(第4図 図版2)、この分層線より外側(北側)の12~20層が墳丘盛土と思われる。これらの層には炭化物が含まれず、比較的きれいな層である。一方横断面(東西)では12~18層が玄室内に流れ込んでいない層で、これが墳丘盛土と考えられる。

墳丘の盛土は、奥壁の北側は石組みを押さえるように上面を傾斜させながら盛り上げている。その後上面が水平になるよう各段を埋め、さらに水平に積んでいったようである。右側壁東側は石組みの周囲では石組みを押さえるように上面を傾斜させ、段を水平にした後、縁辺から上面が内側に傾斜するよう盛土をしている。そして最終的には上面が石組みの上面とほぼ同じ高さにそろえて水平にしている。左側壁の西側では上面を傾斜させた盛土だけがみられた。

墳丘盛土は、両側壁の部分では石組み上面の高さとほぼ同じ高さに盛ってあるが、奥壁部分では石組みより60cm高く盛り上げている。

1~3、5層は6~11層とともに玄室内に流入した土層である。3層と5層は炭化物を含んでおり、12層以下の土層とは違う様相であった。また、6層は炭化物を非常に多く含む層で、火化と同時に堆積したと考えられるが、この層も側壁より外側に当たる部分から堆積している。これらの層は、玄室より外側では墳丘を型取り、玄室内では流入土という矛盾した層である。

これらの土層堆積状況から考えると、12~18層によって一次的に墳丘が形作られ、玄室内での火化が終了した後に1~10層で玄室を埋めるとともに、墳丘を整形したように思われる。



0 1 m

第5図 屋形1号墳主体部 1:60

5. 小 結

横穴式木室の復元 屋形1号墳は横穴式木室であるが、木壁を支えるため石室状の石組みを構築した特殊な横穴式木室である。玄室の平面形は方形で四隅に柱穴を配しているが、石組みであるを除くと同様の横穴式木室は三重県君ヶ口古墳や同南山古墳などに類例が求められる(注1)。これらを参考にすれば、屋形1号墳の玄室は方形の箱形または家形の構造であったと考えられる。側壁は木質の壁材を主柱と石組みとで挟むような状態で築かれたと思われる。その際壁材は玄室縁辺の敷石上に置かれたと考えられる。注1では主柱の上に横木を渡して骨組みとしたとされるが、今回の調査では横木を渡した痕跡は確認できなかった。なお、主柱と敷石の幅から考えると丸太とかその半截したものが挟み込める余地はなく、側壁は板材であったように思われる。

本古墳では木室に天井部が存在したかどうかについては確認できなかった。しかし、調査では炭化物は床面全面に分布していなかったことから、天井は架けられなかったのではないかと感じられた。ただし、火化が弱かった可能性は残されており、天井の有無については不明と言わざるをえない。

玄室・墳丘の築成 調査の結果、この古墳の築成は以下の順序で行われたと考えられる。

1. 地山を造成。
2. 柱穴を掘り込み、木柱を立てる。
3. 玄室の側壁を載せるための偏平な石を並べる。
4. 敷石の上に木室の側壁を置き、その外側に石組みを積む。
5. 石組みの高さまで盛土を盛る(一次墳丘)。
6. 火を放つ。
7. 鎮火後玄室を埋め、さらに盛土をして墳丘を整える。

5と7については1、5、6層が玄室内に流入しているにもかかわらず、明らかに墳丘盛土となっているという矛盾の解釈である。6層は明らかに12層の上であり、玄室の外側まで分布していたことは間違いない。12層以下が本来の墳丘でそれより上の層は後世の攪乱、流入とも考えたが、墳形が整った方墳であることから1～3、5層が後世の攪乱土とは考えられない。玄室内で火を放ち鎮火した後に、さらに盛土をして方墳を完成させた可能性が高いと思われる。なお、主体部を構築後、時間をおいて埋葬儀礼を行い墳丘を完成させた例としては、松江市岡田薬師古墳がある(注2)。

屋形1号墳の時期と系譜 屋形1号墳からは遺物が全く出土していないため、古墳の年代は決めがたい。木室の形態はほぼ正方形のプランをしており、先の三重県君ヶ口古墳、南山古墳

が同タイプと考えられる。この2つの古墳は6世紀中葉とされ、木室形態が時期を示すとすれば、屋形1号墳もこの時期の古墳ということになる。しかし火化は新しい様相であるとされており（注3）、これに従えば6世紀後半以降ということであろうか。いずれにしても現状では不確定要素が多すぎ、年代を決めるまでには至らない。将来の資料の増加を待ちたい。

屋形1号墳の横穴式木室は玄室に4本の主柱穴をもつ、箱形の構造を復元した。このような木室は三重県地方に多く分布する。屋形1号墳の系譜をいきなりここから求めるのは躊躇されるが、とくに君ヶ口古墳はよく似た形態であるといえよう。箱形構造の横穴式木室は滋賀県から大阪府北部にかけても分布しているが、これは主柱が玄室やや中央によっている点で若干の違いがみられる。また、この木室は主柱上に横木を渡して周囲から壁材を立て掛けるとされる。屋形1号墳の石組みがわずかに内傾しているので、これを根拠に滋賀県地方に分布する木室に似た構造を復元し、系譜をここに求めることもできよう。滋賀県から大阪府北部に系譜を求めることは地理的には納得しやすいが、木室形態そのものに違いがあり過ぎるのが難点である。

いずれにしても山陰地方では横穴式木室はいまのところ屋形1号墳1例しか発見されていないので、直接の系譜を求めるには無理がある。飛び地的に存在する特殊な古墳について、なぜ分布の中心からはずれた地域で作られたのか、その理由を解明する必要がある。

（注1） 北野博司の分類ではⅠ-a類である。北野博司「箱形粘土郭の再検討と横穴式木室との関連性について」『北陸の考古学』1983

（注2） 島根県教育委員会『岡田薬師古墳』1986

（注3） 藤井太郎「横穴式木室に関する一試考」『文化財論集』1994

その他参考文献

柴田稔「横穴式木心粘土室の基礎研究」『考古学雑誌』68-4 1983

風間栄一「横穴式木室研究の現状と課題—古墳時代の「火葬」研究の問題点」『遡航』1993

加東郡教育委員会『名草3号墳・4号墳』1984

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくとみ1いせき・やがた1ごうふん						
書名	福富Ⅰ遺跡・屋形1号墳						
副書名	一般国道9号（松江道路西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	2						
シリーズ名	一般国道9号（松江道路西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	2						
編集者	柳浦俊一 日高 淳						
編集機関	島根県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒690-01 島根県松江市打出町33 TEL 0852-36-8606（代）						
発行機関	島根県教育委員会						
発行年月日	1997（平成9年）3月31日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯	東経	調査 面積	調査年月日
福富Ⅰ遺跡	島根県松江市 乃木福富町	32201	257 621	35°25'52"	133°02'57"	16,000m ²	1993.05.09~ 1995.02.02
屋形1号墳	島根県松江市 乃木福富町	32201		35°25'52"	133°02'50"	200m ²	1993.05.10~ 09.13
調査原因	ともに一般国道9号(松江道路)建設						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
福富Ⅰ遺跡	集落	旧石器時代	竪穴住居跡	石核 尖頭器	5~6世紀の玉作		
	生産遺跡	縄文草創期	掘立柱建物跡	玉作関係遺物	工房跡		
	埋葬遺跡	弥生時代	玉作工房跡	弥生土器	神社?遺構		
		古墳時代	土壙墓	土師器 須恵器	古墳時代後期の		
		奈良時代	道遺構	緑釉陶器 円面硯	土壙墓		
中・近世	落とし穴状土壙 土壙	土馬 へら書土器	6世紀後半~8世紀・ 中世の集落				
屋形1号墳	古墳	古墳時代	方墳(一辺約8m) 横穴式木室		木室の支えに 石室状の石組み		

福 富 I 遺 跡
屋 形 1 号 墳

一般国道9号(松江道路西地区)建設予定地内
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書 2

1997(平成9年)3月発行

発行 建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会
島根県埋蔵文化財調査センター
〒690-01 島根県松江市打出町33
(Tel 0852-36-8608)

印刷 高浜印刷所
〒690 島根県松江市北堀町8
(Tel 0852-24-3000)